

やはり俺の学校生活は  
おくられている。

y—chan

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

比企谷八幡は新学期通学途中に犬を助けた際に交通事故に巻き込まれた。

打ち所が悪く意識不明の重体で入院生活を余儀なくされた。

意識が戻ったときには季節は既に秋、留年が確定してしまった。

# 目次

# 6	# 6	# 6	# 5	# 5	# 5	# 4	# 3	に降り立つ	# 2	# 2	# 1
3	2	1	3	2	1				E x		
									斯くして一色いろはは新宿		
125	111	98	84	73	59	50	40	25		12	1

# 1	# 1	# 1	# 1	∴	# 1	# 1	# 9	# 9	# 8	# 7	# 6
2	1	1	1	∴	0	0	2	1			3
1	3	2	1		E x						v i e w
					それでも比企谷小町は						i r o h a
301	284	270	252	240		222	209	184	168	156	142

所を探す事となる。	# 1 4 — 4	# 1 4 — 3	# 1 4 — 2	# 1 4 — 1	# 1 3 — 3	# 1 3 — 2	# 1 3 — 1	企谷八幡にねだる。	# 1 2 — E x 2	企谷八幡はサイズで駄弁る。	# 1 2 — E x	# 1 2 — 2
—————	こうして一色いろはは居場	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	だから比企谷小町は比	—————	それから一色いろはと比	—————
447		431	414	399	386	368	354	343	比	328		315

# 1 9 — 1	# 1 8	帰する。	# 1 7 — 4	# 1 7 — 3	# 1 7 — 2	# 1 7 — 1	# 1 6 — 3	# 1 6 — 2	# 1 6 — 1	# 1 5 — 3	# 1 5 — 2	# 1 5 — 1
—————	—————	—————	そして一色いろはは原点回	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————
620	602	599		585	567	554	541	528	516	501	489	477

# 1 9 | 2  
 # 1 9 | 3  
 # 2 0  
 # 2 1 | 1  
 # 2 1 | 2 こうして彼女達は邂逅す  
 る。  
 # 2 1 | 3 そして彼と彼女は一步を踏  
 み出した。  
 # 2 2 ゆえに彼女は食らいつき、色は  
 次第に濁りゆく。  
 # 2 3 どうとう彼女は？をつき、濁つ  
 た色は濃さを増す。  
 # 2 4

783 755 733 718 704 690 655 643 633

# 2 5  
 # 2 6  
 # 2 7 | 1  
 # 2 7 | 2 またもや一色いろはは同じ  
 手を使わざる得なくなる  
 # 2 8 最後に平塚静はこう呟く  
 850  
 # 2 9 | 1  
 # 2 9 | 2 よって一色いろはは彼女に  
 希望を与えることにした。  
 # 3 0 | 1  
 # 3 0 | 2 こうして、一色いろはは策  
 を講じる

907 894 878 864 832 820 809 795

# 3 0 — 3 密かに一色いろはは夜風に

あたる ————— 922

# 3 1 — 1 何気に一色いろははいたず

らを好む。 ————— 934

# 3 1 — 2 ————— 945

# 3 2 とんでもなく彼女の笑みはすさ

まじい。 ————— 959

# 3 3 こうして彼女は歩き出した。

982

# 3 4. そして彼女は晴天の群青と心の

対比に息を吐いた ————— 996

## #1

あー、目眩がする。

春休み明けの青々とした快晴が俺の身体を蝕む。

休み中、読書と小町とのマリカー勝負に明け暮れ過ぎた非外出的な生活により俺の身体はボロボロだ。

とうとう身体が日光に拒絶反応を見せたかと思い、これから3年世話になる学び舎、総武高校の通学路を自転車で駆ける。

中学の頃に思春期の恥部をここまでかと思せつけ、周りとはある意味で一線を画した俺にとって、この進学高に通う事で全ての人間関係をリセットし、よろしく高校デビューな心境で少し……

いや、かなり期待はしているのであろう高揚感を抑えきれずペダルを力強く踏む。

なにかむふふな展開が起こる事を期待しつつ俺は初めての通学路を自転車で駆けていく。

ん？

道中、遠くから女子の叫び声が聞こえた。あまりにも非現実的な叫び声だったので慌ててそこへ顔を向ける。

そこには車道に飛び出したこわいもの知らずのワンちゃんがこちらに向かって横断しているではないか。

さらに突然の横断者に気づいても止まらない車が迫っていた。

あきらかにワンちゃんへの行動経路と車のスピードを予測するにワンちゃんが轢かれるのは目にみえていた。

舌打ちをし、自転車のハンドルをワンちゃんの方に傾ける。

犬よか猫派なのだが目の前で車に轢かれては新学期早々に寝覚めが悪い。

そして自転車の警音器と急ブレーキでワンちゃんに牽制して移動を止め、何か滅茶苦茶すごい衝撃を受けたところまでは覚えている。

目が覚めたら異世界……じゃ無かった病室だ。季節は秋だった。

俺の留年が確定した。

\*\*\*

目が覚めると看護師は慌ただしくエスカレーションを行う。



そしてまた慌ただしく病室に入ってきた父や母：そして小町が目を見開き、驚き、そして涙を見せた。

特に小町がいつもの反応とは全くの別で、ずっと俺の手を握り、号泣していた。

ずっと『ごめんなさい……ごめんなさい……おにいちやん、かえってきてあげがとお……』と鼻を嚙る音と嗚咽が不協和音を繰り返り出し、後半何を言っているか全くわからなかった。

小町とは春休みの最後辺りにリビングの掃除の質を巡ってケンカしたきりだった。たぶんそのことも後を引き、小町にもものすごい心配をさせたのだと理解した。

数日経ち、医師から状況を伺う。

「どうやら俺は昏睡状態だったらしく、医者から最悪一生このままと脅されていたらしい。」

「何それこわい。というかそれで小町はああいう風に悲しんでいたのね。」

「やめろよ。小町を悲しませるな○すぞヤブ医者。」

「それからはリハビリを行いながら身体は順調に回復していった。」

「見舞い客なんて、中学の頃俺に友達なんて居なかつたから来るはずも無い。」

「来たのは小町だけだった。産みの親にすら俺は心配されていないのかと思った。」

一人前に身体を動かせる様になり、退院となる頃には師走の風情が姿を現し始めていた。

肌寒さが寂しさを思い出させ、そして今年の終わりの意識をかき立ててくる。

退院の日程も決まり、愛着が湧き慣れ親しんだ病室と別れの日が明確になった事で寂しさがこみ上げてきた。

別れを惜しむようにベッドに横になり、この1年を振り返る。

といつても今年1年は身体を治す事ぐらいしかやった事が無い。

来年からはまた1年生をやり直すのか……。

留年の強みといったら去年の内容をもう一度くりかえす強くてニューゲームなはずなのだが……1日目登校前で事故に遭っているだから、なんのうま味もねえ。

不幸中の幸いといって良いのか、元から知ってる奴はいない事だ。

知り合いがいないことを条件として俺は高校を選んだのだから当然だ。

俺が年上である事を喋らなきゃ、まずバレることは無いだろう。

そこまで考えた後、ベッドで横になっていたせいとか、うとうとと睡魔に襲われ次第に意識を手放す事となった。

やはり冬のベッドの温もりに負けてしまう。誰だつてそうだよ。

\*\*\*

「おー、さつむ暖房暖房、炬燵炬燵」

年を越し、そして退院。

既に留年が決まっていた俺は学校に行く気力も無くやる事も無く炬燵と暖房という2重の現代の利器を使用し温々と本を読みあさっていた。

そして両親も小町も、平日は職場や学校に行っている。

最初の頃はなんとも悪くも無いのに悪い事をしていく気分になっていたこの生活も、慣れてくるとともに罪悪感などはなくなりつつあるのだが、どうにも時間を持て余してしまうというのが課題となってきた。

「問、働かなくて食べる飯はうまいか」

「答、人の奢りの飯がうまいように、働かないで食べる飯は格別だ」

というようにどうでもいい独り言が増えた。

いつの日だろう、それをたまたま耳にした小町から「ただでさえ気持ち悪いおにいちゃんにさらに気持ち悪くなった」と『キモい』では無く『気持ち悪い』と省略せずにいわれた辺りに本気さを感じて真面目に傷ついた。小町ちゃん酷い。

そのあとに、何故か冷蔵庫にマツ缶がありマーカーで『おにいちゃん!!』ってラベリングされていたのを見るときつとツンデレの時期なんだろうと思った。

正直な話、ここ最近には家に引きこもってばかりであり、あらかた本を読み終えて暇を持て余しているのも独り言を助長させる一因だろう。

世間のプロ引きこもりニート面々には申し訳ないが、たまには外にでたい衝動に駆られる。

「少し、散歩するか」

また独り言がでてしまった。

\*\*\*

玄関の扉を開けたとき、外界からの冷気が一気に流れ込み、温々と暖房や炬燵に慣れた身体はすぐさま肌寒さを感じた。

同時にやはり12月という今年の締めを連想させる  
淡い哀愁じみた感情が俺の中を駆け巡った。

1年何の経験も無くただ家で温々と好き勝手過ごしていたと言う事実だけを俺に突きつけてきた。

確かに事実だが少しだけ俺の対抗心を掻き立てる。

「よしっ、今日は少し遠出してみるか」

電車で、田舎寄りの都会の駅で降りた。

そこから駅前にある本屋をいくつか回り、少ないお小遣いを捻出し、厳選した本を数冊購入した。

我ながら突発的に思いついた散歩とはいえ、十分楽しめた。

たまにはこういうのも悪く無い。

目的を果たして本屋からでたときには、既に黄昏時となっていた。

そんな空をみて、かなりの時間を厳選に充てていたのだなと理解した。

駅へと向かう最中に見覚えのある緑の看板を見つけ、足を止める。

「サイズか」

少し遠くまで来て今は黄昏時、少し腹も空いてきた辺りだ。

軽食くらいなら帰る最中で消化されるだろうと踏んで俺はサイズにへと足を向けることにした。

少し混んでいるかと思いきや、客は疎らだ。

駅前でこの時間にこんな疎らなんてこのサイズ潰れるのではないだろうかと心配になつてしまう。

とりあえず店内を見回して、適当な席に案内される。

その途中で、ボックス席で勉強している一人の女子学生が目についた。

中学校の制服だろうか？ 肩まで伸びた亜麻色の髪の毛と幼さがまだ残るが、整った顔立ちで受験勉強している姿がちよつとだけ小町を連想させたからだ。

彼女のテーブルに総武高校のパンフが勉強道具と一緒に置いてある。

もしかしたら来年同じクラスになるのかもしれない。

若干の期待が込み上げてくるが、理性でそれを切り捨てた。

案内された席はボックス席だった。

その女子中学生の隣の席だ。

えっ何なのこのサイズ、この時間に一人ボックス席とか案内しちやって良いの？

こわいよもう。

案内された席で既に決まっているメニューを注文する。

サイズのドリアは人類史上まれにみる最高の作品だ。

注文を終え、届くまでの間に今日の戦利品をみて、軽く読そうならノベ辺りを手に取り読み始める事にした。

：集中力の途切れと同時に周囲の雑音が耳に入ってくる。

どうやらお隣さんが騒がしい。

あの女子中学生もうえーいやらうえーいやらやっている類いの人種だったのだろう。

ただ、騒ぐにしてももう少し場所を選んで欲しいと嫌悪感に悩まされるがよくよく耳

を傾けるとそうでも無いようだ。

「ごめんなさい。今そんな暇は無いので」

「そんな事いわずにさあ、ちよつとお話ししようよ」

どうやら受験勉強をナンパ野郎に邪魔されているみたいだ。

まあ、ボックス席で広々と受験勉強しているうえに、その容姿だ。

目をつけられても仕方が無いだろうとみてみぬ振りを決め込んだ。

おつ、丁度ドリアが運ばれてくる。

届いたドリアを俺の席に置く店員に追加注文を伝え、ドリアをスプーンですくい食事にありつく。

俺の注文を聞きつけた店長らしき人物が颯爽とナンパ野郎の前に現れ、笑顔のまま店内マニユアルに沿ってナンパ野郎を退店へと追いやった。

何がスゴイって最後まで笑顔を崩さなかったところだよ。

プロ精神を感じる。

店内でナンパとか店側からすると迷惑行為の何物でも無いのだ。

それと可愛い女の子と知り合えるワンチャンの正義感で対峙するよりも店員に任せ  
る方がはるかに効率的だ。

そう思いながらドリアを食べて終えてもう少しラノベを読む。

厳選しただけあり、面白くやめ時がわからない。

…ふと周りの雑踏が耳に入る。

周りを見渡すとようやくこのサイズも人が混み合ってきたようだ。

どうやら潰れるかどうかというどうでも良い心配は杞憂だったようだ。

「あの」

聞き覚えの無い声が隣から聞こえ、動揺して少し肩が跳ねる。

声の聞こえた方へ向くと、隣のボックス席にいた亜麻色の髪の毛の女子中学生が立っていた。

その女子中学生は、少し愛らしい微笑で俺に語りかけてくる。

「驚かせてごめんなさい。突然で申し訳ないんですけれど相席させてもらえませんか？」

「えっ？ なんぞ？」

速攻でOKを出さなかった俺に彼女のまゆが少し動くのを見逃しはしなかった。

こいつ、絶対即答で相席を了承してくれると思っていたに違いない。

こいつはやべえぞ。できればあまり関わりたく無い。

「周りを見て下さいよ。お客さんいっぱい入ってきてるじゃ無いですかー？ それで一人ボックス席ってなんか居心地悪いじゃ無いですか？」



「おいおい、さっきの丁寧な口調はどこに消えたよ？」

「一気にフランクになったな。」

「それはわかるが、カウンター席まだ空いてるじゃん？」

「カウンター席だと狭いんですよねー」

「わがままかよ」

「そういうわけなんで、相席お願いしても良いですか？」

「ぺこりと腰を折り、浅すぎず深すぎない礼をされてた。」

「仕方がない。ここまでされたら流石に断れない。」

「余計に食いが下がられても面倒くさいだけだ。」

「まあ、俺も丁度一人ボックス席で居心地が悪かったが、相席ならそれも相殺されそう」

「だしな。」

「まあ特別断る理由も無いし、どうぞ」

「そういつて向かいの席へ手のひらを向けて彼女を迎え入れた。」

「ありがとうございます」

「少し顔を傾けはにかむような笑顔でいわれた礼に悪い気はしなかった。」

「俺の頬に少しだけ熱が籠もったのは内緒の話。」

## # 2

それからしばらく彼女は受験勉強を、俺はラノベに目を走らせ、無言の空間が続いた。

「あの」

先に口を開いたのは亜麻色の髪の毛の女子中学生だ。

視線を彼女に移すと、教科書とノートに視線を交互に移しながら話しかけてる。

ながらで頭に入るのかな？人によるか？

「さつきはありますがどうございませす。その…人を呼んでくれて」

どうやら俺が呼んだ事を知っていたようだ。

「当たり前だ。明らかな店内迷惑行為だったからな」

「それでも誰でもできる事ではないはずす。本当に助かりました」

意外だったが彼女はさつきから締めるところは締める。

顔が良い分、だいぶ遊んでいるだろうと先入観に支配された自分を悔いた。

「ま、助けになったなら何よりだ。…総武受けるのか？」

「えっ？」

あれ？なんでこいつそんな事知ってるんですかって顔されてね？

めっちゃ警戒されているよねこれ？

「ああ、すまん。席案内された時の動線でテーブルに広げられてたの見たんだ」

「ああ、なるほど」

「どうやら今の返しで正解だったようだ。」

さらになにに人のテーブル勝手に見てんのかなよ気持ち悪いまで言われる事を想定してた。

「はい、ここの制服が凄く可愛くて猛勉強です！」

「制服かよ」

「制服は大事ですよ？女の子の8割は制服で高校を決めると言っても間違い無いですか  
らー！」

確かに女の子は制服の可愛さで高校を決める話があるが8割ってどこから出した数字よソース出せよソース。

「まあ、頑張れる理由があるなら頑張れば良いんじゃないか？」

「それはそうと、お兄さんは何されてるんですか？」

「暇つぶし」

「つえ？学校とか行ってないんですか？同い年くらいに見える…いえ人生を諦めたかのような目をしているので少し年上には見えるのですけれど…」

「おいおい、人生を諦める目ってどんな目だよ。」

新小岩にそういう奴ら沢山いるらしいぞ？

あれ？もしかして俺の居場所は新小岩だって遠回しに言ってる？

「まあ、年上ではあると思う。ちよつとワケありでな。来年から学校に通う予定だ」

「そうなんですね。どこの学校ですか？」

「総武」

言葉はなかったが目を見開いて口を開けて俺を見ていた。

多分言葉なく驚いているのだろう。

「すごい偶然じゃないですか。同じ高校のせんぱいと同席するなんて」

えっ？何もう受かった気での？うち進学校なんだけれど？

「先輩とかではないぞ。俺1年生やり直しだから」

「えっ？せんぱいって不良なんですか？」

いつの間にか呼び方がせんぱいになってるんだけどこれいかに？

「だからワケありなんだよ」

「ああ、そうなんですね」

察してくれたらしくそれ以上の追求はしてこなかった。

比企谷八幡2回目の1年生。

1回目は初日すら登校できておらず、強くてニューゲームも出来ねえ。

どんなクソゲーだよほんつと。

「それじゃ、既に受験をパスしているせんぱいは私に勉強を教えてくださいませんか？ 何言ってるのかな？ 誰とお話していたのかな？」

俺には見えない何かとお話してたのかな？

「さて、どこから勉強を教えるという話になった」

「だって私国語が苦手じゃないですか」

「初めて知ったわ、何それ？ 自己紹介？」

ムーっとふくれっ面をした表情もやはり顔の造形からとても愛らしく見えるが

俺の過去の経験上それを鵜呑みにしたら自分の首を絞める事になるとわかりきっている。

ここはいかにうまく話をそらせるかが重要になってくる。

「だってせんぱいは新学期まで暇なんですよね？」

「暇に見えるか？」

得意げに数冊ある本を見せ、問いかけてみた。

「見えます」

あれれ??おかしいぞ??傍から見たらそんなに暇人に見えるの八幡？

ちよつと悲しい。

「兎に角、受験勉強は基本ひとりの戦いだ。それに俺が人ひとりの人生の面倒を見るには責任が重すぎるんだよ」

「えっ?」

突然の間が空気を凝固させる。

亜麻色の髪の毛の女子中学生は僅かに頬を染め、口元に軽く握りしめた小さな手を添えながら少し悶えたような表情をしているが、俺は何か悪い事を言ったのだろうか?

「あの、もしかして口説いてます? 助けた事にかこつけていきなり人生に責任を持つとか重すぎてキモいです。あとせんばいの存在が生理的に無理なのでごめんなさい。」

「あれ? 受験勉強の話からなんで俺、デイスられてるの??」

「そんな事よりも勉強教えて下さいよー」

「無理」

普通の男子ならこんな可愛い女の子に勉強を教えられるなら喜んで受けるだろう。

しかし俺は知っている、男という生き物は目で生きる生物だ。

整った顔立ちの彼女に言い寄られると俺も悪い気はしない。

礼儀正しいし親しくしたいという感情はある。

しかし定期的に会うとすると、確実に情が生まれる。

そしてその情は何かをきっかけに愛情へと変化し、恋愛感情を生むのだ。

そうなるかとは瓦解の一途をたどることだろう。

相手の何気ない言動を自分の都合の良い解釈で捉え、

さも自分に気があると何の根拠もない結論を立て

その都合の良い解釈を、理想を、妄想を相手に押しつけるのだ。

そしてある行動をきっかけに関係が崩れる結末へと進むのだ。

俺はそれに関係の消費期限と呼んでいる。

だから俺はその芽を摘む事にした。

「俺が教えなくても多分あんたは合格する。今まで勉強してきたんだろ？」

適当な『お前なら問題なく合格できる！根拠はないけれどな！』論を持ち上げ

話をあやふやにしてみる作戦に出してみる。

彼女は瞳を左上に寄せふむつと親指を顎に乗せ何か考えている様だ。

良かった、感情論で言ってくるちゃんじゃなかった。

「それじゃ合格したら、1つ私の言う事聞いてくれますか？」

何それ？なんで俺そんな事聞かなきゃならんのだ？

「嫌に決まってるんだろ、なんで会ったばかりの人にそんなお願いされなくちゃいかんのだ？」

だ？」

「そりゃ、こんな可愛い後輩が入学したらせんばいだって嬉しいでしょ？」

「とうとう自分で言いやがったな」

「で？ どうですか？」

「どのみち、断つてもあの手この手で言ってくるんだろ…めんどいから分かった。一応、無理無茶面倒くさい依頼だけは勘弁してくれ」

「最後の面倒くさいは約束しかねますけれど、それ以外はちゃんと約束しますよ」  
「おっけ。まあ頑張れや」

その回答を聞いて、彼女は上目遣いで悪戯に微笑じみた表情を俺に向け、  
『約束ですよ』と囁くように呟いた。

そして向かいの彼女は帰り支度を始めていた。

「そろそろ帰らないと私の家門限あるんですよー」

「そうか、勉強の邪魔をしてすまんな」

「そんな事はないですよー。ご褒美約束してもらえましたから」

受かるかどうかは知らんがやる気は出たみたいだ。

「そういえばせんぱいの名前聞いてなかったです、それくらいは教えて下さいよー」

「あー、比企谷八幡だ」

「ならせんぱいでもいいですね」



あれー？名乗った意味は？

「げせぬ」

「私、一色いろはつて言います！来年から宜しくお願いしますね。せんぱいっ！」

それが自然でできるのだろうか訓練したのだろうかは知らないが

上目遣いでそそのる仕草は可愛げがあるなと思つてしまふ。

だからもう受かつた気でいるなよ：

一色は互いの自己紹介を終えると早々と店内から出て行き駅へと向かつていった。

ふと彼女の言動をどう表現すれば良いのだろうかと思考を走らせる。

小悪魔的？ちよつと重い。ビッチ？いや軽すぎる。

インテリ系ビッチ？何それ新ジャンル？超高校級の誰かさんみたい。

考える事に飽きたので外を覗いてみる。

既に黄昏時を過ぎ、街灯や店舗看板が辺りを照らし、色彩を放っている。

それを見ながら俺は長居しすぎたと思ひ立ち、会計に向かうのだった。

\*\*\*

季節は巡り2度目の4月を迎えた。

まだ肌寒い季節でありながら青々とした快晴が俺の身体を蝕む。

とうとう身体が日光に拒絶反応を見せたかと思ひ、これから3年世話になる学び舎、総武高校の通学路を自転車で駆ける。

これなんてデジヤブなんて思っていない。

今回は怖い物知らずの犬も、やっさんよろしくな高級車とも遭遇せずに無事に学校にたどり着く事ができた。

1年越しによりやく学校生活が始まったのだ。

これから俺の学校トタバタ青春ラブコメが幕を開けるっ！

比企谷先生の次回作に乞うご期待！

教室に入るなり、見知った顔を中心に人だかりができていた。

その人だかりの男女比率を見るに、男子が8に対して女子が2……。

あーこりや完全に女子の敵認定されるタイプの奴だわー。

関わらないでおこ。

そう思いそろつと自分の席へと足を進める。

「あーっ！せんぱいっ！おっそーい！」

あー、見つかつた…

中学の時は効果抜群だったステルスヒッキーの効果がない。

一色は鷹の目でも持つてるのか？ミスディレクション防げるぜ。

ってか同級生だからね？せんばい呼びやめてね？

君の連れてる人だからの目線がすぐく刺さるのよ。

人だかりを割り、俺の元へ歩み寄る一色

その表情は少し得意げだ。

「何そのどや顔？」

「せんばいの言うとおりに合格してきましたよっ！」

「おう」

「えっ!?それだけですか？もつと何かないんですか？」

相変わらず上目遣いとこの仕草…

明らかに自分が可愛いという事を自覚して

使っているな。なんとも打算的。

「まあ…頑張ったな」

無意識だった、多分小町にやっている癖がそのまま行動として反映されたのだろう。

亜麻色の髪の毛に手を置こうとした。

ただ一色は、その動作を何かと察するに一步後ろへ後退した。

目的地の無くなった手を俺は元に戻した。

一色はいつもの愛らしい微笑めいた表情は変わらない。

…が、彼女の視線が冷ややかで明らかに他人行儀な姿勢になり

これ以上踏み込むなと言う警告を鳴らしているようだった。

「確かに何かないですかって言いましたけれど。せんぱいにはそこまで求めてないです。それに周り見て下さいね。新学期早々変な噂とか勘弁なんで…」

「…悪かったな。癖みたいなものだ」

「え、せんぱいってもしかして中学の頃、結構モテていたんですか？ごく自然な動作でしたよ？」

「違う、妹がいる。お前と似たような感じのタイプでな」

一色は俺の言葉を聞いていたずらに微笑みながらまくし立てる。

「えー？せんぱいやっぱり口説いてます？妹に見えるとか言っていて実は淡い恋心とか育んじやっているんじゃないですか？そんな妹と同然に見られていい気になる女子なんていないのでまずは妹と女子の区別を付けるところからお勉強し直して下さいごめんなさい」

「妹に見えるとか言ってねえし。それに妹はお前より可愛いわ」

「まあ、いいです。今回はこのくらいにしておきます」

そう満足そうに呟くと一色は自席へと戻っていった

周りの男子達とまたおしやべりを開始した。

俺も机に座り、授業開始まで机に突っ伏して時間つぶしに思考する。

そういえば一色と喋っているとき、あの男子諸君の顔は

なにやらちよつと居心地の悪い感じだったな。

自分はわざわざ出向いて話しているのにあいつは相手が話しかけてきた。マジ卍。

そのあとに磯野一、こいつハブにしようぜー的な宜しく中島君さながらの強行手段を執りかねない。

それを考えると確かに一色の言うとおり頭撫でるのは避けて正解だった。

もし一連の動作が全て執り行われていたら、俺の学校生活またもや一日目にして男子共通の敵として君臨するところだった。そこは一色に感謝だ。

一色について、あいつは自分がほかの女子より可愛いと自覚している女子だ。

まずあの人だかりは作戦で作りあげた物だろう、自己顕示する事により

ほかの女子への牽制をする事でまだ定まっていないうスクールカーストの階級を駆け上がっていく作戦なのだろう。

えっ、もうスクールカーストなんてそんな選定が始まっているの??

学校怖い。社会怖い。これはもう専業主夫しか道がなくなってきたな。

そこまで考えて飽きた。

ちようど、開始のチャイムが教室に鳴り響き皆が席に着く。  
さてようやく、俺の学校生活が始まる。

机に突っ伏した身体を起き上がらせ、教壇をみてしみじみと思った。

## #2—EX 斯くして一色いろはは新宿に降り立つ

## 新宿都庁前

大きな時計が特徴的なビルに朝から大勢の人々が押し寄せる。

今日はこのビルでチョコレートの祭典が催される予定だ。

受験も終わり合格発表を待つのみとなった私は自分への労いも兼ねて久しぶりに千葉を出た。

こう見えて実は私はお菓子作りが趣味だったりする。

チョコレート菓子ももちろん作るのだが、そろそろあれの季節も迫っている。

そう、バレンタインデーだ。

手作りっただけで男子っですぐ『俺の事好きなんじゃね？』って勘違いする。

全員に黒稲妻を渡すのもいいのだけれど、あれを男子人数分用意するなんて、財布がかなり痛手を被ってしまう。

なので手作りなのだ。

まあ男子には落花生とコーンフレークを砕いて湯煎したチョコを入れて、塩をひとつまみ入れて製氷皿に入れて固めたお菓子で十分だったりする。楽に大量生産できる上

に手作りで喜ばれる一品だ。

せつかくのチョココレートの祭典なのだ、しっかりと観察してプロから技を盗もうつと。

……あれ？ 結構真面目じゃない私？

しかしこのイベント、やはり有名なのか列がなかなか進まない。

皆有名店のチョココレートをご所望なのだろう。

まあ私もいくつか購入したいものをピックアップはしていたりする。

しかしこの待ち時間、他の方々は皆相手があるので暇にはならないだろう。

しかし私は一人だ。もう携帯いじるしかないよね。

充電持つかな。

\*\*\*

二時間立ちっぱで携帯のみをいじり90パーセントくらいあった充電量が50パーセントとかなりの消費量だ。

ずっと動画見ていたらこんなもんだ。

つてかそろそろ携帯変えよ……



お父さん口説けば買ってくれてくれるでしょ。

ようやくご入場できる。

私は内心ウキウキわくわくで入場口を通る。

かすかに香る甘いチョコの香りが期待を増幅させた。

視界いっぱい広がったチョココレートの名店。

ショーガラスには職人が施した細かな細工が瞳を誘う。

すごいなあ〜やっぱりプロって感じる。

さまざまなチョコに誘われながらも私はお目当てのチョココレートに向けて足を進め

る。

お店にたどり着いて、ショーガラスに映し出される照明を反射し宝石のように光沢のあるトリユフを見つめる。

カカオの色をモチーフにしたシンプルなブラウン色と、控えめな主張をするゴールドのラインが施された指輪を入れるジュエリーケースみたいな箱。

本当に宝石箱を意識したかのようだ。

何個入りが可愛いかなとか考えてしまう。

やっぱり3の倍数はパッケージ映えする個数と言っていていいだろう。

そう考えて、私は3個入りと6個入りを買うことに決めた。

そしていざ店員に声をかけた時、誰だろうか、誰かとすみませんという言葉をタイミングバツチリで一語一句言葉を間違えることなくハモらせてしまった。

少し照れくさくそつと視線をその声の持ち主へと移す。

「あれ？ せんぱい？」

その声の持ち主は以前サイズで出会った人だ。

まあナンパから間接的に助けてもらった。

お礼に私が相席したにもかかわらず何も反応してこなかった非常に珍しい部類の人だ。

ほかの男子なら、会話弾ませて連絡先とか聞いてくるはずなんだけれどまったく何もしてこない。

もしかして緊張して喋れないのかなどか思ったが、そんなこともない様子で、結局こちらから話題を振るまで話すことはなかった。

そんな珍しい人だ。

「せんぱいなにしてるんですか？ もしかしてデートですか？」

「……だれ？」

ちよつとせんぱい？ まさか忘れられているなんてさすがに予想外でした。

「まえにナンパから助けてもらった一色いろはですよっ！ なんでナチュラルに忘れて

るんですかっ!!」

せんばいはああと、なんか思い出したかのようにけだるく唸る。

「ああ、お久しぶりです」

「なに他人行儀になってるんですか？ 私とせんばいの仲じゃないですか言葉なんて崩してくださいよ」

「お前、1度しか会ってない人間にいきなりため口きくのも勇気いるんだぞ」

「そう言いながらしつかり崩してるじゃないですか」

「許可は得たからな」

「それよりも今日はどうしたんですか？」

「ああ、お袋にこのチョコ買ってこいって頼まれてな」

「なーんだ、せんばいにも彼女いるかと思っただじゃないですか」

客層的にそう思わざる得なかったけれど、まあ身内の用事なら納得かな。

「んなのいるわけねえだろ。正直肩身せめえんだよここ……」

ですよねえ〜ひとり身で来るとほんと肩身狭い。

チョコくらい一人で買いに来いよって思いたくなりますよね。

「ところで奇遇ですねせんばい。私も同じチョコ買おうとしていたところなんですよ」

「そうか、なら先買っていいぞ」

「おつ、ありがとうございます」

私が先にチョコを買ってせんぱいを待っているとせんぱいは怪訝そうな顔で私をみる。

え？ 何ですかね？

「お前なんでまだいんの？」

「いえ、せんぱいを待っていただけなんですけど？」

「えっ？ なんで待ってんの？」

「えっ？」

そういえばなんで待ってるんでしょうね、私。

「せんぱいはこれからどうするんですか？」

「普通にラーメン食って帰るんだが……」

「え、せつかく新宿まで来たんですし、どこか行きましようよ」

こう私から誘うと、たいていの男子はその気になるのだ。

もちろんそれはせんぱいも例外じゃなく……

「えっ？ 普通にいやなんだけれど？」

っは？ ちよつとせんぱい？ こんなに可愛い子がデートのお誘いをしているんで

すよ。

映画とか奢ってくださいよ。

「せつかく新宿まで来たのにラーメンだけってちよつと寂しいじゃないですか」

「ああ、せつかく新宿まで来たんだからラーメンなんだろうが」

言っている意味がさっぱりわからない。

この人だけラーメン好きなの？

「なら、私の買い物に付き合ってくださいよ、受験の労いも兼ねてっ！」

「ああ、そういうえばお前総武受けるって言っていたな」

「そうですそうです。あの地獄の受験勉強からようやく解放されたのです」

「そりやお疲れさん。それじゃあなっ！」

ちよちよちよちよっ！ なになにどうやったらそこで別れる発言が出てくるわけ

すかっ！

私は即座に去ろうとした先輩の腕を掴む。

「労ってくださいね」

あつ、可愛らしく言おうとしたら、予想以上に低い声が出ちやいましたね。

まあ、表情は崩していないのでまあ大丈夫ですよね。

「そのなんていうか……打算的なやつどうにかならんのか？」

「打算的って何ですかね？ 算数？ 数学？ 勉強の話は頭が痛くなるので止めてもらいたいですけれど。」

「何ですか打算的って？」

「お前が今俺にしている事だ。こういう表情すれば、こう声色使えば、こういう仕事をすれば大体の男子は勘違いしてくれるだろうってお前思っているだろ」

「どうやら私の考えていた事はせんぱいには筒抜けだったらしい。」

「えー、それ抜いたら私ただのポッチになっちゃうじゃないですか」

「ポッチはいいぞ。人と関わらない分気が楽だ」

「うわあ……将来引きこもりの親のすねかじる人がいう台詞だそれ……」

「あまりにも酷くてつい敬語を忘れてしまう。」

「お前失礼すぎるだろ。一応專業主夫目指してるんだぞ」

「養つて貰う気満々じゃないですか」

「働きたくない」

「この人、天性の怠け者ですね。」

「せんぱいのそんな実現不可能な将来の話はどこかに投げ捨てるとして、ほら行きますよー」

「つは？ なに言っちゃって……わかった、条件がある」

先輩はハツと何か思い出したかの様な表情をして、苦虫をかみつぶしたような表情で私の提案を条件付きでのんでくれるようだ。

……正直、失礼すぎませんかねこの人。

「帰り一緒いいか？」

「ちよつ!!」 もしかして口説いてるんですかっ！ さつきまで私の顔すら忘れていた人がいきなり一緒に帰ろうだとか身勝手もはなはだしいというか自分の身の危険とか友達に見られたらとか考える必要があるので「ごめんなさいっ！」

唐突にぶつ込んできたせんぱいにあせあせと頭に浮かんだ言葉をそのまま言葉に出す。

いきなり何言っちゃってるんですかこの人は本当に。

「そこをどうにかできねえか？　つてか俺そこまで不審者に見えちゃうの？　傷ついて泣いちやうまであるんだけど？」

さつきまでの態度とは真逆でなぜそこまでして頼み込む必要があるのだろうか？

ふと私の頭をよぎった考えで先輩がどうして頼み込んでいるのかが理解出来た。

「せんぱい、もしかして新宿駅で迷子になるから一緒に帰ってって言ってます？」

「そうだ。あんな迷宮から俺が無事千葉までたどり着くとかムリ」

まあ、そんな条件でしたら別にいいですけどね。

「仕方ないですね〜わかりました。それじゃちよつと付き合つて貰いますよ」

「へいへい」

こうして私とせんぱいの突発的デートが始まったのである。

\*\*\*

外に出るとすでにあたりは薄暗く、その日が終わりに向かっていることを認識させられる。

歌舞伎町は煌びやかな街灯が所々で灯り、祭りかのように人は入り組み、喧騒が耳に入る。

私たちは買い物を終えて、そのままラーメン屋へと直行するせんぱいを止めて、お腹を空かせようという名目のもと、映画をみることにしたのだ。

「はあく、映画面白かったですね」

「そうだな。意外なチョイスだったわ、お前ならいかにも恋愛映画とかチョイスすると思つていたんだがな」

長らく座つていたこともあり、背を伸ばしながら先輩はそう答える。

「それも興味はありましたけれど、今日はコメディの気分だったんですよ〜」



今日は楽しいを共有したかったので恋愛映画はまた次回ですよ。

「まあな」

「せんばい、必死に笑いこらえてて我慢できなくて吹き出してたの凄く面白かったですよ」

「映画の話じゃねえのかよ……」

「そんな事よりもせんばい、お腹空きました」

待ちに待ったかのようにせんばいは目を光らせて今まで合わせなかった目を合わせる。

「そうか、なら行くか。ラーメン」

普通を装っているがどうも言葉の節々から高揚感がにじみ出ている。

ほんとこの人どんだけラーメン好きなのだろう。

どうやらその場所は映画館のすぐ近くらしく、映画館の裏手に回る。

近くに交番があるのだが、やはり歌舞伎町であり、あたりも薄暗くなっている。

すれ違う人たちもやけにガラが悪そうな装いをしていて私の不安を増長させていく。

すこしだけ、ほんの少しだけ怖くなつて先輩の袖を掴む。

んっ？ と私のその行動にせんばいは私を見たが、特に何も言つてこなかった。

しかし少しだけ歩く歩幅を狭めたあたり私に気を使つてくれたんだろう。

少しだけ心が温まった。

せんばいのいうラーメン屋は映画館の裏にあつて行列が並んでいて人気店である事が伺えた。

「せんばい、何がオススメですか？」

「お前だったら塩でいいんじゃないか？ 油っぽいのが苦手そうだし」

「そうですね。それにサラダがあるのうれしいですね」

「つてかラーメン以外にもメニューがありすぎて何屋だつて疑問が湧いてしまうわ」

「それ思いました」

そんな雑談をしながら行列に並んでいたら20分ほどで店内に案内された。

運が良かったのか個室へ案内される。

注文を終えてから案内された個室をキョロキョロと視界を巡らせる。

「ラーメン屋で個室つて新鮮ですよね」

「そうだな、周りに気を使わなくて済むから楽だな」

麺を乾燥させたかのようなおつまみを食べながら先輩は答える。

「周りに気を使うんですか？」

「店によつてはな、ロット遅れて店に迷惑をかける奴ギルティとかいう奴がいんだよ」

「なんですかそれ、殺伐としてますね」

「ほんとな」

雑談をしているうちに注文していたラーメンとサラダが届く。  
とりあえずまずは一口とラーメンを啜る。

「……っ!?!」

「なにこれ、すっげえうまいな」

「そうですね」

互いに無言になり、麺を啜る音のみが室内を支配した。

\*\*\*

「はあく大満足ですよせんばいっ!」

「ああ、千葉にも出来てくれねえかなって切に願うぜ」

ラーメン屋のお店を出て駅に向かう途中、ラーメンの感想が出てしまう。

たしかに美味しかった。

都内に出てこないと食べることができないのはたしかに惜しいですが……。でもこんなの近くにあつたら太っちゃうので大丈夫です。

赤信号で信号待ちの状態になった。

ちよūdいと思ひ、私はせんぱいを呼んだ。

「んあ？」

気だるげな返事をしながら私に振り向いてくれる。

「今日は私に付き合つてくれてありがとうございます。ちよつと早いですけれど、これどうぞ」

私は買ひ物の最中に買つたトリユフチョコをせんぱいに差し出した。

「まじか？」

「ええ、もちろん義理なので勘違いしないでくださいね。」

「えつ？ むしろ完全に義理だとわかる定評の黒い稲妻の方が好みなんだが」

なんでそういうこと言つちやうかな？ ……まあいいです。

「まあ、せんぱい当日は1個も貰えないことはわかりきつてるんで」

「勝手に確信してんじやねえよ。お前に俺の何がわかる」

「先輩が天性の怠け者つて事以外何も知らないですから、これから教えてくださいねっ

！ せんぱいっ」

「うっわ……うぜえ」

「なんでそういうこというんですか〜！」

「んなことよりそろそろ新宿駅つくぞ、案内してくれ」

あつ、完全に忘れてた。そうだった。

「そうですね！ 私もわかりません！」

自信満々にそういうと先輩は絶望したかのような表情で私を見る。

「っは？」

「だってせんばい言つたじやないですか、帰り一緒にいいか？ ってだから一緒に

帰っているだけですよ。私、新宿駅知ってるなんて一言も言つてませんよ」

「マジかよ……」

「まあ、一緒に迷つて帰りましょうね」

そしてせんばいと私が、無事千葉の地を踏むにはこれからさらに数時間を要すること

となったのはいうまでもない。

## #3

学校での初日全ての日程が終わり、帰宅するべく駐輪場へ向かう。

その道中の廊下の端に髪を染めて制服を着崩してミニスカでミニスカな派手めな今時女子高生がいる。携帯を片手に持っているが画面を覗いている訳ではなく歩行者をチラチラと確認している。

誰かを探しているのだろうか。

胸元のリボンから見ると2年生と判別できる。

その出で立ちは一色に負けずというかそれ以上に可愛らしい顔の作りと胸の圧倒的母性が存在を主張している。

なのでたとえ廊下の端にいても、その存在は他の人たちも認知され、注目を浴びてしまう。

というかこの学校に一色以上がいるのか頭を抱えてしまう。

どうなってんだこの学校は、裏でアイドルの育成でもやってんじゃないのか？

んじや俺もプロデューズしてくれよ、青春アミーゴ。そつちかー。

俺と一瞬目線があつたら小走りでこちらへ向かってきた。

一瞬目が合っただけで感知されるとか何？

目と目が合った瞬間好きだと気づいちやった？？それあるっ！…ねーよ。

今日はやけに可愛い女子に話しかけられる日だな。まあ嬉しいっちゃ嬉しいけれど。

「あいつ、比企谷君ですか？」

「そう…ですけど、2年生が俺になんか用すか？」

「ちよつと来てもらっていいかな？ここじゃ少し喋りにくいし」

彼女が少し周りを見て困った様な表情をする。

俺も周りを見渡すと確かにさっきまで注目を集めていた可愛い女子がこんな冴えな

い野郎にしやべりかけているのだ、そりゃ注目されてもおかしくはない。

「まあ、いいっすけれど…」

「それじゃこつちこつち〜！」

連れてこられたのはどうやら購買近くの中庭だ。

下校時間なので中庭に生徒は疎らだった。

話すには丁度良い場所だと思う。

駆動音にしてはやけにでかい音を立てている故障一步手前の自販機でスポルトップと男のカフェオレを購入し、近くの座れる段差に腰掛ける。

目の前の2年生女子もその隣に腰掛ける。

これでもうやく話がでけるステージが整ったと言うわけだ。

「すみません、先にお名前聞いて良いっすか？ちよつと初対面なんで」

「あぁーっ！ごめんねっ！そういえば名乗るの忘れてた、私、由比ヶ浜結衣です。

2年生だよ」

「由比ヶ浜先輩っすね、俺比企谷八幡っす」

「うんっ、よろしくねっ！」

「とりあえず、これどぞ」

「あつ、ありがと〜」

俺が先ほどのカフェオレを手渡し、由比ヶ浜先輩がお金を払おうとしたが、俺はそれを制した。

「気にしないでいいっすよ。俺が勝手に買ってきたんで」

「そんな事は無いよー。ありがと」

そう言つて彼女は俺の手に100円玉を置いた。

まあ、特に遠慮する必要も無いしもらえる物はもらつておこう。

「早々でなんなんですかね？由比ヶ浜先輩の話つてなんですかね？俺、先輩と関わりがあつた訳でもないんすけれど」

「えつとね…」



そう言つて由比ヶ浜先輩は立ち上がり俺の前に立ち腰を深々折り、頭を下げた。

「あの時サブレ……私の飼ひ犬ね！救つてくれてありがとうっ！あと……」

由比ヶ浜先輩は続けて口を開く。

その声色は重く、低い声はとても悲しそうだった。

「あなたの大切な時間を止めちゃつてごめんなさい……」

いきなりの謝罪だったが話の内容を察するに1年前のあの犬の飼ひ主が由比ヶ浜先輩だったという事だろう。

確かに俺は本来、由比ヶ浜先輩達と同じ学年になるはずだった。

しかし交通事故により1年というブランクができてしまった。

由比ヶ浜先輩のその事故のきっかけを作ったことに対する罪悪感は計り知れないだろう。

しかし当の本人の俺はと言うと、長い春休みからようやく抜けたと言う感じだ。

運良くクラスメイトと顔合わせをする前に事故つていたので、2年生は俺の存在を知らないし、知り合いが居る訳でもない。

結論、学年が1つ違う以外何も気負いする必要が無いのだ。

「確かに事故は起きた、でももう過ぎたことつすよ。それに不幸中の幸いで、クラスメイトと顔合わせする前の事故だったんで、2年生に俺の顔知つている奴らいないと思うん

すよね」

「そうだけどつ!」

「由比ヶ浜先輩は気負いしすぎつすよ。俺は怒ってすらいないです。…と言う事は由比ヶ浜先輩が気に病む必要がないと言うわけつす。これでこの話は終わるんですよ。ハッピーエンドつす」

さつきからやたらつすが多いな、なんでも語尾につす付けたら後輩キャラなると思つたら大間違いだぞ!

「あははー…比企谷君は優しいね」

由比ヶ浜先輩は自責の念が緩くなつたのか、淡く笑みを浮かべたその表情はとても魅力的で照れが生まれ言葉詰まらせて目を背けてしまった。

「ならさ、私と友達にならない?」

「へ?」

唐突な提案に素つ頓狂な声を上げてしまった。恥ずかしい。

なんかこの展開…前にも同じ感じな奴無かつた?

なに大胆な告白は女の子の特権ですとも言うのか?

会話の脈絡完全無視でいきなり友達要求とか『あなたとお友達になりたい』つて俺だけが見えない自己紹介ボード掲げてるの?

何それ怖い。

「いきなりっすね」

「まあ、これもひとつの縁っていうかなんていうか。ヒツキー喋っててちよつと面白いかなって？」

そう言われると悪い気はしないが、関係の消費期限理論が頭をよぎる。しかし定期的に会わなければ問題は無い。その理由はもちろんある。

友達になったとして、結局は学年の壁に阻まれるわけだ、早々関わりがもてず最終的に友達から知り合いへ、そして伝説へ。あれ？概念になるのかな？僕と契約してお友達になつてよ。

関わる度に魂が汚れていく友達とかどうなのよ？闇落ち必須ですね。

ってかヒツキーってなんやねん、引きこもりちゃうで。

やべえ怒りで口調が関西弁になつてしまった。関西弁警察に○されっぞ!?

「別に良いっすけれど」

まあ1年と2年とじゃそこまで頻繁に関わる事は無いだろう。

とりあえず友達になつておきましたーと体よく言っておいて

時間が友達であつた事すら忘れさせてくれる。

ソースは俺。忘れられた側だけだな。

「それじゃ私1年の教室に遊びに行くね」

由比ヶ浜先輩のその提案をのむことに迷った。

2年が1年の教室に良く来るのもその逆も正直教室全体を刺激し、注目を集めてしま  
う。

あまりやりたくはない。となると俺が出せる折衷案はこうだ。

「2年生が1年生の教室に行くのはちよつと注目集めちまうんで、たまに昼休み適当に  
ご飯食べながら喋れば良いんじゃないすかね？携帯とかで連絡し合えば問題ないです  
し」

「それあり！ヒツキーって頭良いねっ！」

「ひ、ヒツキー…？」

「そう！比企谷君のあだ名っ！私も別に先輩呼びじゃないくても良いよ、タメ口で大  
丈夫！歳は同じだしねっ！」

ヒツキーって引きこもりみたいだろやめろよ。

確かに1年病院と家に引きこもっていたけれどそれでヒツキーとか…それあるっ！

「まあ…分かりま…分かった。ゆ、由比ヶ浜」

「うん、宜しくねヒツキー！あつ、連絡先交換しよ」

終始、由比ヶ浜先輩のペースに乗せられた様な感じだったが、とりあえず、自責の念を取つ払えて良かった。ただなんか距離が近いなこの人、自分が可愛いって自覚あるのかな？

まあ自然に接してくれる分やりやすいと言うか何というか。あまり頭を使わなくて良い。

…あつ、誰かさんへの皮肉とかじゃないよ？

「すいませ…すまん。俺、連絡先の登録のしかた疎くて」

だつていままでアドレス帳にのつて三件だけだしね。

そりゃ疎くて当たり前。赤外線のやり方も分からない。え？今時QRコード？

LINE？あれでしょ、相手のアカウント奪い合うゲーム。奪ったアカウントで電子マネー買ってもらえるんですよ。

「そっか、私慣れてるからちよつと貸して〜っ」

おもむろに携帯を取り出し、由比ヶ浜に渡す。

由比ヶ浜は手慣れた操作で番号を登録してくれる。

「はい、ヒツキー」

登録し終えた携帯をまた俺に返される。

お父さん、お母さん、小町以外の女の子のアドレスが初めて携帯に入ったよ。

八幡頑張った。

「うす」

「今日は突然現れてごめんね。でもすぐにでも謝りたかったの……」

「……いや、気にしてくれてありがとう」

「それじゃ、そろそろ私行くねっ！今日はありがとう、ヒッキー！」

満面の笑みを浮かべ、由比ヶ浜は小走りに去って行った。

遠くなる由比ヶ浜の背中を見つめ中庭に残された俺は考える。

連絡先についている名前を確認する。

『由比ヶ浜結衣』きつと1年近く自分のした事に自責の念を抱えていた。

交通事故がもつと軽微なものだったら、もつと違う出会い方をしただろう。

だが今の彼女はそれから解き放たれた、これからきつと彼女はさらに魅力的になる。

彼女の人生の中で1度くらい登場人物として名前が出たのは悪い気はしない。

しかし今後は、モブとして名前のない一役者として見られる事だろう。

なぜなら俺は彼女の不安を解決してしまったのだから。

何かしらの興味が無いと人は他人を判別しない。

今まで、自分が交通事故を引き起こしてしまったという自負の念が存在し、俺への謝りたい、自分の劣勢である現状を変えたいという気持ちが強制的に俺に興味を持つよう

働きかけ動いたのだろう。

それを解決してしまつた今、その興味が消え失せたとと言える。

彼女を支えるのは俺ではなく彼女と同じ魅力を持つている誰かだ。

期待は捨てた、俺は主人公では無いのだから。

ズズズ：とスポルトツプが中身を失つた音が聞こえる。

これ人がいる前で鳴ると若干恥ずかしかったりする。

でかく鳴るとどんだけ吸引力ツエーのよつてなる。

吸引力のかわらないただ一つの八幡。

それ以上いたらドツペルゲンガーだからね？

立ち上がり、飲み終えたスポルトツプをゴミ箱に捨て、俺も駐輪場へと歩き出すの

だつた。

## # 4

ほんとマジでガチで家に帰してもらっても良いですかね??

由比ヶ浜の件が重なり若干遅い下校時間、人も自転車も疎らとなった駐輪場で誰か待っている一色を確認すると深いため息をつかざる得ない。

俺の歩いて来る姿を認識したのだろう一色がふふんと得意げな顔で待ち構えていたが、おれの歩調は止まりもせず遅くもならずそのまま一色とすれ違う。

「つちよつとせんぱい〜!」

せんぱいって誰先輩ですかね? ご存じないです。

そのまま自分の自転車を見つけて鍵を解錠するところで一色が強制的に視界に登場する。

「ちよつとせんぱい! 無視はいじめの始まりですよ!」

「いじめをいじめと認識しなければいじめは起きないんだよ」

「なに言ってるんですか? 正直キモいです」

お前、それ殺すとか死ねとか相手に向けて言ってるんじゃないか! ぶつ殺すぞ!

と同じ事言っているからね? 自覚してる?



「お前のそのキモい発言も俺をいじめてるからね？」

「そんな事よりも〜…さっきの2年生、何ですか？」

後半になるにつれて言葉冷たくなってるから。

ってかこいつも見ていたのか。

別にこれと言つて話すような事でも無いからな。

「別に話すようなことじゃねえよ」

まあ由比ヶ浜の情報をもやみやたらに公開する必要も無いし俺がそれを喋って何のメリットがあるかというわけでもない。

ここは濁した方が身のためだ。

「むー、携帯渡して連絡先交換してたじゃないですか〜」

だから、その軽いふくれつ面の表情と上目遣いはやめなさい。

お兄ちゃんスキルが強制発動するから。

ってかそれも見てたの？もしかして口説いてるんですか？一色さんちよつとストーリーの資質あるんじゃないですかね怖いですごめんなさい。

「あれは成り行きで交換することになったんだ」

「じゃあ私も教えるんで携帯貸して下さい」

一色さん？いつもは上目遣いなのになんで今上から目線なのかな？

下目遣いも得意だったりする？

まあ別に連絡先増えるくらいどうでも良いけれど。

「まあ、いいけど…」

一色に携帯を渡すと自分の携帯と交互に見ながら操作を始めた。女の子はみんな携帯電話のスペシャリストなのかな？

指の動きが速すぎて分かんねえ。

「せんばい友達いないんですね」

「いきなり核心つくな。泣いちゃうだろ」

何こいつ俺になんの恨みがあつて俺の傷心決ることするの？

「それより、さっきの2年生って由比ヶ浜先輩って言うんですね」

多分連絡帳を見たのだろう四件しかないし、由比ヶ浜の名前は目立つ。

「そうだが、俺の個人情報どこ行ったよ？」

「せんばいの個人情報は私の個人情報です」

「なにそのジャイアン理論」

「はい、登録終わりました」

喋りながら2台の携帯操作できるってやばいな。

何がやばいってやばいくらいにやばいやつがやばい事しているんだ。

もう何言ってるか分かんねえがとにかくやばい。

そんな事を考えつつも一色から携帯を返してもらおう。

五件に増えた連絡先をみて少し顔の表情が緩くなったのを感じた。

「せんぱい、その表情キモいです…」

一色はうわあ…つというような嫌悪感丸出しの表情で俺から2歩くらい遠ざかった。

やめろよ、比企谷菌って言われてみんな俺から物理的に距離取ってたの思い出しちゃうだろ。

特にツライのはどんな授業の時でも机を必ず離されるって所だ。

給食の時なんざ皆机合わせて島を作ってるのに俺一人の机だけ孤島だったわ。

…思い出したら涙腺が緩くなっちゃまう。

「用件はそれだけか？なら帰るわ」

「ちがいますよ、ほらあれです。ご褒美もらいに来ました」

「はあ？何言ってるのお前？」

「ちよつと、何ナチュラルに忘れてるんですか！」

あー、そう言えばそんなこと言ったな。

絶対受かんねえだろかと思ってたわ。

「あー、あったな。で？結局何して欲しいの？できることは限られるが？」

「それなんですけれど、今気になる人がいるんですよ」

「……は？」

一色さん？まだ入学一日目ですよ？

それでいきなり気になる人がいるとか頭の中どうなってるんですか？

女の子は素敵なハッピーセットでできているとでも言うんですかね？

おいおい、ハッピーセットで人体錬成出来るのかよ。

なるほど、そのとき正常な思考を持って行かれたのか。納得。

俺の怪訝な表情を見るに一色はどうやら何か勘違いをしたらしくニタつといたずらっぽく笑う。

「あれ？せんぱいもしかして今俺の事じゃね？つて考えませんでした？勘違いも甚だしいですが、まだ数回しか会ったことがないせんぱいは今後の頑張りに期待ですよ？」

そんな事みじんも考えたことは…いやちよつとはあった。

つてか今後の頑張りって何だよ、比企谷先生の来世に期待ってか？

何それ人生ガチャなの？イケメン当たるまでリセマラOK。

…自殺喚起に繋がるからやめた方が良いよ??

「うっせ。ハッピーセットのこと考えてたわ」

「えー…それはそれで意味不明で相当キモいです…」

あ、うん。多分俺もそれ言われたら引くわ。

「それより相手だれだよ。それが分からんと動けん」

「そうですね、これです」

そう言うのとすつと携帯を見せてきた。

画面には確かに爽やかなイケメンが隠し撮りされていた。

「隠し撮りかよ」

「許可取ろうものなら周りの先輩の視線が怖くて」

流石にそこで割って入る根性はなかったみたいだ。

「とりあえずこいつと付き合えるように俺は動けば良いって事か」

「まあそういうことです」

よりにもよって一番面倒くさいお願いを出してきやがった。

恋愛経験など振られた事くらいしかない俺にとってはどうやって成功に導くなど知らんぞ。

「ちなみに俺そんなに恋愛経験ねえからそこまで気の利いたアドバイスとかできないぞ」

「せんぱいにそんなの期待していませんよ？でも実験には付き合ってもらいますよ」

「実験？」

「やっぱり向こうはよりどりみどり取る手数多に引く手数多のイケメンじゃないですか。そうなることやっぱり私からアプローチしないといけないじゃないですか。だからせんぱいをつかって実験をしようという考えです!」

ふふんと得意げに仁王立ちで胸を張って自信満々に語っているようで悪いが  
なんかマッドサイエンティストの臭いがしていた。

「つというわけで、4月16日ちようど休みじゃないですか、実験に付き合ってもらいますよ!」

1週間以上先の予定入れられるのかなに?

もうそんなにお友達と予定つめつつめなの友達100人できんの早くね?

「面倒くせえ」

「ちゃんとお願ひ聞いてくれるって話じゃないですか、しっかりと付き合ってもらいますよ!」

今度は前屈みの上目遣い、両手は後ろで組んで斜め45度の微笑めいた仕草。こいつ自分を可愛く見せるパターン幾つ持つてるの?108くらいあるんじゃないかね?

「へいへい、そんなじゃもう帰って良い?」

話は決まった。とりあえずその日まで俺は一色と関わらなくて良いというポジティブ思考でいるとしよう。今日はもう色々とありすぎなんだよ。家に帰って寝かせろ。

「せんばい、駅まで後ろに乗せて下さいよ」

やだ、一色大胆。でも俺それを友達に見られるのは恥ずかしい。

友達いないけれど。いや一人いたわ。やべーこのネタ効果薄れる。

つてか自転車の二人乗りつて普通に道交法違反だからね？

「やだ。それに二人乗り道交法違反だからな…」

「むー、なら押していきましょ」

「なんでお前と一緒に帰る前提なんだよ」

「こんな可愛い子が一人歩いていたら危ないじゃないですか」

「自分で言っちゃったよ…そんな危険がはびこるような時間帯でもないでしょ」

「そんな事は無いですよ？前にサイゼにいたナンパなんてしよっちゆうですから」

やはりあれはまだ一端だったのね見えないところで苦労している一色ばいせんカツ

コイイ。

でも自分でそれを振りまいてね？俺の感心を返せ。

「まじか、お前が周りに愛嬌振りまくっているからじゃないのか？」

「ほら、行きますよーせんばい」

「っはっ」

どうやら深く突っ込ませないように話は一緒に帰ると言う事で決まってしまったよ

うだ。

先を歩く彼女の歩幅は狭く、ゆっくりだった。

俺が追いつくことを前提として先を歩いているのだろう。

ふと、視野を広げると

青々としていた空は朱の色を纏い、春夜の訪れを感じさせた。

桜色の花卉が風で舞い、その光景に彩りを与え、最後に彼女がその絵の中心に存在することでのこの光景は完成した。

俺は深くため息を吐きながら自転車を押し、一色と共に校門を出るのであった。



## #5 — 1

卯月の肌寒い気温が肌を刺激する。

俺の気持ちとは裏腹に晴れ渡った快晴が引き締まった群青の空を見せ、その下にある街を活気だてているかの様にこの目に見せてくれる。

こんな日は日光の下のほうが気持ちよかつたりする。

冷房付けて扇風機付けて毛布にくるまってるくらい贅沢な感じだ。

今日は一色の実験に付き合ってやる日なのだが、なにぶん女子と2人で休日一緒にいる経験など小町と母様以外初めてでどうすれば良いか分からん。

同じ千葉の兄妹を真似して深夜に小町に馬乗りで人生相談持ちかけようと思ったが流石に躊躇してしまう。

そんな真似しようものなら白黒の車と青い制服のお兄さん達につれて行かれちゃう。

あれは心身を妹に捧げたスーパーイケメンHENTAIお兄ちゃんじゃないと成し遂げられない芸当だ。

俺には難易度が高すぎる。非常に残念だが…無理だ。

約束した時間よりも10分程早く到着した。

メールで駅前集合と言っていたが、駅前のどこに集合とは聞いていなかった。とりあえず改札近くで待つことにした。

待っているだけなので手持ち無沙汰になってしまふ訳だが、そういうときに限って時間という奴は遅くなってしまう…

とりあえず、近場の壁に寄りかかって、携帯を開く。

画面を見る振りをしながら、今日の目的について少し思考を走らせてみる。

まずは状況確認をしてみよう。

一色はあの爽やか系イケメンと付き合いたいとそう言った。

俺はその手助けをすれば良い。それだけだ。

で？なんで俺は今日呼び出されているのだろうか。

正直話だけだったらメールでもできたはずだ。

結局そのイケメンの奴についても外面知っただけで名前すらわからん。

覚えようとも思わねえ。

なるほど、俺も相手に全然興味が無いことを表してるな。

一色には今日なにすんだとメールは送っているが、返信は『内緒ですっ』つと言われ、教えてすらもらえなかった。

このことから言えるのは、俺はこの実験中に一色から何かしらの指示をもらう事があ

ると言う事だ。その指示が一体何なのかは分からない事が俺の最大の不安なのである  
：

うーん、冷静に考えると一色のあの様子だと外見だけで惚れ込んだ感じだろう。

一目惚れに似たようなものだとおもうが大丈夫なのだろうか？

黒歴史増やすぞ？

つてか他の誰かと付き合っていたらどうすんだこれ？

あの時完全に頭働いてなかったからテキトーに答えちまったのが悔やまれるぜ…

ん？

視線を感じ、いったん思考をきって視野を戻す。

俺の3歩くらい前に一色の姿が映った。一瞬うわあ…という顔をしていたがすぐに取り繕っていつものちよつと口角を上げた表情に戻った。

え？俺なんかスゴイ顔してた？

それよりも声かけてね？ちよつと驚いたわ。

「せーんぱいっ、お待たせしました〜」

「声かけろよ、びっくりすんだろ」

「驚かせようとしたんですよ？」

「あー、そうですね。ならその作戦に見事に引っかかったわー」

棒読みにも近い台詞を吐きながら駅前の時計を見る。集合5分前だ。

ふふつと微笑を浮かべる一色が再度『お待たせしました』と口を開く。

その微笑めいた表情に不意を突かれつい視線を外してしまう。

「別に待ってねえよ。集合時間前だ」

「確かにそうですね。でもいまのポイント高いですよ」

「そ、そうか」

打算的とは分かっているのだが、どうもその仕草と表情に

照れを隠しきれない。これが男のさがというやつか。

そういうや、こいつのこの仕草どう言い表せば良いかって前に考えたな。

候補が結構あったが、結局どれもしっくりこなかったな。

「そういうええだいが考えに耽けていましたけど何かあったんですか？」

「今日の事について何すんだらうなって想像してただけだ」

「想像って…せんぱいキモいです」

えっ？俺が発言する想像ってそんなにキモい？

あいつが発言したら別の意味で捉えちゃうよね〜って事？

俺そんなキャラクター確定してねえし、される様な友達いねえし！

不審者扱いならあるぞ！…っそれかっ！

「さいですか…」

「とにかく、あの人の件について情報収集してきたのでどこか入りませんか？」

「そうだな。落ち着けるとこ探すか…」

適当に駅前を歩く、やはり天気が良いのか建物と空のコントラストがハッキリとしていて、晴れた街を歩いているという情緒を感じる。

すると見覚えのある緑の看板が…

「おい、サイ…」

「却下です」

せめて最後まで言わせてよ…

「せんばいサイゼ好きですネ」

「そりや、うまいし、広いし、いつまでも居座れるし」

「たしかにそうですけれど。サイゼだと雰囲気でご飯まで一緒に頼んじやいません？  
せめて食事は別の所でしたいんですけれど」

「あー、確かにあるな。ドリンクバーだけ頼もうとしたら何故かドリア頼んどるとか毎

回だわ」

「なら探す所はカフェとかさういった所にしましょー」

「お、おう…」

なんか建設的な会話に見せかけて自分の欲求を押し通しやがった。

「あつちなんてどうですか、格安のチェーン店カフェ」

「お、おほ…」

「どうかしました?」

「なんかオシャレなカフェに行くかと思いきや普通の所選択するんだなって思ってたな」

「オシャレなカフェ行ってもせんばい緊張しちゃいますよね」

一色さんマジ気遣いできるマジ良い子マジ出。

おつ、マジ3つで鳴けんじゃね? 鳴くだけの八幡。マジ役に立たねえ…

その前に麻雀のルール知らんわ。

「そうだな。気遣いありがとな」

「せんばいが緊張して顔真っ赤にしてぶるぶるしていると私も恥ずかしいので、今回はここですましようー」

悪かったな、流石に顔真っ赤にしてぶるぶる震えねえよ。挙動不審にはなるがなっ!

ガハハッ!!

「さいですか…」

「ほらせんぱいつ！いきますよー」

\*\*\*

チエーン店系のカフェに入るのは初めてではないが、俺はそうそう来る所ではない。店内はモダンな木目？ウッドテック？まあ木を意識したようなオシャレな店内だった。

俺はもうこれでも十分オシャレなカフェだと思っただけけど、オシャレなカフェはさらにオシャレなカフェなの？混乱するから進化後に名称追加してくれよ、オシャレなカフェ・ブルーとかオシャレなカフェの極意とかおらワクワクすつぞ。

「せんぱい、いま凄くどうでも良いこと考えていませんか？」

「い、いや、そんな事は無いぞ？」

「だって店内見て口角ヒクヒクしてますよ」

嘘だろ!?ちよつとうまいこと考えたから一人でウケてしまった。昔、思い出し笑いを小町に見られて『おにいちゃん!!外でその笑い方絶対しないでね！確実に不審者と思われて通報されるから！』って言われてたの忘れてた！自重しよう…テヘペロ☆

「自重します…」

「何考えていたんですか？」

えーそれ聞いちゃう？八幡張り切っちゃうぞ。

「一色、漫画は読んだことあるか？」

「はい、有名所でしたら」

「俺はこのカフェが十分オシャレなカフェだと思っただ。しかしお前の言うオシャレなカフェはこれより上位のオシャレなカフェなんだろう？オシャレなカフェのオシャレなカフェって言いづらくないか？」

「いえ、そういうのは店名で言いません普通？」

真顔でそれ返されると俺のネタへの導線が消えてしまうんだが…

冷静に考えるとその通りだ。俺の熱意返せ。

「一色、お前のネタ潰しの会話に涙が出そうだけ…」

「せんばいなら泣いた分だけ強くなれるんじゃないですか？？分からないですけれど？」

なんでこいつこんなネタ知ってるの？ってかそれどこのサイヤ人だよ。

「アスファルトに咲く花みたいにな…俺、強くなれるのか？」

「そもそもアスファルトに花の種が発芽するような栄養素ありましたっけ？？日光も当たらないさそうですし。発芽しないんじゃないですかね？」

ヤーマーローヨー。現実突きつけるなよほんとに悲しくなるだろ。



「…明日こねえじゃん。夢も希望もねえな」

「あのー？さつきからなんの話ですか??せんばいなんでどや顔してるんですか？今かなり気持ち悪い顔していますよ？」

「その言葉が今日一番俺の心を抉ったわ…帰って良い？」

「ごめん小町、お兄ちゃん学ばなかったわ…」

### 閑話休題

店内の暖房が効きすぎていたのでホットの気分は失せ、アイスコーヒーを注文し、カウンターからガムシロップを5つほど取って空いている2名席に腰掛ける。

向かいに一色が対面で座ると、まじまじと俺のコーヒーを覗いてきた。

一色もアイスのカフェモカを頼んでる。やっぱり暖房ききすぎだよねここ…

「せんばいつて甘党なんですわね。ガムシロ5個も入れる人初めて見ましたよ」

「人生は苦いからな、コーヒーくらい甘くしたって文句は言われんだろ」

ストローでズイズイとコーヒーを飲み干して。アイスコーヒーってすぐ無くなるよね。

「はあ？」

なんかむかつく返し方すんな。折角キリツと言ってやったぞ感出したのに。…あつ、さつきも出したわ。

「ついで？そろそろ情報を開示して欲しいのだけれど？」

「そうです、そうです」

一色は携帯のメモ帳に情報をまとめているのだろう携帯をいじりだした。

「名前は葉山隼人先輩です。2年生でいま総武高校で1番イケメンな男子です！」

「おいおい、狙うレベルたけーなー。」

「となるとかなり競争率たけーだろうな」

「まあ、そんじよそこらの女とか私の敵ではないですけどね…」

一色こわつ!?なんでそんな笑顔でここまで冷酷な声がだせんのか？前に腹話術とかやってた？

「それでも、お前以上の女子がいけない訳でも無いだろ。そこら辺考えておかないと」

「まあ、そこですよね」

「で、他に情報は？」

「部活はサッカー部所属みたいです。実際放課後部活でているの確認とれてるんで確実だと思います」

「おー、ちゃんと裏とってんだな。こいつ意外と優秀なのかもしれないな。」

「ほう。なら部活入ってお近づきになるのも1つの手だな」

「それは考えてるんですけど、プライベートが無くなるっていうのがちよつと迷い所なんですよねー」

まあ確かに、青春を部活に費やす様な性格してなさそうだしな。

「他には？」

「いつも、6名？7名くらいของกลุ่มで固まっているみたいですよ」

人数が曖昧だ何。たまたに抜けとかが発生するって事か？

「あー、と言う事は葉山先輩を中心としたスクールカースト上層部って所か」

「そのグループのうち、女子は何人だ？」

そう聞くと、一色が怪訝そうな顔した。

「あの…せんぱいが女子の人数聞くとって非常に危ない感じがして…」

「俺、結構まともな人間だからね？」

「そうです…よね。信用します…」

信用するってその顔絶対信用してないよね。手伝えてきてきてそれないよー？

「女子は3名です。…でうち1名がせんぱいと前話していた由比ヶ浜先輩です」

意外なところ…いや妥当か、由比ヶ浜の名前が出てくることに納得できた。

「まあ、そいつら全員お前の敵だと思った方が良さな。なんせ1番葉山先輩に近い奴ら

だ」

誰もいないよね？せんばいに奴らって言っちゃった。

学校じゃないのにちよつとビクビクしちゃう。

「そういえば彼女の有無とかは？」

「いえ、今の所誰かと付き合ってたって話は無いらしいですね」

「ふーん……」

「…ねえ、せんばい？」

一色の笑顔の視線が刺さる。

なぜなら微笑を保ったまま声がやたら低く冷酷だからだ。

俺は急遽姿勢を正す。

「な、なんだ？」

「私のこと馬鹿にしています？他人事だと考えています？」

「い、いやそういうことはないぞ？」

「さつきから、すぐ考えれば出てくるような事ばかり言ってますよね？真剣に考えていますか？」

「それは一色が優秀って事だろ。きつとうん多分そうだと思う」

「まったく全然使えないせんばいですね。しっかりしてくださいっ」

おい、そんな怒った顔しながらカフエモカ飲むな。

ちよつと可愛いと思つてしまつただろうが。

…つてか年下に怒られてる俺まじ悲惨…

「まあ、いいです。今日買ひ物の時間でーつくらい妙案出して下さいね！」

ん？

「おい、買ひ物の時間つてどういうことだ？」

「これから、買ひ物行くじゃないですか？」

「いや、初耳だぞ?!?そこまで付き合ふとは聞いてない」

「え?もしかして今口説いています?初めて女の子と買ひ物一緒に行くからつて既に付き合つてる雰囲気だして彼氏面とか引くし気持ち悪いし無理だしもう少し女心を勉強してから出直してきて下さいいごめんなさい」

最後にペこりとお断りのお辞儀までされてしまった。

「…彼氏面してねえし、無理矢理ねじ込んだ感あるんだよなーそれ」

てへつつとお辞儀の頭を上げてテヘペロのポーズしてるし。

どうせ計算すぐだろう。

うーんもう少してこの表現を表せる言葉が出てくるんだがまだ出てこないなー

愛らしい?あくどい?なんか違うんだよな。

「良いじゃないですか、こんな可愛い女の子とデートできるんですから」

「自分で言わなきゃな」

「で？一緒に面白い物行つてくれますよねっ」

俺はまた深くため息をつき、『行くぞ』と言いカフェの外へと向かった。

後ろから『あー待つて下さいよー』と一色の声が聞こえたが無視した。

店外に出るとアイスを頼んだことを後悔した。寒い…

二人が出た店内

返却トレイに返されたグラスに残っている氷がカラン、と音をたて実験第二部の開始

ゴングを鳴らした。

## #5—2

ひとしきり買い物を終えて、シヨッピングモールから出た。

頂点を過ぎ、傾いた太陽が行き交う人々を照らし細長い影を作り出す。

その影はひとつふたつとすれ違い、増えたり減ったり大きな影に飲まれたり2つの影が重なったり様々な模様を映し出した。まるで人間関係の縮図を目の当たりにしているかのように思えた。

「買い物楽しかったですね！せんばいっ！」

その声で俺は現実逃避から引き戻された。

日の傾き具合からかなりの時間を一色の買い物に付き合わされたのだろう。

両手いっぱい買い物袋持たされてるしね：

どっからそんな金出てくんの？

もしかして：パパ活してる？

結局、実験と言いつつ、体の良い荷物持ちが欲しかったという感じなのだろう。

次からどんな誘いも断ろう。絶対にだ！

一色よ：買い物も終わったし、もう：俺に用ないだろう？

別にもうご飯とかいいからさっ…帰ろ？

駅向かってるよねこの道？

一色を先頭で歩かせ、俺はそれについて行く。

だって広い歩道じゃないし、迷惑だろ普通？

俺の辞書に横並びという文字はない。

基本後ろでついて行く金魚の糞スタイル。

あーやだ、糞だなんてはしたくない。

ならセンスある男、比企谷八幡のもつと洒落の効いたネーミングセンスを見せてやろう。

ドラクエスタイル。

もうちよつと頑張って考えろや。

「せんばい何か食べたいものありますか？」

一色が歩きながら後ろを振り返り質問をしてくる。

こら、ちゃんと前を向いて歩きなさい。

「もうご飯とかいいから帰りたい」

「どれだけおうちが恋しいんですか」

「外に出て半日たつと家に帰りたくなる病気なんだよ」



「ハッ」

ちよつと？一色ちゃん？お行儀のよくない笑い方しないの。俺が泣いちやうでしょ？

「せんぱいは私を家まで送っていく責任があるんですからね！ちゃんと最後まで付き合ってもらいますよっ！」

えっ？なんだって？

どつかのラノベ主人公みたいな難聴じゃないが、こいつ今俺に崩壊の呪文唱えなかった？聞かなかったことにするわ。

「ちよつとまで、駅までじゃねえの？」

「女の子にこんな大量の荷物を持って帰れとかせんぱいは女の子の取り扱い方が本当になってないですね」

そんじや取扱説明書出してくれよ。

俺の目の前に居る不良品を交換する案内番号さがすわ。

「その大量の荷物を買ったのはお前なんだが…」

「そういうわけでよろしくお願ひしますね！せーんぱいつ！」

だめだ、聞いちやいねえ…

\*\*\*

結局、一色に連れられ、駅前のレストランに入ることにした。入ったところは、またもや木の雰囲気を出したレストランド。何か森ガールが生息してそう。

ゆるふわ系な一色もぽつとみ森ガールっぽく…見えないな、森ガールに謝れ。

ただ洒落た感を出そうと書体崩し過ぎて店名何書いてるか読めねえ。

本末転倒じゃねえか、大丈夫かこの店？

俺たちは広々とした4人掛けの席に案内される。

対面に腰掛け、俺はようやく両手の紙袋から解放された。

両腕に血液が流れてくるこの感覚…

俺、生きてる!!

「せんぱいはこういったお店とかこないんですか？」

一色ちゃん？もしかして知ってて聞いている？ねえ？知ってて聞いているでしょ！

「基本サイゼだな、安いしドリンクバーついてるし長居できる」

「女の子と一緒にいるときはサイゼの事は忘れましょ？」

サイゼはいつまでも俺の心の中にいる。

ズツ友だよっ!!

「小町ならそんなこと言わないのにな」

「むー：女の子と一緒にいるときはほかの女の子の名前出すのはNGですからね？」

「その女の子と一緒にいるときはって奴、枕言葉になってないからね？多用するのやめよ？ちなみに小町は妹だ」

そんな女の子の子女の子言われたら意識しちまうだろうが。

「本当に妹いるんですか？そうは見えないんですが？」

え？なに？一人っ子に見える。

小町居なきや俺、存在意義ないからね。

「おいやめろよ。小町は俺の想像だけの存在じゃねーぞ」

この世界が夢の中で、交通事故に遭ってから俺はずっと病院のベッドで寝たきりだった。その前は小町という想像上の妹を作り出して生活していた。母は言った『八幡、あなたに妹はいないの』とかそんな展開いらないから。それならむしろ異世界転生させてくれよ。

「そうなんですわ、じゃあ今度紹介してくださいよ」

「えっ？普通に嫌なんだけれど」

「えー!?何ですか？」

「小町に悪影響を及ぼすだろ」

「人を悪の元凶みたいに言わないでくださいよ」

「お前の、あの…なんだ…？ 打算的な表情？ っていうのか？ 仕草？ 小町が真似したらどうすんだよ」

「どうなるんですか？」

「小町がそんなの覚えたらお兄ちゃん逆らえない…」

一色が少ししん？と考え事をしているらしい可愛い仕草一瞬だけして、ツハつと何かに気がついたあと、ちよつと興奮気味にまくしたてる。

「もしかして今口説いてました？ いろは、お前の表情ひとつで俺は何でも尽くしていけるとか遠回しにくさい台詞を言ってもせんばいはただキモいだけなのでもっとストレートに言うてくださいいごめんなさい」

お前の頭の中ハッピーセットかよ。

わざとやってるだろ…

「ツッコミどころ多すぎてどこツッコめば良いかわかんねえよ…」

「ですよね〜」

一色はふうつつと嘆息し、背もたれにもたれかかる。

「それじゃ、とりあえず何か頼みましょつか」

「そだな」

ふざけたやりとりを終え、俺たちはメニユーに視線を落とす。

「おいおい、サラダ一つで野口氏が一枚で足りないお値段ってなんだよ。」

「どんな高級店に入ったんだよ一色。」

「おい、ここどこんだけ高級店だよ、俺そんなに金無いぞ」

俺の不安な表情を察してくれたのか一色が『あゝ』と何か思い出したかのように説明を始めた。

「あつ、せんぱい。言い忘れてましたけれど、ここのお店、大皿を取り皿で分けるスタイルらしいので単品料理頼むと痛い目みますよ。量的にもお財布的にも」

「それ中華料理店じゃね？明らかに中華な雰囲気だしてないでしょ。イタリー系中華とかそういうコンセプトのお店なの？何それ新しい。でも遠回しで一人様禁止するよね？え、ちがうの？フードファイター育成してんの？それもどうかと思うぞ。」

「せんぱい嫌いな物つてあります？」

「トマトだな」

「それじゃこれにしましょう」

一色がメニユーに載っている写真を指したのが、トマトばかりを使用した贅沢パスタ。写真を見るだけでも判るこのゴロゴロと入っているトマト。

一色ちゃん？これは何の嫌がらせかな？

「ここつてトマト美味しいんですよね〜」

「もつと別の選択肢もあるだろ？」

「もー、わがままですわねー。なら HALF アンド HALF で頼みましょう」

「お前ブルーメランって言葉知ってるか？胸に手を当てて自分の行いをよく振り返ってみ？」

すると一色は俺が言ったとおりに胸に手を当てて目をつむって考え始めた。

ここうみると大分可愛いなこいつ。

「私可愛い」

俺の感心返しやがれ。

「半分トマトの奴と半分ボロネーゼでいいだろ」

「承知です〜」

一色が従業員を呼び、手際よく注文を終える。

「何かつかれた…なんでこんな取り分けするタイプの店選んだ？」

「やだなあ、せんぱいに取り分けする女子アピールするために決まってるじゃないですか〜」

「それ言ったら全て台無しじゃね？」

「いいんですよ、こう言うのってむしろ隠しているよりも最初に言っていた方が好印象なんですよ。」

「たしかに、一気にお前への警戒度が限界値振り切ったわ」

「そう言いながら少し期待してたりするんですよね？ せんぱいっ」

「そ、そんな事は無いぞ？」

「せんぱい…勘違いしちゃって、良いんですよ？」

上目遣いで俺に顔を近づけて猫なで声で一色はささやく

あーこの会話の流れに雰囲気…非常にまずいな。

「信用ならねえ奴が信用できない言葉吐いてもな…」

「えー、私せんぱいから信用されてないんですかー？」

「ああ、お前が漫画のキャラだったらいつか俺を裏切る」

「何ですかその例えキモいですよ」

なんで漫画で例えようとするとかキモいとか言われるの？

お前ら漫画嫌いなのか？ 読むだろ少年漫画よりもエグい少女漫画って奴を。

「でもでも1周回って信用しても良いかなって思いませんか？」

「マイナスをマイナスで乗算するとプラスになるようにか？…んな訳あるか。借金を借

金で乗算しても借金が途方もない金額に増えるだけだ」

「えー、じゃあどうやったらせんばいに信用されるんですか？」

「企業秘密」

「周りには内緒にしますから教えて下さいよ」

「そういう奴ほど信用ならねえ。：俺の友達の友達の話だが、好きな人いるかと聞かれ、大丈夫！内緒にする！つってたから話したのに翌日にはクラス中に広まっていて、好きな人には何故か告白してないのに振られるという珍事があつてな」

「どんな悲しい過去背負っちゃってるんですかせんばいは…」

「お、俺の話じゃねーし」

「だってせんばい友達いないじゃないですか」

「ぐっ……！」

とりあえず話をそらせる事が出来た。

勘違いしても良いという甘い台詞とあの仕事も合わさってくると物凄い攻撃力生んでくるな。魅了成功率にどんだけ極振りしてんだよ。

危うく言葉を鵜呑みにするところだったわ。

「つてか先輩にも好きな人いたんですねー」

「…中学は思春期真っ盛りだったからな。黒歴史しかねえ」

もう思い出したくもない事ばかりだ。



「へえ、気になりますね。どんな子がタイプなんですか？」

「お前と真逆なのがタイプだな」

「それ私が目障りで生理的に受け付けない男子に言い寄られた時に言う台詞ですよ」

「おまえ、なかなか酷いな。若干引いたわ」

「せんぱい？ プーメランって言葉知ってますか？」

「さーで、飯まだかなー」

「あー、話そらした。：別に良いですけれど」

「ぶすーつとふくれっ面でコップを傾ける一色を見ながら俺は小町と一緒に居るかの  
ような楽しさを感じるのであった。」

## #5—3

大皿に乗せられた2種のパスタを一色が丁寧に小皿へと盛りつけていく。

俺に盛り付ける女子を見せつけると豪語しているだけあって、パスタは小皿にきれいに盛り付けられていつている。

この光景にデジャブを感じ、どこで見たのか記憶をたどる。

すると、家で小町によくしてもらっている食卓の風景と似ていることに気づいて苦笑が漏れる。

「せんぱい？何想像しているかは知りませんが、また笑いが漏れてますよ？」

いきなりニヤって見られたらそりや怪しまれるわな。こりや失敬。

「ちとこの光景にデジャブを感じてな。小町によくやつてもらっている光景に似てたんだよ」

「それって遠回しに口説いてます？いろはなら俺の奥さんに相応しいとか順序すつ飛ばすのは構いませんがせんぱいの収入面が心配なので安定した収入が入るまでごめんさい」

もう何度目になるかわからないこの下り、一色は取り分けに集中しているのか、その

言葉に感情はなくなつただつらつらと言葉を並べているだけだった。つまりは棒読みだ。

よく取り分けながらこんだけ言葉並べられるなど感心し、俺はその言葉の返しを考へる。

「俺専業主夫志望なんだけれど……。つてかお前の頭の中の俺は名前呼びなのかよ」

「そうですよー。なので現実と差分が出てくるわけです。せんぱいが名前呼んでくれたら埋まるんですけれどね〜」

一色が盛り付け終わった小皿をこちらへと寄せながら期待を込めて、俺にっこりと微笑む。

「呼ぶわけねえだろ」

何言っちゃってんのこいつ。

妄想寄りに現実変えに来てる辺りやべえぞ。

「まあそんなことより、せんぱい？ 国語得意ですか？」

唐突に一色が両手を合わせ質問を切り出す。

文系は俺の得意分野だし。

「大得意だが？」

「では問題です！」

なんだ突然。俺に国語の問題で勝負しようつての？

おもしれえ。千葉と国語の問題で俺に勝てる奴はそうそういないぞ。

「全てのかな文字を重複させずに使った誦文の事を何歌と言うでしょう？」

「いろは歌」

「え？なんて言いました？」

「いろは歌」

「最後の歌邪魔だから捨てましょう、ほらリピートですよ」

「何がそんなことよりだよ。がつつり名前言わせようとしてんじやねえよ」

「むー、これなら確実に呼んでもらえると思ったのになー」

「詰めが甘いわ」

「まあいいです。こんなくだらない事してないでさっさと食べましょ。冷めちやいます

」

あれえ？こんなくだらない事を始めたのお前なんだけれどなあー？

軽く嘆息をつき、先ほど渡された小皿に視線を向ける。

綺麗に磨かれた真っ白な小皿が暖色の照明で淡く彩られ、それに乗せられたボロネー

ゼがひとときわ色濃く映る。

なるほど、これがインスタ映えという奴か。

食事は見た目も楽しむとはよく言ったものだ。

一色を見ると自分が盛り付けた小皿を写真に収めていた。あつ、ここにもインスタ女子がいたのね。

そう思いながらポロネーゼをすすする。

「こーら、せんぱいっ、すすつちやうとソース服に飛んじやいますよー。スプーンで丸めて食べちゃつて下さい〜」

だれが年上なのか分からないな。

\*\*\*

食事を終え、腹休めに背もたれにもたれ掛かる。

その瞬間にふいーつと声が出てしまう。

余は大満足でおじやる…

「さて、せんぱい？何か忘れていませんか？」

「スイーツなら一人で食つてくれ、もう入らん…」

「違いますよー、葉山先輩の件！今日中に何か妙案出してくださいねって言ったじゃないですかっ！」

あー、そんなことも言っていたね。

了承した覚えはねえけど。

「すまん、完全に忘れていたわ」

半目で見てくる一色を目の前に超高速で考えをまとめる。

「せんばい？私との時間が楽しかったからつて当初の目的を忘れてたら本末転倒じゃないですか？それともー？また私と遊びたいつて遠回しにアピールしています？」

アピール遠回してどうするよ？それアピールじゃねーじゃん。

「わーたわーた。今俺なりにまとめてみたわ」

「早いですね」

「意外と頭の回転は良いんだよ」

「そういう自慢良いからそのアウトプットしてくださいよ」

意外と成果主義なのね一色さん。

「とりあえず、お前はサッカー部入れ」

「はあ？何で、サッカーとか興味ないし臭いの嫌なんですけど？」

「まあ話は最後まで聞け。やっぱり葉山先輩との接点を掴むには定期的に会うことだろ。単純接触効果という心理学があるんだがな、接触頻度を増やすほど人は好印象を受ける。つまり、上級生との接点を下級生でも持てるつてのが部活の良いところだ。さらに、しっかり仕事ができるんならさらに好感度アップ。葉山先輩目的で入った女子なん

ぞ仕事できんだろうし葉山先輩以外の男のマネジメントまでやらないし面倒臭がるだろう。それでも我慢して続けられるなら葉山先輩からも一目置かれ他の女子どもを出し抜ける事間違い無しだ」

「なるほど、一理ありますね」

「よし、そんじゃこれで決めようぜ」

「しかし、駄目です」

「っえー!!!俺結構これ最高の案じゃんって思ったのに…」

「プラスここにせんぱいもサッカー部に入るって案を提案します!」

「はあ?」

「あつ、素でむかつく返答が出ちまった。

まあいいや、少し厳しめに意見してやろう。

オレヲマキコムナ。

「だって私だけ苦労するとか無理ですし…先輩がいれば苦労が半減するし」

「そこは葉山先輩頼れや、俺ばっか頼って勘違いされたらどうすんだよ、本末転倒じゃねえか」

「む…せんぱいが提案したんですから、最後まで面倒見る責任があると思います」

「そんな責任ねーよ。やるかやらないかはお前の判断だ。全てお前の責任でやるんだ」

「怖いんですよ…周りが敵でひとりで立ち向かうって？ひとりくらい仲間が居ても文句はないんじゃないですか？」

「立ち向かう覚悟もねえなら最初から諦めろ。俺は手伝わん」

「…うう」

涙目で俺を見つめてくる一色をみて心が少し心が痛む

…っ、言い過ぎたか？

ちよつと泣きそうになってるし…

いやしかし、ここで甘やかしたらつけあがるし…

…うー

そんな顔すんなし。

「その、なんだ？葉山先輩に振られたらまあな…その…なんだ…付き合ってやつから」

「え？」



あれ？この間…なに

俺なんか変なこといった？

「せんぱい？今私に告白しました？」

「ふあ？」

変に高い声が出た。

あーっ!?なるほどっ!!そういう風に捉えちゃう!!

照れくさく早く会話を終わらせようとして主語抜けるとかどんなミラクルミスだっ

!

弁解しないと!

「つち、違うっ!そういう意味の付き合うではなくて…!」

やばい、テンパりすぎて上手く言葉が出てこねえ…

「なるほど。つまりせんぱいはもし私が葉山先輩に振られたらせんぱいが強制的に彼氏になると…そう私を脅迫するんですね…」

こいつ何言っちゃってるの？

脅迫ってなに？脅迫って？

小学生の頃に罰ゲームで俺に告白しようとした女子が俺に告白することが嫌すぎてまじ泣きしてなぜか俺がその他多数の女子に集団シカトされた思い出がリフレインするからまじやめてね？

「確かに妙案って言うか背水の陣ですね。逃げ道をなくせば確かに必死で頑張れそうです。せんぱいが考えた妙案。この手で行きましょう！」

何故が一色はひとりうんと納得している。

何言っちゃってんの？ちよつと性格前向きに変わってね？

さつきまでひとり無理とか言ってたよね？

「いやちよつとまで、だから…」

「よーっし決まったら一気にやる気出てきた！せんぱいつ、今日はもう帰って良いですよ。私作戦練るんで」

「お、おう…」

あーもういいや…。

もう解放して貰えるんだ？んじや帰る—！

帰ろうと支度を始めた時、隣にある紙袋が視線に入る。

：

「いや、やっぱ送るわ。荷物重いだろっしな」

「ふえ!？」

一色ちゃん、女の子がそんなやらしい声出しちゃ駄目ですよ？

八幡、不審者に見られて青い制服のお兄さんに職務質問されちゃうからね？

「どどど、どうしたんですかさつきまで嫌がつてたじゃないですか」

「妹の教えでな。女の子には優しくしろとよ」

そういうと、一色は両手で顔を覆い下を向いて『水まで攻めてくるとか聞いてない…』とよく分からない事をつぶやいていた。

ひとしきり落ち着いたタイミングで再度彼女に声をかける。

「それじゃ、出るか」

「そうですね」

料金はサイゼよりも高いものの、そこまで高くはなかった。

二人以上で来るならね。

外に出る。日はすでに身を隠し、辺りは暗く夜が到来していることを感じさせる。その闇を覆い隠すかのように無数の街灯が、街の姿を変えていた。

\*\*\*

「ここまで大丈夫ですよ」

一色がそう言つて俺の手から紙袋を受け取る。

「そりゃあな。これ以上踏み込めるかよ」

一色の宣言通りしつかり家の前まで送っているのだから。

これ以上どこまで送るの？自分の部屋？

何ちよつといやらしいこと期待しちまうだろ。

だつて俺も男子高校生なんだから。

「せんぱいにおうちの場所知られちゃいましたね。私逃げられなくなりましたね」

「何か含む言い方やめてね？何もしないからね？」

やめてね？勘違いしちゃうから。

「せんぱい知つてます？そう言う人ほど信用できないって？」

「否定はできないな、むしろ一理ある」

「ちゃんと来るなら連絡くださいね？女の子は家にいても準備つてものがあるので」

「あー、はいはい。いつか多分くるんじゃないね」

「期待していますよ。今日はありがとうございました」

ちようど、ここが去り際かな？

そう思い、踵を返し駅へと戻ろうとした時、思い出した。

おっと、そういうえば忘れていた。

危うく渡しそびれるところだった。

「ついでだ、これも入れておくわ」

「へ？」

一色が受け取った紙袋の中にラッピングされた小物をつつこんだ

「まあ、いらなけりやさつさと捨ててくれ。そんじゃ……」

気恥ずかしさからその場を立ち去り、そのまま早歩きで駅へと向かった。

教室でふと耳に入ってきた一色と友人との会話を思い出す。

その際に誕生日の話をしていたのが不可抗力で耳に入ってきた。

そして今日が一色の誕生日だった事を知った。

キモがられるかなーこれ、俺がそいつの立場ならマジでキモいから二度と近づくなっ

て言うくらいやりそう。じゃあなんでやったの俺？DMなの？

携帯が震える。多分さっきの件で一色からのメールだろう。

恐る恐るメールを覗いてみる。

—— 誕生日プレゼントありがとうございます。まさか知っているとは思いません

んでしたよー？最後の最後に渡すなんて、せんばいはひきようですね。——

なんで知っているのって言う追求がなかった……とりあえずほっとしたわ。

—— うっせ、渡すタイミング無かったし。とりあえず、誕生日おめでとう ——

—— ありがとうございます？（ミ・？・ミ）？ ではまた学校でく PS：外出

ときの洋服は小町さんを選んでもらって下さいね。 ——

俺の服装ダメだった？ 何も言われなかったから大丈夫だと思っていたのに：

帰りに小町に聞いてみるか。

こうして、俺の長くも面倒くさい1日は幕を閉じた。

辺りはすっかり闇に落ち、気温が下がって軽く身震いする。

ふと空を見上げると欠けた月が雲で霞むことなくハッキリと映し出され、周りには無数の小さな粒があった。それらが全て星なんだなと世界の広大さを感じさせた。

この空に比べれば俺の悩みなんて小さな物だろうと考えようとしたが、大きかろうが小さかろうが結局は俺が面倒くらっていることには変わりが無い。

それにこの空に比べればってそもそも比較対象が違いすぎる：人間と空を

比較対象にすんじやねえよ。空ってそもそも悩む思考すらないからな？

それなら別の比較対象を用意するべきだ。人遣伝子合致率で考えるとチンパンジーかゴリラだ。：なぜ生物学的な霊長類を取り入れたよ。せめてホモサピエンスで括れや。

どうでも良い考えをしていると目先に丁度駅が見えてきた。

ようやく帰れると感情がこみ上げ、今までの思考を全て投げ捨て俺は足早に駅へと向かうのだった。

## # 6 — 1

曇天の空は日射を遮り気温を落とした。

さらにその雲はいつ雨を降らせてもおかしくないような空気を醸し出していた。

そんな中、俺は自転車を走らせる。

ちよつと雰囲氣的にいつ雨が降ってもおかしくない。

少し急ごうとペダルを力強く踏む。

ケイデンスを上げるぞ！

そう思った矢先、赤信号に止められた。

畜生、俺の体力返しやがれ。

信号待ちの気紛らわしに昨日家に帰った後のことを思い出す。

拘束から解かれ嬉々として家に帰った迄はよい。

そこからさらに玄関前で正座させられるとはお兄ちゃん思いもしなかつた。

「おにいちゃん…小町おにいちゃんがコンビニに行くんだろうなつて思つてその格好見過ごしたの、わかる？でもその予想を裏切つてデート？…おにいちゃんの一生で数回あるかないかのビッグイベントでその格好はないよ…小町一生の不覚だよ」



「えっ、そんなにダメだった!？」

「ありえないよー? 上はジャージで下はスウェットつて、コンビニによく出沒する田舎のヤンキーみたいな格好」

小町ちゃん? それつてお兄ちゃんも田舎のヤンキーつて遠回しに言ってる?

「まじか…めつちや楽なのに」

「着心地の問題じゃないよー? 今度から女の子と遊びに行くときはちゃんと小町に言うことーわかった?」

「はい…」

外では恥ずかしい格好だつて知らなかったんだよ。

でもそういうこと後で言われるとすげー恥ずかしいよな。

しばらくはあの場所に近づかないようにしよ…

目先の信号が青へと変わり、ペダルを踏み、俺は急ぎ学校へと向かった。

\*\*\*

教室に着き、いつも通り俺は机に突っ伏してHRまで、眠りにつこうとした。

そこでいきなり声をかけてきたメガネ野郎がいた。

おっおお…人に声かけられるなんて中学3年の夏以来だ。

つてか、んだよ。

俺のスウウイートタイムを汚すんじゃないやねえ。

「比企谷先輩、もしかして昨日、一色さんとデートしてました？」

「はあ？」

目が覚めたわ。

つてかその一色いろは。

お前のせいでほかが先輩呼びになっちまってるだろうが。

「いや、違えし…あれはデートじゃねえ。一方的な荷物持ちだ…」

「まあ、見ればいくら何でも分かりますよ。先輩どうしたんですか？5秒で支度しろとか言われた格好してましたよね？」

やめろよ、40秒でももつとマシな格好できるとか遠回しに言わなくていいから。

俺のナウでデリケートな羞恥心抉ってくるな。

「つてかお前誰だよ？」

「つえ!?!相模ですよ。最初のLHRの時に自己紹介しましたよね」

「40名近く居る奴らの自己紹介って一度に覚えられないでしょ普通」

お前興味ない奴の名前なんて覚えるか？覚えないだろ？無駄な労力だろ？

そんなの完全記憶能力でもない限りあり得ないわけだ。

一回言えばわかるとかそんな幻想ぶつ殺せや。

「そうですね、確かに」

おつ、意外と素直だな。

「ときに相模、なぜお前がその情報を持っている？ ショッピングモールにいるときにも出くわしたのか？」

「違いますよ。あれ、グループチャットで回ってきたんですよ」

そう言つて相模はグループチャットの画面を見せてきた。

つてかこういうメッセ関連つて普通に人にも見せるんだね。

友達いねえからわかんねえや。あつー人いたわ。

『一色いろは、彼氏とデートしてるｗｗｗｗｗｗウケるんだけどｗｗ』

『格好ｗｗｗｗ田舎のｗｗｗｗｗｗヤンキーｗｗじゃんｗｗ大草原ふつかふかｗｗｗｗｗｗ』

『えー兄貴とかじゃねえの？』

『あれこの人確か同じクラスだったよね？誰だっけ？』

『ばっか、同じクラスのヒキタニ先輩だろｗｗ』

『ちげーよ比企谷先輩だろ！前に2年の人と話してんの見た』

『えーつっていうことは一色さん比企谷先輩とつきあつてるの？』

『その可能性もなきにしもあらずだな。』

・  
・  
・

「こいつら一色の話より俺の事馬鹿にしすぎだろ」

俺の居ない所で俺の話題で持ちきりとか俺大人気だな。

おつ、また3つ揃ったな、また鳴けるぜ。むせび泣く八幡。

哀れ過ぎるだろ…

それよりも大草原ふつかふかかってなんだよ。

なんか包まれる優しさを感じちやうだろ。

そんな大草原で、俺は貝になりたい。

「まあこんな会話があったわけで早速事実の有無を確かめに出向いてきたわけです」

「野次馬根性出しすぎて引くわ」

「罰ゲームですよ」

「それ免罪符じゃないからな？」

俺を罰ゲームの景品にすんのやめてね？

罰ゲームでバレンタインあげるとか、罰ゲームで映画行くとか、罰ゲームで食事行く

とか、罰ゲームで告白するとか罰ゲームで付き合うとかあれ？罰ゲーム何か可愛くないか？

まあ理想はそうだな。

だが現実是这样だ。

罰ゲームでデートするとか言われてそれでもデートだと頑張つてファッション整えたはずなのに当日待ち合わせに誰も来ず、学校では遠くから撮影された俺の自慢のファッションが拡散され笑われていた。

なかなかエグいだろ？誰が俺に罰ゲーム押しつけろつつたよ。  
自分で完遂しろや。

「とにかく、比企谷先輩は一色さんと付き合ってる事実はなかった…ということですね」

「みんな一色好きだなあ」

「そりゃー、あの顔と性格ですからね。モテるかと思えますよ」

携帯をいじりながら相模はそう答える。

多分またグループチャットで今の話を伝えているのだろう。

「そうか…」

あの性格の裏を知っているのかねえ？

確かに男ウケする性格ではあるな。

大体可愛い女は面倒くさいんだよ。

小町が良い例じゃねーか。

小町は可愛くて面倒くさいのが良いんだよ。

悪いか!!

「実際、何人かの男子とは既に遊びに行つたつて噂ですしね」

そのうちの一人が俺なんだろうがな。

「まあ、良いんじゃないか。あいつが好きでやっている事だし。わざわざこつちが詮索する必要ねえだろ」

「意外と一色さんの肩持つんですね」

「いや? そうでもないぞ。興味を持たないようにしてるだけだ」

「一色さんに興味を持たないとか先輩もしかして…」

そう言つて、相模は1、2歩俺から遠ざかった。

「おい、ぐ腐腐腐な考え方はやめろ」

あははと軽く笑つた後、一礼して相模は俺の席を後にした。

おい、本当に今の誤理解けてるんだろ? 解けているんだろ? 解けてるんだろ?!

まあ、邪魔者がいなくなったのでようやく俺のスウイートタイムを始めることができる。

机に突つ伏して目を閉じる。

興味が無いか：

そいつが今何をしているとか何を考えているとかそれを考えるだけ時間の無駄だ。

やるべき事は目の前に沢山あつて、相手がいないと答えが出ない事に時間を費やすことは時間の無駄遣い以外に例えようのない行動だ。

それは机上の空論ではなく、考えるだけ考えて間違つた答えを出し、それに気づかず行動して笑われ続けた俺だからこそ言えるのだ。

たまに正解の答えを出すこともあつた。

その正解で得られた幸せという時間は酷にも有限で最終的に絶望を俺に押しつけてきた。

よつて俺は結論づけた、幸せとは不幸の始まりなのだ。

つまりは正解でも不正解でもどちらをだしても不幸になるのだ。

俺の導き出した答えは、初めから相手に興味を持たないということだ。

ふと携帯が震える。小町が何か忘れ物をしたのかと突つ伏した体を起こし、携帯を覗く。

—— やつはろー、ヒッキー！今日つてお昼つてどうかな？ ——

どうやら彼女は俺のことを忘れていなかったらしい。

つてかやつはろーってなに？

\*\*\*

I r o h a V i e w

お昼休み。

お昼は基本1人だ。

まあ女子を敵に回すようなことをしている自覚はあるもの。

それでも度々昨日の事を聞かれる。

誰でも行くような近場のショッピングモールで2人一緒にいたんですよ？

そりゃ聞かれますよねーって、自覚はありました。

一色いろはは比企谷八幡とデートしていた。

その実体は荷物持ちでもそれを信じてくれる人間はどれ位いるだろうか。

拡散された写真を見ながらため息がでる。

9割はそう思うよね。

だっただって、いくら何でもあの格好で一緒にいるっていったら、どつかのコンビニで偶然バッタリと会ってそのまま荷物持ちになってもらったって言い訳すら通じる位  
T H E ・ 部屋着なんですからねせんばい。



現に、『先輩を荷物持ちに使うなんて一色さんすごい』とか言っている奴いるし。皆が言う事も分かります。

私もあのデートを評価するならば、マイナスの点数を付けていたところですよ。

何度見てもどう見ても変わらないトップスがジャージにパンツがスウェットの超ラフスタイルファッション。

あれはお家でのみ許される格好ですよ。

よくその格好で外出られましたね？

田舎のヤンキーですか？

その姿で駅前に立たれていたとき、すごく残念な気持ちになりました。

苦言の百や二百言ったり、荷物持ちやらせない又何着ていくか苦悩に苦悩を重ねた私が報われません。

ましてや、苦悩して決めてきた私の服装にたいして、一切何も言っただけとか：

今まで一緒に遊んだ男子の中では初めてです。

女性慣れしていなさそうな人だとは思ってはいましたが、実際お母さん以外の女性と一緒に歩いた事無いのでは？と思うくらい私に対し配慮がない。

本当に妹がいるんですかね？

一応女子と一緒に行動している認識はあるみたいで、常にどこかをキョロキョロと淀

んだ瞳が忙しく動いているんですよ：変なところで意識されても困ります。

極めつけには、たまに何か考えついたのかニヤつと口角が上がったりするあたり、香ばしい気持ち悪さが漂って来ます。

正直買い物中、何度か他人のふりしたかったです。

でもでも、最後はちゃんと家まで送ってくれて誕生日プレゼントまでくれたんですよ

？

ちゃんとヒントは与えたんですがね。

ちよつと遠回し過ぎたかなって思ったんですがね：

それをしつかりと拾ってくれたんですよ？しかも最後のタイミングで出すなんて：

やっぱりせんばいはあざといですね。

：

あく：今、クズ男に貢いでいる女の気持ちに痛いほど分かる。

これはちよろい：ちよろいろはだ。

やめろ出てくるなちよろいろは。

そうだ、葉山先輩の事を考えよう。

葉山先輩は聞けば聞かほど漫画のイケメンなんだよな！。

この学校に葉山ありと言うくらい知名度だしね。

尾ひれが付いているのを考慮しても、文武両道、眉目秀麗を実現したかの人物。

うん、やっぱり葉山先輩をもっと深く知れるように努力しなきゃね。

うーん、せんぱいももう少し頑張ったら葉山先輩より少し下の顔になると思うんだけれどせんぱいはそこを頑張らなくていいや。変な虫についても困るし。

：

あゝ…今、『私だけがあなたの事を分かってあげられる』とか付き合ってもないのに彼女面するスゴイ痛い女の気持ちになつてた。イタタタタ…これはイタいろはだ…

やめろ出てくるなイタいろは。

そうだ、葉山先輩のことを考えよう。

あれ？さつきも同じ事考えていたデジャブ？

ポンツとメツセージアプリの着信音が鳴り、携帯を手取る。

さて、どこの男子が私を誘いに来たのかなと覗いてみると、由比ヶ浜先輩と仲良く昼食を取っているせんぱいの写真がアップされていた。

ふーん、やっぱり由比ヶ浜先輩と仲良しなんだ。

つてかせんぱい？入学してすぐに可愛い女子と知り合うって面食いなのか？あー胸も大きい方がいいの？ちよつと高望みしすぎじゃないですか？可愛い女子一人で我慢してもらっても良いですか？もちろんせんぱいは年下好きですよね？

あれ？何だろう、この胸の内を駆け巡るどす黒い感情は。

これはやばい、やばいろはだ。

やめろ出てくるなやばいろは。

そうだ、あれを思い出そう。

せんぱいのしでかしたミラクル。

『その、なんだ？葉山先輩に振られたらまあな…その…なんだ…付き合っつてやつから』

うんうん、これこれ。完全に告白。

最初のデートで告白なんてせんぱいもなかなかやりますね。

まあ本心からじゃないの分かってますけれど、ちよつとときめきましたよ。

…よし、だいぶ落ち着けた。

それにしても、冷静になって考えて見ればこの写真って結局誰が撮っているのだろう。

明らかな隠し撮りを2度目…

ちよつとしつこく感じられ、私の不快感はこの投稿した人物に移り変わった。

## #6—2

曇天の雲は雨が降るか降らないかの拮抗状態を維持しつつどんよりと辺りを薄暗くさせる。

流石に外で食べれないと判断した俺たちは、教室棟と特別棟を結ぶ渡り廊下の休憩スペースを利用する事にした。

室内なので雨が降ろうが安心だ。

ただ人目につくのが難点な所だがな。

「隼人君？うん、知ってるよ。同じクラスだし」

どうやら一色の言っていたことは本当みたいだ。

由比ヶ浜も葉山先輩と同じグループに所属している。

となると、もう少し情報を引き出すことも可能か。

「そうか、葉山先輩ってなんか部活しているのか？」

「確かサッカー部！あと戸部っちも！あれ？もしかしてヒツキー、隼人君に憧れていたりする？？」

んなわけねえだろ。

その戸部つちつて言うのは滅茶苦茶いらねー情報だな。

「いや違う…ちよつと色々と1年でも話題になつてな」

「あく、やつぱり1年にも話題になつちやう感じ？隼人君スゴイ人気だし」

「んで、俺が年上だからつて葉山先輩となんか絡みないとか？聞かれるわけだ」

一色とか一色とかな。一色しか聞いてこねえがな。

「なんかヒツキー皆のお兄ちゃんつて感じだね」

なんで俺クラスの代表みたいな言われ方されているんだが…

由比ヶ浜の中で俺は一体どんな設定になつてんだ？

「いや、お兄ちゃんつて呼んでくれるのは妹だけで十分だ…」

「確か小町ちゃんだよね…」

あれ？なんで知つてんの？

「ん？小町を知つてるのか？」

「うん、ヒツキーが入院している時、あたし1度小町ちゃんに会つてるんだ」

「なん…だと…」

あー、俺が寝ている時ね。

見舞いに来たとか小町言えばいいのに。

「まあ見舞いとか来てくれてありがとな」

「そんな事ないよ」

「つで話を戻すが、サッカー部って事はやっぱマネージャーとかわんさかいるんか？」  
「わんさかいるんだらうな」。

考える事は皆同じなんだよ。

憧れの人にどれだけ身近にいられるかって言われたらそりや部活だからなあ

「そうそう、入部希望の女子が多すぎて、マネージャーは入部規制しているって隼人君  
言っていたよ」

おーっ……入部規制って何だよ。初めて聞いたぞ。

想像を絶する人気っぷりだな葉山人気。

作戦が既に瓦解してんぜ……仕方ねえ、もう少し押ししてみるか。

「由比ヶ浜、ちよつとお願いがあるんだが、葉山先輩と会わせてもらっても良いか？」

「えっ？なんで？」

まあそうなるな。

とりあえず体の良い返しを口にすることにした。

「実はサッカーに興味がある女子がサッカー部に入りたいと言ってきててな、入部規制  
されているならなおのこと葉山先輩に話を通さないと入れないと思つてな」

「うーん、まあ一応連絡するだけはしてみろけどー。期待しないでね？」

よし、まあダメだった場合はダメだった場合で諦めよう！そうしよう。

「おう」

そうして焼きそばパンを頬張ろうとした矢先、廊下側で声が出た。

「あれ、ユイじゃん」

由比ヶ浜の肩が少々揺れた。

慌てた様子ですぐに視線を彼女の元に向ける

「優美子っ！やつ、やつはろー！」

俺も後を追うように視線をその優美子先輩へ向けた。

その女帝と思える佇まいに息をのんだ。

一瞬でその場の雰囲気緊張感に支配された。

「へえ、どこ行つたのかと思つたら1年生に手を付けるなんてやるじゃん」

「ちよつ、優美子そんなじゃないからっ！」

「まあ、どうでもいいけど、それよりもお昼一緒にどう？みんなきてっし」

「えっ、うーん……」

チラリと俺の顔を見る由比ヶ浜にコクリと頷いてみせる。

あれは逆らえねえ、なんだよ霸王色の使い手か？

「う、うん分かつた！それじゃヒッキーまたねっ！」



「ああ」

優美子先輩の後を追う由比ヶ浜を見送り、リア充も大変なんだと小学生並みの感想が出た。

\*\*\*

飯を食べて、さっさと教室に戻ったのだがどうも雰囲気殺伐としている。

と言うか俺をチラチラと見てひそひそと話しさんのほんとやめて欲しい。

というか、朝のグループチャットの画像まだ引きずってんのかこれ？ どんだけ一色大  
人気なんだよ。

「…比企谷先輩」

ひそひそ声で相模が俺を手招いていた。

どうやらこの教室の雰囲気について何か知っているらしい。

「いや、比企谷先輩流石ですね。まさか2年生の女子にまで手を出すとは思っても  
なかったですよ」

んな訳ないだろ。

「はあ？ どういうことだ？」

「これですよこれ」

そうやってまたグループチャットを見せてもらった。

すると由比ヶ浜と喋っている所をどうやら誰かに撮られていたようだ。

「おお…マジか…」

最初の写真は、一色がいたから撮られているものだと思っていた。

しかしそれは勘違いで、俺がいたから撮られたと言う事だ。

俺が何かしら女子に近づこう物なら向こうはどこからかそれを撮影し、またグループチャットにあげるだろう。

非常に動きづらいな…

「相模、とりあえず違うとだけ言っとくわ」

「一色さんに続いている可愛い先輩と知り合いとか、比企谷先輩はタラシですかね？」

「そんなんだったら今頃俺はラノベヨロシクのハーレム主人公だつつの」

「うわあ…よくそんな返し思いつきますね。引きましたよ」

なん…だと…

お前明らかにラノベ好きそうな顔してるだろ？通じないとかありかよ…

「まあ、同い年だから知り合いが多いんだよ」

とりあえず同い年という理由でごまかしてみることにした。

「まあ確かにそうですね、いくら比企谷先輩でも知り合いの一人や二人はいますよね。失礼しました」

「ほんと失礼だなお前」

ナチュラルにデイスってくるあたりそこにプロ意識を感じてしまうわ。

俺は自席に戻り今後の行動方針を決めることにした。

俺がターゲットっていうのは分かった。

下手に動けばまた噂の種にされるのは目に見えている。

と言うことは俺が何もしなきゃ特に何も動かないって事だ。

ならここ数日は何事もなく過ごしておけば諦めるもしくは相手から何かしらの行動を起こしてくる。

そう考え自分の机に突っ伏して視界をシャットアウトした。

\*\*\*

それから数日がたった。

4月も残りわずかで終わり、同時に5月の大型連休というビッグイベントの気配を感じる。

胸がピョンピョンするような嬉しい感情が日に日に高まっていた。

教室ではこれから訪れるGWの予定についての話題で占めていた。

俺の行動方針は変わらず何もしないだ。

そのおかげでグループチャットも沈黙したままでそのまま時が過ぎれば忘却曲線に基づき皆忘れていくだろう。

しかし、別の問題が発生した。

どうやらGWの訪れに浮き足立っているのか一色に囲っている男子連中がやけに一色に馴れ馴れしいスキンシップをする様になっていた。

女子連中はそれを見て遠目で笑っている。

相変わらず同性の敵が多いことで。

現状は一色もうまくかわしている様だが、これ以上激しくなるとトラブルになってきそうだな。

…とは言っても、結局は自分のブランドとキャラクターを確立させようと愛嬌を手加減なく振りまいた一色も悪い。

自分でまいた種だ、自分で解決してくれ。

そうして見ない振りを決め込んだ。

気紛らわしいにラノベでも読んでみる。

聞きたくなくても聞こえてきてしまう一色とその取り巻く男子一同の会話。

「なあ、いろはあ〜？比企谷先輩とも一緒に行ったじゃん？だから俺ともさ、放課後どつ

か遊びいかね？」

「んー、最近門限早くなっちゃったから早く帰らないといけないんだよねー。ごめん。」

訳：お前と遊ぶ時間、ねーから。って言ってそんな感じだな。

「それじゃ、休日とかどう？丁度見たい映画あつてさ」

「うーん、休日の予定埋まっちゃつてて……また今度ね？あと女の子に気安く触れちゃダメだよ？」

その今度はいつになるんでしょね。

というか、最近周りの男子に触れられることが多くなつたな。

スキンシップそんな過剰で大丈夫か？

全く内容が頭に入らないラノベを鞆にしまい、俺は机に突つ伏し、考えに更ける。

状況を整理する必要がある。

まず一色いろはからの依頼、これは葉山先輩に近づくために協力しろというものだ。

次に、俺に対しての盗撮問題。

…先にゴールを選定しておくか。

まず前者について、一色いろはと葉山先輩をつなげる事で依頼は達成される。

後者については犯人の発見。まあこれは時間がかかりそうだ。

一色いろはからの依頼を考えるに、今彼女にとつて『好ましくない』状況だ。

この状況を作り出した要因として俺と一緒に映っている写真が起因している。

グループチャットで投稿された画像が大きく一色いろはという美少女ヘアプローチできるハードルを下げている。

今回それに食いついたのがチャンスを伺っていた臆病な奴らだ。

美少女と、イケメンと…それこそ魅力的な何かを持っている人と何かをきっかけで近づきになりたい。

誰もがその願望を持っている。

しかし、現実是非情で近づきたいのだけれどもきっかけが掴めず話すことができない。

掴めたとしても一言二言で会話が終わってしまう。

踏み込みたいけれど踏み込めない臆病な自分を見て見ぬ振りをして、自分に有利なチャンスがあれば今度こそと身を潜めて伺っている。

それがチャンス伺っていた臆病な奴らだ。長いからお猿さんと訳そう。

そんなお猿さん達が何故今回この話題に食いついたのか。

皆知っている話題になっており、かつ自分達よりカーズトが下の奴が彼女と近づいたことができた前例があるのだ。

自分達にできないはずはない。

そんな思考だろう。

しかし経験が浅いせいとか、相手のことを考慮せず身勝手なコミュニケーションを繰り返している様をみると非常に滑稽だ。

さて、次に一色いろはの話だ。

彼女はそれこそカリスマを持っている。

彼女は自分が人よりも容姿が上である事と、それを生かせるキャラクターを理解している。

人間関係においても同性を切り捨て異性向けにフォーカスしている。

尖った要素で勝負している辺り、ざっくりと例えるならばベンチャー企業と言った所だ。

彼女のキャラクターの特性上、男子と分け隔て無く話すことができる。

というか男心を理解し、いかに異性に可愛く自分を見せるかということに長けている。

彼女がやっている事として、可愛い自分、守ってあげたくなるような可愛らしい自分のキャラクターを周囲に認識してもらい、こんな可愛い自分をちやほやしろと自己顕示欲を異性にぶつけているだけに過ぎない。

今まで、彼女は可愛いからカースト上位なんだろうな、という思い込みが抑止力として働いていたのだろう。

だから彼女のキャラクターが成立し、お猿さん達も社交辞令と認識する事ができた。理性を保つことができたのだろう。

しかし、その思い込みが一枚の写真で崩された。

身近になってしまったその可愛い美少女のキャラクターが自分だけに向けられていと勘違いしたお猿さん達が我先にと暴走してしまった。

そして現状が作り出された。

外面に翻弄され、言葉、表情を鵜呑みにしているお猿さん達がわんさかと群がっている。

あんな格好の男でもあの美少女と一緒に歩けるのだ、この美少女はきつと俺も受け入れてくれる。

あれで大丈夫なら俺はもっと大丈夫だろうと考えての行動だろう。

一色いろはは自分のブランド、キャラクターを壊さないようにとお猿さん達とコミュニケーションを取り計らっている。

しかし、お猿さん達は彼女の言葉を表情を外側だけ鵜呑みにし、都合良く解釈し、それを彼女に押しつける。



皆がやってるからな、誰よりも自分を見てもらいたいにも関わらず、赤信号皆で渡ればなんとやら。

：傍から見たら本当に滑稽だな。

最終的に一色いろはは自分のブランドもキャラクターも無視してでも彼らを否定しなくてはいけない。

せざるを得ない。

なぜか？興味が無いからな。目障りなだけだ。

さあ、愛情が否定された奴らは何をするか。

そいつを排除しようとするだろう。

愛情の裏側は憎しみだ。

あの手この手を使って、一色いろはの人格もブランドもキャラクターも全て壊しにかかるところ。

相手は一人でしかも女子だ。

今までの彼女の行動から他の同性からも協力は得られるだろう。

ミンナデヤレバコワクナイ。

：へタな怪談より怖い話だ。

では、この問題をどうすれば解決できるかだ。

答えは簡単だ。

崩れてしまった彼女のカーストを蘇らせて見せつけてやれば良い。

こいつはお前らが相手して良い人間でないと再認識させてやれば良い。

だが？

適任がいるじゃないか。

葉山隼人という人物が。

携帯が震え突つ伏した身体を起こし画面を見る。

—— やっはろー、ヒツキー 隼人君話聞いてくれるってさく

—— ナイスタイミングだ、由比ヶ浜。

## #6—3

放課後、厚く雲は空を隠し続けている。

最近はこんな天気が続いている。

まるで俺の心の中を映し出しているようだ。

俺の心の中についても雲がかつてるだろ。

と言うことは未来永劫晴れ渡ることはないと言い換えても過言ではない。

そうなりや農作物が多大な被害を被る。

世界的な飢饉に見舞われるかも知れない。

俺の心の中を現実に映し出したら人類が滅亡するな。

日も暮れようとしているのだろう、辺りはいつも以上に薄暗くなっていた。

気温も下がり、肌寒く身震いをしてしまう。

そんな中、俺は中庭で葉山先輩を待った。

しばらくすると、由比ヶ浜の姿が見えた。一緒に歩いている高身長で爽やか系な男子も同時に確認できた。多分あれが葉山先輩なのだろう。

「ヒッキー！ 隼人君連れてきたよー」

「おう、由比ヶ浜。ありがとう」

こう面と向かつて立ち合うと、写真で見ると見るよりもかなりイケメンだな。

めちやくちや爽やか系なイケメンで人柄も良さそうだ。

「初めまして。君かな？俺を呼んだのって」

「初めまして。葉山先輩ですよ。お時間頂いてありがとうございます。1年の比企谷です」

「ああ、そんなかしこまらなくて良いよ。結衣から聞いているが、君も俺と歳は変わらな  
いんだろ？」

由比ヶ浜？ おれの個人情報ダダ漏れすんのやめてね？ どこまで喋ったのかはわ  
かんねえけどさ。

「まあ、そう言ってもらえると助かります」

「それじゃ、用件を聞こうかな？」

「端的にサッカー部の女子マネージャーに1人勧誘してもらいたいですよ」

「勧誘してもらいたい？ 俺にか？ 入部届を出せばいい話ではないのか？」

「由比ヶ浜からはサッカー部のマネージャー枠は入部規制が敷かかっていると聞きました。なので直接葉山先輩にお願いをしに来た限りです」

「そうか…ではその子はここに？」

「いえ、今はいません」

「俺としては、人に頼つて自分は出てこないという子をマネージャーに迎えるのは遠慮したい所なのだが…別に理由があるんだろ？」

勧誘してもらいたいということについて何かしらの事情があるとすぐに察したか。

流石カースト上位。

「もつともな話です。それに併せて事情をお話しさせてもらおうと…」

俺はグループプチャットでの盗撮の件と現在一色が置かれている状況について説明した。

「…なるほど、君と一緒に動いては、いつ誰が撮影してくるか分からない。火に油を注ぎかねないという事か。だから俺が一色さんをサッカー部に勧誘させることでその男子たちから一色さんを引き剥がしたいと。つまりはそういうことだね？」

「なんか、キモいね。女の子一人にそんな群がって、相手のこと全く何も考えて無いじゃん」

由比ヶ浜が口にする言葉の節々に怒りの感情が垣間見えた。

「誰彼構わず愛嬌振りまいていた一色も悪いがな」

「わかった、状況は理解した。ただ、一応聞いておこうと思うのだけど、君ならどうする？」

「どういうことだ？　俺ならどうする…　俺が何もできないからこうやって頼み込んでるんだ。」

「俺にできることはそれをお願いするくらいです」

「そうか。いや変なことを聞いてすまない。その依頼、確かに引き受けたよ」

「ありがとうございます」

「まずは第一関門突破って奴だな。」

「不意に安堵の息が漏れた。」

「比企谷もサッカー部に入るか？　選手部員は随時募集してるぞ」

「葉山先輩は爽やかかの笑みを絶やさず部員勧誘を始めたが、俺にそんなスマイルは効かない。」

「効くのは夢見がちなTHE女子高生だろう。」

「遠慮しておきますよ。俺、球技だけ極度の運動音痴なんで。ボール蹴ると真横に飛ぶんすよ」

「苦笑交じりに答えてみた。」

「まあそんなこと無いんだけれどな。」

「そうか、残念だな」

「顔をポリポリと搔いているさまも絵になっている。」

やっぱイケメンは違うな。

「ヒツキー、その一色さんって人と結構仲いいの？　一緒にデート行ったようにも聞かえたよー？」

聞いて良いのか悪いのか、でも好奇心には勝てず恐る恐る由比ヶ浜が探りを入れてくる。

「確かに少し話す仲ではあるな。それに出かけたのは荷物持ちとしてかり出されたただけだ」

「そ、そうなんだ。ふーん」

由比ヶ浜はどうやら納得してくれたらしい。

写真を見せればさらに納得してもらえただろうがあいにく携帯に写真は入っていない。

「そうだと比企谷、連絡先交換しておこう。」

「いいですよ、はい」

そうやって俺は葉山先輩に携帯を渡す。

「比企谷…… 歳は同じだとしても先輩に丸投げするのもしかたと思うぞ？」

「葉山先輩、これは効率を重視した施策です。ほとんど連絡先を交換していない俺がやるよりも葉山先輩がやる方がかなり時間的が短縮できて互いに余計な時間さかなくて

も良いと考えます」

「結衣は既に登録されているんだな」

「う、うん。ちよつと色々とあつて…っね、ヒツキー!」

「お、おう」

もうちよつとごまかしに手を加えて欲しいよ由比ヶ浜。

「葉山先輩… 俺の数少ない連絡先見るのは勘弁頂きたいんですが…葉山先輩と違って友達少ないんでその…恥ずかしいので」

「すまんすまん、少しからかってみたい気持ちになつてな」

「まあ、先輩だから今回は何も言いませんが。次はないですよ?」

「その発言もどうかと思うぞ? もしかして俺を先輩とみてなくないか?」

「そんなわけないじゃないですかあゝ」

「それは誰の真似だ? 噂の一色さんか?」

「へえ、ヒツキーと一色さん結構仲いいんだね」

「んな訳ないだろ。あいつの口調がやけに特徴的だったただけだ」

「こんなじゃれ合いの時間も悪くないと思えたが、小雨が降り始めた事がこの時間の終わり告げた。」

「それじゃ、俺は部室に顔を出すから、皆気をつけて!」



そういつて葉山隼人は小走りでグラウンドへ向かつていった。

俺たちも中庭から室内に入り、雨から逃れることにした。

「ヒツキーはこれから帰るの?」

由比ヶ浜が俺を気にかけて話しかけてくる。

「そうだな。うちに帰るか、サイゼに寄るかで迷ってる」

「ヒツキーサイゼ好きなの?」

それ聞いちやう?

語つちやうとキモがられるから一言で言つちやうよ?

「ああ、愛していると云つても過言ではない」

「愛してるつて…ヒツキーキモいね」

おい、由比ヶ浜。

いま俺の心を抉つたのと同時にワールドワイドのサイゼファンをデイスつた自覚は

あるか?

言葉に気をつけろよ。

「サイゼ良いだろ。長居できるしドリアうめえし」

「そうだけれど、流石に愛してるまではいかないなあ、皆で駄弁ろーつて時とかに使う程度だし」

リア充さん達は遊ぶ場所がたくさんあつて羨ましいですわねー。

しかし世の中にはたった1つの愛を育むと言うのが一般的に重要視されてんじゃん？

それを考えると俺のこのサイズ愛も純愛の1つなんじゃないか？

サイズの中心でドリアを叫ぶ。

ただの注文じゃねーか。

叫んだら迷惑行為だからな！

SNS拡散からの出禁まであるぞ。

涙なしでは語れねえ名作だな。

「世の中数多の選択肢が存在すんだろ？俺は其中でサイズを見つけたんだ。サイズを愛してるんだ。他は見向きもしねえよ」

「んんっ？なんかカッコいいこといつてる風だけれどちよつと違うくない??」

「おつと、流石に一緒にいるとまた写真撮られかねない。俺そろそろ行くわ」

「うんっ、またねヒツキー」

そう言つて由比ヶ浜と別れ俺は下駄箱へと向かった。

\*\*\*

翌日、教室は相変わらず騒がしい。

それは放課後になろうとも変わらず、GWというイベントをどう過ごすかと言う話題で教室に残り雑談をしているクラスメイトが大勢いた。

最高のベストコンディションじゃないか。

俺はと言うと、携帯をいじりながらその様子を観察していた。

さて、あとは葉山先輩が一色を勧誘しにすれば完璧だな。

一色とはいろいろとあったがこれで終わりだな。

最後に俺が出来ることはこの依頼を見届けるだけだ。

そう思いながら葉山先輩が来るのを心待ちにしていた。

「一色さん、あのさあ」

やけに通る声が教室内に響く。

一色の机の前にいる髪型で誤魔化した雰囲気イケメン系男子が一色に向けて発された疑問の言葉は、放課後暇を持て余した生徒共々には非常に面白そうなエンターテインメントを提供してくれる魅惑なワードだったに違いないだろう。

「GWさ、一緒に遊び行かない？」

このご時世、メールとかチャットで誘うんじやなくて直接会って口頭で誘うとかなかなか勇氣ある行動だと思うぜ。感心感心

「あー、GWなんですがちよつと予定が詰まっています」

でも可愛い女の子は予定が詰まっているのが世の常だ。

しかもそれが予定と言う名で包まれた暇な時間と言う事まで知っているぜ。遠回しにお前と過ごすんだったら一人でいた方がましと言われているのだ。

ソースは俺。

「それってまたあの人とかかな？」

そう言うって何故か彼と俺の目が合った。即行でそらしたけど。

えっ好きになっちゃった？

「まあそれもあります」

えっ?! あるの? 何も予定聞かれてないんですけれど。

「まじか。あの人と一緒に大丈夫？」

「大丈夫って何ですか？」

「だってあの人ダブっているし、それにたまに本読みながらニヤッとしている所とか怪しいじゃん」

なん…だと…まさか教室でもニヤついていたのか…誰も言わねえから気づかねえよ。言ってくれる友達いねえしな。

次から無個性彼女系の小説学校で読むのやめよ。

「あー、大丈夫です。怪しいだけで特に無害なので」

一色ちゃん？それフォローしてる？

「うーん、それでも俺心配かな。どうかな俺も一緒に」

「別に心配される必要は無いですよ。偶然にもせんぱいとは何度か話しましたし」

「へえ、もしかして比企谷先輩の事…気になるとか？」

「そんなわけ無いじゃないですか。そう思われている事自体心外ですよ」

ちよつと、俺同じ空間にいるんですけれど…

あと、一色？ちよくちよくこつちに視線送んのやめてね。

「そうなんだ。ならば、彼との予定はやめて俺と遊ばないか？」

「それはなんでですかね？」

「彼よりも俺の方が一色さん楽しませられるっていう自信かな？」

「へえ、そうなんですな」

「だから…」

「ごめんなさい、お断りします」

彼が言葉を全て発言しきる前に一色は曖昧な表現を使わず。

ハッキリときっぱりと断りの言葉を口にした。

その言葉は教室中に響き渡り、聞き耳を立てていた周囲すらも言葉を忘れ一瞬の静寂が教室を支配する。

「えっ、な、なんで?」

彼もここまでハッキリと拒絶の言葉を口にされ焦りの表情が拭えないらしい。

「だって、そういう人に限って大体とりあえず女の子が喜ぶようなお店選んで、とりあえず当たり障りない話題を話して、とりあえず買物してって…何でしょう当たり障りないテンプレですかね?そこに私も当てはめようとしている感じがしてるんで」

「それが普通なんじゃないかな?だって俺ら高校生だし」

こいつの言う事も間違っちゃいない。

だが、一色の言っている事も分からなくもない。

一色は自分のその容姿から中学の頃から誘われることが多かったんだろう。

誘われてホイホイ行って行ったは良いが大体同じ場所、似たような会話、同じ場所で購入のもの。

頻繁に誘われる側のみが知ることのできるエンドレスなんちゃらって奴ですかね。

となると一色はそうなる奴をパターン化する必要があったわけだ。

そういう奴の傾向を読み解いて事前に回避する。

一言二言の遠回しで察してくれると嬉しいが、それでも踏み込んでこようとすると奴はハツキリと断つてやった方が効果的だと言う事か。

なるほど。

えー、人誘うのにも受けるのにもなんでここまで考えないといけないわけ？

こええよ。やっぱりポツチは最高だな。何も考えなくて良い。

「そうだね。それが普通だね。でも私は普通じゃ満足しない。だから断つています」  
「なんだよ…それっ！」

彼は怒り任せ、机に手を叩きつけた。

凶暴な音は教室中響き渡り、静寂を与えた。

周りの全ての人の動作を停止させ、その光景に注目させた。

その脅迫にも近い行動に流石の一色も怯んでしまった。

流石に見えていて気分が良い物ではないな。

しかしただの傍観者の俺に何ができると言うのだ。

何もできやしないさ。

できることと言えば葉山先輩早く来てと思うことくらいだ。

つぶと葉山先輩の言葉を思い出す

『君ならどうする?』

どうする、か…傍観者の俺になにができる。

葉山先輩はいつ来るか分からない。

来るまでに俺にできることはなんだ。

周りはエンターテインメントとしてしか状況を見ていない。

そうなると俺が行動するしかない。

くそつ、時間が無い…俺ができる最善の策…

あーもう思いつかねえ!!これしかねえつ!!

意を決し席から立ち上がり、言葉を発した。

「おい、いい加減…」

「うるせえ!」

俺の言葉は怒声にかき消され、緊迫感のみが教室を支配する。

「…スポーツも飽きたしマツ缶に戻るか」

俺は何事もなかったかのように席に着席してラノベを開く。

おお…なんちゆう迫力だよ。

本当にお前年下なの?全然そう思えねえよ。

彼は怒り任せでまくし立てるような事はせず、1度深く息を吐いて会話を再開させ



た。

さっきの怒声で彼の怒りは分散されたらう。

人は叫ぶことにより、過度なストレスから解放されるのだ。

狙ってやったわけではない。

偶然が生んだ産物だった。

「なに、一色の同中の奴らから聞いたけれどいつも男とつかえひつかえしてんじゃないの？」

「そんなわけ無いじゃないですか。私だって選ぶ権利はあります」

「どうやら一色も立て直しているようだしどうにかなつた感はある。

俺頑張った。

「てことは高校になって、あれと出会ったから変わった系か？」

「そう言つて先ほど怒鳴つた相手に彼は視線を向ける。

「だから、せんぱいとは本当に何も無くて」

「知つてるぜ。入学当初から仲が良かったじゃん？駐輪場で待ち合わせしたりな」

まさかそこまで見られているとはなあ。

人の目つてどこにあるか分かつたもんじゃないな。

「それは、相談があつたから」

「なんだよ相談って」

「それはこれから起こる事だ」

俺はその会話に無理矢理横やりを入れる。

どうやらこの茶番劇のお時間はようやく終わりを迎えるようだ。

彼は舌打ちをしながら俺に振り向くが、聞こえて来た声ですぐに教室の出入り口に振り向き直した。

「一色さんはいるかい？」

その声の持ち主こそ皆の葉山隼人だ。

よおヒーロー、登場が遅えよ。

\*\*\*

一色は喜々として葉山先輩の元に向かつて行き、そのまま2人で廊下へと出て行ってしまった。

事態が収拾したと認知した周りにはそれぞれの友人達と感想を述べなが教室を後にしていった。

残された俺もさっさと帰宅の準備を整えていた。

「知っていたのか？」

「そうだな。依頼は葉山先輩とのつながりを作る事。それで俺は使われていたってことだ」

「そうか…」

これで思い知っただろう。

自分が相手になっていたのは雲の上にも近い存在だ。

多分こいつ以外にも狙っていた奴らはいただろうが、あの葉山先輩が誘うのだ二の足踏むに違いない。

放心状態の彼を背に俺は教室を出る。

これで一色いろはの依頼は完了だ。

今日はご褒美に行きたかったラーメン屋にでも行ってみるのもありかもしれないな。

そうして俺は、ラーメンに思いを馳せ、足取り軽く下駄箱に向かうのだった。

## #6 | 3 | view iroha

最近は教室がやけに賑わっている。

多分GWが近いからだと思う。

そのGWの予定を埋める相手として私はよく誘われる。

毎年の事なのだが今年は全て断っていたりする。

その理由は初対面の人から2人きりで遊びに行こうと誘われるのが今年是非常に多いからだ。

私とせんぱいと一緒に遊びに行った写真が出回った辺りからそういう人たちが増えていった気がします。

誘い文句をよく聞いてみると、せんぱいが私を誘えるなら自分もワンチャンあるのではと言うような根拠のない理由でした。

せんぱいは誘っていないです。

私が誘ったのです。

そこをはき違えないで頂ければと思いました。

あといきなり肩触られるとか頭撫でられるとか正直キモいんですが、体裁を取るため

に一旦我慢しています。正直ストレスがたまりますね。

まあ、担任に相談するという事も手段の一つではありますが、そんな事したら学校内での私の立ち位置が危うくなってしまいますので、それは最終手段であり、まだそこまでの領域に踏み込んでいる訳ではありません。

そんな事を考えているとまた、私の席にちよつと緊張した面持ちの男子がやってきた。

「またGWのお誘いでしょうね。

「一色さん、GWさ」

もう聞き飽きました。

「ごめんなさい、GWはもう予定埋まって…」

相手に本当に申し訳なさそうにみえるこの表情は手慣れたものだ。

これで断ればヘタに踏み込まれずに済むので非常に有用だ。

「そ、そうなんだ…わかった…」

そう言つて寂しそうに去つて行く名も知らぬ男子を見ながら私は思う。

今現在、私の手帳のGWの予定は真つ白だ。

私はこれからこの予定を埋める予定なのだ。

とりあえずせんぱいの予定を聞き出し、そのまま言質を取らなければなりません。

あの人絶対GWは暇ですよね。

暇じゃなければ逆に何の予定が入っているか詳細に伺う必要があります。事と次第によっては同伴も覚悟してもらいます。

なので、私のGWの予定は現在埋まっています。

嘘はついてないよ。

…それにしても、せんぱい？

私は教室の端にある先輩の席を一瞬だけ視界に入れる

放課後であるにもかかわらず、なんで席から立とうとしないんですか？

せんぱい今日日直でもないですし、何ですか誰か待つてるんですか？

私を待っているとか？

凄く嬉しいですが教室で待たれると他の人の目があるのでちよつと恥ずかしいです。

駐輪場で待つてて下さいってメールしようかしら。

そんなこんな考えていたらまた1人GWの予定を埋めに男子がやってきた。

「一色さん、あのさあ」

彼の口調からやけに自信が漏れ出ている。

あー、これは対応間違えると面倒くさい勘違い系男子だ。

私の直感がそう判断した。

「GWさ、一緒に遊び行かない？」

私、あなたと喋った記憶が全くないのですけれど。

それよりも名前なんでしたっけ？

まずは敬語抜きで喋れる仲になる事から始めなきやダメなんじゃないでしょうか？

そんな状態でいきなり遊びに行かないって、色々とすつ飛ばしすぎています。

まず順序を守りましょうかって話です。

「あー、GWなんですがちよつと予定が詰まっています」

「それってまたあの人とかかな？」

彼はせんぱいの方を見てそう言った。

「まあそれもあります」

反射的にそう答えてしまった。

一瞬ヤバつと思つてせんぱいの方に視線を向けたら、そんな話聞いてねえつて顔していた。

せんぱい？お行儀が悪いですよ。聞き耳立てちやダメですよ。

「まじか。あの人と一緒に大丈夫？」

大丈夫？ うん大丈夫ですよ。

だってせんぱい私のおうちまで知っていますし。

ちゃんと送ってくれますしね。

「大丈夫って何ですか？」

「だってあの人ダブっているし、それにたまに本読みながらニヤつてしている所とか怪しいじゃん」

あーなるほど。

確かに私も1度勘違いしましたね。

ダブってるからって不良とかそんなイメージ。

でも話してみると博識だったりするから不良とかではないんですよ。

学校ちゃんと来てるし。

何かしらの理由はあるんだと思うけれどちよつと聞きづらいんですよ。

あと、せんぱいが読んでいる本って、確かライトノベルって奴ですよ。

たしかせんぱいが前に力説していたのを思い出しました。

人目にせずには笑えるって事は面白いのかな？

今度貸して下さいと言ってみよう。

…っあ、そうだった、彼の返答忘れてた。

「あー、大丈夫です。怪しいだけで特に無害なので」

「うーん、それでも俺心配かな。どうかな俺も一緒に」



別に心配される必要が無いんですが…

一緒についてせんぱい逃げちやうじやないですかやめて下さい。

「別に心配される必要は無いですよ。偶然にもせんぱいとは何度か話しましたし」

「へえ、もしかして比企谷先輩の事…気になるとか？」

悪いですか？

「そんなわけ無いじゃないですか。そう思われている事自体心外ですよ」

でも恥ずかしいのでこの場は濁させてもらいます。

せんぱいの反応が気になります、今どんな反応してます？

チラチラとせんぱいの様子をうかがって見てみましたが半目でした。

せんぱい？言葉の裏を読んで下さいね。

「そうなんだ。ならさ、彼との予定はやめて俺と遊ばないか？」

この人は何を言っているんですかね？

「それはなんでですか？」

「彼よりも俺の方が一色さん楽しませられるっていう自信かな？」

自信過剰も甚だしい。

私とあなたは実質初めましてです。

それなのにあふれ出るその根拠のない自信は何でしょうか？

「へえ、そうなんですね」

「だから…」

とりあえずこう言った早とちりで勘違いな人には何の飾り気もない率直な断りを入れた方が伝わりやすい。

「ごめんなさい、お断りします」

「えっ、な、なんで？」

うん、やつぱりこうかばつぐんだ。

「だって、そういう人に限って大体とりあえず女の子が喜ぶようなお店選んで、とりあえず当たり障りない話題を話して、とりあえず買物して…何でしょう当たり障りないテンプレですかね？そこに私も当てはめようとしている感じがしてるんで」

「それが普通なんじゃないかな？だって俺ら高校生だし」

私、可愛いんですよ。

そんなよそこの女子と一緒にしてもらっては困るわけで、誰よりも男子の誘いを受けていて遊びに行っているわけですよ。

もう単なるテンプレじゃ満足できないんですよ。

それがわからないなら普通の女の子誘つとけつて話なんですよ。

「そうだね。それが普通だね。でも私は普通じゃ満足しない。だから断っています」

「どうやら今の言葉が彼のプライドに傷を付けてしまったらしい。なんだよ……それっ！」

いきなりのことでもかなり驚きました。

彼は机を思いつき叩きました。

それは初めて男子から向けられた怒りの表現で、怖いつて気持ちが全身を駆け巡った。

ちよつと泣きそうになりました。

そんな中、ヘタレで不格好ではありますが、言葉で立ち向かおうとする人が居ました。案の定せんぱいです。

「おい、いい加減」

なんだろう、今までの怖いつて気持ちが消えていきました。

私にはせんぱいが味方してくれる。

「うるせえっ！」

うるさいのはどっちですか。

せんぱいに対する口の利き方がなっていないですね。

私も怒りますよ。

なんで私がこんな人に怖がらなくてはならないのだ。

むしろ立場が危うくなっているのは相手の方じゃないか。

「なに、一色の同中の奴らから聞いたけれどいつも男とつかえひつかえしてんじやないの？」

もう大丈夫。怖くない。

「そんなわけ無いじゃないですか。私だって選ぶ権利はあります」

誰が言ったかは分からないですが昔の話を掘り返してまで言う事ですかね？

私だって選ぶ権利はありますよ。

何もせずに待ちぼうけするよりも、選びに行く行動力はありますよ。

他の女子と一緒にしないで下さい。

それが嫌いなんですよ。

「てことは高校になって、あれと出会ったから変わった系か？」

中学生の時点で出会ってますし、そこまであなたに語る必要はないです。

あなたの目的自体もうお断りしていますし、もうここからは蛇足ですね。

適当に受け流させてもらいますね。

「だから、せんぱいとは本当に何も無くて」

「知ってるぜ。入学当初から仲が良かったじゃん？駐輪場で待ち合わせしたりな」

本当に人の目ってどこにあるか分からないですね。

あの時はあの手この手でせんばいを誘っていた時期じゃないですか。それにしても本当に諦めの悪い方ですね。

ベクトルさえ間違えなければ良い人なんですよけど。

「それは、相談があつたので」

「なんだよ相談って」

適当にでつちあげようかな。

葉山先輩狙つてますーとか宣言したくないし。

「…それはこれから起こる事だ」

急にせんばいからよく分からない横やりが入つた。

私も何のことか分からなかつたが

「一色さんはいるかな?」

この声、この言葉を聞いて理解した。

葉山先輩だ。

せんばいはこれから起こる事と言つた。

つまりは葉山先輩が来ることは予定調和だつた。

ああ…

ほんつつとおくにあの人、なんなんですか。

私を打算のとよく言えますね。

ここまであざとく事を運んでくるのはちよつと…かなりぐつときますね。

まさかこの状況になる事を先読みしてたんですか？

こんな手を打ってくるなんて思ってもみなかつたですよ。

えっ？これ私のためだけに仕組まれた事ですよね？

…せんぱいの事だからこれを他の女の子にもやりかねないですね。

そうなるよりはりせんぱいを保護する必要があります…

その作戦会議の為、いまは戦略的撤退をさせてもらいます。

また戻ってくるので覚悟しておいて下さいね！

せんぱい。

えへへえ。にやけが収まらない

\*\*\*

私は葉山先輩に連れられ特別棟の渡り廊下にある休憩スペースにたどり着いた。

そこで葉山先輩は自動販売機で飲み物を奢ってくれました。

「すまない。時間を取らせてしまった」

「いえいえ、むしろご指名頂いて感謝感激です」

まさかこうして葉山先輩とお話し出来る日が来るなんて思ってもいなかったです。

「そう言ってもらえると助かる。早速本題なんだが一色さん、サッカーに興味は無いかな？」

「凄く興味あります！」

いやあ、そこまで興味があるわけでもないですけど、あの葉山先輩からのお誘いで少し断るわけにはいかないじゃないですかあ。

「そうか。ならサッカー部のマネージャーなんてやってみない？」

「ええっ?! 良いんですか? なんか入部規制を敷かれていた位競争率高いつて聞きましたよ?。」

せんぱいには話はしませんが、サッカー部は葉山先輩人気のせいもあって、マネージャー枠に入部規制が敷かれているのは知っていたんですよね。

元々せんぱいと約束を取り付ける口実ただだったんですが、まさか入部の約束を取り付けるなんて…

実はとんでもなく優秀だったりしますあの人?

「ああ、彼が勧めるんだ。是非とも入部して欲しい」

葉山先輩も認めちゃってるし。

「え?…せんぱいがですか?」

「そうだ。仕事はできるからこき使って欲しいとのことだよ」

あー…なるほど。

仕事しないマネージャーしかいなかったから仕事出来る人を持つてきたから使つてくれ的な感じで交渉が進んだのがよくわかりました。

ドナドナですね。

「な、なるほど」

「つと言うわけで、この入部届を書いてもらつて、正式にマネージャーになつてもらおうかな」

まあ、葉山先輩とお近づきになれたことだし、このくらいは目をつむつてしつかりとマネージャーを全うしますか。

ここままでしてくれたせんぱいの顔に泥塗る訳にもいきませんしね。

「はい、わかりました」

「練習はGW中にもあるんだけど、これそうかな?」

なっ!?

ちよつとそれは聞いてない。

しかし、お願いしているのが葉山先輩だ…クソ、これは断れない…

せんぱい?恨みますからね!!



「だ…大丈夫です…」

こうしてせんぱいと過ごすはずだったGWは、どうやらサッカー部員のお世話へと様変わりしてしまふみたいです。

今年のGWはとて休めそうになさそうです。

## #7

雨の日の平日は嫌いだ。

雑踏する駅に行かなくちやならんし、電車車内も混雑していて疲れる。

学校でも外で食べる選択肢がなくなり、教室で食うしかないのだ。

前の件もあり、俺にもちよくちよくと周りから目を向けられちよつと居づらいのだ。

まあそんなこんな今日一日をどうにかやりすごし、ようやく愛し我が家の玄関前だ。

駅前でサイゼに入るかどうか迷ったが、小町が早く帰ってくることを懸念し、苦渋の

決断だが寄らないことにしたのは内緒の話だ。

玄関の扉を開いた瞬間に、室内の暖かな温度が外の肌寒い冷気と入れ替わると同時

に、我が家に染みついた生活臭が俺に向かって流れ込んでくる。

この瞬間、やっと帰ってきたんだなとほつと安堵の息が漏れる。

「ただいまー」

「なあ〜」

玄関前で待ち構えていたカマクラが返事してくれた。

なにげに珍しいので少し嬉しい。

しかし、どうやらカマクラが想像していた人物とは違ったらしく、すぐさま興味が失せたかのようにどこかに行ってしまった。

小町じゃなくて悪かったな。

その対応、八幡的にポイント低いぞカマクラ。

どうやら小町はまだ帰ってきていないようだ。

一旦自室で着替え、リビングに向かった。

とりあえず冷蔵庫を開けて麦茶をとりだす。

なんか冷蔵庫って何の用もないのに開けたくなるよね。

何の用もないのに話しかけたい恋人のようだ。

恋人は冷蔵庫か：大人になればその意味分かるって隣のオシヤレなお姉さんが言っていたな。

冷蔵庫の中身は酒とつまみしか入ってなさそうなイメージなんだが。

もしかしてどうにもならない世の中を酒とつまみで現実逃避することを意味してたりする？

世知辛え：

つてかそもそも隣にはムツキムキのマツチヨのお兄さんが住んでたわ。

隣に可愛いくて俺にだけ優しくしてくれる幼馴染みがいる世界で俺は生まれたかつ

た。

お姉さん全く関係ねえじゃん。

そんなくだらない事を考えながらコップに麦茶を注ぐ。

コップに麦茶が満たされる音のみが耳に入る唯一の音だった。

満たされた後の何一つ音の発さない静まった空間は孤独を連想させられる。

身体を動かした時にかすかに聞こえる衣擦れの音が俺を我に返してくれた。

紛らわすかのようにわざと喉を鳴らしながら麦茶を飲み干す。

こんな静けさの中、一匹で何時間も放置されたら流石のカマクラも鳴きたくなるわな。

そんな事を考えてさっさとこの静けさとおさらばしようとしてテレビを点け、ソファアームを下ろした。

ちやうど可愛らしい女の子がメタモルフオーゼして悪を倒すアニメが映し出されていた。

女の子らしくステッキとか使って可愛らしく魔法で悪を退治する…なんて甘っちょろい奴ではなく魔法という名の格闘術を用いて悪をボッコボコにする奴だ。

マジカル☆ファイト。

何でも頭にマジカル付けりゃ良いって風習やめねえか？

この可愛らしい文字列をよくよく見てみると本気狩りの文字が隠れてるんだぞ？  
どう考えても健全な女の子発言して良い単語じゃねーよ。

猟奇的としか言いようがない。

…おっと、熱くなっちゃった。

すこし、頭冷やそつか。

まあそれでも俺はこのアニメは好きだ。

何が良かったって分かるか？

殴っても殴られてもどちらも痛いんだ。

どちらも傷つくんだ。

だからこそ、ひとつひとつの戦闘において主人公と悪は互いの想いをぶつけ合い、自分の正義を示し、拳を突き合うのだ。

もちろん子供向けアニメ上、約束されし勝利の主人公の法則は破られないが、悪はきつと最後まで我が覇道に向かった事に対し悔いる事は無いだろう。

我が生涯に一片の悔い無しってな。

…あれ？悪死んでね？

結局現世では許されないのね。現代社会の闇を感じるぜ。

その覇道、ゴツホのように死後に評価されるに違いない。

それでも聞だかな：

そんな事を考えながらアニメを鑑賞していたら玄関から鍵が開く音がした。

どうやら小町が帰ってきたようだ。

少ししてから扉が開く音がし、それと同時にドタドタとカマクラが玄関に向かって駆けていく振動が床から伝わってきた。どうやらお目当ての小町ちゃんが帰ってきた事を察知したようだ。

「ただいま」

いつもの聞き慣れた声が聞こえてくる。

「おう、おかえり」

少し声を張りその声の返答を口にする。

若干大きすぎで少し恥ずかしかった。

リビングの扉が開かれて制服姿の妹が姿を現す。

若干雨に濡れた制服姿が目映る。

「タオル。用意するか？」

「んーん、大丈夫」

「そうか」

とりあえず俺の姿を見てふうつと嘆息して、そのまま自室へと戻っていった。

カマクラは小町の後ろをそのままついて行つた。

どんだけ従順なんだよカマクラア：

寒そうな小町の姿をみて何か温かい物でも出してやろうと考えた。

お袋が会社仲間にもらつたという紅茶がある事を思い出し、戸棚を探す。

「おつ、あつたあつた」

戸棚にしまわれていた缶にはマルコポーロと記されていた。

缶を開けると上品でかつ芳醇な甘い香りが漂つてきた。

「お、これ、結構お高い奴じゃね？まあいいか」

電子ケトルを起動させた後、ティーパックに茶葉を適量詰め込んだ。

\*\*\*

丁度紅茶をマグカップに入れ終わったタイミングでリビングにカマクラを抱いた小町が姿を現す。

「どうやら部屋着に着替えたようだ。」

「小町、紅茶はどうだ？あつたかいぞー？」

「うんっ！いる〜！」

そうやって小町が嬉しそうに返事をする。

マグカップを受け取りながら小町は別の質問も投げかけてきた。

「おにいちゃん、お風呂入る？」

「あゝ、はいるはいる」

「うん、それじゃ誰がお風呂掃除するかゲームで決めよつか！」

うん？小町ちゃん？今日はおめえが掃除当番でしょ？

なにゲームで掃除当番決めようなんてずる賢い真似しようとしているのかな？

「小町、お前が今日掃除当番だろーが」

「だって、今日カー君いつも以上に甘えてくるんだから仕方ないでしょー」

それに合わせたように小町に抱かれたカマクラが『なあゝ』と鳴く。

んだよそれ。俺のお家ヒエラルキーはネコ以下かよ。

「しゃーねえな。んじゃ適当なゲーム点けるぞ」

そうやってテレビ台に設置しているゲーム機の電源を点けてコントローラーを手に取る。

ソファアに腰掛けた小町にコントローラーを1台渡しその隣に俺も腰掛けた。

「おにいちゃん、レース弱いのに大丈夫なの？」

「これでも練習したんだぞ。いつもの俺と思うなよ」



「へえ、ならその腕前みせてもらおうかなあ？3回勝負で！」

その後、兄妹揃ってゲームに没頭した。

成績は互いに1勝、次で決まる訳だ。

そして最終レース開始のカウントダウンが始まった。

ふと思いついた事を口にしてみた。

「なあ小町。そういえば聞きたい事があつたんだが」

「なにおにいちちゃんが珍しい」

「お前、由比ヶ浜と会ってたんだったな」

カウントが0になりレースが始まる。

しかし小町のキャラクターの様子がおかしい…

動いていないのだ。

「小町？どうした？コントローラーの充電でも切れたか？」

ふと小町に視線を向けると、俺に向けて開いた口と何かに怯えているような表情の小町が目映った。

俺は何かとんでもなくまずい事を口にしたのだと自覚した。

「おにいちちゃんは…由比ヶ浜さんと会ったの？」

小町の震えた声に反応し、膝の上で丸まっていたカマクラが小町の膝の上から離れ

た。

何か空気みたいな物を感じ取ったのだろうか。

「ああ、入学初日に会ってる」

少しの間があつた……とても緊迫しており、一瞬の間だと思つたがそれが幾時経つたかのような感覚に取り憑かれた。

「おにいちゃんはさ……由比ヶ浜さんを許せるの？」

それは事故のことなんだろう。

そういえば、事故の事を小町は一切話題にしなかつたな。

「俺は許した。というか俺が正義感振り翳して車に飛び出さなければこの事故は起きなかつたはずだろ」

「うん。おにいちゃんはそう思うよね」

小町の声ははまだ震えている。目尻には薄らと涙すら見えている。

こんな小町を見るのは初めてだ。

どうやら俺が思つた以上に俺の容体を心配していたのが表情を見ていて分かる。

ここで何か気の利く言葉をかけてやればと俺は自分の無知を悔やんだ。

「でもさ、小町はまだそうは思えないんだ。お家には誰も居ないし、病院に行つてもさ……ベッドで、色んな機械に繋がれて声をかけても反応しないおにいちゃんを見てたんだ、

見続けてたんだよ？最悪ずつとこのままって言われて凄く悲しかった…小町達が何を  
したのってそんな考えがずつとぐるぐるするときにつ、さつ…、由比ヶ浜さ  
んが来たんだよ…」

「そうか」

その後の話は小町は語らなかつたが大体読めた。

小町は由比ヶ浜に俺を寝たきりにさせた怒りをぶつけてしまったのだろう。

「おにいちゃんが由比ヶ浜さんを許したのは分かつたんだけど…けど小町はまだ時間か  
かりそうだよ。ごめんね、おにいちゃん…」

多分、自分でも制御できないくらいの事をやってしまったのだろう。

社交的である小町だからこそ、起こした行動に一番驚いているのは小町なのだ。

それなら兄として、そんな妹をあやすことすらできず何が兄妹だ。

「気にすんな、ってか小町が俺の容体そこまで心配してくれてただけでも俺は幸せ者だ」  
そう言う小町の怯えた表情が和らいできた。

少しは役に立てたようだ。

「そうだよ？小町のお迎えするのはおにいちゃんの役割なんだからねっ！」

「へいへい」

「そんなおにいちゃんが生きててくれて、一緒にお話してできるの小町凄く嬉しいよ。」

あつ、これ小町的にポイントたっかいー♪」

「本当にポイントたけーじゃねえか。しやーねえ…」

どうやら俺の知らないところで心配させちまつてたみたいだし、ここはお兄ちゃんらしい所を見せてやるか。

「今日くらいは、風呂掃除代わつてやるよ。おつ、これ八幡的にポイント高い」

「いつも小町が代わつてあげてるんだからこれくらいでポイント高いとか言っている時点でごみいちゃんだよ…ダメダメだよ」

「ちよつと小町ちゃん？俺のやる気返して」

「だから今日は小町もおにいちちゃんと一緒にお風呂掃除するねっ！」

「んじゃ二人で手分けしてやるか」

「うんっ！」

兄妹水入らずの風呂掃除。そりゃ、他人から見れば単なる掃除だろう。

でも俺たち兄妹からすれば、これはきつと欠けてしまつていた空白の時間を埋める大切な何かのはずで――

ふとそんな考えが頭をよぎつた。

部屋にかすかに漂う紅茶の淡い芳香が鼻を抜け、感情を刺激する。

嬉しそうに風呂場へと向かう小町を見ながら俺はきつと今、とても嬉しいのだろうと

そう結論づけるのであった。

## # 8

長らく続いた曇りの日々からようやく解放され、青々とした空が久し振りにその色彩を魅せる。

照りつける日光は若干肌寒さを残す。

さらに休日である事も合わさってか外に出たい気分には惑わされるだろう。

しかし、引き籠もる兄の紋章を持つこの俺はそんな雰囲気には騙されない。

「ほら、おにいちゃん、行くよー」

しかし、出たがる妹の紋章を持つ小町には負けてしまう。

2つ合わさると真なる千葉兄妹の紋章になる。

効果は未来永劫とても仲良しだ。

ちなみに上位に始まる千葉兄妹の紋章がある。

効果は因果をねじ曲げて兄妹で結婚できる。

マジで始まってやがる。

先日、小町の気持ち聞き、兄妹として仲を深めた。

久し振りに揃って外出をしようと小町から提案され、兄妹揃ってラーメンを食べに行

こうという話になった。

「さて、小町。ラーメンは何系がいいかな？」

「うーん、どうせなら冒険系がいいかな？」

ほう、我が妹ながら攻めた事を言う。

いつもはなりたけに向かうのだが、今回のような趣旨も嫌いではない。

「なるほど、ならここだっ！って所に入ってみるか」

「うんっ！」

そして俺たちは千葉のラーメン激戦区と目される場所へと足を踏み入れ、ラーメン屋の選定を行っている最中だ。

ラーメン激戦区と目される場所は一本道であり、道の両脇に数々のラーメン店が独自の店構えをし、俺の興味をそそった。

昼前で人はまだ疎らだが、人気店は既に行列ができあがっていた。

「おにいちゃん、あれなんてどう？」

小町が指を指す方に視線を向けると、焦がし醤油イカスミラーメン富山ブラックの文字が映った。

なんか全て黒なんだけれど。何この厨二病をそそる感じのラーメン。

「昔のおにいちゃんなら喜びそうだね。あれくなんて言ってたっけ？名もなき神？」

ちよつと小町ちゃん？

トッピングにお兄ちゃんの黒い歴史まで掘り返さなくても良いんだよ？

「何のことだか忘れたわ」

「まあ、小町は何の能力も無い今のおにいちやんのほうが好きだよ」

それは厨二病じゃない俺の方が大好きという事だよな？

「おい小町、それってお兄ちゃんは無能ですって遠回しに言ってる？」

「そんなこと無いよ、つで？どうするのにおにいちちゃん？」

「食べる度にお兄ちゃんの黒い歴史が掘り返されそうだから別にしよう」

押し入れにしまっている政府報告書とか神界日記とか思い出すから無理。

「はい」

そう言つて小町と俺は別のラーメン店を探すことにする。

「あつ、ここなんてどう？」

小町が小綺麗なラーメン店を見つけ看板へと足を向ける。

俺も小町に引かれて看板前へと足を運んだ。

「ほう、鶏がら醤油ベースのラーメンか…良いんじゃないか？」

しかし、小町はちよつと悩んでいる感じだった。

口にしてみたは良いもののちよつと違った感じだったのかな？



「うーん……自分で見つけてあれだけんどちよつと冒険感が足りないな」

そもそも冒険系ラーメンって定義が分からんよな。

財宝を求めて大航海を始めちゃうの？つええ奴と戦っちゃうの？

あつ、それ少年系だわ。

結局チヨイスが平凡すぎる事からこのラーメン店も見送ることにした。

「なかなか見つからないね」

「そだな」

そして再度、ラーメン店選びをしていると一際賑わいを見せている店があった。

店の前には行列ができており、店前に置かれている品書きが俺の興味がそそる。

「魚介豚骨つけ麺、天一並みのとろみスープが特徴か……」

ふむ、見るからにこつてりだな。うーむ……しかしつけ麺か、まあ嫌いでは無いが小

町の反応を見て決めてみるか。

「おく、これ結構冒険感ない？」

結構乗り気だったみたいだ。

まあたまにはつけ麺も悪くないか。

「ああ、面白いな。太麺の自家製麺か……けつこう興味出てきたぞ」

つけ麺と言う所を差し引いても興味が湧く品書きだ。

「それじゃここにしようかー」

「そだな」

小町と共に行列に並ぶことした。

そういうえば店の名前見てなかったなと思ひ、店前に堂々と掲げられている看板を見上げる。

「つげ…」

毛筆書体で『麵処一六八』と力強く堂々と書かれた看板をみて、すぐに思ひ浮かべるのがあの打算的な女の顔だ。

今は小町との兄妹水入らずの時間なのだから思ひ出させないで欲しかった。

「おや、君は…」

並んでいる俺たちの前にいる女性の人々が振り向きざまにそう言った。

美人でスタイルも良くカッコイイ人だなと俺に印象づけた。

もしかして俺達の後ろに知り合いが並んでいたのだろうか。

「確か…比企谷、だったな」

どうやら俺達に聞いている様だ。

小町の知り合いかと小町の顔を伺うが誰この人？みたいな表情を作っていた。

「すいません、どちら様ですか？」

とりあえず、こちらからも返答をと思ひ聞いてみる。

「ああ、突然すまない。私は平塚静、総武高校の生活指導をしている」  
げつ、まさか同じ高校の教師と鉢合わせるとはついてねえ。

「そうですか」

「そして君は、比企谷八幡だろ？ 君は教師の間では珍しいのな。勝手に顔と名前を覚えさせてもらっていたんだ」

「どうせ進学校のダブった生徒として珍獣扱いつて事なんですよね」

担任は俺を腫れ物のように扱うし、その他の先生も大体そんな感じだ。

事なかれ主義な教師が多いから俺に下手に関わってこようとしなから楽だったのだが。

「そうネガティブに捉えるな。小さな命を救ったその行動力は流石だと思うぞ」

この教師はどうやら他の先生とは違うようだ。

堂々と腫れ物に触ってくる。

面倒くせえな。

「そんな大層な事なんざやってないませんよ」

「ただ、自身の犠牲を顧みないというのはいささか考え物だぞ」

「休みの日に偶然遭遇した生徒にも指導とは仕事が捗りますね」

「おにいちゃん、捻くれない」

なに小町、いきなり会話に入ってくんなし。

そんな俺の思いをよそに小町は目の前に居る教師と話し始めた。

「平塚先生でしたっけ？ 兄がお世話になっていきます。比企谷小町と言います。比企谷八幡の妹です」

小町の声色が変わる。

多分よそ様向け用小町に切り替わったんだろう。

我が妹ながらその切り替わりの早さ、風の如し。

「ほう、礼儀正しい妹さんだな。最初は比企谷の彼女かと思っただが」

「そんなわけ無いじゃないですか」

やべえ俺これ結構気に入ってるかもしれない。

「……キモい」

ちよつと、小町ちゃん？

どういう意味でそのキモいの発言が出たのかな？

お兄ちゃんの発言かな？ それともお兄ちゃんの彼女と思われたこと自体かな？

どっちにしてもこうかばつぐんに心を抉ってるからね。

「そ、そうか。では兄妹で仲がよいのだな。私は一人っ子なのでわからないのだが、兄妹

はそんなものなのか？二人で腕を組んでいるのは……」

兄妹じゃ普通のことじゃないのか？小町はそう言つてたぞ。

「普通ですよ。多分」

そ、そうかと平塚先生は軽く咳をする。

「そういうえば、先生もラーメンお好きなんですか？」

「ああ、そうだな。今日は久し振りに晴れたから行きつけに来たんだ」

「おっ？行きつけと言うことは味は保証付きみたいな感じですかね」

我が妹ながら流石だ、会話を盛り立ててくれる。

俺だけだったらここで会話終了して気まずい沈黙が流れていたに違いない。

「はっはっは、こつてりが好きだったらこの店はオススメするよ」

ラーメンの話だったら少しは話に入れそうだ。

……というかこの話題は興味がある。

ちよつとだけ会話に混ぜてもらおうか。

「つけ麺つて所がちよつとあれっすけどね」

「なんだ、つけ麺は嫌いなのか？」

「嫌いというわけではないですが、段々と汁が冷えていくのがちよつと……それを避けて熱盛りになると今度は麺のひつつき具合が気になるんですよね。時間経つと麺が干

からびてしまうのもあって早く食べないとつて焦りも出てくるので味わえないと言うか」

「ああ、そういうことか。この店はな、鉄をあぶっていてな。汁が冷たくなったらその鉄を入れて熱々に戻す事が出来るんだ。なかなか面白い試みだろ」

なるほど、そういつたいに冷やさないかという仕組みを考える店は確かに好感度が高い。

是非その仕組みを使ってみたいものだ。

「ほう、それは面白い」

俺と平塚先生のラーメン談義が始まり、行列の待ち時間が本当に一瞬の様に過ぎ去っていった。この人相当なラーメン好きだろ。

どうやら席が空いたらしく、店員が俺たち3人に向けて案内の言葉をかける。

「お客様3名ですかー！」

「いや、2名で…」

俺がそう言おうとしたら小町がそれを遮った。

「3名です」

「3名様ご案内！いらっしやいませ〜！」

そう店員が元氣よく案内を言い終えたあとに

その他店員全員が『いらっしやいませ!』と元気よく口を揃えた。何この店。滅茶苦茶元気いっぱいなんだけれど。

圧倒されるわ。

3名と言う事で奥のテーブル席に案内され

平塚先生が対面に俺たち兄妹が横並びで座る。

「おにいちゃん」

先ほど迄の元気で高い声と違い、呆れた声が俺の耳に届く。

「なんだ小町、トイレか?」

視線を向けると小町は眉をひそめ、俺を見つめていた。

ちよつと小町、そんなに見つめられると恥ずかしい……なんだよ?

「ちがくて、あれだけ熱心にラーメン談義してたくせになんで2名つて言っちゃうかな?」

「小町ラーメン談義ついてこれないだろ」

ぼつちだから分かるんだが、2人だけが分かる話題を話している際、その話題に入っていない1人つて居づらいし気まずいよね。

何かを理由に離れたくなる。

その気持ちすごいわかるから気を利かせたんだが……

「えっ！もしかして小町が1人だったの!？」

「会話に入れないでただそこに居る辛さって俺、自分事のようにわかるからな。だから一人でゆつくり食べさせてあげようと配慮したんだが…」

「ちよつとごみいちゃん、変な気遣い起こして可愛い妹を1人でラーメン食べさせるなんてどうかと思うよっ！小町的にポイント低い!」

「はっはっは、君たち兄妹は面白いな」

「面白くしているつもりはないんですがね」

「兄妹仲睦まじい事は良いことだ。仲が良すぎるのもあれだな」

「ははっ、流石に兄妹で恋人とか結婚とかは創作の話ですよ」

「えっ？おにいちゃん小町と結婚しないの?」

…おや?真なる千葉兄妹の紋章のようすが…

やつべえ、キャンセルボタンどこだよ!

「ちよつ小町、人前でそういう冗談言わない」

「さっきのお返しだよ」

くつそ、内心ちよつと嬉しかった俺がいる。

「け、結婚か…」

「平塚先生もお相手いらっしやるんじゃないですか?かなり綺麗ですし」



「……ぐっ」

小町、ちよつと待て。

平塚先生の様子がおかしい。

「きつと結婚も秒読みとかっ！あつ、式には呼んで下さいね！」

「うぐう……」

この反応……ことから察するにお相手がないのだろう。

それも長い間。

「小町、やめて差し上げろ」

「えっ、やっぱり？」

えっ、知っててやってたのお前？

鬼畜の所業じゃねえか……

「いいもん、いいもん……」

ほらあー……周りのからのプレッシャー思い出して幼児退行しちゃったじゃねえか。

非常に可哀想だ……誰かもらってあげてっ

\*\*\*

「お待たせ致しました！特製つけ麺2つとトマト味玉つけ麺です」

「おぉ〜…」

どろっとしたつけ汁を見た瞬間に分かる。

これは麺にかなり絡みつくだろう。

そして太めの自家製麺、店内の照明が冷水で締めた麺に反射し輝いて見える。

食べ応えがありそうだ。

無意識にゴクリと喉がなってしまう。

器に手を添えると縁まで温かい。

直前まで器を温めていたに違いない。

「君たちはこの店は初めてだったか？」

「そう平塚先生はそう俺たちに問いかけてきた…ということは何か食べ方があるのか？」

「何か通な食べ方があるんですか？」

「察しが良いな、そうだ」

「是非ご教授頂ければ」

「ああ、では手始めに…」

こうして、俺たち比企谷兄妹は平塚先生の課外授業を受け、つけ麺をすするのであつ

た。

\*\*\*

食事を終え、店から出る。

店前に並んでいる行列は俺たちが並んでいた時より長くなっていて早くこの店と出会えて良かったと心から思った。

「ふうー美味しかった〜お腹いっぱいだよ〜」

お腹をさすりながら小町は満足げにそう口にした。

確かに、濃厚なつけ汁と太麺は来て良かったと本当に満足できるポリウムでありクオリティーだった。

店名は個人的に気に食わんがまた来よう。

「あ、あと、ありがとう〜ございます、奢ってもらって」

この人いつの間にか会計を終わらせていたのだ。

食券タイプの先会計だとそういうのはすぐ分かるんだけど、後会計だと直前まで分からないんだよねー。

「ああ、気にすることはない。良い食事ができた礼だ」

やだあ、ちよつときめくじゃねえか。

なにこの人、マジモンのイケメンじゃねえか。

もしかして少女漫画によくいる花しよつてる系イケメン？

「では、私はそろそろ行くとするよ。2人ともこれからの休日を楽しんでくれ」

「はい、そのつもりです」

小町が元氣よく答えると平塚先生はああと微笑を小町に見せ答えた。

そして平塚先生は俺に視線を向ける。

「比企谷、何か相談があるなら私を頼れ」

「いきなりなんですかね。まあ：考えておきます」

「教師らしいことをするのも1つだと思つてな。それでは行くとしよう」

そう言つて平塚先生は俺に背中を見せ去つて行つた。

彼女の背中を見送つた後、また小町が腕を組んできた。

「さて、おにいちゃん。どこ行こつたか？」

どうやら今日1日、小町に付き合わされるみたいだ。

とりあえずゲーセンとか行つてみるか。

「ゲーセンでも行くか」

「あーいいねえ、メダル落とす奴やりたいねえ」

「んじや行くか」

「うんっ」

昼下がりに、青々とした空の下、兄妹は休日の談笑を楽しみながら歩みを進めた。

## # 9 — 1

月をまたぎ平日がやってきた。

実は今回のGWは4月から休みが続く訳では無く、4月と5月を土日でもたぎ、その後平日2日を挟んだ後、5連休が始まる。あまり使えないGWだ。

まあ、普段より多く休めるだけありがたいがたくはあるが……平日の気だるさが半端ない。そんなやる気の無い平日にチャリ2人乗りを、ご所望の小町を送りながら学校へ向かう。

小町を下ろす際に、『ついでに作ったの！おにいちやんのっ！』と照れを隠しきれない小町から弁当を渡された時は感動して涙が出そうだった。

中学では給食あるだろうとか無料なことは言うまい。

それが千葉のお兄ちゃんクオリティー。

チャリこいでる最中に、後ろから細かい注文飛ばしてきたときはこのガキはなんだか思っていたが、そんな事はもうどうでもいい。

今日1日幸せだ。

昼休みになり、最近見つけた特別棟の一階、保健室横、購買斜め後ろの場所で俺は小

町の弁当を食べている。

ここはちよūd良い風が吹く。

俺はこの優しい風を肌で感じながら過ごす時間は嫌いじゃない。

視界にはテニスコートが映り、そこでテニス部員らしき女子が1人で昼練に励んでいた。

ほー、熱心なことに。

そんな事を思いながら弁当をつついていた。

「あれ？ヒツキー？」

風がどうやら知り合いの声を運んできたようだ。

『風』のワードが、治まったと思っていた厨二病を思い出させるぜ。

そんな男子高校生の日常ってあるだろ？……えっ、ない？マジで？

「由比ヶ浜か」

「なんでそんなところにいんの？」

吹き付ける風で、なびくスカートを抑えながら俺に尋ねてきた。

「ちよūd風のあたり心地がいい場所があつてな。そこで飯を食べるのも一興だと考えてな」

我ながら即興で思いついたにしてはなかなか良い台詞じゃねえかと自画自賛してみ

る。

「へえ、あれだね、傷心に浸ってる感じ！」

「んんん？」

由比ヶ浜の自信満々な発言に一瞬遅れを取ったがもしかしたらと言葉を返す。

「正しくは『感傷に浸る』な。感傷にすら浸ってないがな」

一瞬何言ってるのこの娘と思つたわ。

「つは!?もしかして今から傷つけますって遠回しに言ってる？」

「へえ、ヒツキーそういうの詳しいね」

んなわけねえか。

常識だ。

「まあな」

よし、これで会話終了。

由比ヶ浜、さっさと切り上げてくれ。

俺は一人で小町の手作り弁当を……っお？

「なあ、由比ヶ浜」

「ん？なに、ヒツキー」

興味津々に由比ヶ浜が俺に寄ってきて、隣に座る。



ちよっ?!近い近いっ!!

「えつと……だな、小町についてなんだが」

「あつ……」

その件の話をする则由比ヶ浜は俯き表情が暗くなった。

「小町ちゃんから聞いちゃったんだね」

「ああ、細かい所までは聞いては居ないが、大体雰囲気で察した」

「そっかあ……」

沈黙の時間が続く。

ヤバイ。

自分から地雷踏みについて、実際この雰囲気になると何話せば良いか分からなくなると、とんでもなく最低最悪クズ野郎だなと俺自身思う。

「あく……なんというかな、由比ヶ浜。小町も言い過ぎたって自覚はあったみたいだ」

「えっ?」

由比ヶ浜は俯いていた顔を少し上げて意外そうな顔をしていた。

「本人的にはもう少し時間がかかるって話だったから、まあ後は時間が解決してくれるだろ」

「そう……だね、でもそれに任せておくときつと後悔しそう」

「そうなのか？」

「うん、これはあたしが起こした事の責任だから」

責任か。そのギャルギャルした容姿で言うような台詞ではないのだが、まあそれはさておき、どうやら俺の事故の件が彼女に様々な効果を与えているらしく責任感はあるようだ。

「ちよつと自分でもやり方探ってみる。ありがとつ、ヒツキー」

不意に向けられた笑顔に心臓が跳ね上がる。頬が熱くなるのを感じた。

くつそ、こいつこんな顔も出来たのか。

「あゝっ！ヒツキー顔赤くなってる〜」

「うっせ、勘違いすつからその笑顔向けんな」

「えへへ〜」

そういうのやめてね？

俺の青春ラブコメがとうとう始まっちやうのつて勘違いしちやうだろうか。

「それにしてもホントに気持ちいいね〜ここ」

「だろ？俺はここをベストプレイスと名付けることにした」

「なにそれ、ウケる」

ウケる要素何一つないのだが……

もしかして叙述トリック使ってるの？

やるじゃねえか由比ヶ浜、俺に文系で喧嘩売るなんて。

その挑戦受けてやる。

その答えは『ウケると言いつつ全然ウケない』だ。

理由はその口調が明らかに棒読みだからだ。

……やべえ、言ってる悲しくなってきた。

「最近一色さんとは？」

一色とは依頼終わってから全然話してないんだがな。

別に話しかける用事も無いし。

「最近サッカー部で忙しいんじゃないか？ってか全然喋ってねえな」

「ヒッキーもう少し一色さんかまってあげなよ」

一色も俺に構ってもらうよりも葉山先輩に構ってもらった方が嬉しいだろ。

「なんでだよ。そんな時間あんなら小町構ってるわ」

「ここ最近マジで懐いてるからな。」

「デレ期なのかもしれん。」

「ヒッキーほんとシスコンなんだね……気持ち悪い」

「いきなり気持ち悪いとか傷つく覚悟する前に俺の心を扱らないでね？」

まさかここでフラグ回収してくるとは由比ヶ浜やりやがるぜ。

あははくと俺の言葉を受け流し、由比ヶ浜が視線をテニスコートに向ける。すると何かに気づいたらしく言葉を口にする。

「あー！あれさいちゃんじゃない？」

いや、さいちゃんじゃない？って言われても誰だよ。

由比ヶ浜の視線を追うと先程から一人で自主練している女子テニス部員を指していた。

「知り合いか？」

「同じクラスなんだっ」

「そうか」

なぜか由比ヶ浜は声を上げ、そのさいちゃんとやらを呼び寄せる。

あのお……由比ヶ浜？

同じクラスってことは俺の先輩な訳で俺の肩身が狭くなるんだが……

そんな俺の気をよそにそのさいちゃんという女子は俺たちに走り寄ってきた。

その女子は潤んだ大きな瞳ときめ細やかな肌、華奢な体つきで乙女と言う言葉を体現したかのような美少女だった。

さらに汗で濡れた髪と汗がたう肌が色つぽさを感じさせた。

「あつ、由比ヶ浜さん……と？」

その女子は俺を見るなり首をかしげる。

そりゃわからんよな。

「ああ、すいません。1年の比企谷です」

軽い会釈と一緒に名乗り、自己紹介を終える。

「そうそう、ヒツキーだよ」

由比ヶ浜さん？ヒツキーというあだ名を広めるのは勘弁してもらってよいかな？

「そうなんだ！僕は戸塚彩加。よろしくね比企谷くん！」

太陽のような眩しい笑みを俺に向ける戸塚先輩をみて、俺は天使がご光臨されたのを

目撃してしまったのだと理解した。

僕っ娘かあく。この世に存在するとは思ひもしなかったわ。

「女子テニスも昼練やるんですね」

「えっと、僕男なんだけどなあ……」

ハッと時間が停止したかのように思考が止まっている事に気がつき、俺は意識を取り戻した。

誰かそして時は動き出す。とか言ってくれりやあ助かったのだがスタンドを使える奴は早々いねえ。

「えっ……はっ?」

言葉につまる。理解に苦しむ。

由比ヶ浜に視線を向けるとうんうんとうなずいている。

なんか『その反応わかる、あたしも通った道だから』とか上から目線な事を考えてそうなのが癪だ。

戸塚先輩?

もしかして特殊なご職業のお父さんとかいらっしやいませんかね?

んで、昔テニスの勝負で引き分けた男の子ともう一度勝負するために男の子って偽っていません?

全然騙せてませんよ?

俺の顔に嘘だろと出ていたのだろうか、戸塚先輩は体操着の裾を手で握りしめ、上目遣いで目を潤しながら俺を見つめ口を開いた。

「証拠……見せようか?」

その恥じらう姿は艶めかしく、下手するとあの打算的な女以上の効力を持つてるんじゃないかと思うほどだ。

何だろう。なんかとてもいけない事をしている気分だ。

ヤバいこのままでは俺は引き返せない領域に足を踏み入れかねない。

『おいおい、こんな絶好のチャンスはねえよ』と俺の耳元でデビル八幡が囁く。

そうだよな、向こうから言ってきているしこんな絶好のチャンスを逃すのはないよな。

『お待ちなさい!』

おつ、お約束の天使が来た。

『どうせなら壁ドンした後、「戸塚先輩!!ぼかあ、ぼかあもう!抑えきれませんっ!!』と情熱的攻めて、戸塚先輩の服を脱がせるのはどうでしょう』

いやまて、どんな展開期待してんだよ。

やけに具体的ななんだよ墮天使が!それできるのどう考えても幽霊退治のお兄さんだろうが。

俺のキャラ崩壊してんだよ。

つてか止めに来いよ。

「だ、大丈夫です。知らなかったとは言え、配慮が足りなかったです」

苦しげな口調でとりあえず戸塚先輩の申し出を断ると、そつかと目尻に涙を浮かべ、輝かしい満面の笑みを俺に向けた。

ああ……守りたい、その笑顔。

「ううん、別にいいよ、それより比企谷君って1年生なんだね。どうかな？テニス部とか興味無い？きつと楽しいと思うよ」

あー……戸塚先輩個人には凄く興味があるけれども、テニス部にはあまり興味が無かったりする。

……戸塚先輩の愛らしさに負けて入部希望を出そうかどうか瀬戸際まで追い込まれたが、俺自身俺の性格をよく分かっている。

絶対に続かない。

「戸塚先輩。俺、球技だけとんでもない運動音痴發揮するんで悪いんですがちよつと無理っすね」

「そっかあ……残念……」

戸塚先輩のしょんぼりとうな垂れる姿も可愛くうつり、手のひらを高速回転させようとする衝動に駆られるが、理性でそれを阻止した。

でも、戸塚先輩1人でも全国行けそうな気がする。

イルカとかクジラとかラッコとか可愛らしい名前の技、使えるでしょ絶対。

戸塚先輩がどれだけ可愛くても、どれだけおねだりされても聞けない願いたいという物は



ある。

ほれ、毎日部活行く根性自体、俺には無いわけで……その見下げ果てた根性さまのおかげでバイトも面接でバツクレたしな。

「まあなんとというか、すいません」

「あーっ！」

いきなり由比ヶ浜が大声を上げ、俺の肩が跳ねる。

なんの前触れも無いいきなり大声を上げるもんだからちよつとびびつちまったじゃねえか。

「そうだった！ 優美子の飲み物買うの忘れてた！」

えっ？こいつなんでパシられてんの？

「お前、パシられてんの？ いじめ？」

「違うよ、罰ゲーム」

つてか由比ヶ浜？ 結構お時間経ってるんですが……大丈夫なんですかね？

「あーね、ほれそろそろ戻らんとチャイムなるぞ」

「うん、ありがとねヒッキー！ またね、さいちゃん」

そう言つて由比ヶ浜は小走りで校舎の中に戻つていった。

「僕もそろそろ着替えてくるね。またね、比企谷くん」

「はい。また、戸塚先輩」

三人以上のグループ特有の共通の友人が居なくなつた居心地の悪さを感じ取つたのか戸塚先輩もどうやら席を外してくれるみたいだ。

戸塚先輩がテニスコートに戻る姿を確認した後、ようやく食べる途中だつた小町弁当に箸を伸ばすのだった。

\*\*\*

翌日、ベストプレイスで弁当を食べていたときのことだ。

テニスコートを覗くと、いつも通り練習している戸塚先輩の姿が見える。

遠目から見ても天使だ。守ってあげたい庇護欲に駆られてしまう。

そんなテニスコートを覗きつつ弁当を頬張っていたら、どうやらテニスコートにお客さんが出向いてきたようだ。

あれ葉山先輩じゃないか。

他は？優美子先輩と誰だあの金髪？知らねー。

由比ヶ浜は……いねえな。

ああ、あれが一色の言っていた葉山グループって奴か。

どうやら葉山先輩と戸塚先輩が話をしている。

話が終わったのか、葉山グループは戸塚先輩の反対側のコートを陣取った。

何これ、試合でも始めんの？戸塚先輩VS葉山グループの？えっ、練習の邪魔じゃね？

……まあいいか、弁当食べながら観戦するのもありだろ。

弁当を食べながらそんな光景を眺めていると、やはり戸塚先輩は毎日練習しているだけあって、素人揃いの葉山グループはほぼ一方的なゲームを強いられていた。

あーこれはなんと表せば良いか……主人公最強の異世界転生Web小説を読んでいるかのような展開だな。

圧倒的な力の差で蹂躪されているわ。

葉山グループはこぞって天使の裁きを受けていた。

このまま全員負けて終わりかなと思っただらそうでもなかった。

どうも優美子先輩がやけに動いている。

経験者なのだろう。

なかなか白熱したバトルが繰り広げられていた。

つてか、普通に戸塚先輩も優美子先輩も強くね？

……しかし、ゲーム後半で戸塚先輩が無理にボールを追ってしまった為か、体勢を崩

し転倒してしまった。

結構派手に転倒してしまった事から向かいの優美子先輩も心配して駆け寄っていった。

その後、どうやら戸塚先輩が負傷したらしくゲームは中断。

葉山グループと共に保健室に連れられる戸塚先輩を俺は見送った。

戸塚先輩の負傷を心配した、今すぐにも保健室に駆け込みたい気分になったが、まだあの先輩グループも一緒に居ることだろう。

俺一人であの先輩グループの中に入るのはハードルが高い。

なので、次会ったときにでも大丈夫でしたか？とでも言ってみようと心に決めた。

観戦も終わったしそろそろ教室に戻ろうかと思つた矢先、久し振りに俺に向けられた声が風によって運ばれてくる。

「あゝ、せんぱーいゝゝゝこんな所にいたゝ」

話しかけられるのは1週間経たないくらいだが久し振りに気がする。

一色は両腕を左右に振りながら小走りで俺まで寄ってきた。

「せんぱいに話しかかった事があつたんですよおゝ」

照れたような、瞳を潤し、何か恥じらいのあるように頬を赤く染めながら彼女は俺に向けて言の葉を口にする。

「この女だれ？」

言の葉と表現するのがおこがましい程、風情も何も無い低く冷淡な声色が耳に入ってきた。

と同時に彼女の携帯が俺の前に強引に提示されそこに映し出されているのは俺と戸塚先輩だった。

「……というのは冗談です」

一色は口角を上げたすこし微笑めいた表情に戻した。

一色ちゃん？

ちよつと冗談にしては迫真の演技過ぎて八幡びびっちゃったよ？

「んだよ、驚かせんなよ」

「それよりもせんばい、また撮られちゃってますよ？」

「……まじか」

一色が見せたその画像から察するにグループチャットにまたあげられたのだろう。

最近姿を見せないとと思って安心していたがやはりまだ観察されていたか。

「これどうすつか、すげえ迷惑……」

「普通の男子だったら女子と2人でご飯食べるとかく、一緒に買い物ものするとかく、そんなイベント頻繁に無いと思うんですけどね」

一色が呆れたような表情で亜麻色の髪をクルクルと指でいじりながらそう言い放つ。  
「それお前が言うか？　ってかなんで俺だけ狙い撃ちで撮られているのかも分かんねえしな」

「これはもう担任相談とかじゃないですか？　あまりにもしつこすぎる感じがしますよ」  
「ああ、そうなんだがなあ……」

うちの担任、自分のこと以外に興味なさそうなんだよな。

明らかに俺に何も問題起こすなよっていう雰囲気か漂っているって言うか……

あまり信用したくない大人だったりするんだよな。

『比企谷、何か相談があるなら私を頼れ』

つふと休日のあの言葉が頭をよぎる

先日会ったあの人を思い出す。

確か……平塚先生だったか。

相談してみるのもありだな。

「まあ、うちの担任はナルシストで自分の事以外興味なさそうだしな。それよりも別であてがあるからそつちで相談してみるわ」

「そうですか、早く解決できるといいですね」

そんな事無くすためにこの問題はさっさと解決しないと。

「そうだな」

放課後にでも職員室寄って相談してみるか。

「……つで、この女は誰ですか？」

おや、さつきも感じた雰囲気悪い一色がぶり返したぞ？

冗談じゃ無かったのかな？

「ああ、この人は戸塚先輩と言つてな。驚くなよ、実は天使なんだ」

とりあえず淡々と事実だけを一色に伝えて見る。

「はあ？ せんばい今日は一段と気持ち悪いですね。……私が聞いているのはそんな事じゃ無くてっ！」

「本当なんだがなあ……」

こうして、昼休み終了のチャイムが鳴るまで、しつこく戸塚先輩の事を聞いてくる一色に付き合う羽目になった。

事実を伝えているはずなんだけどなあ……。

\*\*\*

今日の学校の授業は全て終わり、放課後の廊下では明日から始まる連休の話題で談笑

を交える生徒達とすれ違う。

目的の部屋に到着し、ふうつと息を整える。

職員室に入る機会はそうそう無い。

自分の中でも少し緊張気味なのが分かる。

職員室の扉を数回ノックし、失礼しますと扉を開く。

中は空調が効いており、廊下よりも温かい。

ちよつとだけ教師だけずるいなという感情が芽生えたが、今はどうでも良いことなので思考を切り捨てた。

職員室の少し奥の方に見覚えのある後ろ姿を見つけた。

どうやら本当にうちの先生だったらしい。

俺は、その後ろ姿のデスクまで足を進め、平塚先生の後ろまでやってきた。

平塚先生はどうやら配布するプリントを作成しているのか、パソコンで打ち込んでいる様子だ。

作業途中の姿を見てしまい、声をかけるのを躊躇ってしまふ。

タイプングで固定された姿勢を変えようとすると共に、黒く艶のある長い髪の毛が揺れる。

この姿をじつと見ていたいという思いに駆られたが、どうやら俺の存在に気づいたよ



うだ。

平塚先生はタイピングを止め、椅子を回転させこちらへと目を向けた。

「比企谷か、どうした何か相談か？」

「はい」

「そうか……それでは一旦あっちに行つてもらつて良いか？すぐ向かう」

そう言つて、平塚先生は職員室奥にあるパーティションで区切られたスペースを指で指した。

「わかりました」

平塚先生の指し示したスペースへ足を進めると、煙草の薄い香りが鼻腔に入つてきた。

ここはどうやら教師達の喫煙スペースを兼ねているようだ。

ソファアが2種類あつた。

片方が大人3名が座れるほどの革張りのソファアが1席とガラステーブルを挟み同様の1人用ソファアが2席隣り合うように置かれている。

俺は1人用のソファアに腰を下ろした。

なかなか高いソファアなのか深く沈む。

あまり慣れない場所であるのか、俺は自分が若干緊張しているのが分かる。

平塚先生は俺が着席した後1分もしないうちにスペースに入ってきて俺の目の前の席に腰掛けた。

そしておもむろに胸ポケットから煙草を取り出す。

「すまない、いいか？」

そう言つて平塚先生は煙草を見せる。

俺は頷いてそれを了承した。

平塚先生は煙草の箱をトントンと叩き葉を詰め、1本取り出し火を点ける。

タールの濃厚な香りと青白い煙が辺り一面に漂う。

平塚先生は俺に配慮してか、横に煙を吐いた。

それと同時に、俺へ視線を向けて微笑めいた表情で口を開いた。

「さて比企谷、どうした？」

優しく落ち着いた口調に、心地よさすら感じた。

先ほど迄の緊張感が和らぎ、動揺せずに言葉を口にすることができた。

「はい、実は……」

それから俺はグループチャットにて俺の行動を監視している人間がいる。

それによつて被害を被つた先日の事件を平塚先生に話した。

「なるほど、写真を投稿した人間には話を聞いたのか？」

「聞きました。どうやら画像は投稿した本人でなくて、大元はSNSの鍵アカウントを利用して投稿してるみたいですよ」

「ふむ、となると運営側に報告してアカウント停止はどうだ？」

「停止されても別アカウントで復活される恐れがあります。その場合、警戒される可能性も無きにしもあらずなので…」

「そうか、下手に動かれると面倒な訳だな」

平塚先生はふむ、と腕を組み両目を閉じて頷いていた。

それと同時に何か別の策が無いかを考えている様子だった。

「ですのでネット上では無く、リアルで突き止めるのが効果的ではないかと」

「なるほど。その対処については教員側も協力できるはずだ」

「ただ、ここままで来てなんですが、俺はそこまで大事にはしたくは無いです」

1番の問題はここだ。

俺自体がそこまでこの問題をおおっぴらにはしたくない。

この問題がおおっぴらにされた後に流れる情報で一色いろはや、戸塚彩加、由比ヶ浜結衣にまで影響を及ぼすことになる。

俺だけの問題で彼女らに迷惑をかけることはあつてはならないのだ。

「そうだろうな……しかし、教員側が動くとなるとやはり学校中に知れ渡る事になる」

「ですよねえ……」

顎に手を当て、考えている平塚先生の姿は真剣に考えてくれているのだと分かる。

俺のあまり大事にしたくは無いいというわがままも汲んでくれている。

無茶なお願いをしているのは分かっているが何か打開策は無いい物かと頼ってしまう。

「ひとつ、解決策というわけでは無いが、大事にせず動ける方法ならある」

「なんですかそれは」

「ああ、奉仕部という部活動があつてだな。そこだったら大事にせず解決できるかもしれん」

「と言う事は先生では難しいと言う事ですか」

「大事にせず助けたいという気持ちは十分にあるのだが、私も教員という立場なのでな。教員が動かない方法と言ったらこれ位しかできない。先日相談にのると大言を吐いたばかりなのにな……すまない」

「いえ、確かに相談にはのつてもらえましたし、希望は見えました。その奉仕部を紹介してもらつてもいいですか？」

「わかった。では向かうとしようか」

「そう言つて平塚先生と俺は立ち上がり、忙しく教員が動いている職員室を後にした。」

\*\*\*

特別棟の階段を平塚先生は一段一段飛ばさずに上がっていく。

俺もそれにつられ、平塚先生の後を追うように階段を上がっていった。

特別棟は教室棟より生徒は疎らで辺りはしんつと静まっております、俺と平塚先生2人の階段を上がる靴の音のみが耳に入る。

「比企谷」

ふと階段を上りながら、平塚先生は俺の名を呼ぶ。

それに応答するように俺もはいと返事をした。

「特別棟に来るのは初めてか？」

「来るとしても1階にある購買くらいですよ。2階以上の階層には行ったことはないです」

「そうか、たまには足を運ぶのも悪くないぞ」

「まあ、考えておきます」

そう言つて会話が終了した。

俺たちは、そのまま4階まで上がり、廊下を迷うこと無く進む平塚先生の後を追う。

平塚先生が立ち止まった場所、どうやらここが奉仕部の部室らしい。何も書かれていない教室の前に俺と平塚先生は立ち、先生は教室の引き戸を開けた。

## #9—2

教室の引き戸を開いた。

室内の空気が新たな道を見つけ、そこをめぐり流れを作りだした。

その流れに逆らうように立ち尽くす俺に、空気の流れは淡くフルーティーな香りを鼻腔に残していった。

室内に入った時、一番先に目についた光景は一人の美少女の姿だ。

長い艶のある黒髪が揺れ、整った顔立ちと透明感のあるきめ細やかな肌がレースのカーテンで柔らかくなつた日射で彩られ、静かに文庫本をめくるその姿に俺は呼吸を止めるのを忘れる程、魅入ってしまった。

彼女が文庫本をゆっくり閉じて机に置く。

顔をこちらに向けた時、あまりに綺麗だったので息をのんだ。

「平塚先生。何度も言っています、入室の際はノックして入って頂けないでしょうか？」

その声で俺は現実に取り戻される。

彼女の履いている上履きの色を見る。

どうやら2年生のようだ。

おいおい2年生……美少女揃いすぎだろ。

この人が大ボスかよ。

「悪い悪い」

反省する様子は無い様な口調で軽く平塚先生は謝る。

「それが悪いと思っっている人の態度だと思えないのですが」

「まあそう言うな雪ノ下、ノックしてお前が返事をした試しがないだろ？」

「先生が返事をする前に入ってくるんですよ」

どうやら彼女は雪ノ下と言う名らしい。

彼女の視線が俺へと切り替わる。

ゾクツと冷やややかな感覚にとらわれた。

「平塚先生、彼は？」

彼女の言葉が耳に届く。

凜とした声色は彼女の姿にふさわしく思えた。

「比企谷八幡です。宜しくお願ひしましゆ」

緊張が口調にも現れてしまったらしい、かみかみな口調で自己紹介をってしまった。

やばい、もう帰りたい。



「比企谷……」

彼女はそうつぶやくと少し目を見開いた様子だったが、すぐに元に戻った。

なんだ？新しい無言語コミュニケーションか？

それとも俺の存在感を感じ取るには何かしなきゃ見えないとか？

俺は幻のシックススマンかよ。

いや、おれはエイトマンだ。

出番こなくね？万年補欠じゃねーか。

「私は雪ノ下雪乃、2年生よ」

『2年生』という部分を強調した感じだとどうやら年上を敬いなさいと遠回しに言うように感じられた。

まあ、年齢的には変わらねえんだけどな。

「何か不服でももの申したいって表情をしているわね。どうぞ、学年が下といえど言論の自由は保障されてるわ。叩き潰すだけだけれど」

俺の考えを悟ったのか雪ノ下先輩は不快気に眉を寄せこちらを見返してくる。

先ほどまで俺が彼女に感じた清純なイメージとはかけ離れた言葉を向けられ、俺の中の彼女へのイメージが崩れ去る音がした。

つとと太宰治の「グッド・バイ」でも似たような場面があったことを思いだした。

声色が悪いせいですが、いい美人が台無しって表現だったか？

しかし目の前の雪ノ下先輩は声色は悪くないのだ。

口が悪い。

「雪ノ下、彼は依頼人だ。虐めてやるな」

うまい具合に平塚先生が割って入ってきしてくれた。

「依頼人……なるほど。では彼はこの部がどういいう部かご存じなのでしょうか？」

「そこまでの説明はしていない。お前に任せる」

雪ノ下先輩は諦めたかのように軽く嘆息をつき、俺へと視線を合わせる。

「この部は奉仕部よ。迷いし子羊を善き羊飼いが救済する為の部活動よ」

無償の人助的な奴？ ボランティア的なものか。

分かることは人が来る依頼を請け負う助ける部活だ。

「とりあえず、依頼を請け負う部活って認識でいいですか？」

「近いけれど認識に違いがあると嫌なのでもう少し詳細に説明させてもらおうわ」

そういうところほんと咳き込んだ後、姿勢を正して口を開いた。

「常に結果を与え続けず、方法を教えてあげるそんな部活よ」

なんか聞いたことがあるな。

「魚を与えるのではなく魚を釣る方法を教えてあげるって言葉のほうが理解しやすいか

しら」

確かに聞いたことのある言葉だ。

つまりは方法探してやつからあととは自分で試せて部活動ね。

「私は優れた人間は哀れな者を救う義務があると教えたんだがな」

補足を入れるかのように話す平塚先生の言葉が耳に入る。

確かノブレス・オブリージュって奴か。

言葉カッコいいよな。なんか高貴な感じがする。

「それで？あなたはどんな依頼かしら」

それを考えて、よくよくこの雪ノ下先輩を見ると気品のある容姿と丁寧な言葉遣いを見るに貴族みたいな雰囲気は出している……さつき叩き潰すって言うていたけれどな。

ノブレス・オブリージュって確か貴族はその身分に対する責務を果たせてそんな意味だったはずだ、雪ノ下先輩に限定するなら言葉として間違っちゃいねえ。

他の部員もこんな感じなのか？それだったらギスギスしすぎだろこの部活。

「どうも最近、俺をストーキングしている奴がいます」

「物珍しい方もいるものね」

言われると癪だがあながち間違ってもいないから何も言い返せねえ……

「まあ、俺が女子と二人でいるとなぜかそいつが盗撮してSNSにあげちゃまっている。

俺はそれをどうにかしたいんです」

「それなら教師に言うなり、SNSの運営会社にアカウント停止の申請ができるのでは？」

そう言つて、雪ノ下先輩は平塚先生に目をやる。

平塚先生は首を横に振り、その案は既に却下されたのだと表現で雪ノ下先輩に伝えていた。

「教師に言うと大事になつてしまいますから、それは避けたい所なんです。アカウント停止申請ももつともな話なんですが、新たにアカウント作成され、かつ相手側に動きを勘づかれて警戒される恐れが出てくるので……」

「別に恐れることは無いわ、まずはアカウントを停止申請から始めてはいかがかしら？あと平塚先生も話を聞いてるのであればあなたの担任にその旨をお伝えして即刻HRで話をするなりすれば解決するのでは？」

「いやそれは……」

いくら何でもリスクが高すぎる。

ちよつと真つ直ぐ過ぎやしませんかねこの人。

そう考えていると横から平塚先生が助け船を出してくれた。

「さて、雪ノ下。少し考えてみる、ネット上の面識が割れていない状況は違うぞ」

雪ノ下先輩は平塚先生の助言を元に再度考えて居る様子だった。そして考えがまとまったのか静かに口を開く。

「確かに、下手な動きをすると暴走しかねないわね。同じ学校でさらに顔、名前が知られている相手だとするとその対応は確かにリスクを秘めているわ」

良かった。

「ご納得して頂けたようだ。」

「話の続きなんですけど……それで平塚先生に相談したところ奉仕部って言う部活があるから大事にしたくないならばまずは相談してみてもはどうだって話でここに来たって訳です」

「なるほど、話の経緯は分かったわ」

「今後俺を監視する様な真似をしないようにしてもらえればそれでいいです」

「では裁判にしましょう」

「そうです……? えっ? ちょちょちょ!? なんでそんな話になるんですか?」

雪ノ下先輩?

人の話聞いていました? 話の流れ完全に無視していますよね。ちょつといきなりぶつ飛んだこと言わないでもらっても良いですかね?

「比企谷君、こういった人のプライベートを拡散する行為って、プライバシーの侵害と

「だって個人の隠したいと言う意思を踏みにじる最低な行為よ。自分の姿を現さず、あなただけを狙い晒すということは、あなたが人畜無害な人間であり何も反抗をしないから凶にのつて続いているだけであって、あなたがその気ならずぐさま警察へ通報し犯人の住所を割り出せるし、肖像権の侵害で裁判沙汰に仕立て上げられるけれどもいかが？　弁護士を用意なららせて」

「そんな月9ドラマバリの大事にしたくないからここに来たんだよ……。」

「それは最終手段に取っておきましょう。まずは犯人を探すというアプローチから始めて行くのはどうですかね？」

「俺の必殺、面倒な案は『それ、リーサルウエポンにしようぜ』」

意味はゲームで最後の最後まで使わない完全回復アイテム的な立ち位置。

「雪ノ下先輩はふむっと頷いた後、顎に手を当て少し考えていた。」

「犯人の姿は見た覚えはないの？」

「見てないです。いつの間にか撮られていたので」

「なるほど。……となると最初に犯人をおびき寄せる必要があるわね」

「どうやっておびき寄せるんですか？」

「比企谷君、連休明けで良いわ。お昼休み、一緒にご飯はどうかしら？」

「は？」

ほんといきなり突拍子もない事を言い始めるなこの先輩は。

「勘違いして欲しく無いのだけれど、女子と2人の時のみに撮影をされているということは私と一緒にいることで犯人をおびき寄せることができるのではないかという事よ」「えっ？俺も協力するの？」

「当たり前じゃない。人任せにして良いとは一言も言っていないわ。それに見つけるにあたって見ての通り人手が足りないのよ」

まあ、一人で動けない分、協力者がいると言うことは願ったり叶ったりだな。

「ん？この部活、他の部員はどうしたんですか？」

そう言つて俺は平塚先生を見る。

「この部には雪ノ下以外居ないぞ」

平塚先生？

なに『当たり前前だろ？そんなの』みたいな表情で話してるんですか？

それもはや部活じゃないような気がしますけど？

「部員は1人ですか……さいですか」

まあ、人任せにするような案件でもねえしな。

仕方が無い、協力して見つけることにしよう。

「まあ、私のような女の子とお昼を一緒にできるんだから、あなたはむせび泣いて喜んで

も良いはずなんだけれど」

「どこのお嬢様ですかね？時代錯誤感半端ないっすよ？」

「なぜ？ あなた、私のこと見たときすぐに可愛いって思ったでしょ？ その通りよ」

なんで俺の周りの女子は皆自分で自分のこと可愛いとか言いやがるんだ。

その通りだから何も言い返せねえ……

「いやそうじゃなくて、もう少し言い方がありますよね？」

「あら？私、頭を使うしやべり方をしていたかしら？」

これちよつと話がそれていつているな。

俺がデイスられていく方面でな……

そんなのご免被りたいのでさっさと話戻そう。

「まあ話を戻しますけれど。ちよつと気になったのが雪ノ下先輩が俺と写真を撮られる

とトラブルに巻き込まれる可能性が出てくると思ったんですよ」

「それはどうしてそう考えられるの？」

「以前に俺と一緒に写真を撮られた女子がなんかそれを機に男子に言い寄られるトラブルに巻き込まれた事がありましたね。とりあえず解決はしたのですが……その案だと、雪ノ下先輩がトラブルに巻き込まれないかなと思ひまして」

「ふうん。ご心配ありがとう。でも私そんなこと全く気にしないから、大丈夫よ」



まあ、寄ってきた男がいたとしてもこの毒舌で心折れるだろうしな。

俺もこいつが女じゃなきや顔面殴りつけていたところだ。

「はあ……」

「対応は連休明けということで大丈夫？」

「大丈夫です」

「では、そのように」

話は一段落して一旦緊張感が和らいだ。

なぜ気軽に相談してみよーぜーの流れだったはずなのにいざ箱を開いてみると誹謗中傷されないといけないのか腑に落ちないがまあ、協力者を得るといふ所で解決への一歩は踏み出せただろうと自分自身に言い聞かせた。

共通する話題が無くなり、シンつと静まった室内で雪ノ下先輩がテーブルに置いてあるカップを手を持つ音が聞こえた。

彼女はそのまま紅茶を口にする。

ティーカップに口を付け紅茶を飲む姿も上品で絵になっている。

カップから動いた事により香りが拡散されたのかふわつとした甘い上品な香りが鼻腔を抜ける。

どうやらその視線に気がついたかのように雪ノ下先輩が視線を向けた

「あら？あなたも飲む？」

「良いんですか？」

「いいわ。趣味でやってるもので、あまり上手とは言えないけれど」

「おお、雪ノ下ちようどいい、私にも淹れてくれないか」

そう言つて近場の椅子を一つ引き寄せて平塚先生はそこに腰下ろした。

「はあ……平塚先生はガツガツと飲み過ぎなんですよ。茶葉がいくらあつてもたりなく  
なります。部活動経費があるなら別ですが」

「そういうな、雪ノ下。お前の淹れる紅茶はうまい。自信を持って」

「それとこれとは話が別な気がしますが……まあいいです」

そう言つて雪ノ下先輩は立ち上がると窓際に置いてある場所に移動した。

2つの紙コップに用意し、ティーパックを入れて電子ケトルからお湯を注ぐ。

しばらくして、雪ノ下よりどうぞとほのかに香る甘い香りの紅茶が差し出された。

「すいません、ちよつと猫舌なもんで少し待ってから飲んで大丈夫ですかね？」

「あら、急かしてごめんなさい」

「やはりなかなかうまいぞ、雪ノ下」

「平塚先生、うまいしか言つていませんが他に表現できる事は無いのでしょうか？」

「ない！」

「現国教師がそれでいいのですか……」

「仕事で無いならそれでいゝいゝ」

なんか気だるそうに姿勢を崩し言葉を崩す平塚先生を前に、俺は職員室で話をしたあのイケメンな平塚先生が崩れ去っていくのを感じた。

とりあえずこれで良かったのだろうか。

様々な不安が残っているが、まあ問題の解決に向けて進んでいるだろうと踏んで、俺は紙コップに入った紅茶を啜るように飲むのであった。

あつつつ!!

## # 10

とうとうこの日がやってきた。

黄金の5連休だ。

休日は人を活発にさせる。

それは今俺がいる日本最大級のショッピングモールにいるとよく分かる。

皆活気に溢れており、何の目的もなく来た俺と違い彼らは友人と映画を見たり、恋人とウインドウショッピングをしたり、家族とゲームセンターで遊んだりと様々な目的を持っているだろう。

一番近場のショッピングモールに行くことも考えたが、田舎のヤンキー事件でまだ勇氣出せなくて近づけなかったのは内緒の話。

つてか今日はためて平積みしていた『読むけれどやる気が出たらな』本を片っ端から処理していいこうと考えていたのに……家でぬくぬくと読書にふけようと思っていた矢先、小町が『ちょうど連休なんだから家全体掃除したい』と言いだして、家を追い出されるってどうよ……。

小町ちゃん？ お兄ちゃんと一緒にやるといいう選択肢は無かったのかな？

前に一緒にお風呂掃除やったでしょ？ お兄ちゃん手伝うよ？ 邪魔？ さいですか……

まあ考えても仕方が無い。

そういえば最近、あまりやれていなかった新作のラノベのチェックをする事にしようと考えを切り替える事にして書店へと足を運んだ。

天井に吊されたライトノベルコーナーと書かれた案内板を見つけその棚へと足を進める。

ライトノベルコーナーが見えてきた所で、なにやら見覚えのある人影がみえ、迷いなく進めていた足の歩幅を狭めた。

少しずつつ近づくにつれて亜麻色の髪とくりっとした大きな瞳が見えてきた事で憶測は確信へと変わる。

その人物は今期アニメ化ライトノベルコーナーという特集棚と向き合っていた。一色じゃねえか。

あいつ何やってんの？ ラノベなんて読んでたのかあいつ。

もしかして隠れなのか？

つぶと声をかけそうになった自分の衝動を理性が止めた。

いやいや、ステイステイ。

クールになれ、クールになるんだ比企谷八幡。

ここでわざわざ声をかけたら『あれえく？ せんぱく。可愛い私に声かけてナンパですか？』とか言われかねん。

その後に俺の奢りで、お高いカフェとか連行されるところまで読めた。

よし、声をかけるのはやめておこう。

そう決断を下し、早速俺はライトノベルコーナーに進めていた足の方向を180度回転させ書店から出て行く行動体制をとった。

しかし俺の作戦行動が失敗に終わる声が背中から聞こえてきた。

「あれえ？ もしかしてせんぱい？」

こんな時に限って勘の良い奴め。

「ん？ あれ、一色じゃねえか」

仕方が無い。

今気付いたわーって感じでとぼけてやり過ぎすか。

「もしかして今、見て見ぬ振りしようとしてませんでした？」

何こいつエスパーなの？

最近同様なゆ難が後を絶えないな。

「そんな事は無いぞ？」

「それよりもせんぱいがGWに外出するなんて珍しいですね。会えないものだと思いますよ。まじったよっ！」

俺の元に駆け寄り、いきなり俺のGWの予定は引き籠もっていると断言してきたあたり、一色は八幡検定三級あたり合格できそうな位に俺の事を分かってきたらしい。

あと若干、テンション高いのはなぜだ？

声少しだけ大きくて恥ずかしいのだが……

「俺だつて出たくなかったわ、妹に追い出されたんだよ」

「へえ〜そうなんですな〜」

俺はこの後、一色が小さくガッツポーズしているのを見逃さなかった。

一色ちゃん？

家追い出されたつて言われた人に向かってガッツポーズは無いんじゃないかな？かな？

「それはいいとして、一色どうした？ 頭でも打ったか？」

「せんぱいは私をなんだと思ってるんですか？ 私も読書くらいはしますよ」

「それは百歩譲つてあり得るとするとして、ラノベとか毛嫌いしそうだと思つてな」

俺は一色が先ほどまでじっくりと見ていたラノベコーナーを視線に入れる。

一色は淡く頬を染めながら小さく『やっぱり見てたんじゃないですか……』と唇を尖

らせて小さく呟いた。

あつやべつ、やつちまった。

「部活の備品買うついでに、せんばいがよく読んでいるライトノベルつてなんだろうつて気になって見てたんですよ」

そういえば聞いてきたことがあつたな。

その時の第一声が『せんばい、本読みながらなにニヤニヤしているんですか?』は俺の心に大ダメージを与えたからしつかりと覚えてるからな。

「なんだ一色、ラノベ興味あるのか?」

「まあ……絵柄はあれですけど食わず嫌いはちよつと自分的に許せないなうなんて思ってたんですよね」

「なるほどな」

淡い興味で読んでみたらハマるとかあるしな、その心意気嫌いじゃ無いぜ。

「そういう訳なのでせんばい、ちよつと付き合ってもらっても良いですか?」

興味を持ってしまったのは仕方が無いよな。

先輩として指南したい気持ちもなきにしもあらずだ。

決して一色がラノベに興味を持ったことが嬉しいとかそんなんじや無いからな。

「まあ、すこしな」



そう答えると一色はありがとうございませと笑みをこぼす。

俺はその光景を見て視線をそらした。

気恥ずかしすぎて直視できん……

\*\*\*

「んじやどういう系が良いんだ？」

一色がどのようなジャンルを好みに行っているのかを先に聞いてそこから絞り込む手法をとることにした。

正直な話、女子高生だから大体ジャンルは決まってるようなものだけだな。

「うーん、やっぱり恋愛青春系ですかね？」

一色は頬に手を当てながら考えた言葉を口にする。

うん、だと思っただわ。

「やっぱりそこら辺か」

「むー、女の子なんだから当然ですよ！」

「俺は恋愛青春系はちよつと疎いんだが、まあ似たような奴は1つだけあてはあるが」

「どんな話ですか？」

「入れ替わってる」

「もう見ました」

うん、知ってたわ。

有名だしな。むしろ映像の方が凄いわ。

「やっぱりか……」

「もうく分かりました。ジャンルは問いませんが、ただ先輩オススメのものが読みたいです」

「あー、となると巻数があるから俺の奴貸すわ」

「えっ?」

一色が目をパチクリさせながら俺を見る。

あれ?俺なんかやったか?

「ん?買うつてんなら良いが、結構出費デカいぞ?」

「いえ、そういうことじゃなくてせんぱいが人に物を貸すなんて行動が予想外過ぎて思考が追いついてなかっただけです」

確かに俺、人に物を貸すなんて初めてだな。

ただ一色ちゃん?真顔でそれ言われるとちよつと傷つくんだけど。

「しかし学校に持ってくるとあれだな、その状況をまた盗撮されかねんな」

あれの解決は連休明けだからな……。

解決後に渡すという手もあるがいつ解決できるだろうか。

「なら今からいきましよう。せんぱいの家」

「はっ?」

ちよつと思考が追いつかない。

なぜその思考に行き着いたのか説明を求めたいんだが……。

「学校じゃ渡すことできないじゃないですか、ならもうこれはせんぱいの家に行くしかないってことですよね」

「まじかよ……ってか一色、お前部活はどうすんだよ?」

一瞬の間のあと、首をかしげて俺を見て、何かに納得したかのように口を開く。

「あつ、ちよつとせんぱい勘違いしていますよ。今日の部活は早めに終わったんですよ。明日の練習試合に向けての温存兼ねてるみたいです。今はオフで買いたいものに部活の備品とか、興味あるものを見ながらウィンドウショッピングを楽しんでいたわけです」

「そうなのか」

「そうですよ、真面目に部活していて見直しました?」

「まあな」

「おお、せんぱいにしては素直ですね」

「なんだよ。良いことじゃないか。俺も依頼をこなした甲斐があるってもんだ」

よしよし、俺の家に行く話から話題を遠ざけていけている。

話題を曖昧にすることならお手のものだ。

「そんな事はどうでも良いんで、ほら先輩行きますよー」

どうやら俺の作戦は最初から見抜かれていたようだ。

話を戻されてしまった……

「ちよつ、マジで行くのか」

「マジです、私もお家教えたんですからね？」

「そりやお前が……」

「はいはい。それじゃ行きますよ」

彼女の中で既に俺んちに行く事は確定事項らしい。

既に書店から出て行くこうと前を歩いている彼女を止める術が思いつかなかった。

俺は、はあ……つと深いため息を吐きながら彼女のあとを追うのであった。

\*\*\*

日は既に頂点を過ぎて下降の一途をたどろうとする時間帯。

いつもの帰宅路なのだが、今日はどうも違うように感じる。

女の子と一緒に歩いているとかさういったことではないのだ。

それよりも何も、何故か横並びで歩くことを強要され、そのことに俺は違和感を覚えるのだ。

小町以外の女の子と横並びで歩くななんてした事ないからちよつと手汗がヒドイ。

バレないように両手をポケットにつつこんで誤魔化すことにした。

「へえ〜せんばいの家って結構歩くんですね〜」

そんな俺の心境をよそに横ではしゃいでいる亜麻色の髪の彼女を横目でみる。

小柄な彼女との身長差があり、俺が見下ろす形になっている。

「なあ」

「何ですか、せんばい」

「足ツラくないか？結構歩くから足疲れるだろ」

「つえ？」

「つえ？つて俺が言いたいだけけれど。」

「つてかそこで黙るの止めてもらつて良いですかね？地雷踏んだか心配になつちやうでしよ。」

「……いえただ、そんな気遣いせんぱいができるんだなって」

手を胸の前でいじりながら彼女はそう言う。

流石の俺もそこまで気がきかない男じゃない。

なんせ小町に鍛えられているからな。

「たまたまだ」

「でも、嬉しいですよ。お気遣いありがとうございます」

「……そうか、まあ歩くの疲れたら近場に公園あるからそこで一旦休憩するのもありだぞ」

「大丈夫ですよ。そのまま向かいましょう」

へへっと最後に漏らし彼女はまた前を向く。

その後たわいもない会話をしつつ、俺んちに向けて足を進めた。

\*\*\*

うちの前までたどり着くと一色がちよつとほおおつと小さく唸っていた。

なんだこいつ？ 一色ちゃん、ちよつと今日はテンションおかしくないかな？

「せんぱいの家って結構大きいですね」

「まあ、一般的な家だろよ」

そんなやりとりをしていると、玄関から鍵が解錠される音がした。

扉がゆつくりと開いて、恐る恐る俺たちを覗く小町の姿半分が見えた。

「小町、何してんだ？」

「なにつて、変な会話が外から聞こえてきて、いざ見てみると、おにいちゃんが女の子と一緒にいるのが見えて本当におにいちゃんか確かめているだけだよ。ほらいるじゃん ドッペルゲンガーとか」

「えっ？ 俺、女子と一緒にいたらそこまで疑われるレベル？」

そんな小町との会話をしている最中、一色が俺の顔と小町の顔を忙しく交互に見る。

「もしかしてせんばいの妹さん？」

「そうだ」

「なんですかね、今まで疑ってました。すみませんでした」

「つえ？ なに俺の口で言っていた妹が想像上の人物かなんかだと思ってたの？」

俺の言葉が耳に入っているだろう、しかし一色はそれを無視して小町へと目を向けていた。

「はじめまして。お兄さんの同級生の一色いろはです。小町ちゃんっていうんですよ

ね。よろしくです」

一色が軽い挨拶をすると、小町も玄関から姿を出して一礼し、自己紹介を始めた。

「比企谷小町です。宜しくお願いしますね。一色さん」

自己紹介ができるなんて素晴らしいです。一色さん。

できた妹だろう。

「できた妹ちゃんじゃないですか。せんぱいとは大違いです」

「あつたりめえだろ、俺と比較すんなし」

「うわあ……シスコンキモいです」

「そんじゃ、貸す本持つてくつから少しそこで待つてくれ」

「おにいちゃん？ 何言つてんの、一色さんごめんさいごみいちゃんが変なこと言つて。どうぞ上がつて下さい」

「っは？」

いやいやいや、小町ちゃん何言つてるの？

一色も言つてやれ、流石に葉山先輩ならともかくそれ以外の男の家に上がるなんてお前でも気が引けるだろ。

「ええ〜！ いいんですかあ。それじゃお言葉に甘えてお邪魔しちゃいますね〜」

すっげえわざとらしく返事をした後、なんの戸惑いなく俺んちにあがつていった。



こいつほんと遠慮って奴を知らねえのか？

「ほえー、せんぱいの家ほんとに大きいですね。リビングとかうちの倍ありそうですよ」  
小町にリビングに案内された一色がソファアに腰掛けてあたりをキョロキョロとしていた。

「一色さん、どうぞお茶です」

「ありがとうございます。小町ちゃんだっけ。私の事はいろはって呼んで良いんだよ？」

小町は何故か感極まった様な表情になっている。

「いろはおねえちゃんっ！」

「やだっ、おねえちゃんなんて……」

……こいつら何してんの？

「一色、ほれ」

俺は自室から持ってきた八幡ベストセクションの数々が入った紙袋を一色に渡す。

「せんぱい、ありがとうございます」

「よし、俺んちでの用は終わったぞ。さっさと出るぞ」

「えー、せんぱい、私ちよつと疲れたんで少し休憩してからにしましょうよ」

ソファアに座りながら足を伸ばしバタバタさせる様はどこぞの妹様と似たような仕事でデジャビュにかられる。

「おまえこれを狙って途中で休憩挟まなかったな？」

「何のことでしょうね〜？」

舌を出しながらニコツと笑顔を浮かべる様子が視界に入り、俺の憶測が真に近い事だと伺えた。

「おにいちゃん〜、小町もう少しだけいろはおねえちゃんとお話ししたいな〜」

小町は上目遣いで瞳を潤しながらおねえちゃんに話してきた。

くっそ、この短時間でなに教えやがってるんだ。

「はあ……、分かった。あんま長居すつと日が暮れちまうぞ」

「分かってますよ〜」

そうして小町と一色が喋っている合間、俺は未読本の読書にふけるのであった。

それから2時間以上は経過しただろうか。

女三人寄れば姦しいというが、2人でも十分姦しい。

と言うのも、全然彼女らの会話が途絶えることがないからだ。

こいつらどんなだけおしゃべり大好きなんだよ。

ようやく会話が一段落したのか、一色が俺を見る。

「そろそろ帰るか？」

「そうですね、長居しちやいましたし」

そう言つて立ち上がり、一色は帰り支度を始めた。

\*\*\*

小町から少し遅いから駅まで送つてあげなよと言われ、しぶしぶ俺も一色を送るため、外に出ることになった。

道中、一色はごく満悦な表情で俺に話しかけてくる。

「小町ちゃん可愛いかったー。せんばいの妹とは思えないですよ」

「だろ。知ってる」

うわあ……と若干引き気味の表情を浮かべる一色。

おい、お前が話題振つてきたのにその対応はあるまじき行為じゃないか？

「それよりもせんばい」

「ん？なんだ？」

「ずっと聞きたかつたんですけれど、なんでせんばいは留年しちやつたんですか？」

「なんでつて」

「だって、お金の問題かなとか思つたらあんな立派なお家あるのにそういうわけじゃな

さそうですし。元が不良とかだったら分かるんですけど、今日の小町ちゃんと話しているともそう言うわけでもなさそうなので気になりました」

ああ、やつば気になるよな。

「あく、なんつったら良いんだろうな……ちよつと今はまだ言いづらいな」

俺だけの話ならいくらでも言えるが、由比ヶ浜が絡んでいるとなるとあいつの学校内での評判を落としかねない。

「まあ、せんぱいが言いたくないのであれば仕方ないです。無理に聞く必要はないと思っっている内容なので」

「すまんな」

「いえいえ、言えるときが来たら教えて下さい」

「……ああ」

それから特に会話もなく足を進め、駅までたどり着く。

雑踏とする、駅の改札前で改札に向かう手前で一色が立ち止まる。

「今日は、突然お邪魔しちゃいましたね。ありがとうございます、あとこれもっ」

彼女は紙袋を俺に見せながらニツコリと微笑んだ。

「ほんとな。突然のお宅訪問とかまじ難易度たけえよ……」

「小町ちゃん可愛かったですし、また来ますね〜」

「やめてくれ……」

「せんぱいに会いに来るんじゃないやなくて小町ちゃんに会いに来るんですからね。勘違いしちゃダメですよ？」

「メールかチャットで済ませろよ。それか外で会えよ」

「そこにせんぱいがいるからこそおもしろいんじゃないですか」

「どういうこと？」

「一色ちゃん？俺のプライベート、ねえから！とか遠回しに言ってる？」

「それじゃ、今日はありがとうございました」

俺の話は無視されるんですか、まあいいや。

「きいつけてな」

『はい』といいながら一色は改札へと向かっていった。

その後ろ姿が視界から見えなくなるまで確認し、俺はそのまま家へと戻る。

家に戻ると玄関で小町が仁王立ちで待ち構えており、一色についての話を根掘り葉掘り聞かれる羽目になったの言うまでもない。

## #10—E x それでも比企谷小町は……

ボタンと玄関の扉が閉まる音がした。

今日お兄ちゃんが女の子を連れてきた。

亜麻色の髪と可愛らしい顔立ちで人懐っこくて表情が豊かでお兄ちゃんにはもったいないくらい私の私よりひとつ上のお姉さんだ。

そんないろはおねえちゃんと話をしながら思ったことは、この人はきつとおにいちゃんのことが好きなんだろうなって言う憶測だ。

おにいちゃんのことを目をキラキラさせながら話しをする姿はもうこれ隠す気ないんじゃないですかねって思う位想われてる。

妹として、兄がこんな可愛い人を家に連れてきたことを誇りに思う。

おにいちゃんもは渋ったが最後までちゃんと送ってあげてっというはおねえちゃんを送りに出かけてもらった。

1人になった小町は冷蔵庫からオレンジジュースを取り出して、マグカップに注ぐ。

マグカップに唇を当て、少しだけ口に含む。甘酸っぱい味覚が口の中に広がり、少しだけ爽やかな気持ちになった。

……が、後味にちよつとだけ……ほんのちよつとだけ寂しさを感じてしまった。場所をリビングへと移動し、目の前のテーブルにマグカップを置く。

小町はソファへと力なくもたれかかり、同時に深いため息が自然と出てきた。

「なんか思い出すなあ……」

おにいちゃんに似たのだろうか。どうも気を抜くとすぐ独り言が出てしまう。

そして昔の記憶が蘇る。

小町が家出した日、家に誰もいない日が続いた寂しさで家出したんだっけ。迎えに来てくれたのはおにいちゃんだった。

そんな幼い日の思いも次第に色あせて、思い出話のひとつになりかけていたとき、事故は起きた。

事故っていつでも骨折くらいかなって高をくくっていたのだけれど、状況は最悪で二度と目覚めないとお医者さんの口から伝えられた。

本当に目の前が真っ白になって、何も考えてないわがままなお願いがおにいちゃんと最後の会話なんてそんなの絶対に嫌だった。そんなの認めたくなかった。

原因が飛び出してきた犬を助けようとして突然車道に飛び出した事だって……最初は運転手さんに当たろうとしてお母さんに止められた。その後冷静になってみると運転手さんには悪い事をしたなって思う。

そして由比ヶ浜さんが病室にやってきた。この時病室にいたのは小町1人。そこでどこにぶつけていいかわからない膨れあがった怒りの感情を由比ヶ浜さんにぶつけてしまった。

由比ヶ浜さんには正直悪い事をしたと思っている。でも同じくらい許せないと思っ  
ている小町がいる。

その後の記憶が曖昧で何をしたのか覚えていない。ただ頻繁に話しかけてくる大志くんは若干思い出せる程度だ。

そして秋も終わりに近づいてきた日、おにいちちゃんが目を覚ました。

泣きながら病室に駆け込んだのを覚えてる。おにいちちゃんの状態が安定してきた時に学校をサボって一日中おにいちちゃんと一緒にいて、あとでバレてお母さんに怒られた。今考えるとどれだけブラコンを煩っていたのだろう。これがおにいちちゃんの言う黒歴史って奴なのかな？ 思い出すと顔がやけに熱くなる……恥ずかしい。

それからの日々はもうおにいちちゃん中心の生活だ。学校終わったらすぐに家に帰った。生徒会の仕事もあつたけれどそれは気合いと根性と愛嬌でどうにかした。大志くんは本当に優しい。きつと良い彼女が出来ると思うから全力で応援したい。

留年が決まったおにいちちゃんは常に家にいる。ただいまって言ったらお帰りって言うってくれる。こんな当たり前をもう二度と当たり前だと思いたくない。



そんな事を恥ずかしげも無くおにいちちゃんに言ったことがある。すると『小町、幸せには限りがあるんだ。それがあって当たり前って思えること自体幸せなんだぞ』って返ってきた。うん、だからこそ小町は今幸せなんだなって実感できてる。

……ただ後に『……ちよつとまつて小町ちゃん？　なんで今そんなことを聞いたんだ？　お前もしかして……か、彼氏とかできたんじゃないよな？』って詮索してきたのはちよつと小町の的にポイント低い。

そんなおにいちちゃんが2日だけ小町よりも遅く帰った日がある。すごく心配したし何度もメールのやりとりをした。ただ今日、いろはおねえちゃんの話聞いて納得した。

この2日はいろはおねえちゃんと一緒に居たのだ。我が兄ながら学生でも無いくせに女の子ナンパするとかちよつとむかついたけれどいろはおねえちゃんの話を知るとしつこいナンパを退治したり、買ひもの手伝ったりと結構紳士的な事をしていたみたいだけれど……ナンパを退治して所はおにいちちゃんらしくない。どうもいろはおねえちゃんが話を盛っている節があると小町は睨んでいます。恋する乙女は話を美談にしたがりますからね。

「おにいちちゃん……」

そんなおにいちちゃんが今日そのいろはおねえちゃんを連れてきたあたり、多分付き合

う秒読み段階なのだと思うけれど、それは妹としてはすごく嬉しい。でも……それで、いろはおねえちゃんだけを見て欲しくない小町がいる。

小町はおにいちゃんがよければ生涯一緒に生きていく覚悟だつてある。だつておにいちゃんには極端にひねくれ者で本当にちゃんと見てくれる人じゃないと……

……だから小町がおにいちゃんとずっと一緒にいるつて思つてただけどなあ……  
なんかおにいちゃんが遠くにいつたように寂しく感じちゃうよ。

ガチャリと玄関の鍵が開く音がする。どうやら見送りをしたおにいちゃんが帰つてきたようだ。

小町は小走りで玄関へと向かいお兄ちゃんを出迎える準備をした。

「ただいまー」

気力の抜けたただいまだけど、それでも返事を返すおにいちゃん。自然とうれしさがこみ上げてくる。

この当たり前が幸せなんだと小町は今も思つてるよ。

「おかえり、おにいちゃん」

\*\*\*

GWも半ば、それでも家でのびのびと小説を読んでもおにいちちゃんを外につれ出そうと『おにいちちゃん、デートしよっ』って言ったら滅茶苦茶嫌がられたけれど小町は知ってる。その後、『レイクタウンでサメの展示会やってるみたいだよ』って言うとか刺されたのか小説の本を放り投げて外に出る支度を始めた。何気におにいちちゃんは生き物を見るのが好きなのだと思う。

とりあえず武蔵野線に乗って南船橋駅から東松戸駅まで到着したのまでは覚えてい

る。そこからいつの間にか小町もおにいちちゃんも寝ていたらしく気づけばいつの間にか武蔵浦和駅というよくわからない駅に到着してしまった。

携帯で地図を確認するところは埼玉。すでにレイクタウンは過ぎていて、乗り過ぎたと言うのがわかった。

「おにいちちゃん、ちよつと乗り過ぎしたみたい。戻ろっ！」  
「いや、ちよつと待て小町。俺にはひとつ使命が出来た」

なぜか使命感に溢れ、キリつとした表情をするおにいちちゃん。いつ使命という物が出来たのか問いただしたい気持ちにもなる。

「ん？ どうしたの駅名の武蔵におにいちちゃんの黒歴史が疼いたの？」

「ち、ちげーよ、あれだ、平塚先生ついでにだろ？ 前につけ麺一緒に食った俺の高校の

教師」

あー、あの結構カッコイイ女の人のことか。

「あの人がな。ちょうど埼玉にうまいラーメン屋があるから是非行ってみてくれと言う情報があつてだな。その店名がちょうどこの名前と一致する」

そう言つて小町に見せたのが駅前で貼られているラーメン屋の広告でした。

「おにいちゃん、ここでおりたら余計お金かかっちゃうよ?」

「いやかしな……これはちよつと捨てがたくてな……ならお前だけ先に向かつてくれないか? 俺あとで向かうから!」

あいかわらずのラーメン好き。まあそういう所含めておにいちゃんなんだけれどね。

「やーだ。おにいちゃんいなかったら小町先について何してろつていうの?」

「だよなー……。わかつた、今回は諦めるわ」

「んーん。そうじゃなくて小町も一緒にラーメン屋いくよ?」

「おつ……まじか? まじか小町?」

ほんと自分の好きなことになるかとすぐに目をキラキラさせるおにいちゃん。

「じゃないと埼玉なんて次いつ来れるかわからないしね」

「そうだな。じゃあいくか!」

\*\*\*

「うーん、美味しかった！ 鮭のトマトパスタ！」

「おい、トマトパスタっていうんじゃねえよ……まああれは確かに味はパスタだったけれど」

「おにいちゃんが頼んだのが1番ラーメンぽかったよ。濃厚で美味しかったー」

「トマト嫌いな俺に無理矢理トマトつけ麵食わそうとしたお前にちよつとだけ殺意が湧いたわ」

「えー、小町おにいちゃんが嫌いな物を克服できるチャンスだと思ってやったのに駄目だった？」

上目遣いでおにいちゃんを見つめる。

おにいちゃんは小町に甘いからこうすればすぐに許してくれると思っていた。

「なに一色みたいな事してんだよ。嫌いな物は嫌いなままで良いんだよ」

……やっぱいろいろはおねえちゃんが出てきた。どうも小町というはおねえちゃんが性格的に似ているらしい。

だからこそおにいちゃんの扱いに気づけたのだろうけれども。ちよつともややもやする。

「ほらおにいちちゃん！ たべるもの食べたしレイクタウンいこつ！」  
「お、おう……そうだな」

\*\*\*

「おい、小町。レイクタウンついたぞ」

はつと意識を現実に戻す。

「えっ!? け、結構早いね」

「つてかお前電車乗って数秒で眠ってたぞ。俺が居なきや確実に海浜幕張まで行ってたな」

「どれだけ考え込んでいたんだろう。時間を忘れるまで考えてたなんて初めて……」  
「おにいちちゃんと一緒に遊んでた夢をみてたんだよ?」

そういうとおにいちちゃんは少し頬を赤く染めながら何も気にしていない振りをする。

「冗談だよ。ほらっさっさとおりよー」

「……さいですか」

それから先はもう普通に男女がいつもする様なデートと変わらない。

ウィンドウショッピングしながら小町がそのお店の商品に適当に思いついた感想を

言ってそれに対しておにいちやんが別の視点での感想を言っただけその齟齬のすりあわせをしながら時間は過ぎて行く。おにいちやんがサメを見て普段使わない携帯のカメラをどうやって起動するのかわからないであたふたしている姿は面白かった。

それから楽しい時間は過ぎて電車に揺られながらようやく地元の駅の付近まできた。

「今日は動いたな」

「そだね……」

「小町お前大丈夫か？」

「うん……」

あれ、ちよつと張り切りすぎたかな？ 眠気がヤバい。これは家まで持たない気がする

……

「おにいちやん、ごめん……」

そこから小町の記憶は途絶えていて、気がついた時、寝間着に着替えていて寝室で寝ていた。

多分おにいちやんが運んできてくれたと思うんだけど、着替えが寝間着に変わって行って、これも全部おにいちやんがやったのってなるとちよつと恥ずかしくなっただけ確認した。……うん下着はおなじだった。

いままでは気にする必要が無かったんだけどな。やけに恥ずかしい。

そんな疑問を持ちながらリビングへと向かう。

ちようど休日アニメを鑑賞中のおにいちゃんと遭遇し、若干気まずい雰囲気になる。

「おにいちゃん……あの……そのお……ごめんね。迷惑かけちゃって……」

「ん？ まあ楽しかったんだろ。それなら俺がおぶったかいてもあつたもんだ」

どうやらそんな雰囲気だと思っていたのは小町だけでおにいちゃんはさっぱりとした返事をした。

ちよつとだけムカついたので意地悪な質問をする事にした。

「おにいちゃん」

「なんだ小町？」

「おにいちゃん、いろはおねえちゃんのこと好き？」

「ちよつ!? 小町なにいつてんだよ。俺と一色はそんな関係じゃねえし」

「なら、おにいちゃんは小町とずっと一緒だねっ」

「そだね」

気力の無い返事をテレビを見ながら言い放つ。普段ならここで小町的にポイント低いとも言いたいところだけれど

こんな冗談じみた会話に幸せを感じてしまう小町はもしかして……いやきつと……

「おにいちゃん……小町さ……おにいちゃんのこと好きだよ？」



「お、おう。さんきゆな小町。俺も好きだぞこれ八幡的にポイントたけえな」

そうやってわしゃわしゃと小町の頭を撫でる。雑に撫でられてる感じだけどころか、こののは嫌いではない。

ほんとにポイント高いじゃない。

「だからおにいちゃん」

小町は諦めないからね。

## # 1 1 - 1

5連休はあつという間に過ぎ、また学校へ行くという日課が俺の生活に戻ってきた。一色が家に来た以外は家で読書したり小町とゲームしたり買ひものしたりして過ごした。

順風満帆なGWだったと言えるだろう。

でっ、その反動に休みぼけで気だるげに学校に来て、気だるげに授業をうけ、気だるいままに休み時間を寝て過ごした。

するとどうだろうか、いつの間にやらお昼休みになつていないか。

お腹が空いているかどうかというと、食欲よりも睡眠欲が勝っている。

なので今日はお昼寝する事にしようと思つて机に突つ伏した。

しばらくすると肩を叩く感触がして、突つ伏した身体を起こす。

肩を叩いた方に視線を向けると相模がどうやら俺を起こしたようだ。

「んだあ？ 相模か……何か用か？」

「ひつ、比企谷先輩、お客さんですよっ！」

若干強ばった表情で焦つた感じの相模がそのお客さんとやらへ視線を向けている。

俺もその視線を追うように首を動かす。

あつ、やつべつ。

明らかに不機嫌な表情で眉間にしわを寄せ、こちらを睨んでいる雪ノ下先輩の姿が見えて、今日が何の日なのか思い出した。

恐る恐る手を振ってみる。

すると先ほどの不機嫌な表情はどこえやら、天使のような悪魔……いや雪女の笑顔が浮かべ、手を振り返す雪ノ下先輩。

オマエヤクソクワスレテンンジャネエゾ

そんな事を思つてそうだ。

これは早く行かないと俺の命は無い。

いや、これはどうやつてもリカバリー不可の万策尽きた案件じゃねえか。

あんな冷たい笑顔を見せつけられたら、さすがの俺も即座に行動に移せざる得なかった。

そそくさと立ち上がると、雪ノ下先輩しか視界に入っていないなかった視野が教室全体へと広がった。

やつば上級生が教室に入ってくるところなるか。

それは、上級生に呼び出された奴を興味本位で観察している同級生の視線を集中的に

浴びている光景だ。

あれだ、告白した次の日にはクラスの奴らに知れ渡っている感覚と似たような感じ。だから、そんな視界は切り捨てて俺は雪ノ下先輩の元へ向かおうと足を進める。

「せんばい……」

聞き覚えのある声が聞こえて横目でその声のする方をみる。

一色、どうした？ そんな表情するのは珍しいな。

いつもの打算的な仮面が剥がれてないか？

なんでそんな心配する必要があるんだ？

そんな覚悟で大丈夫か？ って聞いている？

大丈夫だ、問題ない。

致命傷で帰ってこれると思うぜ！

そんな事を考えながら教室を出た。

「さて比企谷君、言い訳を聞こうかしら？」

天使のような雪女の笑顔を崩さず雪ノ下先輩は俺に問いかける。

その表情とは裏腹にとっても冷淡な言葉が俺に耳に入る。

「この度は本当に申し訳ありません。以後この様な事が無いように善処いたしますのでどうぞ今回だけは見逃して頂けないでしょうか」

俺は思いつく限りの謝罪の言葉を口にす。

その様は家で携帯越しに誰かに平謝りしているうちの親父だ。  
なるほどその気持ちがよく分かった。

手汗がやべえ……。

「ではその善処の方法を伺おうかしら？」

「その件に関しては持ち帰ってもいいですか？」

雪ノ下先輩はわざとらしい冷たい笑顔を止め、はあ……と軽くため息をついて真顔に表情を変えた。

「まあ……いいわ。では中庭へ向かいましょう」

「んん？ は、はい」

意外とあっさりと引き下がった事に少し違和感があったが、許してもらえたあたりなんとかなったのだろうと安堵した。

\*\*\*

雪ノ下先輩と中庭に来たのはよい。

ただ俺の憶測だが、どうも彼女は学校内では有名な人ではないだろうか？

教室でもそうだったが、皆からの注目を集めるのだ。

廊下ですれ違う生徒が皆振り向き、驚愕の表情を浮かべる。

男子高校生が裏でセッティングしている総武高校美少女ランキングなる物が存在するのであれば、確実に上位にランクインすることは間違い無いだろう。

……でつ、なんで俺が先にその話をしたか。

俺は今中庭にいる。

中庭には昼休みで人がいっぱい。

一緒にいる相手は雪ノ下先輩だ。

これで理解出来るだろうか。

そう、周りの奴らの視線は俺と雪ノ下先輩に注がれている。

「比企谷君、先ほどから挙動不審なのだけけれど？ 私まで不審者に見られかねないからやめてもらってもいいかしら」

「いえ……雪ノ下先輩、校内で結構有名人だったりします？ ちょっと周りからの視線が痛いんですが……」

「さあ、わからないけれど、名乗らずとも相手が覚えていることなら良くあるわね」

「そ、そうですか」

まあ有名かどうかの判断は第三者がする物で本人が判断する物ではないからな。

わかる訳ねえか。

「それよりも、あなたはダイエットでもしているのかしら？」

急いで出てきた為、手ぶらな俺を見て雪ノ下先輩は淡々と口にする。

「今はそんなにお腹空いてなくて」

「そういうのあとあとお腹空いていつもより多く食べてしまうから何かお腹に入れておくといいわ」

「なるほど。んじゃちよつと購買へ……」

「待ちなさい」

購買へ行こうと立ち上がった足を止められる。

「ちようどいいわ。今日はちよつと作りすぎてしまったお弁当を分けてあげる」

「っはっ。」

素っ頓狂な声が出ってしまった。

何その超魅力的な提案。

そう言つて雪ノ下先輩は小さな弁当箱をもう一つ出してくる。

光沢のある朱色で長方形の小さな弁当箱だ。

隅に小さくフラットに輪郭のみ描かれた黒ネコが歩いているデザインで上品でシンブルだ。

「えっ、いいんですか？」

「ええ。どう処理しようか悩んでいた所だったから食べてもらえると助かるわ」

「それじゃ、遠慮なく」

そう言つて弁当箱を開けると、色とりどり鮮やかなおかずの数々が見えた。

「雪ノ下先輩は自分で作ってるんですか？」

「そうよ」

「なるほど、スゴイですねこれ」

「それはほめられてるって事でいいかしら？」

「そうっすね。ちよつと想像を超えたクオリティで驚きました」

「そう、ありがと」

雪ノ下先輩はそう答えると、自分の弁当を黙々と食べる。

俺も食べるかと思つた瞬間、この状況の致命的な欠陥に気づく。

箸が無い。

チラツと雪ノ下先輩を見る。

雪ノ下先輩は作りすぎたと言つてこの弁当箱を渡してきた。



つまり、箸は一膳しかないということの意味している。

予備でもう一膳用意しているとかまず可能性としては無いだろう。

考えろ、考え続ける比企谷八幡。

何か打開策はあるはずだ。

思考を止めるな、止めるんじゃないぞ：

あつ、それは死ぬパターン。

つてか、普通に購買でもらえばいいじゃん。

あら、シンプル。

「雪ノ下先輩、お箸ってないですよね」

「あるわよ」

あるんかい。

「言い忘れていたわ。そのお弁当箱の蓋の裏にお箸を入れる場所があるのよ」

蓋の裏をよく見るとたしかに箸入れが存在した。

何このわかりにくいギミック。

人間性捧げてリスタートしねえとわからねえ位の初見殺しだろ。

「な、なるほど」

まあ結果、箸が手に入った事だ。

これでようやくご飯が食べられる。

まずはミートボールからかなと思いい口へと運び咀嚼する。

「……うめえ」

なんだこれは、俺の知っているミートボールじゃねえ。

適度に絡まったソースの主張は控えめで肉の味もしつかり引き立ててくれる。そして何気に練り込まれているしその葉が肉を食べたあとの油っぽさを解消し、もう一つもう一つと箸を進めさせる。

お湯に入れて火を通しただけのレトルトミートボールでは歯が立たんと認識させられた。

先ほどまで皆無に近かった食欲が刺激され、黙々と弁当を食べるのであった。

ただ、会話無く黙々と食べている中で、ふと耳に入ってきた、機械のシャッター音。

今回の目的を思い出し即座にその音のした方向を向く。

「あつ」

その向き先には、1度も話したことも無いし顔を合わせたことも無い女子生徒がスマホを片手に撮影していた。

隣でご飯を食べていた雪ノ下先輩がゆっくりと弁当箱を置き、その冷たい瞳を彼女に向ける。

「あなた、人に許可無く撮影する行為を盗撮と呼ぶこと位知っているわね。明らかな肖像権の侵害なのだけけれど」

「あつ、す、すみません……………」

「あなたね。彼を盗撮していた犯人は」

「えっ……………」

彼女の反応を見る限り、なんの事を問われているかわからない表情をした。

結論からいうと、彼女は犯人では無かった。

理由は簡単だ。

雪ノ下先輩は総武高校ではかなりの有名人だった。

いつもは人を寄せ付けない雪ノ下先輩が今日は昼に中庭で男子とご飯を食べているのではないか。

しかも手作り弁当を渡している。

もしかして彼氏とか？

これは大ニユースじゃないか!!

そんな場面を身内に流さない訳が無い。

今すぐに証拠を押さえて、身内に流そうという思考が働いたのだろう。

彼女ののように、場面をpushさえようとシャッター音がならないアプリを使ってスマホを向ける輩も周りをよく見ると多数いた。

この中で犯人捜しはさすがに難しいだろう。

そう考えていた矢先に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あーいたいたー。せんぱーい」

そう言つて小走りでこちらへと向かってきた。

「おお、どうした？」

「なんかちよつとした話題になつちやつてますよ、ほら」

そう言つて俺にグループチャットを見せる。

『おいおい、あの雪ノ下さんが男と昼って』

『マジかよ、どんな天変地異がおきたんだよ』

『つてか、あれ1年じゃね？』

『えっ？ もしかして年下好みとかそんな感じ？』

「ああ、やつぱりか」

「せんぱいが奥の手つて言つてた事つてこれですか？ さすがに雪ノ下先輩が出てくる

のは予想外でしたがこれは注目集めすぎですよ」

「ああ、俺も今気づいた。こりゃ失敗だな。別の手を考えなきゃいかん」

「あら、あなたは確か一色いろはさん？」

あれ？ 雪ノ下先輩は一色のことをご存じ？

「ええ、そうですけれど……。雪ノ下先輩に名前を知られているなんて思わなかったです」

「私、全校生徒の顔と名前を覚えているから」

それはそれで化け物だな。

……あれ？ 俺名前聞かれたよな？ 雪ノ下先輩？

「そ、そうなんですな」

さすがの一色も若干引いていた。

「それより、雪ノ下先輩。せんぱいの事、私も知っているんですけど、この方法は雪ノ下先輩と一緒にやると、他の生徒の興味までひっぱっちゃうので得策じゃないと思うんですよ」

「ええ、今現状を見るとそう考えざるを得ないわね」

「となると、別の策を練らないかと思ひまして、一旦はこの場から離れましょ」

たしかに、いまだスマホをこちらに向けている奴らがいる。

これ以上被害を拡大させないためにも一旦は奉仕部の部室なりに場所を移した方が身のためだ。

「一旦場所を移しましょうか」

雪ノ下先輩がそう口にするのと俺も頷いてすぐさま、場所を奉仕部の部室に移すことにした。

\*\*\*

「へえ、ここが奉仕部ですか!」

一色が物珍しそうにキョロキョロと周りを見渡す。

「今後の方針について、どうしますか」

「そうね、まさか他の生徒も干渉してくるなんて予想外だったわ」

「それじゃ雪ノ下先輩の代わりに私だっただけですか?」

一色が名乗りを上げるが、そうじゃない。

「一色、お前自分が1度晒されたあと、よく分からん男子達に言い寄られまくってたの気づいていたか?」

「たしかにそうですね」

「ぶっちゃけるとお前が名乗りを上げると俺の問題は解決しても、またお前の問題は再浮上する可能性がある」

「あー……なるほど。そういうことなんですね」

「だから、それ以外の方法を考えないと……」

言い切る前に一色は俺の前で口を挟む

「それならせんぱい、奉仕部の依頼で仕方なくせんぱいに力を貸したっていう感じで口実作ればいいじゃないですか」

「欠陥ありすぎだろ。お前は奉仕部ではないし、俺に力を貸す理由が曖昧すぎる。そもそも葉山先輩にそれを知られたらお前アウトだろうが」

そう言って、『むく』と唸っている一色をよそに、雪ノ下先輩が何か思いついたかのよう口を開く。

「比企谷君」

「はい、なんででしょうか?」

「確認のだけれど、比企谷君はこの問題をどうすればいいと言ったのかしら?」

「たしか、『今後俺を監視する様な真似はしないようにしてもらえばそれでいい』ですね」

「なるほど。1つ提案があるわ」

そう言って俺と一色は突如思いついたと言われる雪ノ下先輩の案に耳を貸す。

「限界効用逓減って知っている?」

「げんかいこうようなんですかね？」

「げんかいこうようていげんよ」

一発で聞き取れなかった一色に向けて雪ノ下先輩はゆっくりと言ひ直した。

この人、案外面倒見はいいのかも知れない。

「いや、はじめて知りましたねそんな言葉」

「あなたがコーラを飲むとして一番美味しく感じるのはいつ？」

「最初の一口ですね。キンツキンに冷えた奴ならなおよし」

「つまりはそういうことよ」

「……せんばーい」

一色はまったく想像がついていないようで俺に解説しろという視線を向ける。

もう少し想像力働かせろよ……

「つまりはあれだ、コーラは最初の一口は最高にうまいが2口3口と回数を重ねること  
で段々うめー、甘めえ……、もういいやってなってるだろ。そのことを言ってる」

「なるほど、つまりせんばいと会えば会うほど気持ち悪くなってることですね」

「おい、いきなりキラーパスのようなディスプレイかたすんのやめろよ。覚悟する前に泣い  
ちやうだろが」

「うわっ……覚悟する前に泣くってなんですか？ 気持ち悪いですよせんばい」



「解せぬ……」

雪ノ下先輩がこほんと軽く咳をし、俺たちはじやれ合うのを止める

「つまりは、周りがもういい、飽きたという所まで写真を流出し続けるとどうなるかしら？」

「連中は新たな刺激を求め始める」

「そう、新たな刺激を1から探す努力をただ見て楽しんでただけの人たちはやるかしら？ きつとそんな事しないわ。関連するなにかを新たなネタに新たな刺激を作り出すのよ」

「その目につく何かってなんですか？」

「つまりは画像の投稿者よ。SNSも今では十分に広まって下手な投稿をすると炎上なんて危険性もはらんでいるにもかかわらず、比企谷君の人間関係の写真を投稿しているようじゃさすがに疑われるわ」

「あー！ なるほど、私もたしかにグループチャットでせんぱいの写真が2回目流れたとき、しつこいなあつて思っていました」

「なるほど、それで炎上しちまった投稿者は我が身可愛さのために俺の監視を止めることとなると……そんなシナリオか」

「そうね」

……なるほど。

たしかに解決策ではある。

しかし、これには問題がある。

「質問いいですか。この方法をとるにはどうしても俺と一緒に行動する女子が必要なはずだ。一色はさつきも言ったとおりで行動できないんですが」

「あら、私じゃ不服かしら？」

「っは？」

「あなたの依頼を受けたのは奉仕部よ。奉仕部の私が遂行しなくて誰がやるの？ それに疑われたとしても奉仕部として動くのだからしつかりと動機付けはされているわ」

「た、たしかにそうですね、いいんですかね？ 雪ノ下先輩を使ってしまった。なんか恐縮なんですが」

「後輩の面倒をみるのも先輩の仕事よ」

「ずいぶんと面倒見がいいですね。最初の印象とは大違いですよ」

「あら？ 私の最初の印象はどうだったのかしら？ ぜひ伺いたいものだけれど」

あつ、最近八幡自分から墓穴を掘り進めている事が良くあるね。

気をつけなきゃっ。

やべえ、どう答えよう……

「せんばい、なに鼻のした伸ばしてるんですか？ 気持ち悪いですよ……」

「伸ばしてねえよ。一色お前なに言つて……いやなんでもないです。すみませんでした」

むく……と唸っている一色を視界に入れた瞬間すぐに外した。なんか目が超怖いよ。

なに俺殺されるの？

まあしかし、この案で行くのであれば雪ノ下先輩位しか動ける人はいない。

仕方ない、ここはこの人の言うとおりに動く事にしよう。

「わかりました、では宜しくお願いします。」

「ええ」

こうして、俺と雪ノ下先輩の摩訶不思議なタッグができあがってしまった。

解決へのシナリオは十分理解しているつもりだったのだが、俺はこの時、最大級の見落としをしていた事に気づかなかった。

## # 1 1 - 2

あれから1週間ほどが経っただろうか。

さすがに、前の昼休みのように一緒にお昼ご飯を目につく場所とかそんな事はやっておらず、放課後に奉仕部の仕事を手伝ったりして行動をとにもする程度だ。

まあ、もはや数え切れない程のシャッター音を耳にして、もはやモデルにでもなった気分だ。……嘘、正直あまりいい気分ではない。

そのおかげで結構周りからは噂が広まり、多分この話題は今総武高校でバズってる話題の1つなのではないかと思う。さすが雪ノ下先輩、影響力が段違いだ。

そんなホットな話題のおかげで俺は教室にいても興味の手を離れてしまう。

女子はヒソヒソとどこからか出てきたのかわからない根も葉もない噂に花を咲かせ、男子には嫉妬と羨望の目を向けられる。

「比企谷先輩、どうやってたらそんなに可愛い子ばかりと知り合えるんですか？」

いつの間にか隣にいた相模が話しかけてくる。

意外とこいつは良く俺に話しかけてくる。

「知るかよ、勝手にそうなってんだよ」

「なんですかその主人公属性、爆発すればいいのに」

吐き捨てるかの表情で相模は俺を見る。

相模くん、お行儀がわるいわよ。

「お前段々と口悪くなってきたな」

「ええ、比企谷先輩の取り扱いにも慣れてきましたので」

「取り扱いって俺は物かよ」

「1年C組の備品ですよ」

「お前、自分の口で先輩と呼んでいる相手に向かってそれかよ……敬う心がみじんも感じられないんだが……」

「敬う気がないですからね」

「もしかして怒ってる？　なんで？」

「なんでこんな目の腐った野郎が美少女ばかりと出会えるんじゃないや死ねよとか思ってますんから安心してください」

相模は優しい声色でニッコリと微笑んで見せた。

しかしその目は笑っていない。

「いや、怖えから」

「冗談ですよ。最近ようやくグループチャットでも変化がありました」

俺は1週間前に相模にグループチャットで少し牽制してもらう様に頼み込んだ。グループチャットというのはいわゆるクローズドな関係で締め切られている。

そこでは誰かリーダーがいて、そいつが一番の発言力を持っている訳だ。

そいつ以外の連中はとりあえず周りの空気を気にしてそれに合わせている。

しかし、相模のグループチャットは100人規模のグループチャットだ。

発言力の高いリーダーがいたとしても、この規模のコミュニティともなると早々に自分の意見を押し切れるはずが無い。

そこで俺が提案したのは相模に正論を言ってもらおうことだ。

ただ一言『最近思うんですけれどこれって盗撮じゃないですかね……』ってな。

そうするとどうだろう、水面に落ちる雫でできた波紋の如くそれは承認されて行くだろう。

なんでって正論だしな。

どうやらその変化がグループチャット内で広がってきていると相模は言っているのだ。

「おお、さすがだな」

「比企谷先輩が雪ノ下先輩と一緒にいる理由が無くなるならお手の物ですよ」

人への嫉妬でここまで動くとかこいつ……しつとマスクの才能ありそうだな。

「そ、そうか」

相模は報告を終えたあと、自分の席へと戻って行った。

こちらとしても一旦は計画通り動いていることに間違いは無い。

あともう少しこの状況を我慢すればいいだけの話だ。

せつかく昼休みなものだからここで人目につく必要も無い。

俺は席を立ち、いつものベストプレイスへと足を進めた。

\*\*\*

どうやら俺のベストプレイスには先客がいるようだ。

「あれ？ ヒツキーじゃん？」

「比企谷君？」

おや、どうやら見覚えのある顔が揃いも揃って俺のベストプレイスでお弁当を楽しんでいた。由比ヶ浜と戸塚先輩だ。

おや、もしかして2人ってそこそこいい仲なのか、俺の戸塚先輩がつ!?

ジェラシー120%だわ。

「あつ、もしかして邪魔しちゃいましたかね？」

「ううん、そんな事は無いよ。比企谷君、久しぶり」

そう言って可愛い微笑みを浮かべながら俺に手を振る戸塚先輩

全然関係ない話だが、『天使が通る』という言葉があるのだが、絶対に戸塚先輩の事を言っているよな。意味合いも戸塚先輩が通る度に皆その美しさに今話している話題が途切れる。戸塚先輩は天使。これは間違いないな。

「ヒツキーも一緒に飯どう?」

由比ヶ浜がそう言って俺ひとりが入れるくらいの空間を空ける。

まだグループチャットは解決していないが、まあ正直戸塚先輩がいるのだから多少の口実くらいは作れるはずだ。

俺はその空いた所に腰を下ろした。

「そういえば、戸塚先輩、前に2年生の方々と試合してませんでした?」

そういえば最後に戸塚先輩が転んで試合が終わったあれだ。

気になっていたのだ。

「そうなんだよ、比企谷君。最初は練習の時間なくなるからあまり乗り気じゃなかったんだけどね」

「けれど?」

「三浦さんって…という人が結構上手で、なかなかおもしろい試合が出来たんだよ」



なるほど、三浦って誰だよとか思ってしまったが、まあ試合の状況を察するに優美子先輩の事だろう。ようやく苗字がわかった。次から三浦先輩と呼ぼう。

「へえ、そうなんです。ほんとと最後の方だけ見たんですけれど、戸塚先輩、最後怪我してませんでした？ 大丈夫ですか？」

以前より温めていた戸塚先輩の怪我の具合を確かめる文句が火を噴くぜ。

「そんなに大事でも無いよ、3日くらいで治ったんだけれど」

「けれど？」

「三浦さんが、ちよつと責任感じちゃってね。少しの間だけテニス部を鍛えてあげるって言ってくれたんだ」

へえ、あの人が結構人がいいところあるじゃん。近くで見たら明らかな女帝の貫禄をお持ちなのにな。

「そーなんだ。だから優美子最近放課後早いんだ」

由比ヶ浜がその光景を思い出しか少しクスツと笑う。

「テニス部の皆も最初は凄く怖い人とか思ってたみたいだけれど、最近は慣れてきてアネゴーチって呼ばれて親しまれてきたかな」

アネゴーチってなんだよ……それ命名した奴センスなさ過ぎだろ。波動球で八つ裂きにされるぞ。

俺ならもう少しセンスのある命名するぜ。

お蝶先輩

うん、テニスボールで客席までぶっ飛ばされる未来がよく見えるな。絶対に口に出さないでおこう。

「へえー、優美子って結構熱血な所あるからね、もしかしたらテニス部入るかもね」

「そうかな?」

「うんうん、ダメ押しで隼人君にテニス部手伝っててスゴイ好評なんだーってひそかに伝えたらもしかしたらありえるかもねっ!」

由比ヶ浜? ちよつとだけずる賢いお前を見たのはじめてなんだが……

えっ? もしかして暗黒キャラ隠してたりするのん?

「そ、そうなんだね」

ほれみろ、戸塚先輩も若干引いてるし。

「でも……三浦さん来てくれたらテニス部凄く助かるから……僕頑張ってみる!」

えっ!? 由比ヶ浜……なんて事をしてくれたんだ。戸塚先輩が墮天してしまったで

はないか。

トツフアーになっちまった。墮天しても世界一可愛い事には変わりない。問題はな  
いな。

「そういえば由比ヶ浜さんはどうしたの今日は？」

「あー、そうそう。ちよつとさいちやんに聞きたい事があつて」

あれ、この二人がいつも昼休憩一緒に仲良しコンビだと思つたのだが、そうでもなかつたのかな？

話の流れから二人の関係を仮説すると、久し振りに話す知人の二人的な位置付けだ。

「奉仕部つて知つてる？」

「あー、知つてるかも。最近よく教室でも話題になつてるよね。あの綺麗な人がいる部活でしょ」

奉仕部が話題？ えっ？ 昔からある部活なのに今更話題？

「そうなのか？」

「うんうん、あつヒツキーも確か依頼したんだよね？ なんか雪ノ下さんと一緒に映つている写真結構出回つてたよ」

あー、あれ2年生にもやつぱり出回つてたか。

「まあたしかにそうだが」

「雪ノ下さんどんな人だった？ 僕たちJ組の人たちとあまり関わりもつてないからちよつと気になるんだ」

戸塚先輩が興味津々な顔を俺に近づけて言う。

近づく戸塚先輩から香る天使の芳香に俺は意識を持って行かれそうになる。

「まあ、少しキツいところはありますけれど、面倒見のいい人ですよ」

「へえー、ちよつと怖いなあ……」

戸塚先輩の怯えてる姿を網膜に焼き付けておきたい気持ちに駆られる。

「そうなんだ。誰か依頼した事ある人いたら話聞こうかなつて。つで大丈夫そうだったら依頼してみようかななんて」

由比ヶ浜は何か依頼したいことがあるのだろうか？

つてか大丈夫そうつて何だよ。あの人毒舌は持っているが人は噛まないぞ。物理的にはな！

まあ、俺はその言葉の返答をしなければならなかった。

「由比ヶ浜、今依頼は控えた方がいいかもしれん。その最近話題にあがっているおかげでメチャクチャ忙しいみたいなんだよ」

そう、最近の奉仕部はやけに人の出入りが激しい。

いきなりブーム乗っかちまった古い老舗店舗かの如く放課後の部室前に行列が絶えなかった。

「あー……やつぱりそうだよ。今めつちや話題だもん。わかった、少し様子見てから依頼することにするー」

「そうしてくれ」

会話がひと段落しシンツとした空間があたりを支配する。

これが戸塚が通るといふ状況だ。

「つてかヒツキー」

そのシンツとした空間を打ち壊し由比ヶ浜が口を開く。

「なんだ？」

「ご飯食べないの？」

「……忘れてた」

すでに昼休みも半分過ぎていた。

俺はいそいそと弁当を胃袋にかっこんだ。

\*\*\*

結局のところベストプレイスでの件は杞憂に終わった。

教室に戻って相模に確認を取ったがどうやらグループチャットにも新たな投稿は存在しないらしく、さらには大元のSNSアカウントが炎上気味という見事にシナリオ通りが進んでいる。

そのことを報告するべく俺は、放課後奉仕部の部室へと赴いた。

「あら、もう来たの?」

部屋にはすでに雪ノ下先輩がおり、カップを取り出す準備をしていた。

「ようやく進展があつたんでさっそく報告にと思ひましてね」

「そう。紅茶を淹れるわ。座つて少し待つててちょうだい」

「うす」

しばらくすると、紅茶の淡く甘い香りが俺の鼻腔にまで届く。

以前、小町が1度飲んで以来使つてなかつた紅茶の茶葉があまつており、それを奉仕部に献上したのだ。

淹れ方によつて香りも変わるのか、非常に上品な香りが漂う。

「あなたがくれた茶葉、なかなかいいものだったわ。本当に頂いてもいいのかと思つただけど?」

そういいながら俺に紙コップを差し出す雪ノ下先輩。

「いえ、家にあつても誰も紅茶飲まなかつたんでちょうどいいですよ」

「そう、なら遠慮なく使わせてもらうわ」

つつつと微笑むその表情一つで息をのむ。

「さて、お待たせしたわね。話を伺うわ」

「現状、グループチャットで……」

その言葉の最中、ノックの音が鳴る。

雪ノ下先輩もふう……と軽くため息を吐いた後、どうぞと言葉を続ける。

「比企谷君、ごめんなさい。どうやら来客のようね」

最近はこういうことが多い。

やけに奉仕部に対しての依頼が多いのだ。依頼人も1日に10人は優に超える。

しかし依頼内容はこの部活の趣旨を把握していない依頼内容が多い。

まず依頼内容を確認する時点で8割は雪ノ下先輩によって却下される。

しかし内2割は依頼として受けている。

俺はただ問題を見て見ぬ振りをしようとしているのかもしれない。

その問題というのは奉仕部という部活の存在を学校の生徒に認知されたということだ。

生徒に認知されるということ自体はきつと部活動をする上でいいことなのだろう、そりや活動理由が依頼を受けてそれに対して協力するという部活だ。

協力依頼が来れば来るほど部活動の評価が上がる。

しかし問題なのは現在それをしきっているのが雪ノ下先輩ただ1人という現状だ。

では何故奉仕部は認知されてしまったのか。

今までは1人で奉仕部という部活をきりもりしていた雪ノ下先輩。

しかしいきなり見知らぬ男子とともに行動しているのではないか。

彼氏なのだろうかと野暮な問いかけをする輩もいるだろう。

それに対し彼女はきつと、奉仕部の依頼と答えるだろう。

そう、ここで奉仕部の認知が広まるのだ。奉仕部って何？ ってな感じだな。

完全に俺も見落としていた。ここが落とし穴だったのだ。

よって現状、この様な状況に陥っていると推測するのが妥当だろう。

解決策としては誰か部員を入れることにより解消するはずなのだが、それを止めているのが平塚先生だろう。

なぜか、葉山先輩の時と同じだ。綺麗なものには色々と群がるんだよ。

雪ノ下先輩のあの性格は人を選ぶ。そこを理解してのことだろう。

一過性のイベントであると信じたいが、さすがに1人ではいつか身体を壊してしまうのではないかと心配してしまう。

「わかりました、また明日報告します」

「その必要はないわ」

そういうと雪ノ下先輩は一枚の紙切れを差し出した。

「これは私の電話番号とメールアドレスが書いてあるから失くさないように、今日中にどちらでもいいから報告を入れて貰える？」



「わかりました」

さすがにアドレス打ってとお願いする雰囲気でもないのです、そそくさと紙と紅茶の入った紙コップを持って部室を後にした。

## # 1 1 — 3

『現状、大元の SNS アカウントも炎上しているみたいなので、あとは時間の問題だと思います』

『油断は禁物よ。追い込まれた人って何するかわからない事が多いから。最後まで気を抜かないで』

年単位で電話という機能を使わなかった俺が、まさか学校一の美女と通話しているなどどんな偶然だよとおもいながらドギマギと報告を済ませる。

『そうですね。これならあとは勝手に自然消滅してくれるはずですよ。ただ……』  
『ただ？ 何か心配事かしら？』

俺がいなくなると雪ノ下先輩が本格的にひとりりで依頼に立ち向かう必要がある。

1週間という短い期間なのだがこの人と一緒にいて分かった事があった。

圧倒的に技能には優れているのだが圧倒的にスタミナが無いのだ。

だからこそ俺が体力仕事を任される事が多かった。

……俺も文化系なのだが女子よりかは力があるからまあ仕方が無いがな。

雪ノ下先輩は言わばガラスの剣といったところなのだ。

そう、この依頼が完了すると今後、雪ノ下先輩ひとりで大変ご好評頂いている奉仕部の依頼のすべてを請け負う事になる。

そうなる奉仕部が崩壊することは目に見えていた。

『いえ、依頼が立て込んでるように見えたので』

『……あなたは奉仕部ではないのだから、気にする必要はないわ。大丈夫よ』

俺は部外者と線引きされた。

少し手伝ったからと言って奉仕部の一員となった訳ではないと再認識する。

『そうですか。わかりました』

『それでは、また何かあったら連絡して』

そう言って通話が切れる。

いままで気にもしなかった自室の静寂が俺の中にある喪失感を増長させる。

なので俺は俺を自制させる。

どうしても彼女はひとりで立ち向かうようだ。

そうなる俺がする事はもう無い。

相手が大丈夫と言っているのだから、これ以上追求する必要も無いだろう。

例え大丈夫と言っている奴が大丈夫でなからうが、それを察しろというのは相手に自

分の感情を理解し、行動しろと押しつけているに他ならない。

そんな数回しか会ったことの無い相手に、察しろというのはいささか理不尽な話だ。それは助けてと言葉に発さなかった本人の責任だろう。

余計なお節介は勘違いを生む。昔の俺は幾度となくその失敗を犯した。だからこそ理解しろ、勘違いするなと俺を客観視しているもうひとりの俺が論してくれる。それにより自制が保たれている。

その大丈夫が口癖なのかプライドなのかはわからない。

ひとりのできると言っているのだ。何を心配する必要がある。

これ以上の思考は底なし沼にハマると判断し、俺は考える事をやめた。

\*\*\*

昼休み。俺はいつも通りベストプレイスへ向かう。

そこには先客がいた。

最近やけにこの場所で人と遭遇するのだが……

元々よく人が来るのだろうか？ 風が気持ちいいから仕方ない。

つてか、昼休みになっていきなり教室出ていったなと思ったらこんな所にいたのか。

「一色か」

一色は俺の声を無視して黙々と弁当を食べていた。

「おーい、一色?」

それでもまだ俺を無視する一色。

どうしたこいつ?　なんだ今日は機嫌が悪いのか?　それだったらこんな所来ねえし……まあいいや、触らぬ神に祟りなしさっさと退散しよう。

俺がその場を去ろうと一色に背を向けると後ろからズズズとすさまじい音がした。振り向くとスポルトツブを吸いながら半目でこちらを見ている一色の姿があった。

どうやら俺は触らぬ神と気づく前に触ってしまったらしい。

一色ちゃん?　スポルトツブそんな勢いよく吸っちゃうとむせるよ?

「これはこれは……最近学校一の美少女とよくいるせんぱいじゃあないですか?」  
「すつげえわざとらしいご紹介ありがとうよ」

「それよりこつち来てくださいよ」

一色がペチペチと隣の空いている場所を叩く。

「すげえ怪しんだけど……」

「なにも怪しいことはしませんよ、ほらこつちこつち」

一色はペットを呼び寄せるみたいに両手をリズムカルに叩く。

犬じゃねえんだからそういう呼び寄せ方やめろよ……

俺は呼ばれるがまま、一色の隣に腰を下ろす。

「んで？ なんだよ」

「はいこれ」

そう言つて渡されたのは小さな弁当箱。

「ん？ なんだこれは？」

「見てわかりませんか？ お弁当です」

「んなもん知つてるわ。聞いているのはなんでそれを渡される必要があるのかだ」

「だつてわたし、葉山先輩ねらつてるじゃないですか」

なんだろう、そのくつそ甘つたるい声を久し振りに聞いた気がするわ。

「ああ、そう言つてたよな」

「そう、葉山先輩にお弁当を渡すには失敗なんて許されないわけですよ。他にも料理が上手な方々が沢山いるわけですし、そういう所でポイント落とすとかあるまじき怠惰だと思ふんですよね」

「なるほどな、まあ言いたいことは分かった。つて事はあれだろ、実験」

「理解が早くて助かります」

そう、以前俺は一色の実験に付き合つた。

ただ思うところもある。

「俺お前の依頼完遂しただろうが、俺がそれを引き受ける必要があるか？」  
「せんばい、私の依頼内容しつかり覚えていますか？」

俺の顔をのぞき込みながら一色が質問を繰り出す。

強制的に視界に入る可愛らしい顔立ちに少し動揺する。

「あれだろ、葉山先輩とお近づきになりたいっていう依頼だろ」

何だっけか、詳しくは覚えてないが多分そんなニュアンスだったはずだ。

「違いますよ、『わたし、気になる人がいるんですよ』です」

あれ？ そんな内容だっけか？ 認識の齟齬って奴か。

っつてか依頼内容曖昧すぎだろ。

「葉山先輩に近づけてやったのにまだなんかあんのかよ」

「こう見えて私く、結構努力家なんですよ〜？」

「努力家は努力するとは言わん」

「そんな事はどうでもいいです。とにかく依頼はまだ継続中なんですよっ！」

「マジかよ………すげえ面倒くせえ」

「せんばいには実験に付き合ってもらいますからね！ 逃げないでくださいねっ！」

「……わーたよ。食い物は粗末にできんしな。食うわ」

「ありがとうございます。ではこれ使ってください」

そう言つて俺に箸を渡してくれた。

おつ、気が利くじゃねえか、最近コンビニでも箸の有無に気を取られるんだ。

変なギミックが存在しねえか細かいところまで気をつけないといつの間にかYOU R DEADだかんな。

「どうしましたせんばい?」

「いや、何でもねえ」

変なこと考えていたのが顔に出ていたか。

少し反省して俺は弁当箱の蓋を開ける。

するとなんとということでしょう。

普通のお弁当だ。

いや普通というのはあまりにも表現がなさ過ぎた。

しっかりと彩りは考えられており、男が作るような俺の好みしか入れない茶色一色の弁当ではなく、緑黄色野菜もふんだんに使われ色彩よくまとまっていいていい。

花柄にんじんとか可愛らしいじゃないか。

しかし俺は、あの雪ノ下先輩の弁当を見てしまったがために、若干見劣りしてしまうのは仕方がない。

しかしあれだ、葉山先輩の為の実験だからといってあんな完璧を求められても一色も



困るだろう。

だから俺はこうなのだ。

「ほう、プチトマト以外はいいんじゃないか？ うまそうだ」

「せんぱい？ トマト嫌いなんですか？」

「そうだな」

「へ〜」

一色ちゃん？ 少しは興味持ってもいいんだよ？ あからさまに興味なさそうに返事すると傷ついちゃうよ？

「それより問題は味ですほら食べてくださいっ！」

ちよつ、一色せかせかせせるな。

俺は一色にいわれるがまま、とりあえず目についた卵焼きを一口つまみ頬張ると横であつと小さく呟く一色の声が聞こえた。

何だ毒でも盛ったか？ と横目で一色に視線をうつすと淡く頬を染めつつにやついていた。

「どうですか？ 美味しいですか？」

「ああ、出汁きいててうめえ。まあ俺は寿司屋の卵派だけだな」

「あつ、そういうのはいいんで」

余計な情報はいらないうてさいですか……

そのまま弁当を全部平らげた。もちろん実験ということで一定の成果物はアウトプットしてやらねえと一色にまた何か言われてしまう。なので俺は正直にありのままを口にすることにした。

「うん、うまかった」

お前の語彙力はそんなもんかというならそういうがいい。

しかしだ、食通でもねえ一般の男子高校生の味覚なんざこんなもんだ。

基本腹に入ればそれでいいし、あとは舌にダイレクトに伝わるうまい、甘い、からい、まいう〜以上だ。

あれ、うまい2回言った？ 勘違いだ。

「お粗末様でした」

そう言つて一色はニッコリとした表情を維持しつつ俺が完食した弁当箱を片づける。

どうやらご満足頂けたようだ。

「そういうええそろそろ解決しそうですか？」

一色の問いかけはきつとグループチャットの件だろう。

「もうちよいつて所だな。ようやく周りが事態を理解したみたいだ」

「そうなんですな、皆考えたらすぐわかる話なのになんで止まらないかな〜」

ぷんすかと一色が頬を膨らませて不機嫌なご様子だった。

俺のために怒っている様子だったので悪い気はしない。

「そういうなって、誰かストッパーがいなかったからこういう事態に発展しちまったんだろ」

「それよりも、この状況撮られちゃってたらどうしましょうね」

この状況とは多分この状況のことだろう。

学校の人気の無い所に2人きり、あまつさえ手作り弁当すら頂いている始末だ。

……うん、誰がどう見てもちちくりあっているように見えるな。

この状況を作り出したのお前だからな？ まじどうすんだこれ？

「はあ……どつかの亜麻色の髪の乙女の作りすぎた弁当を通りすがりの俺が処理していたって口実で良いだろ」

「なんですか口説いてるんですか？ 亜麻色の髪の乙女って表現が出てくるあたりでしてやったりのドヤ顔になってて気持ち悪いです。口説くんならもつと自分の言葉で表現して貰っていいですかごめんなさい」

「なんでいきなり俺が口説いている話なってんだよ。この状況の理由付けの話だろうが。あ、あとどやってねえし」

？、ちよつとだけ俺うまいこと表現したと思った。

「それとも葉山先輩へのお弁当を作る為に密かに特訓中とでもいうか？」

「それいいですね。それにしましょう」

葉山先輩への想いそんなオープンフルアクセスよろしくな感じでいいのかよ。

「まあ、それでいいならいいか……」

嘆息をもらし、俺はこの場面が撮影されていないことを祈る。

「それよりも雪ノ下先輩が心配だな」

一瞬、一色の身体が揺れる。

「えっ？ どうしてですか？」

「どうやら最近になって奉仕部の依頼とやらが急激に増えているみたいだな。ひとりできりもりするのもかなりキツいだろうなって考えてる」

「もしかしてせんぱいは雪ノ下先輩を心配していますか？」

「奉仕部の認知が広まったのは俺の依頼が原因って感じだしな。少なからず心配はするだろ」

「そうなんですな。でもせんぱいは雪ノ下先輩の何を心配しているのかって気になったんですが。私から見てあの人はなんでもひとりできる……なんていうんだろう……孤高の人？ みたいな感じなんですけれど」

「あの人、極端に体力ねえんだよ」

「あ、なるほど、意外な欠点があったんですね……」

どうやらそれだけで一色は察したようだ。察しが良くて助かる。

「それじゃせんぱいはどうしたいんですか？ 雪ノ下先輩のお手伝いを続けるんですか

？ でもそれって結局、部外者のお節介って感じになりませんか？」

「だよなあ……」

結局の所俺はどうしたいのだろうか、最初はただ厄介事を解決してもらいたいそれだけだったはずだ。

それがきっかけで奉仕部が認知され忙しくなり、俺は彼女のスタミナを心配しだした。

あれ……？ 俺もしかして？ 雪ノ下先輩が好きなのか？

さて、勘違いするな。その考えは早計すぎる。

この勘違いで幾度となく失敗し、肩身が狭くなった中学時代を思い出せ。

その感情を抜きに考えるとおのずと答えは出てくるだろう。

俺は奉仕部の依頼が増えることにより今現状続いている俺の依頼に不都合が生じないかを懸念しているのだ。

「ただ俺は依頼を不都合なく終わらせて欲しいだけだ」

「それがわかればもう答えは出ていますよね」

一色はすこし微笑をみせながらそう答えた。

ベストプレイスに吹く風は優しく身体を撫でるように俺を吹き抜けていった。

\*\*\*

放課後に俺は職員室にいる。

対面に座って煙草をふかす平塚先生を前に俺は自身の考えを口に出す。

「平塚先生、先日は奉仕部を紹介して貰ってありがとうございます。依頼もおおむね解決に向かっているところですよ」

「それはよかった。さすが雪ノ下と言った所か」

「それで少しご相談がありました」

「なんだ？ 言ってみろ」

「今回の件で少し奉仕部に興味が出たんで体験入部したいのですが」

「ほう、悪いが私はお前が熱心に部活動をする様なタイプでは無いという先入観があったのだが」

「さすがは平塚先生だ。俺が部活に興味を持つ事があり得ない事くらい見抜いているようだった。」

これではどう見繕った言葉を吐いても通じないだろう。だから俺はこういうのだ。

「まあ、その通りなんすけれどね。でも現状、人がいないと奉仕部の信用の根幹に関わると思いますよ」

真つ向勝負だ。

「ほう。奉仕部が……か……続けてみる」

「現状見ての通り、奉仕部の人手不足で雪ノ下先輩がすべての依頼をこなしてますよね。タイミング良く依頼をした俺が一番近くで見てたのでそれとなくわかるんすよ。これは明らかに雪ノ下先輩のキャパシティを超えてるって」

「なるほど」

「普通なら人員を補充する事で解決するはずのこの問題を平塚先生が知らないはずはない」

そう言って平塚先生の双眸をまっすぐと見つめる。

平塚先生はふつと笑い、ゆっくりと口を開いた。

「そうだな。実際雪ノ下目当てで入部を希望する輩が増えた。だからこそ必ず入部の際に入部希望者には入部試験と称して必ず聞くようにしている事がある」

「それはなんですか？」

「なあに、簡単な質問だ。お前は雪ノ下雪乃をどう思っている」

どう思っているか……そうだな。

ただ単純に思いつくならば頼りになる先輩だ。

後輩のためにわざわざ身を犠牲にしても依頼解決にむけて行動してくれる頼れる人だ。

聞けば学年トップという切れ者だし運動神経もいいらしい。

本当にすごい人だと思う。

もし仮に俺が交通事故に合わなかったとして同級生となっていたならば、俺は彼女に憧れを抱いていたかも知れない。友達になりたいと思っただかも知れない。

しかし……だ、その回答では多分違うのだろう。

となると、だ。

「何でももっていて、何でも出来る。たぐいまれなる優れた容姿をもっていて、青春を謳歌し中心人物になる事を神から許されたであろう人がそれをしていない……なにそれ持っていない者に対する傲慢なの？ ファッションボッチなの？ 真性ボッチに対する嫌みかよ。ノブレスオブリージュ？ ふざけんな見下すんじゃないやねえよ。爆発すればいいのに……って思ってます」

そう答えると平塚先生はぽかんと気の抜けた顔になっていた。



しばらくしてじわりじわりと笑いがこみ上げてきたのだろうか、煙草を持つ手で顔を隠しているが肩が震えているのとクククとかすかに笑い声が聞こえているのでモロバレだ。

「これは予想だにしなかった回答だな」

「はあ……」

我ながら相当捻くれた回答をしたと思う。

むしろこれを雪ノ下先輩に聞かれなかったことが救いである。

「どうやら君は、相当捻くれた思考をしているようだな」

「まあ過去にいいことが無かったですからね。正直者でピュアな性格は中学校に置いてきましたから」

「そうかそうか……それは非常にもつたいないな。君の思考を矯正する必要があるがそうだな」

ちよつ、いきなり矯正とか言われて困るんすけれど……

「はあ……」

「奉仕活動でもして雪ノ下とともにその考えをあらためていけ。異論反論抗議口答えは認めない」

平塚先生は勢いよくまくし立て、判決を申し渡す。

その判決は奉仕部としての活動を許されたと認識してもいいだろう。

「あのお……体験入部でいいんすよ？ べつに本入部するとは……」

「奉仕部に体験入部は存在しない。君のその歪んだ考えが直るまで奉仕活動に勤しむと

いこ」

？ だろマジかよ。

こうして俺は不本意ではあるが、奉仕部として入部することを許されたのだった。

## #12—1

次の日の放課後。

奉仕部の部屋に入ってきたらすでに居た雪ノ下先輩の姿が見えた。

あれ？ 俺HR終わったら真っ直ぐに来たはずなのになんでこの人こんな早いの？

もしかして額に二本指添えただけで瞬間移動とか使えたりする？ めっちゃ便利じゃん。

俺にも教えて欲しい。

「比企谷君。一体どういうことかしら？」

そう言つて俺を睨む妖怪雪女こと雪ノ下雪乃先輩がその名に恥じぬ冷淡な一言を口にする。

まあそう言われる理由も分かっちゃいるんだけれどね。

平塚先生経由で俺が奉仕部へ入部する事が知らされたと読んだ。

「いやあ、ひよんな事から入部する流れになつてしまいましたね」

平塚先生に話したことを洗いざらい雪ノ下先輩に話すと、今後の学校生活に支障をきたす事になりかねないので意地でも濁す流れで進めさせてもらう。

「そのひよんな事というのをもつと具体的かつ論理的に解説願えるかしら」  
 「平塚先生と話していたら気づけば奉仕活動命じられたって感じっすね」  
 「その話ではまったく状況が掴めないわ……何をどうしたらそれで入部する流れになるのかしら……」

雪ノ下先輩は問い詰める事を諦めたのか軽くため息を吐く。

それに乗じて、この『何故入部したのか』話題を変えなるべく俺は舌をふるう。

「そんな事よりも、この仕事の山手分けして片づけていきましよう」

どっかの打算的な女子がよく使う手法を使って切り抜けることにした。

最近俺、一色の言い回しをよく使っているな。汎用性あるんだわ。

「そうね、決まってしまったことをこれ以上気にしても仕方がないわ」

そう言つて雪ノ下先輩は目の前にあるノートパソコンへと視線を落とし、奉仕部への依頼メールを覗く。

俺も雪ノ下先輩が座っている長机の端に椅子を持ってきて腰を下ろす。

「今日も依頼は沢山来てるわよ」

「最近絶賛人気の奉仕部ですからね」

「ほぼ間違い無く私目当てというのは目に見えているけれどね」

「おいおい、言い切りやがったよこの人。たしかにそうだけれどもう少し謙虚さつて学

んだ方が良くないか？

「人気最下位の俺と合わさってちよūdい塩梅になるんじゃないすかね？」

「なに？ あなた私のこと好きなの？」

なんでそんなドギマギするようなことを真顔で言っちゃうかな？

「どこの恋愛脳ですか。そういう意味で言ってないです」

「知ってるわよ。からかっただけよ」

そんな会話をしながらも雪ノ下先輩のブラインドタッチは止まらない。

なんだこの人、マルチコアなの？ 最近主流はオクタコアらしいけれど、なに？ もしかして雪ノ下先輩は聖徳太子でも目指してるのん？ そもそも8人同時に話しかける状況がそんな頻繁にあるとは思えないけれどね。人それを技能のムダ遣いという。まあそれがおもしろいんだけどね。

「とりあえず、私はメールや直接交渉が必要な案件を対応するから、比企谷君は肉体労働の依頼をお願い。詰まりそうなら連絡頂戴」

えっ？ マジで？ だから俺文化系でそんな体力無いのですが……

「入部したからにはこき使ってあげるわ」

そう言っつて不適に笑う雪ノ下先輩を見て、俺は入部を早まったかと後悔した。

\*\*\*

それから数日が経った。

俺の周りではグループプチャットの件なんて無かったかのような振る舞いだ。

これでもうやく腰を落ち着けられるというものだ。

依頼の数もだいぶ落ち着き、紅茶の香りを楽しめる時間が確保出来るまでになった。

文庫本を読みながら紅茶の香りはほのかに鼻腔に入り、安らぎを与えてくれる。

この時間は悪くない。そう思えた。

リア充はこういった時間必ず誰かと話していなくちゃならない呪いにかかっているのか、常に誰かと雑談を興じている。

しかし雪ノ下先輩は文庫本を読んでいて、雑談とかそういった事を興じる必要は無いと表現していると俺は読んだ。

そんな事を考えているとどうやらこの静寂な時間は終わりを告げるらしい。

ノックの音が2回部室内に響いた。

どうぞと雪ノ下先輩が口にする、見覚えのある顔連れが入ってきた。

「由比ヶ浜……と葉山先輩？」

失礼しますと陽気な挨拶で入ってきたのは由比ヶ浜と葉山先輩だ。

陽気な由比ヶ浜と比べ葉山先輩は少し気まずそうな表情で入ってきた。

「あれ〜！ ヒツキーじゃん！」

あと、いきなりそのあだ名で呼ぶのは正直止めてもらいたい。

雪ノ下先輩に変なあだ名を覚えて欲しくないんだが……

「んだよ由比ヶ浜、いたら悪いか？」

「どうしたの？ ヒツキーも何か依頼とか？」

「そういうわけじゃねえ、俺奉仕部に入ったんだ」

「あー、そうなんだ。……って!? 超意外すぎるんだけどっ!？」

えっ、そんな驚くこと？ ってか声でかい。

「えっ？ そうなの？」

「だってヒツキー、部活なんてやらないぞって感じじゃん！」

「マジか？ そんな雰囲気出してた？」

「うん、超だしてた。俺に部活の話題振るんじゃねえぞ感」

なにそんな雰囲気出してたの俺？ もしかして脳よりも早く身体が反応する極意、身

勝手の拒絶を会得していたのか？ それとも拒絶色の覇気か？ すげえ、宇宙一の嫌わ

れ者になれんぞこれ。

……そうだったら俺の居場所ねえじゃん。拒絶色ってなんだよ。

こほんと雪ノ下先輩が咳き込み雑談を中断させる。

「そろそろ本題にいつていいかしら？ 確か同学年の由比ヶ浜結衣さんと……葉山君」

どうやら雪ノ下先輩と葉山先輩は知り合いみたいだ、雰囲気を読むにそこまで仲がいい関係ではなさそうだ。

葉山先輩を見るとたははつと気まずそうに苦笑し頬をかいていた。

「そうそう、依頼なんだけれどちようどヒッキーもいるし聞いてほしいんだよね」

そう改まって余っていた椅子を長机に寄せて二人は腰掛ける。

「私の依頼はある人との仲直りなんだ」

ある人とは小町のことを言っているんだろう。

由比ヶ浜はどうやら時間に頼らない道を選ぶようだな。

「……まじか」

「まじまじおおまじだよっ！」

ふざけてんのかこいつ？

「本気感が全然伝わらねえよ……」

「マジごめん」

「お前ネタでやってんのか？」

「ごめんなさい……」



由比ヶ浜がシユンとなつてしまつた。

ちよつとキツイ言い方したかな？

「比企谷君は知つてゐる人？」

雪ノ下先輩が間に入り質問をしてきた。

知つてるも何も俺の妹なんだが、由比ヶ浜の口調的にどうも詳しくは隠したい様子。

なので俺も詳しくいうことは避けようと思つた。

「そうですね」

「そう。だいぶ入り込んだ依頼のようね」

雪ノ下先輩はどうやら俺の口調で察してくれたようだ。

そういった所は非常に助かる。

「たしかにそうですね。まあ話は分かつた。詳しくは後でだ」

「それで？ 葉山君はどういつたご用なのかしら？」

あー、これは俺が最初に奉仕部に来たときの口調と同じだわ。

葉山先輩デフォルトで雪ノ下先輩からの敵対心アップのデバフついてません？

つと、そんな事よりもこれでは話が進まなさそうだ、ちよつとだけ口を挟むか……

「雪ノ下先輩、ちよつと雰囲気固いんでもう少し和らいで貰えると助かるんすけれど

……」

「あら、ごめんなさい。気をつけるわ」

「俺の依頼なんだが、ちよつと前から俺のクラスでよく出ている話題なんだが、これを見  
てくれ」

「おおう、個人名でてるのか。これはひでえ……」

内容はどれも個人名をあげての誹謗中傷が書かれている。

俺も前まで個人集中型のネット被害者だったからちよつと当事者の気持ちがかつ  
てしまう。

「そうそう、このメールすごいよく回ってくる！ほんと酷いよね！」

えっ結構前から出回っていたの？よく放置していたねこれ。

「いわゆる不幸のメールという奴なんだが、全然治まる気配がなくてな」

不幸のメールというよりも煽り文書と言った方がしっくりきそうだがまあいいや。

「なるほど、双方の依頼は分かったわ。先に由比ヶ浜さんの依頼から大丈夫かしら？」

「それはかまわない。一応俺も結衣に相談されているくちなんだが同席してもいいか  
？」

「ええ、いいわ」

「それでは、由比ヶ浜さん。ある人との仲直りについて少し詳しく話を伺ってもいいか  
し？」

「私、1年前にある事故が原因でその人のお兄さんに大怪我させちゃったんだ。それで入院している病院で謝ろうとしたんだけど怒らせちゃってそれっきり……」

「なるほど、それでその人のお兄さんとは会えたの？」

「うん、ちゃんと謝ったら気にしてないよって……すごい優しいよね」

由比ヶ浜、チラッとこっちみんな。

過去を掘り起こされているみたいですげえ気恥ずかしい。

「なるほど。それじゃそのお兄さん経由で会ってみるのがいいのでは？」

「うーん、いきなり直接会ってくれるか心配なんだよね……もつと距離を縮めたいというかなんというか……」

「俺もそれは提案してみたんだが、結衣はまだ直接会うタイミングじゃないらしいんだ」  
「直接会うとかじゃなくてもメールとか電話とかチャットも最近は流行っているでしょう。そう言ったツールを使ってもダメ？」

「うん。なんというか二人きりの空間っていうのが息苦しく感じちゃうかも知れないんだよね」

まあ、たしかにネットを使つてのコミュニケーションは可能だろうが、メールやチャットではごまかしがきく分、誠意が伝わらない事が多い。

土曜の朝、気になる娘にメール送って月曜にごめん寝てたって返信くるくらいごまか

しがきくんだぜ。

そりや誠意なんて伝わらねえよな。

小町の現状からして、まだ直接会うつていうのは避けた方がいいし、由比ヶ浜がへんな事言つてもリカバリー出来る人間が近くにいた方がいいと思う。

この話題に対する俺からの意見はこうだ

「それなら仲介させるか、兄貴に」

「比企谷君、どういうこと？」

「由比ヶ浜は直接会いたくないが、いつでもどこでも繋がっているネットに頼ると互いの微妙な関係で繋がっているから互いに息苦しくなるつて心配してんだろ」

「うん、そう……そうだね！」

「つまりは直接会うこと無く、自分が伝えたい事を人づてで伝えることが出来ればいい」  
「なるほど。そういうことか。考えたな比企谷」

葉山先輩はいち早く気づいたようだ。

「兄貴に手紙を渡せば次第に距離を縮めることができるんじゃないか？」

「手紙……それなら気持ちも伝わりそうだよねっ！ そうだっ！ そうだよ文通だよ

!!」

よっし、これで決まりの雰囲気だな。

後は俺が小町にどうやって切り出して手紙を渡すかだがそこはちと考えないとな。

「まって、お兄さんはともかくその相手は怒っているんでしょ。確実に手紙を読むとは思えないわ」

雪ノ下先輩が鋭い指摘をしてきた。

さすがに小町は手紙を読まずに捨てることはしないとは思いますが、たしかに渡したところで確実に読むとは思えない。

さつきまでの雰囲気が一気に落ち込んだ。

「雪ノ下さんは別の案でもあるの?」

「私は別に比企谷君の案がダメだとは言っていないわ。ただ謝罪の際は菓子折くらい添えてあげると読んでくれる可能性は高くなるんじゃないかしら?」

ああ、菓子折か。

確か親父が電話で散々頭下げていた後に菓子折買ってこいって買って買いに行かされたな。

あれって自分で買うべき物だよな? 理不尽だぜ。

「菓子折ってあれだよね会社の人に迷惑かけたとき買う奴……高くない?」

「そんな格式張ったものを使う必要はないわ。手作りなら気持ちも伝わりやすいという  
ことよ」

「あつ、それなら出来そうかもっ!」

「由比ヶ浜さん、あなたってお菓子作りは得意かしら?」

「あはは……全然……」

「そう、ならちようどいいわ。手伝ってあげる」

「ほんとっ! 雪ノ下さんが!」

「ええ、私が言い出したのだからそれくらい責任を持つてお手伝いさせて貰うわ」

「どうやら、話は決まったようだ。」

「それじゃまとめるか。結衣はお兄さんに手紙と菓子折を渡してその人への距離を縮めていく様にする。菓子折は雪の……下さんに手作りのお菓子の作り方を教えて貰うということでいいか?」

「あなたがいきなり仕切り出したこと以外は問題ないわ」

「雪ノ下先輩もうやめてあげてっ! 葉山先輩のライフはゼロよ!」

「手厳しいなあ……それじゃ、結衣への菓子作りはいつやるんだ?」

「今よ」

「どっかの有名塾講師が言っつてそんな返しやめて欲しい。」

いきなり過ぎてちよつと吹きそうになつたわ。

由比ヶ浜だつて顔隠して笑つてんじゃん。

「そうなんすね。なら今日の部活は以上って事で、葉山先輩の話は明日って事で言いですかね？」

「比企谷君？ 何言ってるのかしら？ あなたも手伝うのよ。無論葉山君も」

「は？ なに言ってるのこの人？」

「いや、葉山先輩はどうか知らないですけど、俺お菓子作りなんてやったことないんですけど……」

「俺もだ……」

葉山先輩も同調してくれた、まあそりゃそうだ。

イケメンだけどお菓子作り好きそうな顔してないしな。

「大丈夫よ、味見役として男手は必要だから」

「自分達で味見すればいいじゃん」

「いやよ、体重増えたらどうするの」

「俺たちの体重増えてもいいのかよ……」

「男子と女子で燃費が違うじゃん」

あつ、そういう比べかたしちゃう。

「比企谷君？ いつもあの身体に悪そうな色をした缶コーヒーを飲んでいるのだからそんなこと気にする必要はないわよね？」

「雪ノ下先輩、缶の色だけで身体に悪いというのはおかしいと思います」

「いや比企谷、あれはたしかに身体に悪いぞ」

えっ？ 葉山先輩？ まさかここで裏切られるとは思わなかった。

「ヒツキーあんなの飲んでたらデブになっちゃやうよ？」

えっ？ 由比ヶ浜もそう言っちゃやうのん？

八幡今先輩方々から言葉の暴力を受けてるよお……

「わかりましたわかりましたー。味見役受けますんでこれ以上俺とマツ缶デイスるの止

めてくださいませ……」

「分かればいいのよ」

ふんつと論破した感を出す雪ノ下先輩。

いや、全然論破してませんからね？ むしろランチですからね？

こうして俺たちは由比ヶ浜にお菓子作りを教える事になった。

……俺は味見役なんだけれどな。



## # 12 — 2

室内にはバニラエッセンスの香りが広がる。正直この香りは嫌いではない。

視界にはシンクでボールの中身を一生懸命かき混ぜている一色と由比ヶ浜とそれを見守る雪ノ下先輩の姿が目に入り、ボールの中身をかき混ぜる粘り気のある音と不定期にヘラがボールに当たる音が室内に響く。

嗅覚と視覚と聴覚を刺激されできあがるクッキーには少し期待感が出てくる。

家庭科室の使用許可はすぐに取れた。

さすがは成績優秀者の雪ノ下先輩。しかも材料まで好きに使って良いと来た。

「ただ教師の信用獲得してんの？　もしかして校長先生の娘って設定じゃないよね？」

そんな事を妄想していると声をかけられた。

「せんぱーい、砂糖とつてもらっていいですか？」

そしてなぜ一色がここに居るのか。

家庭科室へ移動中に葉山先輩を呼びに来たジャージ姿の一色と遭遇し、何しているかを聞かれたわけだ。

俺は濁したが由比ヶ浜がペラペラとしゃべり、私もと言う流れでこういう状況になつてしまった訳だが。

まあ一色も葉山先輩に料理できるアピールしたいのだろう。

最初は雪ノ下先輩が手本を見せた、雪ノ下先輩の説明は丁寧親切だったのだが、それでも理解出来なかったのが由比ヶ浜結衣という人間だった。

そしてこの世に存在たらしめてしまった由比ヶ浜製の黒焦げクッキー。

君は発がん物質を作り出すのが得意なフレンズなんだね。捨てるしかなくね？

えっ？ これ食べるの？ 体中の働く細胞が拒否反応起こしてんだけど？ 拒否権はない？ あっ……さいですか……がんばれ俺の中にいる細胞たち。

斯くして悲劇は起こってしまった。俺と葉山先輩の犠牲をともなつて。

冗談はさておき、起こった悲劇を繰り返さぬ為、反省するというのが人間という生き物である。

ということ、今度はお菓子作りが得意と自負する一色がお手本役として抜擢された。

雪ノ下先輩が一度手順を一通り見せてやらせたのと違い、一色は一緒に作っていく、ひとつの工程ごとに確認を入れていくスタイルだ。

「せんぱい、クッキーは何味が好きですか？」

「あー、味はマツ缶味がいいな。少し固ければなおよし」

「へえ、そうなんですね。……葉山せんぱうい!! 葉山先輩はどういったクッキーが好みですかあ!!」

俺に聞いたときと葉山先輩に聞いたときとで声色と言葉の躍動感が違うんですけれど……何この差。

「ははっ、いろはが作った物ならなんでもいいよ」

すでに下の名前呼びかよ。イケメンは流石だわ。

「分かりました、頑張って作っちゃいますね」

「一色さん? 趣旨をはき違えてないかしら?」

「そんな事はないですよ。しっかり由比ヶ浜先輩にお手本みせるんですからね」

一色の隣には由比ヶ浜その隣に雪ノ下先輩がいる。

1つの行程を行いながら一色が説明をしていき、雪ノ下先輩が補足とストッパーを担っている構成だ。

由比ヶ浜は説明を聞きながらふむふむとメモを取っていく。

メモを取るのは一色からの提案だった。

絶対忘れるとお菓子作りの経験者が語るのだから説得力がある。

「由比ヶ浜先輩、絶対にアレンジしようとは考えないで下さいね! アレンジするのは

目を閉じてクッキーが作れるようになってからですよ！ それまではレシピ通り作りましようっ！」

「う、うん。桃缶は……？？」

「ダメよ」

雪ノ下先輩が桃缶を手に取る由比ヶ浜を即座に止めた。

「ですよね……」

目を閉じてつてなに？ 心眼でクッキー作るの？ そこまでクッキー作りに青春費やしたくねえよ。つてか桃缶どっから出てきた。

大体材料を出し終わり俺は口直しに雪ノ下先輩が作ったクッキーを頬張る。

「うめえ」

味も、食感も完璧すぎてぐうの音すら出ない。究極のクッキーなんじゃねえかこれ？ 海原先生も唸るぞ。

「流石雪ノ下さんだな」

いつの間にか近くにあった葉山先輩に目を向ける。

「ほんとに完璧超人過ぎて引きますよ」

「そうだな、彼女はひとりで何でも出来てしまう」

そう呟く葉山先輩の表情はどこか遠くを見ているようだった。

ふと葉山先輩の依頼内容を思い出し俺はその疑問を口にする。

「そういえば、葉山先輩の依頼ってあのメールを止めて欲しいって事ですか？ 犯人を見つけることですか？」

「そうだな。その選択肢だと前者だな」

まあ、後者を言われると流石に無理だって回答しかいえねえしな。

LHCをハッキングできるほどのハッカーがいれば話は別だが。

「なるほど。なんか流れるきつかけとかあったんですか？」

「いや、そんなきつかけみたいな事はなにもなかったな」

そうなるときさすがに打ち止めだな。

物事には何かしらきつかけがあるんだがどうも今の情報だけでは何も想像がつかない。

これは雪ノ下先輩と相談する必要があるそうだな。

\*\*\*

一色と雪ノ下先輩のダブルチーム戦法の甲斐もあり、由比ヶ浜はそこそこな仕上がりのクッキーを焼くことが出来た。問題はそれを家でも再現できるかどうかだ。

まあ、メモ通りやればできると一色は言っていたから多分大丈夫だろう。

あとは作ったクツキーの処理を俺と葉山先輩が担っている訳だが、なにぶん量が多い。女子三人が作った分のクツキー処理って結構キツイ。

少し女子にも手伝って貰って雑談を交えながらクツキーを処理していたが一向に減る気配がない。

さすがにクツキーに飽きてきて少し休憩をしていた所、一色と葉山先輩が話している声が聞こえた。

「葉山先輩、そういえばそろそろ職場体験ですよね。戸部先輩から聞きましたよ」

「ああ、そうだな。班人数が合わなくて漏れる奴らがいたのが惜しまれるが……」

何気に耳に入ってきたその内容に疑問が湧き、なにお前話聞いてたの？ 気持ちワルとか思われぬいな……:~:~:~:と思いつつ一色と葉山先輩の会話に割って入ることにした。

「すいません葉山先輩、班決めってなんの話ですかね？」

「ああ、2年生はそろそろ職場体験があるんだ。そこで班決めがあったんだが、ひとつの班に人数制限があつてな」

なるほどな、職場体験の班決めであぶれる事を避けたい奴があメールを送つたのだつたら合点がいく。

「さっきの話、もしかしたらその職場体験の班決めが関わってるかも知れないですね。

葉山先輩と一緒にの班になれるようにわざとメールを流したとか」

「なんだって!?! そんな小さな事であんな酷いメールを送る奴がいるのか!?!」

葉山先輩は若干声を荒げた声を俺に向ける。

多分それは仲間を疑いたくなかった葉山先輩にとってはとても耳の痛い事なのだろう。

「そんな小さな事でもその人にとっては大きい事なのかも知れないです。小さい事というのは結局俺たちの私感でしかないんですよ」

「せんぱい、一体何の話をしてるんですか?」

「ああ、気にすんな。ちとくら依頼の解決に向けて動いてるだけだ」

「まだ奉仕部のお手伝いなんてやってるんですかあ? もうグループチャットも落ち着いた事ですし……そろそろいいんじゃないですかね?」

あつ、そうだった。

一色にはまだ俺が奉仕部に入った事を伝えてなかった。

「俺、奉仕部に入部したから」

「……っは?」

すつとんきよんな声を上げて一色が呆ける。

「ちよちよちよちよつとまっつてくたさいーっ! せんぱいつ!! そんな話聞いてないん

ですけれど!!」

一氣に焦った表情でまくし立てる一色

そりや言つてなかつたしな。

つてかこの漫才だよ何秒バズーカかよ。

「そりや言つてなかつたしな、まあその話は後でやるわ」

「ほんとほんとですよ！ せんぱいっ!! ちゃんとしつかりきつちり隅から隅まで聞かせて貰いますからね!!」

あーうつせえなー。小町かよ。

「はははっ、仲が良いな、お前ら」

「まあ、同級生なもんで」

「そうか。それよりも、比企谷の話を信じるならばどうすればいい？ すでに班決めは決まっちゃってます」

そう、……班決めの際階であればまだどうにか動けたがそうでないとなると……

ふと由比ヶ浜と雪ノ下先輩の会話が聞こえてきた。

「雪ノ下さんのクツキー本当に美味しいね！ プロが作ったみたい」

「あなたも努力すればこれくらい作れるようになるわ。努力あるのみよ」

「うんっ！ がんばる」



幸せそうにクツキーを頬張る由比ヶ浜の姿を見て思いつく。

そうだ決まっちゃったことで不利益が被る人間にする事は決まっている。

「そうか、菓子折だ」

「どういうことだ比企谷？」

「葉山先輩、班決めであぶれた奴らはきつとこう考えるはずです『葉山隼人と自分の関係は、自分がいついなくなってもどうでもいいと思われている軽薄な関係なんだ』っていう風に。そういう奴らの対処は基本相手にしてあげれば良いと思うんですよ。お菓子の差し入れなんて渡せば自分に気をかけてくれるって事で治まってくれればいいですよ」

よくあるイージーモードってやつだ。構ってあげれば解決だ。

「なるほど。一理あるな」

「些細な事には些細な事で返してしましましょうって事で、ここにあるクツキーをそいつらにあげることにしましょう。俺しばらくクツキーは良いんで……」

「はははっ、本音はそれか」

「そうっすよ。これ以上は食えそうにないんで」

「そうだな、それじゃこれはそいつらにあげることにするか」

そして俺たちは、雪ノ下と由比ヶ浜、ついでに一色にも依頼の内容と解決方法を共有

した。

「比企谷君、いつの間にか勝手に依頼を終わらせるのはちよつと勝手が過ぎるんじゃないかしら？」

あれ？　せつかく雪ノ下先輩に楽させようとしたのになぜに怒られるの？

解せぬ……

「……でも助かったわ。ありがとう」

デレただけだった。ちよつと嬉しい。

「むっ……せんぱい、鼻の下伸びてますよ」

半目で俺を覗く一色に気づき、俺は表情筋に力を入れる。

「んなことはねえよ」

「そんな事よりも今日は帰りサイズ行きますからね。ちゃんと聞かせて貰いますからね」

ニツコリと笑っている表情に温もりが感じられなかった。早くも雪ノ下先輩の技を盗むとはさすがだな。

「えっこれからサイズ行くの？　もうクツキーでお腹いっぱいなんですけれど……」

一同の笑い声が家庭科室内に響いた。

その後、本当にサイズに行く羽目になり、根掘り葉掘り聞かされると思いきや途中で

ら全く目的のない会話を延々と繰り広げて満足したら帰るというよくわからない結末だった。一色は何がしたかったのだろうか。

\*\*\*

それからしばらくして葉山先輩からメールで事態は収まったとの連絡が入った。推測が当たっていたことに安堵の息を漏らし携帯をしまふ。

ちようど部室前に差し掛かったところで由比ヶ浜と遭遇する。

「あつ、ヒツキーちようどよかった」

俺の前へ小走りで駆け寄ってくる由比ヶ浜。

小走りで走っても揺れるその胸部にドギマギを隠せない。

「ヒツキー、これ」

奉仕部の部室前で由比ヶ浜が俺に手紙と手作りと思わしきクツキーの包みを出す。

一瞬俺に？と考えたがそうでないことを思いだし少し絶望した。

「おつ、作ってきたのか」

「うん、会心の出来だとおもうっ！多分……」

流石に食えるよな？ いや渡す前に一度確認するか、小町の命がかかっているのだ。

「わかった、ちゃんと届ける」

俺は鞆の中にその包みを入れた。

「ありがとう、ヒツキー」

タイミングを見計らったかのように部室から声が聞こえる。

「あなたたち、こここそと何をしているの?」

「いや、なんでも……」

えっ? なんでいるの分かったの? 雪ノ下先輩もしかして能力者ですか?

若干気まずさを感じつつも俺たちは部室へと入った。

「由比ヶ浜さん、紅茶入れるけれど、いかがかしら?」

「うん。いるー! ゆきのん!」

「ゆ、ゆきのん?」

あー俺のヒツキーの時と同じ流れだ。

さすがの雪ノ下先輩も頭追いついてないな。めったに見れる物でもないし少し観察しておくか。

「由比ヶ浜さん、私の名前をちゃんと呼んで貰っても良いかしら?」

「ゆきのんはゆきのんだよ」

「だから……」

「ダメ？」

あー、なんかどっかの金貸し企業をつぶらな瞳チワワなCMを思い出すくらい潤んだ瞳をして雪ノ下先輩を見つめる由比ヶ浜。

「もう好きにして……」

おお……雪ノ下先輩が折れた。由比ヶ浜強い。

そしてこの日を境に由比ヶ浜が部室に入り浸る様になった。とても百合百合しいことだ。

# 1 2—E x それから一色いろはと比企谷八幡はサイズで駄弁る。

がやがやといつもの事ながら騒がしい店内に入ってボックス席に案内される。

せんぱいが逃げないように学校から常にせんぱいの制服の裾をきつちり掴んで連れてきました。

「せんぱーい、ほら。今日は私が奢りますから好きな頼んで下さい。あつ私は駄目ですよ？ 売り物じゃ無いんで」

「お前わかってて言ってるだろ……俺既にクッキーで腹一杯なんだが……」

「そりゃ知ってますよ。知らなかったら奢りなんて言わないですからね」

「嫌がらせかよ……俺基本人から施し受けないんだけど」

そんなのは知っていますよ。

「今回はせんぱいの事聞きたかったので……そのお代つて事でいいですか？」

「こう言うことを上目遣い意識して伝えたらせんぱいもそれなりに反応を示してくれるでしょ。」

「そういうことならまあ……いんじやね」

何か観念したかのようにせんばいは席にもたれかかった。

適当に注文をしてさっさと本題に入る。

「せんばいなんで奉仕部はいつたんですか？　せんばいの困り事は解決しましたしもう用な……特に入部する意味がわからないんですけど」

「そりゃ俺もわからねえよ。ただ雪ノ下先輩が忙しそうだったし、部外者じゃ手伝えな  
いから一時入部して手伝おうと思つたら顧問にそのまま引きずり込まれた」

「なんですかそれ……お人好しすぎませんか？」

「まっ、それでもタダで紅茶が出てくるし、そこまで会話する必要ねえし別に良いだろ。  
勉強する場所とか探す手間が省ける」

この人本当にそういう所が私の心をざわつかせるのわかつているのでしょうか。

だつて雪ノ下先輩と二人きりとか……まあせんばいですから間違いは起きないとは思いますが、それでも同じ空間にいるということは多少なりの会話が発生するわけで、そこから次第に話す回数も増えていって、いつの間にか休日二人で遊びに行ったりして……知らぬ間に俺たち付き合いましたみたいな報告貰って覚悟する前に私が絶望に打ちひしがれる結末なんてごめんです。

そんな事したら私せんばいの目の前でギャン泣きします。

「それより一色、サイゼのグラントメニュー変わってねえか？」

なぜかそんなどうでもいいことにウキウキしているせんばい。一体なんなんでしょうね。

「クツキーでお腹一杯じゃ無かったんでしたっけ？」

「俺の胃液が今すぐ消化すると叫んでる」

「胃液と会話……つまりはイマジナリーフレンドですか？」

「ネタを真面目に返すのやめろ、俺はまだ健全だ」

「そうですか、それで？ 何が目新しいんですか？」

「季節限定メニューが変わってるな、デザートに西瓜のパンナコッタがあるぞ」

「パンナコッタってなんでしたっけ？」

「しらん、写真を見せてくれ」

そんな事をいいながらせんばいはメニュー表を渡してくる。

知らないのに言葉に出したんですか。ちよつと無責任すぎませんかねせんばい。

「へえ、なんかヨーグルトみたいですね」

「そうなんじゃね？」

やけに素っ気ないですね……いやちよつと待って下さい。何気に首から下がそわそわしていますこの人。もしかして注文したいけれどお腹いっぱいだから全部は食えない。奢りとは言えお残しは俺のプライドが許さないとかそんな事考えて渡したん



じゃ無いでしょうね？

……ふふん、いいでしょう。受けて立ちましょう。

「せんぱい、追加注文でこれ頼みますよ。ちよつと食べてみたいかも」

「まじか。なら最初の一口くれ」

「……せんぱいもしかして口説いてます？ 間接キス狙ってるの分かりやすすぎて

ちよつとつてよりもすつごいキモいですよ。もう少し言い回しを考えて発言して貰っていいですか？ごめんなさい」

「別々のスプーンを使えば良いだろうが」

「まあそうですね。ただ従業員さんの手間を増やすことに心を痛めないのであれば是非どうぞ」

「向こうは金払って働いてんだろが、スプーン一つくらいどうってことないだろ」

「あーでたでた、お金払えばお客様は神様だとか言う人。せんぱい失望しましたよ」

「スプーン一つで俺だけ信用失うよ」

「えっ、せんぱい私の信用ってせんぱいにとつてすごい大きかったんですね。なんか色々と言ってしまったてすいません。ちゃんと面を向かって話せる相手が私だけだったんですね」

「いや普通に小町とも喋るし。他にも雪ノ下先輩と由比ヶ浜とも喋れるし、あと戸塚先

輩」

「そこは私だけって言うところですよ。だからモテないんですよ」

「べつにモテようとも思ってたねえっての」

せんぱいならそう言いますよね。

むしろせんぱいがモテたいと言いだしたら天変地異が起こるレベルです。

「まあそんな事はいいです。とりあえず頼んじやいましょうか」

呼び出しスイッチを押しした矢先にすぐに従業員が注文を受け付けてくれた。

「ところで、奉仕部の忙しい時期は無くなったんですよ？」

「もう今となつちや暇だな。適当に本読んで過ごす事が多いぞ」

「それならもう退部してもいいんじゃないですか……？」

私との時間が無くなってしまいますよ？

1年とはいえ貴重な学生生活の時間をそんな暇な時間に充てていいんですか？

私とカラオケ行きましょうよ。

「それがなく、平塚先生がそうさせてくんねーのよ。お前は矯正対象だとか言われてな」

「なんですかそれ……横暴じゃないですか」

ポジティブに考えるとせんぱいがあの部屋に常にいるって考えたなら探す手間が無くて楽なんですけどね……ただリスクの方がはるかに高いんですよ。

「それでもあそこの待遇はいいからなー、紅茶出てくるし静かだし。」  
「……」

なに餌付けされてんですか。

「どした？　リスの真似か？　そんなジューズ含んでその真似はやめといた方がいいぞ、無性に笑わせたくなるから」

いやそんな子供みたいな事しませんよ。どうしてかって知りたいですか？　2人きりと言うのが気に入くないんですよ。

「なんでもないですよーだ」

ふいっとそっぽ向けたふりをして少し気を引いてみる。

「いきなりどした一色？　ツンデレの練習？」

やっぱり効き目が薄い。こういうの効かないから面倒なんですよね。いや効いてはいるんでしょうが効果が薄いんですよね。

「むう〜！　少しは気にかけて下さい〜！」

「気にかける程繊細な奴じゃないだろうがお前……まあたまに来るくらいは良いぞ。

正直雪ノ下先輩と2人は結構息が詰まるからな……」

……おっ？

いまなんて言いましたこの人？　たまに来ていいって言いました？

「なんですかこのツン&デレは。ツンデレの練習してるのはそちらじゃないでしょうか？」

「というかやつぱり息が詰まるんですね。」

「ご愁傷様です。」

「まあ……せんぱいがそう言うのであればたまには会いに行つてあげてもいいですよ」

「なんで上から目線よ」

「先輩からお願ひしたんじゃないですか」

「いや別に来なくてもいいんだ……」

「絶対にいきますからね？ ズル休みしたら許しませんよせんぱい？」

「今日お前グイグイくるな……」

「へ？」

「いや、さつきからやけに俺が奉仕部にいると不機嫌になったり、暇なら来いと言つたらあざとくなるし忙しいなと思つてな」

「えっ？ えっ?? そんなに私がつついてました？」

「そうだったこの人鈍感でも難聴でも無かつたんだあゝ！」

「どうした一色いきなり顔隠すなよ。得意の嘘泣きは俺には通じねえぞ」

「顔真っ赤で見せられないからですよ……」

「えーつと……なんつーか……俺地雷踏んだか？ 耳……赤いぞ？」

「言わないでよばかあ！」

敬語すら意識する余裕のないのに追撃してくるとかホント馬鹿なんですから。

「うお……すまん。つてか声……でけえ」

「せんばいのせいですからね。責任取って下さい」

もう。なんでそんな言わなくていい事言っちゃいますかね。

「責任取るも何もお前が変に声上げたおかげで絶賛周りから痴話喧嘩しているカップルだと思われているだろうが、その責任をお前が取れ、俺は悪くない」

「なんですかせんばい口説いてるんですか？ 甘噛み痴話喧嘩できるカップルを周りにアピールするのはまだ先といつかかなんですか責任はお前が取れて！ せんばいのあほ！ ぼけなす！ 八幡！」

「男とつかえひつかえしている点でお前も十分クズだと思うぞ俺は。つてか最後の不名誉な呼称に俺の名前入ってただけど……」

「同類じゃないですか、良かったですなせんばい」

「なんもよくねえよ……」

そうこうしているうちに注文していたパンナコッタが届く。グラスに盛られたパンナコッタに西瓜ソースの淡い赤が乗っていてとてもシンプルなのに映える出来映えだ。

「うわー、美味しそう〜」

「んじや最初の一口俺な」

そう言ってせんぱいがすかさずスプーンを取ろうとした手を軽くはたく

「だめです」

まだ写真撮ってないですからね。

だめです。

「んだよ、食い物の写真なにに使うんだよ」

「記念ですよ」

そんな事言いつつパンナコッタの横に映るせんぱいにフォーカスを向ける。右端に

大きく写るパンナコッタがぼけていいアングルのせんぱいが撮れた。

「さて、どうぞどうぞ」

「そりやどうも。……んっ、うまいなこれ」

「へえ〜そうなんですか」

「ん？ おまえ食わないの？」

「せんぱいは私に手で食べると遠まわしに言ってます？ 外道ですね」

「はっ？」

「早くその手に持つてるスプーン返してください。プリーズプリーズ」

「はっ？ いやちよつとまで」

「それ専用スプーンなんで替えがないんですー」

大きくため息をついたせんぱいは適当に紙ナプキンを手にとりましてスプーンを拭いて渡してくれた。

「せんぱいはこういうのは気にする方なんですか？」

「気にはしないがおまえが余りにもそれを狙って来るから恥ずかしいんだよ……」

「狙ってるわけないですよ気持ち悪い、自意識過剰ですか」

「そりゃな自意識過剰過ぎてそれが無いと生きるのが辛いすらある」

「なんですかそれ」

「いやなに……なんでもねえよ」

「そうですか」

そう言つてようやくパンナコッタにありつく。スプーンですくうとプルプルに震えたそれを静かに口へと運ぶ。

下に冷たい柔らかな感触と確かにさっぱりと甘いソースとまるやかな舌触りがマツチしていて暑い日が続くこんな時に丁度いい感じ。

「せんぱい……そんなじつと見つめられると恥ずかしいんですが」

「いやうまそうだなって」

「新しく頼めばいいじゃないですか」

「そう言う意味じゃねえよ、お前がうまそうな顔して食うなって思っただけだ」

「そう言うて視線をそらしてしまった。」

「ちよつとちよつとちよつと！」

あなたそれどこで覚えたんですか。どこその魔性ですか？ なかなか良いジャブ持つてるじゃないですか。

「そ、そうですか？ まあ実際に美味しいですしねこれ」

「まあ、いいんじゃないやね。それなら」

「せんぱい、せんぱい」

「どうした？」

「私のクツキーは美味しかったですか？」

さすがに自分で聞くのは少し恥ずかしかったりする。

でもちよつとやつぱり聞いてみたい事ではあるのでというか今後の参考というかそんな事を考えてしまいます。

「まあな、悪くなかった。ってかお前特技あったのな」

「まあそりゃ、手作りで作ってきました〜って胃袋掴む為に決まってるじゃないですか」  
元々は荷物持ち達の好感度維持のために作り始めたんですが、せんぱいが満足してく



れたのでしたら覚えた甲斐がありますね。

「まじで抜かりないのね。すげえなお前」

「そうほめないで下さいよ」

「葉山先輩マジで落ちるかもな」

あー……：そうでしたね。そう言えばそうでしたね。

今この時完全に忘れていましたよ。

上げて落とすを無意識にしなくてもらいたいものですね。

「ええ……まあ、そうですね」

自分の勘違いの恥隠しに残りのパンナコッタをガツガツと一気に食べ終える。

「ふいー美味しかった〜」

「さてと、そろそろ食ったしでるか」

「もう少し腹休みさせて下さいよーせんばいドリンクバー頼んだのに一杯しか飲んでないじゃないですか」

せつかくお金出したのにもつたいないですよー。少しは元を取って下さい。

「おー、確かにな。もう少し元は取っとくか」

わかってくれたのかせんばいは空になったコップを持って立ち上がる。

「そうですねー、私の奢りなんですし」

「いちいち奢りを強調すんなよ」

「人の奢りで飲むドリンクバーは美味しいですか？ 年下に奢ってもらって今どんな気持ちですか？」

「二色、お前俺がどれだけ人前で小町に財布を出してもらっているかわかって聞いているのか？ 慣れすぎてそんな気持ち一切湧いてこねえわ」

「うわあ……最低ですなあなた」

\*\*\*

ありがとうございますと出た店から声が聞こえ扉が閉まる。

既に大人の人たちの帰宅時間を過ぎており、人通りがやけに騒々しく感じた。

それにしても会計の時のお兄さんがえっお前が払わないの？ って感じで一瞬せんぱいをチラ見してそれに気づいた先輩は頭を掻きながら外に出ていったのはちよっと面白かった。

「もうこんな時間かさつきと帰らねえと小町が寂しがるな」

「小町ちゃんもう帰ってるんですか？」

そういえば小町ちゃんは中学3年ですし、そういえば私も去年の今頃はまっすぐ帰って勉強していたような気がします。

「そうだぞ。献身的に俺の飯を作ってくれる為にまつすぐ家に帰ってくる小町、いいだろ？」

受験生にご飯作らせてるんですか、せんぱい？ 本当にクズですね……

「すごくいい妹という所は同意ですが、せんぱいのその言い回しがシスコン過ぎて気持ち悪いです」

「お前飯作ってくれる奴リスペクトしなくてどうするよ。今日のご飯抜きとかいわれんだぞ」

まあ流石にお母さんには感謝しますが……せんぱい小町ちゃんにそんな事言われてるんですか？ なにをしたらあんな従順な妹がそんな事言うのだろう。

「すでに小町ちゃんに胃袋掴まれていることに気づいて下さいね、せんぱい？ なんならうちでのご飯一緒にします？」

「嫌にきまつてんだろ。だれが好き好んで家族団らんに単身で乗り込むかよ。しかも年頃の娘が男連れてきたとなったら俺の隣確實右はお前で左父親だろうが。俺の精神が死ぬ」

「せんぱいはやつぱりチキンですね。ケンタのフライドチキンにでもなつてしまえばいいのに」

「ひでえ言われ様だな。ケンタに失礼だが、もつと良い若鶏使つてやれよ」

「うわあ……せんぱいのその自虐もなかなかですよ」

「それよりさっさと帰るぞ。一色は駅そっちだろ、じゃあな」

「せんぱいも気をつけて」

そうやって先輩と別れ私は蘭々の気分で駅へと向かうのだった。

#12—EX2 だから比企谷小町は比企谷八幡にねだる。

ぐつぐつと煮立ちを見せる鍋を見ながら味見しつつ砂糖と醤油を少しだけ付け足す。ちよつど良い味になったところで落とし蓋をして様子を見る。

その間にお米をときながらつついっつい口ずさんでしまう。

「につにつにつくじやつがじやつがじやつがじやつがじやつがる〜」

作詞作曲は全て小町だけど、なかなか良い出来ではないだろうかCDデビュー待ったなし。夢の印税生活が待ってる〜！

つてそんな夢物語を妄想しつつ炊飯器のスイッチを押す。

1時間後ぐらいには炊けるかな。まあ肉じゃがの煮込み時間と粗熱取る時間と合わせたらちよつど良い時間に来るかな〜。

そんなことを考えていると玄関の施錠が外れる音がした。

おにいちゃんが帰ってきたか。

「ただいま〜」

いつもと同じように気だるい様子でリビングに姿を現したお兄ちゃん、ただいつもと

違うのはなにやら紙袋まで持つてる事くらい。朝そんなの持つてなかったのにどうしたんだろう？

「おかえりーおにいちゃん。最近やけに帰りが遅いね、いろはおねえちゃんとまた逢い引きしてきたの？」

「ちげえつての。……そうだったな小町、言い忘れてたんだが俺部活やることにしたからこれから少し帰り遅くなるわ」

「へっ……」

いやおにいちゃんが帰り遅くなるのが寂しいとかそんな事よりも先に、あの面倒くさがりで退院した後なんて屁理屈ばかり言つてアルバイトすらやらなかったあのおにいちゃんが、なんで部活なんてまた学生らしい事を始めたのかすごく気になる。

もしかしていろはおねえちゃんがまた無理矢理部活にでも入れてみたのかな？

「え？ 何部？」

「奉仕部って奴なんだが」

「なにそれえ……おにいちゃんいやらしい」

おにいちゃんムツツリなところあるからなあ。学校非公認の怪しい部活に入ったな？ エッチなのはいけないと思うんだ。

「ちげえよ。まああれだ。超簡潔に言うとか、依頼を受けてその依頼を解決する部活だ」

「へえ、なんかまた漫画みたいな部活だね」

「まあな」

「でもなんでまた部活なんて。おにいちちゃんそんな一銭にもならん奴絶対やらないとか  
いつてた癖に」

「俺も本格的にやるつもりは無かったんだがな。半強制的に入部が決まった」

「それでもおにいちちゃん普通にサボるでしょ。だってやりたくないことは意地でも避けるへタレなんだから」

「小町ちゃん？ お兄ちゃんに向けてその言葉遣いは止めてね？ 八幡的ポイント低いから」

「それで？ サボれない理由でもあるの？」

「顧問が授業終わりと同時に送迎してくれる待遇付きでな……知ってるだろあの平塚先生だ」

「そりやまた深く気に入られたねえ、今日は何を解決してきたのかな？」

「まあ色々だよ。ほれ、小町これ」

そう言っておにいちちゃんから小町に差し出してきたのさつき持っていた紙袋。中にはまた可愛らしい包装に包まれた何かだ。

正直小町の為に小町を思っ買ってきてくれたのだったらそれはもう小町的にポイ

ントうなぎ登りなんだけれど、誕生日でも記念日も何でもない日に男が何か贈り物を贈ってきたときは気をつけろってお母さんが言つてたからここで素直に受け取るほど小町は真つ直ぐではない。

「何考えてるのおにいちゃん。またお小遣い足りなくなつたの？ おにいちゃんが小町にそういうことするって事は絶対何か裏があるって知ってるんだよ？」

「いつもならそれをねだるが。今回は俺の贈り物ではない」

ねだるんだ。やつぱりごみいちゃんだね。

「じゃあ誰から？ いろはおねえちゃん？」

それなら納得だ。でもなんで急につておもちやう。

「由比ヶ浜だ」

すこしの間思考停止してしまった。

なんでまた予想外の所からやってきた贈り物にすこし戸惑う。

由比ヶ浜さんが小町に贈り物ってどういうこと？

「なんで？ 由比ヶ浜さんから贈り物をもらう筋合いなんて無いでしょ」

あー、なんでだろ。意識していないのに口調がきつめになつちやうね。

「言つただろ？ 俺の部活は依頼を解決する部活だ。つまり今回の依頼者が由比ヶ浜だ。あいつからお前との関わりを仲介されたつて訳」



「別に……そんな事しなくてもいい、小町は望んでない」

「まあ、俺の依頼はお前にこれを届けることだからな、お前の気持ちなんて知ったことか」

「……小町おにいちゃんのこと大っ嫌いになるけどそれでも良いの？」

「なんでだよ。おにいちゃんは小町のことは大切に思ってるぞ？」

「大切に思ってるならなんで放っておいてくれないの？」

「まあそうだな……関係をこじらせたまま……見て見ぬ振りをして逃げ続けるっていうのもそれも良いと思うぞ。ただな小町、行き着く先はお兄ちゃんだからな。小町ならまだ戻れんじゃねえかってお兄ちゃんは思うぞ」

「ははっ……それはそれでありだね。兄妹で捻くれようよ」

「俺は小町には俺とは違う素直な小町でいて欲しいがな」

「おにいちゃん、それ……ずるい」

「そりゃ俺は小町のお兄ちゃんだからな。まあ中に手紙が入ってるから、読むだけ読んでもやってくれ。由比ヶ浜曰くクッキーも入ってるけど食べるかどうかの判断は任せろわ」

そう言っておにいちゃんは自分の部屋へと行ってしまった。

\*\*\*

夕食を終え、勉強机の上に置きっぱなしにしている紙袋を見る。

少しだけ深呼吸をしてその紙袋から包装されている物を取り出す。

ゆつくりとその包装を解いていくと、けっこう焦げ付いた形がヘンテコなクッキーと

ハリネズミのキャラクターで彩られた便せんが入っていた。

その便せんを手に取り、また深呼吸をする。

そして意を決し便せんを開く。

小町ちゃん。

こういった手紙で書くことが初めてでどうやって書いたらいいんだろうって結構迷ったんですが、まずは小町ちゃんとお兄さんにはすごく辛い思いをさせてしまった事、本当にごめんなさい。

お兄さんは優しい人で、私が謝りに行くとすぐに許してくれて正直驚きました。

だけど私は小町ちゃんにも謝りたい。

だって、小町ちゃんの幸せな日常を奪ったのは私で、それを償える何かがあるのだったら言つて欲しい。もちろん関わらないで言うのであればその通りにします。

でも、こんな事言うのはすごく迷惑かも知れないけれど一度だけお返事がもらいたいです。

今までご連絡できないで本当にごめんなさい。

不細工なクッキーですが、これは気持ちです。

もし良ければ食べて下さい。

それではお返事お待ちしております。

由比ヶ浜 結衣

ちいさな便せんにも何度も書いては消したのでしよう。

色んな所に消した後が見られて、由比ヶ浜さんが一生懸命この手紙を書いたと言う事が伺えた。

小町は何をしているんだろう。

原因を歪曲して由比ヶ浜さんだけを恨んだ。

恨む相手がいる方が楽だから。

前におにいちやんが言ったとおり元々は飛び出したおにいちやんも

その原因を作ってしまった由比ヶ浜さんも悪い。

どちらも悪いのに由比ヶ浜さんの事だけを一方的に恨んで今まで過ごしていた。

そして今日この時も由比ヶ浜さんは罪悪感を胸に過ごしている、それを見ない気づかない振り、相手が悪いんだからとそんな自分勝手な解釈で過ごしてきた。

こんなわがままが押し通っていいわけが無い。

気づいてた。気づいてたけれどなんの行動も起こさなかった。そうした方が楽だから。

本当に最低な人間ですね。小町は。

……だから、そんな小町から卒業だ。

ここままでしてくれた由比ヶ浜さんにちやんと言葉をとどけなきゃ。

そう思い包装されたクッキーを口にした。

\*\*\*

翌朝、ちようど朝食の準備をしている最中におにいちゃんがのっそのっそとリビングにやってきた。

「あつ、おにいちゃん。おはよー」

「うーい……」

気だるそうにしているおにいちゃんだがさつきからチラチラと小町を見ている。

多分昨日の件でどうだったか知りたいのだろうね。

全然隠せて無くてこれはこれで可愛い。  
朝ご飯をリビングのテーブルに並べる。

「ほら、(っ)はんできたよ」

「おう……いただきます」

しばらく食事の咀嚼音とスプーンが食器に当たる音のみが室内に響く。

おにいちゃんどしたの？　なんか気まずいんだけど？

「小町、あのな……」

さつきから気まずそうにおにいちゃんが口を開く。

なに？　昨日自分が言ったことを今更ひっくり返そうとしてるのかな？

おにいちゃんならやりそうだ。

「ねえおにいちゃん」

小町が口を開くとおにいちゃんがなにか覚悟を決めたかのような表情をしている。

一体なんの覚悟を決めたのだろう？　正直よくわからない。

「今度の休み、可愛い便せん買に行こうね」

そう言うとおにいちゃんは大きいため息をつき身を乗り出して小町の頭を撫でてきた。  
た。

「そうだな。ちようど俺も欲しい本があったのを思い出した」

「それは偶然だろ、じゃあおにいちゃん予定空けといてね」

「予定なんぞいつでも空いてるぞ」

そんなこと百も承知だよ。

「やったねっ！ 流石ボツチだね。驚きの白さだよ」

「小町ちゃん？ 洗剤CM見たいに俺の予定を表現するの止めてね？ 悲しくなるから」

「そんな事よりもおにいちゃん。ちよつと由比ヶ浜さんに言っておいてね。クッキー作る時はレシピ通り作ってねって」

頑張ったのは認めたいですが焦げ目が多かったから全部は食べられませんでした。

「……お、おう。わかったそれは嚴重注意しておく。そんな事より小町……そのなんだ……もう、いいのか？」

「んー……わかんない。でも由比ヶ浜さんの誠意は伝わったから返事は書こうと思う」

「そうか。俺みたいにならずに済んだな」

「そうだよ。こんな厄介者が2人もいたらお父さんお母さんが悲しむよ」

「えっ？ なに？ 俺の存在自体家族のお荷物って遠回しに言ってるの？」

「遠回しには言っていないよ？」

「……」

「でも小町はおにいちゃんのおかげで変わったよ。ありがとねおにいちゃん」

「……はあ。そりやそうだ俺は小町のお兄ちゃんなんだからな」

「もお。それ聞き飽きた。別の言葉考えてきてよ」

「なら小町にはお兄ちゃんしかいないからなつでどうだ？」

「小町にはおにいちゃん以外にもお父さんもお母さんもいるし学校の友達もいるよ？」

おにいちゃんと違って」

「最後の一言いる？ 明らかに最後俺攻撃してるよね？」

半目で睨むおにいちゃんを見ていたら少し楽しい気分になつてきた。

「でもおにいちゃんには小町しかいないから！ おにいちゃん、便せんくらい奢つてね

？」

「まあそれくらいなら奢つてやらんこともない」

「やったー！ ……あつ！ おにいちゃんそろそろ出ないと遅れるよ」

時計を見るとそろそろ出ないと遅れる時間だ。

「あー、そうだな。朝から話しすぎたか」

「そうだね。ほら今日も後ろ乗せて行つてね！ おにいちゃん」

「へいへい」

そう言つて、少し騒がしい朝の食卓は過ぎていった。

## # 1 3 — 1

それはいつもの日課を行っていたある日のことだ。

時間帯として、小さな子供は親とともに帰宅していい時間帯だ。

夕焼けの橙色が公園一帯を染め上げ、遊具の影は濃く長く地面にその存在を主張し、ふと幼児時代を思い出させた。

昔は遊ぶ友達も沢山いたなとか、そんな哀愁じみた感情に浸りつつも最終奥義の練習をしていた所、少女が話しかけてきた。

「なにしてんのぉ？」

つぶ、可愛げのある幼女ではないか。我に興味を示すか。なるほど貴様なかなか魔眼を持つておるな。そういうことなら我は光源氏になる事もやぶさかではないぞ。

「おおおおぬしい、わわ我はだだだ大事な修行の最中なのだ。どどどどいておけ……けつ……けけ怪我をするぞぞぞぞおおおいいいいい」

おや？ いささか、口にした言葉が想像していたのと違うがまあ許容の範囲内だろう。それにしてもこの時間にこのような少女がひとり公園とはどういうことだろうか？ 親の教育がなつとらんのではないか？



「なにーキュアキュアごっこ？ けーちゃんもやるー！」

ユニークな発想だがそうじゃないのだ。ここは年齢差もあるだろう、やはりここは我が大人な対応をするべきであるな。

「そそうかあけーちゃん殿、わ我はキュアごっこたるものがどういものなのか知らないのだ。教えてもらえないだろうか？」

キュアツキュアな奴は初代から現在まですべて視聴し、考察までしてブログで公開までしているが、ここは小さい子供に合わせてやるのが大人の余裕というものよ。

さあ、かかってくるがよい！ けーちゃん殿。

「けーちゃんまほーつかえるんだよー」

ほう、魔法とはまたなかなか可愛らしいことよ

「なるほろ。ではけーちゃん殿の魔法とやらを我に見せて貰ってもよいか？」

「うん、いいよー」

そうしてガサゴソとポケットの中をまさぐっている。

きつと変身グッズとかそんな奴を探しているのだろう。可愛らしいことだ。

「かくごはいいいー？」

アニメの台詞だろうか？

「ククク、この剣豪將軍はいかような魔法とも我には通じぬぞ！！ 放つてみよけーちゃ

ん殿!!」

「ごっくよー!」

そうして取り出し小さい背で片方の腕を高々と掲げているブツを見て我は戦慄する。

それは親が小さい子供に安全のために授ける召喚魔法の触媒。

「あつ〜!!? ちよつ……!!? まってそれ……」

けーちゃん殿は躊躇する事無く掲げたその封印を解く。

私の言葉が届く前にその究極召喚魔法は高々とあたりに鳴り響いた。

\*\*\*

あれから偶然通りがかった青い制服に身を包んだお兄さん達とともに、近くにある少し大きめの交番に移動し事情聴取を行っていた。

私の疑いが晴れるまでにどれくらいの時間を要しただろうか。

鳴り響く音に驚き、けーちゃん殿は終始泣いており話にならず、かといって私の言葉を最初から疑ってかかる青い奴らも奴らだ。非常に遺憾である。

「京華!」

交番に勢いよく入ってきた女性の姿が見えた。速攻で目を背け視界からけししたが、あ

の人がけーちゃん殿の家族だろうか。

「あつ、さーちゃん！」

先ほどまでぐずっていたけーちゃん殿がようやく調子を取り戻したようだ。

まったく、この様な小さい子から目を離すとは何事だ。一言文句をいつてやらねば気が済まない。

そう思い、そーつと視線をその家族へ向けた所、青みがかつた黒髪ポニーテールの女子が我を睨んでいた。

「えっ?」

なにもつと年上で落ち着いた女性を想像していたのだが、同じ年くらいの女子だ。

そして、ずかずかと俺の元へやってきて胸ぐらを掴まれる。

ちよっ!? なにこの状況

「ねえあんた……京華になにをしようとしたの?」

ドスのきいた低い声が聞こえたが同時に若干いいにおいがする。

これが女子のにおいていうものか。……ってそんな事いつている場合じゃない。

誰か助けてくれよ。怖すぎて涙が出ちゃう。

まあまあと警察がようやくやく間に入り、事情の説明が執り行われた。

「えっと……勘違いして……その……ごめん……」

我に声をかけて頭を下げるのは、あのケーク殿の姉。名前をなんといつたか。

たしか川崎沙希といった名前だ。我の中で川崎氏と呼ぼう。

一旦、京華殿は婦警と別室で相手してもらい、我と川崎氏で話をすることになった。

「けぷこんけぷこん、ま、まあいいことよ。わわわ我の疑いが無事晴れて我は身が軽くなつた思いだ」

「それにしてもあんた、かなり特徴的なしやべり方するよね」

「そそそそうか、これが我、劍豪將軍の威厳ある言い回しよ」

なにぶん女子とこうまともに話をするなど、小学4年生の頃以来だ。

緊張してろれつが回らない。

「はあ……なんかちよつと前の大志みてるような感じだよ」

大志とは誰だろうか？ 同胞だろうか？

「それより、材木座っていつたっけ？」

「ははいっ！」

自分の名前を呼ばれ緊張感が最高潮に達し、ちよつと大きな声で返事してしまった。

「声大きいよ、ねえ……もう少し普通に喋れない？ あとなんで顔向けしないの？」

今の所顔を見て話を出来る相手は両親ぐらいだ。いきなり目の前の女子と話をす

など無理だ。

「ううううむ、そうだな。ししししかし、我はあまり女子と話をしたことが無くてだな、そのお……」

後半につれてろれつが回らくなりしどろもどろになっていても川崎氏は最後まで待つてくれる。

「大丈夫。ゆっくり喋っていいよ。待つから」

顔は見えんが、その口調はとても優しく耳に入った。

少し深呼吸をして、我は口を開く。

「我はあまり女子と話をしたことが無くてな、どう喋ったものかわからんだ」

川崎氏はそうつと一言呟いてこめかみに人差し指をトントンとしている。何か考えている様だ。考えている時の癖だろうか。ちよつと可愛いと思つてしまった。

「あんたがよければなんだけれど、これからご飯行かない？」

めしどこかたのむ

一時期話題になったネット掲示板のある投稿が頭をよぎつた。

「う、うむ？ 一体何の話をしているのだ？」

これはあれか？ 我が世の春が来たということか？

いや待つのだ、これは罠だ。こんな事が現実に起こることなどあり得ない。

「京華も夕ご飯まだだしこれから帰って作ると遅い時間になりそうだからさ、外食で済ませようと思うんだけど……一緒にどうって話」

ああ、京華殿の夕ご飯のついでですね。理解。

「まあ、行つてやらんこともない」

「なんでいきなり上から目線なのかわからないけど、よかった。それじゃ京華呼んでくる」

そうして我らは外食をする流れとなり、合流した京華殿とともに交番をでるのであった。

\*\*\*

「けーちゃんドリアすきー」

メニューを指さしながら満面に笑みを浮かべる京華殿。何でも頼むがよい、ここはコスパ最強と呼ばれた学生のサンクチュアリ、サイゼだ。

「けーちゃん。お野菜もたべなきやダメだよ」

「えー、けーちゃんおやさいきらいー」

「けーちゃん。ちゃんとお野菜食べないと大きくなれないよ」

「ざいもくざだっておにくばっかりだもん！」

「こら、お兄ちゃんを呼び捨てにしないの」

はて、京華殿？ 我はよーちゃんと呼ばれる事を期待したのだがどうもいいにくかつたのだろうか呼び捨てだった。

「よいのだ川崎氏、よーちゃんは呼びにくいのだろうか」

メガネをくいっと上げて大人の余裕を見せてみることにした。

「そう。ならついでに京華みてるから野菜も食べてもらっていい？」

「あ、はい」

我はサイゼのサラダは基本サウザンソースがかかっているが、川崎家ではどうやらオリーブオイルに変更する

ようだ。

サラダに乗っているクルミの食感としよっぱい感じのドレッシングは少し癖があるが食えなくはない。

「うむ、けーか殿、我も野菜を食べれるのだぞ」

「あーざいもくざー、たべれるならけーちゃんのもたべてー」

おや？ 満面の笑みでそんなサラダの取り皿よこされたら我も食べざる得ないのだ

が？

将来男を手玉に取る小悪魔な気配がして心配になってきた。

「こーら、けーちゃん。自分で食べるの！」

しかしそんな事はすでにお見通しなのか川崎氏は即座にそれに対応する。

「はい……」

京華殿はしよんぼりと返事をして、黙々と自分のサラダを食べ始める。

「材木座、今更なんだけれど、こんな所で本当によかったの？」

「サイゼは私のサンクチュアリだ。全然よい」

「まあ……それならいいけど」

我はサイゼが好きなのだ。チキンやドリアは懐に優しい。

「さつきから気になったんだけれど……そのグローブ？なんで外さないの？」

川崎氏がいつているのが私の聖宝具、エレメンタルグローリーのことをいつているのだろう。

「これは我が聖宝具、いつやってくるか分からん組織の刺客に用心するべくこれを外すことは……」

「はいはい、そんなのいないから。行儀悪いよ。外して食べな？」

ぬう。京華殿が真似をするなら我が同胞として歓迎なのだが、目の前の川崎氏にあと



あとメメタアとされそうなのでここはおとなしく従おう。

「ほら、コートも脱いで」

「う、うむう」

我の聖宝具八代のコートは我がコツコツとお小遣いを貯めて買った神聖なる武具。早々に脱ぐわけには行かぬ。

「ソースついたらあとで落とすの面倒なんだよ」

あつ、我の一張羅が汚れるのはやだ。

「仕方が無い、脱ぐとしよう」

そうしていそいそと脱ぐと川崎氏が我のコートを受け取り、綺麗にたたんで見せた。

「ほう、川崎氏は意外と家庭的なのだな」

「意外ってなに？」

あつ、我、墓穴を掘ってしまったみたいだ。

キツと川崎氏に睨まれてしまったがしかし、交番で見せたような明らかに敵対心を見せるような鋭い睨みではなかったことがわかる。

「うむ、いやなんというか第一印象ではそんな感じじゃなかったのな」

「さーちゃんのりようりすつごいおいしいんだよーお母さんよりもおいしかったりするんだー」

えっへんと京華殿が自慢する。子供は正直だ。だからこそ川崎氏は料理がうまくさらには家庭的であるという事の信ぴょう性が増してくるといふものだ。

「ちよ、ちよつとけーちゃん。そんな事いいから……」

少し恥ずかしげにしている川崎氏の表情はぐっとくるものがある。

けぷこんけぷこん。おっと、我は三次元には興味が無いということを忘れていた。

「それよりも、どう？ 慣れてきた感じ？」

「ん？ 何のことであるか？」

「あんだ、女子と会話が苦手だつて言つてたから。マシになつてきてるじゃないつて話」

「あ」

そうか、川崎氏は我の苦手意識を克服しようとして食事にまで誘つてくれたのだ。

「ししししかし、そそそそれを言われるときぎぎぎやくに意識してしまふではないか

！」

「あはははははくざいもくざしやべりかたおもしろい」

両手をパチパチしながら笑っている京華殿。

「あつ、ごめん。逆に意識させちゃったね」

先ほどの川崎氏のアドバイスを元に再度深呼吸をしてゆつくり喋ることを意識する。

「か、川崎氏、そういえば聞きたい事があつたのだ」

「ん？　なんだ？」

一呼吸置いて嘸まないようゆっくり言葉を吐く。

「なぜ京華殿はあの時間に公園に？　小さい子供がいるにはいささか遅い時間ではないか？」

「公園の近くに行きつけのスーパーがあるんだけど……今日はちよつと買う物が多くてね。目を離れたらいつの間にか居なくなつてたんだ。ホントあの時は焦つた……あんたが見つけてくれていて助かつた。その……何というか……ありがと」

素直に御礼をいわれるとこそばゆいものがある。

まあ我はただ我が最終奥義の練習をしていただけなのだが。

「なるほど。ここ最近は何騒になつてきたものだから。目を離さぬようにな」

「そうだね。気をつける。……それにしても」

「それにしても？」

我は続く言葉が気になり首をかしげる。

「あんたが同じ総武だつて聞いたときはちよつと驚いた。しかも同じ学年だつたなんてね」

それは我も同じ意見だ。第一印象ではどこかの偏差値低そうなヤンキー高校の女番長はつてそんな雰囲気出している。

「確かにそれは我も驚いた。世の中は意外と狭いものだな」

「そうだね。あんたの苗字珍しいのに、今までまったく聞かなかったよ」

それはそうだろう。同じクラスの者からも『ざいもくざ? だれ? いもの品種?』といわれるくらいだからな我。あれ? なんか自然に涙がこぼれてきそうになった。ぐすん……

「そうか、それは我が組織の刺客から身を守るために隠密を常に意識しているからだろう知らなくて当然だ」

「はいはい。刺客から隠れるためね」

どうやらこの川崎氏に我は軽くあしらわれている気がする。先ほど口にした大志とやらがやられたのももしやこれが原因なのだろうか?

「それより、まだ顔をこっちに向けて話するのはダメみたいだね」

それはそうだ。男だったらまあなんとか出来るが女子とは……それも美人な部類に入る女子とは目を合わせた時点で我は溶ける!!

「まあ、仕方が無い。女子との絡みがなかったものでな」

「まあ、おいおいそれは直していけばいいか」

ん? おいおい?

「ねえ、ちよつと頼みたい事があるんだけど」

「つぬ？ なんぞや？」

「京華もあんたを気に入ってるし遊び相手になってやつてくれない？ その代わりあたしはあんたの苦手意識克服を手伝うっていう交換条件付きで」

むっ、これはどこかで見たラノベ的展開。

やはり我にもこの世の春が来たの？ ねえこれ勘違いしちゃっていいんだよね？

「そそそそうだな。そこまでいうならその交換条件とやらに乗るのもやぶさかではないぞ？」

「ついでにあんたのそのしゃべり方も矯正しようか。ちよつとはまともに見えると思うから」

「えっ」

我は戦慄した。

微笑交じりになんてことを言い放つんだこの女子は!?

もしや彼女は我ら闇の住人を駆逐するために地獄の底からやってきた正義の使者であるか!?

えっ鬼の手使っちゃうの？ 手袋してないのは現代仕様？

我はハニートラップに引つかかったのかも知れぬとうな垂れるのであった。

## # 1 3 — 2

それから我と川崎氏との付き合いは続いた。

日は巡り日中の気温は過ごしやすいが日が落ちてくると若干肌寒さを思い出させる季節

入学時に孤高を覚悟した我であるが、早々に仲間ができ、充実とも言える学校生活をおくれている。嬉しい限りである。

——材木座今日さ、京華のお迎えお願いできない？ ——

最近はどうも川崎氏の信用を得たのかちよくちよく京華殿の保育園お出迎えすら任せて貰えるようになった。

ただのソシャゲ機と化していた携帯もメールや電話を使う様になる。これがリア充坂を駆け上っている感覚よ。

我にしてはなかなかの進歩である。

……使い勝手のいいパシリと思っではいけない。それはきつと考えちゃいけないやーつ。

——ふんつ、造作もないことよ!! 我に任せろがいい——

——ありがと。あと夕ご飯くらいは食べていつて——

よくその流れで川崎家の面々と夕ご飯をとにもすることも抵抗がなくなつた。

我は今日の夕ご飯がなんなのかを想像しながら携帯をしまう。

放課後、我は学校帰りに保育園へと向かつた。

最初は保育士に通報一步手前まで怪しまれてしまつたが、今やこうして顔を見るだけで京華殿のお出迎えということを理解してくれるまでになつた。

……我はそんなに不審者に見えるのだろうか??

顔を何度も合わせることは非常に重要であるということがよくわかる。

「あー、ぎいもくぎー」

とてとてと室内から出てくる京華殿。

「けーか殿、今日は我がお迎えだ。家に着いたらさーちゃん殿がご飯を用意している。一直線で帰ろうぞ」

「うんー……」

うん？ 京華殿の表情が少し暗い。体調でも悪いのだろうか？ そうであれば川崎氏に何か悪いもの食わせたと我が疑われかねない。これは早々に解決する必要がある。

「けーか殿、どうした？ げんきがないぞ？」

「うん……」

ぬっ？ これはもしやガチの奴では？ 心配になるではないか。

「けーか殿、体調が悪いのだろうか？」

「んーんー、ちがうの」

どうやら体調不良でもないらしい。

となると我にはお手上げだ。聞き出せるのは川崎氏に任せることにしよう。

「そうか。それでは話はタゴ飯を食べながら聞く事にしようか」

「うん」

そして我は京華殿の手を取り川崎家へと足を進めた。

\*\*\*

「しよーたくくんがねー、おねーちゃんがびよーいんにいつちやってさびしいって」

川崎家の夕食をともにしながら京華殿の話を聞くこととなった。

「ほう、病院か。ならすぐに戻ってくるのではないか？」

京華殿はわざとらしくはあーつと息を吐く。

「ざいもくざわかってない、1からか？ 1からせつめいしないとわからない？」



京華殿？　どこでそんな動作や言葉を覚えたの？　私の心にダイレクトヒットして今にも膝から崩れ落ちそうなんだけど？？

チラッと隣に座る川崎氏を覗くと口を押さえて震えていた。目元をみると笑っているのがすぐわかる。

私の視線に気づいた川崎氏はコホンと咳をして誤魔化した。

「ごめんごめん。今の言葉、たぶん大志が読んでる漫画の真似なんだと思う。深い意味は無いから気にしないで」

それにしてもはやけに的を射たタイミングでの発言だったような……

多分これは気にしたら私の敗北だろう。

では話を戻すことにしよう。

「そうか、ということはそのしよーた殿のお姉さんは入院しているというわけだな」

「うん」

「そのしよーた殿はけーか殿の友達なのか？」

「うん、よくいつしよにあそぶよ。すつごいなかよし！」

「ああ、確かすごく仲がいい友達が居るって保育士さんが言ってた。多分その子の事だろうね」

なるほどつまりはしよーた殿にはお姉さんが居て、そのお姉さんが入院してしまった

事で寂しくて元気がないということか。

このまま元気が無くては京華殿の遊び相手が居なくなつて、今度は京華殿の元気がなくなつてしまいかねない。

京華殿の元気がなくなると私の相手をしてくれる数少ない友人を失うと同意義である。

我はその未来を避けたい所。

「ここはどうかしてやりたい気持ちがかみ上げてくる。」

「京華殿、話はわかつた。我に任せるが良い。今度のお迎えの時にでもそのしよーた殿とやらを連れてくるのだ」

「ざいもくざーほんとお？」

「ああ、我に二言はない」

「?つかないで。二言も三言も言うじゃん」

間髪入れずに川崎氏がつつこみで笑い声があたりに響く。

「それにしてもよしい、なんだかんだ言つてうちに溶け込みすぎじゃない? もう違和感すら感じないよ」

そう言いうのはさつきから大皿に盛り付けられている煮魚を黙々と頬張つていた川崎氏の弟である大志殿だ。

ふと初めて我がこのうちに来たときの大志殿の反応を思い出す。『姉ちゃん目を覚ませ！ 騙されてんだよ!!!』と真剣に川崎氏を揺さぶっていた。

我は忌み子属性なのだろうか……あれ？ もしかして我、新しい属性見つけちゃった？

「そういうえば大志。入院で思い出したんだけど比企谷さんはどう？」

「うーん……なんていうか見てて痛々しいんだよね。……ふとしたときの大志谷さん、心ここにあらずで昨日だって涙目で空眺めていたしね」

「お兄さんが事故で意識不明なんてあたしでも身内がそうになったら気が狂いそうになるからね。少しでも気にかけてあげなよ」

「うん。そうするよ」

ほう、比企谷とな。珍しい苗字だ。我と同胞な予感がしないでもないぞ。

我はそこまで無神経ではない。その思いは心だけにとめることにして目の前の馳走をいただくとするか。

その後煮魚の味を求め、我と大志殿の壮絶な戦いが幕を開けたのはいうまでもない。

\*\*\*

我は川崎氏とともに、京華殿の迎えにはせ参じた。

そして我はしよーた殿に我が極地の演舞を魅せたのだが、終始真顔だった。

むしろその光景を見られたしよーた殿の母君に通報されかけるトラブルに見舞われる始末。

しかし保育士と川崎氏が説得し、事なきを得た。

我そんなに不審者に見えるのだろうか？

川崎氏がしよーた殿の母君と話をする事になり少し離れた所で話をしている。

我が一緒では話がつれるらしい。

その間、我はけーか殿に我の内に眠る黒龍で邪王を焼死させる龍波動の演舞を魅せていた。

無論、本気で波動を出さないようにセーフティーロックは万全である。

けーか殿は手をパチパチしながら笑っていた。

話が終わったのか川崎氏は我の元に戻ってきた。

「大体話をつけたよ。材木座、次の休みは暇？」

「我は大事な修行の時間で埋まっているが」

「暇ね。それじゃ今度しよーた君と一緒に病院に行くよ」

詳しく話を聞くと、しよーた殿の両親は多忙を極め、しよーた殿に構ってやる時間が

あまりとれずに居た。

それに合わせ、しよーた君を連れて病院に行くこともままならないでいるというのが現状だ。

そこで川崎氏が余計なお節介……ではなく気を利かせ、しよーた殿を病院へ連れて行く話となつたらしい。

「これは我必要無いのでは？」

「これは材木座、あんたが引き受けた京華からの依頼だよ？ いいの？ 京華に嫌われたいならかまわないけど」

「貴様、我を脅迫するか!？ きつ汚いぞ〜っ！」

「行く？ 行かない？ どっち？」

我を愚弄するかのような口調で問いかける川崎氏。

くそっ、こういう時に我が力を解放すれば……いや、こんな所で力を解放したら周りのすべての住民を巻き込んでしまう。

そこまで織り込み済みとは川崎氏、やるな……

くう〜っ。ここは我が犠牲になるしかないっ……

「……行きます。」

脅迫に近い形で私の休日は潰れることとなつた。

\*\*\*

お日柄もよろしいことで。

さんさんと注ぐ日光にとろけそうになりながら病院へと赴いた我ら。

汗をかいているのは我だけみたいだが。

京華殿殿の姿が見えない事を川崎氏に伺ったら大志殿に京華殿は預けてきたらしい。

「結構大きい病院だね。材木座迷子にならないでね」

「任せておれ……ん？」

あれ？ 川崎氏？ 普通ここはしよーた殿にいうんじゃないの？

なんで我だけ？

そんな疑問を残しながら川崎氏としよーた殿は手を繋いで先に病院へと入っていった。

我もそれに続いて病院に入る。

エレベーターを待っているあたりで、私の腹部からとてつもない異音とともに便意が

襲いかかってきた。

ぐうううううつ、こ、これはっ!! 『奴ら』による遠隔攻撃か!! クツ……我とした

ことが油断してしまった。

……あつ、これ最初からクライマックスタイプだ……ちよつと急がないとまずいやー  
っ。

「すすすすすまぬ川崎氏、先に行つて貰えぬか!! わわわわ我が殿を務める!!!」

「あ、ああ……何言つてるか分からないけれど必死さは伝わつて来たから早くいつてきたら」

「それではごめんっ!!」

一心不乱に我はトイレを探し出し、そこに駆け込むのであった。

### 明鏡止水

我の心は澄み渡つた水のように穏やかだ。

そんな穏やかな心境でトイレから出てきた我だが、何か重要な事を忘れていたようだ  
あれ? 我そもそも病室がどこか聞いておらぬぞい?

澄み渡つた水が泥水に浸食されていつている心境だ。

とりあえず電話を……あー、病院内で電話したらダメだった。

メールを打つて返信が来ることを期待しよう。

その間に我も自分の足で病室を探してみることにした。

しばらく病室のネームプレートを見ながら川崎氏を探していると

ふと個室のネームプレートに目に入った。ひらがなで書かれた珍しい名前に我の興味をひく。

「ひきがやはちまん……八幡だと!？」

なんだとつ、あの八幡大菩薩から名前を拝借したと言わんばかりの名ではないか!?

う、羨ましい……しかし我の義輝という名も足利義輝と同名だ、つまりは互角である!  
う!

しかしこれは前世からの数奇な巡り合わせだろう。

ぜひともそのご尊顔を伺うべきだ。

それにこんな古めかしい名前だ。どこかのご老人だろう。

我はそつとその個室の引き戸を静かにスライドさせる。

室内は薄暗い。予想に反して結構若い。どうやら眠っている様だ。

それなら都合だ。顔をみてさっさとでてしまおう。

そうしてベッドに近づいてみたらどうも様子がおかしい。

普通の病人にこんなに管が通っているだろうか？



ひきがや……

ネームプレートとの記憶をたどる。

たしか、前の夕食の時に川崎氏と大志殿がそんな話をしていたな。

もしやそのお兄さんとはこやつなのでは？

そう思い、その顔をまじまじと見る。

うむ。それなりに整った顔ではないか。

八幡大菩薩の生まれ変わりひきがやはちまんよ、何があつたが知らぬが、主が目覚めぬ事で悲しむ者がいるのだ。

はよ目をさまさんか。

我は彼の額に指をあて反魂の術を執り行つた。

ただ指先に力を入れてふんつと唱える我だけにしか出来ぬ簡単な術だ。

……あれ？ なんかもぶたが頻繁に動いてるんですけれど。

これもしかして本当に起きちやうん？

さーつと血の気がひいた。

これはまずい。

目を覚ましたら知らぬ奴が目の前にいてとかでまた不審者扱いされて通報されかねん。

我は脱兎の如くその病室から出て行つた。

あの病室からできるだけ離れようと階段を駆け上がり、駆け上がった先に売店が見え、そこで飲み物を買ひ、喉を潤していたら着信音が鳴つた。

多分川崎氏からの返信だろうと携帯を開く。

——あんなにやつてんの！ いまどこ？ ——

——病院の4階です ——

——ならあたしらが乗つて来たエレベーター背にして右に曲がつて、最初の十字をまた右に曲がつた突き当たり右の病室に来て ——

——承知つかまつた ——

やけに右が多い一貫性のあるわかりやすいナビだ。

川崎氏の指示通りの道順をたどり、病室へと入る。

やけにおとなしかつたしよーたくんと楽しそうにおしゃべりをしている彼女が目に入る。

ウエーブした長い髪は色素が薄く白よりのグレーだ。

長い入院生活なのか真っ白な肌と細身の身体が目映る。

私の予想は年下と思っていたが同い年くらいの女子だ。そして割に顔立ちは整っているものでちよつと我緊張してきた……

この女子がしよーた殿の姉君というわけだな。

ふと入ってきた我と目が合ったが我は即座にそらした。

「あつ、はじめまして」

「は、はじめまして……」

声が届いたか届いていないかわからないが、届いていないだろうと思える小さい声で挨拶を返した。

「材木座は恥ずかしがり屋なんだ。ちよつと変な奴だけど……」

川崎氏はこの姉君とすでに自己紹介は済ませて居るみたいだ。

「そうなんですか」

まあ、我は部屋の片隅にでもいれば良い。

たださすがに暇を持て余す。何か読み物があれば良いのだが……

「つむっ」

目に入ったのは我をこの世界に引きずり込んだ原初の聖典。

ライトノベルだ。

「この本興味あるんですか？」

後ろから川崎氏とは違う女子の声が聞こえた

多分、あの女子だろう。顔を合わせられないからとりあえずそのままの姿勢で話をする。

「私の人生を変えたと言っても過言ではない原書の聖典だ」

「へ、へえ……そうなんですな」

「ごめん、材木座はちよつとこじらせてるから、あたしにも弟が居るんだけどね……男子ってのはどうしても一度通る道らしいんだ。気にせず話をしてあげてもらえない？」

「あ、はい。そうですね。男の子なんですから憧れちゃいますよね。誰かのヒーローって」

「ちよつと違う様な気がしないでもないけれど……まあいいか」

「それで……材木座……さん。その本は好きなんですな。もう最新刊まで読んだんですか？」

「ああ、もちのろんだ。主人公が決死の思いでピンチを脱したと思つたらまたすぐにピンチがやってきてそれでも限界を超えて勝つた！ ようやくこれで終わりかと思つたら、絶望的な力をもった強敵が現れてこれもうどうするんだって我は気が気でなかつたぞ」

「そうですよね。そこで今まで敵対していた勢力が助けしてくれるところとかすごく面白かったです」

「ぬっ、おぬし結構わかる口よのう」

気づかぬ間に我は彼女の顔を見て話をしていた。

同じコンテナツを好む者同士、しっかりと顔を見て話したいという意味があつたのだろうか。

「うん。病院つてつままないしね。本読むのは好きなんだ」

「ねえーねえーおねえちゃん。しよーたとはなししよー」

「はいはい。しよーたの保育園の話聞かせてよ」

おっと、我がしよーた殿と姉君の水いらすの時間を邪魔してしまったようだ。

「我の事は気にせず、十分にしよーた殿と語られよ」

「うん。ありがとう。ごめんね」

そう言つて彼女はしよーた殿と話し始めた。

我もこの聖なる書物を再読しようと幾つか手に取る。

その際に視界に入ったあの姉弟を微笑ましく見つめている川崎氏の姿がやけに印象に残つた。

\*\*\*

外も若干薄暗くなり、完全に暗くなる前に帰ろうという話になり我らは彼女の病室から出た。

ちようど病院の入り口付近に差し掛かると一人の少女と両親らしき人物を連れ、急いだ様子で近づいてくる。

「おとーさん、おかーさん！ 早く早く!! おにいちゃんが待つてるー!」

どうやら兄が入院しているのだろう。

なぜそんなに急かすのだろうかとすれ違う際に彼女の表情を見て察した。

嬉しい表情と裏腹にその頬を伝う水滴の意味は悲しみを表さず、それはきつと喜ばしい事なのだろう。

早く兄君に会いたいその気持ちが他人の我でもわかる。

通り過ぎた彼女の声が次第に遠くなっていく。

「きょうだいね……」

彼女の声が聞こえなくなったタイミングを見計らい、川崎氏は何か思い詰めたかの様にふと呟く

それが何を意味したのかは我にはわかりえない境地の話なのだろうとその呟きに対

し聞き返すことはしなかった。

## # 1 3 — 3

「……というわけで我は貴様の事などどうにお見通しなのだっ比企谷八幡!!」

やけに大きな声が室内に鳴り響く。

その大きな声の発生源となる目の前の中二病をまだ完治できていない大柄な野郎が、ようやく経緯を言い終えた。

さすがに長過ぎだろ、三行にまとめろや。

「は、はあ……壮大な自己紹介どうもっす」

入ってくるなり、いきなりスライディング土下座かましてきて意味が分からんから経緯を話せと言った数十分前の自分が悔やまれる。

そしてこの人絶対ボツチだろうなと俺のボツチアンテナが反応している。決してどこぞの幽霊族最後の末裔みたいに髪の毛が立ったりはしないがな。

まあ一応話を聞いた限りだと、俺の目覚める直前に居合わせたということだろう。

しかし、もつといいシチュエーションで目覚めるとかあったら俺……

なんで野郎の意味の分からん演技に相まって起きちゃうの？

ファーストキツスはレモン味くらい夢を壊された気分だ。



ちなみに俺のファーストキスはキャットフードと動物臭がした。

その後壮絶に引つ搔かれた覚えがある。

……そして後から気づいたんだよ。あいつオスなんだよ。おいおいネコとBLとかちよつとマジ勘弁。

忘却曲線の彼方に消し去りてえ……

「材木座、あんたうるさい」

「は、はいいい」

その大柄なボツチと、なぜ一緒に居るのか不思議に思えてしまう位の美人さんがその勢いだけの口調を止める。

何こいつ、ラノベ主人公補正でも持つてんの？ マジ羨ましい。

「そんなことより由比ヶ浜」

「へ？ わ、わたし？」

突然のご指名に驚きの表情を隠せないご様子。

「まえに、1年生が盗撮されて困っているとか騒いでたよね」

えっ由比ヶ浜もしかして2年生全体にそれ言っちゃったわけ？

まじでじま？ ちよつと困るんですよねー事務所通さずにそんな事されると。

「うんまあ。もう最近はおとなしくなってくれたし大丈夫なだけだね」

「実はその犯人、こいつ」

「っは？」

俺は頭の中が真っ白になって何を話せばいいかわからずにいた。

視線をいつもの2人に向けてみると、由比ヶ浜も空いてる口が塞がらない様子。雪ノ下先輩に置いては呆れかえってため息をついていた。

材木座って言ったっけか？ ああ美人さんと同じ学年そうだし想像するに2年生だろう。

俺からしたら会うのも初めてだし、何か恨みを買った様な記憶も無いのだが。

「とりあえず、経緯を説明してもらえるかしら？ 今ただ単に彼が犯人ですと言われるも納得するには材料が足りないわ」

「そうだね……ほら材木座」

「う、うぬ。承知つかまつった」

話を要約するところだ。

材木座先輩は自分で小説を書いているらしい。

何かネタ集めにとあの一色と行ったシヨッピングモールへと行っていたみたいだ。

そこで一方的にたまたま俺の顔を知っていた材木座先輩は一色と一緒に歩いている俺を見つけてしまう。

リア充を思うだけで呪い殺せたらという物騒な考えの元その光景を撮影し、持つてるSNSの裏アカウントに投稿したらしい。

するとどうだろうか、一気にバズってしまった。そしてこのネタはかなりいいと調子にのってしまっただけらしい。

それから俺が誰か女の子と居るところを見ると影から撮影してSNSにアップして  
いたみたいだ。

「さいつてー」

「あなた、自分のした事の大きさが分かっているのかしら？ 被害者は比企谷君だけでは無いのよ？」

「うぐつ!？」

由比ヶ浜と雪ノ下先輩が憤りをあらわにする。

いや、何ダメージ受けたような挙動してんの？ あれですか漫画に良くある吹き出しが身体を貫通した様な表現すかね？ それをすぐにイメージ出来る俺もどことなくキモい。……とうとう自分も自分の事気持ち悪いと思っっている自分が悲しくなった。俺が俺の事を好きでなくてどうするよ。

おっ自分が3つ揃ったぞ。俺も3つだ。スーアンコー単騎！ 役満！ 八幡！ 大喝采！

役など知らんが語呂はいい。

さすがに悪い事をしたという自覚があるのか材木座先輩は結構大柄なのだが、肩身の狭い思いなのか少し縮こまって見える。

「まあ、もちろんその反動はあってね。最近になって逆に炎上し始めた」

美人さんがダメージを受けて片膝ついて居る材木座先輩に代わり会話を続ける。なかなかのコンビネーションに八幡驚いちゃう。

「ああ、俺たちが意図的にそういう流れにしたからな、正体分からねえし」

「なにい!? あの策略、貴様らの仕業なのか!! ひ、卑怯だぞ!」

どうやら傷が癒えたのかまた材木座先輩が話しに割り込んでくる。

「ちよっ!? なに私たちが悪い事をしたようにいつてるしっ!」

「一方的に言の葉の暴力が続く無限地獄を喰らわせてよくヌケヌケと」

そう言つて何故か材木座先輩は俺を指さし答えた。

なぜ由比ヶ浜が言った言葉を俺に向けて返す? いきなり言葉のキャッチボール大

暴投してね?

「因果応報ね」

「自業自得だね」

あつ、さすがにあの美人さんもそこまでフォローはしてあげないのね。

「まあご覧の通り。炎上に耐えきれなくなつてあたしにどうすればいいつて相談持ちかけてくるから。素直に謝りに行けつて言つたら一人じゃ怖いとか言い出すから仕方なくあたしも一緒に行くことになつた訳」

「うわあ……」

由比ヶ浜がこれ程に無いまでにひいている。ゴミを見るかのような目をはじめて見ちゃつた。

「たしか、川崎沙希さんだつたわね。今まで話して貰つた材料で判断すると、材木座くんは見た目も中身も醜い人間ということで極刑を申し渡すことが出来るのだけれど」

さすがユキペディアばいせん。総武高校生徒の名前は誰でも知つてる便利！

材木座先輩は半泣き状態だ。

「たしかにこいつはそういう醜い部分もあるけど、擁護はさせてほしい。根はいい奴なんだ。現にあたしはこいつに何度も助けられているからね。今回は暴走してしまつたけれど常日頃から悪い事をしでかすようなやつじゃないから……」

「何を助けられたのかしら？」

「いろいろ。もしそれがなかったらあたしは大学の進学……諦めてたからね」

そう言つて材木座先輩にむけて微笑む彼女の姿に少しだけうらやましさを感じた。

「なるほど。それじゃ比企谷くん、あなたはここまでの材料を元にどう判断するのかし

らっ？」

あつ雪ノ下先輩ここで俺に振るんですね。

まあ、正直すでに俺の中では解決した感があり正直どうでもいいっちゃどうでもいい。

しかしだ、一色や由比ヶ浜、戸塚先輩にも被害が及んだ。

これは俺が1人でよし気にしてないからもういいよとか言つてよいものでもない。

「とりあえず、該当アカウソントの削除と被害者全員に謝罪して回るがすべき事だろ」

「そうね、今ここに居ない一色さんや戸塚くんも被害者なのだから」

「というわけで材木座先輩。俺はとりあえず許しますけど、他はどうかは知らないです。

でもちゃんと謝って回ってください」

すると咳き込みをして川崎先輩が口を開いた。

「比企谷……だっけ？ 許すだけで罰を与えないっていうのやめてもらえる？ またこいつがいつ調子に乗るかわからないじゃん」

あー、なるほど。この人完全に材木座先輩を理解して居ますね。

罰を与えないと覚ええないタイプか……となると。

「わかりました川崎先輩。では先輩呼び撤廃ため口OKでいいですかね？」

「ぐぬう！ 貴様比企谷八幡、我を敬う気持ちなど無いと申すか！」

「えっ？　そうだけど」

ぐぬぬと何か言いたいけれど何もいうことが思いつかない様子の材木座先輩。

「まあ、それでいいならいいよ、で？　由比ヶ浜、雪ノ下はどうする？」

「そうね。今一番効果が大いいのをいうと材木座くん？　私の目を見て話をして貰えるかしら？」

「なななななんでしゅと!？」

さすが雪ノ下先輩だ。多分さっきの挙動で女子と話し慣れていない事が分かったんだらうな。察しよすぎだろこの人。

「ゆきのん私もそれ思ったー!」

由比ヶ浜はあまり分かってない様子だ。

「なら、あんたらと話す時はちゃんと目を見て話すが罰でいいか？」

「それでいいわ。それほど話をする機会はないと思うのだけれど」

「ゆきのん、それは隠しておこうよ……」

容赦ねえなこの人は。

「とりあえず一旦ここのメンツはそれでいいって事でいいよね」

「ええ、問題ないわ」

「あんたもちやんと反省しなよ」

そう言つて材木座の頭にポンツと手を置く川崎先輩。マジ男前。

「そうだな……うむ、これは我の心の弱さが招いた結末。皆のもの誠に申し訳ないことをした。……申し訳ない。」

そう言つて深々と頭を下げるその様は先ほどまでのふぎけたものとは違いしつかりとした物だ。

川崎先輩の言つていた根はいい奴というの？では無いということか。

「ああ、そんだけ出来れば問題ねえよ、次からは気をつけるよ。材木座」

「そうだな。相棒」

ん？ なんでいきなり相棒なの？ 今日初対面なんだけれど？

「何すつとんきような声を上げています。貴様は我の反魂の術で蘇った八幡大菩薩の生まれ変わりだろうに」

こいつ何言つてんだ？ ただ名前が八幡なだけだ。いきなり大菩薩とか言われる筋合いは無いわ！

「中二病乙」

「ぬう、はちえもんちゃんと乗つかつてきてよ」

「誰がはちえもんだよ、さきえもんに頼れよ」

すごい視線を感じそつとその視線の方を向くと川崎パイセンのガツンと根性入った



睨みが俺に向かっていて。あつ、これ俺墓穴掘ったパティーン。  
「ヒツキーそういうところー」

由比ヶ浜がそれに気づきそつと空気を和らいでくれた。さすが空気の流れを読める女。エアードアストの使い手だな。キーボードの隙間掃除するときには便利そうだな。

ふんつと、鼻であしらわれた後、川崎先輩は材木座に向けて口を開いた

「ほら、帰るよ」

「むむう、そうだ。今日は京華殿を迎えに行かなくては!？」

そう言つてばつと立ち上がった材木座。

え？ まだ知り合いの女の子いるの？ こいつ何？ マジでラノベ主人公なの？

「つそ、また寄り道して帰つてこないでよ」

「わかつておる」

そんな話をしながら2人は部屋を出て行った。

呆氣にとられた俺たちを残して……

「信じられない会話が聞こえてこなかったかしら。私、幻聴が聞こえたような気がしたのだけれど」

「うん、私も聞こえた」

「そうだな。俺、思いで人を呪い殺せたらと初めて思った」

「ヒツキーそれはキモいよ、すごくキモい」

えっ?! そこ乗っかってきてくれる流れじゃないの？

「比企谷くん、あなたの性格の醜さが余すこと無くでたあなたらしい発言だと思っわ」

「あつ、さいですか……」

これは俺がデイスられる雰囲気、どうにかしてこの窮地から脱さなければと考えていたら天からの恵みか、ノックの音が聞こえてきた

「……どうぞ」

バツ悪そうにそれに答える雪ノ下先輩。

「せんぱーい！」

何のかけ声だ。失礼しますが先だろ。

「んだよ、一色か。部活はどうした？」

「さつき終わりましたよー。というわけで帰りましょう！」

「なんでお前と一緒に……いやまて、一色お前うまいケーキ屋とか知ってるか？」

シンツと一瞬室内が無言になった。

おや？ 俺おかしいこと言ったかと思いい色に視線を向けてみる。

なんか呆けている。

「どうした？」

「なananんあなんですか!! いきなりっ!! 私とケーキ食べに行きたいんですかそうで  
すかせんぱいがどうしてもというのでしたら仕方がないですねいきましよういまずぐ  
にいきましよう」

そう言つて一色は俺の制服をぐいぐいと引つ張る。やめて伸びちやうだろ。

「んなわけねえだろ。たまには小町にお土産買って上げたくなつただけだ」

「あゝ……そうなんですね。あいかわらずのシスコンぷりですね。まあでも教える代わ  
りに私にも何か奢つてくださいよ」

「紹介料とるのかよ」

「そうです。しっかりとリードしてくださいね」

少しため息をつきながらその条件をのむことにした。小町の笑顔はプライスレスだ。

「すまんが俺さきに帰りますわ」

「そうね。妹さんによろしくお伝えして」

「ヒツキー小町ちゃんに宜しくね!」

多分この2人は材木座の話聞いて俺が何をしたいのか理解しているのだろう。引  
き留めはしなかった。

「んじゃ行くか、一色」

「んふふ。何がいいかな」

すげえ食い意地だな。太る呪いでもかけてやろうか。

そうして部屋からでた後に雪ノ下先輩が「他の人があなたに対して思っている言葉だ  
と思うわ」とふと後ろから聞こえてきたが何を言っているかは分からなかった。

## # 14 — 1

本日の奉仕部はとくに何事も無く終わる。

夕日の差し込む校舎入り口で俺は上履きと靴を履き替え外にでる。

ちよūdと夕日の光が目にし込み顔の向きを変えることで日差しを遮り、視野を確保できた。

変えた顔向きの先で運動部の生徒だろうか、完全下校時間が迫っている時間帯だろうか、からいそいそと片付けを行っている風景が見られた。

まだやってるんだな運動部って小学生並みの感想しか出てこないが、まあ思うだけならいいだろ。

そんな運動部を視界から消し、俺は駐輪場へと足を進めた。

自転車を走らせていると先ほど追い抜いた車がちよつと先で停止する。

2回ハザードランプが点滅するが何の意味かは知らん。

するとその車から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「比企谷。今帰りか」

運転手側の窓から見覚えのある顔が姿を現す。

自転車を止めてその車の隣に並ぶ。

「そうですね。つてか平塚先生も早くないですかね？ 教員つてこんな時間で終わっていいんですか？」

「今日は半休を取っていてな、時間が空いているわけだ。どうだ、これでも？」

そう言つて平塚先生は人差し指と中指で箸を連想させるかのような行動をとる。

つとなるとこの人との共通点はラーメンしか無い。

「それもありつちやありですけど、いいんですか？ 先生と生徒で飯なんて行つちやつて……見られたらまずくないですかね？」

「いざとなつたら生徒指導の一環とでも答えるさ。面倒事を若手だからと言つていつも押しつけられているのだ。これ位の役得はあつてもいいだろ？」

やけに若手つて部分を強調したな。いや若いけれども。ここの会話のパスはスルーすることにしよう。

「うーん迷う……さすがにこの時間は小町が心配しますからね……」

それに今から自転車置いてきてつてなると結構時間かかるんじゃないやね？

「むつそうか。今日は煮干し系を攻める相棒が欲しかったんだがな残念だな」

煮干しか、うーむそそられる。梅干しを思い浮かべると唾液があふれ出るように、煮干し濃厚のスープを思い浮かべただけですでに舌に味覚が存在してしまう。

あれ？　これって食べる必要なくね？　いや、食べると幸せになれる。それがラーメン。成分にセロトニンでも入ってるかは知らん。

くっそー迷う。あー、行きてー。

「あつ、せんぱいだー！」

比企谷八幡人生の最大の選択肢を目の前に熟考している最中、軽く聞き覚えのある声が耳に入る。

「買い食いとは感心しないな、一色」

一色の方に視線を向けると、すぐそのコンビニから出てきたのかコンビニスイーツらしきものを手に持っていた。

あつ、そのカラメルが別包装でついてるプリン、メチャクチャうまいよね。俺も好き。

「あれ？　平塚先生じゃないですか。せんぱいと何やってるんですか？」

「ああ、ラーメンと一緒にどうだつて話をしていてな」

「えー、なんですかそれ！　羨ましい！　平塚先生私も私も!!」

「なんだ一色。お前もラーメンに興味があるのか？　なら比企谷を説得してくれ。しがな  
い一般教員の私ではどうやら口説き落とせそうに無いからな」

そんな一般教員がやけに高そうな車乗っていますね。とかつつこみそうになったが車好きは車のことを話すると、やけに長い横文字とやけに長い話をグダグダと語ると噂

されているからそこはあえて流そう。

「せんばいつ行つてみませんか！ きつと平塚先生ならその場のノリでゴチしてくれるかもですよっ！」

一色、どんだけ平塚先生に奢らせたんだよ。

タダより怖いものはないって教わらなかったのかよ。

「二色、みつともねえからそういうのやめろ。品性損ねっから。俺そういうの好きじゃねえんだ」

「……はい。ごめんなさい」

シユンと反省の色を見せる一色。

冗談とかで誤魔化す事をせず真摯に受け止めているあたり素直な奴ではある。

んだよ。

こういう時そんじよそこら系女子なら『キモいしやべりかけんなキモい』で反撃されて終了なんだがな。

「んなことよりもなんでお前ここにいんだよ。俺が帰る最中まだサッカー部片付けしてたぞ？」

「それは部員の人たちが俺がやるから先に帰つていいよつていうからそうしただけですよ」



一色は上目遣いで舌をペロツと出していたずらに笑う。切り替えの早い奴だ。

でつ、でつ、でたく。もうすでにサッカー部の皆様は葉山先輩以外一色マジックの虜にかかっちゃつてゐるのね。

「マジかよ……つてか帰らないと小町が心配するだろうが」

「あいかわらずのシスコンぷりですね。そういうと思つて今さつき私から小町ちゃんに連絡済みです」

マジかよいつやつたんだよ。えつ？ 時間ぶつ飛ばされた？ こいつスタンド使用か!?

俺の携帯が振動する。着信を見ると小町からのメールだった。

——おにいちゃん。行つてらっしゃーい。 S. P. お土産はプリンで。ぷっちんじゃないよ？ わかるよね。よろしく！——

小町ちゃん？ 本文より S. P. という謎の後書きのほうが長いんですが。なんて読むんですかね？ スープパスタ？ うまそうだな。

「つというわけで、さあ行きましょう！」

まあ、これで心置きなく煮干しラーメンを食べる口実が出来たのだ。

それにのらない手は無いな。

「一色も来る事になると私の車は運転手合わせて2人しか乗れないのだが……仕方が無

い。今回は近場の行きつけにしようか。比企谷、すまないが一色を乗せて行くが駅まで来れるか？」

えっ？ 煮干しラーメン食べないの？ それならちよつと話が変わるんだが……小町に会いたくなってきた。

「俺の口はすでに煮干しなんです……」

「安心しろ比企谷。そこも煮干しだ」

どうやら配慮はされていたらしい。

「りようかいっす。なら自転車で駅まで向かいます」

「せーんぱい。どっちが先につくか競争ですな！」

そう言いながら平塚先生の車に乗り込む一色。

「おまえ、どうやってチャリが車に勝てんだよ」

それに見たところそれスポーツカーだろ？ 俺の人間としての限界を超えても無理だわ。

「おおっふ、なんですかこのソファァーみたなシート。快適快適」

「そうだろそうだろ？ 自慢の一品だ。これをするには結構苦労したんだ。じつはな

……」

一色、アウトー。車の中で一方的に車の話を延々と聞かされる刑。

「それじゃおれ先行きますねー」  
火の粉がふりかかる前に俺は即座にその場を脱したのだった。

\*\*\*

「せ、せんぱい〜」

予想通り俺の方が遅く到着し、駐輪場から出たあたりで、ふらふらな一色とご満悦な平塚先生の姿が見えた。

あー、ご愁傷様。

「さて、行くでしょうか」

そうして、ついに行った先にあつたラーメン屋は俺も数回行ったことのある濃厚煮干スープで有名な所だった。

なかなかうまくつたと記憶にはある。

食券を買おうと財布をポケットから出した

「今日は私が誘ったんだ、これくらいはどうということない」

「いや、俺人から施しは受けない主義なんで」

専業主夫で養われたいがな。

「まあそういうな。大人に花を持たせるのも処世術のひとつだぞ?」

「あー……そうですね。先生がブーケを持つのはいつごっ……っ!?」

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ!

おれは平塚先生の姿を見て喋っていたと思つたら目の前には拳があつたんだ。

な……何を言っているのかわからねーと思うが、おれも何をされたのかわからなかつた……気づけばそこに拳があつた。

何か恐ろしいものの片鱗を見たぜ。

視野いっぱい広がる拳の片隅にそれと不釣り合いな笑顔を浮かべる平塚先生。あつ若干額に青筋が浮かんでる。

「ひい……きい……があくやあく、その拡大解釈はお前の首をしめることになるぞおく?」

「いや、さすが平塚先生。今日はごちそうになります!」

この状況で断れるわけねえじゃん。墓穴掘つた10秒前の俺が怨めしい。

その言葉でようやく拳を収めてくれた平塚先生は一息はあつと軽いため息をつく。

「ただ、お前が何か理由がない限り施しは受けれないと言うのも一理ある。あしたの職員会議で使う資料があるのだが、なにぶん量があつてな。運搬の手伝いを一色と一緒にしてくれ」

「わ、わかりました……」

「えー!? せんばい、わたし巻き添えなんですけれど!」

むむくつと一色は頬を膨らませながら俺を睨む。

「すまん……アイスで勘弁してくれ」

「ハーゲンナチョコチップですよ」

「スーパードーナツにまけてくれ……」

スーパードーナツでなんやかやらしい響きだな。

ちよつとやらしい雰囲気になっちゃいますよ!

……一色はそんな雰囲気を感じていませんがねっ!

そして煮干しラーメンはうまかった。

麺の後のスープにご飯を投入し、さらに退避させておいたチャーシューをほぐし投入。

最後に七味を入れ完成した八幡風ラーメンライスまで完食したパーフェクトゲームだ。

やけに横文字が多くてろくろ回してコネコネしたい気分になる。

平塚先生は笑っていたが、一色はドン引きしてた。

いやうめえから。

すでにあたりは薄暗くなっていた。

エンジンのかかった車に乗ってる2人を俺が見下ろす形となっている。

「それでは私は一色を送って帰るから気をつけて帰るんだぞ」

「うーっす」

「せんぱーい、スーパーなカップありがとうございませうっ！」

「食い過ぎて太んじゃねーぞ」

「それは明日のお手伝いで消化予定です！」

「では行くでしょう。一色、ナビを頼んだ」

「はーい」

エンジンの重厚な低音が一瞬あたりに響く。

その後すぐ平塚先生の車が軽快に動き出した。

そうして俺は彼女らが乗った車を見送る。

姿が消えたあたりで俺も駐輪場へと足を進めた。

なにか忘れていた気がするが忘れていたのだからきつとどうでも良いことだろう。

その後、俺は家に帰ったにもかかわらず玄関の番人への貢ぎ物を忘れてしまいコンビニ

二に買いに走ったの言うまでもない。

\*\*\*

そして次の日、放課後。

奉仕部の面々には遅くなると伝え、俺と一色は職員室で平塚先生からの依頼内容を確認している。

「ではここにある資料と実物投影機がたしか準備室にあるからそれを会議室に運んできてくれ」

「ここにある資料とは折りたたみ式の長机いっぱい敷き詰められた書類の山だ。

えっこんなにいっぱいの資料なにに使うの？

「なんすかこの量……滅茶苦茶でしょ。資源を大切につて教わらなかつたんですか」

「大丈夫だ、これらはリサイクルコピーパーパーを使用している。分別すれば再利用できんぞ」

「俺にも優しくして欲しいです、昔膝に矢を受けてですね。」

「比企谷、ネットスラングを持ち出してまで面倒事を回避しようとするな」

「元ネタ知ってんのかよ。」

「分かっていますよ。ちゃんと食った分は働きますんで」

「分かれば宜しい、私はこれから生活指導が入っててな、席を離れなくてはいけない。す

まないが後は頼んだ」

「うす」

「はい、りよーかいですー！」

そう言つて平塚先生は職員室から出て行つた。

俺たちは長机いっぱいに広がる書類の山を見てため息をつく。

「うへー、これは結構しんどいですよ〜」

「そうだな。まあ黙々とこなしたらいつか終わるだろ」

そうして俺たちは黙々と書類を運ぶ作業に勤しんだ。

労働の楽しさが芽生える……事は無かつた。

途中から台車を使用するという案を思いつき、近場に居た先生に台車の所在を確認。

確保することが出来た。

そこからはヌルゲーだった。

書類は会議室へ滞りなく運搬することが出来た。

「あとは、実物投影機か」

「なんですかそれ」

「知らないか？ プリントとかスクリーンに写す機械つて見たことねえか？」

「あー、あれのことですか」



多分見たことはあると思う。ただ結構デカいのだ。台車が無ければ結構苦勞しただろう。

「結構デカいから俺が一旦台車乗せるからそっからの移動よろしく」  
「りようかいです」

そして俺たちは準備室へと足を向けた。

準備室はカーテンでしきられ薄暗い空間となっていた。

カーテンから漏れた光に漂う埃が少しだけ幻想的な雰囲気をかもしだして少しだけウキウキさせられる。

長く使ってなかったのか蛍光灯が切れておりカーテンの隙間から漏れていた光を頼りに実物投影機を探す事となった。

「うっわ……ほこり臭いですね……」

一色ちゃん？ 折角雰囲気だそうと頑張ったんだからそれを一気に壊すのやめてね？

そして実物投影機を見つけたはずなのだが

「誰だよ……棚の一番上に置いたバカは……」

「2度と使う事は無いとか思ってたんじゃないですかね……これ……」

実物投影機と書かれているダンボールが棚の一番上にあることが確認できた。

それ以外にもいくつか積み重なっており、不安定であることこの上なかった。

「とりあえず、余計なものをどかしてから取り出すか……」

「そうですね、落ちてきたら危ないですし」

ひとしきり実物投影機の周りにある余計な道具をどかし、安全性を確保する。

そして、メインディスプレイの投影機を持ち上げるのだがこれがまた重いなんの。

こんなもん1人で持ち上げることできるわけねーじゃんよ。無理無理諦めよう。

「あつ、せんばい、せんばい」

一色が俺を呼ぶ。

「ああ? どうした?」

「いやあれ……」

俺は一色が指を指した先を見ると一気に脱力した。

そこにはこう書かれたダンボールがあった。

『実物投影機—最新版—』

最新版はやけにコンパクトで一色でも持ち上げられるタイプだろう。

となると俺が運ぼうとしていたのは昔使ってた奴なのだろう。

時代の進化を感じるぜ。そして危うく二度手間になるところだったわ……。

「ナイスだ一色」

「はえ、ちつちよつ!!?　せせせせんばい!!?」

「どうやら最近、俺は一色を小町と同等に扱うようになってるのだろうか。無意識に一色の頭を撫でていた。」

「ん?　……あつ、すまん」

「……べ、別に他に人に見られてないので……全然別にいいですけど」

「一色は俯きながら両手で指をいじっている様子だ。」

「もしかしてどの手で殴ろうか考えている?　そりや怖え。」

「おつ、そうか」

「そんな言葉を言いつつ俺は実物投影機のダンボールを持つ。」

「あのつ、せんばい?」

「一色に目を向ける。薄暗くてよく分からないがいつもの上目づかいと少し違う様な気がする。目が潤んでるからか?」

「んあ?」

「今日、この依頼が終わったらすね……わ、私とデートしませんか?」

「危うく大事な学校の備品を落としそうになった。」

## # 1 4 — 2

複合商業施設マリリンピア。

中規模商業施設かつ、駅にもほど近い事から学生に限らず数多くの人が行き来する。俺も放課後にはたまにここの書店によりラノベを買ったり、同じ制服で放課後デートしている奴らに会話が弾まなくて気まずくなる魔法をかけるというハートフルな呪いを施したりとお世話になっている。ちなみにハートフルは和製英語であり、英語的な意味は真逆に近い。これ豆しばな。

俺は頭の中で自身と会話しながら一色を待っている最中だ。

「せんぱーい、これってどうですかね？」

そう言つて一色が試着室のカーテンを開く。

パステルな黄色がかかったオレンジ色のジャージは一色のイメージカラーと考えるくらいは似合っていた。

「いいんじゃないね？　つてかジャージってどれ着ても同じだろが」「せんぱい、口では捻くれていくくせに表情は正直なんですね」

えっ、俺ニヤついていた？　ちよ、俺の想像の中では完全にクールに決まったポーカ―

フェイスを演じていたつもりだったのだが……

「うんうん、せんぱいの反応的にこれでいいかな」

えっ？ なに？ 俺全男子代表みたいな位置付けなの？ 一色、ちよつとそれは偏りすぎてね？

「……ん？」

一色が真顔で俺をじつと見つめてる。

「……せんぱい、覗かないでくださいね」

「お前着替える前も言っただろうが。覗くわけねえだろう」

「……せんぱいはむつつりですから、ちゃんと言つとかないとまた後であるの言葉の有効期限は一回までだとか言いかねないじゃないですか」

なんでそんな事言われる筋合いがあるんだよ。……たまに太もも見てたのバレてたか？

「さすがの俺もそんな暴論吐かねえよ。……つてかむつつりつてなんだよ。お前に俺のなにがわかるんだよ」

「せんぱいの生態は全部小町ちゃんから教えて貰ってますー。コーヒーに練乳入れる事も知ってるんですからねっ」

えっ？ まじで？ 小町ちゃん何やつちやつてくれてんの？

「なので絶対にのぞかないよーにつー！」

そう言ってシャットと一色はカーテンを閉じた。

……そう言われると覗いてみたい感覚に駆られるのはどうしてだろうか？ それはきつと元をたどると男の狩猟本能にたどり着くだろう。本能なのだから俺は悪くない。

そんな男の本能を理性で叩きのめし俺はふつと1時間前の光景を思い出す。

「今日、この依頼が終わったらすね……わ、私とデートしませんか？」

薄暗い部屋で若干照れの入ったその言葉が俺の鼓膜を振動させ、脳は思考を停止させた。

手に持っていた実物投影機を落としそうになったが、その些細な重力移動のおかげで自我を取り戻す事ができた。

「……なに言ってるのお前？ 断るわ」

「はあ？ こんな可愛い私からデートのお誘いしてるのに断るって何ですかせんばいっ！！」

そう、俺はこう言ってやればいいのだ。

こいつならきつとそう答えるからだ。

だつてそうだろ？ こいつが好きなのは葉山先輩なのだ。

このデートという言葉は裏を返せばあなたを利用したいですという意味を含む。

俺じゃなきゃ知らずのうちにのせられるところだ。

「なんでって、お前のデートはデートという名の荷物持ちだろうが」

「なんでバレたんですか」

「お前が日頃やってることだろうが」

一瞬無言の空間が生まれた。

えっ、なんだこの斜め上な発言して周りがなにを返答したらいいかわからない状態みたいな感じ。

ちなみにこの状態のことを固有結界と名付けている。この瞬間になった時にすかさず『そして時は動き出す……』と叫びつつ指を鳴らせば完璧だ。

すると友人と生きていた周りの奴らは俺から距離をとります。きつと友達だった時間を切り取られ他人とされるのだろう。なるほど厄介な能力だ。

俺に友達がいけないのはこの能力のせいか。あー制御できれば楽だけれどどうやって制御すんだよ。はあーって気を貯めるだけで制御出来れば最高なんだがな。

……つで、今回俺まったく見当違いなことやってないだろ。なにが悪かったんだよ。俺はそつと視線を一色に向ける。

すると、じつとこちらを見つめてる一色とバツチリ目が合った。

一色は俺と目が合った瞬間、なにかハツつとしたかのような表情で俺から距離をとつ

た。

「なananなんですかせんぱい口説いてるんですか？ 俺はつね日頃からお前を観察しているとか完全にストーカーじゃないですか気持ち悪いし気持ち悪いですから話したいことがあるのでしたら相手してあげますのでちゃんと言葉で話してくださいテレパシーで話されてもわかりませんのでごめんなさい」

「気持ち悪い2回言われちゃったよ」

「私正直なんで」

「お前追撃とかごんだけ俺ちゃん泣かせたいの？」

「まあ正直なところ奉仕部にも依頼しようと思っていたんですよ。明日の練習試合で揃えなきゃいけない物が結構あるのですが、今日に限って一緒に行くはずだった子が風邪で休んじやつてるんですよ。部員の皆さんには練習に集中してもらいたいし……つで、ここはせんぱいの出番かと」

「俺限定かよ」

「だって雪ノ下先輩も由比ヶ浜先輩も女子じゃないですか、やはりここは頼りになる男子に来て欲しいわけで」

「お前美少女召還術師いろはすだろ。いくらでも男子召還できるだろが」

「せんぱい。気持ち悪いですよ。あと『す』は余計です」



訂正部分そこかよ! 美少女は否定しないのな。

「せんぱいが安心な理由はただひとつですよ。私に興味が無いことです」

「よく分かってるじゃねえか」

「まあ……あとどうなるかはわかりませんが……」

安心しろ一色、勘違い起こさない様に理論武装はバッチリだ。

「ただ他の男子って私と少しでも長くいようと時間を引き延ばそうとするので面倒くさいんですよね」

「あー、なるほどな。なんか納得したわ」

なんかそこで互いの温度差がある事に現実味を感じざるを得ない。

男子はきつと温度感を合わせようと躍起になるのだろう。それが空回りして温度差は絶対零度と火口から止めどなく流れるマグマくらい温度差が広がる訳だ。

そして最終的に何の成果も上げられませんでしたと枕を濡らし、1日を締めるのだ。そんな事考えずにすむボッチはやはり最強。

「というわけでせんぱい、ちよつと手伝ってくださいね」

「まあ、一旦あいつらに連絡入れてからな」

「はい」

そうだ、俺はこいつらサッカー部の備品を買いに来たのを思い出した。

それがなんで一色のファツションショーに付き合う羽目になってるの？ 一色、お前もサツカー部の備品なの？ 奇遇だな、俺も先日雪ノ下先輩から奉仕部の備品と言われたばかりだ。備品同士仲よくしようぜ。

……備品の扱いが雑か丁寧かで違いはでるとおもうがな！

そんなどうでもいいことを考えてるとようやく試着を終えてカーテンを開けた一色と目が合った。

「それじゃあこれ買ってくるのでせんばいはお店の外で待つてて大丈夫ですよ」  
「おう」

そう言つて俺は店の前まで足を進める。

ちやうど真向かいによく行く書店があるので、そこで一色が戻るまでの間店前で平積みされている書籍の棚を見て回る。

「……ん？」

最新ラノベだろうか、作者の名前が目についた。安いという文字と古里の里で安里。

・なんて読むんだこれ？ あんぎと？ やすぎと？ アンリ？ あぎと？

そんな事を考えているとよく知った声が耳に入ってきた。

「せんばーいお待たせしました」

そう言つて店からなぜかジャージ以外にも色々袋を持っている一色がいた。

あの後にさらになにか買っただらうか。

「おまえ、他にも買ってたんかよ」

「せんばいなに買うかわからないじゃないですか」

「まあな」

そう言つて手を出す。

怪訝そうな顔で俺を見る一色に、んつと手をくいくいさせると軽く一呼吸置いた後に俺にビニール袋を手渡した。

「せんばいのそれって計算してやってるんですか？」

「んなわけねえだろ。小町の教育のたまものだ」

「あいかわらずのシスコンですね。ついでにそれ私以外にはやらないでくださいね。キモがられますから」

「安心しろ、他にやる相手がいねえ」

「そうでしたね」

こいつなに人の顔見てニヤついてんだ？ もしかして俺鼻毛でてる？

やべえやけに鼻が気になり始めてきちまったじゃねえか。むずむずする。

「さてせんばいっ！ 買う物は買いましたし少しひと息つきませんか？ 近くにあるカフェで」

「それもいいな。ちやうど勉強したかったわ」

「ちよっ!!? せんぱい? なんで勉強の話が出てくるんですかあく女の子と一緒にいるんですから会話しましょうよ」

「ばっかお前そろそろ中間試験あるだろうが。来週から部活休止期間始まるのHRで話してたの聞いてたか?」

「聞いてましたけれど、せんぱいそんな真面目学生してましたか? 入学2ヶ月目で遅刻だつて100回超えてるくせに」

ああ、いいペースだな。このまま年間100回遅刻とか出来そうな気分だ。やり遂げたらなんか称号もらえっかな?

「お前、もしかして俺の事バカだと思ってるの?」

「そうじゃないんですか?」

えっ、なにそんなの当たり前でしょみたいな顔。

どんだけ俺低く見られてんだよ。

「お前先週返された実力テスト国語何位だった?」

「ふふんっ、私学年31位ですよ! 1学年数百名の中から50位圏内つてすごくないですか?」

おお、一色も結構やればできるんだな。まあこいつ基本真面目なところあるしな。し

かしだな、上には上がいるのだよ。

「二色。俺は学年一位だ」

引きこもってた時にやること無かったから勉強をしていたのが功を奏したぜ。時間だけはあつたからな。

ちよく気持ちいい」

「つは？ せんぱい？ はほどほどにしてくださいね。後輩よりも順位が低かったからつてその？ は人としての器がしれますよ？」

「えっ？ なんておれデイスられてんの？ うそじゃねーし」

「えっ……ほ、ほんとなんですか？」

「だから言ってるだろ」

そういうと一色は俯きこめかみに親指の腹を何度も当てながら俺に聞こえない声量でぶつぶつと呟いてた。

耳をすませば『一緒の所に行けなくなる……』と聞こえたが何のことだかさっぱり分からん。

とりあえずボツチを恐れず生き続けようという歌詞が脳裏をよぎった。カントウリーロー

「わかりました、勉強しましょう。このまませんぱいの勝ち逃げなんてなんか癪です」

なんだこいついきなりやる気出したぞ。

「おっ……おっ」

そうして俺たちはカフェへと足を進めるのであった。

\*\*\*

一色に連れられて入ったカフェは前に実験の際に入ったカフェと同じ系列だった。

商品を受け取り、ちよつとよさげの2人用のソファ―席が空いていたのでそこを陣取ることにする。

「なんか、もひとつのオシヤンテイカフェに連れて行かれるかと思った」

もひとつのカフェはガラス張りで、施設内の通路が一望出来る感じなので居心地がいかにどうかで言われると早くでたい感じのカフェだった。

「私もそう思ったんですけど落ち着いて勉強するならこつちの方がいいかなと思います」

「まあな」

「さて、せんぱい、わからない所は教えてくださいね」

「いいぞ。3時間考えてわからなかったら教えてやらんことも無い」

「それって教える気ゼロじゃないですか」

「ばっか、教えてやる気持ちはある」

「気持ちだけなんていりません。行動で示してください」

「なんだその倦怠期入った彼女の言い分みたいなの」

「え？ せんぱいもしかして口説いてます？ 告白もしていないのにいきなり彼女とか

先走りすぎでキモいです。告白とか無しでつきあう人たちもいるようですが私はそんなの許さないのごめんなさい」

「いや、例えだろうが」

「そんな事はいいので、ほら早く勉強しますよ〜」

「あー、へいへい」

そして俺達は自らの勉強道具を鞆から取り出し、勉強を始めるのだった。

勉強を始めてからどれ位経過しただろうか、集中力が切れてふと顔を上げてみると、一色がやけに頭を悩ませている様子だ。

その頭を悩ませている教科はどうやら数学だった。

「せんぱい」

俺は一色の次に発する言葉を先読みして口を開く

「一色、ひとつだけ伝えておく。俺は数学というものを捨ててるから。実力テストでも2点だったわ」

「1問しか正解してないじゃないですか……肝心なときに役に立たないせんばいいですね。残念すぎます」

はあくつと深くため息をついた一色は続けて両腕を上げてんぐつと背伸びをした。

ちよつと一色ちゃん、それ目の前でやられるとやけに強調される2つのお山に目がいつちやうからやめてね？

「ちよつ、せんばい!? どこ見てるんですか！ エッチですねっ！ やっぱりむつつりじゃないですか」

「い、いやこれは断じて違うぞ。そ、そうこれは不可抗力だ。何の前触れ無くやられたのだから俺は悪くない」

「せんばい……」

一色ちゃん？ なに可哀想なひとを見る目で見てるのん？

「ま、まああれだ。結構時間も経ったしそろそろ出ねえか？ 人も埋まってきてるしな」

「……まあいいです。そうですね、そうしましょう」

\*\*\*



「せんばい、今日はありがとうございました」

「おう」

一旦学校に戻った俺たちは部室に備品を置き、解散する流れとなった。

「せんばいはもう帰るんですか？」

「いや、ちと部室に顔出す予定」

「……そうですか。わかりました」

そして俺は一色と別れ、部室へと足を運んだ。

引き戸を開けると、雪ノ下先輩と由比ヶ浜の視線が注がれる。

「あら、今日はそのまま帰るのだと思っていただけ」

「私も思った！」

「おもったより大量に買ってたんだな、持ち帰んのもあれだし一旦学校に置いていくつて事で戻ってきたわ」

「あらそう。ここはいつも通りよ。お疲れさま」

「お疲れーヒッキー」

そう言って雪ノ下先輩は読みかけの文庫本に視線を落とし、由比ヶ浜はそのまま携帯

をいじる作業に戻る。

まったく労われている気がしないのは気のせいだろうか。

「なあ由比ヶ浜」

由比ヶ浜はん？ つと携帯いじりを中断し俺に顔を向ける。

「安全の安に古里の里でなんと読むかわかるか？」

「えー、わっかんない」

諦めんの早すぎだろ。もう少し頑張れや。

「まあ、そうだよな。知ってた」

「えっー!! 聞いててそれ酷くないっ!？」

ブーブーと自ら不正解のSEを鳴らす由比ヶ浜は置いておき、雪ノ下先輩へと視線を変えろ。

「雪ノ下先輩ならわかるんじゃないですか」

「愚問ね」

話を聞いていた内容を繰り返す必要がなさそうな雰囲気だ。

雪ノ下先輩はふうっと一息ついて文庫本を閉じた。

「それはあさと呼ぶわ。沖縄県にある地名で、沖縄モノレールの駅としても名前が使われているわ」

「なるほど……あざとと思ってた」

「たしかにそう読めるけれど、あざとという言葉と似ているからあまりオススメする呼び方ではないわね」

そこに俺の頭の中で電流が走った。

そう、あざといだ。あの打算的な女にピースが当てはまるぴつたりな言葉じゃねえか。

今度会ったら使ってやろう。

「比企谷君、なにを想像しているのかわからないけれど今あまりにも下品な表情をしているってわかる？」

「ヒッキー……ほんとにいまの表情キシヨいよ」

最近ようやくキモいという言葉に慣れてきたのにここで新たにキシヨいという言葉が俺の心を抉る。

なに強さインフレしていくバトル漫画みたいに罵倒の言葉もインフレしていくの？

俺の精神力もそれにもなって強化されていって、ついには精神が勝手に動く身勝手の精神を体得するのか？

多重人格の精神障害発病してるじゃねえか。

「あれですよ、あんまり使わない言葉をど忘れしていたのに急に思い出してあーって

なったんすよ」

「そう。あなた、思い出す喜びを永遠に封じた方が今後の人生幸せになれると思うわ」

えっ!? なに俺にー週間フレンズになれって言ってる? 肝心のフレンズでできる気

しないんだけど?

「なにそれ。俺は前だけ向いて生きろとかそんな感じスか?」

「たまにはいい言葉を思いつくじゃない。感心したわ」

「だいぶ頑張ってポジティブな言葉に変換しましたけどね」

そんなどうでもいい会話をしていると部屋の扉からノックが2回聞こえてきた。

雪ノ下先輩は一呼吸置いた後にどうぞと続ける。

「しつれいしまーす」

そうして入ってきたのは見知った亜麻色の髪と同級生だった。

## #14—3

「おお、一色か。帰ったんじゃないなかったのか？」

「帰ろうとしたんですけれど、せんばいもそろそろ帰るならアツシっ……一緒に帰るのもありかなと思ひまして」

一色ちゃん？今明らかにアツシって言おうとしたよね？

「それなら葉山先輩にでも頼めばいいだろうに。サッカー部練習終わったんなら絶好のチャンスじゃねえか」

「せんばい、実はそうともいえませんよ？葉山先輩と一緒に帰っていることが部活内にもばれてみてください。他のマネの子達がストライキ起こして私の仕事が増しちゃうじゃないですか！」

「一色さん、考え方があのヒキガエ……比企谷君に似てきている自覚はあるかしら？」  
雪ノ下先輩？俺への罵倒を織り交せて会話すんのやめてね。

「とにかくですね、せんばいいつ帰るんですかと聞きに来たんです」

「普通に部活が終わるまでだが？」

「なら私も待ちます——」

「なんでそうなんだよ。先帰れよ」

そう言っつていつものふくれっ面な一色をじーっと真顔で見つめていた由比ヶ浜が口を開く。

「ねえーいろはちゃん？」

「はいはい、ゆい先輩なんですかー？」

「ずっと思っつてただけど、いろはちゃんつてヒツキーのこと好きなの？」

……はっ!?

誰だよ俺の許可無く固有結界発動させた奴。

おい由比ヶ浜、コピー能力あるなら先に言っつけ。

俺の能力コピーしても百害あつて一利なしだぞ。

あと決めゼリフと指を鳴らせばパーペキだ。

つてかずつと喋んねえなとか思っつていたらいきなり爆弾発言してんじやねえよ。

俺もどう返せばいいかわかんねえし一色もこまつ……!?

そう思いながら視線を一色に向けると一色と目が合う。

次第に白い肌の顔がみるみる朱に染められていく。

えっ？一色ちゃん？ちよつとその反応は想定外。

次第に自分の顔が徐々に熱くなるのを感じた。

「ゆゆゆいせんぱいくなな何言っているんですか？？そんなわけないじゃないですか」

「お〜？その反応もしかして凶星〜？最近何かと理由付けてヒツキーつれて行っちゃうから気にはなっていたんだ〜」

そういうえばそうだな。たしかに何かと理由を付けて俺に近寄ってるよな……

今回もさっさと帰ればいいのに一緒に帰るとか言って居座っているわけだし。

これは、もしかするともしかするのではないのか？え？マジで??

……いや、そうじゃない。

目の前で繰り広げられている状況に飲まれるな。

過去から学んだはずだ。真っ正直に事を見ると痛い目に合うと。状況を客観視するべきだ。

一色いろはは男子を扱うのがうまい。そして大前提としてあいつは葉山先輩が好きなのだ。

だからこそああいった表情をする事で俺に気があると勘違いさせ、今後とも利用しやすくする魂胆なのだろう。

俺を頻繁に使うのはただ単にぶりっこをする必要が無いからであって楽であるから

だ。そこに恋愛感情は存在しない。

そして俺もあいつに対しては小町と同じように接している。つまり俺は一色いろはに対して恋愛感情という感情をいだいていない。

「ちや、茶化さないでくださいっ！」

「由比ヶ浜さん。一色さんが困ってるから、そこまでよ」

「うーん。ゆきのんがそういうならわかった。もうちよつと根掘り葉掘り聞きたかったけど……」

「そうだと由比ヶ浜。俺すでに興味無いつて言われてるしな」

「あつ、そうなんだ……」

由比ヶ浜よ、なに可哀想な人を見る目で見てるの？つてか最近俺の扱い雑になつてない？

「そうですよー。まあせんぱいにその気があるのでしたら考えてあげなくもないですけどね」

その気つて何の気だよ。気になる気になる。

やべつ……ちよつとうまいこと言つた感じがして面白かつた。

ふと視線を一色に戻すと一色との物理的距離が開いている。

「せんぱい……さすがに突然ニヤつかれるのは引きました」



えっ俺ニヤついてた？結構ポーカーフェイスだと思つたんだが感情が表に出るよう  
だ。

「想像している自分と現実の差異が激しすぎて絶望するわ」

「現実を知ることはいい事よ」

「現実には苦いんで甘やかしてくれろと嬉しいです」

「あなた自分から苦しいことに首を突っ込んでくるんじゃない比企谷くん」

あ……うんそうですね。でもそこで肯定したらあれなんかこっぴどかしい。

「それはあれです、大事になってからいきなり丸投げされるより今対処した方が楽だろ  
うという観点からでして、いつか自分に振つてくるという当事者意識を持つことが大切  
であつてですね……」

「はいはい。難しい言葉ばかり使つて照れ隠ししないでねヒツキー」

「うぐう……」

くそつ、由比ヶ浜に見抜かれるとは……比企谷八幡一生の不覚！

「みなさん仲がいいですね」

「そう見えるゝいろはちゃんゝ」

「一色さん、何か勘違いしていると思うけれどどこをどうみて仲がいいと思つたのか具  
体的に説明して貰えるかしら？」

「そうだぞ一色、ただ俺が罵倒され続けているこの現状を見てどこが仲がいいと判断できんだよ」

一色はふつと軽く微笑んだ。微笑むだけだった。

その微笑みに違和感が生じ、俺はすかさず口を開いた。

「どうした一色。いつものあざとさが抜けてね？」

話の展開的にここで一色が『あざとって何ですかー!!』つとふくれっ面で反論してくることを期待していた。

しかしそうはならなかった。

ここでまた固有結界が発動する。

あれ？話の流れ的になんら問題なかったよな？なぜに？

そう思い一色を見ていると、なんか震えている。あれ？目がちよつと潤んで……えっ？っは？

一色の目から一筋の涙が流れた。同時に俺の頭がフリーズした。

雪ノ下先輩も由比ヶ浜も同じ様な状況だろう。

「……………っあ」

ととめどなく溢れる涙を見せずと一色は両手でそれを隠す。

誰一人として状況を理解出来ない空間に一色の嗚咽だけが耳に入る。

意味がわからない。会話の内容、雰囲気にも泣かせる要素は皆無なはずなのだ。

「……ばかっ」

そう呟き一色は走って部屋を出ていった。

\*\*\*

さて泣いた女子の前に男子がいたとしよう。

理由はどうであれ、それを他の女子に見られていた場合、判決は男子が悪いというジャツジから入るわけだ。

いくら論理的に話しても何故か結論が俺のせいになる訳だ。アトラクタフィードの取束による物なのか

魔法少女のお供の作業なのかはわからない。まったく、わけがわからないよ。

そんな事を思いながら俺は自主的に部屋の床に正座し、目の前にいる女子2人を見る。

「ヒツキー?なんで正座してるの?」

「あれ、女子ってこういう時男子を悪にしたがるんじゃないやねえの？だから事前に反省の意を表してるんだが」

「何を言っているのかしら偏見谷くん。たしかにあなたの言葉で一色さんを泣かせたように見えたわ。ただ一色さんの行動が不可解であなたが悪いと決めつけるのは早計だと思っただけよ」

「うん。なんかいつも通りの会話だったし」

「比企谷くん、ここに来るまでに彼女と何かあった？」

「いや、特に何も無いぞ、他愛もない会話しかしてないしな」

「となると一色さんが今まで我慢していたことが溢れた可能性があるわね。比企谷くんの度重なるセクハラ発言に我慢できなくなったとか」

えっ？何その事実無根な発言。虚言癖ですかね？それでも俺はやってない。

「それあるっ！」

「いや、ねーよ。そもそも俺の発言の内容に一色を泣かす様な言葉含めていたか？」

「それが不可解なのよ。」

「うーん。多分……もしかして……ヒツキーが最後に言ったあざとって言葉……」

えっそれ？ちよつと理由としては弱くないですかね？しかし言葉の意味の捉え方は人それぞれで最後に言ったネガティブを連想させるとそれしか無い……と

いうことは、俺か……マジか。

「由比ヶ浜さん、それだけではどうも泣くという感情を呼び起こすには弱すぎるのよ。ただ別に原因がありそうだけれど……」

「あつ……もしかして」

由比ヶ浜が雪ノ下先輩の耳にだけ聞こえるだけの音量でヒソヒソと話し始める。

女子がよくやるやつだけれど、頼むからいうなら見えないところで話してくんねえかな？ マジで気になって俺の悪口言われてんじゃねえのって疑心暗鬼になって首を掻きむしりたくなるぜ。

あつ、すでに罵倒は大声でされているから心配ないか。

話が終わったのか雪ノ下先輩と由比ヶ浜が俺の前に立つ。

「比企谷くん」

「ヒツキー。おすわり」

いや俺犬じゃねーし。つてかすでに正座してるし。

そんな事を言える状況では無かった。

それから俺は、お二方よりも耳が痛くなる説教を小一時間と『あざとい』という言葉を一色に対して初めて使った事など色々尋問されることとなった。

「覚えたての言葉を使って女の子を泣かせた比企谷くん。言い訳を聞きましょうか」

「だいぶ反省の意を表しております……」

「ヒツキー、来週絶対にいろはちゃんに謝ること！わかった？」

「はい……」

もはや俺に反論する意欲は無かった。

女の子を泣かせたのはいつぶりだろうか。昔あったな、俺の存在だけで泣かせてしまった思い出が。あれ？それ俺悪くなくね？なら昔小町を泣かせたときか？あれは後で親父を使つて反撃された覚えがあるからノーカンだ。……ということは今回が初の事例だ。まあ謝るしかないよな。

そして時間切れの合図のように完全下校時間のチャイムが部室内に鳴り響いた。

\*\*\*

週が明け気だるい月曜日の平日がやってきた。

今日から中間試験の勉強期間となり、部活動が一時的に休止される。それはサッカー部や奉仕部も例外ではない。

一色にはメールで一度謝つてみたが返信は来なかった。古傷が抉られる。

ふうつとため息を吐きながら上履きに履き替えていると、ちょうど一色がやってき

た。

ふと俺と目が合う。

「……あつ」

そう呟くと素早く目をそらされ、下駄箱に靴を入れ、上履きを持ったまんま小走りですぐ教室に行ってしまった。

はあくん、なるほど。これはあれだ。完全に避けられていますね。難易度ヘルアンドヘルじゃないかな？俺一人だけ一撃アウトってどんなクソゲーだよ。

俺と一色は教室で喋る機会をあまり持たなかった。だからこそ教室であいつに話するのは人目を集めてしまいかねない。

俺は様子を伺い、話せる頃合いを待つのだった。

放課後、サッカー部も休止しているし話せる時間はあるだろうと思いきや、こういう時に限って一色は他の男子やら葉山先輩と一緒に行動していたりする。

くつそ。全然話せるタイミングが掴めねえ。

そしてタイミングを掴めないまま2週間が経過した。

中間試験も今日で終わってしまう訳だ。

自販機で無糖コーヒーを買い、作戦会議をしていた。

一色はあいかわらず俺を避けるので状況は変わっていない。

メールって手も考えたが返信来てないのに追撃とかストーリーカーじみでて怖がられる可能性がある。

ただ正直、メール以外での接触はできそうにない。

仲直りの術を考えるが、出そうとするカードは状況と人間関係という縛りで制限され出すことができない。

ひとつだけ縛りの無いノーマークのカードは存在する。そもそも仲直りをしなければ良いというカードだ。

つまりは関係を抹消するという事だ。いつもの俺なら迷わず選ぶだろう。

だがそれを拒む自分自身がいることに驚かされる。

俺は2ヶ月、いやもう少し長いか……だいぶ一色いろはに入り込んでしまったようだ。

しかしその期間が楽しかったのだろう。

久し振りに楽しいを体験して、そして忘れてしまっていた。

幸せの有限。俺はその有限を迎えてしまったのだ。

自ら説いた幸せの有限を超えたらその先は不幸の始まりだという言葉をかみしめた。

期限を迎えたのだったら仕方がない。その不幸を潔く受け入れようではないか。そ



して二度と同じ状況にならないよう自ら頭にたたき込む。

俺は無糖コーヒを一気に飲み干し、ひとつのメールを一色に送った。

\*\*\*

放課後、駐輪場に向かう途中見知った顔がいた。

今まで俺を避け続けていた一色いろは張本人だ。

入学初日も似たような事があったなと懐かしい気持ちになった。

ただ一色は目を合わせる事は無かった。

一色がここに来たのもきつと俺の送ったメールでだろう。

泣かせてすまんという旨と共に明確な関係の解消を告げた。

俺は今後一色と関わらない。これが俺なりの謝罪だ。

そしてこれから俺がすべきことはひとつだ。

お前を無視して通り過ぎればそれでお前との関係は完全に断絶される。

覚悟を決める。これで終わりにしよう、一色いろは。

俺は感情を塞ぎ冷静に保ちつつ一色とすれ違う。

その刹那、胸が痛んだ。

そして視界から一色の姿がなくなり、これで全てが終わったことを悟る。

そのまま自転車の元へと進もうとした……が、右片腕が前に振れない。

なぜと思いい視線を片腕に向けるとどうやら袖を捕まれているようだ。

「せんばい。なんで無視するんですか？」

久し振りに俺に対して向けられた言葉にうれしさがこみ上げてきた。

「いままで無視されていたのは俺なんだがな」

「そんな事より、なんですかこのメールの内容！泣かせてごめんとかももう関わらないとか重すぎて引きましたよ」

えっ？マジで？誠意込めて謝ったつもりなんだけれどな。あつそれが重いのか。

「いや、普通に謝ってるだけだろうが」

「そもそも、あの状況の言葉で私が泣くわけじゃないじゃないですか」

「じゃあなんでだよ、俺被害被ってただけど？」

「えーつと……あれー……えつと……アレの日が……急に来ちゃって……」

モジモジと一色がしおらしく小さく呟くような声で話す。

アレの日ってアレですかね、ムーンライトパワーの日ですかね。

男にはわからないが痛いという情報はネットに転がってるから泣くほど痛かったの  
だろう。

ただタイミング最悪すぎるけれどな。

「そ、そうか。なら由比ヶ浜と雪ノ下先輩にちゃんと理由説明してもらっていいか？俺  
今絶賛悪者扱いされてんだ」

「それよりせんぱい私お腹空きました、サイゼ行きましょ」

一色ちゃん？先に俺に課せられた誤解解いて欲しいんだけど？……まあ、サイゼでも  
出来るか。

「マジかよ。面倒くせえ……」

「おやおや？せんぱい？いつもなら速攻で断るっていう癖に今日はやけに乗り気です  
ね？そんなに2週間も私と喋れなかったのが堪えたんですか??」

う、うぜえ……、今のこいつ小町以上にうぜえ……

「変なこと言つてつと行かんぞ」

「否定しないところがあざといというか何というか……人のこといえないじゃないです  
か。ずるいですよそういうの！」

「なんで俺怒られてんの？」

「も〜いいです〜。はいはい〜それじゃ行きましょ」

そうして俺は自転車を引いて一色と共に歩き出した。

校門を出たあたりでちよつと強めの風が吹いた。

となりの亜麻色の髪を揺らす風は春から夏へと季節を変化させていくかのようにすこし温い湿気つたような風だった。

しかしそれでも、心地よく感じたのはきつと失うはずだった日常を取り戻せた安堵からだろうと結論づけた。

こうして、俺たちは再び関係を取り戻し、サイゼへと向かうのであった。

#14—4 こうして一色いろはは居場所を探す事となる。

「せんばいは帰るんですか？」

そうであれば一緒に帰ろうと提案することができぬ。

淡い期待を頼りに口にしてみるがその期待はどうやら外れてしまう運命でした。

「いや、ちと部室に顔出す予定」

私はせんばいの居場所が気になる。

せんばいは奉仕部というよくわからない部活を始めた。

まだそれだけなら、まあこの人のことだからまた変なこと始めたなってなるだけなん

ですが……

その奉仕部の部員が学校一の美少女と言われる雪ノ下先輩と人気が高い結衣先輩の2人がその部活に所属しているのです。

今までは私がつまに部活の息抜きに適当な理由で誘えばせんばいはなんだかんだ言っつけてきてくれた。

まあ葉山先輩という建前を付け足しての事だけでも。

しかし最近、部活があると言つて断られることが多くなつた。ただこの状況に思い当たる節はありません。

私がとりあえず手を出した男子の事が好きだつた女子と同じ立場に今の私はなつているのでしょうか。

私は容姿が整つていて分よく選ばれる。もちろん相応の努力だつてしてる。

他の子が好きな男子が私に気があるなんて良くあることで、それを嫉まれても選ばれる努力をしなかつた自分を恨めとすら考えた事だつてある。

ただ今回、上が存在しただけ。

努力も才能も容姿も桁違いな雪ノ下先輩を相手にどうすればいいか途方に暮れる。

結衣先輩だつて私には無い天然産の愛嬌や優しさは作り物で表現している私には追いつけない領域だ。

そしてなんだかんだ文句を言いつつも奉仕部という場所はせんぱいの居場所になりつつあるように見えてしまい、でもその居場所に私が存在しない。

それがすごく悔しいと感じてしまう。

先にせんぱいと出会つたのは私なのに後から来た人たちに次々と追い越されていく。

そんな嫉妬に似たような……いや嫉妬なのでしょう。もやもやが全然はれません。

というか、自分がここまで嫉妬深い人間とは知らなかつた……

クツキー作りの時だつて運良く出くわせたものの、あの時葉山先輩を呼びに行かなければ、雪ノ下先輩と結衣先輩の手作りクツキーだけをせんぱいは食していたのだと思うとちよつとだけ……いやけっこうむつとしてしまった。まあ結衣先輩のクツキーは逆効果になるかもですが……

だからこそたびたび偶然を装つてせんぱいの前に現れて私の存在をアピールしているわけですが……

「うーん……一度さよならしたのにまた会いに行くとかおかしいかな……？」

そんな些細な事を考えてかれこれ10分程経っていた。

うん、ちよつと行つてみよう。

完全下校時間ももう少しだしちよつと待つてみましたーみたいな軽いノリで行けばごり押しできるのではないだろうかという考えに至り、私は奉仕部へ足を進める事にした。

奉仕部の部室の扉の前でも聞こえてくる楽しげに話すせんぱいや結衣先輩、雪ノ下先輩の聲が胸に刺さる。

私もその中に入りたいなどと羨ましい感情に駆られる。

一呼吸置いて、その扉をノックする。

すると雪ノ下先輩から『どうぞ』という声が聞こえたので引き戸を開いた。

「おお、一色か。帰ったんじゃないなかったのか？」

私の姿を確認できたのか、すかさずせんぱいが声をかけてくる。

こんな些細な事で私の心は安らぎを覚えてしまっている。

「帰ろうとしたんですけれど、せんぱいもそろそろ帰るならアツシっ……一緒に帰るのもありかなと思ひまして」

でもそんな事を素直にいえる程、真つ正直に私は生きていません。

「それなら葉山先輩にでも頼めばいいだろうに。サッカー部練習終わったんなら絶好のチャンスじゃねえか」

それですよねー。でもせんぱい知ってますか？ 葉山先輩は本当に何か必要に駆られない限り一緒に帰ってくれないんですよ？

試した私が言うんです間違ひありません。

「せんぱい、実はそうともいえませんよ？ 葉山先輩と一緒に帰っていることが部活内にもばれてみてください。他のマネの子達がストライキ起こして私の仕事が増しちゃうじゃないですか！」

「一色さん、考え方があのヒキガエ……比企谷君に似てきている自覚はあるかしら？」

何だろう、ちよつとだけ嬉しいと思つたのはきつと皆さんと会話出来ているからだとかえる事にしましょう。



「とにかくですね、せんぱいいつ帰るんですかと聞きに来たんです」「普通に部活が終わるまでだが？」

「ですよー。でも完全下校時間がそろそろです。」

「なら私も待ちますー」

「なんでそうなんだよ。先帰れよ」

「ここで帰ったら何しに来たかわからなくなるじゃないですか。」

「ねえーいろはちゃん？」

「そんな事を考えていると結衣先輩から声がかかる。」

「はいはい、結衣先輩なんですかー？」

「どうせなら結衣先輩と話をしながら時間を潰して、帰るときにせんぱいを捕まえる作戦に出てみよう。」

「ずっと思ってたんだけど、いろはちゃんってヒッキーのこと……好きなの？」

ド直球だ。

あゝつ、だめつ。いつもならすぐに切り替えられるのですが、今日のこのセンチメンタル入った今の私の状況で頭が切り替えられない。

やばい、これ隠せない。これは完全に表情に出てる。顔が熱い。

必死に顔を隠してみたが耳まで熱い。

「ゆゆゆいせんぱいくななな何言ってるんですか？？ そんなわけないじゃないでふか」

どうにかこうにか何かいいわけを考えるが、かみつかみで言い訳にすらなっていない。かかった。

「お〜？ その反応もしかして凶星〜？ 最近何かと理由付けてヒツキーつれて行っちゃやうから気にはなっていたんだ〜」

最近躍起になって強引に誘いすぎたのが怪しまれたのか……ちよつとやり過ぎちゃいましたね。

せんぱいが神妙な面持ちで私を見ている。ヤバい、これは明らかにバレる。

どうにかしてこの話題から遠ざけなければ……っ！

そうして、私はチラツと雪ノ下先輩を見て助けを請う。

雪ノ下先輩ははあつと息を吐いて言葉を発してくれた。

「由比ヶ浜さん、一色さんが困ってるから、そこまでよ」

どうやら私のSOSが届いたようだ。

ありがとう雪ノ下先輩。

「うーん。ゆきのんがそう言うならわかった。もうちよつと根掘り葉掘り聞きたかったけど……」

流石、結衣先輩。THE女子高生ってだけではありませんね。恋愛という部分に対してのアンテナがすごいです。

「そうだと由比ヶ浜。俺すでに興味無いって言われてるしな」

せんぱい？ なにか勘違いしていませんか？ 私がせんぱいに興味が無いじゃなくてせんぱいが私に興味をもってくれないんですが……

「あつ、そうなんだ……」

結衣先輩はこいつ何言ってるんだ？ みたいな表情でせんぱいをみる。

あつ、明らかに何か勘づかれている感じがする……

「そうですよー。まあせんぱいにその気があるのでしたら考えてあげなくもないですけどね」

しかしここで、あえて自ら話題につっこんでいったらどうだろう。

なんかあれもしかしてさつきまでの冗談なの？ って思ってくれると思いませんか？

せんぱいから返ってきたのは言葉では無く表情だった。ちよつとせんぱい？ いきなりどうしてそんなキモいニヤつきを私に向けるんですかね？ もしかして……また

この人変なこと考えてますね。どうせしょーもないギャグとかなんでしょうけれど。

「せんばい……突然ニヤつかれるのはさすがに引きました」

「想像している自分と現実の差異が激しすぎて絶望するわ」

「現実を知るとは良い事よ」

「現実には苦いんで甘やかしてくれろと嬉しいです」

「あなた自分から苦しいことに首を突っ込んでくるんじゃない比企谷くん」

「それはあれです、大事になってからいきなり丸投げされるより今対処した方が楽だろうと言う観点からでして、いつか自分に振ってくると言う当事者意識を持つことが大切であつてですね……」

「はいはい。難しい言葉ばかり使つて照れ隠ししないでねヒツキー」

「うぐう……」

ほら、やつてきた。

なんだろう、この置いてけぼりになったかのような感覚。

そして3人でひとつみたいな雰囲気。

皆楽しんでるのに。私だけでもやもやする。状況を楽しめていない。

「みなさん仲がいいですね」

見たままの言葉をただ口だけで放つてみるが、余計胸が締め付けられる。

「そう見える〜？　いろはちゃん〜」

満足げにせんぱいと雪ノ下先輩の雑談を聞いている結衣先輩。多分この人は一番この空間が好きなんだろう。

「二色さん、何か勘違いしていると思うけれどどこをどうみて仲がいいと思ったのか具体的に説明して貰えるかしら？」

いつもなら静かに読書をしているであろう雪ノ下先輩はせんぱいや結衣先輩が来るとその文庫本を閉じ。紅茶を用意する。それはせんぱいと一緒に奉仕部を訪れた時に知ったことだ。

きつとそれが彼女のささやかな楽しみでもあるのだ。

「そうだぞ一色、ただ俺が罵倒され続けているこの現状を見てどこが仲がいいと判断できんだよ」

せんぱいはその罵倒でさえ、2人から発せられたものであればきつと何かうまいことを考えて切り返すでしょう。

そしてたった1ヶ月弱で作られたコミュニティでこの3人の関係性をみて仲が良いと言わずなんと答えればいんだろう。

故にここに私の場所が存在しなかった。3人で完成した場所。私はそう実感した。

自覚した瞬間少しうるつときた……ちよつとだけ口角を上げて誤魔化する。

「どうした一色。いつものあざとさが抜けてね？」

あつ。

まさかせんぱいに気づかれるとは。

ただ一瞬気が緩んだ。それだけなの。それだけなのに。

涙が頬を伝った。

いちど出た涙は止まらない。

必死で隠す。

これではせんぱいの言葉で泣いているように見られてしまう。

これはただ単純に居場所がなくて入れて入れてと駄々こねているだけの幼稚な涙。

そうではないと説きたいが、嗚咽で喉がつかかえてるのとただせんぱいに相手にされず、寂しくて泣いてしまったというもう完全にあれな理由を喋るにはいささか恥ずかしくない感情がそれを拒む。

そしてそんな素直になれない自分自身が嫌になる。

どうも涙はしばらくおさまりそうにない。

「ばかっ……」

言葉を自分自身に言い聞かせ、一旦奉仕部から去ることにした。

\*\*\*

どうにか泣き止むことに成功した私は帰り道、今後の事について考える。

これは、非常にまずい。盛大にやらかしてしまいました。

いや、まあ確かに最近もやもやつてするところもありましたが泣くって何ですか……最初からクライマックスじゃないですか。どんだけセンチメンタル入ってたんですか。悲劇のヒロイン気取りですか。あーもうっ！ いろいろと酷すぎる……。

何やってんだろ私……お家帰ったらベッドに顔埋めて足バタバタさせたいくらいの恥ずかしさ。

これどうやって收拾つけよう……来週からせんぱいにどう顔合わせよう。

そんな事を悶々と考えていたらせんぱいからメールが来た。

案の定私が泣いたのは先輩の発言が原因という風に捉えられてしまったようです。

その文はどこぞの記者会見で政治家が言うような謝罪文がつつらと並べられていて引用元が逆に気になってしまった。

しかしどう返したものかと返信文を考えようと一旦携帯をしまう。

しまった直後にまた着信が。

今度はどうやら葉山先輩のようだ。どうやら明日の練習試合の件での確認だった。そういえば明日練習試合だったっけ。

今日のが頭を占めていて完全に抜けていた。

ただ準備はしつかりしたし問題は無い。

そのことを葉山先輩に返信し、私は自宅へと足を進めた。

そして、週明け。

練習試合は散々だった。マネージャーである私がちゃんと動けてないのとか、凡ミスが多すぎるポンコツ具合。

戸部先輩から『いろはすまじ今日どうしたんく？』と心配される程でした。

部活にも影響させ皆に心配されるのはちよつと無しですね。

今日から部活休止期間、期間中にちゃんとしっかりと反省しなきゃ。

そんな憂鬱な月曜日、まさかのせんぱいとぼったり下駄箱で合う。

あー、だめっ。恥ずかしい。

フラッシュバックするあの光景が私の羞恥心をかき立てすぐに目をそらしてしまっ



た。

その気まずさから上履きに履き替える余裕などなく、手に持ったまんま教室へとダツシユしてしまった。

これ絶対避けられてるって思われてる。

幸い教室ではせんぱいは話しかけてこない。なぜなら私とせんぱいは教室ではあまり喋ろうとしないのだ。一度それが疑問でせんぱいに聞いたことがある。すると、『俺が話しかけたらまた変な奴らに絡まれるだろ』と言っていましたでしたが真実はどうでしょうね。まあ秘密の関係って事でちよつと楽しい感じではありますけれども。

話しかけてこないことをいいことに休み時間はトイレに隠れつつ1日を終える。そのままダツシユで帰ろうかと考えていた矢先、メールが入る。

『いろは、今日ちよつといいか?』

そのメールの主は意外も意外、葉山先輩だった。

\*\*\*

放課後の待ち合わせ場所はマリソピアのカフェだ。

ちよつと2名席に座っている葉山先輩の姿を見つけ声をかけた。

「葉山せんぱーいお待たせしました」

「いろはすまん、いきなり呼び出して」

「いえ、どうしたんですか？」

そう言いながら私は葉山先輩の正面の席に腰掛ける。

「それなんだがな、先週の練習試合の時なにか思い詰めていた様子だったじゃないか。

……何かあったか？」

やっぱり葉山先輩にも気づかれていましたか。

「そうですね。ごめんなさい。部活にまで影響を与えちゃって」

「……もしかしてなんだが、比企谷が絡んでるか？」

おっふ。なんですか葉山先輩。私の心読めるんですか？ 葉山先輩ならできそうですね。

すね。

「まあ、あのー。……はい」

「そうか……」

多分二分ぐらいだと思う。無言の時間が流れた。

その時間が1時間くらいに感じたくらい結構気まずかった。

あれ？ 皆がうらやむ葉山先輩と2人きりでカフェデートという状況なのに何とい

う事でしょう。

「俺がどうこう言えることでも無いが、いろはが気を落とす必要は無いさ。気持ちの整理をしつかりとな」

そうですね。やってしまった事實は変わらないし、それを引きずっても仕方ないですね。

「そうですね……ただせんばいはまったく悪くなくて今回は私がちよつと誤解を招いちやっただんで……」

「そうだな。今回の件でだいぶ勉強になっただろ」

「はい。ちよつと自覚しちやいました、だいぶ私は嫉妬深い人間のようなです」

「……ん？」

ぼかんと呆けた表情を見せた葉山先輩が視界に映る。

珍しいレアな光景だ。

「すまん、ちよつとだけ話を整理させてくれ」

「へ？」

「いろは、比企谷に告白されたんじゃないのか？ 正直付き合おうと思っていたがまさか断るとはって思ってたんだが……」

「……っはっはっ」

いや、葉山先輩に対してそんな言葉を向けるのは失礼だと思ったのですが、思考が追

いつかずつついいでてしまう。

「ななな何言ってるんですか葉山先輩！ そんなわけ無いじゃないですか。全然違います！」

なんか会話に違和感があるなくって思っていたら葉山先輩何という勘違いしていらっしやるのでしよう。

「完全に俺の勘違いだったな。すまん」

いやーその爽やかな笑みで謝られると私も許す以外の選択肢がなくなってしまうじゃないですか。

「それじゃどうしたんだ、それ以外に比企谷関連でなにかあったのか？」

「えーつと実はですねえ……」

そうして私は現在の状況を葉山先輩に伝えた。

「……なるほどな。とりあえず把握した」

「まあそういうわけでして……」

「なんだろうな。初めていろいろの人間を見れた気がしたよ」

えっ？ 急に何言ってるんですか葉山先輩？

「サッカー部でも誰に対しても自分を見せようとしなかったのにな。比企谷が関わってくる素が出てくるんだな」

「そ、そんなんですかね?」

確かにせんぱいといると大体何も言わずとも理解してくれるので楽ではあるし。  
変に猫被らないですみますしね。

「完全に俺の推測だがいろはは比企谷と一緒に居られる居場所がほしかったんじゃないのか」

「つえ?」

居場所……そうだ。私はただせんぱいと私が一緒に居られる場所が欲しい。

「いま比企谷がいる奉仕部って場所に自分が入り込める余地が無かったから悔しかったんだと思うが、俺はそこに人間味あるなって思った」

「改めて言葉で伝えられるとすごく恥ずかしいですね」

「いろは、もうなにかしら答えは出てるんだろ?」

「……」

なんだかんだ言つて結局の所、答えが出ているのは確かなんです。

ただ、伝えるのはもうちよつとだけ時間が欲しいかとおもいます。

「まあ、少し気持ちを整理してからでも遅くはないからな」

こうして憧れの葉山先輩とのカフェデートは何故かせんぱいと私の話のみで終わってしまった。

\*\*\*

葉山先輩とカフェに行った時から一週間と少しが経った。

「いろはちゃん」

校門をでたあたりで結衣先輩から声をかけられた。

「あれ？ 結衣先輩じゃないですか」

結衣先輩ともあの日以来だ。

「ちよつとだけいい？」

そういつて来ると言うことは、多分あの件だろう。

ただ私もだいたい整理がついてきたのでちよつどいいと感じました。

「はい。大丈夫ですよ」

そして訪れる駅前のサイゼ。

久し振りにサイゼに来た感じがして懐かしい。

ちよつどボックス席に案内され、そこで互いが対面になるように腰掛けた。

「あの。ごめんさい。いきなり泣き出しちゃって」

まず先に先日のお事を謝っておこう。

「いや、いいよ。あれヒツキーが悪いんだし」

多分結衣先輩はせんぱいが言ったあざとって言葉で私を泣かしたと思ひ込んでいるのでしよう。

「あの、多分結衣先輩は誤解していて……」

そう言つて誤解を解こうとした矢先、私の言葉に覆い被さるやうに結衣先輩は言葉を発した

「いろはちゃんが思つてることに気づいてあげられないヒツキーが悪いの。あつても、いつまでも隼人君を使つてヒツキー誘つてるいろはちゃんもいろはちゃんだよ。反省してねっ!」

っえ? 今なんて言いましたか?

「いや、結衣先輩? なにをおっしゃつてるんですか?」

「もう見たらわかるよ。いろはちゃんヒツキーのこと好きでしょ」

「で、ですから、そうじゃないです」

「そう? 私はヒツキーのこと……好きだよ?」

「っえ……」

そんな……結衣先輩相手つて私完全に勝ち目無いじゃないですか。なんでそんな事言うんですか……

「ほら、そんな顔するのは恋する乙女の特権じゃん」

「っえ!？」

あっく!!

結衣先輩にはめられたっ?! なに策士ですか清明ですか!? あっ違う孔明ですか!?  
ぐぬぬつつと結衣先輩を睨む。

「あはは、ごめんごめん。ヒツキーからなんか来たりした?」

「どこかの政府のお偉いさんが書いたかのような謝罪文でしたらメールで届きましたよ」

そう言つて携帯に写るそれを結衣先輩に見せる。

「何書いてるかわかんないや……」

「まあ誠意は伝わってますよ」

「ヒツキーから直接は何も無いって感じなの?」

「まあそうですね。私が避けているからと言うのもあるのですが……」

むくヒツキーあれだけちゃんと謝つてねって言ったのに……と結衣先輩がぶんすかと怒っていた。何この人可愛い

「たださすがに長引かせるのもあれなので私からもしんぱいにちゃんと話をしようと思つています」



「そうだね。そろそろ、仲直りしなきゃだね。」

「そうなんです、ちよつとまだちよつと怖くて……」

これを言ったらせんぱいはどういう反応を示してくるのだろう。

冗談で返してくれるのか。それとも拒絶されるのか。

答えを相手を持っていること、自分が導き出した答えと同じなのかの不安がよぎる。

「大丈夫、ヒッキーは受け止めてくれるよ。私の時だつてそうだったから」

そう言つて微笑む結衣先輩。

「そうだった？」

「うん。私さ、ヒッキーに取り返しをつかないとつてもつても酷いことをやっちゃったんだ。だからこそちゃんと謝りたかつたし許されるとか思つてなかつたよ。でもヒッキーはさ、許すつて言つてくれた。だからこそ今この関係があるんだと思つてるんだ。いろはちゃん、怖がらずにちゃんと伝えてあげて」

そつか、結衣先輩は私を勇気づけてくれている。

多分ここで私が何もしなければ、せんぱいは私から遠のいていく。

だからこそ私はつなぎ止めるため行動しなくてはいけない。これからの関係のために。

「ほらいうじゃん。早起きは三文の徳つて」

ん？ 何言ってるのかよくわかりません。雰囲気ぶち壊していくスタンスですか？

「結衣先輩、だいぶそれ違いますよ……」

多分、聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥と言いたいのでしようけれどそれも意味が違いますからね……

今の私に合うのはたしか恥を言わねば理がきこえぬって奴ですね。ちようど実力テストで出題してました。

「えへへ……まあいいや。とにかく仲直りしてさ、また部屋に遊びに来てよ。私以外あまり喋ろうとしないからいろはちゃんいるだけでだいぶ変わるんだよー？」

「そうなんですか？ ま、まあ考えておきます」

言質取りましたからね？ 多分週4位でお邪魔すると思います。

「それじゃー話もすんだし。サイゼってたしかイチゴキャンペーンやってるじゃん、それ食べよー」

「いいですね。頼みましょ頼みましょ」

そして話をひと段落させた私と結衣先輩はサイゼのデザートに手を付けるのだった。

\*\*\*

それから数日間しつかりと自分の考えをまとめ、素直に話そうと決意した。もはやこれはある意味……私からの告白である。

5月もあと数日で終わりを迎え、6月梅雨の面影が姿を現し始めた。

ニュースも梅雨の天気予報が表示され、若干湿気った生暖かい空気が私の髪をはねさせる。

そして今日が中間試験最終日。全科目が終わりようやくやくひと段落と考えていたところ、久し振りにせんぱいからメールが届いていた。

その内容は私との関係の抹消が書いてあった。すぐさませんぱいの席を確認したがせんぱいはすでに席を立っていた。

私はすぐさま駐輪場へと走る。

駐輪場にはせんぱいの自転車はまだある。つまりはまだ校舎にいますという事だ。

ここで待っていればきつとせんぱいは来る。

そう考え、私は駐輪場で待つことにした。

その間じつと待っていていられるわけもなく、私は同じ道を行ったり来たりと若干怪しい。

そういえば、2ヶ月前も私は駐輪場でせんぱいを待ってたなって懐かしい思いでに駆られた。

たった2ヶ月しかまだ経ってないのにいろんな事があつたなとしみじみ思う。

私はこの関係を消したくない。だからこそちやんと伝えないと。

そんな事を考えていると見知った姿が目にとまる。

せんばいだ。

せんばいも私を見つけたのだろう。なんでそんな苦しそうな顔しているんですか。

……わかつてます。私のせいですよね。せんばいにとつてはただのじゃれあいな会話だったのにそれをこんな展開に変えちやつたのは私のせいです。

ごめんなさい。

せんばいは私に目を合わせようとせずそのまま通り過ぎようとしている。あの時と同じです。

……でも多分このまま行かせてしまえば私たちの関係は終わってしまう。だからこそ私はあなたに何か言わないといけないんですが……

なんですが……私もあなたを目にしたときから何を喋っていいかわからなくなっているんです。

頭真つ白で……なんか色々バクバクなんですよ。

どうすればいい。どうすれば……

そして先輩と私がすれ違う。

すれ違いざまに見せたせんばいの泣きそうな表情を見た。  
とつさに手が動いた。

裾を掴んだ手に気づいたのかせんばいが振り返り私を見る。

久し振りでちよつと嬉しい。

「せんばい。なんで無視するんですか？」

とつさに出た言葉はいつも通りの私の言葉だった。

「いままで無視されていたのは俺なんだがな」

久し振りに聞く先輩の声。なんかうれしさがこみ上げてきますね。

「そんな事より、なんですかこのメールの内容！ 泣かせてごめんとかももう関わらないとか重すぎて引きましたよ」

シヨックでしたよ。それでまた泣きそうになつたんですからね。

「いや、普通に謝ってるだけだろうが」

普通に謝ってないですよこれ……せんばいの普通の振り幅だいが大きいですよ。

「そもそも、あの状況の言葉で私が泣くわけないじゃないですか？」

うんちゃんと言えた。あんな言葉で私が泣くわけないのです。

むしろよく言われていますし。慣れていきます！

「じゃあなんでだよ、俺被害被ってただけど？」

「えーつと……あれー……えつと……アレの曰が……急に来ちゃって……」

あーつ！ ここ重要なところっ！ なんで日和つちやうかな……そしてなんで別の恥晒しちやつてるの私……

ちやんと言わないと。あーつもう！

「そ、そうか。なら由比ヶ浜と雪ノ下先輩にちやんと理由説明してもらっていいか？

俺今絶賛悪者扱いされてんだ」

「それよりせんぱい私お腹空きました、サイゼ行きましょ」

そうだ、こんな場所だから落ち着かないのだ。

サイゼに行つてゆつくり話をして、ちやんと伝えるべき事を伝えるんだ。

どうせすぐに断るとか言ってくるのでしようが、今日は絶対に付き合つて貰いますからね。

「マジかよ。面倒くせえ……」

……おや？ せんぱいがやけに素直だ。もう2, 3回くらい断るつていうと思つたのですが。

「おやおや？ せんぱい？ いつもなら速攻で断るつていう癖に今日はやけに乗り気ですな？ そんなに2週間も私と喋れなかつたのが堪えたんですか??」

「変なこと言つてつと行かんぞ」

なんだろう。これがツンデレって奴なんですかね？　ちよつと違う様な気がします  
が。

「否定しないところがあざといというか何というか……人のこといえないじゃないですか。ずるいですよそういうの！」

「なんで俺怒られてんの？」

「も〜いいです〜。はいはい〜それじゃ行きましょ」

そう言つてついてきてくれるせんぱいをみて気持ちが少し晴れた。やつぱりこの人は優しい。

そしてサイズに向かう足取りが軽やかになったのは私だけが知る秘密の話だ。

\*\*\*

「せんぱい。今日のドリアやけに焦げ目多くないですか？」

「新人にでも作らせたんじゃないやねえの？　由比ヶ浜のよりかは少なめだし大丈夫だろ」

そんな事をいいながら互いに同じ料理を注文して同じ物を食べていることになぜか喜びを感じてしまう私がいる訳で。

色々almazい気がしてきました。これ彼のすることをなんでも許しちゃう女になつ

ちやいませんかね私。

ただ、さつきから心臓バクバクでドリアの味も感じてないのですよ。

「それより一色、あいつらに俺の誤解ちゃんどあいつらに伝えておけよ？」

「実はもうすでに伝えてありますよ」

結衣先輩に経緯を伝えているのでそのまま雪ノ下先輩にも話が行くと思います。

「仕事はええな」

「……ねえ、せんぱい」

「んあ？」

「私がないで泣いたかって知りたいですか？」

「ああそうだな。そもそも俺の言葉じゃなかったらなんで泣いたんだよ？」

とうとうこれを言うときが来てしまった。

うん、もう覚悟を決めよう。

場所がサイズとか雰囲気もへったくれも全く無いのは全てあとでやり直せばきつと

大丈夫。

「私、せんぱいと学校生活をおくれるのって結構気に入っていたりするんですよ。ただ、最近結衣先輩や雪ノ下先輩と奉仕部でよく喋るようになったじゃないですか、なんかそこで私だけのけ者にされているような感じがしてですね……」



もはやこれは『せんぱいがほかの女に目がいつて私が嫉妬しています』って言うてい  
るようなものなのですが……

正直これ話さないと取拾がつかないので恥を忍んで喋ります。

「それで私ウルツときちやいましてですね。まずそれが泣いてしまった原因です……  
で、これからなんです……できれば私もせんぱいとの居場所が欲しい……です」

言い切った！ 頑張りたいろは！ すごいぞいろは。

「あー、なるほどな。完全に理解したわ」

えっ!? こういう時のせんぱいは挙動不審になるって相場きまつてるじゃないです  
か。なんでそんな堂々としてるんですか。ちよつとキユンってしちやつたじゃないで  
すか。

「その気持ちわかるわー。俺の友達の友達の話だがキックベースのメンバーが足りない  
から一時的にメンツとして加えられただけなのにそれに気づかず次の日も意気揚々と  
キックベースに参加しようとする『おい、誰だよあいつ連れてきた奴』とか言われて  
仲間はずれにされたんだ。確かにウルツとするよな」

……っは？ なに言ってるのこの人？ バカなんじゃないですか？ それせんぱい  
の实話ですよ？

「いや、そうではなくて私が欲しいのはせんぱいと私の居場所なんです……」

「何言ってるんだ、奉仕部くればいいだろうが」

「ちよつ……そういうことじゃなくて！ ちゃんと真面目に聞いて下さいー！」

「お前うつせえ。店内迷惑だろうが……」

「むく！」

「わーた、わーたから。……なら言い出しつぺのお前が見つけてこいよ」

「え？ どういう意味ですか？」

「言葉通りだ。一色、お前が居たいと思う居場所をまず見つけてこい。そこを見つけて来たら俺も入ってやつから」

「せんばい……いいましたね？ 言質取りましたからね？」

「お、おう。ちゃんと見つけてくれたらな」

「わかりました。見つけて来ます。期待しておいて下さい」

「おう、期待せずに待っとくわ」

こうして私は居場所を探す事になりました。

## # 15 — 1

「ねえ、比企谷君。今度あっち行ってみよっ」

そう言つて俺に行動を促せるこの天使は戸塚彩加。

ひとつ上の先輩なのだが、実質は同い年。

ツイッター風と言うと可憐で可憐で俺の灰色の脳細胞で導き出した語彙でもそれ以外出てこない程、尊い。

守りたいその笑顔。

だが男だ。いや語弊があつた、天使だ。

尊い先輩なのだが、正直絡みという絡みは1、2回程度しかない。

なのに何故俺は戸塚先輩とともにムー大陸ことムー大に來ている。

ん？ ……よくよく考えると陸だけ無くす意味がわからん。

陸がポツチで泣いてるから探してあげてつて俺の心が叫びたがつている。

おつと考えがそれてしまった。

帰りに一緒になつたと言うのがひとつだ。

あと、微笑み混じりに『比企谷君。せっかく一緒になつたんだし……今日どこか遊び

にいかない?』っと大胆告白された。

そんな事言われてみる、俺でなくても次の返事は『よし、一緒に幸せになろう』になるだろ? いや、ならなきやおかしい。

しかし率先して行ってみたい場所というのがゲーセンというのなんとも俺の行動範囲の狭さが伺えるがカラオケもあるし、結構便利なんだぜ。

輩がたまにいるから一色は連れてきたことはない。

意外にも戸塚先輩は結構乗り気だった。

クレーンゲームをしたりクイズゲームをしたりエアホッケーやったりマリカー対戦したり。

……あれ? これデートじゃね?

俺デートしてるすげえ! やればできんじゃん俺!

だが天使だ。

……おや? 天使なら別にもう、ゴールして……いいよね?

お願いtake me to heavenしちゃってもいいよねっ!

はっ……!!?

つと……つぶねー、危うく一生分の幸せを掴んで即死亡するところだったぜ。

「ねえ比企谷君?」

「ん？　なんですか戸塚先輩」

「実は僕、由比ヶ浜さんに聞いちやったんだ。比企谷君が留年しているってこと」

あいつ最近口が軽いな。俺もお前のこと喋っていいのか？　いいんだな喋るぞ？

「あつ、一応さ……由比ヶ浜さんを責めないでね。僕が興味本位で深掘りしちゃったんだ」

由比ヶ浜よ……一体どういう話の導入をしたんだ？　まあいいか。

「……まあ、そういうことつすよ。なんて言うか色々あつたんで」

「でも、比企谷君が学校に来てくれて嬉しいよ」

「えっ？」

「だって……こうして僕たち出会えたから……なんて言うか恥ずかしいけど……嬉しいなっ！」

「戸塚先輩……一生俺の味噌汁を作ってくれ」

「へ？」

おっと、つついっぴろポーズしてしまったぜ。

「いやあ、なんでもないです」

「変なこと言う比企谷君だね」

いやいやこの会話、恋人同士みたいで胸がキュンキュンしちゃいますね。

そうして俺たちはメダルゲームを目指して向かっていたのだが、その通り道に今流行のプリッとクライアントを別人に変身させる写真機、つまりはプリントシールコーナーに通りがかった。

「へえ、こんなにプリッとこんなに機械あるんだね」

「俺たちには何が違うのかわからんが、機種によって背が伸びたり、細くなったり、目が漫画みたいにデカくなったり白くなったり出来るらしいぜ」

一色がなんかそんなことを言ってた気がするからその受け売りで言った。

「そうなんだ」

なんかまじまじと筐体から目を離そうとしない戸塚先輩。

「ねえ比企谷君。ちよつとやってみない？」

「えっ？」

なにその魅力的な提案

「別にいいすけれど、これって確か女子・カップル専用じゃないですかね？」

「あー、うんそうだね。ちよつと残念……でもこつそりでできない？」

「別にいいすけれど……」

戸塚先輩、そんな事を言われるとちよつと俺もあれ何ですか……

もう彼氏面していいですか？

そう言つて去ろうとした時にムー大の店員が寄つてきた。

あー、ちよつと居座り過ぎてこれ注意される感じかとさつさとその場を去ろうとしたらその店員に声をかけられる。

「もしかしてカップルさん？ 大丈夫大丈夫彼氏さん連れて入つていいつすよー」

やけにチャライ店員だなおい。まあ戸塚先輩の外面見たらそりやアレだよな……いや制服で判別しろや。

いやまて？ 最近の学校は男女区別しない制服が取り入れられていると聞く。もしやそれを懸念して……

ねーな。

「やった。比企谷君。でもなんでだろうね？」

「まあ変に勘ぐるよりもバレル前にさつさと中入りませんか？」

「そうだね。いこつ」

そうして入つたこの場所というのはすこし異質で……何というかあれだ。美とか可愛いとか潤いとか純とか、そんな漢字をとりあえず入れとけばOKつしよ感が否めない名前のプリ筐体が沢山あつた。

俺たちはその中で適当な奴に入る、戸塚先輩が説明書を読みながら操作していく。

「うんっ、これで大丈夫だとおもうよ」

「おつ、そうっすか」

なんの前触れもなしにいきなりフラッシュが焚かれる

目があ……目があー!!?

「破壊の呪文でも唱えさせたいのかこいつは」

「ちよつとびつくりしたね、でも撮り直しも出来るみたいだよ」

『もういつかい、いくよ』

イケメンを連想させるかのような声が筐体内に響く。

野郎にはただただ鳥肌が全身を走るぞこれ。

それから何度となくフラッシュが焚かれ撮影が続いた。

『いい写真が仕上がったよ。外でデコレーションしてね。それじゃ、またね』

多分二度と来ることは無いだろうと思ひ、俺はこのプリ筐体にグッドバイと心で永遠のさよならをかわした。

写真を見てみたが、何だろう本当にカッパルのようだ。家宝にしよう。

ただ、俺が俺じゃない。なんだこれ……濁った目は補正させる訳でなくただデカくなつてんじやねえよ。

肌が白く写つてる分すげえ目が強調されて違和感がハンパねえ。

戸塚先輩にいたつてはもうあれだ。美少女っぷりがやばい。



うまい具合に下半身が隠れており、ぱつとみ女子と撮ったのでは無いかと錯覚する程だ。

「はいこれ、比企谷君の分」

戸塚先輩が手際よく2人分に切り分けてくれた。

「あざす」

「なんかこういうのもいいよね〜」

そう言いながらはちまんと、さいかと書かれたプリを見つめる。

もう俺は一生分の幸せをつかみ取ってしまったのだろうか。

ニヤけが止まらない。

「ねえ、比企谷君」

「な、なんですかね戸塚先輩」

やべつ、気持ち悪いと思われたか？

「僕のこと、彩加って読んでいいんだよ？ どうせ同い年なんだから」  
「え」

なにになにえつ、マジで？ 幸せモード激アツ連発なんですけれど。

「さ、彩加」

「うん、八幡」

「一緒に幸せになろっ」

「八幡の言っている事がよくわからないや」

やべえ、雰囲気甘いぞ。すげえ甘い。本物のカップルのようだ。

「あつ、そろそろ時間だ。」

えつなにその絶望の言葉。ちよつとあれここから誰か出てきて『ぎんねーん、罰ゲームでしたーきやははだっさー』とか言われるの？ 今それ言われたら俺は阿修羅をも凌駕する存在に進化する自信あるぞ。

「実は僕さ、テニス部のほかにスクールにも通ってるんだ」

あぁーなるほど。理解した。良かった俺は人間でいられる。

「それじゃ、一旦出るか」

「そうだね、八幡ありがとね。楽しかった」

「そうだな……彩加」

こうして俺と彩加はムー大を後にした。

とりあえずプリは大事に制服のポケットにしまった。額縁買ってこなきや。

\*\*\*

だだっ広くそして雑踏に揉まれ人酔いする。

普段ならこんな場所一秒足らずとも居たくないと思うだろう。

そしてさっさと帰るだろう。

「や〜ん可愛い〜」

「動物は癒やしですねー」

しかしだ、イベントがイベントなのだ。

わんにゃんショーというネーミングがくっそダサイイベントなのだが

このイベントにいつも俺たち兄妹は参加している。

そして何故か一色がいる。

何故かわからないが会場についたときに「たつまたま」遭遇してしまったのだ。

はたして本当にこれは偶然なのだろうか？ 何町ちゃんの陰謀でないかと八幡は八

幡はそこはかとなく陰謀論を疑ってみるのです。

二人は目の前にいる白いラビットに夢中だ。

『ねーねー柴犬居るよーめっちゃ可愛い〜』

『俺柴犬よりシユバ剣欲しい』

『えっ……まだシユバ剣揃えてんの？ ダッサ、昭和じゃん。なんか一気に冷めた。

じゃあね。二度と連絡してこないで』

『えっ?』

そんな会話が後ろで聞こえてきた。何かひとつの恋が終わった予感がしたが俺は何も聞いていないことにした。

「こんな癒やしのイベントがあるならもっと早くに知りたかったですねー」

「いろはおねえちゃん、次から毎年一緒に行きましようね」

「うんっ! 小町ちゃん」

えっ、兄妹水入らずのイベントに部外者つつこむの? ちよつと小町ちゃん? お兄

ちゃんそんなの許しませんよ。

「ちよつ、小町来年から俺はどうすればいいんだよ」

「何っっておにいちちゃんも一緒に行くに決まってるでしょ。いろはおねえちゃんと一緒に

仲良くね」

「俺は小町だけで十分なんだが……」

「むっっ! せんばい、こんな可愛い後輩が一緒じゃ不服って事ですか!」

「ああ。小町と二人きりがいい」

「とんでもないシスコンですね。このままだと兄妹の一線越えちゃいますよ?」

「もしかしたらもう超えてるかもですよ?」

「えっ……」

ちよちよちよ、小町ちゃん、何言っちゃっててくれたんの？ 始まる千葉兄妹の紋章への進化は止めたよね？

「おい、小町。変なこと言って俺を陥れようとするな。俺が社会的に死ぬだろうが」「ねえおにいちゃん？ いろはおねえちゃんとかちよつとなんかあったでしょ？」

小町が俺に耳打ちする。

いきなりな言ってるんだ？ なんかつた……がなんでそんなことに気づいちゃうの？

もしかして超能力者？

「ん、まあいろいろとな」

「だよねー。じゃないとあんなこの世の終わりみたいな顔しないしねー」

っは？

一色に視線を向けると冗談抜きで悲壮に満ちた表情をしていた。

こいつただ可哀想な人を見る目で見てんだよ。俺が泣くぞ。

「まてまてまて、一色。小町の冗談でそんなに引くことねえだろうが」

「じょう……だん?？」

しばらくすると一色の目に光が戻り……また消えた。

「小町ちゃん？ 今からおねえちゃんと一緒に会場回ろつか？」

変に迫力のある低い声で我が妹を誘おうとする一色さんに俺は声をかけることが出来なかった。

おっと迫力がありすぎて一色さんなんて言ってしまったぜ。

「ひっ……う、うーん小町おにいちゃんと一緒に回りたいなあ……お、おにいちゃん」

そうして状況を察したか俺にSOSの視線を送る。

「無理。自分でまいた種だ。頑張れ」

「おにいちゃんの裏切り者〜!」

そう言つて小町の答えを聞かず小町の腕をガツシリとつかんで会場とは別方向につれて行かれてしまった。

小町よ、無力な兄を許してくれ。

こうして俺はひとりになったことなのでしばらく会場を自由気ままに回る事となった。

すると意外な人物に出会う。

## #15—2

俺が一方的に見つけて相手側はまだ気づいてはいないが、多分、いや絶対雪ノ下先輩だろう。

私服姿と、その二つに分けて結わえた髪が学校では見られない新鮮味を感じさせる。まああの容姿だけあって、結構注目を集めている。

しかし、相も変わらず周りの視線など目もくれずパンフとにらめっこした姿で何かを探していた。

あの人がやってんの？ この歳で老眼なのかな？

何度となくパンフレットとあたりの状況を照らし合わせ、多分行きたいブースを探しているのだろう、そして意を決した様にパンフレットを閉じて壁に向かって歩き始めた。

「雪ノ下先輩……そこ壁しかないっすよ」

さすがにちよつと可哀想になり声をかけた。

すると物凄い形相で睨まれる。昔同じ様な事があったな。昔鉛筆忘れた奴に親切心で貸し出そうとすると『比企谷菌うつるからいらねえよ。あつたくやーバトエン貸して

！』って言われたの思い出す。くっそ近藤め……

雪ノ下先輩は視界にいるのが俺だとわかると短いため息をしてからこちらへと歩いてきた。

「この会場は希少生物も取り扱っているのね」

「人間の総人口は70億人超えてるみたいっすよ。全然希少性もへったくれもないのではないですかね？」

「人混みを好きそうに見えないあなたがここに居るのは珍しいって言ってるのよ」

「仰るとおりなんですけれどね」

そりや俺がひとりで会場をうろちよろしていたらそりやおかしいと思われるわな。

俺だって休日の1日を家の中でゴロゴロと怠惰に過ごしたいわ。しかしまだ小町と一色が会場に残っているから先に帰ると怒られそうだからいるだけだ。

「それで？　なんで壁に向かって歩き始めてたんですか？」

「……迷ったのよ」

雪ノ下先輩は苦虫をかみつぶしたような表情でそれを語る。

その親の敵ともとれる視線は再び開かれた。パンフレットに注がれた。

「えっと……ここそんなに広くないっすよ？」

方向オンチさんなのかな？　どうやら完璧超人と思っていた雪ノ下先輩にも少し弱



点があつたようだ。

まあ、同じ面積に区画整備された一帯が続く施設がある場合、確かにどこに居るかわからなくなる。

地図が役に立たないことだつてあるのだ。しかし技術革新の進歩はすさまじく、そう言うときのためのスマホの地図アプリがあるのだが、雪ノ下先輩は今は珍しきアナログ派らしい。ちなみにそんな地図アプリを使用しても俺は新宿で彷徨う羽目になった。

「それにしても、どうしたんですかこんなところで？ 何か見に来たんですかね？」

「まあ……その……いろいろと」

うん、ネコだな。確実にネコだな。パンフにめっちゃデカイ丸付けてるし。自分で書いたのかネコの絵も添えてるし。

俺の視線に気づいたのか雪ノ下先輩はゆっくりとパンフレットを折りたたんだ。

「ひ、ひきがあ……んんっ、比企谷君はどうしてここに？」

滅茶苦茶動揺してんじゃないですか。珍しい光景なのでおちよくりたい気持ちではあるが、あとで何されるかわからないのでここはスルーする事にしよう。

「いや、妹と一色と来てまして」

「……妹さんならまだしも何故そこに一色さんも混ざってるのかしら？」

「俺が聞きたいです。妹ときたらすでにいたんすよ」

「順調に囲われているわね」

「ん？ なんの話ですか？」

雪ノ下先輩が何を言っているのかさっぱりわからん。

「……いいわ。なんでもない」

「そつすか」

「ええ、それじゃあ」

「うつつすまた学校で」

そう言つて俺と雪ノ下先輩は別れの言葉を口にし、別れることとなった。

この狭い会場で何度も遭遇すると非常に気まずいので、それを避けるべく俺は会場近くのバーキンへと退避することとした。

\*\*\*

ハンバーガーはなんて素晴らしい食べ物だろうか。

この丸みを帯びた形状もさることながらこの片手で持てる小さな形状に様々な食材がまとめられている。

緑、赤、クリームと色彩豊かに彩られたそれは俺の視覚情報から脳へとうま味を伝達

し、すでに俺の舌にはハンバーガーのうま味が存在した。それにより唾液分泌を促進させる。

そんな芸当ができるハンバーガーはもう芸術とでもいって良いのではないだろうか。俺はそつと目に刺さる赤い奴を紙ナプキンで包み存在を無かったことにし、ハンバーガーを食す。

パティを噛みきる断面から肉汁がたつぷりあふれ出してくる。

その肉汁を受け止めるレタスそしてパンズに肉汁が染みわたり、あらたな味、食感を俺に発見させてくれる。

さらにマヨネーズがいいアクセントだ。これがあるとまたまるやかな味とスパイスのコラボで先にマヨネーズの味がし、それを追ってくるかのようにスパイスと肉の味が俺の舌を刺激する。飲み込むのがもったいないくらいだ。

ああ……至福の時だ。

「いたいたー！ せんばーい！」

一色ちゃん？ ちよつとまって、ここ店内だからね？ 大声あげるとこじや無いからね？

驚きすぎてハンバーガー吹き出しそうになっただろうが。

「一色、お前うるせえ。他の人の視線が俺に釘付けになつてるだろうが」

「えっ……せんばいなんですかその俺実は注目される奴なんだぜってアピール……いら  
ないんですけれど」

お前のせいでこうなってるんだが……

「んなことはいいわ。小町はどうした？」

「小町ちゃんなら先に帰りましたよ？ あれ？ 連絡入れてませんでした？」

おもむろに携帯を出すと着信メールが来ていた。

あまりにも誰からもメールが来ないし密林とDMくらいしか来なかったから着信通  
知自体をオフっていたのが悪かったな。

——あとはお若いお二人でどうぞ！ ——

小町ちゃん？ あなたも十分お若いわよ？

「せんばい。やっぱリトマト嫌いなんですわ〜」

自身の水分で紙ナプキンを透けさせた自己主張の激しい赤い奴を見ながら一色が言  
う。

「ああ、まあな」

……

あれ？ なんか言葉のキャッチボールで俺が大暴投した空気流れちゃってんだけれ  
ど何これ？

「せんばい、そんな事より知ってます?」

俺の返事が無かったことにされたんだけどどうすんのよこれ。

「なにかだよ」

「6月18日って結衣先輩の誕生日なんですよ」

「ああ、だからどうした?」

……

あれまた?

「せんばいの思考に誕生日なんだからお祝いしてあげようって気持ちはなんですかね?」

あく、なるほどな。同じ部活のメンツともなると誕生日を祝うのか。

誕生会呼ばれたと思って行ったら『誰だよあいつ呼んだ奴……』って主賓が言っていたのを耳にしてから、誰の誕生日にも参加しなくなったらわからなかったわ。

「ああ、全然あるぞ? ただ俺がなんか渡しても迷惑がられるだけだろ」

「そんな事ありませんよ。誕生日を祝って貰えたらそれだけで嬉しいですから」

「……そうか」

それを体験していないからそんなことが言えるのだ。いや、これは俺のエゴだ……た

だこいつの人生はそういう体験とは無縁の世界で生きてきたのだからしょうが無い。

その体験をしてから幸せを語れとか押しつけがましいにも程がある。

「だって、私……せんばいからプレゼント貰ってすぐ嬉しかったんですからねっ！」

そう言つてトートバッグから見覚えのある髪留めを出した。それは俺と一色が実験の時に渡した一色への誕生日プレゼントだ。

「んだよ。まだ持つてたんかよそれ」

「だって嬉しいじゃないですか」

んだよ。ちよつとだけ可愛く思えるじゃねえか。

「えっ……ちよつ……せんばい?」

いつのまにやら一色の頭を撫でていたようだ。

こいつは本当にお兄ちゃんスキルを強制発動させるのがうまい。

だから小町ともうまくやれているのだろう。

「せ、せんばい……あの……その……ちよつと……ひとが……見てるんですが……」

あつ。そういえば店内だって事を忘れてた。

そつと耳を澄ませば『俺に全てのカップルを別れさせる程度の能力があれば……』等と聞こえてくる。

すさまじい怨念を感じるカントウリーロー

そんな事よりもなんだろうか、一色が気持ちよさそう俺の手にんつんと頭を当て撫でる事を要求してくる。

なんだこいつ？ 親の愛でも足りてなかったのか？ なるほど、だからほかの野郎に手を出しまくってるわけか。

「おい、一色。そろそろ出るぞ。流星に人目につきすぎる」

「ふえ？」

なんちゅー声出してんだよ。やめろよ知り合いに見られたら誤解されるだろうが。

一瞬の間がありッハッと我に返った一色が顔を真っ赤にして挙動不審な動きをする。

「あつ、そそそそそそうですね!! それじゃあち行きましょう! ジャスコー!」

テンパリすぎて昔の呼び方だしちゃったよ。まあ俺もその呼び名嫌いじゃない。

「そうだな。ジャスコ行くか」

「ちよつせつせんぱい。今のはちよつと間違いでして……」

「そうか？ 俺は嫌いじゃ無いぞ？ ジャスコ」

「そ、そうですか……ななら行きましょう! ジャスコー!」

「一色。大声出すな。それは恥ずかしい……」

\*\*\*

「せんばい。こんなのかどうですか？」

そう言つて見せる可愛らしいブックカバー。一色、祝つてあげる気持ちはすごく伝わるがあいつが本を読むと言う思考はどこから生まれたのかそれを問いただしたい。

「一色よ、そもそも由比ヶ浜が本を読むと思うか？」

「うっ……た、確かに」

「だろ？ ならもう少し偏差値低めのものをあげた方が喜ばれると思うぞ」

「せんばいそれは言い過ぎです。結衣先輩だつてすごいんですからねっ！」

「ほう……何がすごいんだ？」

「えーつとあれ……なんて言つたっけ？ ……料理とか」

しどろもどろになりながら由比ヶ浜の良い所を絞りだそうとしている。

何というか……けなげだな。一色よ、そこまでお前由比ヶ浜と仲よかつたっけ？

「確かにすごいがいすごいこのベクトルが間違つてるだろ」

「でも、お菓子作りの時に結構興味を持ったみたいですよ！ これからと言うわけで工  
 プロンにして見ませんか？」

幾多もの死人が出るぞ。それでも良いのか？

「まあ良いけれどな」



「それじゃそのお店に行ってみましょう。実は近くにあるんですよ。」  
「そう言つて一色は嬉しそうにその店へと案内してくれた。」

「どうですかね？ これとか？」

「あゝ、いいんじゃない？ 犬の絵柄とかあいつっぽいいし」

紺色のエプロンに刺繍で犬の絵柄が施されたエプロンを一色に取り出してきたので、これはこれであいつに似合っていると思つた。

多分これでプレゼントは終わりだろと思つて適当に店内を見回っているとまた一色から声がかかる

「せんば〜い。こんなのとかがどうですかね？」

振り向くとエプロン姿の一色が視界に入る。

パステルカラーのイエローと少しだけフリルの入ったエプロンは女の子らしさを感じさせる。

「まあ……いいんじゃないかねえか？」

「よし、これで決まりですね」

そういつて一色はレジへと並んでいった。結構行列が出来ていたので会計には時間が少しかかりそうだ。

そんな事よりも一色ちゃん？ 最近俺の一言で物買うようになってきているけれど根底

から間違っているから辞めた方がいいよ？

俺は店の外で一色を待つことにした。

すると見覚えのあるあのツイントールが威風堂々と歩いているでは無いか。

知り合いと間違われないように存在感を消そうと努力するも、どうやら俺の居る店が目的地だったらしく無念にも発見された。

野生で自由気ままに生きていたポケモンがモンスターボールに囚われる気持ちがよくわかった。

## #15—3

俺と目が合った雪ノ下先輩は目をそらすことなくじつと俺を見続けていた。

しかし、先ほど別れを告げた知り合いにまた遭遇すると言うのはなかなか気まずいもので、何か喋らないと言葉を探る。

探している最中に雪ノ下先輩から先手で言葉が出る。

「あら、比企谷君？ また会うなんて偶然って重なるものね。てつきりお家に帰ったものだとばかり思っていたわ」

俺もお家に帰りがかったが、一色に捕まって帰る事が出来なかつたんだよ。

「まあ、一色に連れ回されているだけです。どうやら由比ヶ浜の誕生日プレゼントを選びたいんだと言う話で連れ回されているんすよ」

「奇遇ね。私も由比ヶ浜さんの誕生日プレゼントを買いに来た所よ」

おつ、女子同士で考えつくことは同じなのかどうかはわからんが、男子にはないシンパシーみたいなのがあるんだろうな。

いや単純に誕生日を知っていたから買いに来ただけだろう。

俺は誕生日を知っていた時点でキモがられるけどな。

「ひとついいかしら?」

そう言つて俺を上目づかいで見る雪ノ下先輩に少しドキツとする。

「え、ええ。いっしゆよ」

つい緊張してウイツシユの別種みたいな返事になつちまつたぜ。

その言葉を指摘すること無く雪ノ下先輩は言葉が続けた。

「プレゼントが重なつても由比ヶ浜さんを困まらせてしまうから差し支えなければ何を買ったか教えて貰つてもいいかしら?」

ああ、そういうことか。まあ確かに消耗品以外被つたらどれをフリマに出そうか悩むレベルだよな。

「まあ、一色がエプロンで、俺がこれつす。首輪」

「……あなた、何か特殊な性癖を由比ヶ浜さんに押しつけようとしてない?」

雪ノ下先輩からやけに鋭い軽蔑の視線を感じるがそんな事は一切考えて無い。純粹に犬の首輪なのだけぞ?」

ってかいきなり人を変人扱いするのはデフォですかね?」

「首輪見せただけでその発想にいたる雪ノ下先輩の方がちよつと危ないつすね」

「私も首輪だけではその発想にはならないわ。あなたがあげるからその発想になつただけれど」

えっ？ 俺そんなに不審者ですかね？ 結構普通な高校生生活送ってるはずなんすけれど。

「まあ……一色さんがいるのだったら問題はなさそうね」

「えーつと？ 一色は俺の保護者ですかね？」

「そうじゃないの？」

えっ？ いつの間に雪ノ下先輩からそんな絶大な信頼関係を築けたの一色ちゃん？

なんか扱いが俺より上なんですけれど、俺のヒエラルキーどこいったよ？

「どこをどうしたらそう見えるんですか？」

「普通に見てたらそうなるわよ」

この人俺をおちよくってんのかな？

そんな事を考えながら半目で微笑を浮かべる雪ノ下先輩を見ていたら買いものを終

えた一色の声が背中から聞こえてきた。

「せんぱーい！ おまたせしました……って雪ノ下先輩!？」

「一色さん。私の顔を見ただけでそんなに驚くことかしら？」

「い、いえそうではなくて。なんと言いますか……先日はあのお……。失礼しました」

そう言つて一色はペこりと頭を下げる。

「ええ、いきなり泣いて飛び出してしまうのだもの。心配したわ。」

「ですよね……すみません」

「詳しい話は由比ヶ浜さんから聞いてるから安心して」

「雪ノ下先輩、ありがとうございます」

「いえ、私も配慮が足りてなかったかもしれないから気にしないで。ただ……あなたも物好きなのね」

そう言つてフツと微笑を浮かべる雪ノ下先輩と少し顔色を赤める一色が楽しそうに喋つていた。

なんだなんだ？ 由比ヶ浜だけでは飽き足らずまさか一色にも……道理で仲がよく見えるわけだな風紀が乱れて良いと思えますっ！

「それじゃ比企谷君。私は別のお店に行くからちゃん和一色さんをエスコートしてね」

「そうですよせんぱいっ！ しっかりエスコートしてください」

えっ？ まだなんかあんの？ 手早く帰りたいんだけど。どうにかごまかせねえかな？

「由比ヶ浜の誕生日プレゼントも買ったことだし。俺たちもそろそろ駅に向かおうぜ」

駅までエスコートするからさっさと帰ろうという俺の希望と一色の要望も取り入れた完璧な返し。我ながら惚れ惚れするぜ。

「折角ですし、もう少し付き合つて下さいよせんぱいっ」

「まだ買うもんあんの？」

俺の頑張つて考えた自信作が数秒で打ち崩されて自身が喪失しそうだし。

「ちよつとだけあれですよ。書店によりたいもので」

「めずらしいな。勉強か？」

「それもあるんですけど、ひとつ続きの気になるラノベがあったので」

そういう俺こいつにいくつか貸してたな。そんなかでも気になるのがあったのだらう。

まあ俺の勧めた本で続きを気になってくれるつて言うのは悪い気はしないよな。

「……それ買ったら帰るぞ……」

「は〜い」

そんな俺らのやりとりを見ていた雪ノ下先輩が何かため息をついていたのは何故だらうか。あまり深く考えないようにした。

\*\*\*

それから俺と一色は本屋へ、雪ノ下先輩は別の店で由比ヶ浜のプレゼントを買い別れた。

一色が買いたいと言っていたラノベは俺も結構好きな奴でタイムトラベル系の奴だ。VRゲームをしていたらいつの間にかコールドスリープされていて気づいたら2000年後の未来になっていた。タイムリープでコールドスリープになる原因を探るべく冒険が始まると言う内容のラノベだ。そそるよな。

続きは俺の家にもあるのだが、結構面白いから自分で揃えたいという一色の要望を聞き、書店へと足を進めたわけだ。やはり好きな物は自分の手の内に置いておきたいというコレクター欲求はあるよな。

「ちようど、全巻揃っててよかったです」

「そうだな。まあ巻抜けして途中から読んだらこの間の間に何があったのかわからないモヤモヤ感がハンパねえしな」

「まあその時は別の書店に行きますよ。最終的にはせんぱいの家に借りに行きます」

俺これ揃わなかったらずっと付き合わされていたのかよ……最初の書店で全部揃って良かったと心から思うわ。

一色がレジに並んでいる間、俺はまた外で待つことにした。

のんびりと書店前にあるポスターを眺めてアニメ化するんだこのWeb小説とか考えていたところ、かすかに聞き覚えのある声が入ってきた。

俺はその微かな声を手がかりに視線を向ける。



するとどうも見覚えのある1人ともう1人の面影。雪ノ下先輩と？ あと……誰だ？ 格好を見る限り女性である事は確かだ。何かトラブルにでも巻き込まれて居るのだろうか？

あの容姿だからな……芸能スカウトとかの誘いなのだろうか。流石すぎるぜ。

流石に毎日顔を合わせる奴がトラブルに巻き込まれて居るのに見て見ぬ振りは出来ないしな。もう少し近づいて状況を探ってみるか。

そうして俺は別の店舗の商品を見る振りをしながら2人に近づく。

「雪乃ちゃんつれないなー、たまにはお姉ちゃんと一緒に遊んでくれたっていいじゃない？ こんな大きな所で偶然会ったんだしこれはもう運命じゃない？」

「あなたの遊びにいつも振り回されているのは誰だと思っているの？ これ以上私に迷惑をかけないで」

相手の誘いに対してやけに攻撃的な感じだな。やつぱりあれか？ スカウトとかそんな類いの奴か。それとも昔の知り合いか……どちらにせよ相手が迷惑がつているのにしつこく誘うことは迷惑行為にあたる。店員呼ぶか。

そう思い俺はインフォメーションセンターへ向かおうとしたが、そこでやめろやめろとあれほど言ったにもかかわらず大声で俺を呼ぶ声が響く。

「せんぱーい。お待たせしましたー！」

「ちよっ!! おまつ!!」

するとその声に気がついた2人の視線が俺に注がれる。

「比企谷くん」

「あれ〜? 雪乃ちゃんの知り合い? 珍しいね!」

その人はとても整った顔立ちで艶やかな黒い髪。そして透き通った白い肌に合わせり表現豊かな表情で華やかさが醸し出していた。まあ要するにすっげえ美人が俺の目の前にいるのだ。

くっそ、見つかつてしまったらこれはどうするか?

「あれ? 雪ノ下先輩。今日はよく会いますね。隣の人はどなたですか?」

普段通りに雪ノ下先輩と会話を始める一色。流石のコミュニケーション能力だ。

一色の言葉に若干戸惑いながらも、弱々しく言葉を出した。

「……姉さんよ」

雪ノ下先輩、姉がいたんですね。完全に一人っ子だと思つたわ。しかし見比べてみるとそうだな、確かに顔の作りで似ているところは多々ある。多分表情の豊かさでこの違いが出てくるのだろうと俺は判断した。

「え〜っ!?! 雪ノ下先輩お姉さんいたんですね!」

するとそのお姉さんが雪ノ下先輩と会話の選手交代と言わんばかりに言葉を出す。

「雪乃ちゃん姉の陽乃です。宜しくねっ」

「私、一色いろはって言います！」

「うす。比企谷つす」

「へえ、2人つてもしかして恋人同士とか〜？」

いきなり懐に入ってきたやがったぞこの人。

すげえリア充ってそんな芸当出来るんだな。俺絶対出来ねえよそんな事。

「えっ！ そっそんなわけでは無いですけれど……」

しどろもどろになりながら一色が答えるがチラチラと俺に視線を向けるのは辞めてね。俺こう言う話題でどう喋れば良いかわからない子だから。

「え、違うんだー。なんか雰囲気的にそんな感じしたから絶対そうだなーって思ったんだけどな。なら今日はデートなんだ。やるねー」

「えっ、と……今日は友達の誕プレを選びにきたんですよ〜なのでデートではないですよっ。」

「えー、お姉さんすごくラブコメの波動感じちゃったんだけどなー」

ラブコメの波動って何だよ。女子ってそんなの感じ取れるの？ 相手の恋愛戦闘力見ただけでわかつちやうの？ やべえよ。生きてる次元が違うわ。とりあえず否定させて貰うか。

「そんなことは無いですよ。だってこいつ別に好きな人いますし」

「へえ〜……そうなんだ。ならさならさっ比企谷君？ 雪乃ちゃんなんてどう？」

「いや、いきなりそんな話をされても困るんですけど」

「そうよ姉さん。いきなり変な話をしないで」

「そう〜？ 雪乃ちゃんとなら結構お似合いだと思っただけかな。そうだ比企谷くん、もう誕プレ買っちゃったの？」

「まあ。買いたいのには終わりました」

「それならちよつとお姉さんと付き合わない？ お姉さん比企谷くんにすこし興味でちよつた。カフェでお話ししましょ」

「そう言っつて陽乃さんは俺にぴつたりとくつついて人差し指のグリグリ攻撃を執拗に続ける。」

これはきつとしんのすけもイチコロだろう。

……つてか胸、胸っ!!? 当たってんだけれど、やべえやべえやべえ……なんだこんな知らないっ！ あっあと良い匂い。

「ちよつ！ せんぱい!!」

その声ではつと我に返つた。

つは良いが、一色の目の光が消え、かがやくいきさながらの侮蔑の視線が俺を射貫く。

どうにか理性を取り戻し陽乃さんを引き剥がす。

「ちよ、流石に初対面で近づきすぎですよ」

「あはは、比企谷くん面白いねえ」

この人におちよくられているのだろうか。さつきから天真爛漫の言葉の通り行動の先が読めない。

「一色ちゃん可愛い、お姉さん抱きしめたくなっちゃうよお」

一色も自分が遊ばれていることに気づいたのか頬を赤くし俯いた。

「あつ……、ごめんね一色ちゃん。お姉さん調子人乗り過ぎちゃったかな？ 大丈夫だ

よ、比企谷くん取らないからねっ」

「ちがつ、だからせんばいとはそんな関係じゃなくてっ!？」

そういうとさらに一色の顔が真っ赤っかになる。

あの一色いろはが雪ノ下姉が相手になると手のひらで踊らされている。

「そう？ なら早くしないと雪乃ちゃんが持つて行っちゃうかも知れないよお？」

それよりもさつきから違和感が俺の不安を煽る。

いや、モテない男子ほど女子からアプローチして欲しいという願望が強い。なぜなら自分達は受け入れるだけで良いからだ。世間一般的に男子から女子へのアプローチが常識となっているなか、そういう女子は早々にいない。いるとしてもそれは必ず自分に

メリツトのある人間である事が絶対条件になるはずだ。

だからこそ俺は陽乃さんに対しての違和感がある。

女子はそんな事をするはずが無いのだ。美人ならさらに自分から攻めずとも勝手に寄ってくる。その理にかなわない行動に違和感がある。ということは今受けているこの行動は偽物だ。自分から攻めていく建前の行動力。

それは仮面という表情だけの言葉では収まらない。

建前のパワードスーツ……長いな。強化外骨格とでも言えばわかりやすい。

そう考えると、いままでそれに振り回されていた自分が少しだけ恥ずかしくなる。しかし同時に、冷静さを取り戻した。

「かんっぜんに遊ばれてんなお前」

「せんばいっ！ 何見てるんですか！ 助けて下さい！」

そう言つて半泣き状態の一角が俺に助けを求めるが俺は目の前のキラージンガに勝てる気がしないのだが……

「姉さん……いい加減にして貰えないかしら」

雪ノ下先輩が低い声で苛立ちを隠そうとせずに侮蔑の視線を向ける。

「あつ……雪乃ちゃんごめんね。ちよつと二人があまりにも初々しかったからちよつとからかってみたかったの」

「もういいでしょ」

「私的にはまだもう少し遊びたかったけれど、雪乃ちゃんがあれば今日この所は退散するね。またね一色ちゃんと比企谷くん」

そう言つて颯爽と陽乃さんはどこかへと去つて行つた。

なんていうか……ゲリラ豪雨のような人だったな。

「なんて言うか……すごいお姉さんですねぇ」

「そうだな」

「ごめんなさい。姉がああいう性格で迷惑をかけたわね」

「なんて言うかすごいですわね」

「そうね。姉は何でも出来て誰からもほめられる人よ」

「そうでしょうね。じゃないとあんな建前の化身のような芸当は出来ませんよ」

「……比企谷くん？ どういうことかしら」

「なんと言うんでしょうね。モテない男の理想と言いますか。向こうからしゃべりかけて来てくれて、人なつっこくて表情豊かで美人でスキンシップもあつてつてもうなんか良い事づくしで逆に怪しいんですよ」

「よく客観視出来てるわね。その通りよ。ああいう行動全て姉の外面なのよ。長女である姉は挨拶回りや会食、パーティーに連れ回された結果出来たのがあの仮面よ」

会食？ パーティー？ 雪ノ下先輩の家は金持ちなのかな？ まあ姉もあんなだけ美人でなんか高そうな服を着ていたのだ。

どっかの令嬢であるのは確かだろうよ。

「まあ俺も、親父にはよく言われていますし。距離の近い女には気をつけろって」  
そのあとでお袋にめちやくちや怒られたとかそんな話を小町から聞いたがな。

「そんな理由で気づかれるなんて姉も思ってもないでしょうね」

「せんぱーい、私流石に疲れました〜」

力なくふらふらと俺の元に寄ってきた一色。

「そういえばこいつが今回一番の被害者だな。」

「なんで助けてくれなかったんですか〜……」

「俺がくちだしたらさらに被害が増大したかも知んねえだろうが。あそこは雪ノ下先輩が言ってくれたのが正解だ」

俺にあれを説き伏せる力はない。俺は無力だ。

「それならちよつとだけ休憩しましよーもうちよつと疲れましたー」

「そうね。比企谷くん近くにカフェがあるからそちらに移動しましょう」

「うっす。わかりました」

雪ノ下陽乃に今日使う思考力をこそつと持って行かれ俺も甘い物で糖分補給した



かった。

そして俺たちは若干ふらふらにナリなりながらもカフエへと足を進めるのだった。

## # 16 — 1

昨日の雪ノ下先輩の姉、雪ノ下陽乃の襲来でかなり頭使った。なので今日は惰性を食りたい気分に分らされるが、残念ながら平日だ。

だからこそこのしばらく鳴り響くケータイのアラームに逆らうこと無くのっそりとベッドから起き上がる。

だるいと思いつながらとりあえず目を覚まそうとカーテンを開ける。すると6月の梅雨時期とは思えない青々とした空と太陽が俺を出迎えてくれた。

そのくせに空気は湿気ついているという苦行日だ。

……陰キヤは溶けるから梅雨らしく隠れてくれ。……雨を降らさない程度でな。俺は口角をヒクつかせながら窓を開ける。空気の入れ換えをする。

夜中に室内に留まった空気と外の空気が入れ替わる流れを身に受ける。

……熱い、湿気の不快指数高すぎだろ。

流石初夏だな。もうベッドからでて3分も経っていないのに部屋のクーラーが恋しくなつて仕方が無い。

カッパ麺より早い俺の意志の弱さですぐさま窓を閉めてカーテンで室内へ入ってく

る日光を遮った。

「おにいちちゃん、起きてるーっ！ ……って!? 起きてる!!」

ノックもせずいきなり入ってきたこの小町は、俺が起きてる姿を見ると天変地異が起きたかのような驚愕な表情を浮かべる。

んだよ。時間通り起きただけだろうが、そんなに驚かれる筋合い話無い。

いつもお前の尻を腹に落として起きている訳ではないのだ!!

……小町ちゃん、あれマジでやめてくれない？ あれだよあれ、男の朝の通過儀礼が収まんないタイミングだったらどう反応していいかわからんだろ??

「まあいいやー。ほら、顔洗ってきて、そろそろご飯もできるよ」

そう言って俺の部屋からそそくさと去って行った。

俺も小町に続き部屋を後にした。

身なりを整えてリビングに行く和小町が朝食の卵ベーコンと食パン、そしてコーヒーと練乳を用意して待っていた。やはり小町はわかつている。

先に食べていても良いんだがな。

そんな事を思いながら俺は席に着く。

そして小町と一緒に手を合わせていただきますと食事への通過儀礼をする。

この時、小町がやけに嬉しそうな表情をする。ただ朝飯を楽しみにしてたんだよ。

「おにいちゃん、今日も送ってね〜」

この言葉、俺が寝坊する日じゃない限り必ず小町は言ってくる。便利なアツシーになつたもんだ。

「面倒くせえ……一人でいけよ」

「だつて面倒くさいじゃん」

面倒くさいを面倒くさいで返された。

この後どう返せば良いのかわからん。難易度的に質問を質問で返されるより面倒だ。

「つてかお前俺のチャリ乗つて怖がつてるだろうが。なんなのマゾなの?」

「えー? そんなこと無いよ?」

「?」つけ、俺の腹に腕回して締め上げてんだぞ? 俺の腹が不調な日にやられ無いかと

ヒヤヒヤするぜ」

そう言うとき小町はほんのりと頬を赤く染める。

どうやら凶星のようだ。

「し、しつかりと捕まつてた方が安全だから……ね。つれてつて?」

小町はどこで覚えたのか見覚えのある角度からの上目遣いで俺にねだる。しかし俺

は腐るほどその上目遣いを見てきているので何の感情も湧くこと無くそれを流す。そもそも実妹の上目遣いに動揺する訳がない。動揺したらそれは夏休み子供相談所に人生相談するわ。

……しかし、俺はおにいちゃんだからな。おにいちゃんは妹の頼みを聞いてなんぼなのだ。決して上目遣いに屈した訳ではないと自分に言い聞かせておこう。

「……しゃーねえな。わかったよ」

「やったー、ありがとおにいちゃん」

「ってかお前着替えは？ 俺さっさと出るぞ」

「はっ!? そうだった！ ちよつと着替えてくる〜」

小町はそう言つて自室へとドタドタと走つていった。

もう少しおとなしく出来ないものかね。

……まあ、俺の前で着替えなくなっただけ女の子らしくなつたと言えなつたのだらう。

そう考えて時間が経つて温くなったコーヒーに練乳を投入し一口啜る。……うまい。

小町の成長は兄として嬉しいものだが、次第におにいちゃん離れをしていく事を想像するだけで寂しさで絶望の淵に落ちる。……よし、考える事を辞めよう。

そして俺は朝食に手を付けた。

\*\*\*

小町を乗せていつもの通学路を颯爽と走り抜けていく。外は快晴なので若干熱い。それに合わせて今日も変わらず俺にがっちり腕を回す小町。マジで暑苦しい。

「おにいちゃん、事故らないでよ」

「事故るかよ。もう留年したくねえよ」

「小町も寝てるおにいちゃん見るの嫌だからね」

そう言つて小町はさらに腕に力を加える。

ちよつと小町ちゃん？ 今日食つた朝食がリバースするから加減してね？ あと痛い。

そんな思いを押し殺し、俺は必死に自転車をこいだ。

その甲斐もあり、早めに小町の中学校に到着することが出来た。

小町は軽やかに自転車から降りる。

八幡選手、ようやく小町選手からのベアハッグから解放されましたと自分で実況入れたいくらいだ。

「そうそう、おにいちゃん。これお願い」

そう言つて小町が出したのは手紙だ。

「おにいちゃんへのラブレターか？」

「おにいちゃん、キモい。前に由比ヶ浜さんからの手紙を一方的に渡してきたのおにいちゃんだし」

そう言つて小町は半目で呆れたように俺を見る。

「ちゃんと理解してるし」

俺は鞆に手紙をつつこんだ。

前に由比ヶ浜が作ったクツキー（大丈夫そうだった）と一緒に手紙を俺が小町に届けてそれから反応が無かつたからどうした物かと考えていたが、小町なりに返事を考えていたと言う事か。早とちりしなくて良かったわ。

「あと、おにいちゃんにはこれね」

そう言つて小町は鞆から包み袋を取り出し俺に渡した。

久し振りの小町特製弁当だ。これで元氣百倍。

ドーパミンドバドバでラリつちまいかねん。

ただ、小町ちゃん？ そのお弁当縦で入つてたよね？

開けるのが怖いんだけど。

「まあ、たまにお弁当を作つた方が小町のありがたみが分かると思うからね」

「そうだな。ありがとな」

「うん、素直でよろし」

鞆の底に弁当をしまう。

「それじゃ、おにいちちゃん気をつけてねー」

「おう」

そして俺はまたペダルに足を掛け、自転車で駆けた。

\*\*\*

ベストプレイスはこんな快晴の中でもしつかりと日陰になってくれている。風も吹き抜けるから梅雨特有のジメジメ感から解放されるからここは良い場所だ。

いつもは一色やら由比ヶ浜やらがここに来るが、流星にこんなジメツと暑い日に昼休み空調完備の教室から出たいと思う奴はいなかったのだろう。

ベストプレイスは俺の気配しか感じられないし、ベストプレイスを通り抜ける風で草花が揺れる音しか聞こえなかった。

さて、それでは開封の儀をしますかね。

そうして弁当の包みを開く。



「んお……う？」

なるほど、縦に入っても大丈夫なのがよく分かった。

今日のお弁当はこむすび弁当だ。

鮭や梅、明太子などの混ぜ込みの素数種類を使って作ったのだろう。

色鮮やかで手軽な弁当だ。

しかしな、小町よ……もう少しおかずも欲しかったんだ。

ご飯だけじゃおにちゃんちよつとしんどい。

そんな事を考えていた矢先、吹き抜ける風と共にこちらへ向かってくる足音が聞こえてきた。

「一色か？」

「……よく気づきましたね。」

たまたま適当に言ってみたらどうやらあたりだったようだ。

一色は俺が言葉を発する前に迅速にムラの無い流れるような動作で俺の隣に座った。

えつ、いま全く反応が出来なかったんだけど……流水岩碎拳の使い手なの？

「……なんとなくな。お前教室で弁当食わんの？ 外湿ってるし不快指数高いだろ」

「男子が冷房を最低まで落としたりして逆に冷えるんですよ。教室」

そう言つて一色は自分の腕を手でさすりながら暖を取る仕草をする。

「なら温度上げるように交渉すれば良いだろ、それか勝手に上げればよくね？」

「え、喋りかけて変に誤解されたら嫌じゃ無いですか。それに上げた所ですぐさげられちゃうんですよ」

「世の中の男子お前に喋りかけられただけで惚れるとか思っちゃってるの？ 梅雨の湿気で頭やられたか？」

「何ですか、流石に私もそこまで思っては無いですけど……変に絡まれて誤解されちゃったら困るじゃ無いですか」

まあ葉山先輩にも誤解されちゃ元も子もないからな。徹底してるんだな。

「それに居場所も探さないといけないし、ほかの男子にかまけてる暇なんてないんですからねっ！」

そう言つてぷくーっと頬を膨らませながらまんまるな瞳を俺に向ける。

「あー、そういうえばそんな事も言つたな。居場所はここで良いんじゃないやね？ 俺のベストプレイス」

「却下」

キンツキンに冷えているのは教室だけじゃなく提案の否決の言葉もらしい。俺のアイデンティティが否定されたみてえじゃねえか。

「だつて……人目についちゃうじゃ無いですか。出来れば個室が良いんですけれど」

……」

「一色よ、ここ学校だぞ。部活でも無いのにどうやって個室を手に入れるよ？」

「それなんですよね、どうしましょうか？」

「いや、自分で考えろよ」

「むしろ自分で部活つくっちゃいますか」

「まじか。何の部活にするんだ？」

「文芸部とか？」

「ありきたりすぎるだろ、ってか文芸部もうあるし」

「じゃあ第二文芸部！」

「それはやめよう」

「え？　なんでですか？」

「きらりがな……きらりを思い出さなんだよ……」

いやマジでキラ☆キラは名作なんだがバッドエンドが心を抉る……

「せんぱい？　きらりって誰ですか?？」

そんな疑問形が飛んで来た。そういやこいつはゲームとかには疎いんだよな。

「ゲームのキャラクターだ」

「……だと思いました。なんかせんぱいがテンション上がっている様子を見ると大体そ

んなことだろうと予想できますから」

えっ、俺がテンション上がると無意識のうちにデ・ユフフ……とか言っちゃうのん？  
言っちゃってたら俺二度と日の下に出たくないんだけど。

「それより、せんぱい今日はどうしたんですか？ やけにカラフルな……全部おにぎり  
じゃ無いですか……」

一色は俺の弁当箱を見るや状況を理解して頂けたらしい。

「お弁当作る時間無かったんですか？ ……それにしてもやけに手の込んだこむすび弁  
当ですね」

「だろ。小町特製弁当だ」

「あー、なるほど。せんぱいはほんと愛されていますね」

そう言って一色は俺の隣で自分の弁当箱を開いた。前にも食べたが、一色の弁当はそ  
こそこ彩りも良かったしうまかったので少しこむすびと交換して欲しい欲が出てきた。

「せんぱい。今日の卵焼き、せんぱいの意見を参考に甘く作ってみましたよね」

なんでこいつわざわざそんな事言うの？ 別に今いらぬ情報だよね？ 鬼畜かな

？

「からあげちよつと多くつくりすぎたかな」

おっ？ おっ？

「二色、作りすぎたなら仕方ないよな。残してしまおうと食材にも失礼だしな。ここは協力して処理するってのはどうだ？」

「え？　せんぱい良いんですか？」

キラキラとした瞳で一色は俺を見てるが、俺はキラキラとした視線で唐揚げを見つめてる。

「まあな……折角だしもらうわ」

俺はからあげを一色の弁当から拾い上げる。その瞬間に一色がやけにあくどい顔になったのは見なかったことにした。

## # 16—2

「せーんぱい。食べましたね」

きゆるるんるとやけに仕上げた作り笑顔で俺の顔をのぞき込む一色

だーっ。面倒くせえ、からあげ一個にどんな付加価値付けようとしてんだよこいつは

……

「からあげ一個でどんだけ恩きせようとしてんだよ」

「そんな事は無いですよ。明日ですね、ちよつと一緒に映画にでも行きませんか?」

「はっ? やめとくわ。金も無くなるし面倒くせえ。つかお前と行く奴なら腐るほどいるだろが」

「まあ、断られることは知ってますけれどね。せんぱい、1人では絶対に見に行かないけれど、誰かと行くならばまあ最後にくだらないうネタにはなるから見るみたいな映画を見に行きませんか?」

「いや、そもそも俺、そんな一緒に映画とか行ったことねえし」

行つたとしても小町とだけだ

「……聞いた私がバカでした。そうですねせんぱいはそうでしたね。でも私とは前に行

きましたよねっ！」

「まあ、そうだが……」

あの時は色々制限があつたからな。ラーメンやら迷宮やら。

「今回の映画はじゃーん！ タダ券です！」

「また、用意周到な」

「ちなみにタイトルはいかにもB級映画！ その名も」

「その名も？」

「サメの名は」

「……」

やべえ、すげえ気になる。この堂々と有名所のタイトルをパクってきました感は一ニマルプロレスビデオに通ずる物があるな。

「たしかに気になるが、これ俺じゃなくても良いだろ。誰でも気になるぞ。それ」

そう言うのと一色はぶくーつと頬を膨らませ上目遣いで俺を見る。

「もく、私はせんぱいと行きたいんです」

「んだよ、その後に飯でも奢ってもらおうっていう魂胆だろ」

タダより高い物はないって話だ。いきなりタダ券くれるって言うのと疑り深く裏を探らんと後で何をされるか分からん。

特に一色の場合、俺はその術中に幾度となくはまってきたからな。段々とやり口が分かってきた。

「せんばい、もしかして口説いています？ 映画見るだけって話なのにちやつかりその後のご飯まで予定しているとかせんばいにしてはよく考えましたね。もしかして案外楽しみだったりしてます？ 私気軽に行くはずだったのですが気合い入れないといけなくなりましたね。集合時間少し遅めにしますね、ごめんなさい。」

ちげーよ。お前と一緒に行くと大体そのパターンだろうが。

「なんでもう行くって話になってんだよ。俺行かねえぞ」

「もうからあげ食べた時点でせんばいに拒否権は無いですよ」

「だからどんだけからあげに付加価値付けてんだよ……ぼったくりだろ……」

「せんばいが素直に領けばこの手段を使わずに済んだんですよ」

「お前はどこぞの詐欺師かな？」

「さて、決まったことですし、ほらせんばい。からあげどうぞ〜」

面倒くせえ……。ドタキャンしたら多分小町経由でなんか言われそうだし。素直に行くしかないか……

「はあ……分かったから食べるだけ食って良いよな」

「はいっ」



そう言つて満面に笑で俺にからあげを差し出す一色にまあいいかと俺の中で結論を出し、俺はからあげを口に運ぶのだった。

\*\*\*

俺はいつも通り奉仕部の部室へ向かい、扉に手を駆けたが俺の予想と反し、扉が横にスライドすることが無くガタツとつかつかつた音を立てた。

珍しく鍵がかかっていた。雪ノ下先輩が来ていないのだろうか？  
するとすぐに俺の携帯が鳴った。

差出人は雪ノ下先輩だ。

——比企谷くんごめんなさい。由比ヶ浜さんと一緒に向かつてる途中で依頼が来たのでそちらを終わらせてから来るわ。職員室に部室の鍵があるから取ってきてもらつてもよいかしら——

珍しいな。奉仕部が一時期名を知らしめた時くらいしかそう言った事は起きなかったんだがまだ名残があるのか。

俺はそんな事を考えつつ職員室へはいる。

梅雨のじめつとした不快指数の高い空気が一掃されるかのように空調の効いた部屋で近くに来た教師に内容を伝え部室の鍵を貰う。

そして名残惜しそうに職員室を去ろうとした時に声を掛けられた。

「おお、比企谷じゃないか」

そう言つて俺に声を掛けるのは平塚先生だ。

「平塚先生じゃないですか。ちゃんと仕事してますか？」

「君は私の上司かなにかか？ 生徒に心配される程素行不良な面を見せたことはないのだがな」

「そうですね。とりあえず何か話題をつて思つたら出てきたんですよ」

「比企谷あ……教師相手にとりあえず何か話題つてそんなに人と話す話題というものは君の中では枯渇しているのか？」

「いえ、考えるのが面倒なだけですよ」

「そうか。なら少し付き合え」

そう言つて職員室奥にあるパーティションで区切られた部屋へ案内される。

平塚先生は冷蔵庫からマツ缶を取り出し俺に差し出す

キンツキンに冷えているマツ缶、これは最高の状態じゃないか。

「すまんが、いいか？」

そう言つて俺の目の前で煙草を取り出し見せてくる

「だめですよ」

「まえは良いって言っただろうが」

「最近は何草駄目ってニュースでやってるじゃないですか。禁煙しても良いんじゃないですか？」

「禁煙は幾度となくやってるのだがな。やはり私では無理そうだと諦めている」

「禁煙すると結婚できると思いますよ」

「おい比企谷。それ以上話すと私の抹殺のラストブリットが飛んでくるぞ」

「スクライドとはまた古いっすね。ファーストもセカンドもぶっ飛ばしていきなりラストってあたりが緊迫感ありまよね」

婚期のラストブリットってな。ヤバいちよつと面白い。絶対口に出せないけれど。

「……その話についていけるお前もなかなかだが。私をあざ笑うかのような考えを巡らせてなかったか？」

最近女性全員は男性に無い何か特殊能力的な物を有していて秘匿する義務を国から与えられているのでは無いかという陰謀論が俺の中でどんどん開花して言っているんだが。マジでなんで俺の心の中を読めるの？

「そんなことは無いっすよ」

「そうか、ならいい」

よかった、なんか具体的にとか言われていたら回答次第で転生のアンコールブリット

が飛んで来そうな予感がした。

そう言って平塚先生はそのまま煙草をくわえ火を付ける。

「比企谷、それよりな」

平塚先生は煙を吐き俺に問いかける。

「君は一色と随分仲が良いようだな？ 付き合っているのか？」

この人は何を言っているんだろうか？

「つは?? そんな訳ないじゃないですか。そこまで仲は良くないと思いますよ」

「そうか、1年生の中でかなり噂になっていてな私の耳にも入ってくる位だ」

噂？ また誰かがSNSで情報流したとかそんなところか？

「またSNSとかですか？」

「いやそうでない。私から見てもそうなんだ。お前達は」

「ん？ どういうことですか」

「比企谷、最近お前の近くには一色しかない」

そういうえば最近あいつも近くにいるよな。

ただそれだけだったら仲が良いだけって話になるだろ。何周围が先走り過ぎだろ。

「別にそれだけだったらただ仲が良いだけとかって話ですよ」

「その仲がいいもお前は否定したんだが……」

ぐっそうだった。

「そ、そんな事よりも噂って具体的にどんな内容なんですか？」

「内容としては、購買裏で2人弁当食べていたり、ファミレスに2人でいたり、休日2人で買いものしていたりと噂が流れているがこれは事実か？」

「ノーコメントで」

……全て事実だから困る。壁に耳あり障子に目ありとはこの事だなと思った。

「まあいい。交際することに関しては私から言う事は無いが、節度をわきまえるよう頼むぞ」

「はあ……」

職員室の扉が開く音がして、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「しつれーしまーす」

由比ヶ浜だ。

パーティションの影から見たら雪ノ下もついてきていた。

そんな俺と由比ヶ浜の目が合う。

とつさに隠れたが時既に遅かった。

「あゝっ!? ヒッキーこんな所にいた〜!」

ちよつと由比ヶ浜、職員室なの。大声で俺の名前呼ばないでもらって良いですかね？

「由比ヶ浜さん、ここは職員室よ。そんな大声あげては駄目」

「あつ……ごめんゆきのん」

そう言つてシユンと縮こまる由比ヶ浜。

「いいのよ、次から気をつけましょう」

なんだ、職員室に入つてきていきなり百合百合オーラ満開にさせんなよ。

「そんな事より比企谷くん。鍵を開けておくようにと言つておいたのだけれど。あなたはそんな簡単なことも出来ない無能だったのかしら？」

「い、いやそれには理由がありましたね……」

「雪ノ下か。すまないな。私が休憩の連れとして少し話に付き合つて貰つていたんだ」

「そうだったんですか。いえそれなら大丈夫です。彼はもう連れて行つて大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。十分話し相手になつてもらつたよ」

「うす……」

こうして俺たちは職員室を後にして奉仕部へと向かった。

その道中、俺は小町から由比ヶ浜宛ての手紙を思い出し、由比ヶ浜を呼び止める。

「なあ、由比ヶ浜」

「ん？ どうしたのヒツキー？ なんかヒツキーから話しかけられるの珍しいね」

そう言つて不思議そうに俺を見つめる。

「小町から手紙預かつてな。これ渡しとく」

そう言つて俺は由比ヶ浜に手紙を渡した。

「あつ……ありがとう」

ぎゅつとその手紙を大切そうに握りしめていて、こいつはこう言う表情も出来るんだ  
などただそれだけ思った。

\*\*\*

映画はいい。

皆で来ようが1人で来ようが結局1人になれるからだ。

さらにわざわざ隣の奴の顔色伺わずにただ目の前にあるスクリーンに集中すれば2  
時間近い時間を1人で時間潰しできるにもかかわらず俺も相手も満足できる。なんと  
いうWin-winな娯楽だろうか。

ボツチに優しい娯楽、それが映画だ。

しかしそんな映画にも事前準備を怠つては駄目だ。

まず上映前のトイレは必須。特に真ん中席に座ると言う事は『私は2時間弱トイレに

行きません』と宣言しているようなものだ。その覚悟を持って席を選ぶのだ。

腹の調子がちよつとでも悪かったら端の席を選ぶか通路前の席を選ぶのが定石だ。

続いて売店だ。混み合う前に買うのが良い。最近は電子マネーを使って支払いはスムーズに済ませるとなおよし。しかしここで絶対に選んではいけない物がある。Lサイズの飲み物とポップコーンだ。

映画館のLサイズとポップコーンはやけにでかい。そして嫌がらせなのかストローを刺す口が2つついて居る。マジで余計なお世話だ。今時2人でストローチューチューするカップルがいるのであれば、そいつら互いの脳みそチューチューし合ってるんじゃないかと猟奇的な連想をしたくなってしまう。おつと話がそれた。

そんなデカイ飲み物を1人の俺が持つてみる。周りから『あいつ1人のくせにLサイズとかマジウケるんだけどブークスクス』と冷ややかな目で見られることは確実で、さらにポップコーンなんて買ってみる『うわあwこいつどんだけ食うんだよ、上映中ポップコーンあさる音うるさいの絶対お前だろ、あとくせえw』つて視線を向けられること間違いがない。

だからこそ、映画館の食べ物はチュロスかホットドッグ、飲み物はMサイズにするのが最適解だ。

ホットドッグ、チュロスは映画の上映前の宣伝で食べ終わっておくとなおよし。



以上のことを守れば快適な映画ライフが君を待っているだろう。

ビデオカメラとパトランプ野郎が教えてくれないやつだ。気をつけるよ。

……って、隣の奴にすげえ言いてえ。

目の前のスクリーンを見ながらポップコーンをポリポリと食べている一色を横目に俺的映画ルールを唱えて見るもやはり気づかれぬ。まあ思っているだけであり、口で言っていない。当たり前だ。

一色の策略に乗せられて折角の休日映画を見に行くことになった俺はそんなこの映画にのめり込めずにいた。

サメの名はと言いつつアニメかと思ったら実写じゃねえか……しかもさつきからスクリーンの男女がイチャコラしているだけだ。いつサメ出てくんだよ。

大体の恋愛映画って付き合う前の過程が省略されすぎなんだよ。そもそも付き合った事すらない男子高校生がこんな恋愛映画を見て思う事ってこの主人公いつサメに食われるのかな？ だろ。

他人の恋愛に全く興味なんて持てねえよ。

そんな事を言っているとおやおや？ スクリーンの男女がベッドでイチャコラおっぱじめたぞ？ 濡れ場あんのかこの映画!!

気まずい雰囲気を感じ取り、そつと一色を見ると目が合つてすぐに視線を外した。

早く場面切り替わらねえかな……

\*\*\*

ようやく映画から解放され、力なく映画館から出てきた。

ちよつと早めに出たからまだ日は高い。

「せんばい……あの映画微妙でしたね」

「おれ、何度退室したくなつたか分かんねえわ」

「私途中寝てました」

それな。俺が退室できなかつた理由。

「それよりご飯どこ行きます？ 今日ラーメンの気分じゃ無いです。あとサイゼも」

「先手打たれると俺の行く飯屋リストが全滅するのだが？」

「なので私がちよつと気になっているお店があるのでそちらに行きましょう」

おつ、俺がわざわざ探さなくて良いのは良いことだ。

後ろからついて行くことにするわ。

「せんばーいついてきて下さい」

「おう」

そうして俺たちはゆっくりと足をすすめることにした。

## #16—3

一色が連れてきたのは昔ながらの純喫茶と言うのか。あれだ、テーブルがゲームとして遊べるやつが置いていたり、壁にはやけに昔ながらのレトロな感じなポスターやら有名企業のロゴが飾られていたりする喫茶店だ。

店内のBGMでは昭和の歌謡曲が流れていて、この店だけやけに時の流れたが止まったかのような空間だ。

今時こんな店が残っていたなとしみじみ思う。おじさん達とかに受けそうだ。

「このケーキって手作りで結構美味しいんですね〜」

そんなことを言いつつ一色はインベーダーゲームのある席へと腰掛ける。

俺も一色の対面に座る。ちょうど座るときにコイン投入口が見え、そこにワンプレイ200円という表記をみて俺はぼったくりの店に来たのではないだろうかと疑心暗鬼に駆られた。

「そうなのか。そりゃ良かったな」

「ついでにこのコーヒーってせんばいがよく飲んでるコーヒーも取り扱っていたりするんですよ?」

「おお!? マジか」

メニュー表をよく見ると確かにドリンクの所に ジョージアマックスコーヒーと記載がある。

正式名称で書かれているあたりマツ缶への愛を感じざる得ない。

しかし、マックスコーヒーのケーキセットってなんだ？ カロリーモンスター以外の何者でもないと思うんだが。

「私バイクドチーズケーキ選ぶんで、先輩の好きなコーヒと他ケーキ選んでくださいね」

一色ちゃん？ 何気に俺の選択肢マツ缶×ケーキセット以外は道がないよ？ って遠回しに言ってるやない？

「ならモンブランにするわ」

マツ缶だけでも脳へのエネルギー補給は十分だつつのそれにプラスしてケーキとなると結構味覚的につらい。

マツ缶の甘みを和らげるってなると少しでも甘さ控えめのケーキを選ぶ必要があるがしかし、俺のなかではこの横文字で並んでいるケーキのどれが甘さ控えめかからんし、聞ける状況じゃねえ……

とりあえず名前からして大人びたモンブランは最適解なのではないだろうか？ 食

べたことねえけど。

ガトーシヨコラも考えた。しかし名前からしてすげえ苦いかすげえ甘いかの両極端な予感がした為、あえなく選考から外した次第だ。

「先輩にしては意外な選択ですね」

「んなもんテキトーだテキトー」

「へー」

そう言つて一色は店員に今の注文内容を伝える。

店員が去つたあとにメニュー表を見ながら俺に視線を合わせメニュー表の右斜め下端を指をさした。

「てつきりレアチーズケーキとか頼むのかと思つてました」

「なん……だと……」

まじかそんなんあつたんか……くつそ、完全に見落としてた。そんなのメニュー右斜め端に小さく書いてんじやねえよ。

分の悪い事は小さく書く契約書かよ。そのうち業務改善命令出されるぞ。

「まあ……たまには別の物食いたくなるしな」

「そうですよねー、こう言う時にしか食べられないものを頼むのが普通ですよ」

テーブルに肘をおいて俺の瞳をのぞき込むように一色が上目づかいで俺を見つめる。

「な、なんだよ」

「いえ、らしくないな。って思っただけでしょ」

瞳を落とし呟くように一色が言葉を出す。

なんだよらしくないって。俺は俺の最大限を出し切ってお前の対応をしている筈だが？

「そうか？ まあ見落としただけだしな。まあ……たまにはこう言うのも悪くはない」

「ふふっ」

なにか幸せそうに微笑んでいるがその理由が全く分からず正直不気味に感じる。

「それよりも、お前さ……葉山先輩とはどうなんだ？」

俺にしては少し踏み込んだ質問をしたと思う。まあ理由はある。

最近よく一色と話をしているわけで、俺の中にある話題ストックがハイペースで消えていくのだ。俺はこいつみたいに関係が豊富な訳ではない。なので話す話題の生産が追いついておらず枯渇寸前、需要過多ってやつだ。まあテキストな事を話題にするのだったら沢山あるが、今の世の中は質も求められる。TPOにあった発言をしないと品位を損なうからな。

まあそれよりも最近こいつの口から葉山先輩の言葉をあまり聞かないから進捗が気になるって所もある。

すると一色は俺からそんな言葉が出たのが珍しいのか、目を見開いた。

「……せんばい？」

「んだよ？」

「もしかして……嫉妬してます？」

「んなわけねえだろ。お前の交友関係聞いただけで俺がなんで嫉妬するんだよ」

「ですよね。ちよつと私の思い違いでした」

一色はてへつと自分の手で頭をコツンと軽く当てて舌を出して反省を表した。

あざとすぎて鼻で笑ってしまった。

「ちよつ、なんで鼻で笑ってるんですか!？」

「あざとすぎなんだよ。あまりにもテンプレ過ぎっから若干引いたわ」

「む、せんばいこう言うの好きそうだからやったのに」

「いやまて、何を根拠にそれを言った？」

「えっ？　せんばいから借りたライトノベルですよ」

自然とまた鼻で笑ってしまった。出所がラノベってやべえわ。

「ちよつ、なんでまた鼻で笑うんですか!？」

「いや、なんでつてラノベはラノベでやるから良いんだよ。それをリアルでやるのはあれだ、ほかが恥ずかしくなるから辞めといった方がいいぞ。先人からのアドバイスだ」

政府報告書とか神界日記とかラノベに影響されてやつちまったのがフラツシユバツクしてしまう。もう無くなった歴史だ。そのまま海馬の彼方に消えてしまえ。

「ほかの男の子には結構効いたんですけれどね」

おい、男子諸君。可愛い女子が何やつても許してやれるその器の広さは認めてやるが、何もかも承認してやるとそれはオタサーの姫の取り巻きとやってること変わんねえからな？ 本人が調子づくだけだ。少しは指摘してやれよ。それで離れるようであればそいつはお前なんて見ていないから。そいつに時間を使う必要ないって分かっただけ良いだろ。

「そりやお前へのご機嫌伺い含めてんだろ」

「まあそうなんですけれどね」

認めちゃったよ。ほかの男子諸君が可哀想で仕方が無い。

「でもせんぱいはそう言ったのちやんと指摘してくれるから結構好きですよ」

「お前……男子高校生の女子に言われると絶対勘違いするランキングダントツ1位に輝く言葉不意に吐いてんじゃねえよ。俺じやなかったら完全に勘違いされたぞ」

「せんぱいだから言ってるんですがね」

こいつは俺が勘違いしないことを前提として言っている訳か。なるほどな。

「話変わるんですけど、あのライトノベルですが全部読んだのでそろそろお返ししたい



のですが」

「そういうや前に続きが気になったラノベ買ってたな。」

「そうだな。なんか続き気になった奴とかあったか？ 前買った奴以外で」

「そうですね、いくつかあったのでせんぱいの家に行ったときにでもお話ししますよ」

「わかった」

「……ん？ 今の会話なんか違和感があるんだが？」

「なにさも当たり前のように俺ん家に来ようとしてんの？」

「え？ だって学校じゃ渡せないじゃないですか」

「確かに最近はやけに噂が広がってるからな。下手に絡むと周りに信憑性を与えかね

ん

「チャリのカゴにでも入れて置いて置いても良いんだぞ？」

「え、それじゃ盗まれちゃうじゃ無いですか!？ つというかもう小町ちゃんには連絡

済みですから逃げないで下さいね」

「なんで小町俺にそのこと教えてくれねえの？ ねえお前らの信頼関係ってどうなっ

てんの？」

「はあ……」

「つで、葉山先輩の話でしたね」

「そうだ、元々その話をしようとしたが色々と話が脱線してしまつてた事を思い出した。」

しかし狙つたかのようにその話を始めようとしたらちようど店員がケーキセットを持ってきたのだつた。

一色はアイスのカフェラテとベイクドチーズケーキだ。流石に質素な感じではあるが皿にブルーベリーの濃い紫色の曲線が描かれておりシンプルに装飾されている。

一色にしては珍しく質素な奴を選んだな。

さてさて、俺が頼んだモンブランとやらはやけに細く茶色い奴がとぐろ巻いてんだけれど。……食欲失せる食レポするんじゃないや無かつた。

とぐろのてっぺんに栗が乗り周りは生クリームとイチゴジャムとキラキラしてるよく分からん丸い奴でデコられていた。なんだろう、俺としてはベイクドチーズケーキみたいに質素な感じで良かったのだが。つてかこのキラキラしてんの食えるの??

「せんぱいのケーキかわいいですね」

「そうか? 交換するか?」

「それは駄目ですー。でもせつぱくなんでも一口貰つて良いですか?」

「ああいいぞ」

そう言つて俺は一色に皿を差し出す。

「何してるんですかせんばい？　こういう時はこうやって食べるってライトノベルに書いてましたよ」

そう言つて俺にバイクドチーズケーキをすくつたスプーンを向ける。

おい、やめろよ。さつきラノベの物事をリアルでやると黒歴史になるって話したばつかだろうが。

「いや俺先端恐怖症だからそういうの受け付けねえのよ」

「スプーンの先端は丸いんで。？つかないで下さーい。ほらあーん」

「ちよ……さて、一色。それやると周りからバカツプルと思われるだろが」

「それなら目を閉じれば良いんじゃないですか？　周りが気にならなくなるとももしかしたら億千の星が見えるかもですよ？」

「お前、こんなときにネタに走つてんじゃねーよ」

「すきありー！」

「むぐつ」

そう言つて一瞬の隙を突かれ口に放り込まれる。

うむ、バイクドチーズケーキの濃厚な甘みと少しレモンの酸味が合わさつて確かにうまい。

それに合わせてマツ缶を飲む……。うつわ甘さと甘さが喧嘩してる。

「おいしいですか？」

「ケーキ単品ならうまいがマツ缶と合わせると甘味の暴力が口の中で巻き起こる感じだ」

「流石にそうなりますよね」

そんな事を言いながら一色がそわそわとしている

「さて、次は先輩の番ですよ？」

「えっ!? 俺もやんの？」

「えっ一口ずつ交換しましよって言ったじゃないですか」

「嫌に決まってるんだろ。なんでやらなくちやいけねえんだよ。ほれ、皿を渡すから好きなだけすくえ」

「せんばいはいけずですわね」

そう言つて一色はそのまま俺のモンブランから一口分をすくい上げ自分の口へと運ぶ。

「んー! 美味しいですわねっ！」

うまそうに食うな。きつとうまいんだろうなと思いつつ俺もモンブランを一口食べてみる。

うん、甘さ控えめなところが良い。

マツ缶は食後に飲む。

「そういえば、葉山先輩の話でしたね」

自分のケーキを食べながら一色がそんな話をする。

そういえばその話題をしようとしてケーキが来たんだっけか。

もうどうでも良い感が出てきている。

「ああ、そうだった。」

「葉山先輩とはなかなか良い関係を築けてると思いますよ先輩と後輩の関係で」

「なるほどな。まあそうか。あとは時間の問題的な感じか？」

「いえ？ 時間の問題とも違いますよ。もうこれでお終いです、これ以上関係が深くな

ることはないと思います」

「ん？ どういうことだ？」

「つまりは私、葉山先輩は諦めます」

「はあ!？」

あまりに唐突な告白にちよつと声量無視で驚いてしまった。

「ちよつ、せんぱい。ここ喫茶店なんで大声出すと迷惑ですよ」

ぐつ……いつもお前に対してそれ思ってるんだがこの理不尽は何だ。

「ま、まあそうなんだが、ちよつと待てよ。サッカー部はどうなるんだよ」

「えっ、まあ楽しいですしまだ続けますけれど、どこかしらで見切りつけようかと思っ  
ますよ」

一色よ、俺がそれにどれだけ苦労したか分かってんのか？

「つーことは俺はもうお役御免って事か」

「せんぱい？ 何言ってるんですか？ 私の依頼は何だったか覚えてます？ この質問

2回目ですよ？」

「……気になる人がいるから手伝って。……って事はまさか……」

「別に気になる人が出来ちゃいましたっ」

なにピースしちやってんのこいつ。葉山先輩よりもイケメン見つけちゃったわけ？

ってか今までの俺の苦労を返せ。

「まあ、その為には色々と準備が必要になってくるわけで」

「もうそいつと一緒に部活入るとか言い出すなよ。絶対手伝わんからな」

「あつ、大丈夫です。入部する気ないんで」

なんだ、やけにあっさりしてんな。

まあ一色のことだ。なんかそいつを落とす計算でもしてるんだらう。

「具体的にどうするつもりだ？」

「ん、そうですね。相手が用心深い人なので私から何度かデート誘ったりして信頼関

係築いて行こうかなって考えてます。」

ほー、一色そんな面倒くさそうな奴がタイプだったんだな。葉山先輩の時とは違って顔で選んだりしなかったのか。

「まあ、そこら辺は応援してるわ」

一色はふふつと軽く微笑を浮かべ、『ありがとうございます』と小さく呟いた

その後、俺たちはケーキを平らげて喫茶店をでた。

「あっ」

そこでちょうど通りかかった同級生達とぼったり鉢合せしてしまい、噂の信憑性を上げてしまうことになった。

## # 17-1

6月もなんやかんやで色々であった。

先日一色と一緒に居たことが見事にクラスの連中に知られてあった。ごたごたとか、重度シスコン疑惑とか葉山先輩とやけに仲が良いからもしかして2人は……とか様々な噂が飛び交っては俺はそれらを否定してなんとか無事6月の最後の週を迎えることが出来た。最後のは流星に限定的な人のみだったから気にする必要は無いだろう。

今日の奉仕部は園芸部からの依頼で、人手が足りなかったらしく肥料を黙々と運んでいた。そのせいか今日は肉体疲労がたまっており、俺はペダルをこぐだけのマシンと化していた。

そんな状態も相まって注意力が散漫になっていたのだろう。帰り道に自転車の前輪タイヤがパンクしてしまった。

どうやらガラスの破片を踏んでしまったらしい。誰だよ酒瓶を道路で割って放置した奴。

状況は最悪でそれはもうバックリと割れてしまっていてこれタイヤ自体買い替えないと無理じゃね？　って思う位だ。



まじでついてねえ……

そんな事よりも俺が今いる所は家まで距離が微妙に遠い。そして手には少し力を加え押してでないと前に進めない自転車。

俺の中に3つの選択肢が思い浮かぶ。

1つ目はそのまま押して家まで運ぶのだ。まあ今週は電車通学になるだろうが、土日のいずれかに修理すれば大丈夫だろう。

2つ目は自転車を駅の駐輪場にとめて後日取りに行くと言う方法だ。問題を先送りにする方法だ。

3つ目はそれでも関係ない。おれは自転車を漕ぐぞ。

うん、余裕で1番を選ぶだろ普通。3番はアレだ、自転車の修理費が倍額になる恐れがある。

そんな事を考えてベコベコと音を立てる自転車を押して家まで帰る。

日も落ちる時間帯だというのに不快な湿気はそのまま、さらに少し力を入れて押して歩いている自転車がある事から吹き出した体中の汗で制服やらズボンが肌へばりつく。

「あっちー」

少し歩くとコンビニがあり、一旦自転車を止めそこに入る。自動ドアが開く瞬間に中

の冷房が俺に流れてきて先ほどまでの熱を冷やしてくれる。

とりあえず俺は安くで買える紙パック1リットルでレモン味のビタミンドリンクに手を出す。このコンビニを出てからのことを考えると小まめな水分補給は欠かせない。そしてさっぱりとした飲み物を飲みたいという欲求を満たすもの。さらに安価で手に入る。俺の今の要望を満たすドリンクと言えよう。

一応財布を確認する。残金は1000円だ。……足りん。あと200円くらい足りん。

そうだった……今日は力仕事の後に飲み物買って飲んでたら一色に見つかって奢つて。あーそれで無くなったのか……くっそ、飲み物なしで帰るとかマジで苦行なんだが……

「あれ？ もしかして比企谷先輩ですか？」

後ろから聞き慣れない声で俺の苗字を呼ぶ声が聞こえる。多分違う比企谷さんだろう。しかも先輩とかすごい偶然だな。ここは無視することで『えっ!? 俺じゃなかったんだ……』を避ける処理を八幡脳細胞が自動的に行ってくれた。

「比企谷せんぱーい？ あれ？ イヤホンしています？」

どんどんと近くなってくる声。うん？ 俺の近くに同じ比企谷さんが居るのかな？

そう思い周りを見渡してみると誰も居ない。そうなると状況は変わってくる。この聞き覚えの無い声をした女子は俺を呼んでいるのだ。

とりあえず姿を見ようと俺は振り返った。すると150センチあるかどうかの身長で俺を見上げていた。肩までの伸ばした黒髪、夏日が続いているというのに真っ白い肌と幼いながらも整った顔立ちで俗に言う可愛いと言う部類に入る女子だ。そんな見覚えの無い女子が目の前にいてなにやら困惑の表情を浮かべ立っていた。

「……誰？」

姿はみても結局お前はなんなんだ？ という疑問は思い立つ。

それを言葉にのせ表してみた。

「やっぱり比企谷先輩だ！ 同じクラスの矢向ですよ！ 矢向由奈ですっ！」

どうやら名前は矢向というらしい。あー、確か俺の席の列の一番前の奴だ。休み時間よく4人くらいの女子と話してるよな

「あつ、そうなんね。でっ、なんか用？」

とりあえずなんで俺は声かけられたの？ すでにジューズ1本買えない俺の精神をさらに決りに来たの？

「今日は一色さんと一緒じゃないんですね」

「なんで俺と一色がワンセットで考えられてんだ？」

「えっ!? だって彼女じゃないんですか？」

「ちがうっつーに」

「うっそだ、だって普通にデートしていたじゃないですか」

この話題はあの場面を見られてからと言うもの耳にタコができるほど聞かされた話題だ。

正直誰が話そうとも俺の持ち合わせている答えはひとつだ。

「ちげーよ、部活の一環だ」

「へー。そうなんですね」

すげーどうでも良いみたいな反応だな。ここが会話の切り上げ時か。

「そんなもんだ。そんじゃ俺行くわ。んじやな」

俺は紙バックを陳列棚に戻し出口へと向かおうとした。

「あれ？ 比企谷先輩？ 買っていかないんですか？」

矢向は首をかしげて俺に問いかける。あれ？ 今の去り時じゃなかったの？

「買おうと思ったたら金が無かった」

「何ですかそれ」

矢向がふつと微笑みを浮かべる。

「ちよつと待つてて下さいね」

突然矢向は俺が陳列棚にもどした紙バックを取り、レジの店員の元へと小走りで行かい少し話をしてまた戻ってきた。

「今日はツケで良いですよ。支払いは済ませておきました」

そう言つて俺に紙パックの入つたビニール袋を差し出した。

なにそれこわい。いきなり何しちやつてんのこの子。

「なにお前？ 同じクラスつてだけで飲み物奢つてもらふ理由はないんだが」

「あくまでツケですよ？ 後日ちゃんと支払してもらいますから」

奢るじゃなくて後払いにしてくれるのね。まあ何の理由も無いのに奢つてもらふよ  
かいいが……

「それに……同じクラスの男子が全身汗びっしよりで飲み物も買えない状態とか流石に  
可哀想だなーつて思つただけですよ」

あつ、同情されてんのね俺……。

「10日で1割の利子とかつかねえよな……」

「そんなのしませんよー、ただ……ここのうちのコンビニなんで定期的に利用して貰え  
ると嬉しいですなー」

そう言つてぐつと親指を立てる。

あーなるほど、コンビニオーナーなのねおまえんち。

フランチャイズにあまり良い噂は聞かないが大丈夫なのかと少し思ったが、まあそん  
な世話な話をして仕方がないだろう。

「まあ……考えとくわ。とりあえず助かったわ」

俺は彼女が差し出した紙パックを受け取り鞆へと入れる。

「いえいえ、ぜひぜひ今後ともご鼻屑に」

そうしてニカツと歯並びの良い歯を見せながら笑みを見せた。少しぼーつとその笑顔に見惚れていた。

……つぶねー。勘違いするところだったぜ。

「つてかなんで比企谷先輩そんなに汗びっしりなんですか？」

「俺の自転車がパンクしたから押して帰ってんだ」

「えーつ、悲惨ですね。今日は朝の占い最下位だったんですかね？」

「中間くらいだったはずだぞ」

「ちゃんと朝の占い見てるんですね。きっとラッキーアイテム持っていなかったからですよ」

「妹が毎日みるんでな。今日のラッキーアイテムは狸のぬいぐるみだったな」

「妹さんいるんですね。へえ私持ってますよ？ 売りましようか？」

「いらねーよ。そんじゃ俺そろそろ行くわ。ありがとな」

「はい。またのご利用おまちしてますねー」

「考えとく」

そう言つて俺は矢向と別れ、自転車を押して歩く苦行を再開させた。

そして途中で水分補給しようとして気づいたことがある。

「ストローねえ……」

\*\*\*

自転車がパンクしてることから今日は電車だった。

しかし運が悪かったのかどうやらお客様トラブルとかで遅延が発生したと駅構内にアナウンスが流れる。

このまま遅延が続くと確実に遅刻だな。まあ遅刻の常習犯である俺はそれにすら動揺しないんだがな。

電車到着のアナウンスが流れ、車両がゆつくりと停止する。遅延のせいか、電車には結構な人数が確認できて俺もこれに乗るのかと思うと憂鬱になった。

そんな電車も電車が詰まっているというアナウンスがたびたび繰り返され、停止しては進んでを繰り返す。地獄だった。

そして駅にたどり着いた時、始業の時間にはまあ全力疾走すれば間に合うが、そこまでしてまで俺には守るべきものはない。皆勤賞なぞ入学4日目できてやったわ。

もうこれは急ぐ必要も無いと考え、今日あらたに貰った小遣いを使って自販機で飲み物を買ってベンチで飲み干すまでゆっくりした後。

ゆっくりと歩いて学校へ向かうことにした。

まあ、担任は軽く注意する位だし俺は正々堂々と俺は教室に入る。

「比企谷。私の授業に遅れてくるとは良い度胸じゃないか」

目の前に居たのは平塚先生だ。あつ、今日一限目現国だったか。しくじった。

「いや、あれつすよ。電車が遅延してたんですから仕方ないですよね?」

「なるほど。前みたいなの正義の味方とかよく分からん言い回しをしなくなつたのは褒めてやろう。しかし?をつくのはいかんな、お前は確か自転車通学だっただろうが」

なんでいきなり?をついていると言う話が出るんですかね? 八幡?つかないよ?

「先生!」

そう言つて手をあげた女子が居た。矢向だ。

「矢向か、どうした?」

「二応比企谷先輩の言っている事なんですが昨日自転車パンクしてたみたいなんですよ。あと確かに電車遅延してましたよ」

ナイス矢向! 俺の自転車事情を知る第三者からの話があるとすれば流石にこれは不問になるだろう。



「私も焦って全力疾走でなんとか間に合ったんですけれど……」

あつ、最後のそれいらないぞ。 矢向

どうやら最後まで聞き逃さずに聞いていた平塚先生の目が光る。

「ほう比企谷？ なぜベストを尽くさなかった」

「いやアレです、ベストを尽くすのは人生のここぞというときに限られるわけで登校くらしいの日常でベストを尽くしてしまつては身が持たないという事ですよ」

「何を言っているのだ。スーパーサイヤ人も常時維持する事でムダな出力を抑えられるようになるのだ。常にベストを尽くす事でさらに成長が出来るというのに貴様というやつは」

いやちよつと何言っているのか分からないです。少年漫画理論を持ち出されても正直困るんすけれど。

「はあ……まあいい。とりあえず席に着け」

「うつす……」

良かった感謝の正拳突きを打たれなくてすんだ。

そのまま自分の席に向かう途中、ちよつと矢向の席を横切る。

「良かったですね。比企谷先輩」

ちよつと俺にしか聞こえない声量で声をかけられる。

「お前最後のはいらなかったぞ」

「まあ良いじゃないですか。あつ、休み時間に昨日のお金徴収しますね」

「へいへい」

そう言つて俺は自分の席に着いた。

\*\*\*

1 限目の授業も滞りなく終わり、俺は矢向の席へと向かった。

「矢向」

そう言つて矢向はゆっくり俺に顔を向ける。その顔は微笑みで満ちていた。

と同時に両手をお椀型にして俺にさつさと支払えと要求してくる。

「ほれ」

そのお椀型に投げるように金を支払う。

「まいどー!」

そんな事をいいながら渡した金を触りながらほっこり笑顔だ。

「守銭奴かよ」

「いいじゃないですか、お金は大事ですよ?」

「まあそれはそうだが」

「それにしても比企谷先輩そこそこつつきやすいですね」

「はあ？ どういうことだ？」

「最初は留年した問題児には関わらないでおこうって思っていたんですがね。たまに放課後比企谷先輩を見かけるんですけど、ちゃんと部活もやってますし昨日だつてほかの部活の手伝いとかしてますしね。もしかしたら私は何か前提を間違えてたんじゃなにかつて思いました。そして話しかけたら案の定おもしろい先輩でしたーって感じですよ」

「お、おう」

なんか俺が知らないところで高評価が出されているのは何というか照れくさいというか……悪くはないな。

「おっ？ おっ？ もしかして照れてます?？」

「うっせ。とりあえず返したからな」

そう言つて俺はさっさと席り机に伏せて2時限目まで休憩としゃれ込むつもりだったが、伏せた瞬間から何か消しゴムのカスカ何か小さい物を俺に投げている奴がいる。

チラッと薄目で投げってくる方向を確認したらふくれっ面で消しゴムの破片を投げている一色がうつつた。

……何してんのこの子。  
俺は無視を決め込むことにした。

## #17—2

「せんぱい！ いままでクラスの子に話しかけたことなかったのにいつの間に矢向さんと仲良くなったんですか!？」

ベストプレイスに一色の叫びがはなたれる。

いや、ただ単純に金返しただけなんだが……

「仲良くなったつーか、金銭的な関係というかそんな感じなんだが」

あれ？ これちよつと言い方間違えたか？

「えつ……せんぱい？ 矢向さんとそんな関係だったんですか……ロリコンなんです  
ね」

ロリコンってなんだよ。あいつお前と同じどしつ……!? 怖い怖い……そんな目でみるな。

一色は後ずさりながら、侮蔑の鋭い視線を俺に向ける。

「ちげーつての。つてかこうなったのも昨日お前が飲み物欲しいとか言い出したのも一因だからな」

「はっ？ 意味不明なんですけど？ それならせんぱい断ればよかったですし！ 買っても

らった時嬉しかったのに！」

一色ちゃん？ 敬語がどこかに吹き飛んでいっちゃったよ？

あー……この雰囲気はよろしくないな。ケンカ一歩手前だ。

小町とケンカする手前によく感じていた雰囲気である事を察した俺はすぐさま巻き返しを図ることにした。

これは俺の言い方も悪かったな。別にケンカふっかけようとして言っただけではないんだが。

俺は一色の機嫌を損なわないように言葉を選びつつ昨日の経緯を伝えた。

「そんな感じで今日は矢向に借りた金を返しにいっただけだ」

「はい……理由はわかりました。すみません声を荒げてしまつて」

「いや、俺も言い方が悪かったな。すまん」

なんとかご理解とご機嫌を取り直して頂けたようでもよりだ。

「まとめると昨日汗まみれな格好で汗臭い異臭を放つて誰もが避けて通つたせんばいを見かけた矢向さんが、怖いもの見たさかで声をかけてみたらまあキモいけれど話せなくはないと言うことで少し相手をしてあげたら物乞いをされて仕方ないから立て替えてあげたつて言うことですすよね」

ちよつと一色ちゃん？ そのまとめ方俺に対しての悪意がここぞとばかりに注がれ

てツツコミどころ満載なんだけれど。俺は腐りかけのゾンビかなにかかな？

「汗まみれだったのは認めるがそこまでじゃねえだろが。これでも多少ましな顔面だからすこし補正はついてても良いと思ってただけど？」

「えっ……もしかして自覚ないんですか？」

「えっ!？」

もしかして思っているより俺の顔面偏差値低いのん？ そんな馬鹿な!？」

「またまた一色。そんなはずないだろ？」

「せんばい。現実から目を背けないでください。せんばいは……まあ、ごく少数派に好かれてますよ」

おい、それは前に葉山先輩と一緒にいたぐ腐腐な眼鏡女子のこと言ってるねえよな？

やめろよまじで俺の貞操が危ぶまれる。

「マジかよ……ヒキガエルのあだ名は伊達じゃなかったのか」

マジで意気消沈。これから俺は女子に顔を見られるだけでヒキガエルと思われてい  
ると思つて謙虚に生きていこう。

「私はせんばいが顔面ヒキガエルだろうとも味方ですからね？」

「一色……」

なんか良いこと言っている風に装ってるけど俺ディスられてるからな？

「誰が顔面ヒキガエルだよ」

軽く「色の両頬をつまみ横に引つ張る。

「むむく!!? ひえんはいなにふるんてふかー!!!」

「顔面ヒキガエル言われて怒らない奴はいないぞ。罰だ」

これは小町がいたずらしたときによくやった奴だ。しかし最近はセクハラだ頬ハラだと言いつ返すようになったから出来なくなった。あいつの頬柔らかくて触り心地良かったんだけどな。

まあ一色も小町以上ではないにしてもなかなか悪くなつ……!?

ここで俺は何か根本的な間違いをしていることに気づいた。

一色は妹ではない。俺は他人様の女子に妹と同対応をしているではないか。

すぐさま一色の頬から手を離す。

一色の顔は少し赤くなっているように見えなくもない。強く引つ張った覚えはないのだが肌が弱いのだろうか悪いことをしたな。

「すまん。勢いでやっちゃまった……」

「……むー、ほんとにびつくりしたんですからね! 女の子に簡単に触れると思つたら大間違いですよ!」

「すまん、まじですまん」



「私だから良かったものを他の女子にやったら通報ものですからね。そこ気をつけてくださいね！」

そうだよな。ほかの女子にやったら確かに通報されるだろう。

「うす……」

「矢向さんに私と同じ事したら許しませんよ？ 一生ロリコンシスコンハチマンって言いますからね」

「おい、不名誉な名称の一部に俺の名が刻まれてるんだが」

「語呂が良かったので」

「俺の名が……」

「おつ、良いタイトルですね。映画化できますよ」

「そりやすげえ。俺の過去編だけで3部作出来るまであるぞ。すべてバッドエンドだ」

「うわあ……自分でバッドエンド言っちゃいましたよこの人……せめて4部でハッピーエンドがやってくると良いですね」

「専業主夫エンドにならねえかな」

「それには妻を見つける必要がありますよね」

「そうだな。誰か俺を養ってくれる女子がその辺に転がってねえかな……」

「せんぱいはその辺に転がっている女子すら疑ってかかるじゃないですか。それ言う前

に自分の捻くれた考えを正すべきなんじゃないですかね？ そしたら案外近くにいる女子に気づくかもですよ？」

「小町しか選択肢ねえじゃねえか」

「間髪入れず小町ちゃんを選ぶあたり生粋のシスコンですね。気持ち悪いです。身内以外にも目を向けましょ。もつと別にいますよねっ、ねっ！」

「となると？ 誰だ？ 由比ヶ浜か雪ノ下先輩？」

「うっわ……理想が高すぎてひきました。どんだけ高望みしてるんですか?? 身の程をわきまえてください」

「ただ名前を出しただけだろ。なんでデイスられんだよ俺」

「ほらもつと女の子らしい子が残ってるじゃないですか」

「残ってるの矢向だけなんだが……」

「……せんぱい？ なんでそうなるんですか?? もしかしてガチのロリコンですか？」  
 おい一色。さつきから俺デイスっているのと同時に矢向もデイスってるかな。

「あいつお前と同じ年なんだが……」

「せんぱいは可愛くて小さい子に興味があるんですよね——！ ロリ属性が好きなんです  
 ね——っ！」

こいつヲノベ読んでるからか？ ロリ属性とかいう言葉が躊躇無く出てきた辺り着

実にサブカルに毒されてきてんな。

「だんだんお前の発言が由比ヶ浜寄りになってんだけど」

「それはどういふことですかね?」

「偏差値低そうだなって思った」

「それは先輩のせいですからね。責任とってください」

「……その話はおいておくとしよう。ただ俺の回答は別に間違っていないだろ。お前は別に好きな人居るんだから当然除外だしな」

「む……」

なんでこいつはそんな不服そうな顔してんの? 他に誰がいんだよ。それ教えろよ。

「せんぱいのバカっ!!!」

そう怒鳴って一色は振り返らずに走り去って行った。

いったいなんなんだあいつは……女心は秋の空と言うがあいつのはゲリラ豪雨じゃねーか。

……あつ戸塚先輩がいた!? それか!!!

\*\*\*

7月が始まった。もう少しすれば夏休みだ。しかしその前に、俺たち学生にとつて超えなければならぬ試練が存在するわけだ。その名も期末テスト。

今週から期末テストの部活停止期間に入る訳だ。

なので部活はないが勉強はしないといけん。勉強は基本家でやるものなのだが今日に限ってやけに腹の音の自己主張が激しい。原因は朝飯を食いそびれたのと昼も購買競争に負け食いそびれたわけだ。

この腹の音を黙らせるため、サイゼに寄ることにしたのだが……  
「ダメか……」

駅前のサイゼは勉強場所を求める学生たちで満席状態だった。

時間を忘れて勉強して店員に怒られるがいいと捨てゼリフを考えながら俺はほかに場所を探すことにした。

がっ、やはり考えることは皆同じなのだろう。最後の頼みの綱で前に一色といったカフェに行ってみたがどうやら満席状態で入れそうになかった。

これは黙って家に帰ってカップ麺をくいながら勉強した方がいいなど考えていたところ声をかけられる。

「あれ、比企谷先輩？」

その声の主である矢向はパーティションで区切られた二名席から頭を出し俺に手を振っていた。ちょうど矢向の座ってる席の位置から入口が見えるから気づいたのだろう。

俺がそれに反応すると矢向は俺の元に駆け寄ってきた。

いや別にこつち来なくて良いんだが。

「比企谷先輩も試験勉強ですか？」

「そうだが満席らしいからな。家で勉強するわ」

「それなら私の席来ます？　ちやうど2名席ですし」

「いや、それは悪い」

「いえいえ、気にしないで良いですよ。それにほら……お腹もすいてますよね」

どうやらさつきからなりっぱなしの腹の音は矢向にも筒抜けのようだ。

正直何か入れんとこの鳴りはおさまりそうになかった。ここは言葉に甘えることにしよう。

「すまんが相席いいか？」

「ええ、どうぞ」

そう言つて俺は矢向がいた席へと案内された。

「比企谷先輩は何食べるんですか？　あー、これ美味しそう」

広げたメニュー表を見ながら矢向がパスタの写真に指を指す。

「お前も食うんかよ」

「ちやうど私もお腹空いてたんですよね」

そう言つてニカツと齒を見せ笑う姿は悪くない。

「相席してもらつて流石に文句はねえよ」

「比企谷先輩は何にします？　これとかどうですか、チキンステーキ&ハンバーグ。ボリュームあつてお値段お手頃ですしどうですか？」

「ほー、そんなもんあんのか。ここ普通のカフェだと思つたらファミレスみたいなメニューも出してんだな」

「学校も近いですし学生のお客さんも多いからじゃないですか？」

「まあ近しい理由だろうな。そのオススメを買うことにするか」

「財布チェック大丈夫ですか？　注文した後に足りなかつたとか言つても今度は利子つけますからね？」

「うっせ守銭奴め。今日は何気に懐が暖かいんだ」

なんせ7月分の小遣いの要求をたまたま小町経由でやつてもらつた。するとどうだろう、俺がもらつている金額の倍額が届く。意味がわからんがそんな理由できようび俺の懐は暖かい。

「そうなんですな」

「奢らんぞ？」

「まだ何も言つていませんよ。でもここで私の信用が買えると思つたら安いものじゃない」

いですか？」

「信用の上げ方なんて奢る以外にもいくらでもあるだろうが。俺は目先のやつすい信用は買わねえ主義なんだよ。いうだろ安物買いの銭失いって」

「へー、じゃあそんな比企谷先輩に奢る以外での信用の上げ方をご教授してもらいましようか？ もちろん女子目線で」

「前提条件としてイケメンである」

「いきなり真理を出してきましたねこの人」

「女子高生なんて結局イケメンが好きなき物なんだよ」

「まあイケメン好きは大人数ですけど女子高生の全てがそれには当てはまらないんじゃないですか？」

そんなことを言いながらふつと矢向は微笑む。

「そんなどうでも良いことにこれ以上使う頭はねえよ。それよか俺は腹が減った。さつさと注文するぞ」

「そうでしたね」

矢向が手際よく注文を店員に伝える。

「比企谷先輩？ 今日は何を勉強する予定ですか？」

「とりあえず現国やろうかって考えてた。得意を伸ばすそれが俺の正義」

苦手はできれば一生無視して生きていきたい。

「そうですか、ならわたしもそうします」

「矢向よ、なぜに俺に合わせようとする？　ちよつと怖いんだけど」

「せつかく二人いるんですし教え合うことで理解力強化につながると思いませんか？」

「ああ、なるほどなインプットアウトプットで理解力をつけるってやつか」

「ザツツライト」

「わかった」

俺はカバンから勉強道具を取り出す。

流石に2人席で机の広さに限りがあるので参考書とペンシルと消しゴムだけの必要最低限だけを取り出した。

「そんじゃ始めるか。矢向、今回の試験範囲どこまで押さえてる」

「とりあえず試験範囲全体教科書読んで軽く頭に入れたくらいですね」

「なるほどな、それじゃこれは理解できたか？120ページの慣用句」

「慣用句の意味はだいたい把握出来てます。問題は古文ですね。読解するのに時間かかっちゃうんですね」

「古文はどれだけ読みこんだかで理解スピードが変わるからな。試験前までに時短見込めないなら試験では後回しにした方がいいぞ。先にすぐ解けるもの終わらせて焦らず



にゆつくり読めばいい。あとは敬語の単語覚えときやどうにかなる」

「そうですね。参考にします。比企谷先輩漢文は好きだったりします？　なんかパズル

感覚で私は好きなんですけれどね」

「あー、なんか読み方覚えると面白いよな」

「そうですね。ただ読んでるだけで楽しくて何書いているかさっぱりだったりするんですけれどね」

「おい、ちゃんと理解しろよ……」

そんな会話をしながら古文の読み込みをしていると、聞き覚えのある声がパーティーションで区切られた隣の席から聞こえてきた。

「……ヒツキーがいろはちゃん以外の女の子と居るよ」

「しっ、由比ヶ浜さん。ここは見なかつた振りをするのが優しさよ。もうすこし様子を見ようかがいましよう」

「ゆきのんそれって聞き耳立てるって奴じゃない？」

「由比ヶ浜さん。必死に勉強した甲斐あつて慣用句が使える様になつたからって私にその語句を述べるのは人間キが悪いわよ」

「ちよつとゆきのん？　私もしかして馬鹿にされてる？」

漫才でもやってるんかねこの2人

「いやもうばれてますからね?」

そう言つて俺は隣のパーティションを覗く

焦つてハワワとなんか漫画みたいなセリフ吐いている由比ヶ浜と、真顔で俺に目線を合わせていた雪ノ下先輩がいる。

「聞き耳立ててるだけでは飽き足らず覗きまでするなんて地に落ちたわね比企谷くん」

いやそんな真顔でいうセリフでもないですからね? なに言い切つてやったぞ感出して紅茶すすつてるんですかね?

「そつちこそ声かけてくださいよ。」

「え〜つと……邪魔しちや悪いかなつて思つちやつて」

「由比ヶ浜さん、嘘は良くないわ。ちゃんとやつてあげなさい、天地がひっくり返るほど驚愕の光景を目の当たりにして勉強どころではなくなつたと」

「それゆきのんが思っていることだからね!!! 野次馬根性出そうとしたのゆきのんだからね!!!」

「野次馬根性つて言い方が気に食わないわ。観察をしていたといつてもらつていいかしら?」

「全く意味変わつてないし!」

漫才コンビでも目指すのか? 息ピッタリじゃん。

「一色さんだけでは飽き足らずまさか2年生の先輩にも手を出していたとは……やりますねえ」

そう言つて俺と同じようにパーティションを覗きこむ矢向

ニューフェイスの登場に2人の視線は矢向に注がれる。

「あなた、矢向由奈さんね。私は雪ノ下雪乃。彼が所属している部活の部長をしてるわ。よろしく」

——やっぱり俺以外の生徒の顔と名前は覚えてんのね。国民的アニメのキャラクターであるあのメガネと同じで、俺の隠密スキルは生まれる時代が違えば天才と称されていたかもしれない。

「相変わらずゆきのんすごいなあ。初対面なのに顔見ただけで名前わかっちゃうなんてわたしできないよ。あつ、私由比ヶ浜結衣だよーよろしくねーゆーなちゃん」

初対面でいきなり愛称付けるとか距離の詰め方が間違つてると思うんだよな由比ヶ浜。どんだけリア充ポイント積みばそんなことできんだよ。

「お二方ともよろしくです。まさかあの雪ノ下先輩に名前を覚えてもらつているなんてちよつと驚きです」

「あーあれだ、雪ノ下先輩は全校生徒の顔と名前を一致させている超人だ」

「へえー、なんかウイ……すごいですね」

今ウイキペディアって言いかけたな？ 俺も同じ道を通ったからその気持ちは痛いほどわかる。

「それより矢向さん。先ほどあなた『一色さんだけでは飽き足らずまさか2年生の先輩にも手を出していた』と言っていたわね。それはこちらの台詞よ。なぜ一色さん以外のクラスメイトと比企谷くんが一緒に居るのか私たちには意味が分からない状況よ。先ほどまで私もすこし取り乱していたわ」

「あつ……ゆきのんのあれ取り乱していたんだ」

「いやまって。俺にも交友関係があるんですけれど」

そう言つてはみるものの、雪ノ下先輩や由比ヶ浜には相手にされず俺の反論は空気に消えた。

「矢向さん。彼に何か弱みを握られ無理矢理一緒に居させられているのだったら迷わず私に言いなさい、部長として部員の指導をするのは当然だから」

「ちよつと待つてくださいい雪ノ下先輩、なぜに俺が矢向を無理矢理連れ回しているみたいな言い分になってるんですかね？」

「そうですよ雪ノ下先輩」

そうだ矢向、お前は良い奴だ言つてやれ！

「えつと……その……こんな公共の場で……言え……るわけえ……ないじゃないですかあ

……」

矢向は両手で口元を隠し、頬を赤く染め瞳を潤しながら弱々しく呟く。

は？ こいつ何言ってるんだ？ ふざけんな!!?

その言葉と同時に雪ノ下先輩は侮蔑の視線を俺に突き刺す

「比企谷くんあなた……」

由比ヶ浜はうわあガチでこいつ何しちゃってんだよっていうあまり関わりたくない  
雰囲気を出しつつ、軽蔑する表情で俺の視界に登場した。

「ヒツキー……殺されるよ？」

誰にだよ。

「おいこの状況にした張本人。そろそろ場を正せ」

「比企谷先輩面白いですね」

「お前は俺が罵倒されているのを見て面白いという変態なのか？」

「すいませんお二方とも。今のはちよつとしたジョークです。状況を説明するのであれば私が比企谷先輩を誘ったと言うのが正しいですね」

あつ、そつかあ〜と由比ヶ浜がほつと一息ついたとき、俺たちが頼んだ料理を店員が  
持ってきた。

「それじゃ一旦俺飯食うんで」

「はい」

そんな会話を交わした後、俺たちは自分達の席に戻るのであった。

## # 17 — 3

「矢向、お前、ああいうのマジで止めてね」

今までの人生最大の山場を超え、ふうつと緊張を吐き出す。

「そうですか？ 結構面白かったんですけれどね」

そんな俺とは裏腹に、この矢向は何か面白がるように笑い声を上げている。

まったく大層なご趣味をお持ちだ。

「面白いを生け贄に俺の精神がすり減らされんだよ」

「そう言っておきながら実は内心嬉しいんじゃないですか？ ほら比企谷先輩って女の子にからかわれると喜びそうな顔してますよね」

「おい矢向、そこに正座しろ。お前が唱える八幡DM説を真つ向から論破してやる」

「比企谷先輩、こんな所で正座しろだなんてむしろDSなんですか？ というか私何されるんですか、別料金とりますよ？」

「……俺が悪かった」

別料金とか躊躇無く言うなよ。歌舞伎町に通い詰めてるキャバ嬢かよ。

バーニラ、バーニラ、こうしゅーにゅー。

バーニラ、バーニラ、こうしゅーにゅー。

こいつなら一定層のお父さん方々に人気が出そうだな。

いやむしろパパ活のほうが……って何考えてんだ俺。

「分かれればよろしい」

そう言いながらパクパクと美味しそうにドリアを食べる矢向。

美味しそうに食べるなど思いながら俺もナイフでハンバーグを切っていく。

「比企谷先輩はあれですね。ハンバーグとかステーキとかを食べる度に切っていくスタイルなんですわね」

スタイルって文言にすこしかっこよさと優越感の感情がわき上がる。

しかし俺はこいつより学年は同じだが年上だ。それに気づかれるのは俺のなけなしのプライドが許さん。

俺は少し短く息を吐き、ゆっくりと口を開く。

「それ以外にスタイルがあんのか？」

「最初に全部切っていくスタイルです。ちなみに私は最初に全部切るスタンスです」

確か小町がそのスタイルだわ。先に全部切っておいて後は食べるだけ見たいな感じ。

「ああ、なるほどな。そういうことなら俺は食べる度に切るな。先に全部切ったら空気に触れる面積が増えて冷めやすくなるからな」

「へえーそういう理由なんですわね。意外としっかりした理由があるんですね」



「まあ冷めやすいかどうかは知らんがな」

「なーんだ。適当に答えたんですか？」

呆れたような表情で矢向は俺を見る。

そりや適当に答えるに決まってるんだろ。

そんな事を律儀に調べるほど俺は神経質じゃねえよ。

「昔からの食べ方の癖だ。今更理由付けとかしても意味ねえだろうが」

「まあそうですね。カレーの食べ方も最初から全部混ぜる派と白米を残しておく派でわ

かれますしね」

「矢向、その話題は戦争が始まる。話にあげない方がいい」

「そうなんですか？」

何故かこの話題は各派閥マウンティングしてくるんだよ。

「きのことたけのこの戦争が終結したというのにまた別で争うなんて……人間ってそんなものね。」

「話は変わるんですけど、比企谷先輩は一色さん以外にクラスで親しい人とかいないんですか？」

正直一色ですらも親しい間柄なのか分からんがな。

「いねえよ。たまに相模が話しかけてくるぐらいだ」

「相模……??……」

どうやら矢向は相模の顔を無理矢理記憶から絞り出すかのようにうーんと眉間にしわを寄せ長い思考時間を要した。その経過時間が俺の中の相模に対する可哀想という感情を増幅させる。

相模よ、俺のステルスヒッキーの継承者はお前だったのか。

「あー、あのメガネ君」

思い出して何よりだ。よかつたな、相模。

危うく涙が出そうになった。

「もう少しいいあだ名考えてやれよ。メガネが本体だと思われちゃうだろうが」

「考えるほどの興味も無いので」

相模エ……どこまでも救われねえな。

\*\*\*

俺たちは飯を食べ終わったあと、勉強を再開させた。

うまそうに頬張る矢向の顔が印象的だった。普段はコンビニ弁当ばかりなのだろうか？ と老婆心がよぎってしまったが俺には関係ないことだと押し止めた。

1時間経過したあたりで流石にこれ以上居座るのは店にも迷惑だろうと考え、矢向の

同意を得て店を出た。

由比ヶ浜と雪ノ下先輩はいつの間になくなっていた。

いつの間に出たのだろう。

「それでは比企谷先輩、行きましようか」

「行くつてどこに？ 帰るのか？ んじゃあな」

「何言ってるんですか、私の家にですよ」

こいつ堂々と言いつ切りやがったな。お前男子高校生舐めすぎだろ。

どこの小悪魔女子もそんな言葉一言も発したことない言葉を言いやがって。

クソツ……クソツ!!

男子高校生はあれだぞ、その言葉聞いただけで混乱するんだぞ!!! メダパ二と同意語

なんだぞその言葉。

え？ マジで？ ちょっと心の準備がまだなんだけど……つて考えるな！ 感じろ

比企谷八幡!!! 状況の判別からあきらかに友人として……だ!!。ふう……俺じゃ無

きや確実に見間違えてたぜ……。つてかさ、まじで勘違い起こすから女子こう言う誘

い方ヤメロよ。なんだよ魔性の呼吸ーノ型カンチガイ!? とか言うつもりなの？ 世

の中の男完全にアウトじゃん。

「矢向、いきなり男連れ込むとかそれどうなのよ……」

「違いますー。比企谷先輩は通りますよね、私の家のコンビニ」

引つかかったなーって悪戯に笑うその顔……

こいつが男だったら超激辛ラーメン店監修カップ麺の付属の辛子ソースを顔面にぶちまけている所だったぜ。

「さあ行きましょう！」

「なに勝手に決めてんだよ。断るに決まってるだろ面倒くせえ、自転車こぐの俺だろうが」

「面倒くさいも何も通学路にあるんですからついでですよ。もしかして……意識しちゃってます??」

ニヤニヤした口を手で隠しながらもう片方の手で俺の腕をペシペシと叩く矢向。

マ、マジでうぜえ……べ、別にそんな意識するわけねえだろうが。

すると俺の中にいる軍師比企谷が俺に問いかける。

『八幡よ、お前は騙されたと分かかっていてもそれを受け入れるのか』

……そうだ比企谷八幡。俺はまだ終わってはいない。しっかりと冷静になり、周りの状況をよく見ろ。

矢向の言動を察するに確実に俺が断ることを見越して今この言葉を発したに違いない。



その声に俺は何があつたのかと即座に振り返る。

するとそこにはちよつとだけ頬を赤く染め、当たつた方の手をもう片方の手で隠している矢向が見えた。

「ああ、すまん。もしかして爪で引つ搔いちまつたか？」

「い、いえ。そう言うのではなくて。まあちよつと予想外の出来事だったので驚いただけなんですよ」

ん？ そうではない？ 触れただけでそれでこの反応。……こいつ……もしや？

「そうか、すまんな矢向、驚かした詫びにさつき言つてた手を繋いだら別料金つて奴乗つてやるよ。手握つてもいいか？」

「えっ？ ……い、いきなり何言つてるんですか？」

矢向が先ほどまでほんのり赤めだった顔をさらに濃くし、慌てふためく表情を見て確信した。

俺は鈍感でも難聴でも主人公でもねえただの一般高校生だ。

気がつかない訳が無いだろ。

なるほどなるほど。なんでもかんでも金を絡めてくると思つたらこう言うことか。

なかなか可愛らしいところがあるじゃねえか。

ふんっ……これなら一矢報いる事が出来そうだ。

「ほれ、早くしろよ、駐輪場までな」

そういつて矢向に手を差し伸べる。

そんな俺の余裕ある行動にどうやら矢向も気づいたらしい。これは茶番であると。

「比企谷先輩、そんなに私の好感度を上げたいのでしたら是非とも繋ぎましょうか。後で覚えておいて下さい」

そういつて矢向は俺の手をとる。

その手が触れた瞬間、俺の心が跳ね上がった。あるえ？ 想像と現実の振幅が大分

おおきい。やべえ柔らけえ!!!

理由はどうであれ俺の目の前の可愛い女子と手を繋いで歩いているのだ。

意識しないわけが無いんだ!!

しかも矢向が俺の手をがっちりと掴む。これは互いに指を絡め合わせたつなぎ方、俗に言う恋人結び。

男子高校生はこれをされると死ぬとすら言われているチート技をこいつはいきなりやつてのけたがしかし、俺にされているのは形はそれでも万力込めて握りつぶされている現状だ……しかし正直そんなに痛くはない。……いやうそ、結構痛い。

「ちなみに料金はうちのコンビニで人気のチキン・ハンバーグ弁当782円税込でお願いします」

それよりもちよつと冷たくて柔らかい女の子の手の手の感触で会話どころではない……しかし返さないといけないのでなけなしの気力を振り絞り回答する。

「なんかやけにデジヤブを感じる弁当だな。そして地味にたけえ……」

「賞味期限そろそろだったの思い出したんで」

「お前そんなもん売りつけるとかコンビニ経営者の鏡だわ……」

「そんなほめても値引きはしませんよ」

「ほめてねえから」

\*\*\*

「ほれ駐輪場ついたぞ。頼むマジで痛いから手離してくれない？」

「あら？ 先輩の初めては緊張でいっぱいでした？」

「言い方考えろアホ。力込めて握りやがって」

「それは愛の強さですよ。先輩」

そんな愛の力いらない、怖えよお前。

5分の間常に万力を込めて握られていた手に安息の時間が訪れた。つてか5分も万力込められるつてすごくね？こいつどんな体力してんだよ……2度と怒らせることは止



めておこう。

「先輩、これに懲りたらもつとうまく騙すことをオススメしますよ」

「それは善処するわ」

バレる前提で始めた事だしな。

「それよりほら先輩、自転車これじゃないですか？」

「……なんで俺の自転車しってんの？」

「私も普段自転車ですし。たまに帰りで先輩に遭遇した事もあるんですよ」

いやそれでもさ、普通何の興味も無い奴の自転車とか覚えないうね？ 先輩だから覚

えられていたとか？

もしかしてこいつ……俺の事好きなのか？

いやいやいや、ちよつと待て。

あれ俺って矢向にとつて相模と同じ部類だから興味無いから名前すら覚えられない

奴だと思っただが？

ん？ これはどういうことだ？

「先輩、ほら早く鍵外して自転車だしてください」

そんなことはねえか。つてか、呼び方が一色と同じになったんだが……多分俺は舐め

られているのだろうきつと。

挽回しようにも怒らせると怖いし下手に関わりたくねえ。

俺は矢向がうるさいのでさっさと鍵を解錠して跨がる。

間髪入れずに矢向が自転車荷台に跨がる。

「おいっ!? はええよ」

「おつとごめんなさい。我慢できなかつたです」

「どんだけ足疲れてんだよ。お前」

「……もしかして重いとか思いました?」

「そんなことは言つてねえよ。むしろこれくらい軽いわ。でもな、努力つて身近な人しか言つてやれないこともあるんだ。……コンビ二弁当は程々にな」

「それ重いつて言つてるのと同じ語ですからね」

「わざとだ」

「知つてます。実は羽のように軽いんですよ」

「お前、砂糖たっぷりコーヒーよりも自分に甘いのが、少しは現実みろよ」

「まあ、世の中は苦しい事ばかりですし、自分くらいには甘々にしてやりたいんですよ」

「それは同意だな」

それから俺は何も言わずさげすみ出した。

町中を照らす人工的な光が道を照らし、俺はいつもの通学路へと戻るように。

しばらくして矢向が口を開くが良く聞こえなかった。

自転車の走行時に声をかけられると耳のリソースががつつりと持つてかれるから正直あまりしやべりかけて欲しくないがそう言う訳にもいかず俺は「どうした？」と声をかける。

「先輩は、一色さんのことどう思ってるんですか？」

ぶつこんできた質問で少し言葉が喉に詰まる。

しかし、その言葉は男子にはよく聞かれているから俺はいつもの言葉をそのまま口にする。

「そうだな、まあもう一人面倒な妹が増えたって程度だな」

もはや脊髄反射で返したと言われても反論はできないが今の俺にはちようど良い回答ではあったのだが

「……それは本当ですか？　じつは意識しているとか照れ隠しとかじゃないですよね？」

後ろから聞こえた、先ほどとは違う真面目な声色に俺は自転車のブレーキをかけざるを得なかった。

そして完全停止した自転車で姿勢を固定しながら後ろに顔を向ける。

すると、俯いた状態の矢向の姿が見て取れたがその表情は街灯の逆光で暗くよく見え

なかった。

「……やけにつつかかるな？ 俺と一色は特になんでもねえよ」

「そうですか。でしたら……」

矢向は俺に目を合わせ、何かを飲み込んだ。

潤んだ瞳を俺に見せ笑顔をみせ矢向は言葉に出した。

「学校での楽しみがまた一つ増えた気がします」

「ああ？ なんか全然よく分からんがまあ楽しみが増えたのなら良いんじゃないか？」

冷静に返したが、俺の血が厄介ごとの危機を察知し騒ぐ。

また面倒なやつに目を付けられたのではないだろうか。

俺のあしたはどっちだ。

そんな事を考えつつ、憂鬱にまた自転車を漕ぎ、家路へとついた。

## #17-4　そして一色いろはは原点回帰する。

せんぱいが言うベストプレイスから逃げ出したあと、トイレへと駆け込んだ。

そこでわたしを襲ったのは物凄い後悔だった。

ふと無意識に呟く。

「私、何してんだろう……」

呟いただけで反響する室内に驚き瞬時に口を手で塞ぐ。

その後、無音が続くトイレ内に誰も人がいないことに胸をなで下ろしゆつくりと塞いだ手を口から離した。

あー、せんぱいに絶対面倒くさい女とか思われてるんだろうな。

あの男子のことなら何でもござれ、余裕のいろはちゃんはどこに行ったんだろう。

今回矢向さんとか関係なくてせんぱいが私を完全にアウトオブ眼中だったって事がすごく腹立たしかった。

せめて1度くらい私の名前をあげて欲しかったのに先に矢向さんでちゃうし。意気消沈しちゃう。

私も私でそれで腹立てて八つ当たりだし……えー、私こんなにも面倒くさかったっけ

?

ってか、なんで私せんぱいにアプローチし続けてるんだろ。

いままで私、自分でアプローチせずとも男子は寄ってきたよ？

うーん……そうやって何が原因かの思考を巡らせるとある1つの真実に行き着いた。

私のおじいちゃん是一般人だけれど多分じっちゃんの名にかけてこれだ！

そうだ。せんぱいが貸してくれたあのライトノベルだ。

あれらは主人公はヒロインを誘うなんてことはあまりせず、常にヒロインが誘ってくるっていう展開が多かった。それをせんぱいの攻略本と錯覚して私から行かなくちやつて思惑に取り憑かれていたんだ。

なるほど、これはいわゆるマインドコントロールって奴ですか……

いつの間に……せんぱい、やりますね。

って、そんなわけないですね。おじいちゃんが名探偵だったら1発で当てることのできるんでしょけれど流石に一般人のおじいちゃんの名をかけても真実は霞んだままでした。

はあ……考えに余裕がなさ過ぎてすぎてトンデモ理論を展開してしまいましたね。

まあでも、よく思い返してみれば教室では話さないにしても結構せんぱいを追っかけて回している節がありました。

お弁当とか作ったりして味見させたり、奉仕部に入り浸って依頼手伝ったり……  
冷静に考えてみるとちよつとやり過ぎた感じが……かまってちゃんですか……私。  
流石に少しだけ距離を持った方が良いかも知れないですね。

多少の距離感を持って接すればせんぱいも私を意識するのでは？

男子つて1人の時間が欲しい時があるつて雑誌に書いてましたし。

それに、最近の私、せんぱい専属みたいに思われているから他の男子とかと遊びに行つてないんですね。

だからせんぱいは危機感が薄いのかも知れませんが。

ここは原点復帰です、たまには部活以外で他の男子との交流もあるんですよーつて見せつけてせんぱいに危機感を煽ってしましましょう。

そうしたら……意識してくれるかな？

## # 1 8

季節は梅雨を抜け、文月。

期末テストが終わり、あとは夏休みに向けて日常を謳歌するのみ。

濃緑色の葉が吹く風に揺られ、擦れ、音を奏で夏を感じさせる。

傾いた太陽の日の光に当てられながら俺は玉のような汗を拭いながらグラウンドを駆ける。

あくくつそ……久し振りに遅刻したら

平塚先生がいるとか聞いてねえし。担任病欠ってなんだよ。

しかも罰でグラウンド走らせるって……昭和かよ。

寝坊してもうちの担任はあまり何も言ってこないから余裕持って遅刻したというのに

これは計算外。

とりあえず気づかれぬ程度にちよつとずつペースを落として少しでも負荷を和らげよう。



つてか100パーセントの雨女がゲリラ豪雨とか降らせてくんねえかな。  
いまから、降らすよ！ 土砂降り☆浸水☆大洪水!!

やっぱり普通の雨で勘弁して貰っていいですかね？ 駄目？

「比企谷、あと3周！」

「フアイトー！」

「せんぱーい、がんばってくださいーい」

聞き慣れた声が入ってくる。

そうだ、放課後というのもあり、サッカー部も練習を始めている訳で、冷やかに一色と葉山先輩とその他よくわからない面々が俺を応援してくれる。

ありがとこれで勇気百倍ハチマン。

……語呂悪いな。

つてかそんな大声で俺の名前叫ばないで。

心が叫びたがっていても叫ばないで。

なんか葉山先輩いるせいで他の奴らもなんやなんやって集まってきてるからっ！

理由聞かれたら恥ずかしいから！ 遅刻なんて言えない！

「比企谷、ペースが落ちてるぞー！」

そんな事を考えているとどうやら平塚名誉指導官に

ちよつとずつペースを落としていたことを見抜かれていたようだ。

なんだよこの人、どんだけ俺の事好きなんだよ。ハートマン軍曹かよ。

別の仕事しろよ。あるだろ？ ラーメンレビューとか婚活とか。

そう思いながら俺はボツチマラソンを最後まで走り通した。

結局最後まで100パーセントの雨女が現れることが無かったことに現実の厳しさを目の当たりにし、絶望した。

やはり迷信は迷信だな、しかし俺はきつといると信じるぞ。

なぜなら絶対零度の雪女は身近にいるからな！ ガハハ

……おっと、変なこと考えるとまたサトラレる。

「はい、せんばーい。タオルですよ」

「ああ、すまんな。助かるわ」

そう言って一色がタオルを持ってきてくれた。

さすがサッカー部マネージャー。あれ？ サッカー部の備品使っているの？

そんな俺の表情を見抜いたのか一色が嬉しそうに口を開いた。

「あれだけ汗だくで走っていてさすがに可哀想だなあ〜つて、できるマネージャーはそこが違うんですよ？」

「あー、はいはい、あざといあざとい」

「むっ？　なんですか、せっかくの人の厚意にそんな返し方って酷くないですか？」  
……たしかに。例え偽善であるにしても厚意にその返しは適切では無かったかも知れないな。

「そうだな。すまん」

「傷つきました。すつごい傷つきました。あー、ケーキ食べたくなくてきました」  
「一色、お前そういう所だぞ」

\*\*\*

走った後いつもなら教室でさくつと着替えるのだが、校舎棟の自分の教室をグラウンド側から確認すると、まだ話が絶えない放課後フレンズ達が教室を占拠し、談笑する声がかこまで聞こえてきたので教室で着替えるのは若干気が引けた。

仕方がないので体育館の更衣室で着替えることにした。

なんか、視界の片隅に夏が始まっているにもかかわらずコートを羽織り季節感は無視した奴がいたが、俺には関係ない事だし気にすること無く更衣室の扉を開く。

更衣室の扉を開くと酸っぱいのも、汗臭いのも、デオドラントやフレグランスやさまざまな香りが入り交じった香りの闇鍋かとも思わしき空間に躊躇したが、覚悟を決めて

入ることにした。

着替えている最中に、また扉の開く音がし、視線を向けるとどうやら別の奴が入ってきたようだ。

「ぬっ？ 貴様は比企谷八幡ではないかっ！」

あまりにもわざとらしい偶然を装った言葉を口にし、振り返ると奴がいた。

バサツと夏という季節を無視したコートををはためかせたがたいのいい小太りなメガネ。

正直関わりたくない奴だ。

久し振りすぎて名前が曖昧だが確実に絡むとめんどくさい奴だというのは思い出した。

なんて名前だっけか？ 雑貨屋？

「あー、誰でしたっけ??」

「そこから!! そこからの!?!」

なぜにそんなにフレンドリーなのかはおいておいて、こいつとはあまり関わりたくないのだがなあ……

「フフフ……では名乗るとしようではないか我の名は剣豪將軍よ！」

「もう最初から名乗る気ないじゃん。そんじゃ」

着替えも終わったことだしさっさとこの場から去ろうとしたら服の袖つかまれる。

「ああ〜っ……ごめん！　ごめんってば八幡！」

「いや、フレンドリー過ぎだから。ってか、正直あまり関わりたくないんですけど……材木座」

「ふむ……まあそう言わずに話を聞いてくれないか。前の件はさすがの我も本当に申し訳ないと思っっている。あの後、さらに川崎氏にもずつと説教され、私のHPはゼロなのだ」

途中から材木座がカタカタと震えだし顔色が悪くなっていた。

「おいおい、もしかしてPTSDになってねえか？　川崎先輩めっちゃこええ。」

「それは終わったことなんでもういいですけど。ちゃんと謝って回ってみたいだし」

一色には気持ち悪がられていたけれどな。

「まあそう言うでない。我もすっかりと詫びをしたい。ので、どうだこれからここに行くのは」

そう言っただけで材木座が出したチラシはなかなか布の面積が少ないメイド衣装を纏った女子のチラシ。

いわゆるメイドカフェのチラシだ。

メイドカフェえんじえるている？ アキバではなくて千葉にもあったんだな。メイドカフェ。

しかしそれがどうした？ ふーん、へえうって程度だ。

それで？ 親睦が深まるとでも？ んなわけあるかよ。

お前といるだけで俺の精神がゴリゴリ削られていくのだ。

正直あまり乗り気ではない。

「無論、我のおごりだ」

「しつかたねえくなく。詳しく話を聞こうか」

そりやあね。乗り気ではないにしても、奢りまでしてくれる覚悟を決めてるんだつたら話は別だ。

普通メイドカフェって他より料金高めじゃん？ 普通に料金払うなら行かないが、

こう、奢りって言われるとそりや行きたくなくなるよな。だつて華の男子高校生だぜ？

女子に対して好奇心は普通にあるだろ。

だつて華の男子高校生なんだからな！ 大事なことだから2回言った！

「現金だねー、君」

こいつにどう思われようと気にはしない、あと俺が気になるのはその店のサービスとキャストの外見の良さだ。俺はじっくりとそのチラシのキャスト一覧を覗く。

「さて、善は急げよ戦友！ いぎ、かの地に参らん！」

バサツとコートをはためかせ天井に指を指しながらそう言った。

……他に人がいなかったのが不幸中の幸いだ。

\*\*\*

奉仕部の面々には個別依頼が来たと適当抜かしたがなにやら機嫌が良かったのか手伝おうか？ と雪ノ下先輩にはあるまじき後輩を思いやる優しい返信。

しかし材木座の名前を出すと急に忙しくなった。やっぱりひとりで解決して欲しいと連絡を一方的に切られ、その後由比ヶ浜に送ってみたが完全に無視された。

さっきの俺の感動を返せ。

さて、遠回しで単独行動の許可も頂けたことだしメイドカフェへ馳せ参じたのだが、待っていたのはお帰りなさいご主人様ではなく

「おいあんだ。あたし、くるなっつていったよね？」

「ひっ……か、川崎氏」

気合いの入った睨みをきかせ、ヤンキーよろしく特攻の拓なちよつとこわ目の癖してわがままボディなメイドさんに襟首捕まれて構って貰っている材木座。

おいおい、いきなりキャラの強いメイドさんがきたじゃねえか。

ゾクゾクするぜ。

勢い余ってブレンドS頼んじやいそうだ。

つてか、川崎サキサキ先輩じゃねえか、こんな所でバイトしているとか……まじで意外すぎる。

サキサキ先輩は丈の短いスカートとどことは言わないがやけに強調されるメイド服を着ていた。いやはや眼福である。

前回初めて会ったのが奉仕部にいた制服姿からのギャップが激しい。

まさに俺の望んだメイドそのものだ。

俺が女だったら多分髪入れず『はううううう!!! おっ持ち帰りー!!』と叫んでいる所だ。

「つてかどうした材木座? それサービスだろ? なに顔青くしてんだよ?」

「あ、あ?」

ガチで睨みをきかせたサキサキ先輩の眼光にかなり恐怖を感じて動けなくなった。なる程、睨みつけるってたしかこんな効果だったね。

もしかして? ガチでオコ? なんで?!

「……ああ、あんた。比企谷ね。まさか本当に連れてくることある?」

何を一人で納得しているのかよくわからない。

サキサキ先輩はため息を深くつきながら頭を搔く。



「はい、比企谷です。とりあえず状況がよく見えないのですが」

「は？ もしかして材木座から説明何も説明されてなかったりする？」

「説明とは？メイド無料堪能としか聞いてないですよ？」

「はあ……やつぱり」

えつなに？ なんかまずつたの？

「あたしが言ったのはこの店に一緒に来れる仲良くなれた友人がいたら来ていいって言ったくらいだよ」

「なぜだ？ 八幡では不満か？」

「そうじゃなくて。あんたさ前に比企谷に結構迷惑かけたでしょ。よく誘えたよね」

そうそう、材木座わかる？ お前に迷惑かけられて実はもう関わりたくない奴なの

よ、半径200m以内に近づくなどと言われるレベルだから。

それにしても状況を察するに二人の間で取引があつたと考えていいよな。

しかしサキサキ先輩も酷なことを言うよな、俺が材木座とそもそも友人になるわけが無いだろ？ なるる奴が希少種だ。

そんな感じに結論つけて口論する二人をまじまじと観察すると、疑問が出てくる。

それにしてもこの2人の関係がよくわからん。

なぜTHE痛い厨二病野郎との組み合わせが成立しているのだ？

そうだ、奉仕部にいた時もサキサキ先輩は材木座を庇っていた。いややっぱり……俺は以前俺が考えた恐ろしき事実を思い返す。

実は材木座、実際のリア充レベルは俺より遥かに上って事だったり……。

えっ？　そういう事???

「つてかですね、ずっと不思議だったんですがお二方どのような関係で？」

俺は恐る恐る思い込みと事実の齟齬を取り除くべく確認に入った。

これで俺の考えた通りだったら俺は人間を辞めて究極生命体になってやる。

「どうもこうも……何というか……妹の誘拐犯」

俺は即座に携帯を片手に用意していつでも緊急連絡出来るように用意した。

既に乗れ越えてはいけなくところまで乗り越えてやがったのか。

恐喝か脅迫か人質か……どっちだ？

「ケプコンケプコン……川崎氏??」

流石の材木座も素で返した。こいつ素があるんだな。どうでもいいけど。

「あー……比企谷、冗談だから」

少しはにかむようにサキサキ先輩が返す。さっきのドスのきいた声では無く笑い気混じりだ。

なんだよいちゃいちゃしやがって、110じゃなくて119呼ぶぞああ??

「まあ、こちらにも迷惑かけたしな。今日だけだからな」

そう言つて店の端つこの、とつても人気の無い席に案内される。

どうやら知り合いが来たとき様に解放する席みたいだ。

人も疎らで他のキャストらが他の客の対応をしていた。

どうやらまだサキサキ先輩は俺らの専属でいられるみたいだ。

「話戻すんですけど、結局は何関係？」

「正直あまり喋りたくはないんだけど……あんたには迷惑かけたしね」

いや、サキサキ先輩じゃなくて迷惑かけたの材木座ですからね？

責任感じる必要はみじんもありませんからね。

興味あるから言わないですけど。

「一応あいつさ、前も言つたけれどあたしを救つてくれた奴なんだよ。まあその恩つて

のもあつてさ……あいつがやらかした時は味方になつてやろうつて決めてたんだ」

そんな甲斐性があつたなんて今でもとつともなく信じられんのだが。

そんな俺の考えを見透かすようにサキサキ先輩は言葉が続ける。

「まあ、そんなカツコいいことをした訳でも無くただパソコンで検索しただけなんだけ

れどね」

「ふんっ！ 我は親戚からパソコンの大先生と呼ばれておるしな！」

それ別に尊敬とかの意味じゃなくて蔑称だかんな。

「それでもこいつのおかげで稼ぎ方を見つけられたし……あと放課後できる稼ぎのいいバイト紹介してもらったしな……ちよっと恥ずかしいけれど……な。」

そうか、サキサキ先輩は言葉は知らなかったのだろう。

知らない言葉はグーグル先生でも検索かけられないからな。

それを見つけてやったのが材木座って訳か。

まあなんとというか。……このバイトを紹介した所はマジでやるじゃん。

「ちなみに稼ぐって何やったんですかね今流行のクラウドファウンディングとかつすかね？」

今後俺のお小遣い稼ぎの参考とさせて貰おう。

「それもあつただけけどあまり興味が湧かなくてさ。今やってるのはフリマと有料ノートパッド」

「有料ノートパッド?? なんですかそれ?」

「あたしさ、これでも手芸が得意なんだけど。そのノウハウを有料にして売ってるんだ。1冊200円くらいなんだけれど」

なるほどな、生産スキル持つてる奴は流石だな。

フリマで生産物売り、ノウハウをノートパッドで売る。

ノウハウの方は電子データだから在庫を気にする必要がない。  
いい商売だ。

「クククツ……金に目のくらんだ亡者をまた一人作ってしまったわ」  
「気に入らない名前つけなくてくんない？」

凄みのある睨みを材木座にきかせる。効果抜群だ。

「……で、そろそろ新しい奴。料理のノウハウもあげようと思ったんだけど」  
へー、この人料理もできるんか。もうかあーちゃんだな。

「料理のレシピピってどこにでも置いてるからさ。それだったら動画にしたらどうかなって思ってたってみたんだ……」

そう言って持っていた携帯の画面を俺に見せてきた。

普通こう言う接客業の時って携帯って持ち出してよかったんだっけ？

店にもよるか。

そこに映し出されていたのは首から上は編集でカットされていて誰かはわからないが

とりあえず、知っている人から見るとサキサキ先輩とわかる程度だ。

ただ……エプロンの縛りがきつめなのか、やけに身体のラインが強調しているのはわざとだろうか。

気になる気になる。どこがとは言わんが。

しかしこれだけは言える。これはれっきとした『料理をしている動画』だ。ふむふむなるほど。ふうん、えっちじやん。

ポリューミーな料理動画だな。八幡お腹いっぱいだよ。

うん、俺が確約しよう、これは売れる。

誰にとは言わん。

「これすごいですね」

改めて言おう、どこがとは言わん。大事なことだから以下略。

「結構緊張したんだけど美味しく作れたから大分満足。売れると思う？」

気ついてないのか？ 天然か？

「あーうん、すごい勢いで売れるんじゃないですかね」

「そっか、それじゃ出して見るか」

そう言つて、少しはにかむような顔で携帯をしまう。

なんだこの人、可愛いな。

「我は反対だ」

「つはへ。」

先ほどまで、金の稼ぎ方検索しただけ天狗になっていた材木座が

サキサキ先輩の意見に反対してきた。

厨二病こじらせるとな、反対したらカッコイイって価値観あるよな。俺もわかる。レジスタンスとかカッコいいよな。

しかし、むやみやたらに反対するのはどうかと思うぞ？

「川崎氏よ、貴様は国公立の大学行くのだから？ となると2年とは言えそろそろ受験の為の勉強もせんといけぬこの時期、動画制作はかなり時間を要すると聞いたがそんなものうつつを抜かす余裕をもっておるか??」

ん？ 材木座と疑わしき真面目な正論だな。

サキサキ先輩がうつとちよつとたじろいでる。

まあ国公立行くなならそれなりに塾とか通わないといけないしな。

「先日の期末試験、旗色が悪かったと町田氏から聞いておるが、その動画を作っている時間が原因なのでは無いか？」

「……」

「当時たしかに金に困っていたおぬしに稼ぎ方を教えたがそれが目的となつては元も子もないぞ。目的と手段をはき違えるでない。あと……町田氏も心配しておったしな」

なんでこいつ検索しただけなのにこんなに偉そうなんだらう、真面目な雰囲気なのに全然のめり込めねえや。

ってか町田さんってまだ他に隠し球持つてんのかよこいつ。

どうやったたらそのオタク童貞臭い言動でそんなにリア充になれるの？

教えてアロエリーナ。

「そっか……町田さんが。……ごめん、あとでちゃんと謝っておく」

「強くは言わん……が、ほどほどにな。時間は有限なのだ」

「うん、そうだね。ありがとう」

材木座……もしかしてこいつ。

町田さんって人に依頼されたから自身でもあまり関わりを持ちたくないであろう俺を誘い、さらに来るなと言われたたこの店に来たのか？

ふむ……事情はありそうだが、まあ、俺には関係ない事だし別にいいか。

「よし、これで私の用事はすんだ。さて八幡、帰るか！」

……さて、なに全て終わった感だしてんのこいつ。

これで終わるわけねえだろ。

「なに言つてんだお前？ 今日財布の中身スツカラカンになるまで堪能させて貰うに決まってるんだろ、ってかその覚悟できてんだろ？ 財布の中身は十分か？」

「ふええ……」

「そうだった。それなら遠慮せず頼んで欲しい。最近お小遣い入ったって言ってたか



ら

涙目の材木座を無視し、俺は容赦なく10000円のメガドリンクと指命料込みでメイドさんのチエキを頼むのだった。

## # 19 — 1

夏休みまで10日を切った。

昼休みの教室では皆が予定を確認し合い、あるものは歓喜を、あるものは絶望をしていた。

俺はというと机に伏して狸寝入りを決め込み、空調の恩恵を受けている。

今の時期、さすがに外暑いね。

するとどうだろうか、隣の席で何人かのグループが座る椅子を引きり動かす音が聞こえた会合が執り行われた。

「おい、海行こうぜ海！」

「ムリムリムリ、暑いし人多いし焼けるし何より泳げねえし」

「女子かよ……、んじゃ山？」

「つてかメンツによるよな」

「矢向さんどう？ 海か山」

「うーん、家の手伝いが忙しいからどこも行けそうにないなあ」

「あーまじでじま？ んじゃ行くのやめようぜ、しゅーりよー」

「ちよつと男子く、うち誘われてないんですけど」

「あ？ そりや可愛いとその他で優先順位変わるだろ？」

「はあ？ サイツテー」

「なんだよかまつてちゃんかよ」

「つてかさー、ゆーなつてほんと大変だね。夏休みほとんど家の手伝いなんでしょ」

「うん、でもまあいつもの事だから」

「ほらほらあんたらも遊びにかまけてないでゆーな見習いな」

「矢向さん、一生俺を養ってください」

「えっ、無理」

そんな雑談が耳に入ってきた。

どうやら話あつてるのは矢向達のグループのようだ。

『世界は誰かの仕事でできている』という昨日のアイカツなアニメが始まる間際にやっていた缶コーヒーのCMを思い出させた。

ふう、マツ缶飲みたくなってきたぜ。同じジョージアだしな。

マツ缶で今日もポツチの仕事が捗るぜ。

俺がポツチでいることで他の奴に友人を与えられてやれる。

俺はそんなところに幸せを感じるんだ。

……やべえ本当に欲しくなってきたじゃねえかマツ缶。  
買ってくるか。

そう思い伏していた体を起こし、席を立とうとした。

「つてかさーねえねえ、比企谷くん。比企谷くんは夏休み何する予定？」

俺の隣の席に座っていた女子にいきなり質問された。

あまりにも突然すぎて頭が真っ白になった。

「ぶっ、どうしたの比企谷くん？ ガチ寝してて寝ぼけてる？」

「あ、ああ。すまん寝ぼけてたわ」

「そーなんだ、ウケるー」

そう言つて彼女は俺から興味を無くし、矢向達がいるグループに視線を戻した。

まあ俺が何を回答しようと彼女には関係ない事でその場での会話のスパイスが欲しかったのだろう。そのスパイスが味気ないと判断したのか俺を即座に切り捨てたその判断力はさすがだ。

……俺ちゃん泣きそう。

「それで……？ 夏休み何してるんですか？」

ねえ、矢向ちゃん？ なんで終わったことを振り返すの？ もう会話終わったよね？

俺マツ缶買いに行きたいんだけれど。

ニコツとした微笑混じりの表情で俺の回答を待つ。

その表情に少しだけ鼓動が早まる。

うん、N o ロリコン、俺。

この場合はあれだ、小町をだしに適当な事を言っておくに限る。

「あれだ、妹の勉強見てやるって約束しててな」

嘘は言っていない。

「つまりは夏休み暇って事ですな」

一瞬で見抜かれたようだ。

「ちげーよ、ちゃんと部活もあんだよ」

「比企谷くん部活入っているの？ えー何部？」

さきほど興味を無くした女子がどうやら部活というワードに興味を示したらしく、い

きなり会話に入ってきた。

「ああ、奉仕部って部活なんだが」

「あー!! 前に一瞬だけ流行ったあの美人な先輩がいる部活!」

「マジで! 比企谷さんマジで!」

美人な先輩がいるってことに話を聞いていた野郎達が反応した。

うん、相模が先輩先輩言っているせいで俺に対して敬語で接すればいいのか同級生として接すればいいのかわからない感出してよね君。

「そういえば、比企谷くん呼び出されてたよね。確かあー、雪ノ下先輩だっけ。あーなる程、あの時なんでかなーとか思ってたんだけれどなんか繋がったー」

「そうそう、ちやつかり弁当食べてたし、めっちゃ羨ましかった」

「でもでも雪ノ下先輩、結構毒舌って噂だしね。」

よく知ってるじゃん。矢向。

ただ本人の前でいうなよ、コテンパンされるからな。

「ああ、まごうことなき事実だな」

「えっ、マジで」

「ああ、俺いつでも侮蔑の言葉並べられてるしな」

「へ、へえ。こわっ。」

「やべえ、ゾクゾクしてきた」

あつ、1人なんとは言わないけれど才覚がある奴がいるようだ。

彼は雪の女王にどれだけありのままの自分をさらけ出せるだろう。

「つてかさ、つてかさ」

さつきからこいつは「つてかさー」を入れないと喋れねえのか？　なんだよつてか

さーって、ピクサーの親戚かよ。

彼女は周りをキョロキョロと確認し、少し声のトーンを落として俺にこう言った。

「ずつと気になってたんだけど比企谷くんって一色さんと付き合ってるの?」

……噂になってるしねー聞かれるよねー。

「あー、それな。一色さん彼氏いるって噂なってるしな〜」

続いて野郎の方がその話題についてくる。

最近、この系の話題は安易に否定しないほうが効果的であることに気づいた。

「お前らがそう見えるなら多分あいつの術中にハマっているぞ」

「えっそうなの?」

「ああ、あいつ他からどう見えるかを操る天才だからな」

適当には答えた。

しかしその効果は男子には効果てきめんではあるが、女子のヘイトはガンガン取っていく。

ステータス極振りすぎんだろ。

「えー、ならなんで比企谷くんなの?」

「一番扱いやすいんだろ。知らんけど」

入学当初からよく分からん依頼に振る舞わされているのが事実だが、まあそこを離す

と面倒くさい事になりかねんからテキトーに誤魔化した。適当とテキトーの使い分け大事だろ。

「ふーん、じゃあ比企谷くんはフリーなんだー」

おっ？ この会話の流れラノベで読んだぞ。

この後「じゃあ私、彼女に立候補しちやおつかなく？」とか言っただけなんだろ。

まあ考えてやらんこともないが、こんな友達の前で言われるとちよつと八幡恥ずかしい。

「つてかさー、なんで比企谷くんずっと立ってるの？」

マジかーここであつてかさーが入って来るんかい。

「いや、飲み物買いに行こうと思っただけなんだが……」

「あつそうなんだ。いつてらー」

そんな軽い声におされ俺は彼ら、彼女らのグループから抜け出し教室を出た。

\*\*\*

校舎から出るとすさまじい熱気が俺を迎える。

一瞬だけ空調で少し肌寒かった肌を温める役目を担ってはくれたもののすぐに暑さ



の方が勝り、汗はまだかかずとも暑いという感情を湧かす。

その暑さで冷却装置の駆動音がいつもより1.5倍マシマシチョモランマな駆動音でCO2を排出しているSDGsガン無視の古くさい自販機でマツ缶を買う。

そのおかげもあつて今日も俺はキンツキンに冷えたマツ缶を今日も買えるのだ。

さて、いま教室に戻るとまだあいづら陣取つていると思うから少しだけ時間をおいておくでしょう。

正直ああいうノリの会話はたしかにできるが、相手する人数が多すぎるんだよな。

んで帰ってきてまた会話に参加しようとする。「おつ、おう………? えつ、お前との会話もう終わったんだけどなんで入ってくるの?」みたいな微妙な空気と女子のヒソヒソプークスクス話に花を咲かせるところまで予測済みなんだよ。

なので俺はせっかく外に出たので昼休み終了間際まで適当に過ごす事にした。

普通ならここでベストプレイスに行くところなのだが、昼休みの残された時間も残り3分の1程度、正直そんなにゆっくりはできない。

というわけで教室棟と特別棟を結ぶ渡り廊下の休憩スペースを利用する事にした。

空調も効いてるしまあ周りの雑踏さえ気にしなければ居心地はいい。

たまには雑踏の中に身を寄せ読書をするのも悪くは無いと後ろポケットに収めていた文庫本を取り出す。

すっかりとブックカバーもしており、傍からはさも図書館で借りてきた本を黙々と読む優等生のように見えているだろう。

……ちよつとまて？ 比企谷八幡よ、何故その思考に至った。

それではまるで一色ではないか。

特定の異性に気を引いて貰いたいのが故にイタい行動なぞ既に卒業済みだ。

今回は特定などいなかった。何故そんな事をしでかした。

俺はそこを考える。

そういえば一色とはなんというか付き合いが長いな。染化されたか？

人との付き合いは常に真似がつきまとう。

それは当然で母親の真似をして子が育つ様に、真似は悪い事ではない。人が集団生活していく上で必要な事なのだ。

漫画のカッコイイキャラに憧れて現実でも取り入れた厨二病も染化のもつともたる事例だろう。そう悪い事ではないのだ。全て自分にはねつかえってくるけれど。

今回はそんなモノとは毛色が違うと判断した。

なぜならば無意識で行動を起こそうと思ったところだ。

先ほどの話の場合は最初確実に意識しないと行動が起かせない訳であって……

結果を出すためにこれしなきゃな……面倒くさいけれどやるか……

とかな。それを積み重ね立派な社ち……社会人を生み出すのだ。

つまりは無意識中で俺にこの行動をすり込んだ奴がいるというわけだ。

……誰がどう思っても一色しか思いつかないんだが。

いつ仕込まれたのだろう。

俺には全く身に覚えがない。

つまり何が言いたいかというところ。

一色さん、パネエ

「あれ？ ヒツキーだ、めずらしー」

そんなどうでもいいことを考えている最中に声をかけられる。

ふむふむ、希少生物ヒツキーがいるらしいな。

名前からして引きこもりのヒキガエルに似たツラをしてんだらうな。

どこだどこだ？ ……って誰がヒキガエルやねん。

「うわあ……キシヨい」

由比ヶ浜は何こいつ気持ちワルって言わずともわかる表情をしていた。

まーた人の心読んだな？ そういところだぞ由比ヶ浜。

「そういえばヒツキー最近さつ、いろはちゃんとはどうなの？」

なんで一色のことを俺にきくんだ？ 俺あいつの保護者じゃないんですけど。

てか女子同士なんだからお前の方が状況は知ってるんじゃないの？

「いや、特にはなにもないが……ってか最近はおとなしいな、俺もたまにしか喋らん」  
ちようど材木座とメイドカフェに行ったときだ。

前にグラウンドを走らされてた時にタオル渡されてそれつきりだ。

それ以来喋ってねえな。

ってかタオル返してねえ。

「どうしたんだろうね？ 最近全然奉仕部にも顔出さなくなっちゃったしさ」

由比ヶ浜よ、一色は他に部活あんのに週4回も顔出す方がおかしいと思わなかったのか？

「サッカー部が忙しいんだろ、そろそろ夏の大会もあるし結構忙しい時期だと思うぞ」

「そうなのかな、いろはちゃんとあつたら今度遊びに来てねって伝えておいてね」

「ほいよ、了解」

「あとさあく、今日ちよつとだけ放課後……時間……ある？ 一応、ゆきのんにも話してるんだけど。あとはヒツキーに聞いて貰いたいんだけど……」

座っている俺に対し、由比ヶ浜はしゃがみ込み目をあわせ……いや上目づかいで俺をみながらそんな言葉を吐く。

ん？ なんだ由比ヶ浜、その意味深な発言は？ 最近訓練されてきてそれぐらいじゃ

俺の心は動かなくなってきたぞ。

「まあ……そうだな、小町と家で遊ぶ予定があるから……」

「つて事は実質ヒマって事だよな。ならさちよつとだけ付き合つて貰つてもいい？ そんな時間もかからないしさっ」

なっ?! どこで習つたか知らないが上目遣いの視線を合わせないようにを下に避けたと思つたら、2つのメロンが待ち構えていやがった。いやはや思わず鼻と口の距離が伸びるあっぱれな戦略よ。二重の極みとはまさにこのこと。フタエノキワミアー!!

いきなりヒマって決めつけるのはよくないことだぞ？ まあ確かにヒマなんだがな。

「……おう、わかつた」

「ありがとっ！ それじゃあ放課後ね！」

「結衣ー！ 次の授業遅れるし。」

そう言つて由比ヶ浜を急かすのはあの三浦先輩だ。

あいかわらず世話焼きである。

あの眼光も愛と捉えたら怖くない……いややっぱり怖い。

「あーっごめん優美子、それじゃね、ヒッキー」

そう言つて俺に手を振り去つて行く由比ヶ浜

俺をその背を見送りながら少し一色の様子がおかしいことに気づいたが、きつとお月

様の日なんだなって事で結論付け昼休みが終わる手前までマツ缶とラノベを堪能した。

## #19—2

傾いた日は橙色に辺りを染め、1日がグラウンドフィナーレに向けて進んでいいことに視覚を持つて思い出させ哀愁という感情を呼び起こす。

しかしそんな哀愁の感情も夏の気温ですぐに引っ込んでしまう。

気を紛らわせようと適当にダウンロードしてあまりやってないソシヤゲを起動させる。

こんなピコピコやってねえで早くお家に帰ってクーラーに当たって小町とゲームしたい。

そんな事を考えながら校門で待つ。

「お待たせヒツキー」

小走りで行ってきた由比ヶ浜の姿を目にしていじっていたソシヤゲを閉じ由比ヶ浜へと視線を向ける。

「うっす、とりあえずどうすんだ？」

「とりあえず駅前のカフェに行かない？」

「おう」

そうやって俺たちは歩き出した所から別の方向から声をかけられる

「あれ？ 先輩じゃないですか、今帰りですか？」

「おう、矢向じゃねえか」

「あつゆーなちやんだろ、やつはろ〜」

えつ由比ヶ浜よ、それは万国共通の挨拶なの？

矢向もそれで返すのん?!

「由比ヶ浜先輩、どうもです〜」

よかつた、そうでもないようだ。

もし万国共通だとしたら俺は世界線移動を観測したことになるからな。

危うく歴史に名を刻むところだったな。エル・プサイ・コングルウ

「由比ヶ浜先輩達はどちらに？ つつというかもう聞くまでもないですね〜。まさか由

比ヶ浜先輩と逢い引きしてるなんて先輩もやりますね〜」

「ちよつ! ゆーなちやん。私たちそんな関係じゃないからね! 勘違いしないでね」

なんでそんなに必死に否定するの由比ヶ浜? そこまで否定されるとなんか悲しく

なつちやうだろ。

「本当に本当に私の命かわわってるからね?」

由比ヶ浜? それって一緒にいること自体が死ぬほど嫌って俺に間接的に伝えてる



??

えっ今日なんで呼ばれたの？ 罵倒されるため??

「わ、わかりました。わかりましたから。なんかごめんなさい……」

由比ヶ浜の必死の訴えに矢向がドン引きしている。

なんかその様子が新鮮だ。

「ちなみにホントにそう言った話じゃなくて真面目な話でさ……」

そうだったんだ。

いや、期末テスト全科目赤点確定だよっていう愚痴を聞かされるかと思ったんだがそれは杞憂な心配だったようだ。

「そうだったんですか、すいませんそれじゃ邪魔しちゃいましたね」

「ううん、こつちこそごめんね、ゆるなちゃん」

「いえいえ、それでは先輩、由比ヶ浜先輩、また明日」

そう言い残し矢向は俺たちの前で一礼し去って行った。

「真面目な話だったのか」

「うん、小町ちゃんのことと進展合ったから」

なるほど、小町関連か……

……えっ、俺小町から何も聞いてないんだけど、なに？ 除け者？ ってか文通の仲

介を1往復しかやってないのにどうしたの？

慣れてるけど小町にそれをされるとお兄ちゃん耐えきれずむせび泣いちやうよ？

そんな複雑な心境を抱えながら俺と由比ヶ浜は口数少なく目的地へ向かうのだった。

\*\*\*

夕暮れ時の駅前というのはそこそこ騒がしい。

会社で何があったのかはわからないが放心状態でベンチに座るくたびれたサラリーマン。

駅前でカップ酒を開けているおじいちゃん。旦那の悪口に花を咲かせる主婦達。手を繋ぎ口数少ないが雰囲気がかつそ甘ったるい初々しくカップル。

まあなんだろう色んな人がいるなあ……

「結構待つな」

「そうだねー、この時間だしね」

ちようど夕暮れ時で、駅前は夕飯の準備をする主婦達や学校帰りに買い食い目的で寄った学生達がひしめいている訳で、つまりは行こう思っていたカフェが満席で待っている訳だ。

まあ俺の会話スキルは高い方でも無い。

相手が喋ったらそれに合わせて喋る程度だ。由比ヶ浜は携帯をいじって俺以外の誰かと会話をしている。ちよつと優先順位おかしいとかそんな事は考えてはならない。泣きたくなるから。

なので当然俺は周りの人間観察に精を入れるということだ。

すると3人くらいのうちの女子がクレープ片手に喋りながら駅へと向かっている様子が見て取れた。

ただ3人の会話がやけに大きく、会話の内容が不可抗力で聞こえてくるわけだ

「今日うちさー実はバイトだったんだよねー」

「えー、そうなの？ それじゃこれから行く系？」

「ううん、めんどくさいから変わりの人にお願いしちゃったんだよねー」

「まじで？ その人めっちゃいい人じゃん」

「でしょー！ まじでゆっこ達と遊べるのその人のおかげ！ 超リスペクトじゃねー」

「超リスペクトマジウケるー、絶対思ってないっしょー」

なんだこの偏差値の底辺を垣間見たかのような会話内容は……

そんな会話を繰り広げつつ彼女たちは駅へと向かっていき、会話も段々と聞こえなく

なっていた。

「ヒツキー順番回ってきたよー」

そう言つて由比ヶ浜は俺に手招きをする。

「おう、今行くわ」

店員について行き、店内に案内される。

丁度2名の席に案内され対面に座る。

「へへへへ、なんかデートしてるみたいだね」

由比ヶ浜が少し照れながらそんな事を呟く。

さつき命かかっているとか言つてなかつたか？

「んな訳ねえだろ。ほれ、結局何の用だよ。小町と何があつた？ もつたいぶりやがつて」

俺の中では道中にある程度の内容の把握をしてこの場で解決案を出そうとしたのだが、由比ヶ浜がどうも口を開こうとしなかつたのだ。

「うん、ヒツキーからもらつた手紙の中に連絡先が入つててさそつちでやりとりしてたんだ」

「せつかくの文通は1往復で終了かよ」

「でも、きつかけは掴めたよ。ありがとうヒツキー」

そうお礼を言われるのは……悪くないな。うん。

「んで？ どうなったんだそつから」

「何だろうね。ヒッキーのことばかりが話題になる」

小町ちゃん？ ……君はどんだけお兄ちゃん大好きなんだろうね。俺も大好きだぞ。

「うわあ……」

何かと由比ヶ浜をみると「なにこいつめちやくちや気持ち悪い表情してて関わりたくないんですけど……」って表情をしていて無言の暴力を俺に突き立てる。最近そんな器用なことまでできるようになったんだね。なにの下先輩からよけいなこと学ばなくていいからな?!

咳払いをしていったん状況のリセットを図り、俺は今後どうしていく予定なのかと由比ヶ浜に話しかけると、不安で歯切れの悪いことばが耳に入る。

「今度……一度……会って話してみようかなって……思って……ましてー」

由比ヶ浜のしゃべる声が徐々に小さくなっていく所をみると予定なのだと確信させた。

「それは小町には言ってるのか？」

「それが……送信直前で躊躇しちゃって送れてないんだよね……それで返信こなくなるのが怖くて……」

あーわかるわかる。

俺の友達の話だが、好きな子にどこか遊びに行かない？ ってメールを三日三晩考えた内容で送ったら夏休み最終日の夜にごめん寝てたってメールが帰ってきた事あるから。

まじで、夏休み中ずっと寝てたのかよってツツコミ送って以来返信帰ってくる事なかったけどな。

「だからさヒツキー、私小町ちゃんと会う口実を作りたいなあーって……駄目……かな？」

口実つつたつてどうすんだよそれ。

うーん……どうするか、今の時期何かしら口実として組み込めるイベントは……  
そう思考を巡らせたら、案の定近い所に答えはあった。

「……夏祭りとか」

「あー!! それだ! それそれー! それだよヒツキー!」

なにがそれだよ。

あんな人混みの多いところに自分からすすんで行きたくねえわ。

「俺めっちゃいきたくねえんだけど……」

「なんで?」

「いや、人ごみとかめんどくせえし」

「へえー、小町ちゃんの浴衣姿と一緒にお祭りに行く思い出はそれに劣るの？」

なんだ由比ヶ浜

「なにがいたい？」

「いやーなんだろうなー、あれだけ断る理由に小町ちゃん言ってるくせにぜんぜん小町ちゃんの事考えてないなーとか思ってるよ？」

ほう、挑戦的な態度をとるようになったな由比ヶ浜よ。この小町を愛し、小町に愛された（自称）男、比企谷八幡だぞ。やすい挑発に乗る訳ねえだろ。なめるな。

「あ？ なにいつてんだよ、当然いくに決まってるだろ」

「ならきまり！ そういう風に連絡しとくね！ これなら送れそうだよ！ ありがとねヒッキー」

ふっ、ふん、挑発に乗せられたわけではないんだからね。

「代わりにちようつとだけびつくりさせるからね」

「ほう、おもしろえじゃねえか。なにやんだ？」

「まあ、当日のお楽しみってことで」

そう言つてべつと舌をだし、いたずらに笑った。

その表情に俺は少し驚いた。

由比ヶ浜は今まで俺と会う時は一歩引いた感じで接していた訳で、どうやらようやく俺とこいつは対等になれるんだなと嬉しい気持ちになり、この3ヶ月はむだでなかつたってことだと思いを湧かせた。

「さてとー、話も終わったことだし、何食べよつか？」

「テキトーでいいだろ。おっ、マツ缶あんじゃん」

そう言つて俺たちはカフェで小一時間ほどの時間を過ごすことになった。



## # 19 — 3

由比ヶ浜とは結局今回の期末試験の愚痴をメチャクチャ言われ続けまさかこんなに遅くなるとは思わなかった。女子つてこんなに長い時間喋ってるの？ リア充って喋るネタそんなに豊富なの？

日はすでに落ち、暗くなり、街灯が照らす道のりを歩き終えようやくサンクチュアリの我が家へ戻ってきた。

すでもう小町は帰ってきているみたいで外窓にかかるカーテンの隙間から漏れる光がそれを認識させた。

「ただいまー」

玄関を開けるとなぜかカマクラが小町の靴の上で座っていた。なんだこいつ？

今日は秀吉の気分なのか？ 季節外れなんだがなあ……冬にやれよ。

この猫何してんだかとフツと鼻で笑ってしまう。

しかしそんな一瞬の隙を突かれた。

タツとスタートダッシュを切るかのように目に追えぬ素早い動きで俺を一直線で過ぎ去り空きっぱなしの玄関を抜けていった。

おいおい雷の呼吸かよ？ まじかよ……

「おかえりーおにいちゃんー」

リビングから聞こえてくる小町の声

「すまん小町、鬼いちゃん霹靂一閃くらったわ」

今起きたことを興奮気味に小町に伝えてみる。

「ごめんおにいちゃんー、何言ってるか全然わからない」

小町に首つたけつて事だ。言わせんな恥ずかしい。

……ごめん、俺も何言ってるかわかんねえや。

「カマクラが脱走した」

「えー!! ちよつと捕まえてきてよー」

ですよねー。

「おう、そうする」

「んー……ちよつと待って〜」

そういつて小町がこちらに向かってくる音が床をつたい聞こえてくる。

姿を現した部屋着に着替えていた小町の手には猫まつしぐらのちゅるが握られていた。

「カー君の大好物だからこれ振って呼んだら帰ってくるよ」

これあれだよ、『カー君どこ、大好物のちゆるあるよ』ってご近所様に聞こえるように叫びながら探せて言ってるよ。

「お、おう、分かった」

「それじゃあよろしく」

そう言つて小町はまたリビングにもどつていった。

手伝つてくれてもよくね？ まあ逃がした俺が悪いんだが。

それからどれだけ探しただろう。小一時間は探していたと思う。

辺りも大分暗かつたからさすがに見切りを付けて帰る事にした。

隣の家のお兄さんから「大変だね。猫は見えないけれどこれ食べて頑張つてね」とプ

ロテインバーを貰つた。おれもまっしぐらだ

結局カマクラは見つからず、小町になんと言ひ訳すればいいのだろうと思つて家に

帰つたらカマクラの野郎玄関の前で座つてやがった。

無駄な労力を使わせやがつてと嘆息をつき玄関を開けた。

『「苦勞」と言わんばかりにカマクラは開いた玄関へと入つていった。

カマクラの足音を確認できたのか、玄関の音で認識したのは知らないが、小町がまたリビングから声を上げる。

「あつおかえりーおにいちちゃん。カー君大丈夫だった？」

おれも靴を脱ぎながらその間に答える。

「うい、ただいま。自分で帰ってきてやがったよ。無駄な労力使わせやがって」

「そんな事ないよ？　小町カー君が車に轢かれたら立ち直れる気がしないからね」

それは小町に限らず俺もだわ。

なんだかんだ言ってもう家族の一員だしな。

カマクラが病気がかかったときとか気が気じゃ無かったからな。

あの時、学校サボって必死こいて動物病院探して電話してチャリで全力疾走したっけか。

それくらいは必死にはなれる奴だ。

そんな事を思い返しながら靴を脱いでリビングに向かうと小町がどうやら夕食の準備をしていた。カマクラは『餌はまだか』という表情で餌皿の前で待機していた。

仕方ないからちゅくるを目の前で振るといつもは近寄らない癖してこういう時だけ可愛い声で『ニヤ〜（ハート）』って鳴いてポディータツチが頻繁になる。

お前オスだが。なにオタサーの姫化してんだよ。

ちゅくるを舐めさせながらかまくらを撫でる。久し振りに撫でたらふわっふわだなこいつ。

「脱走防止の柵でも買うか？」

「前に買ってみて軽々と飛び越えちゃって全然使えなかったの忘れた？」  
「……そうだったな完全に忘れてたわ」

そんな事を考えていると、カマクラはちゆくるに満足したのか俺から離れてまた餌場へと戻っていった。

こいつどんだけ食うんだよ。

「ほらーカー君ご飯だよー」

そう言つて小町が猫まつしぐらの缶詰を開けて餌皿に乗せ、それをすぐさまガツガツとカマクラは食べている。

小町はそんなカマクラをひとなでしてまた調理に戻る。

そんな光景を見て人はこう思うだろう。

猫触った手、洗った？

ちなみにちちゃんと洗ってた。

さすが小町ちゃん！ 略してさすこま、にこたまの親戚かな？

「おにいちゃん、そろそろご飯できるから食器用意して〜」

そう台所でフライパンを揺らしている小町がいう。

俺が食器を出し終わったらすぐに小町が盛り付けを始めた。

どうやらちようど良いタイミングで食器を出し終わったようだ。

互いに頂きますと言います。食事にありつく。

まあうまい。

「そういえばさ」

「ああ、どうした？」

期末どうだったとか聞かれるのか？ 多分数学赤点だらって話になるんだけど。

「由比ヶ浜さんから夏祭り行かないって誘われた、どうせならおにいちちゃんも一緒にどうかなって言われたんだけど」

決めた後の行動力はええな由比ヶ浜。

まあ俺も俺の仕事をしますか。

「いいんじゃないね。2人で気まずいなら付き合うぜ？」

「……うん、お願い」

「おう任せとけ。小町の浴衣、期待しとくわ」

「ちよつ……普段着で行くつもりだったのにハードルあげないで。着付け面倒くさいんだよ？」

「んだよ。駄目か？」

「もう……しょうがないなあ……」

小町の発言に昔はやった『しょうがないにやあ……』という文言を思い出し、天使の

よくな寛容さに八幡的にポイントストップ高だ。

それから微妙な空気になりつつも食事を終え俺は自室へと移動した。

座り込むと無意識に嘆息を吐いている事に気がついた。

その理由もなんとなくわかっている。

……誘いを断ることもできたはずだ。

それを俺と一緒に行くって事で承諾するということは小町の心境も徐々に変わっていつてるのだろうか。

これは由比ヶ浜が例え蔑まれようとも距離を置かれようともそれでも関わり続けた結果だ。

俺を見つけ不器用ながらも謝罪し、小町にも謝ろうと奉仕部を頼り文通とお菓子を作り関わりを作りそして今に至る。

以前俺は由比ヶ浜結衣とは形式上のみの友達になると評価した。

しかしそれは俺も見当違いの上辺だけしか見てなかったクソ野郎であると猛省せざるえない。

もし俺がそんな場面に直面したのであつたら関わる事はせず、ずっと目をそらし続けていただろう。時間がいつか解決してくれるという便利な言葉を盾に、関わらない様に視界に入らないように隅に隠れてやり過ぎだろう。

それなのに由比ヶ浜結衣はどうとうここまで来た。

まだ結果は出ておらず、早とちりと言えば反論の余地も無い。しかし俺は由比ヶ浜結衣が俺たち兄妹との関係を修復したいという信念に偽りはなく、その思いは本物だ。

その信念に、その思いに俺は……俺は彼女を尊敬した。

\*\*\*

奉仕部の部室で今日は特に依頼という依頼は来ず俺は適当な文庫本を読み、由比ヶ浜と雪ノ下先輩はなにやら雑誌を一緒に見てこれ良いね、あれ可愛いとか様々な話題を話しながら百合百合しい雰囲気を展開している。

最近この2人の距離がやけに近いんですが、なんだろう本当にそうなのだろうかと疑心暗鬼になる。

そんな今日もマツタリな雰囲気な奉仕部にノックの音が響く。

その音と同時に由比ヶ浜は離れ自分の椅子に座る。

雪ノ下先輩が一呼吸置いた後に「どうぞ」と引き戸に向け言葉を発す。

「どもです、結衣先輩、雪ノ下先輩」

聞き覚えのある可愛げのある声が聞こえる、同時に姿を現したくりつとした目と亜麻



色の髪が特徴的な小柄な女子が入ってきた。

「あら、一色さん」

「いろはちゃんだ、最近来なかったからどうしたのかと思つたよ」

「いえいえ、最近部活が大忙しで、夏の大会とかもあるし大変ですよ」

「おう」

「そうそう、せんぱい。これ返そうと思つて」

そう言つて紙袋を俺の前に持つてきた。

結構冊数があつた筈なんだがな。

「まじか、普通に重かつただろ」

「そうですね。でもそろそろ返さないと思つて、ありがとうございました」

そう言つて一礼すると一色はそのまま入つてきた扉へと歩き出した。

「えつ、いろはちゃん。もう行つちやうの？」

由比ヶ浜がそんなことを言うのと振り返り「えへへ、結衣先輩また今度！」と言つてそのまま部室から去つて行つた。

一色いろはについては一度来たら3時間から部活終了まで居座る事がよくあつたが、今回のこの瞬間的にそのまま帰るつて事はやはり部活が忙しいのだろうか。

あいつにとって今のサッカー部はそんなにやりがいを求めるどころだつたつたか？

いやあいつは葉山先輩に近づく名目でサッカー部に入ったはずなんだが……  
一体どうしたのだろうか。

最近あまり喋ってねえな、喋ったとしてもすぐに会話が終わり、どっかに行ってしまう。……なんだろうか、さびし……

その瞬間、俺は自分が何を考えているのかと焦り理性を呼び起こした。

——ヤメロ

その考えは危険だ比企谷八幡。

一色には一色の予定という物がありそれを俺が拘束する事などまずあつてはならない。

その予定が本当だろうか？であろうと俺との関わりを善とするか悪とするかの判断は相手が決める事だ。

それは中学で幾度となく体験したはずだ。

現実残酷でいつも最悪の結果ばかりを俺に割り振ってくる。

だからこそ現実是最悪を想定しろと学んだはずだ。

しかし、一色いろはは俺によく話しかける女子であり、俺の人生の中で一番よく喋っている女子だ。何か理由があるのかも知れない。

その理由を聞くのにまた途方も無い時間を使うのか？ いい加減学習しろ。それを確認するのにお前は直接相手に伝えられる根性を持っている奴では無いだろ。

過去に囚われるな。昔仲が良かったって結局は赤の他人だ。

相手の感情は不確定で、いつ相手の都合で自分が切り捨てられるか分からない。

だからこそ俺はボツチである事を望むのだ。アンコントロールを徹底的に排除しないと。また俺は……

「ヒッキー?!」

つとと由比ヶ浜の言葉が耳に入る。

「どうしたの?? 気分悪い??」

「あーいや。そうじゃなくてな、ちよつと考え事してただけだ」

「……そうなんだ」

そう言い終えると由比ヶ浜は帰り支度を始めた。

「ごめんゆきのん、ヒッキー。今日ちよつと用事ができたから先に帰るね!」

その言葉に俺も雪ノ下先輩も目を丸める。

「えっ、由比ヶ浜さん!？」

「ゆきのんごめんく！ 今度タピオカミルクティー行こうね！ それじゃ！」

まさに風の如し、唐突にサツといなくなつた由比ヶ浜を俺と雪ノ下先輩はぽかんとした口を開きながら見送るのであつた。

## #20

喧騒としている教室でのNowでHotな話題はまだまだ夏休みどこに行くの話題のようだ。

この話題をかき集めて有料サイト作ると意外と売れるんじゃないかと思う。

主にお猿さん達には絶大な支持が得られるだろう。

まあやらねえけどな。

無論俺はそんなNowでHotで夏を刺激する会話ができる相手がない訳だ。

そしてそんな話題すらも持ち合わせていときた。

妖精さんか生足が魅惑のマーメイドさんが全部持つて行ったんだとおもう。

……生足?!

俺は何を言っているんだらう。

マーメイドに足ねえだろ。

尾ビレのことだよな？ 刺身にしたら美味しいって事で魅惑って事か。

なるほど、一気にカニバリズム感が出てきたな。

この思考は危険だ、犯罪係数を上げてしまう。

まあそんなわけで、机に伏して様子を伺っている訳だ。

決して狸寝入りではない。

「てかさー、ねえー今日カラオケ行かない?」

最近どうも俺の隣に陣を構えはじめた矢向グループがまた何かお喋りを始めた。

「ムー大だつたらワンチャンある」

またロツクな所にワンチャン感じちやつたなあ。

「ムー大?? まああつちもカラオケあるしね。プリ撮つた後にカラオケならあり」

「カラオケは俺後で向かうわ。ダンレボしたいから」

「あんたそれ好きだよね。なにが面白いのかまつたくわかんない」

「超極端に言えばダイエツト」

「急激に興味が湧いた」

そんな談笑が溢れ、さらに会話は流れていく。

「つてかさー、ゆるなも今日は家の手伝い休みだよね。いつしよにいこー?」

「うん、今日は休み。行くー」

「俺もプリ参加したい」

「あんた、ダンレボはどこいったの?」

「ダンレボなんていつでもできんだよ、矢向さんとのツーショットプリとかプライスレ

スだろ普通」

「うわあ……キモ」

「ツーショットは絶対無理だけど、皆でならありかなー」

「だよね、それじゃ学校終わったらムー大！」

絶対つてつけられている辺りなかなか悲しいな。頑張れ取り巻き。

\*\*\*

今日はやけに読書が捗る。

外からは風が室内に入り込み、留まった夏の暑い空気を外へと逃がし室温を下げてくれる。

そして俺しかない空間に風でレースカーテンの擦れる音、ページを捲る音、たびたび発せられる俺の独り言と笑い声。なんとも、慎みのある風情だ。

今日は、珍しく俺が部室を開けて待っているという状況だ。

しかしいつこうに来ない、いつたいなにやっているのだろう。

そんななか、ノックする音が響く。

ここで依頼人がやってくるとはまたタイミングの良いことだ。

せつかくだから渋く言ってるか。

「どうぞぞ」

なかなか男気のある渋い声で自分でもほればれする。きっと体格の良いダンディな人と認識してくれたに違いない。

「えっ……さっきの声……なに？」

「わっかんないけどすごいきしよくなかった？」

「えー、なんかやだー。ねえ、やっぱやめよう？」

「ちよつと今日はハズレの日かもね、雪ノ下先輩あんな声絶対出さないもん。変な人いるってあとで平塚先生に伝えとこー？」

「うん、そうだね」

それから会話が聞こえなくなったことを確認し、俺は泣いた。ただただ泣いた。男というものは外見で泣いたりはいしないんだ。心でしんしんと泣くのだ。しかしなぜだろう……目尻に水たまりができたね。昔行ったあの場所を思い出したからかな？ 近くにあるのは川じゃなくて海だけだね。

どうやらこの空間の雰囲気へのめり込むあまり、自分の存在価値を忘れていたようだ。

慎みのある空間には慎みのある存在感でそこにいよう。



そしてきつと誰かが気づいてこう言ってくれるだろう。本当に八幡はいたんだよって。

「あの？ 比企谷先輩？ なにやってんすか？」

その声に俯いた顔を上げると視界に相模の姿が映った。

冷静を装いながら水たまりを親指で拭う。

「なんだよ相模。お前入るときノックしろよ」

「ノックしたんですが反応なかったんですよ！」

なるほど、精神的苦痛を味わうことにより時間をぶっ飛ばす能力を手に入れたのか。すごいぞ八幡、PTSD待ったなしだ！

「んで……何の用だ？」

「そうそう、今日は比企谷先輩だけですか？」

「ああ、そうだが」

「ならちようど……いえ、依頼したいことがありますよ」

なんで今言い直したのかよく分からなかったが、

男手が必要となることは力仕事系か……さつき精神的ダメージくらったし、体動かしてストレス解消も悪くはない。

「まあ、ある程度なら手伝ってやらんこともない」

以前こいつには結構働いてもらったしな。そう依頼を無下にしたくはない。

「比企谷先輩、ほんと助かります。それじゃ部室に移動しましょう」

「ん？ お前って部活やってたのか？」

「そうですよ、遊戯部っていう部活なんですけれどね」

「聴き慣れない部活だな」

「そりゃそうですよ、部員も俺と秦野の2名ですし」

「秦野？」

「先輩……同じクラスですよ……」

\*\*\*

そんなこんな相模と話しながら部室の前に立つ。

「それじゃ、比企谷先輩。お願いしますよ」

「なにをだよ」

「彼女の相手を……です！」

そう言つて部室の扉をスライドさせる。

「2号ちゃん、おっすーい。のりぴーおこおこのぶんぶん丸だぞー☆」

早速俺はこの依頼を受けた事を後悔した。

おつふ………まったキャラ濃いやつ出てきたな。

こんなの材木座だけで十分なのに。

入ってきた瞬間にのりぴ〜とかいう味噌ピーの親戚ではなさそうだが、腰まである長い髪とパツツンな前髪。そしてその存在感を圧倒的なものまでに押し上げている健康維持のために運動して30キロくらい痩せればたぶん可愛くなれるんじゃないやね？ 系なふくよかな体格の女子がクツソ甘ったるい声で俺たちを出迎えた。

「なあ相模。こいつが秦野か？」

「秦野は途中で飲み物買って来るって行つたつきり帰ってきません。ってか同じクラスです。」

「賢明な判断だな」

「そのおかげで比企谷先輩が召還されたんですがね」

なる程、秦野って奴はなかなかできる奴だな。俺の絶対許さないリストのゴールドメンバーズに名を残しておこう。もちろん躊躇なく俺を連れてきた相模お前もだ。

「へえ〜、2号ちゃんにしてはあ〜70点クラスの男子を連れて来るなんてちよ〜いがある。ちよ〜つとお〜目がキモいのは置いとくとしてえ〜」

饅頭のような顔の頬に指をあてながらその熱い眼差しで俺の全身を舐め回すかのよ

うにみられるのは結構キツイ。

視線の先が俺じゃなくて雪ノ下先輩なら一刀両断しているところだ。

貴方のそのいやらしい視線でいつ私の貞操が脅かされるか不安で仕方ないわとか言つてきそう。

つてか俺をじろじろと見て値踏みしてんじやねえよ。

点数つけられる側の気持ち考えたことあんのか？

……案外たけえじゃねえか。悪くはない。

「2号ちゃんつてなんだ？ お前クローンなの？」

「……姉貴がいるんですよ」

苦虫を噛み潰したかのような表情で姉相模を言葉にすることからあまり仲はよろしくない様子で。小町と俺の仲を見習わせてやりたい。

あーなるほど、だから2号ちゃんね。

その事を知つてゐることは、のりぴくはもしかして……

「のりぴく先輩。とりあえずこれでこのマスの条件はクリアですよね」

「うんうん、よくできましたにや〜☆」褒美になでなでしてあげるにや（ハート）

「あ、結構です。割とまじで」

「んもう〜、2号ちゃんはシャイなんだから〜」

「え、ええ。すみません。なんか」

どうやらのりびく先輩は姉相模と同級生っぽそうだ。

こんなキャラ濃い奴と友達なんて姉相模もなかなか懐が深い奴なのか。つていうかはやく依頼終わらせてこの空間から逃げ出したい。

「比企谷先輩なにしてんすか、はやくこっち座つてください」

そう言つて相模はのりびく先輩との間に椅子を設置しやがった。

相模？ もしかして依頼内容はのりびく先輩とのパーティション役つて事かな？

「比企谷くんつて言うんだくへえ」

のりびく先輩の熱の籠もつた視線はもう見ないことにして、とりあえずこの2人の前に机4つをつかつて目一杯広げられた画用紙、さらにそこに描かれているのは連続した四角形で描かれた道、そしてサイコロそこから導き出される答えはもうわかりきつてい

る。「つていうかさなんで双六してんの？」

「さつきうちの姉貴が来て用事あるからつてのりびく先輩を置いて行つたんですよ」

「そうそう、みなびつぴちよつとだけ用事があるからつて言つたつきり全然帰つてくなくてさ」

それどう考えても秦野と同じ考えで切り捨てたんだと思うよ？ お気の毒様。

それにしても全然懐が深い奴ではなかったな姉相模。

「待つてる間暇ですし、のりぴく先輩トランプとかあまりと得意そうじゃなそうだったのでなんかないか部室を探ってみたら双六を見つけまして」

「スゴロクさあくちよー面白いんだよ☆」

相模、お前ほんといい奴だな。俺だろうとのりぴくだろうとちやんと最後まで面倒みてくれるなんてまじでいい奴だな。絶対許せないリストからは外さないが感心したわ。そんな感動をしながら盤面を覗いてみるとどうも正規品とは思えない品質だ。

「これって自作か？」

「そうなんですよ。前にいた遊戯部の先輩方々が制作し、置いて行ったものみたいですよ。えっ？ 遊戯部ってそんな歴史ある部活だったの？」

「ただ、内容がカオスっていますけどね」

「ふーん」

マス目の内容を確認する。

『アニメキャラのセリフを熱演する（衣装付き）』

『好きな人の物真似をする』

『独身の女教師に結婚はまだですかと尋ねる』

なんだろうあきらかに一つ特定の誰かを狙ったのマスがあるんだが。

これだけの情報で個人を特定できるなんて世の中って狭いのね。

っていうかそれ尋ねたと同時に○されるのが目に見えてわかるんだが。

こいつアーデンジャラスだぜ。

「ふーん」

「ふーんじゃなくて、先輩もやるんですよ」

は？ こいつ今なんて言った。俺パーティション役じゃなかったのかよ。

学芸会で数々の木の役を演じて来た俺の助演が光をみると思っていたのに。

完全に人ごとだと思っていたよ。

「言ったじゃないですか、男手が欲しいって」

そう言って相模がさしたマスを見る。

『仲間を呼びこのドン引きデンジャラスすごろくに参加させる』

ドン引きとはよく言ったもんだ。既にメンツでドン引きだわ。いやまじでいやだ。

「不参加表明したいのだが受付どこよ？」

「あれー？ 比企谷先輩。僕色々先輩がアレの時サポートしましたよね？ その恩を

そろそろ返してもらっても良いですか？？」

「それは別の機会でもいいだろうが、こんな遊びで恩返しする必要はないだろう」

「先輩知ってますか？ 借りたものには利子が付くんですよ？」

クイツとメガネをあげるその姿はどこぞの闇金の幹部っぽい雰囲気か漂っていた。

こいつ……マジでいい性格してやがる。

「あー……もう、はいはい。ただ、真面目に無理なマスはパスな」

「そこはみんな協議の元、折衷案を出すというのがルールみたいですよ」

「最初からできないこと前提かよ」

「じゃなきゃ俺もやらないですからね」

そりゃそうだな。

「それじゃ、比企谷先輩は秦野の奴引き継ぎでさいころ振っちゃってください」

秦野のマスは……一番ビリじゃねえか。

ここは6を出したい所。

そう思い俺は6マス目の内容を見る。

『前の参加者にデコピンをする』

いいじゃねえか。中学の頃に桃鉄で鍛え上げたこのさいころの腕をみせるときがきたようだな。

高速で数字を数えながら目的の目の数字を口にすると同時にボタンを押すと高確率でそれになる。そーら123456

そうして考えながら振ったサイコロは本当に6がでた。



正直であるとは思わなくておれもびっくりだ。

「相模お仕置きのお時間だ」

ピ。ピー

耳にささるホイッスルの音が室内に響く。

「暴力はダメですう〜」

どうやらホイッスルを鳴らしたのがのりぴ〜先輩のようだ。

俺は恨めしそうに彼女をみるが、なにを勘違いしたのかウインクが返ってきた。

つてか、外まで響くから。

何で持ち歩いてるの？

「先輩、早速洗礼を受けましたね」

んだよ、洗礼って

「だいたいこういつた自作スゴロクによくあるシッペとかデコピンとかタイキツクと  
かって、基本イジメの温床になる可能性があるじゃないですか。なので先代たちはそう  
いったマスには代替え案をこのカードの中から選ぶようにしてルールブックを確認す  
ると書いてるんですよ」

そう言つて離れた机に百人一首のように並べられたカードを指差して相模は言う。

なんでそういつたところだけやけにコンプラ意識したような配慮してんのよ。

簡単なマスに見せかけたトラップじゃねえか。

俺は恐る恐る裏返されたカードの一枚をめくる。

『名前呼び』

「今回は軽傷ですな八幡先輩」

「へえへえへえ、八幡つてえけつこうー渋い名前してるんだねえ☆」

ヤバイ……このクレイジーモンスターに本名を知られてしまった。

俺は今後無事に学校に通えるかしら。

「それじゃあ、八幡が終わったからあゝ次はのりぴくの番だお」

そう言つてエイツとサイコロを振る、出目は3。

マスはエアギター演奏だ。

まあ、普通だな。

「うえくん、八幡んゝ変なの引いちやっつた」

「かきぴく先輩。物は試しなので一度やつてみてください」

「のりぴくは食べ物じゃないよお？ でもお……八幡が食べたいうならあゝ」

……んふ☆」

まずい。一気に緊張感が全身を走る。

俺は今、人生の分かれ道に来ているようだ、慎重に選択肢を選ばないと詰む。

「超絶怒濤のエアギター楽しみにしてます」

「八幡がそう言うならちよつと……やってみようかな？」

そう言つてのりぴりは立ち上がり少し開けた場所へと移動し……

その体軀を激しく揺らす。しかしそれだけのパフォーマンスだけでなく素早く精密に動く右手の動きと左手のピックをかき鳴らす動きは本当に演奏しているように見えた。

そしてピックでかき鳴らしたかと思えば途中指引きで弦を叩く様はまじもんのギターリストだった。のりぴり先輩の前には確かにギターが存在した。もう音すら聞こえて来るレベルだ。

その演技風景は先ほど迄のどこかに媚びた表情では無く、演奏を楽しんでいる様にも見えた。

俺たちはとんでもなく衝撃を受けた。

「の、のりぴり先輩すげえ」

流石の相模もこれには驚きを隠せない様子。無論俺もそうだ。

演奏が終わった後、残心。

ふと素に戻つたのりぴり先輩に拍手を送る

すると先程までののりぴり先輩のテンションが戻ってきた。

「の、のりぴく恥ずかしい〜」

そう言っつてははずかしがり自分の席に戻るのりぴくが可愛く思えた。

……あれ？ これっつてオタサーの姫と同じような現象起きてね？

危ねえ危ねえ。

「それじゃ次は俺っすね〜」

そう言っつて相模がサイコロを振る。

すると出目が4。マスは

『魔法少女もいろいろあげはのコスプレをする』

ももいろあげはとはあれだ女兒向けアニメと思いきや3話あたりからやけに内容がエグくなって来たアニメだが、主人公のあげはの格好はフリッツリのプリティ仕様だ。

「協議を申告します」

「きやつかく」「却下」

「ひどっ！ なんすか先輩まで！」

「いやっ……似合うと思うぞ……」

中性的な顔立ちしてるしな相模。似合うその言葉に嘘はない。

男の娘には最適だろう。まあ、戸塚先輩には負けるけどね。

駄目だ駄目だ比企谷八幡、今は妄想力を排除するのだ。  
笑つちや駄目だ笑つちや駄目だ。

表情筋の力を抜き、雪ノ下先輩の罵倒の数々を思い出すのだ。

しかしその隙間を狙ってフラッシュバックするフリツプリの衣装を纏った相模の妄想に

一瞬にして笑いがこみ上げてくる。

「大丈夫だよ、写真も動画も撮らないからっ……ね？」

「うう……わ、わかりました」

流石に先輩の言葉を信用せざる得ないのか相模は渋々とそれを承諾した。

そして着替え、姿を現した相模に速攻で俺は吹き出して、相模の反感を買った。

のりびくがやつぱりみなびつぴとそっくりだねえと親戚のおばさん見たいな事を言った。

「2号ちゃんすつごいかあゝわあゝいゝいゝ」

そう言つてのりびく先輩が手鏡を渡す。

「これが……俺？」

おい、それフラグだぞ。

どうやらここに新たな魔法少女が誕生した。

魔法少女さがみん！ クラスのみんなには……内緒だよ！

それからどれだけ時間が流れただろう。

相模の女装が切っ掛けになったんだろう。

それを超えるくらい濃いイベントマスはいくつも存在し、それらを何も恥ずかしがることなく忠実に実行していった。きっと俺達はハイになっていたのだろう。

そして……

「ゴール!!」

相模が1位でゴールし、俺がビリとなつてこの双六は幕を閉じた。そら最初からビリなんだから奇跡が起こらない限り逆転は無理だろ……

「よ、ようやく終わったな……」

思い返すだけで過去の自分を絞め殺したくなるぐらい恥ずかしい。

何故俺たちはあんな恥ずかし事を躊躇なく実行していたのだろう。

カラオケで最初の一曲歌ったらあとは恥ずかしくなくなる見たいなそんな感じでハ

イになっていったのだろう。黒歴史爆誕じゃねえか。

しかしそれはここにいる奴ら皆がそれで、俺だけじゃない。

最初はすぐにこいつから遠ざかりたいとすら思ったのりぴくにも親近感が芽生え、さ  
がみんと3人、この事は絶対に墓まで持つて行くという固い絆が仕上がった。俺たちに  
幸あれ。

そしてのりぴくは力無く席から立ち上がりこう言った。

「のりぴくさあ〜? ……今日の事はひとまず忘れようと思うの〜」

「同感です……」

「俺もそう思う……」

後悔の念に押し潰されそうになる。

「でも、これだけは決めよ?」

「何をですか?」

「これこれ〜」

そういつてのりぴく先輩が見せたのはルールブックだ。

そして指を指していた記述はこう記されていた。

『1位の人間はビリに対して1つだけ何でも命令ができる』

「まじかよ……」

「2号ちゃん、ほら八幡に命令しちゃってえ〜」

おいおい、ここで俺なら未来永劫命令できるように命令するとか言っちゃうぞ。

「流石に命令の回数を増やすとか野暮なことは言いませんよ。もう疲れましたし……」

どうやらそこは避けてくれるみたいだ。となると？　なんだ？

「え〜つと……そのお〜、八幡先輩。ちよつと耳を拝借」

もう双六は終わったから八幡呼ばなくていいんだよ？　さがみん。

『……矢向さんと話すきっかけ作って下さい。』

……早々に諦めた方がいいぞメガネと口に出そうになつたが、まあ知らない方が良いこともある。

女装したときに爆笑させてもらったし、とりあえず話を通すこと位はやぶさかではない。  
い。

『あまり、期待すんなよ……』

『さすが八幡先輩！　頼りになる！』

いやだから、もう直して良いのよさがみん。

「よお〜し！　皆もう帰ろお〜！」

のりび〜先輩の号令と共に俺たちは遊戯部の部室を後にするのだった。

相模が密かにももいろあげはの衣装を鞆の中に詰め込んでいたのを俺は見逃しはし



なかった。

クラスのみんなには……内緒だよ！

大事なことだから心の中で唱えた。

\*\*\*

さがみん達と別れた俺は自分の荷物を取りに部室に戻ってきた。

すると由比ヶ浜と雪ノ下先輩がどうやら部室にいらんことを紅茶の香りが教えてくれた。

「うっす」

「あら、比企谷君。遅かったのね」

「ヒッキー遅いよーもう部活終わっちゃうよー?」

「すまんちよつと変な依頼に捕まってな……」

あれ?

すごい違和感を覚える。なんで2人して俺に視線を合わせようとしんすかね? なになに? 比企谷と目線を合わせたら比企谷菌に視線感染するとか言われた?

登戸の野郎絶対許さんからな。

「どしたんすか? 俺なんかしました?」

「いえ、そういうことでは無いの。今あなたの顔を見る事がどうしてもできないの」

「そうそう……今は無理」

俺の全身から冷や汗が吹き出した。

ちよつと待つて？　なんか様子がおかしいぞ？

もしや？　これちよつとまさか  
!!!?!

「……どこから聞いてた」

「先に言つておくわ。不可抗力よ。部室の外からかなりの音量で丸聞こえだったのよ」

嘘、まじかよ。

たしかにホイッスルとか奇声とかあげてた記憶が……うっ頭が!!?

「しばらく学校休むわ」

「待つて待つて……フー……もう少して夏休みだし……フーツ、人の噂も四十九日つて言うじやブツ……。皆も休みの間に忘れてくれるよ……フー」

吹き出さないように呼吸法で笑いを外に逃がしながら喋っている由比ヶ浜さん、それもう笑っているからね？

「フオローありがとよ由比ヶ浜、一つも心に響かなかったぜ。ちなみに人の噂は

75日だかんな？　夏休みの倍あるからな」

もしかして由比ヶ浜さん？　夏休み後に教室に行く噂が学校中に広まっていて、夏

休みが終わったら貴様の四十九日だ！　命日は今日！　つて遠回しに言ってる？　趣

味悪すぎるだろ。

それからしばらくして、ようやく俺の顔に慣れたのか雪ノ下先輩が振り返り俺を見ると眉を少し動かした。

「こほん。さて、比企谷君も戻ってきたことだし帰りましょうか。由比ヶ浜さん、比企谷君」

「うん！」

なんか『行きまししょうか助さん格さん』みたいな感じで雪ノ下先輩がそんなことを言うのが少し面白かったが表に出さず、その言葉で俺たちは荷物を持ち部室から出た。

特別棟は傾いた日がおりだす橙色と濃い影の黒二色に染まったコントラストで染まり、今日も1日生きていけたと実感させられる。今日に関しては特にそう思う。

最後に出てきた雪ノ下先輩が部室の鍵を閉める。

「由比ヶ浜さん、大変申し訳ないのだけれど、鍵を職員室に返してもらって来ていいかしら？ 私には教室に忘れ物があるからそれを取って下校するわ」

「うん、いいよー！ それじゃーヒッキー、ゆきのんまた明日〜！」

そう言つて由比ヶ浜は鍵を受け取りさっそうと去つて行つた。

「んじゃ俺も。また明日」

そう言つて校門へ向かおうと踵を返した時

「待ちなさい」

雪ノ下先輩に呼び止められた。

「……どうしたんですか？ 雪ノ下先輩？ 他に用事でもありましたっけ？」

「あなた最近……らしくないわね」

俺を見透かしたかのような言葉に鼓動が跳ねる。

振り返り雪ノ下先輩を見る。

先ほどの一切視線を合わせなかつた彼女とは違い、真剣に自分の言葉を俺に伝えようとしている事がわかる。

「そうですかね？ いつもこんな感じなんで」

「っそ？ マトリョーシカみたいは何重に覆い隠して誤魔化しても本心は満たされないわよ」

「……なんでそんなことを言うんですか？」

「気づいてないの？」

「気づくもなにも何もありませんよ」

「わかった。なら今はなにも言わない。ただ……あなたのやってる代償行動の代償額は本元に対してほど遠いものよ」

そう言い残し、雪ノ下先輩は染まる廊下に消えていった。

代償行動、確か行動学か心理学かの用語だったよな。  
入院している時にそんな本を読んだことがあったな。

本来の目的を得られない時、その代替に別の行動を取って欲求を叶えるとかそういう話だったよな。

俺が代償行動をしている？ どういうことだ。

俺は俺のしたいように過ごしているだけだ。

代償の本来がそもそも分からんのに代償行動とはこれはいかに。

そう悶々と考えながら俺は校舎を出る。

サツカー部はまだ練習して居るようだ。

確か夏の大会が近いのだったな。練習に精がでる訳だ。

サツカー部の様子を軽く覗き、しばらくして駐輪場へ向かい自転車で帰路につく。

その道中、矢向さん家のコンビニをみつけそこで自転車を止める。

店内に入り、目的の物を見つめる。とりあえず小町の分も買っておくかと考えその商品を2つほど購入するべくレジに向かう。

「先輩、どうしたんですか？ 心ここにあらず状態ですけど」

レジに立っている矢向に言われハツと我に返った。

「ああ、ちよつとぼーっとしてたな。……ん？ ってか矢向、お前今日遊びに行くんじや

なかったのか?」

「先輩……やつぱり狸寝入りだったんですねあれ。盗み聞きはよくないですよ」  
あつ……、やつちまった。

今日ダメダメだな俺。

「今日、急にバイトが風邪みたいらしくお休みされたのでその補填ですよ」

「そうか、オーナーの娘も大変だな」

そんな会話をしながらも商品を袋詰めして俺の前に差し出した。

「先輩もお手伝いしてくれるんですか?」

「そんな事は一切言つてない。俺はバックレの天才だからな」

「うわー。最低だよこの人」

そんな話をしながら矢向が両手をグーで両手を突き出した。

「先輩、500円以上買ったのでくじ引きです。知り合い特典で特別に2分の1バー  
ジョンで」

何それ本部に怒られない?

「そんじゃ……こつち?」

俺は恐る恐る矢向の左手を指定した。

すると矢向の手には手書きで当たりと書かれた紙切れが入っていた。

「ばんぱつかばーん、大当たりですよ先輩」

「何が当たりなのかわかんねえがそれ手書きだよね？」

「なんと景品は……！ ゆーなちゃんと夏祭りです！」

……っは？

「いやいやいや、何言ってるのお前？」

「ちなみに拒否権はありません。返却も受けません」

何その悪徳商法。せめてクーリングオフくらいは受けようよ。

消費者庁コラボさせつぞ。

「どうせ先輩暇じゃないですか夏休み」

「暇と決めつけるな。俺は色々忙しいんだ」

「私だって夏休み、ずっと遊んで過ごしたかったですけど8月ずっと手伝いなんですか

らね。せめて7月中には夏祭りくらい行きたいんですよ」

そうか、こいつ家の手伝いでほとんど遊べねえんだな。

「そうか、ならいつものメンツ呼べば良くね」

って同情煽って言質取るうとしてもそうはいかないぞ。

「残念ながら皆お金持ちな様子でハワイやらヨーロッパとか行くみたいですよ……」

……それ悲しくなるな。

なるほどな、だからせめて暇を見つけて誰かと夏祭りに行きたい気持ちは分かる。  
ただなあ……

「いや、お前俺といっても面白くないぞ？ 会話続かんし」

「なんだ、そんなことですか」

キョトンとした様子で矢向が言う

「そんな事なのか？」

「別に会話なんて続かなくて良いんですよ。一緒に楽しい空間にいて、ご飯食べて花火見て思いついたらテキトーに喋って歩いてまた見て回って見て楽しんでできればそれでいいんですよ」

「マジか……」

「マジです」

困った……断る理由が無くなってしまった。

「そういうことなら……わかった」

「んふふ。ではお代を頂戴しましょうか〜！」

「何でだよ」

「女の子にここまで語らせておいてタダとは行きませんかよ？ ちよつとだけ勇気でしたんですからね？」



「でたよ守銭奴……ほれ、これでも食って頑張れ」

俺は先ほど購入して袋詰めされたカラメルが別包装のプリンをとりだし矢向に渡す。

「んへへへ、ありがとうございます。これ大好きなんですよね」

「わかる、うまいよな」

「それじゃこれは、休憩中に頂くことにします。ちよつと冷蔵庫に入れてきますね」

そう言つて矢向は一度バックルームに入つて戻つてきた時にはなにやら三角錐のポップみたいなのを手にしていた。

「そうそう。先輩。このQRコード読み込んでみて下さい」

「んあ？ どうやって読みこむの？」

「読み取りアプリがあれば読みこめますよ。アプリダウンロードして下さいな」

矢向に言われるがまま俺はアプリをダウンロードしてそのQRコードを読み取る。

「読み取つて出てきた番号とアドレス、私のなんで登録しておいて下さいね」

「連絡先の渡し方斬新すぎだろ」

\*\*\*

明日からとうとう夏休みが始まる。

この日に限って俺は遠足を楽しみに待つ子供のよう  
に夜楽しみで眠れず寝坊をし、終業式の途中や  
つてきた次第だ。

終業式後、奉仕部の部室に入ると既に雪ノ下先輩  
と平塚先生がいて、紅茶を啜っていた。

「比企谷か、少し邪魔をするぞ。お前らに伝えたい事があったからな」

「ふーん、なんですかね？」

「話は由比ヶ浜が来てから語ることにしよう。今は雪ノ下が入れた紅茶でも楽しみ」

そう言つて平塚先生は俺に紙コップをよこした。

「比企谷君、あなた確か猫舌だったわね。ちようど温くなつてる頃だから多分大丈夫だと思つて」

前の事なんて無かつたかのように雪ノ下先輩は振る舞う。

「あざす」

そして紙コップに口をつける。適度に温くなつた紅茶を口に含むと

しつとりとした甘い香りが口の中で広がり鼻孔を抜ける。

「また腕を上げたな、雪ノ下」

「ありがとうございます」

いつもはマツ缶とかのコーヒーパーなのだが、こういう香りをたまに楽しむと言うのも

悪くは無い。

そんな事を考えていたらガラツと引き戸を開く音と同時に「やつはろー」とハツラツの声を上げて由比ヶ浜がやってきた。

「由比ヶ浜さん、待っていたわ。どうやら顧問の平塚先生よりお話しがあるそうよ」

「ふえ？　なんですか？」

「まあ立っているのもなんだろう、適当に座って聞いてくれ」

そう言つて、由比ヶ浜も適当な椅子へと腰掛ける。

「さて、明日から夏休みだ。そこで私は考えた。奉仕部の夏休みを！　強化合宿をした  
いと考えている。つともうこれもこれは決定事項だ。異論は認めん」

「まーたなんの部活漫画に染化されたのか。」

強化合宿って何を強化するんだよ？　雪ノ下先輩の辛辣な言葉はこれ以上強化する  
必要無いと思うんだが？！

「素朴な疑問なのですが、何を強化するということですか？」

「お前達には集団行動に対する強化をはかつて貰う」

「集団行動って……3名しかいないのに？」

「それは問題ない。有志を集めている」

「俺当日風邪引く予定なんで休んでいいですか？」

「いいわけないだろ。いいな、ちゃんと来いよ？ 着拒しても家電に電話するぞ、君の妹すら使つてでもお前の外堀から来るようにしむけるからな」

ちよ、怖い怖い怖い。

この人が結婚できない理由の片鱗を見たわ。

「あのおく……場所つて」

恐る恐る由比ヶ浜が手を上げて発言する。

「ああ、そうだったな場所はここだ」

そう言つて平塚先生は後ろパンツのポケットに持つていたパンフを広げた

「千葉村だ」

「まあた遠いところっすね」

「せっかく学校の金が使えるのだ。少しは都会を離れ森林浴もありだろ」

そうだな千葉は都会だからな。仕方が無い。千葉は都会、モノレールあるしな。

「詳しい日程は追つて連絡する。ということ以上だ」

どうやら高校最初の夏休みは面倒ごとが重なるみたいだと

俺は嘆息をつき、それを受け入れることにした。

\*\*\*

平塚先生の話の後、部活は解散となり、俺は駐輪場に向かう。

ここで見かけたのはここ最近見ることの無かった亜麻色髪の女子だ。

ついでに対面しているのは男子……つまり告白場面のそれだ。

ちよつとマジでこんな所で？

場所考えようぜ……結構観客いんじゃない。

そう思い俺は気づかれないうちに物陰に隠れることにした。

「あつ、先輩」

「よお矢向、観戦か？」

「違いますよ、私の自転車奥の方なんで通れないんですよ」

「奇遇だな、俺もだ」

「どうします？ ポップコーンでも買ってきますか？」

「俺チユロス派だわ」

「えく、美味しいのに」

もはや俺たちは映画感覚だ。

「い、一色さん。僕とお付き合ひして下さい!!」

その言葉と共に観客からはおお！ と慎ましいながらの歓声上がる。

しかし間髪入れず一色の答えはこうだった。

「ごめんなさい、他に好きな人がいます」

ああとどこかの番組の合成音みたいな声が流れると。

一色は俺たちが見ている観客側に振り返り、気にしない様子でその場を後にした。その刹那、俺と目が合った気がした。多分気のせいだろう。

隣を見るとん／＼と背伸びをしている矢向。

お前結構あるな。どことは言わんけどさ。

「さて帰りますか」

「そだな」

「先輩、帰りうち寄って下さいよ。新作チキン入るんですよ」

「お前遠回しに俺をチキンって言ってるの？」

「被害妄想が激しいですね。まあ当たってますけれど」

「あたってんのかよ」

そんな雑談をかわしながら矢向を置いて家路へと駆ける。

——思い返す。

青は夏の色だ。

しかし俺たちの夏休みはどうやら少し捻くれているようで、それは快晴のような爽快な紺碧色でもなく、

深き想いを貫くような濃藍色でもなく、

思いがぶつかり合って青だけでなくなってしまうた色。

深藍色の夏休みが始まった。

## # 2 1 - 1

夏休み、それは日々勉強に励む毎日を過ごしていた学生達のサンクチュアリ。

ある者にとって1日誰とも会わずに家でクローラーにあたり惰眠を貪り、起きたら適当に平積みされているラノベを読み進め、適当に時間を過ごす。ひたすらにページをめくる手が止まらない。なにこれおもしろい。

どこかの意識高い系が聞いたら消費活動しかやっていないとか非効率とかいってきそうだが知ったことではない。

俺たちは学生であり生産性や効率とやらを高めるとか仕事とか締切とかそんなものにはまだ無関係でいたいのだ。どうせあと6、7年もすれば嫌でも45年の社畜生活が訪れるのだから。だからこそ俺は今のうちにダラダラ貯めをするのだ。ダラダラ貯めてなんだ？　ダラダラって貯められるのか？　貯められたらノーベル賞貰えそうだな。なんに使えるか分かんねえけど。

そんなどうでもいい事を考えていたら部屋の外からドツタドタと階段を登る音が聞こえてきた。多分後数秒ぐらいで勢いよく俺の部屋のドアを開けるだろうと思えば俺は上体を起こす。



予想通り、小町は俺の部屋にノックもせずに入ってきた。

「おにいちゃん、ゲームしよう」

開口一番そんな魅力的な提案を出してきたが、大体こいつがゲームって言ったら罰ゲームがついてくるのである。

多分アイスとかお菓子とか欲しくなって買いに行かせる口実を作りたかったのだろう。

「おう、いいぞ」

まあちょうど読書の最中につまめる何か欲しかったところだ。

その提案に乗ってやろう。

そして俺たちはリビングへと移動し小町がゲームを起動させる。

俺は小町がコントローラーを持ってきてくれるとふんでソファに腰掛ける。

「それじゃ、なにやる？ ドカポン？」

ちよつと小町ちゃん？ お兄ちゃんとの絆破壊でもする気なのかな？

「いや普通にマリカーでよくね？」

「そっかー、分かった」

そうしてマリカーの設置をした小町はコントローラーを持ち俺の所にやってきた。

「よーい、スタート」

「……おい」

小町が腰掛けた所は俺の股下だった。

大股開きにしてとりあえず座りやすくはしてやる。

小町ちゃん？ 何をしてるのかな？ コントローラー持てねえんだけど……

「おい、コントローラー持てねえし見えねえよ」

「こーやって持てばいいじゃん」

そうして小町のお腹辺りに俺の手を回してコントローラーを掴ませる。なんかよく

分からない構図ができあがってしまった。

「なんかコックピットみたいになっちゃったね」

「とうとうお兄ちゃんは物質になっちゃったよ」

ELSと融合してメタル八幡になっちゃうよ。

俺が……ガンダムだ！

ってか、コントローラー問題は解決したが視界の問題が……

とりあえず小町の肩に顎を乗せ視界の確保を図る。

「ちよつ、おにいちゃん。重い、あと何気に痛い」

「お前が俺をコックピットにしなきゃこうはならなかった。我慢しろ」

そう言つて横目で小町を見る。小町も横目で俺を見る。

風呂入った？　なんか少し赤いぞ？

「んふふ〜」

「ちよっ!!?　なんだよ」

いきなり頬擦りして来やがった。ヤメロよシスコンと思われるだろうが。

……しまった、シスコンだったわ。

「なんでも〜、ほらおにいちゃん。勝負だっ!」

「望むところだ」

こうしてマリカー3本勝負が始まった、

しかし俺たち兄妹はマリカーで身体を動かす癖があるから小町は右に俺は左にみえない不整合が発生し、何度も俺の腕が小町の脇腹にめり込んでセクハラ扱いされ、結果俺の負けという事になった。解せぬ。

「んじゃ、何が欲しいんだ?」

「うん?　、小町もいくよ」

……ん?

「あれ?　小町お前、外出たくないからゲーム負けたら買ってきての勝負じゃなかったの?」

きよとんとした様子で小町は俺を見る。

「んーん？ ただ単純におにいちゃんとは遊びたかったただけだよ？」

……なるほど、考えの前提が間違えていたみたいだ。

兄と遊ぼうとする小町、なんて可愛いんだろう。愛でてやりたい。

「なるほどな。んじや一緒にコンビニ行くか」

「小町あつちがいい、おにいちゃんとコンビニにの所」

「千葉のホットステーションじゃなくていいのか？ 少し遠いぞ？」

ちなみに近くて便利の最寄り店は片道30分だ。うん、道民感覚かな？

「うん」

あのコンビニ矢向がいるからあまり行きたくはないのだが、小町からの提案なら仕方が無い。

「んじや、行くか」

「うん！」

そして俺たちは自転車に跨がり、コンビニへと向かう事になった。

\*\*\*

コンビニに入店すると同時に入店音がなり、聞き覚えのある声で「いらつしやいまっ

「!?」と『せ』を仲間はずれにした挨拶が聞こえてきた。

きつと夏の終わりに秘密基地にでも置いてきちやつたんだな。10年後の8月に思  
い出すと思う。たぶん、うん多分。君のことは忘れない。夏はまだ中盤だけだな。

ざけんなよと『せ』が言っているのが聞こえる。きつと幻聴だろう。

「おにいちゃん、アイスどれにするの?」

「そうだな。サクサクのモナカかスーパーパーなチョコチップがいいか迷うところ」

「それじゃ小町スーパーパーなチョコチップ買うからおにいちゃんモナカね。あとで半分こ  
しよっ」

「おう、いいぞ〜」

その後に読書中つまめる適当なおやつを買いレジへと持っていく。

見覚えのあるちっこい奴が何か言いたげに俺を睨む。俺お客なんだがなあ……。

「先輩……彼女いたんですね。なんです? 仕事中の私にわざわざ見せびらかしに来る  
とかほんつといい性格してますね。夏祭り? 彼女さんといけばいいじゃないですか  
知りませんよもう」

頬を膨らませぶいっとそっぽ向く矢向。

まあ知らなきゃそう思うわな。

「お前何言ってるの? 妹だ」

「普通の兄妹って常に手を繋いで買ひものするんですか？」

「しらねえよ。妹が普通だよって言うてんだから普通なんだろう」

「あく、どうも。比企谷八幡の妹の小町といいます。いつも兄がお世話になっているように〜！」

そんな会話を繰り返していると、小町はいつの間にか外面モードに変更したらしくいつもの定文句を自然に口に出す。

「そーいや他の客大丈夫？ と俺は周りを見回したが幸いなことで客が誰も入ってきていないコンビニとしては悲しい状況だった。

「先輩の妹にしてはすごくしつかりしてますね。私、矢向由奈だよ、ゆーなって呼んでいいよ」

「……あれ？ おにいちゃん、中学生がアルバイトして良かったんだっけ？」

小町ちゃん、いきなりぶっ込んできたわね。

外面モード速攻で解除してると珍しいな。

「あはは……こう見えてお兄さんと同級生だよ？」

それを優しく論すように矢向は事実を口にする。

「年齢詐称?！」

小町はそれは絶対に無いと否定する。

……あの表情は完全に俺をおちよくっている時の顔そのものだ。  
「なんでっ!？」

流石の矢向も表情を崩した。

まあ分からなくは無い。

どことは言わんけれど一部を除いて確かに中学生だもんな。

「明らかに中学生だよな? 何中? 同中?」

「な……なかなか失礼ですねこの子……やっぱり先輩の妹だ」

ぐぬぬ……と矢向は警戒心をあらわにした。

「何言つてやがる矢向。これくらいジャブだジャブ」

俺にはもつと辛辣な言葉を笑顔で述べてくるぞ。ああ、兄妹愛が恨めしいぜ。

「その割に……何を食べたらそんな大きくなるんですか? コンビニ弁当つてもしかし

て大きくなる成分が入ってるんですか?」

「ちよっ!?! どこみてるんですか!」

そう言つて矢向は自慢の非売品を両腕で隠す。

「ふむ……コンビニ弁当を取り入れたらそこそこ大きくなるのか……」

うんうんと小町が何度か頷いている。

「お前さつきから何してんだ? こいつ同級生だし」

「こいつ言うな！　ちゃんと由奈って名前があるんだっ！」

うるせえ、細かい所でつかかってくなちっこいの。

「さつきから先輩先輩言ってるしどう考えても年下でしょ？」

あー、なるほど。そういうことか。

「矢向は俺が年上って事を知ってる、と言うか俺のクラスの大部分が多分俺が年上って事しってたよな」

「えっ、おにいちゃんぶっちゃけたの??」

「ぶっちゃけたというか一色が俺呼ぶときの名前な?」

「あつ確かにせんぱいだねえ。なんでせんぱい?　ってなるねそれ」

「っそ、って事で俺が年上って事はバレてんの」

なるほどと理解した様子で何よりだ。

「いやー、すいません。勘違いでしたね。先輩でしたか」

小町は態度を一変させる。

「もう、先輩！　ちゃんと妹さんの教育しておいて下さいね！　あと明後日夏祭りですからね。忘れないでちゃんと来て下さい」

そう言つて矢向からレジ袋を渡された。

支払いはICカードですませておいた。



「ひとつ聞いて良いですか？」

「んあ？ いいぞ」

「なんで先輩は先輩なんですか？」

「それはなんだ？ 俺にアリストテレスやらルソーやらの哲学を説けて言ってるの？」

「そうじゃないですよ。なんで先輩は一年生なのかなって」

「……それは貴方には関係ない事です」

ピシツとした空気が訪れた。

この言葉を吐いたのが小町であり、そこには冗談と言うものは微塵も存在しなかった。

「あれ？ もしかして結構込み入ったこと聞いちゃった？」

流石の矢向もこれには戸惑いを隠せないらしい。

「おにいちゃん、いこっ！」

小町に手を引かれ店を出た。

自転車で跨がり俺たちはアイスが溶けないように急いで帰る

その道中で小町が声を上げる。

「おにいちゃん、あの矢向って人と夏祭り行くの？」

「ああそうだ。……もしかして嫉妬してるのか？」

それなら八幡すごく嬉しいぞ。

「どちらかと言うと心配かなあ〜」

「あれ？」

「ん?! ああ〜最近のおにいちゃんなら気づかないかもね。らしくないしさ」

最近よく言われるのだが、なんだらしくないって。

「とりあえず、そのらしくない理由もちゃんと家で話聞いてあげるから話して見てね」

「おう」

そう言つて俺は急ぎめにペダルを漕いだ。

家に到着して買ったアイスを半分こし、食べながらゲームを始めた。

あいかわらず小町の場所は俺の股下だ。

俺も小町の肩に顔を乗せて絶賛猫背が捗る。

さらに言うとお町の太ももの上にカマクラが丸まっているって言う三重構造。

俺の手をカマクラが小町の手だと勘違いし毛並みに触れる事ができるのがメリットだ。

「ヤツツキの話」

そう口火を切ったのは小町からだ。

「おにいちゃんさ。矢向さんとどうやって出会ったの？」

さっきの話を続きの前に前提を聞いて置きたいといったところか。

俺は小町に矢向と最初に出会った頃の話と期末の時の話をする事にした。

\*\*\*

俺が矢向との出会いから期末のはなしを終え小町からありがたいお言葉を頂けた。

「とにかく、おにいちゃんがああいう系が良いって言うなら仕方ないけれどね。その代わり小町は金輪際近づかないからね。今後おにいちゃんとか絶対言わないから。ずっとロリコン八幡って呼ぶからね」

小町ちゃん。それはお兄ちゃんに死ぬと言っているのと同じ義だから止めよ？ あとお前の先輩だよ？ 矢向。っていうかそこまで矢向もロリロリしくないだろ。ほらあるだろ？ ほら、ほら、どことは言わんけどさ！

「りょうかい」

「ほんとおにいちゃんどうしたの？ ほんとらしくない」

心配そうに小町は俺を横目で見ろ。

「いや、なんだろうな……」

「……そういえば、いろはおねえちゃんは？ 最近話聞かないんだけど」

「最近話してないな……」

どうやらその様子で察したのか小町は寝ているカマクラを起こしてどかせ、八幡コックピットから立ち上がる。

「……はあ、ほんつとおにいちちゃんは自分の事になるとごみいちちゃんだよね」

なんかいきなり辛辣な言葉が出てきた。

おにいちちゃんそんな悪い事した??

「おにいちちゃん、いま何も悪いことしてないって顔してるよね」

そんなに俺の表情って分かりやすいのかね？

「何もしてないことが何よりも悪い事なんだよ」

そう言つて小町は携帯をテーブルから拾い誰かに電話した。

「あつ、いろはおねえちゃん？ お久し振りですー小町です！ 今日つてこれから時間空いてます？ 実は今日小町が急用ででなくちやいけなくて。うん、うん、そこでほんとごめんなさい、兄の面倒見てもらいたくて……、えつ、40秒で支度する？ いえいえいえ、そんな急がなくても大丈夫ですよ。全然1時間あとで。うん、うん。ではすいませんがお願いします。ありがとうございますー！」

流れるような会話を繰り広げ小町は電話を切る。

つてかなんだよ、会話の流れから一色が家に来んの？ マジか……

小町は俺に指をしてふふんとなにやら自慢げなご様子だ。

「おにいちゃん。あした小町の作文手伝つてね！」

いきなり面倒くせえイベントぶつ込んでくるなよ……

「ああ？ まあいいが、急用つてなんだよ」

「ちよつとね〜」

そう言つて小町は誤魔化して教えてくれなかった。

「いろはおねえちゃんとか何があつたか知らないけれどさ。でもおにいちゃんには必要の人なんだなつて事はよく分かつたよ。」

「どういふことだよ」

「兄妹だからね〜。わかつちやうんだよ〜」

小町ちゃん？ 俺小町ちゃんのこと全く分からないんだけど、それでも兄妹なら何でもわかり合えるとか言うつもりなのかな??

そんな思いとは裏腹に小町はそのまま自室へと消えていった。

## # 2 1—2 こうして彼女達は邂逅する。

ベッドの上で寝そべって、たまにゴロゴロと転がる。

なんだろう、この夏休みをどう過ごせば良いか分からなくなっている自分がいる。

予定が無いわけではない。それこそサッカー部の大会のことや、適当に誘えばいつでもやってくるような男子はいくらでも居てすぐに1ヶ月満席御礼の予定を組むことができる。

私から適当に人を誘えば楽しい夏休みを満喫することができるのだ。

しかしそこまで労力を持ってして心から楽しめるかは多分期待値以下で、その結末を知っているからこそ私の行動しようという意欲を鈍らせる。

そうだ、せんぱいを誘えばと思い携帯を手に取るがそれまでだ。

私は私と約束したのだ。「私からは連絡はしない」と。

自ら線引きをしてせんぱいとの距離を自然と開けていく。脱重い女大作戦。

ただ私から何も行動しなくなるとあの人ほんとに何もして来なくなり、今までの私の行動はなんだったのだろうと悲しくなってくる。

流石にムカついたので借りてた本を一式目の前に置いて出て行ってやりました。

それではんぱいととの接点がさらに無くなり、自分で自分の首を絞めちゃったんですがね。

最初は今すぐにでもこのルールを終わりにしてせんぱいをおちよくりに行きたかったけれどその先にあるのはただのなれ合いで……進展が見込めなさそうでした。それならと我慢できた。

最近は何れてきたのかそこまで苦しく感じることは無くなった。

もしかしたら私はせんぱいに依存していたのかもしれない。

依存症って怖いなあ……やばいろは。

あー折角の夏休みが色あせていく。

せめて夏休み前に予定の10や20をせんぱいと約束するべきだった。

あの人暇でしょ、クーラー効いた部屋でラノベ読んでるくらいの想像はつく。

夏休み中に絶対家から出ないレアキャラと化した先輩と外で会うのはかなりの低確率だ。

これは夏休み中は諦めた方がいいかな？

そう思っていた矢先、持っていた携帯が鳴る。

夏休み前はひっきりなしになっていった携帯だが学校に行かないとそうそうになる事は無くなっていったけど誰かと画面をのぞき込む。

「ん?」

せんばいの妹☆小町ちゃん并表示された着信に私は即座に受電のボタンをスライドさせる。

『もしもし?』

『あーいろはおねえちゃん。お久し振りですー小町です』

『小町ちゃん、おひさ〜どうかした?』

『今日つてこれから時間空いていたりします?』

『うん、空いてるよ〜』

『実はですね〜、小町が今日急用で外に出なくてはいけなくて〜』

『あーそうなんだ。忙しいようだね受験生』

『うん、うん、そこでほんとごめんなさい、兄の面倒してもらいたくて……』

なんと言うことだろう、願ったり叶ったりの申し出では無いか。

やはり小町ちゃんは兄と違つてできる妹だ。

『えつ〜ほんと? わかつた〜30分で支度する〜』

『えつ、40秒で支度する? いえいえいえ、そんな急がなくても大丈夫ですよ。全然1

時間あとで。』

ちよつ、小町ちゃん、聞き間違え?



そんな事いつてまさか近くにせんばい居ないよね？ それじゃ私がすごい会えるの  
楽しみにしているみたいじゃない。

『わかったー近くについたらまた連絡するね』

『うん、うん。ではすいませんがお願いします。ありがとうございますー！』

そう言つて電話を切る。

私のやる気は先ほどとは比べ物にならないくらい満ちあふれていた。

\*\*\*

「ひさしぶりだなあ〜」

そう言つて私が立つのはせんばい家の前。

恐る恐るインターホンを鳴らす。

ピンポーン音と共に施錠が外れる音が扉から聞こえた。

扉が勝手に開くと久し振りの小町ちゃんの顔が出てきた。

「あ〜、いろはおねえちゃん。お久し振りですー！」

「小町ちゃんおひさ〜元気ー？」

「大きな怠け者がいますからね！ 元気じゃ無いとやつてられませんよ」

そんな雑談を交えながら私はリビングに案内される。

視界にはハーフパンツとTシャツでレースゲームをやっているせんぱいが網膜に映る。

久し振り過ぎて何を話して良いかわからない。

昔行きつけでよく通っていた店なのにひよんな事からいかなくなり店長とかと遭遇しても何を話して良いかわからずよそよそしくなってしまう。

今の私はちょうどそんな現象を体現していると思う。

「ごめんなさいね。何も出せなくて」

「いいよ、そんなに気を使わないで」

「それじゃ、おにいちゃん。小町ちよつと出てくるからうちちゃんとお留守番してるんだよ〜!」

「へいへい〜」

「いろはおねえちゃん放置しないように!」

「へいへい〜」

この2人を見ていると飽きないなあ。

どっちが年上なのやらとほっこりとする。

「いろはおねえちゃん。今日は両親いないんでっ! ねっ! ガツと、バツと、既成事実

つくつちやつて大丈夫ですからねっ！」

キャピツ☆とウインクしながら可愛らしくいつてもその言葉の印象は変わらないからね？

小町ちゃん？ あなた本当に中学生ですか？ どこでそんな言葉覚えたのやら。

「おい、小町。さっさと行けよ」

「はいはいーいつてきまーす」

そう言つて小町ちゃんが玄関から出る音が聞こえた。

急用つてなんだろう。

そして、誰も会話の中心人物がいなくなり、せんぱいがやっているゲームの音のみがリビングに流れる。

「……」

だいぶ気まずい。どうしよう？ 何から話せば良いかな？ 元気とか？ それお父

さんがよく言う「学校は……どうだ？」と同じで多分3秒くらいで会話が終わる奴。

「なあ、一色……」

「は、はいっー！」

気まずそうにせんぱいが私に声をかける。

「ちよつと声かけられただけでも何故か嬉しい感情が芽生える。

「ゲーム、するか？」

「そう言つて私にゲームのコントローラーを差し出してきた。

「えつと……はい……」

「私も差し出されたコントローラーを手に取る。

「その時に少しだけ先輩の指が触れた。

「ただそれだけなのに、鼓動が跳ねる。

「そして後追いで嬉しい感情がやってくる。

「一瞬だけ感じたほんのりと温かな体温。

「んじゃ、マリカーやるぞ」

「そう言つてせんばいは頭をわしやわしやとかき乱しながらそつぽを向く。

「……もしかして？ 照れてます？

「んふふうく？ 照れてるんだ？ 照れてるんだあ？

「私の悪戯心に火がつく。この状況を楽しまずにはいられない。

「私は4名掛けソファアの先輩の隣人1人を開けた距離に腰掛ける。

「せんばい私、これでも昔マリカーはよくやっていたんですよ？ 負けませんかね？」

「ほー、俺も小町に鍛えられた腕を見せるときが来たようだ」

「へえ、勝率はどうですか？」

「135戦全敗」

想像以上にやり込んでますね。しかも全敗って……

兄妹でどんだけマリカー好きなんですか。

「ダメダメじゃ無いですか」

「プレイヤースキル以外の所で俺の負けが確定すんだよ」

「なんですかそれ？」

「大好きなお兄ちゃんには小町を悲しませることはしないよねとか言ってきたりスキンシップが多いんだよ」

「完全に接待プレイですよ。それ」

「そうなんだよな」

まあ小町ちゃん相手ならそうだよ。ね、せんぱい絶対勝てないし。

「それで……私なら勝てる？ 良い度胸じゃないですか。受けて立ちますよ！」  
「望むところだ」

そう嬉しそうに微笑む姿がすごい好きですよ。

そしてゲームが開始した。

ゲームの仕様が分からないのにいきなりスタートダッシュを切った先輩は本当に大

人げないと思います。

「う〜つとお」

しかしながらちよつとした発見もあった。

せんぱいってゲームをするときは身体も動く人なんですねぇ。

なるほどなるほどお。

私はせんぱいと同じように身体を動かしている振りをしながら徐々にせんぱいの距離を詰める。

そしてせんぱいが身体を動かし、私の肩に当たる。

「うおっ!?!、一色おまつ!?!」

予想通り驚いてくれた様子。

言葉まで詰まらせてとても可愛らしい光景。

「おつと〜」

そう言つて私もまた、身体を動かし、せんぱいの腕に肩をくつつける。

せんぱいのキャラが蛇行運転を始めている。動揺している証だ。

それにしてもせんぱいちよつと汗くさい?

ちやんとお風呂入りました?

「あれれえ〜? せんぱい、どうしたんですかあ〜?」

せんばいの顔を見ながらいたずらに笑ってみる。

「うっせ、お前も小町と同類だ！」

少し赤めた表情の彼を見るのはやっぱり楽しい。

そう言いながらせんばいがコースアウトしている隙を突き

そのままゴール。完全勝利いろはちゃんですつ！

せんばいは「あゝ あゝ」と悔しそうに言い、ソファーに力なくもたれかかった。

「ふふん〜せんばいもまだまだですな〜！」

「お前ほんとあれマジでずるいぞ？」

どきどきしましたか??

私はしましたよ。フルスロットルでした。

というか久しぶりすぎて歯止めが効かないんですよ。

「あの程度で心を揺らがせるせんばいが悪いんですよだ」

「あれをあの程度で言ったら他の奴ら一体どんだけ精神力鍛えられてんの? 俺以外

みんな人生何週目なんだよ」

それ、他の男子に同じ事言われてるって自覚ありますか??

「そんな事よりせんばい。ちよつと汗臭かったですよ? お風呂入りました??」

「あー、そういえばさつき小町と外出してたからな。すまん」

「お風呂入ってきたらどうです？ その間私何か買ってきましたから。何か欲しいものあります？」

ついでに夕ご飯の材料買ってきますからね。

流石にもう学校ではできそうにないですが……家でなら良いですよ。

「おお、まじか。んじゃすまんそうさせてくれ。とりあえずマツ缶買っておいて貰って良いか、お代後で渡すわ」

まさか家でも飲むんですね。将来糖尿なりますよ？

そう言つてせんぱいは立ち上がり、テーブルに置いていた家の鍵を私に渡した。

……?!?

「えっえっ!? せんぱい口説いてるんですか?? 実家の鍵渡すつてことはつまりはあれですよねあれそうあれっ! 信用してくれてるつて事ですよね!!!? 通い妻いろはちゃんにクラスアップですか? でもそれはちよつと……まだもうあと3年は待つて欲しいですごめんなさいっ!!」

そう言つて深々と頭を下げる。

いろいろとテンパつて思つてること全部口出しちゃった……

「いやちげーから、俺風呂入つてるのにお前外出るつて誰が戸締まりするんだよつて話だろうが、つてか後で返せよ?」



まあわかっていた話なんですけれどねー。ちよつと言わずにはいられなかった感じ何ですよね。

「せんぱいが閉めればいいじゃ無いですか」

「誰が開けるんだよ？」

「せんぱいが……っ!？」

ちよつとだけ想像力が豊かな私はこの先の展開を瞬間的に想像できてしまった。

指を鳴らす幻聴が聞こえる。

……話をしましょう。

もし私が、せんぱいよりはやく帰ってきた場合、お出迎えするのはお風呂の途中で急いで上がってきた半裸の水にしたたるいいせんぱい……

あつうん。そんな装備で大丈夫かっていうかちよつと刺激強すぎて耐えられる気がしない。

全然大丈夫だ問題ないとか言えない。致命的な問題が発生しています。

何をしているんでしょうか私に前に教えてもらったゲームの台詞があまりにも印象的でしたんでついつい出てきました。

「そうですね、ここは一旦鍵をお借りします」

「んじゃ、すまんがよろしく」

そう言つて階段を登つていった。

せんばいの部屋が多分2階にあるのだろう。

さて、私も買ひものをすませてきますか。

そう思い立ち立ち上がりまた玄関をくぐるのだった。

\*\*\*

マップアプリで見つけたスーパーで適当に買ひ物を済ませる。ちよつとだけ距離があり少し疲れた。せんばいから近くのスーパーを聞いておくべきだったと後悔した。

とりあえず簡単にできる麻婆豆腐の素と挽き肉、長ネギを購入する。玉ねぎはせんばいの家にあつたのを確認済みだったので特に必要はないかな。

あとはご飯があればお腹は膨れるはず。

必要最低限のものを買ってスーパーから出て、やってきた道を引き返す。

ふふー、実はもつと凝つたやつ作りたいんですけれどねー。

でもでも家に来ていきなり台所占拠するとかうちよつと図々しいっていうか重いか思われちゃいますからね？

……あつ！

絹ごし豆腐買うの忘れてた……

これではただの麻婆挽き肉になってしまう。

……それだけでも美味しそう？

まあでも、やっぱり麻婆豆腐のメインは外せない。買いに帰ろう。

そうしてまたスーパーへ戻る途中に声をかけられる。

「あれ？ 一色さん？」

「あつ、矢向さん」

## # 2 1—3 そして彼と彼女は一步を踏み出した。

日もだいぶ傾きあたりも薄暗く、道路脇に設置された提灯が灯った時刻、少しだけ気温も下がったかなと感ずる今日この頃。

「珍しいね。こんな所で合うなんて」

まさかの矢向さんと遭遇するとは……いやー、何という偶然。

正直あまりしゃべったことないんだけど。

こんなキヤラだったっけ?? もっと物静かだったような……

「ホント偶然だね」

そう言つて矢向さんの視線が自然とビニール袋に注がれる。

「一色さんこの近くに住んでるの?」

そーだよねー。普通聞かれるよねー。

「実は知り合いの家に今日遊びに来ててさ」

「へえーそうなんだ。それつてーもしかして彼氏??」

悪戯に笑いながらそんな話をしてくる。

あれ? 私たちそこまで仲良かったっけ?

「そんなことないよ？ 普通に女の子」

私は小町ちゃんに呼ばれたから。せんぱいはそのお兄さん。？は言っていない。

「そうなんだ、一色さんならなんか居そうとおもったんだけどなー」

そりゃ私も欲しいわ。

お金持つてて、時間守つて、暴力なんてもつてのほかでさわるとほのかに暖かい人！

ATMとか言わない！

「矢向さんは？ 買い物？」

「そうそう私も夕飯の買い出し〜」

「だよね〜、もうそんな時間だしね」

「うん、ほんとそうだよね〜、うちつてコンビニやってるんだけどさ、お父さんとかはもうコンビニですませようつてばかり言っちゃつてー。たまにはコンビニ飯以外のものも食べさせてあげたいんだよねー」

へえ〜矢向さんの所つてコンビニやってるんだね。

なんか接客とかやっているからかな？ 話しやすいなく意外な一面。

「へえ〜、いいじゃないですか。コンビニ弁当だけだと身体に悪そうだしね」

「そうそう、明後日のために体力付けてもらわないとー！」

「明後日?? 何かあるの？」

そう言つて矢向さんが道路脇の提灯に目をやる。

「明後日ね、この地区の花火大会やるんだ。ちよーつと規模は小さいけれどね」

あー、提灯があるからいつかあるんだなって思つていたけれどそんな直近なんだね

「へえーそうなんだね」

「規模は小さいって言つても結構混雑はしちゃうんだよね。ただ……駅の近くにちよつとだけ高台になつてる公園があつてね。そこ花火見るときの穴場だったりするんだ。一色さんもし行くなら参考に……んふふふ」

「うん、ありがと」

……いやーそれにしてもやけに幸せそうにそんな事を語るもんだからついつい女子の血が騒いでしまいますねえ。ここはちよつとその沼に指先だけ触つてみることにしますか。

「おやおやあ？ 矢向さんもなかなか幸せそうな顔だけでもしかして？」

「そうそう。ちよつと気になる人とお祭りに行く約束してえ……、えへへえ」

そうやって顔を赤らめて恥ずかしそうに顔を隠す矢向さん。

やくん、かあくわあくい……つとでもいうと思つた？

何年も一色いろはやつてるんだからこれくらいすぐわかるつての。

この話が本題だったんだろう。だからテンション高めだったのか。わかるわかる、私

もせんばいに撫でられたときは一日中ハイテンションだったしね。

ただ、彼氏自慢のろけマウンティングを一時間コースで聞いている暇はないの。豆腐が売り切れる。

のろけが始まる前に早く切り上げよう。

「あつ!? ごめーん! ちよつと買い忘れあつたんだつた! なくなる前にいかなきゃ!」

「そうなんだ! ごめんね。引き止めちゃつて」

「ううん、また時間が空いてるときその後の話、ゆつくり聞かせてね!」

「うん、じゃあね!」

そう言つて矢向さんと別れ、無事絹ごし豆腐を買うことができた。

それにしても矢向さん、男いたんだね。

あらあら、せんばい。お気に入りには彼氏持ちになる数秒前、残念残念。

そんなことをニマニマと考えながらまた私は先輩宅の玄関をくぐる。

「ただいま」

「よお、遅かつたな」

既に先輩はお風呂から上がっていたみたいで、残念ながら私の妄想上にいる水に滴る良いせんばい、筆記体英字のH A C H I M A Nをこの世に拝むことはできなかつたんだ

けれどそれでも……

なにこの夫婦みたいな会話。最高なんだけど。

「なにニヤニヤしてんだよ気持ちわりい」

水と塩入れて煮てやりましょうか？ 水煮も滴るヒキガエルができますよ？

「むっく!! いきなりなんですか！ せんぱいに言われたくないですよ！ 笑うとヒキ

ガエルになるくせに！」

「んだところら？ いいのか？ 年上の男子高校生が大泣きすんぞ？ いいんだなおい

？」

そう言つてまた頬を引つ張られた。そんなにといか全く痛くはない。

以前はそれで恥ずかしがつてた癖に今はそんな気配全く無い。自宅つて所が大きな力になっていきますね。んふふ。

「ししつをいったらけしやないでふかー！」

頬から手をはなすとどうやらビニール袋にめがいったようだ。

そこですんぱいは私の頬から手を離す。

もう少し触つても良かったんですよ？

「なにこれえ？ 夕飯？ なんで？」

「せんぱい？ 小町ちゃんの真似ですか？ 兄妹なのにせんぱいが言うのと逆に気持ち悪



いですね」

「まだ言うかよ」

また頬つねる気ですか？ いいでしよう受けて立ちましよう！

そう思つて仁王立ちで迎え撃つたら先輩が何も無い所でこける。

体勢をくじいたせんぱいが私に向かって倒れ込み、そんなせんぱいをわたしは流石に

支えきれず一緒に倒れてしまった。

「……!!?」

倒れた衝撃はそこまででしたが体勢がちよつと近づきすぎて……

先輩の顔が見事に私の胸のど真ん中にホールインワンして埋まっている。

うーん。どこぞの少年漫画みたいな展開ですね。

せんぱいはなんか化石みたいに動かなくなってしまうてるし。

ここで甘い悲鳴の1つでも叫んで先輩のほっぺに季節外れの紅葉を付けてやれば良

いオチで済むんですが。そんな気が全く起きない。

むしろずっとこうして居たい気持ちがあつたりします。

それにしてもせんぱい、さつきお風呂入つてたからかシャンプーの香りが私の我慢を

うちけしていくのですが……

このままでは非常にまずい。

正直いままで距離を置いていた反動で感情の抑制力が皆無なので……

「せんぱい……」

私の意志に反するかのように腕が動き彼の後頭部に回る。しつとりとお風呂上がりの人肌少し暖かなその温もりは私の我慢を奪う。

「い、一色。ちよつとまで。これはまずい」

ようやく状況を理解したのか焦るせんぱいの声が微かに残っていた私の理性を決壊させた。

不思議と腕の締め付けを強くしてしまふ。

あつ……これも無理。せんぱい、せんぱい。私の気持ち、受け止めて下さい。

「せん……ぱい……わたし、私ねっ……」

わたくし一色いろはが覚悟を決めた矢先、玄関の施錠が外れるガチャという音が聞こえた。

どうやら時間切れの合図が鳴ってしまったようだ。

「たっだいまーおにいちゃーん!! 今日のお夕飯は豚の生姜焼きだよー! やつぱり特売はいいねえ〜! 戦場だよ〜! 生きてるって感じがするよ〜!!! ……つあ」

小町ちゃんは謎のハイテンション怒涛の勢いでドタドタと玄関を上がつて来て私たちの身を整える隙すら与えなかった。多分、小町ちゃんに見えている光景は私に覆い被

さるような体勢のせんぱい。胸の谷間に顔を埋めているせんぱい。そしてそれを受け入れるように後頭部に腕を回している私。誤解しないわけが無い。

その光景を目の当たりにした小町ちゃんは目を右往左往動かしながら頬を赤くして両手の人差し指をいじいじしながら気まずそうにこう言う。

「おじやま……でした?？」

\*\*\*

テーブルに置かれるのは大皿に盛られた麻婆豆腐と3人分の平皿に盛られた千切りキャベツと豚の生姜焼き結構がつつりめな夕食が仕上がった。

小町ちゃんといっしょに料理をしたときは流石にちよつとどう話せば良いかわからなかったんだけど……このまま夕食も気まずい雰囲気で行ってしまいかと思うと少し気が重たくなる。

そして3人テーブルに座りいただきまずをしたすぐさま小町ちゃんは口を開いた。

「おにいちゃん、いろはおねえちゃんが夕飯買いに行ってるなら小町にも教えてよ」

「んなこと言ったってまさか夕飯まで買ってくるとは思わなかったんだから仕方がない。ってかお前もどこ行ってると思ったら特売かよ。お前ら勝手に行動しすぎ、よって

俺は悪くない」

「んもうく使えないごみいちやんだなあ」

「へいへい、サーセンしたー」

きつと小町ちゃんなりに気を使ってくれたのだと思う。

本当にできる子ですこと。せんぱいの妹ってほんとですかね？ いや、そうじゃなくては困るんですが。

「ごめんねー私も次から気をつけるね」

「そんなそんな、いろはおねえちゃんが作ってくれるなら小町もら……助かるからすごい嬉しい！」

この子本当にせんぱいの妹ですね。楽したがるところとかそつくりです。

「んんくっ！ この生姜焼きすごい柔らかいね！」

「そうでしょそうでしょ？ いろはおねえちゃんが用意してたタマネギのみじん切りの中に豚肉を入れておくだけであら不思議！ 柔らかくなるんだよね」

つけてたの5分くらいじゃなかった？

あまり柔らかくならないと思うんだけどなあ……

う。下処理をちゃんとしていたからだとおもうよ？ まあ野暮なことは言わないでおこ

「それにしてももうお二人がここまで進んだ関係になつているとは驚きの展開速度に小町は驚きを隠せないよ〜」

食べている生姜焼きを吹き出しそうになつた。この話題やめよ？ 恥ずかしいし。

「これは叔母小町になるのも秒読みですね〜、でもでも〜おにいちゃんもいろはおねえちゃんもまだ高校一年生なんだから順序すつ飛ばしたりしたら小町悲しむよ?？」

「安心しろ小町、俺は小町一筋だ」

「おにいちゃん……小町もおにいちゃん一筋だよ？ ……あつこれ小町的にポイント高い」

ホント、この兄妹。せんばいのシスコンは最初からわかつてたことだけど小町ちゃんもブラコンの気があるのよねえ〜

「それを言わなきやポイント高いんだがなあ……」

「でもでも、小町と同じくらいいろはおねえちゃんも愛してほしいなあ〜」

「なにそれ？ 俺と一色が付き合う前提で話進めてる?？」

「えっ!? あんな事しておいておにいちゃん責任とらないとかクスオブカスだよ」

「あんなことつてあれはただ体勢ミスつて倒れただけだつっうに」

「えー、お兄ちゃんお風呂呂まではいつてたし。それにいろはおねえちゃんもその気になつちやつて完全に受け入れてたし……レディーパーフェクトリー、役満だよ」

最近の中学生ってそんな事も知ってるの？ 進んでるなあ。

「小町ちゃん、ちよつとその話私も恥ずかしいからやめよ？」

「だよねくおにいちゃん！ 食べ終わったらマリカーやろー！」

何という変わり身の早さ。

ちよつとびつくりしちゃいましたよ。

「おつ、いいぞ。一色いるからコックピットはなしだかな」

コックピット？ 何の話だろう？ ゲームの種類？

「えー、まあいいけど。やりづらいし」

「やりづらいのに何でやったんだよ」

「おにいちゃんとのスキンシップ？」

ああ先輩少し嬉しそうだ。ほんと顔に出るね。

「小町ちゃん？ 疑問系になったの八幡的にポイント低いよ？」

「えつ、だつて本音話したらおにいちゃん泣くし」

「えつ、まじで？ じゃあ聞かない」

「えー、ここ気になって聞くとおこころでしよー」

「んなことより、マリカーやるんだろ？」

「そうだった。おにいちゃんおちよくるの楽しくて忘れてた」

「俺おちよくられてたのかよ……」

\*\*\*

「いやー楽しかったですね〜!」

そう言った私とせんぱいは夜道を歩く。

すっかり辺りも暗くなり心配した小町ちゃんがせんぱいを私の自宅前まで送れと勅命を出してくれた。

なんだかんだマリカーも盛り上がって面白かったんだ。

主な趣旨は先輩の反応を見て楽しむ所なんだけどね。

「お前も小町もゲームで勝てよ。ダイレクトアタックとか卑怯過ぎだろ」

「勝つ手段は1つとは限らないですよ」

「せめて手段は選べよ」

そんな他愛もない話をしながら私は企んでいた。

「せんぱい。小町ちゃんから聞いたんですけれど」

「んあ? また小町インフォメーションか?」

どこかにありそうな名称ですね。

「まあそうなんですが、せんぱい、誕生日が近いらしいですね」

せんぱいはなんかポリポリと頬を書いている。

「まあな」

「ならせんぱい！ 私と実験しましょうか、私の思い人のために！」

「なんで俺の誕生日にお前の実験付き合わせといけないの？ 面倒くせえ」

「えー？ なんでするか誕生日でも一人で可哀想な先輩を誘ってあげてるんですよ？」

「……断つてはいない」

……あれ？ ほんとだ？

「……どうしたんですか？ らしくない」

「お前も言うのかよ……」

「まあ、はい。そりゃく、普通なら嫌だよ絶対行きたくないは最初から言ってくるものだ

と思っっていましたからね」

「まあ良いだろ……気分だ」

「んふふくなら決まりですね」

それから世間話をたまに挟みながらゆっくりと駅へと向かう。

「なあ、一色」

「ほい？」



どうしたんですかせんぱい？ 真剣な顔して？ お腹痛くなっただんですか？ それきつと夕飯のせいじゃないですよ？

「なんつーか……あれだ……お前あの時……なんて言おうとしたんだ？」

……

頭の中が真っ白になるとはこの事だ。

うん、理解してる。倒れ込んだときに言おうとした言葉のことでしよう。

街灯と赤提灯が私と先輩の姿を照らしていて

鈴虫がこの場のBGMを奏でるかのようになりんと鳴り、私の鼓動も早まる。ついでに顔も熱い。

最高速度の脳回転を行いそれでも最適解の答えが見いだせなかった。

「えつと……その……」

そうだ……私、せんぱいに思い伝えようとしたんだ。早口ですらちゃんと聞いてる人なんですから。

流石に聞き逃しているはず無い……ですよね。

「まあ……あれだ。その……実験の日までについて事で良いか？」

「えっ……あつ……はい……」

どうやら執行猶予をかせられたようで、熱の籠もる頬をどうにか押さえ込みたいために辺りを見回す。

提灯が道の端に吊され赤く灯っている。

この変な空気を変えるために口にする。

「そ、そういえばせんぱいはお祭り行くんですか？」

するとせんぱいはあたりの提灯を見渡しながら嫌々そうにこう呟く。

「まあ、用事で……だな」

「ふふっ……どうせ小町ちゃんに屋台のぐいはんねだられてるんでしょ」

「そんなところだ」

そんな、他愛も無い話をしながら私たちは駅へと向かう。

わざと手を振り子にし、さりげなく何度もせんぱい指先に触れさせながら。

## #22 ゆえに彼女は食らいつき、色は次第に濁りゆく。

転がる、転がる、転がる。

ぬいぐるみを抱きしめたまま右へ2回転、左へ2回転、ベッドの上で転がり続け、気づけば時計の4の数字に短針が指し掛かっていた。前に時計を見たときの短針は9時を指していたはずなのですがまあいいか。

ただ転がっている訳ではない。

この内に秘めた有り余る感情と妄想を発散させるために転がっているのです。

たまに満足げに『むふう〜』と気色悪くほくそ笑むのも内に秘めようとしても収まらず、ぐつぐつと煮えたぎるように沸き出すゴーイングマイ上へな感情と妄想を発散させるために発しています。

決して奇行では無くこれは目的のある行動である则他の人に見られたときの言い訳に使用おうと心の中で決め、私は転がる。ゴロゴロゴロ……

もうねっ！ もうねっ！ 完全に意識していますよねせんぱい。付き合うまでの秒読み開始みたいな感じじゃないですか。完全勝利いろはちゃんじゃないですか。まあ……言うの私なのが癪なんですがね。そこは仕方が無い、先に話を振ったのが私なのだ

から責任を取りましょう。終わりよければすべてよし、結果が付き合うに収束するのでしたら問題なしですよっ！

すごいカレンダーで幾重にハートで囲った8月8日が待ち遠しい。ずっとこの事考えてゴロゴロしてられる。

夏休みせんぱいとどこ行こう？ もう付き合うならいっばいいっぱい予定入れられますよね。

せんぱい人混み嫌いそうだからデイスティニーランドとかは除外されると思うなあ。楽しいのに……

ならどこか公園を散歩とか。海浜公園とか良さそう。あーひなたぼっこしながら読書してそうせんぱい。あーでも太陽がまぶしい溶けるとか言ってきそう。面倒くさいなあ……。でもあそこ長居すると潮風でベツタベタになるからずっと居るには適さないですね。

ならなら水族館とかは空調も効いてるしせんぱいも楽しめると思うんだ。他にもゲームするならVRの施設も最近できたって聞くし！ せんぱい意外と映画好きそうだし行く場所ならいくらでもある！ せんぱいとならどこ行っても楽しい！

どうせなら……と、泊まりでどこか……行っちゃいます？ ……きゃくっ!!  
妄想が捗り何往復か転がった後にふっと冷静になった。

……うん。小町ちゃんが許してくれなさそうな気がしますね。欲張りは控えよう。それなら……

そうだ！今日はせんぱい確かお祭りに行くとかいつていたなあ。

偶然を装って会いに行けるかな？ちよつと重いかな？なんで居るのとか言われないかな？まあ適当に言い訳を考えておけば問題ないですか。

そう思い立ったが吉日私はずっと抱きついていたべんちゃんを手放し身支度に勤しんだ。

\*\*\*

祭り囃子が祭り会場内に響き、耳に入るとお祭りに来たんだという気持ちになるから不思議なもので。

日は既に沈み、祭りの本番である花火大会があと少しで始まるとのアナウンスが流れていた。

せんぱいのことだから暑い昼とかは避けて日が落ちることを狙って行きそうだから私もそれに合わせて来てみた。

ぶつちやけ会わなかったらそのままお祭りとは花火を楽しめばいいのでどつちでも楽

しめる。策士いろはちゃん！

それにしても……小規模っていつてたけど結構人がいるなあ。

出店が道の脇に連なり焼きそばやらお好み焼きやらベビーカステラの良い香りが空腹を誘う。

軽くつまめるベビーカステラを買ってお祭りを散策することにした。

お祭りって言ったたらこれでしょ。ガッツリ行きたいときはたこ焼きって決まってるの。

屋台を散策していたら懐かしいものをやっている屋台が見つかった。

「へえ、型抜き屋だ。懐かし〜」

そう思い私はその屋台に近づく。

屋台に設置されて居るテーブルで数人の子供達がいそいそと針で型の溝を削っていた。

これねー、いくら時間をかけようとも屋台のおじさんがルールブレイカーだから絶対に100点にはならないんだよねー。闇だよ闇。でも長く楽しめるものではあるよね。

そんな必死に型を削っている子供達を見ると私もやりたくなるのがまたお祭りの定め、1回300円とちよつと割高ですが、まあ1回やってみることにします。

そう言つて屋台のおじさんに話しかけたら、どうやら可愛いからと言つて半分は切つ

てくれた。こう言うことは日常茶飯事の事なのでとりあえず愛嬌を最前面に出してお礼を言えば良い。ふつ、これが可愛い女子高生の役得つて奴よ。

子供達がずるいーとか言っているのは聞かないことにした。

久し振りにやるが、やはり一筋縄ではいかない。というか板が絶妙に硬い。

これギリギリまで硬度あげすぎでは無いだろうか。刺せないってどういうことですかね？ 削って行くしかない。

ここで私の戦いが始まり、なんとか型を削りきる頃には既に1時間が経過していた。熱中しすぎた。

とりあえず削りきったブツをおじさんに渡すとまたサービスだと言って、+1000円の利益がでた。時給1000円とかほんとやってられない。

そんな型抜き屋を後にして、適当にぶらぶらと屋台を見て回る。やはりそうそうにせんぱいには遭遇するはずも無く、時間はあつという間に過ぎて行つた。

しばらくし、林檎あめを買っていた最中に、花火大会開始間際のアナウンスが辺りに響く。

ちょうど良い頃合いになったのだろう。そのアナウンスに従い人々は移動を始める。

今日はひとり身で来ており別にメインの会場に行かずとも見ればそれで良いという考えに至つた。メイン会場は人でいっぱいになるし、帰りのことを考慮して、ちよつ

とお祭りから離れて駅近の良い感じの所があればそこで花火を見るのも悪くないでしょうし。それにせんばいにあえなかつたのに一人でメインステージ行くとか苦行以外の何物でも無いしね。

そう考えを締め、たこ焼きと林檎アメを持って祭り会場を後にした。

\*\*\*

帰る途中、ふと先日矢向さんと話したときに聞いた駅近場の高台の公園へと赴いた。

家族連れがちらほらと居るのでもしかしたらここは穴場なのかなと思ったり。

折角だしベンチにでも座ってたこ焼き食べながら花火眺めますかと思いい視線をベンチに向けてみたがどうやら逢い引きしているカップルがいる。

まったく人目もはばからずイチヤイチヤして……どれ、今後の参考に。

そのカップルに目を凝らしてみると見覚えのある髪型と特徴的な目つき。女の方はやけに小柄な人だ。

その2人が誰かを認識した瞬間、すぐさま街灯の照らさない暗闇に姿を隠す。

あれはせんばいつ……と矢向さん？



信じられない光景に息をのんだ。

先日彼女が言っていた言葉を思い出す。

つまりはそういうことなのだろう。

まさかここでその話をもう少し詳しく聞くべきだったと後悔することになるとは思わなかった。

先ほどまで昂揚して高まった感情は静かになり、好奇心が私の胸に絡み離してくれない。

だって私とせんぱいってもうあれです。両思いなのになにこれ……。

せんぱいは小町ちゃんのお土産を買いに祭りに行くとそう同意をしていたはず。

と言う事は偶然会ったのかな？

いや、それだったら矢向さんは花火大会メインイベントまでいるはずだ。つまりは前々から約束していたという結論になるわけで。

と言うことは……

私、せんぱいに？つかれてた？

様々な憶測とざわつく感情が駆け巡るがこれは私の感情であって目の前の2人がそういう関係である事実では無い。

故に私は近くにある遊具に隠れ、2人の成り行きをながめる事にした。

\*\*\*

隠れた遊具は結構先輩達から近いのか結構よく聞こえた。  
つてか完全にこれ盗み聞きなんだけれど良いのかしら？

まあ、2人も私の告白現場見てたんだからイーブンだとは思う。

相手が変わるところで告白してきたせいだけだね。

「ねえ、先輩」

「なんだ？」

「今日は楽しかったですね」

「まだメインディッシュ残ってただけだな」

「確かに」とはにかむ彼女の横顔……ほらせんぱいが挙動不審になつてるじゃないですか。  
か。

「久し振りにお祭りにいけて楽しかったですよ？ いつもは手伝いでお祭りなんてこ

こ数年行ったことなかったんです」

「そりゃ良かったな。たまの息抜きで来たんだつたら良いんじゃないか」

「そう言えば彼女のお家って確かコンビニ経営でしたっけ？　ならしばらくお祭りなんて家の手伝いで行けてなかったからという口実で誘ったんですね。ふむふむ、そんな口実あるんならあのお人好しはごり押せば釣れますね。今度そう言う方向で誘ってみますか。」

「そうですね〜」

「そう言つて無言になる二人。私は買つておいた林檎アメをかじる。うん、おいしい。ドンツという音とともにいろんな色の花火が空に姿を表た。あー光つてるー。その程度の感想しか出てこなかった。そんな事よりも二人の様子が気になってしょうがない。」

「先輩は家族以外の誰かと花火をみるつて初めてですか？」

「そうだな。小町以外と見るのは初めてなんじゃねえの？」

「えっ、そうなんですか。なら私もそのせんぱいの初めての仲間ですね！　一緒にみれて光栄です。」

「そう、ですか。」

「そういつて、彼女が先輩の手を握る。」

「……えっ。私まだ手握ったこと無いんですけど。ナンデそんな自然に握れるの？」

「もしかするとこの二人、私が思っている以上に進んでたりするの？」

「先輩」

そう言つてせんぱいへと身を乗り出す矢向さん。

あつちよつと離れなさい。その凶器がせんぱいにあたりそうだからっ！

「なっ……なんだ……矢向」

先輩もこの独特な緊張感ある雰囲気を感じたのか迫り来る凶器に戦慄したのか息をのんでいた。

「えつと、そのお……私と……お付き合ひして貰えませんか？」

ドンつという花火の音がまたあたりに響き、そして二人の表情をその色で染める。

……つてか花火のタイミングまで合わせに来るとかウケンだけど。

「……なあ、矢向」

「は、はい。」

「それな、ヒヤクパーおまえの勘違いだから。」

はいはい、読めてましたー。

そんなぼつと出の女にせんぱいがおいそれと付き合うとか、この半年せんぱいの観察を続けて来た私が言うんです。まずあり得ませんから。余裕こいてせんぱい観察バラエティみたいなノリで観察しないで普通に乗り込んでいくつーの。

「つてかさ……矢向、なにが目的だ？」

「なにが目的って……えつと……？」

ホントですよせんばい？ わかるように説明してくれませんか？

「俺を使つてなにがしたかつたんだ？ 何か目的があつて近づいたんだろ？ でなきやおかしいんだよ。この最近、クラスの連中使つて俺と話させたりコンビニ寄つたときにはお前から夏祭りも誘つてきてあまつ告つてくるなんて都合の良いことがあるわけねえよな普通。何か裏があると思うだろが」

つまりはせんばいにとつて都合の良い様に矢向さんは接していると言う事ですかね。「そうですね？ 事実は小説より奇なりつて言いますよね。つまりは先輩の魅力に気づいたつて事ですょ」

「絶対ありえねえ」

「……断言しますね」

「狙いすぎてキャラいくつも作りすぎなんだよ。俺が知つてるだけでも3つはあるぞ」「そんなキャラだなんて作つてないですよ」

「お前教室と俺と二人の時、全然キャラ違うよな、教室の……あいつらと居るときは常におとなしいだろ」

「まあそれは昔からですし……それつて集団行動をすると誰だつて持ち合わせますよね？」

「そうだな。誰だつて相手にあわせて自分のキャラを使いわけるよな」

「ですよ。ならなんの問題もないはずでは？」

「矢向、それじゃなんで由比ヶ浜の時に最初のキャラで接していて小町の時にあたかも片思いしている後輩キャラで接したの？ 嫉妬している振りをした？ そんな素振り一切見せなかつたくせに唐突にそれ見せるんだからそりやなんかの目的の為に俺を利用しようとしているって勘ぐるわ」

まあ人によつてキャラを変えるつて結構ありますしね。

ただ、相手を利用するためにキャラを作るつて言うのはなかなか大変だったりします。

……まあ矢向さんがそもそもそんな計画的な人だつたら話ですが。

せんばいが矢向さんに発した後、しばらく沈黙の時間が流れた。

「ふうく……アハハ、やつぱり先輩は面倒くさい人ですね。いじわるです」

「ああ、よく言われる」

「わかりました。ひとつ私の友達の話しましょう」

「このタイミングでそれいうつて事は十中八九自分の事いっちゃつてるんだがなあ……」

「自分語りが苦手なだけなんですよ。恥ずかしいのでいわせないでください」

「そうなのか……まあ気持ちはわかる」

「では、まず中学2年の頃、気弱な女の子がとあるゲームに負けて罰ゲームを受けるところになりました」

「中学の話かよ……」

「その罰ゲームはですね……気弱でおとなしい女の子と3年でやけにイタいと噂されている3年の先輩がデートをし、最後に気弱な女の子から偽装告白を試してみようというものでした。今考えるとこれ考えた人悪趣味ですよ」

「ん……」

せんばいかなにやら思い出したかのように眉をひそめる。

「でも気弱な女の子が当日すごく難儀な心境で待ち合わせの場所に来て誰も居ません。30分待っても来ません。2時間待って来ないのでこういった連絡なしで時間だけ使わせる悪戯に変わったのかなと思ってその日は帰りました」

「お……おう」

あー、これはもう確信犯ですね。

「ただ後日、クラスの人達は私のこととは別でイタい先輩男子をネタに盛り上がっていました。そうとう気合いの入った装いだったようです。後日聞いたのですが、彼が来た場所は私が聞いた場所とは別の場所になっていました」

「……」

なにやら黒歴史を掘り起こされてせんぱいは顔を隠していた。

耳が赤いので丸わかりです。

「アハハ……。さて、そんな自分勝手なイタい先輩さんは誰のことでしょうね」

せんぱい、中学の頃そんな事やってたんですか。

やっぱり年下には甘いんですね。

……というかさ、さつきからこの子結構やせ我慢してない？ 最初の笑い声がやけに

独特なんです。

「さあな、そいつはその日に限って無性に幕張に行きたくなつたんだろ。んでとりあえず連中には場所変更するって話したらお前に伝わって無かつた。それだけの話だ」

「ただ……気弱な女の子はそんなイタい先輩を意識するようになり、目に留まるように可愛くなれる工夫もしましたし、同じ高校に通えるようにつて頑張つてきました……」

「そりやすげえ。総武そこそこ上の偏差値だからそんじよそこの努力じゃ入れなかつただろうに」

「……ねえ、先輩？ 私そんなに策士じゃないですよ。だつて由比ヶ浜先輩と初めてお会いしたとき、関係値は見てわかりましたし、ああいった対応するのも由比ヶ浜先輩と一緒にいるからするだけであつて……いきなり見知らぬ女子と手を繋いで入店して



きてイチャコラと楽しそうに話してるのを目の当たりにされたら……そりや思うところがありますよ……」

「ん……そうなのだとしたら俺が読み間違えていたんだろうな。すまん」

「先輩がなんで同級生って言う理由は別に聞かないですよ。妹さんが気にしてるようなので」

「そんな感じだ」

「先輩はもしかして……優しくされることに慣れていない人ですか？」

「……」

「アハハ……すいません……。もしかして踏み込んだりいけないうところでしたか？ 一応接客業してるとそこそこわかったりするんですよこういうの」

「はあ……いんや大丈夫だ。まあ優しくする奴には裏があるくらいに警戒はするって所だ」

「そうなんですな。それじゃ……私の事も警戒してますか？」

「ん……まあさっきの話聞いた辺りから少しな」

「そうですか……なら……なら一色さんもですか？」

あれ？ 私の話？

「それはまあ……そうだろ……ってかなんで一色をいまだした」

「当たり前じゃないですか、付き合ってるんじゃないって噂されて。先輩に聞くとそうじゃないって言うてるけど一色さんはどう考えてるのかはわかりませんでし……。もしそうじゃないとしても下手に接触すると一色さんいじわるして先輩を渡してくれなさそうなので……他の女子から聞く一色さんの噂ならじきに飽きられると思ってその時に近づこうと思ったんですが……」

事前に狙っているとか知っていたらこれは私のものだど最大級にアピールするのが世の中の女子高生ルールでしょ。それで諦めるとかその程度の話なだけであって。

あたしいく、男よりもやっぱ友達優先だし……とか言って逃げてる女ほど男ができるとすぐに友達を捨てる。っていうか友達の彼氏奪うまである。中学の頃に3年の先輩の彼氏奪って両手両足担がれて先輩方々に連れて行かれたあの人……今も元気かな？

まあ、そんな話は置いといて先輩を飽きて捨てるのかそんなのないしね。その点矢向さんの立ち回りにはちよつと驚いた。少しは頭が回るみたいだ。

「えっ？ お前俺の傷心つけ込もうとしてた訳？」

「ええそうですよ？ だってそつちの方が効果抜群じゃないですか。誰でも思いつきません？ 普通。特に中間試験前の頃はなんかお互い避け合ってたんでちよつど声かけるチャンスかなと思っただんですが……」

あーあれね。正直思い出したくないくらい酷い話。

あのタイミング逃してたら矢向さん入ってきてたの？ それだったら本当に修復不可になるところだった……危なかった。

「こええよ。お前ら女子はそんな事いつも考えてんのかよ」

「アハハ……流石にいつもそんなわけ無いですよ」

「だ、だよなあ」

「……そんな事よりも、今の話を聞いてもだめですか？ 結構ぶっちゃけましたけど」

「やめておけ」

「えっ……」

「矢向、本当にさっきの話で俺に気があるって言う話なら考え直した方がいい」

「どうしてですかっ!」

「俺はそこまでできた人間でも無いし。それこそさっきの話の場所が変わったことだつて本当に偶然だ。お前の俺を思う気持ちがあるのだからそんな気持ちは偽物だ。それを俺に向けるのはやめろ」

「そう……です……か」

「ただ……お前のその努力とかはすごいと思った。俺じゃなくてもっと別の奴にその熱意を向けてやればきつとうまくいく……と思う」

「ふう……わ、わかりました。なら諦めません」

「……は？」

「私の今までの気持ちちが偽物であるのなら、これから私の意思でそれが本物である事を証明してみせます。今後この話を引き合いに出すことはないです」

「いや、そうじゃなくて他に俺よりいい奴が沢山いるだろ」

「私のそばに居るのが貴方じゃなかったら嫌なんです！」

「ちよつ……矢向？ 声でかい」

「あつ……す、すいません……でも！ ……でもっ！」

「はあ……もういい……わかった。なんていうか、誠意は伝わった。そのなんだ？」

「……まあ……頑張れ」

「ハハハ……やりました……」

「何がやりました。お前結構ごり押しだったからな？」

「ハハハ……私としては振られるにしても次があれば問題ないので。それに……ちゃん  
と相手に好意を意識させるって……これが一番手っ取り早いんですよ？ もちろん

……相手との距離感とか、好感度とかをしつかりと……見極めないと……気持ち悪が  
れます……けどね」

「お前実は百戦錬磨の魔性の女とかじゃないよな？」

「アハハ……コンビニには……色んなドラマがあるんですよ。その知識を……少し拝借

しただけ……ですよ……っヒ……ッグ……」

「まじか、コンビニそんなのまでっ……!?」

流星に嗚咽がここまで聞こえてくると嫌でもわかる。

中学から恋をしたせんぱいへ2年越しで初めての告白だったのだろう。

それがこんなひねくれ者に即答で勘違いだの裏があるだの警戒しているだのやめておけだの言われてシヨックにならない訳が無いか。

最初はもうなんというか泥棒猫みたいに感じててごめんね。矢向さんもいっぱいばいだったんだね。立場上近寄れないのがちよつとあれですが……

「……っびっぐ、結構……ぐっ……頑張ったんでしゅからね? 裏があるってやゝめておげって……んっぐっ……いわゝれで……結構づらかっだんですからね……」

「なんっーか……すまん」

「せんぱい〴〵の……せいですがらね……」

鼻を吸る音がここまで聞こえてくる。

正直そんな嗚咽交じりに喋ってもなんも可愛くないからやめなさい!

つて言いたいところだけれど。

まあ、これは相手の気持ちを考えてやれないせんぱいが悪い。

「すまん」

よく今まで泣かずに関係を進展させて終わらせたと正直、感心している。すぐく頑張ったとほめてあげたい気持ちもあるけれど……

それと同時に私の中にまたあの感情がくすぶり始めた。

由比ヶ浜先輩や雪ノ下先輩では無い。格下だと思っていた同級生にだ。

ああ、前にも味わった嫉妬の感情があふれ出しそうだ。

先輩達は私がいかに気があることを知っているからこそ特に何もしてこない。しかしこの子はそのことを知らない。しかし知ったとしてももう遅い。

好意があると伝えてしまったから。あそこまで食らいついたのだ、引くことはあり得ないでしょう。

今までは私しかせんぱいと話せる相手と同級生にいなかったからのうのと余裕を見せながらせんぱいと絡んでいた。

だけどこれからはそうは行かない。

しかも同じクラスなんだから。

・  
・  
・

私は2人に気づかれなないように公園を離れ、駅で電車を待ちながら私はぼーっとして

いることに気付く。

ハツとして電光掲示板を再度確認する。電車が来るまであと5分くらいある事を確認しほつとする。

先ほどの2人の会話が頭から離れない。

正直な感想を言うところには非常にマズイ。

あの矢向さんは私みたいにあの手この手を使って好意を遠回しに伝えたりはしないからだ。

これからのあの子がせんばいに対してする行動全てに貴方に好意がありますよと言うことを意識させてしまっているのが一番ヤバイ。

というか関係値ちよつとおかしくないですかね？

私1度も手も握ったこと無いんですけどあの子普通に握ってたよね。えっ？ そんな普段から握ってたの？ ちよつとまってまって、おかしくない？

頭を巡らせその2人の関係が進展しそうな期間を探ると、直近でそんな所は1つしかなかった。

ちよつと距離置いた時か。あー……失敗だったな。あの特別に距離取らなくても良かったのに立場に甘えちゃったか。それでも距離の詰め方おかしいでしょ。

このまま放置していたら本当にせんばいをかつさらわれる……つとなると、せんばい

と次会う日に決めておきたいな。

そんな感じで考えがまとまると同時に電車のアナウンスが流れた。



#23 とうとう彼女は？をつき、濁った色は濃さを増す。

とうとう当日を迎えてしまった。

私の心境とは裏腹に空は雲一つなくその雄大きさをこれほどかというほど見せつけ、真夏にさしかかった太陽の日差しは暑くなれよとどこかの太陽の子のような事を思っている。そんな調子で私を照りつける。

そんなものに日中ずつとあたつてたら肌が焼けてしまう。しかも今日はノースリーブにシヨートパンツと少し肌の露出度が高いのだ。

一応、日焼け止めにも丈の長いシャツを羽織つてはいますがそれでは日差しが防ぎきれないのでそそくさとビルの影へと移動した。

ああ……せんぱいと待ち合わせの場所に向かう歩幅がやけに重い。

あれだけ早くきてほしいと待ち望んだ日がここまで憂鬱になるなんて思ってもなかった。

あの日好奇心に負けて二人の会話を聞くことさえなければ私は脳天気はこの日を迎えられたはず。

……あまり人のことを疑いたくはないんですが、矢向さん……あの子わかつて私に公園の穴場の情報を漏らしたのではないのかと正直疑ってる。

まああの時に時間とか明確に言ってなかったからその確率は相当低いですが。

もしそうだったら何が策士じゃないだ。

たちが悪い。

それよりももつと気になることがある。

お二方、手を繋ぐまでのスパン短くないですか？ これどう考えてもせんぱいが拒否しなかったからですよ？ むしろ繋ぎに行つたんじゃないですか。

ちっちゃくて大きいだけでこんなにもアドバンテージあるの？ はあ？ ちよつと理不尽極まりないんだけど。ムカムカしてきた。

そんな事を考えながら足を進めていると見えてくる私を悩ませるとうの本人。

黒いスキニーとシンプルなカットソー、濃いめの緑のYシャツの装いで壁にもたれかかるようにしてスマホをいじっていた。

多分小町ちゃんセレクトでしょう。

まあせんぱいセレクトで来られるより数十倍はましですけど。

そんなことを思いつつ、さつきまでの重い足取りが嘘のように軽くなり、少し小走りになる。

まあ会えるのを楽しみにしていたら少しはやめにきたら既に待ってて焦った様子でせんばいに近づく私。男ってこういうの好きでしょ？

「せんばーい」

声までしつかりルンルンで楽しげに装っている。

んふふつ、結構気合い入れてきましたからね。

「んっ、おう」

何の抑揚も躍動感もない淡々とした返事が返ってきて一気に私の感情が落胆へと突き落とされる。

んもう、この人ホント変わらない。

「可愛い可愛いいろはちゃんですよ、待ちわびました？」

すると表情も変えずに即答で「一色、あざとい」と返ってきた。

それと同時に何もたれかかった壁から離れ私の元にのそのそと歩いてきた。

「もう、内心嬉しいくせに」

そう言うとなにやらにたあつとした粘着質のあるような笑みを浮かべる。

なんですか？ 気持ち悪いですね。

「やだなあ、そんなわけないじゃないですかあ〜？」

全身にぶるると寒気が走る。

やけに高いねちよねちよした声色が気色悪さを増幅させる。

これは真面目にヤバイやつです。

「うっわあ……気持ち悪いです気色悪いです、恥ずかしいです、隣に来ないでもらっていないですか? というかよくそんなこと平然と言えますねせんぱいは周りの目なんて気にしない人なんでしょうが私は気にするのでもう少し気を使ってもらっていいですか? ごめんなさい」

「開幕から暴言のオンパレードじゃねえか」

「もう2度とやらない方がいいですよ? 真面目に他の人にしたら通報すらあり得ますからね?」

「そんなにかよ……お前に似せたんだがな」

「……せんぱい? それは私があんな気持ち悪い声って言ってます?」

それちよつとシヨックなんですが。

「いや? 普通に誠実に努力して真似ようとした結果だ」

あら、真顔でそんな事言われた。なんの捻りも無くただ単に真似ただけなんですね。

「それなら……なんというか先輩は物真似のセンスは皆無ですね」

「それ男が女の物真似なんてすぐにできるかよ」

「せんぱいならやってくれそうって少し期待はありましたが」

「その期待はどこから来たよ」

「まあいいです……それでどこ行くんですか今日？」

「どこ行くも何も今日話するだけだろ？」

……はあ？

「はあ？」

「えっ、何その反応」

えっ、これガチの奴ですか？

「せんばい、流れ読みましょ？ フランス料理のコースがあるようにこう言った事にも流れつてあるんですよ？ いきなりメインディッシュが許されるのは定食屋か牛丼屋か確定した浮気の証拠を突きつけるカップルくらいですからね」

「なにその面倒くさいの。なんでわざわざ遠回りするんの？」

「その場の雰囲気高めるためです」

「なんだよそれ……」

矢向さんとはお祭り行ったじゃないですか。私だって少しでも雰囲気作りをしておきたいんですよ。なんで私とは駄目なんですか？

ムカムカしちゃいますよ？

「まあ適当に散策しながら考えることにしましょうか」

私がそういつて歩き始めたら、せんばいは後ろからのそのそとついてきた。

喋りづらいんですが。

「いつのまにか話が進んじやってんだけど……」

「そうそう、そういえば最近近くにタピオカミルクティーのお店ができたんですよ、知ってますタピオカ?」

「いくら俺でもそれくらい知ってるわ」

「でも飲んだことにはないですよね。せんばい一人で買いに行けそうにないし」

「あれひとつでラーメンに匹敵するカロリーがあるらしいな。それだったら俺は迷わずなりたけに行くわ」

「そうらしいですが、一部は写真撮って自分の顔加工してネットにあげてあとはゴミ箱捨てるみたいですよ」

「は? もつたいねえ。あれ結構値段するだろ。俺にくれよ」

「うわあ……」

「なあ一色、その不審者を見るかのような目はやめろ、俺が可哀想だと思わないのか?」  
「いえ全く。ただせんばいが女の子が捨てようとしていたタピオカを懇願して欲しがる

様子を想像してしまつてつい」

「それお前の妄想だからな？ 俺は悪くないぞ」

「すいません。つい妄想が捗つてしまいました」

「妄想が捗るのはわかる。楽しいもんな」

「せんばい私で変なこと妄想してないですよね？」

「それよか飲まずに捨てる奴つて結局なにが目的なんだ？ タピつてる私超可愛いとか？」

「なんで話題を戻したんですか？ やっぱりムツツリなんですなね。」

「なんで話題変えて誤魔化したんですか……まあいいです。目的ですか、そうですねー……」

「そう言つて私は振り返りせんばいを見る。」

振り返り際にスカートを大きく揺らすのがポイントだ。

「だいたいタピオカつて女子だけで行くことが多いじゃないですかあ？」

「ん、ニュースとか見るとなんかそんな感じするよな」

「そう、そこがポイントなんですよ！」

「なんでだ？ 女子数名のグループでやけに楽しそうに行列並んでんのよくみかけるがそれだけじゃないのか？」

「仲がいいのは表だけって事ですよ。その子が視界からいなくなるとすぐに罵倒雑言を繰り広げて下品な笑いを繰り広げるのが女なんですよ」

「……おっおう。なんかやけに闇が垣間見えてきたな」

「それと同じで、女子グループで好きな男が被った女子が居たと思います。そいつをどうやって蹴落とそうと考える訳です。仲が良いように装ってタピオカを一緒に買いに行つて加工した写真をネットにあげて楽しいねって言う風に感じさせつつ、相手が飲み始めたのを確認しつつ自分はワザとタピオカの容器を落とす。これで相手だけデブらせる事が可能となる訳です。私じゃなきや気づかなかつたです」

「怖い怖い怖い……なにその騙し合い。闇どころじゃねえよ深淵を覗き見たわ」

「そんな目的でタピオカは捨てられるんです」

「ずいぶんとんがった目的だな。同じ手法だけだつたら相手にも勘づかれるだろ」

「なのでパターンがあるんです。トイレに行つて流すか、目の前で飲まないといけない状況の場合のリスクを考えて太りにくくする為にトクホ製品を事前に飲んでおいたりして少しでも相手より被害を抑えるんです」

「まじでよく考えたな。怖すぎて俺もう素直にタピねえよ」

「まあ好きな人の気持ちを振り向かせるにはなり振りがまつてられない感じなんでしょね」



「そんなもんなのか」

「そうです。他にもマウンティングタイプもありますね。男とタピってる様子をSNSに上げて、自分の場合はスタンプ使って顔全体隠すくせに男の方はイケメンである事を主張するかの様に薄く目線を入れるだけで『わたしいく、こんなイケメンと今デートしてるんだよお?』って承認欲求押しつけてくるタイプですがそれは気にした時点で負けるので注意が必要です」

「もはやタピオカ関係ねえし。そもそもそんな写真が流れてきても興味湧かねえよな普通」

「まあ知り合いの女に向けてのマウンティングが目的なのでせんばいとかはそう思うでしょうね」

「なんでお前らってそんなマウンティング取り合ってるの?」

「お前らってなんですか。私を含めないで下さい。ごく一部の話をしているんです」

「えっ、これお前の話じゃねえの」

「そんな訳ないじゃないですか。一部改変したので私の話ではありません」

「結局お前の話なんじゃねえかよ……」

「そうやって話題も一区切りしたところでちょうど大きめのアミューズセンターが見えてきた。」

「せんばい。カラオケとかって行ったことあります?」

私的にはちよつと発声練習したいんですよ。

プールって手もありましたがこれはちよつと刺激が強すぎるのと突然誘える部類でも無いですしね。

「まあ……付き合いで行くってぐらいだな」

付き合い?!

せんばい友達いないのに付き合いつてなんですか? もしかして矢向さんとすでに来た……とか?

そんな事を考えた矢先に少しだけチクツとした。

そんな気持ちを振り払うように私は会話を紡ぐ。

「へえー、せんばい友達いないのにカラオケ行く付き合いはあるんですねー」

「そうだぞ、小町の唐突な思いつきでよく付き合わされんだよ」

あー、なるほど。小町ちゃんか。家族の付き合いならそう言って下さいよ。

「それなら、今日は私と行きませんか?」

「家族以外と行くと恥ずかしいだろ」

「恥ずかしいなんて最初の一曲歌ったら忘れちゃいますよ。大丈夫ですよせんばいがガマガエルの声なのは百も承知なんで」

「なに悟ったかのような優しい表情してんの？ 聞いてもねえのに俺の歌声デイスンのやめてね？」

「それならちゃんと私にその証明をして貰っていいですか？」

「そもそもその証明をする必要があるのか？」

「ありますよ、せんぱいが今後奉仕部の2人とカラオケ行く機会がすごく可能性は低いですがあるかもしれないじゃないですか。その時に恥をかかないように今のうちわたしがジャッジした方が良いじゃないですか？」

「それなら小町に普通って言われてるぞ」

「それはもしかしたら身内最良がかかっている可能性がありますよね」

「無きにしても非ずだが、さっきからなんだ一色？ 俺とカラオケ行きたいの？」

「何っているんですかせんぱい。ただ井の中のヒキガエルになってませんか？ 言ってるんですよ。身内以外の意見も聞いた方がより客観性が保てていいと思いますよ？」

「客観性保つかいらねえだろ。そもそも誰かに聞かせる為に歌う訳じゃねえだろカラオケってストレス発散だろが」

今日に限ってなんでこんなに面倒くさいんですか。

私とカラオケはそんなに行きたくないんですか？

「むう……わかりました。正直に話します。せんぱいとカラオケ行きたいです」

「いきなり素直になるとかあざといな一色」

あざとい? そんな訳ないじゃないですか。

少し照れ臭さいようなはにかむ感じの表情の演技と上目遣いを駆使して言ってみましたがあざとさはありません。

「……行くんですか? 行かないんですか?」

「そこまで言われたらな。仕方ねえな」

そういつて照れ臭いのか頭をポリポリとかいている様子が少し可愛いと思っ  
てしまった。

「まったく、素直じゃないですね」

\*\*\*

入店後受付を済ませて伝票に記載のある部屋へと向かう。  
すると扉がカードをかざすと開くオートロックタイプだ。

最近のカラオケ店は2名くらいの部屋ならオートロック式の部屋に案内できるみたいだ。ヒトカラ女性を狙ったカラオケのナンパが頻発しているみたいですし置き引きとか置き引きの心配もなくなるから助かりますね。

「とりあえずダムですが良かったですか？」

「別にカラオケの機種とかこだわりとかねえよ」

「たまにいるんですよ。『俺ジョイじゃないと歌えない』とか言う人」

「そうなのか？ 別に一緒だろ、まあ音質とかわかつちやう奴なんじゃね？ 知らんけど」

「そうなんですかね、せんばいはなに歌うんですか？」

「基本J—POPの有名どころやらアニソンやらだな」

「へえ、そうなんですね、まあ私も似たようなものです。アニソンはそんなに知りませんけど」

「まっ、好きなの歌えればそれでいいだろ」

「そうですね、でもだからといっていきなりセクハラな曲入れないでくださいよ。私の知り合いの話なんですけど今年の夏はどこに行こうかとか歌使って私と予定を組もうとしてくるの本当に鳥肌立つんで」

「お前、人の真似すんなよ」

「なんの話ですか？ 知り合いの話ですよ」

「話の中に自分を指す主語が入ってんだろうが」

「っあ、ホントだ。意外と難しいですねこのくだり」

「こういうところはやけに頭回りますね。さすが国語1位。

「ちなみにそいつのその後は?」

「そりゃ、そのあと裏で女子の笑いにされてましたよ。あとその人のあだ名がドコ夏つて言われるようになりました」

「そう言うത്せんぱいはボソツと『無茶しやがって……』と遠い目をしてしまった。

「みんなの前であれされたらさすがにひくでしよ普通……」

「つてかお前、結構いろんな奴と遊んでんのね」

「そりゃまあ、付き合いで遊びに行く時もありますし、ちよつと買い物を手伝ってもらいたい時とか……つは!? せんぱいもしかして! 違いますからね? 違いますからね!?!」

「なんで2回言ったよ? まあお前は手伝ってもらってる感覚だろうが相手はそうは思っていないかもしれないからな。気をつけろよ」

「えつと、それはなんの心配ですか?」

「単なるお節介だ。その誰かは知らんがお前の好きな奴に勘違いされたら元も子もないからな」

「……まだそんなこと言ってるんですか?」

「あれだけしたのにまだそんなこと言うんですか?」

あの日の最後、完全にお前の気持ちは理解したって感じだったじゃないですか。それなのになにこれ……本当にこの人なに考えてるのかわからない。

……ステイステイ、まって、待つのも一色いろは、その考えは早計よ。

せんぱいはお前の好きな奴と言った。つまりはせんぱいも含まれているということ。をせんぱいは理解しているという事です。

そう考えるとその証明問題から求められる結論は『俺が嫉妬するからやめろ』という事ですね。なるほど完全に理解しました。それならこういう感じでお返しする事にしましょう。

「まあ、ちよつとやきもち焼かれたら嬉しくてもつと好きになっちゃいますね」

「うえ……そうかよ。ようやるわ」

メロンソーダを飲みながらデジモクの画面をスイスイ操作しながら眺めていた。

あれ？　もしかして違いました？

つと言う事はやっぱり別の人と思っっているって事ですね……

なんかムカついてきました。

「ほら歌いますよー！」

「お、おう、どうした一色？」

「歌ってないとやっつてられないんですよ！」

「なら先手は譲ってやるよ」

「それはどーもっ!」

そしてせんばいと交換づつ歌い2時間程が経過した。

点数で低かった人がドリリンクを持ってくるって勝負をしかけ私の圧勝した所で一旦休憩を入れようと言う話になった。

「せんばい、本当に普通ですね。面白味がないです」

「だから普通つつつただろうが。俺にないを求めてんだよ」

「いや、隠れた才能とかあつたら面白いかなと」

「漫画の読みすぎだろ。俺はただのパンピーだ」

「まあでも? 『君』とか『好き』とか『キス』とかの歌詞が現れるたびに私をチラ見するのはちよつと気持ち悪かったですがね」

「うっ……気づいてたのかよ。あれだ、普段カラオケは1人か小町とだけだから身内以外で歌い慣れてないだけだ」

「まあ、そう言う事にしておきます」

「んでなに飲む? ココア?」

「それで大丈夫です」

「了解」



そう言つてせんばいは部屋から出て行つた。

その間にデジモクをスイスイとみて次歌う曲を探しているとふとデュエット曲に目がいった。

結構有名どころでせんばいも知つている曲だと思つて今度いつしよにこれを歌おうと提案するのはありですね。

そんな事を考へて音質の良いタイプが無いか探しているとせんばいが戻つてきた。

なんか若干気落ちしたかかの様子でボソツと「なんでコーヒー用にミルクじゃなくて練乳置いてくれんの」と独り言を呟いてた。

それはせんばいだけに需要があつて他の人はそんなハイカロリーな飲み物は飲まないからですよ。

そう思いながら先輩からココアを受け取る。

「せんばい、デュエットとかどうですか？」

「んっ。ま、まあいいんじゃないやねえか？ んじやおれ適当に入るわ」

せんばいの言つてるそれはデュエットじゃないですからね？

「大丈夫ですよ〜ちゃんとデュエット対応してるのありますから、それ一緒に歌いましよ〜」

「そう言われても俺、おまえ等みたくパリピでハイテンションノリノリなデュエット知

らないんだけど」

「勝手に私までパリピの仲間入りにしないでくださいほら、これですよ。聞いたことありませんよね」

そういつてせんぱいにデジモクを見せる。

「知ってるが……知ってるが歌が俺のキャラじゃねえって……」

「まあせんぱいが朝の11時に車でステレオガンガン鳴らしてテンションマックスでリズムに乗りながら私の家に来たらさすがの私も110に通報せざるを得ないですね」

「ツツコミどころ多過ぎでなにに手をつけたらいいかわかんねえよ」

「まあキャラとか関係なくて歌えるなら歌っちゃいましょう。ほいっと」

「そういいはなちつつ、デジモクの送信ボタンを躊躇なく押す。」

「あつ、おまつ! ……知らねえかな」

そして演奏が始まり歌いだして私担当のフレーズが終わるとせんぱいがタイミングを合わせて歌う。

ただ、確かにせんぱいと曲の雰囲気の違いすぎてじわりじわりと笑いを誘った。

ちようどラップの部分の歌い出したあたりで堪えきれず吹き出してしまった。

半目で私をみながら歌うせんぱいには悪いことをしたなどジェスチャーで謝罪の意を示す。

無事歌い終わるとズゴゴゴと音を立てながら乳酸菌飲料を飲んでるせんぱいと目が合う。

「いや、ああいうせんぱいも新鮮で良いですね」

「二度とやんねえかな」

\*\*\*

その後カラオケを時間の限りまで歌い尽くし店を出る。

出たと同時に夏の気温が襲いかかり、一瞬でカラオケ店で得た冷気を奪い去っていく。

ただ、入った頃と比べ日も傾いてきており、若干暑いという感じだ。

「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

せんぱいが怠そうにそういう。暑いですからね。

まあ少しは紛らわせたとは思う。発声練習もバッチリだ。

「そうですね。あれ、近場に話ができる場所ってありましたっけ？」

「あー、あそこで良いか？」

そう言ってせんぱいが指を指す先にあつたのは少し小さめの公園だった。

丁度日も傾いてて影になってる所が多かった。

その公園に入り適当に日陰になっているベンチに腰掛ける。

せんぱいも人ひとり分の隙間を空けて隣に座った。

やばい、いざこやなったら普通にどきどきし始めてきてしまった。

何から話せば良いか分からなくなってきた……!

せんぱいがぼそつと『デジャブを感じるな……』と呟く。

そういえば矢向さんのときも公園でしたね。

ふつとどういいう光景だったか思い出そうとした。

……が、それがいけなかった。

『そうなんです。それじゃ……私の事も警戒してます?』

『ん……まあさっきの話聞いた辺りから少しな』

『そうですか……なら……なら一色さんもですか?』

『それはまあ……そうだろ……ってかなんで一色をいまだした』

あつ……

あの時の2人の会話を思い出した。

そうだ、たしかせんぱいは私のことも警戒していると言った。

という事は私が今告白したところでせんぱいの気持ちはこちらに向いていない。

つまりは

そう思った時、私の表情が緊張で強張る。

この思いを今言ったら……すべて終わってしまう。

どうしようか。

とりあえず先に本題から少し遠ざけて時間を稼ぐことにしよう。

「久し振りに楽しいカラオケでした」

「お前の無茶ぶりがなけりやーもつと楽しかったかもな」

「それでもちやんと歌ってくれてた癖に」

「まあ、歌うって事自体はストレス発散にはもってこいだからな。そう言うことだから」

そう言つて腕を組みながら頷いている。ツンデレさんですかね？

「せんぱいストレスとかあるんですか？」

「あるにきまつてんだろ。ストレス抱えすぎてマッ缶なしでは生きていけねえよ」

「あれもはやお薬的な立ち位置だったんですね、ひきました」

「そこでひくのかよ」

流星石に通常の会話と裏で別の事を考えるとと言う高等技術は私には難しく、  
ここまでしか会話が続かなかつた。

吹く風が木々を揺らし葉のすれる音がサーツと聞こえてくる。

会話が途切れ沈黙が続いていたので、その音と蟬の鳴き声が組み合わさり、これからの出来事を演出しているかのように聞こえた。

「……んじや、聞くけどよ」

そういつてせんぱいが口を開く、それと同時に私も覚悟を決める。

「あの時お前は何を言おうとしたんだ?」

「……いやだなあせんぱい。あれは演技ですよ?」

結果、思いとは全然違う言葉を私は自ら口で発する。

「つは? なにいつてんのお前?」

流星石のせんぱいも困惑している表情だ。

まああれが演技だったら私は大女優か魔性の女の道を突き進む人生でした。

苦し紛れとは知っています。

しかし今言うとなんてが終わってしまいます。

そんなの絶対嫌。

それなら私は自分の信用を代償に払ってでも関係を続けたい。

「だって私ってモテるじゃないですか？　好きな人とそうなったときどういう雰囲気  
に持っていていこうかなってちよつとせんぱいを使って抜き打ちの実験したんですよ」

張りぼての言葉が自分自身に突き刺さる。

「いや、ちげえだろ。明らかに度は超えてただろうが」

せんぱいはそんな張りぼての言葉をいともたやすく見抜く。

それじゃあもうなんて言えば良いんですか？

せんぱいはこの関係を壊したいんですか？

「あれ？　もしかしてせんぱい？　私があるって思っています？　そんなわけな

いじゃないですか。私って結構モテるんでこう言った練習って欠かせないんですよ

。勘違いさせてしまつてたら……ごめんなさい」

「……なあ、何があつた」

「……しつこいですね、そういう男は嫌われますよ？」

「そうか。ならもういいわ」

そう言つてせんぱいは立ち上がり、公園の出入り口へ向けて歩き出してしまった。

「あつ……」

情けない声が漏れる。

怒つてるんだらうな。こんな事を話すはずじゃなかったのに。

チクチクと自分の胸が痛み、自己嫌悪に悩まされながら私はしばらくそのベンチに座り込んだ。

\*\*\*

それから私はなにも考えることができずにフラフラと街を徘徊していた。気がつけば学校近くの大きな商業施設マリンピアに来ていた。

それでも何の目的もなく、ただお店を見て回りとにかく今は視覚情報のみでいたかった。考えたくなかった。

しかしそれもむなしく、またあの公園での出来事が脳裏に浮かぶ。

そこに、自分の不甲斐なさが胸を苦しめた。

せんばいにとつて私も警戒される対象である事がものすごく怖くて、否定されるのが嫌だった。

だからこそ何も出来なかった。

私は日和ってしまった。こちらの方が何事も無く壊れることがないから。関係を深めるより平坦を選んでしまった。その後悔が後を引き自分の心に突き刺さる。

泣きそうな感情を押し殺してそろそろ帰ろうかと思つた矢先、声をかけられる。



このタイミングでナンパとか本当にウザい。

とにかく姿も見ずに無視を決め込むことにした。

「なあーいろいろはすつてばよー？ 隼人くーん、なんで俺っちシカトされてん?？」

「戸部、いろいろは何か怒らせるようなことでもしたんじやないのか?？」

「つべー、そりやないつて隼人くーん」

あれ? よく聞くとなんか知り合いのような……

そう思い、下ばかりを見ていた視線をあげる。

すると部活でよく見る2人、戸部先輩と葉山先輩の姿が映る。

知り合いと認識した私は足を止める。

「あれ、葉山先輩じやないですか。失礼しました。タチの悪いナンパかとおもってしまっています」

「戸部が喋りかけたのがまずかったな、こちらこそすまない」

「いーろーはーすー、いつも備品の買い出し手伝ってんのにそりやねえぜ」

「ところで葉山先輩はこんなところでどうしたんですか?？」

「ああ、準備をしに来たんだ」

「準備と言うと?？」

「夏休み前に学校の掲示板にボランティア募集の張り紙とか貼られてなかったか?？」

葉山先輩がいう学校掲示板というのはほとんどの生徒は見ていないのですが、ちよつと確かになんかやけにカラフルで少年漫画みたいな熱い謳い文句が書かれていたチラシはチラ見で見たことがあります。いろんな生徒が笑いの種にしてみましたが……

……もしかしてそのことですかね?

「そういえばそんなものがあつたような気がします」

「その夏休みボランティアつて奴、隼人くんがやってみたいつて言うからみんなでやることになつたんつしよ」

「へえー、良いですねそういうの」

葉山先輩はそういう所もしつかりしてるんですね。

すごい人だと思います。

「まあ、大変そうではあるが、それなりの経験はつめそうだからね。どうだ? いろはも参加してみるか?」

「面白そうですね……でももう参加確定してるんじゃないんですか?」

「人数は大いに越したことはないし引率は平塚先生だ。話さえ通せばまあなんとかなるだろうさ」

「そうなんですか」

正直このモヤモヤつてしている気持ちかをどうにかしたい、晴れるかどうかはわから

ないけれどまあこう言うのに参加して和らげるっていうのははありかもしれない。

「いいですね。内申とかにも良さそうですし是非私も参加させてもらっても良いですか？」

「おうーけいーっ！ いろはす参戦けつてーっしょ」

いきなり大声で言われ耳がキーンとした。

戸部先輩、私といるのが嬉しいからってかなり迷惑です。

「戸部、うるさい」

「戸部先輩？ 少し黙っててもらっていいですか？」

「つべー、隼人君もいろはすも俺に厳しくない？ おっ、これいわゆるツンデレ系て奴べ」

「いや、ただ単純にうるさい」

「うるさいですよ、戸部先輩」

「つべー……」

ただ戸部先輩のせいでさっきまでの憂鬱な気持ちが吹き飛んでいる事に気づいたのは2人と別れて後のことだ。

もしかして戸部先輩は私が気落ちしている事に気づいててわざとああいう風に振る舞ったのだろうか？

いや、考えすぎだ。戸部先輩はいつも通りだ。

さて、それじゃあ私もボランティアに向けての準備をしなきゃね。

ボランティアとかそんな大層な理由があるのだったらお父さんに言ったら準備のためのお金出してもらえるかもしれない。

ここはまずはお父さんを口説き落とすところから始めよう。

そう思い私は商業施設から出る。

すると日がさらに傾き橙色に染まっている光景が見えた。

今ここでそんな哀愁を感じてしまつてはさつきようやく吹き飛んだ感情がまた振り返すだろう。

私はただただそんな橙色に染まつた道を様々な思いを胸に足早に駆けていった。

## # 24

室内にけたたましく鳴り響く携帯のアラーム音。

大音量で鳴る耳障りな音をサイドボタンで止める。

眠気が芯までしつかりと浸かっけていて心地よい身体を無理矢理起こした。

今日は確か千葉村に行く日なのだ。

昨日のうちに準備はできているし、あとは風呂に入って身支度を調えるだけだ。

「うっし、風呂……入るか」

眩き俺は家の階段を降りる。

するとリビングでせんべいをかじりながらテレビを見ていた小町と目が合う。

小町ちゃん？ あなた受験生なんだから勉強サボタージュしたらダメよ？

そんな小町が目をまん丸くし驚いた表情だった。

なに？ 俺が存在していること自体に驚いているの？ 存在しててごめんな。

「なんでいるの!？」

そんな驚きに満ちた声がりビングに響く。

えっ？ 俺の存在を消そうとしてた存在Xって小町だったの？

どうやら俺は無意識にその術中から逃れていたようだ。

いやあく流石八幡、俺TUEE

って妄想はこのくらいにしてマジでどうした？

「なんだよ？ 俺が家にいるのがダメなのか？」

「そうだよ！」

そんなの当たり前じゃんくらいに小町に即答されて俺は一方後ろにたじろいだえっ?! なんでだよ！ 小町お兄ちゃんと昨日まで楽しく桃鉄やってただろ。

もしかして俺は別の世界線についてしまったのか!?

……んなわけねえか、もすこし真面目に考えよう。

「だつていま8時だよ」

「ああ、8時だな」

8時がどうした？ だからこうやって起きたんだらうが。

「おにいちゃん？ もしかして……寝ぼけてる？」

「まさか、ちゃんと時間通り起きてるだろ？」

しつかりと時間通り……時間通り？

リビングの柱に取り付けられている時計をバツと見上げる。

時計の短針は確かに8の字を少し過ぎているところを指していた。

うん、確かに俺は寝ぼけていたようだ。

8時集合のはずが、なぜ8時におきてしまうの？ バカなの？ アホなの？ 沖縄人なの？ アイヤー。

……それは中国人だ。いやそんな事どうでもいい。

「うつそだろ……」

「一応言つとくけど、うちの時計ずれてないからね」

蜘蛛の糸を連想させる細く弱々しい唯一の希望すら容赦なく妹に切られ、

俺は恐る恐る携帯を取り出しサイドボタンを押してバックライトを点灯させる。

着信アリ

そこには今までの八幡史記録を大幅に更新した史上最多のメールと着信履歴が通知されていた。

その件数を見た瞬間、身体に緊張が走る。脳内に響き渡る不気味な音

これはマズイ

即座に頭の中に用意していた言い訳が3案くらいよぎる。

その中で有力なのは風邪の案。

よしこれだ、俺の姿が見ないのだったら風邪を本当に引いているかどうかはメールでは分からないしな！

風邪が辛すぎて連絡が遅れた、今日には行けそうにないから3人で行ってくれ。

よし、これだ！ 後から電話でもそれとなく演技すればやり過ぎせるだろ！ これならいける！

そう思い平塚先生の最後の着信メールを開く

From: 平塚先生

ワタシシズカ

イマアナタノイエムカツテルノ

背筋がゾツとした。

俺の思考を先読みし既に向かってくる辺り下手な怪談よりかなり怖い。

これが幻想より現実が怖いと言われる由縁かよ。

いや、これを何のためらいも無く送ってくる辺りちよつとストーカー気質あるんじゃないかねえかあの人。

そんな事を考えていたら微かに家の外で何かが止まる音がした。



俺のうちの前で止まる車は大体宅配業者のお兄さんだ。

そうだ、そういう予約してたラノベの発売日だったんじゃないか？

そうできつと、平塚先生は俺の家になんて来ていない。

まだ時間がかかるんだ。

その内に新しい言い訳を考えれば……

そんな自分に都合の良い思考を巡らせていたら携帯電話が震える。

すかさず通知欄に目をやると『新規メール1件』と表記されている。

恐る恐るその通知に指を当てる。

同時に呼び鈴が鳴る。

すぐさま玄関に顔を向ける。

目を凝らし家のカギが閉まっている事を確認する。

これで家に入ってはこれないはずだ。

そして俺は再度携帯に目を落とし絶句する。

rom：平塚先生

ワタシシズカ

イマアナタノウシロニイルノ

なん……だ……!?

背筋の寒気がピークに達した。

……まさか小町と結託して既に俺のうちに平塚先生は存在していた？

そう考えると俺の後ろに人の存在感があるように思えてきた。

恐る恐る後ろに振り返る。

……しかしそこには誰もいない。

その瞬間一気に安堵が溢れる。

当然つちや当然だ。幽霊じゃあるまいし。

驚かせやがってあの先生。……ん？

同時に先ほど来たメールにはかなりの改行が施されていた事に気づいた。

なんだよ、冗談だとかそんな事書いてんじゃねえだろうな。

そんな事を思いスクロールしていく。

ちょうど止まったメールの最下層にたどり着いたとき

ガチャッと施錠を外す音が聞こえた。

「おにいちゃん、お客さん来てるのに鍵くらいあけてよ〜」

その音を聞いた瞬間音速を超えたと自画自賛する速度で玄関に顔を戻す。



俺は人類の紡いだ歴史をこの時体感した。

「平塚先生、クズ企谷君は普通の人とは違って正直よりも先に自分の保身を考える事を脳信号の最優先を占めているので言ったところで無駄です」

ほー、それって俺、新生物なんじゃね？ 究極生命体に進化できる可能性があるじゃねえか。

考える事やめるならお茶の子さいさいだぞ？

「つていうか、ヒッキーなんでアラーム集合時間に設定してたの？」

「それは寝る前から寝ぼけてたんだろ？」

「……は？」

じつと冷たい目線を送る雪ノ下先輩、俺の心が凍り付きそうなのでそろそろ止めてもらいたい。

「つまり比企谷君はこの日が楽しみ過ぎて寝る前から南国気分脳内を切り替えたのかしら？ 日頃の根暗具合とは裏腹に随分脳の中は快晴なのね、しってる？ 脳天気って言葉」

「豆しばかな？」

ぐぬぬ……

この一連のやりとりで出発が遅れた事から雪ノ下先輩のご機嫌が斜めだ。

何か言い返したいが全ての元凶は俺であるため俺はその辛辣な言葉を呑み込むしかなかった。

するとフォローするように由比ヶ浜が別の話題を振る。

ガハマパイセンそういう所良いと思います！

「そ、そう言えば今年の修学旅行ってどこになるんだろうーね！ あたし沖縄が良いなあ〜」

「修学旅行の場所はもう学校側で決めているぞ、今年は京都で確定しているはずだ」

その件については少し内情を知っているみたいで運転している平塚先生が会話に加わる。

「ええ〜、少しは生徒の意見も取り入れて欲しいよ〜」

由比ヶ浜が残念そうな口調でうな垂れる。

「そうだな。まあ生徒会が主体となつて生徒からの希望署名を集めていたら変わつていながらも知れないが、今年は予算も決まってるから変更は厳しいだろう」

「と言う事は来年度はヒッキーの頑張り次第では来年から別の所に……いいなあ〜」

ん？ ガハマパイセン何言ってるんですかね？

高速の壁を眺めつつ焦点をぼかし現実逃避していたのにいきなり話を振られ若干困惑気味だ。

「なぜ俺の頑張り次第なんだよ。生徒会なんて面倒なものに入る気も無いしそもそも京都の何が悪いんだよ良いだろ日本古来の……」

俺が熱く平安時代のあれこれを話そうとした所で雪ノ下先輩に「あなたのうんちくは木材君だったかしら？ あの人がよく分からない話をしているときと酷似しているわ」それを聞いた瞬間俺は押し黙る。

えっ？ 俺そんな気持ち悪い表情で話してたのん？ ちよつと帰ったら小町に聞いてみよ。

あれだよ、鼻毛出てるよって言われてずつと気になる奴だよこれ？

言われない方がマシマシチョモランマだよ？

会話に一段落※ついてしばらくした所で平塚先生が「そろそろ高速を降りるぞ」と口を開く。

そこでふと強化合宿って結局何するんだ？ という初歩的な疑問が抜けていたことに気づく。

どうやらまだ寝不足は抜けていなかったようだ。

「千葉村で強化合宿って結局何をするんすか？ なんか有志集めるとか言っていましたけど」

「なんだ、まだメールを読んでいなかったのか？」

えっそんな内容のメールなのん？

あんなおびただしい数のメールからそれをさがしだして読むのは愛が重すぎる。しんどい。

付き合つてしばらくしてすれ違いが起きて別れるカップルみたいだ。

「その様子では読んでないみたいだな。我々は千葉村にてボランティア活動をするべく向かっているのだ」

「なるほど、それでその活動内容は？」

「君たちにはサポートスタッフとして働いてもらう。千葉村職員や教師陣、林間学校で訪れている児童達のサポートなど……まあ端的に言うのであれば雑用という事だな」

まあ雑用なら率先して1人でできる仕事を片っ端から探しつつ

黙々やつてますよ感出しておけばそれで片づくだろう。

あとは後ろの2人に……つてあれ？

俺は助手席側に首を向けると間髪入れず雪ノ下先輩が「その下卑た視線をこちらに向けないでもらえないかしら」みたいな鋭い視線を返す。

いや別にあんた見たいわけじゃないんだが……

中間の2人に遮られ見えづらいが最後部にも人がいるように思えた。

「あれ？もしかしてもう1人います？」

そう言うのと平塚先生はなにやら片手を顎に手を当て考える様子だった。

「マズイ、言葉が足りなかったか？」

少ししてすぐに回答は帰ってきた。

「ああ、戸塚の事か」

よかつた俺が見ているのが幽霊じゃなくて。

ん？ ……戸塚先輩？

「えっ!!? 戸塚先輩来てるんですか!?!」

「ああ、どうやら練習疲れがあるらしく、乗車からすぐさま眠ってしまったらしいがな」  
まじか俺一人かよって思っていたらとんだ大天使がすぐそばにいたんじゃねえかよ。

「そつすか、それじゃ近くのサービスイリアで止まってください。俺後部座席で天使と一緒に寝ます」

「先ほど高速を降りると言っただろうが！ それに君は最後まで私の隣だ」

えっ……なんかカッコイイ台詞出てきたんですけど。

いや別なときめいてなんて無いんだからね！

？、ちよつときめいた。



## # 25

「ついたぞ」と平塚先生はギアをPレンジに切り替え、鍵を指すところやサイドブレーキがあるべきところにあるボタンを押す。

車のエンジンが止まり、ドライブが終わったと知らせる刹那の静けさ。

人と話すと言うよりも景色を見て楽しんだ。それが終わりって思うとすこし寂しい。まあそんな寂しさなぞ降りてしまえば即座に忘れるわけだが。

俺の視線に気づいたのか平塚先生は「珍しいか？　これがエンジン。これがサイドブレーキなんだぞ」と教わり、うちにある車との違いを見せつけられた。

降り立った場所は非常に緑豊かな場所だ。辺り一面木、草、花。

俺は息を大きく吸い込み両腕をあげて伸びをする。

長時間の車内だったから身体が固まって仕方がなかった。

「うむ、空気が新鮮でおいしいな」

煙草を吹かしながらそんな事を言っている。

それで本当に味が分かるのだろうか？　何にでもうまいって言う人にしか見えない。あつ、俺もそうだった。

「そういや森の中だから空気が新鮮なんだな。」

「空気に鮮度があるのか知らねえけど。ただ他より冷えている場所ってだけでそう決めた。」

「それならエアコンはいつでもキンツキンに冷えた新鮮な空気が吸えるって事じゃねえか。」

「なら新鮮な空気を吸うためにわざわざ遠出せずともエアコンがキンツキンに効いた室内ならいつでも新鮮な空気を吸えるって事だよな。と言う事は家にいることが森林浴、引きこもりは森林浴なのだ！……あー……帰りたい。」

「あつ！ はちまーん」

「ジャンヌ・ダルクは神の啓示を聞いたとある。比企谷八幡は天使の声が聞こえた。」

「つまり俺は戸塚先輩のために生まれてきたようなもの。もう離さねえ。」

「というか先輩は何故ここに？ 俺奉仕部の合宿らしいんで俺たちだけだと思ってたんですけど？」

「実は平塚先生からお誘いもらったんだ。八幡も来るって聞いたから……来ちゃった」

「戸塚先輩……」

「あつこら！ はーちまーん！」

「なんだろうなんか伸びが入った事により名前がよりデフォルメされ可愛らしく聞

こえる。

癒ししかない。

「僕、前に同い年だから呼び捨てにして良いっていったよ?」

戸塚先輩はぶくつと頬を膨らませ、計算したかのような確な角度で見つめてくる。

これが天然で出来るなんざ信じられるか? あいつでも……………っ!

無意識に脳裏に浮かんだ想像から紛れるため行動に出る。

「あの? は、八幡?」

おっといつの間にか彩加の手を握っていた。

しかしなんだ……………この手の柔らかさ、本当にテニスしてるよね? なんでこんなフニ

フニしてて柔らかいの? ってかい匂いしちゃうのなにこれ?

使ってるシャンプー教えてもらってもいいっすか?

「ちよっ……………八幡ってば。くすぐりたいよお……………」

「……………あなたたち到着早々何をしているの?」

色々と危ない雰囲気醸し出していたところに雪ノ下先輩からの鋭い指摘が飛ぶ。

すぐさま、彩加から手を離す。

「す、すいません」

「ううん、大丈夫だよ、それより八幡こそ大丈夫？　なんか心ここに在らずって感じだったよ？」

「ちよつとまだ寝ぼけててぼーつとしてただけだ」

「あはは、そうなんだね。僕もさつきまで寝てたからさ、一緒に寝ぼけちゃってるねっ」

そう言つてまぶしい笑顔を俺に向ける。

うむ、もうこの笑顔を見ただけでも千葉村に来た甲斐があるというものだ。

「さて、そろそろ集まってくれ」

平塚先生が集合の声をあげると男女グループ別れて雑談していた皆々が車の前に集まる。

「これから先に到着している生徒達と合流する。車の中でも言ったがくれぐれも林間学校生徒達の模範となるよう行動をするように」

「先に到着している生徒とは誰なのでしょうか？」

雪ノ下先輩が当然の質問をする。もちろん俺も疑問に思っていた。

こういって行事って誰が来るのか事前に通知するもんだろ？

そうじゃねえと『誰だよ……あいつ呼んだの?』なんてコソコソ噂話されて居づらさから全集中・ステルスヒツキー発動しないとイケないだろうが。

それが直前に知るってこれ絶対平塚先生の趣味も絡んでんだろうな。

「それは到着してからのお楽しみだ」

どうやら対面するまで答えはお預けのようだ。

少し歩くと大きな建物みたいなものが見えてきた。

それと同時に大勢の人の姿が見てとれた。

同時に道中、森の虫の音や木々の葉擦れの音は100名近い人数の喧噪にかき消された。

「あれは……」

「あーっ! 隼人くんだ! やっはろ〜!」

遠くで点のように見える葉山先輩を見つけた由比ヶ浜が大声で葉山に声をかける。

近くに居る俺にとっては大音量に耳の鼓膜が大震災だ。

さらに近づいていくと目線の先にいたのは葉山先輩だけだった。あれ? 1人?

どうやら到着した俺たちに気づいたのか葉山先輩がこちらに近づいて来た。

「やあ、無事到着してくれてよかつたよ」

「すまないな、指揮をとってもらって。誰とは言わんが1人寝坊をかましてくれた生徒

がいたものでな」

「ええ、誰とは言わないけど」

「あはは……」

そう言つて平塚先生と雪ノ下先輩の目線がこちらを向く。

ねえやめて！ 目は口ほどにものを言うのよ！

……はい、すいませんでした……

「平塚先生、荷物の方を預けたらすぐに手伝つてもらつていいですか？ 申し訳ないのですが量が量なので現状俺たちだけでは回りそうもないです……」

達……と言う事は他にも来ているのか。まあいつメンだろうな。初めて使つたよいつメン。最初ブタメンに新商品でたのかとおもつたぜ。

「ふむ……了解した。宿舎に荷物を預けたのち、すぐに合流しよう」

平塚先生？ なんだろう。この人なんかイキイキしてないか？

もしかしてあれか？ ピンチの時に現れたヒーローっぽくてテンション上がってんじゃないだろうな？

宿舎に荷物を置きすぐさま集いの広場に向かう。そこにあれだけ大勢いた小学生の姿は見当たらず、なぜか葉山組の面々も見当たらない。

そして先に出て行つた平塚先生すらいない。どこ行つたんだあの人？

あるのはビニール袋に包まれている大量の弁当とあと大量のクーラーボックスだ。なにをすればいいかわからずただぼーとつつ立っていると、見覚えのある車が近くに止まる。

出てきたのは案の定平塚先生。

「葉山達は先にオリエンテーリングのゴール地点に持てるだけ持たせて向かわせた。君たちは先にこれらを車に乗せてもらっていいか？」

こうして弁当やらクーラーボックスを車に詰め込むだけ詰め込んだ後、「君たちもすぐにゴール地点に向かってくれ」と言い残し平塚先生は行ってしまった。

俺たちも乗つけてくれてもいいんじゃないかな？

乗るとき弁当膝上においてさ……あつ、5個弁当入っているビニール袋を膝上に3つ置く？ 生暖かい感触と地味に重いな。

それに非常に繊細なバランス感覚が必要になる。最悪車内にぶちまけて小学生の教員と平塚先生にガチギレされるまでついてくる。そして残った弁当からおかずとご飯を少しずつわけてもらうために個々に話をして嫌な顔されてつつもらっていく……ぐううっ!!? カレー事件の思い出が!! よってリスクマネジメント大切だな。仕方ない、歩くか。

「急いだ方がいいかもしれないわね」

「うん、ちよつと出遅れちゃっているから急ごつか」

ゆつくり歩くことすら許されないのん？

全く、こうなつたのは誰のせいだよ。

……俺でした、ほんとすいません。

そうして俺たちも急ぎゴール地点を目指すことになった。

\*\*\*

俺たちはとにかく早歩きくらいの速度で黙々とゴールを目指した。

途中途中でクイズやら課題に四苦八苦している小学生達を見ては何故か嬉しさが込み上げてくる。

「しげちーより先にクイズとつびつびー」

「おーっ！ よーすけにこされたー！ マジはやいなー！」

「……なあきばみー。これマジむずくない？ 世界で二番目に山だつて、なに？ アル  
ブス？」

はっはっはー！ 小学生達よ！ くるしめー！

「スマホで調べたら一発じゃん」

「きばみー……天才かよ……!!」

最近の小学生は既にスマホを手に行っているのかよ……



ズルすぎるだろ。

急いでいる途中で悩んでいる小学生の班から声をかけられることがよくあった。

しかし、その声をかけて貰えるのは俺や雪ノ下先輩ではなく、派手目な見た目の由比ヶ浜や天使トツカエルだ。

まあ、こうなりたいいなあつて憧れがあるから話しかけるのだろう。

オリエンテーリングの課題の話から派生してスポーツ、テレビ番組、ファッションなどに話は派生するが雪ノ下パイセンのわざとらしい咳き込みでそれら話題をバツサリ切る。

多分話しかけられない事を気にしてそう。言わんけどさ。

「ほら、先を急ぐわよ」

「そ、そうだね。ごめんねゆきのん」

「何故謝る必要があるのかしら、由比ヶ浜さん？」

「雪ノ下先輩、俺も話しかけられないから大丈夫です」

「なにをもつて大丈夫と言っているのかしら。あなたと同列扱いっていうのかなり癪に触るんだけど？」

鋭い視線が俺を貫く、かなりご機嫌斜めなご様子で……

「ゆ、ゆきのんもさっ！ 小学生の子達に話しかけて見たら」

由比ヶ浜があせあせとフォローする。

「話しかけたわ。何故か逃げられるの……」

まあそうだな。

俺が小学生だったら恐怖の大王だわ。絶対近づかない。

「話しかけてくる女の子達にかわいいってよく言われるんだけど……なんか複雑だなあ」

それは仕方がない。

真実を伝えたら多分その子達は性別とは？ とか哲学に目覚めてしまうかもしれない。

それから俺たちは次々にオリエンテーリング中の小学生たちを追い抜いていく。

ただ、流石に足が若干痛くなってきた。自転車通学で鍛えていると思っただがそうでもなかったみたいだ。

そして5人組の班に追いついたとき、何か違和感を感じた。

4人の後を1人が2歩くらい遅れて歩いているのだが、一向にその後ろの1人に前の4名は気遣う事をしなかった。

4人だけで会話が行われており、時折後ろを見てはクスクスとなにが可笑しいのか密かな笑みを仲間内で共有する。

だが、後ろを歩く女の子はストリートに伸びた黒髪やフェミニンな服装で他の子に比べ垢抜けている印象を受けた。

十二分に可愛いと思う。普通こういった子は男子から時折意地悪されて影で可愛いよなつて言われてモテると思うんだが珍しい……

待てよ？ ……すごい身近に同じような人いた気がするぞ？

「なに」

「特に……」

おっと、何か思ったのかまさか目と目が合っちゃったぜ。絶対に恋なんて始まらない。

どうやら雪ノ下先輩も違和感に気づいたようだ。

まあ、気付いた所で俺たちが何かできるわけではない。

この様子から見ると根が深そうだし関わったら面倒くさそうだ。

この子には悪いが俺たちは先を急いでいる訳でこの件は放置させてもらおう。

実害があるわけでもないし、これは彼女の中で人間関係の何かを学ぶ機会になるだろ。

そう考えを締め、俺たちはそくさその班を追い越した。

\*\*\*

オリエンテーリングのゴールに到着した俺は近場の縁石に腰掛ける。

さすがに道中ほぼ早足で歩いて来たから足にきた。ふくらはぎパンパンよ。

体力の違いか、彩加は息すら上がっておらずその後にも先に到着していた平塚先生と話をしていた。

「あら、もう息切れ？ だらしないわね」

「雪ノ下先輩？ だいぶ足がびくびくしていますよ？」

「その下卑た視線で私の足を見ないでくれる？ 鳥肌立つから」

「座つたらいいんじゃないですかね？」

「いやよ、そんな汚いところによく座れるわね」

「そんなに汚いか？ 流石に俺も黒く変色とかしてたら座らねえけど立派な石の色してるだろ？」

そんなこと考えながら雪ノ下先輩と話をしていたら葉山先輩がこちらにやってきた。

「比企谷、雪ノ下さん。到着早々で申し訳ないのだけど果物のカットをお願いできるかな？ 包丁扱える人があまりいなくてさ」

「まあいいですよ。昔家事くらいはやってたんでそれくらいなら」

雪ノ下先輩は無言だ。なにこの緊張感。

「えー！ 私はー！」

いきなり会話の中に由比ヶ浜が割り込んできた。

「いや結衣は……俺たちと一緒に配膳しようか、量があるしみんなで作った方が早いだろう？」

きつと葉山先輩は前のクツキーの件で確信したんだろう。

その役振りはありがてえ

「えー……私もゆきのんと一緒に果物切りたかったあゝ」

「由比ヶ浜さん。お気持ちだけ受け取っておくわ」

雪ノ下先輩はキツパリとその誘いを断る。

まあ今回はスピードも求められるからな構ってる暇がないのは確かだ。

「うー……」

「由比ヶ浜さん、また今度教えてあげるから」

あら、デレの下さんですね。

「もうクーラーボックスと包丁もろもろの備品は出してるから、そのまま作業場に向かってくれ」

「了解っす」

こうして由比ヶ浜と葉山先輩、俺と雪ノ下先輩とで別れ、俺たちは作業場に向かった

のだったが……

「あっ！ 追加のカット担当の人ですか？ お疲れ様でー……せんぱい!？」

瞬間冷凍かのように空気が凍りついた。

……なんでこいつこんな所いんだよ。

## #26

晴天たるお日様と木々が吹く風に葉擦れを奏でる。

やはり自然に囲まれているからこそ熱が籠もらない市内よりも比較的気温が低くなり過ぎしやすい。

全てのコンディションが文句なしと言える日だろう。

なぜかテンションアゲアゲ車のステレオ全開で鼻歌歌って身体を揺らしたくなる。

……平塚先生が休日によつてそうだな。想像してみたら意外と似合うから困る。

……

おつと、余りにも静か過ぎるので平塚先生の事を考えてしまった。八幡ついつい連想して現実逃避に走るんだ。ハハッ。

……

多分これを静かと言葉を選択した事自体間違いだ。  
正しくは緊迫だわ。

テーブルを前に隣に雪ノ下先輩、その隣に一色の横並びで黙々と梨の皮むきとカット作業を行っている。

雪ノ下先輩が真ん中なのは策略的にそうなるように行動した。

その隣でたまに様子をうかがうかのように一色がチラチラと横目で見ているのは気づいている。

なんか気まずさが天元突破してて手元が震えるんだが……

そんな時、隣で凄まじい勢いで皮を剥いている雪ノ下先輩の手が止まった。

はあ……と凄まじい嘆息を吐いてまた再開させる。

一体なんだったんだ？ 排気？ 排熱？ どっち？

いや分かってただけどき。本当すいません……

「比企谷くん」

雪ノ下先輩はいつもと変わらない口調で俺の名前を呼ぶ。

ようやくこの緊迫の空気とおさらばしたいが如く意気揚々とその言葉に反応した。



「はい、なんででしょうか？」

「あなた、また一色さんに何かしたの？」

ビクツと雪ノ下先輩の隣で黙々と梨の皮をむいてた一色の身体が跳ねるのが見えた。俺も緊張の電気みたいな感覚が身体中を駆け巡る。

あー駄目だ。

この人完全にこの空気の大元を正面から叩き潰しに来てる。

つていうかまたつてなにまたつて？ 逆ですよ逆、いつも一色から問題を持つてくるのだ。

俺は何も悪くない。

「いえ……特になにもないですくははは……」

「一色さん、先ほどからやけに比企谷君に目が行っているようだけれど？ 比企谷君に

何か用があるのではないのかしら？」

「い、いえ。そう言うわけでは……」

一色も歯切れの悪い返答をするが雪ノ下先輩は特に気にする様子もないようだ。

「そつ。それにしてもいつも騒がしい貴方たち2人が気を遣ってくれてはおかげで静かで作業に集中しやすいわ」

確実に何か含ませた言葉なんだろうけれどその手にはのらない。

めんどくさいもん。

「そうですね。今は急ピッチに作業進めないといけませんし」

「その割には貴方の作業が進んでるように見えないのだけれど？ 包丁、震えてるわ

よっ。」

「ひ、久し振りに皮むきをしたんで……やっぱブランクつてあるもんなんすね」

「あら？ 作業前にあれだけ余裕綽々と大口を言っておきながら実力は大了ことなかつたのね。ふっ」

何でそんな勝ち誇った顔してんですか？ えっ？ 勝負だつたのこれ？

それに俺そんな大言壮語吐いてたっけ？ 家事できますくらいしか言つてないぞ？

「普通に皮むけてるだけでも偉いじゃないですか、できない人の方が現状多いですし」  
生きてるだけで偉いんだから皮むきできるんだつたらもつと偉いだろ！

「そんな事どうでも良いわ」

なぜその話題を振つたのん？

それから会話が途切れ数十分くらい作業に没頭していた所だつた。

また雪ノ下先輩が口を開いた。

「比企谷君、何か面白い話をしてくれないかしら？」

今日はホントよく喋るなこの人。しかも開口一番ハードルがたけえよ……

「それ言われると一番困る言葉ですから2度と使わないことをオススメしますよ」

「あら、そうかしら？ 貴方なら自分を笑いのネタにした話の100や200あると思っただけど？」

「いいのか？ 昔自虐ネタは単発だったら面白いが幾つもそれを話していくと次第に空気重くなるんだぜ？」

「なんか……ごめん。みたいな。」

「雪ノ下先輩こそ今日は一段とおしゃべりじゃないですか。何か良いことあったんですか？」

「ええ、後輩2人の一雨露霜雪《うろそうせつ》な空気に挟まれているから少しでも気を紛らわしたいのよ」

「なんか……本当にすいません。」

「さて」

雪ノ下先輩は持っていた梨のカットまで終わらせると

そつと包丁を置いた。

「私の担当分は終わらせたとと思うわ。あとはあなた達だけでお願い」

「……まじすか。はええ……」

雪ノ下先輩は俺や一色の返事を聞かずに切り終えた梨を持って行こうとした。

俺とすれ違い間際「うまくやりなさい」とだけ呟いて去って行った。

うまくやりなさい??　なんだそれは?　何を上手くやれば良いんだ?

主語がねえからわつかんねえよ。梨の皮むきをもっとうまくやれて事か?

いやまあ、もうちよつと慎重にやればまあ、できなくはないだろうが

それからもんもんと悩みどれくらいが経つただろうか。

5分しか経ってねえ。精神と時の部屋かよ。

「あの……せんばい?」

どうやらこの空気に耐えきれなかったのか一色の方から語りかけてきた。

「……んだよ」

「梨、皮むくのうまいですね」

「だろ?　……雪ノ下先輩にはうまくやりなさいって怒られたぞ。」

「まあな、これくらいならできる」

「そうですか、すごいですね」

「ああ……」

……

会話終わっちゃったよ。余計なんか気まづくなった感ないかこれ?

俺が悪いの?　そりやすごいですねって言われたらはい、ありがとうしか回答ないだ

ろ普通。

雑談むずくね？

「あの……せんぱい……先日はその……」

おどおどしく俺の様子を横目で見ながら語りかけてくる。

あれ、もう本題入ってくるの？

その先日の流れがあるとか言っていたのは何だったのだろうか。

君は壮大なマニフェスト掲げて当選したら何のことかさっぱり忘れる政治家かな？

……冗談はこのくらいにしておくか。

「なんつーか……途中で帰って悪かったな」

「いえ、なんかその……悪ふざけがすぎました、私の方こそごめんなさい」

「だな。俺だからまだ大丈夫だったが。他のやつにはやめといた方がいい」

「もうしませんよ」

「それがいいぞ」

これで今回の件について、一色いろはは確かに謝罪したって事で決着はついた。

形式上は解決している状態であり禊ぎは済まされたわけだ。

一色いろはが俺に対する罪悪感は形式上洗い流されたって事だ。

だが……

「なあ、一色」

ただ、それで終わらないのが人間関係というのは知っている。言葉だけではどうにもならない部分だ。

「えっ……と、はい」

「お前からたびたび受けてた実験……もとい依頼についてだが……やっぱ俺じゃ力不足だ無理無理無理。そういう依頼や相談は由比ヶ浜か葉山先輩あたりにしてやってくれ。」

マジで何も思いつかん」

建前上、俺に悪ふざけをしたと言っているが一色は何か隠し事をしており、それが枷となっている。

ただそれがなんなのか、なぜ隠す必要があるのか、わからんがそれも取り除く必要がある。

隠している内容が分からんが1つだけ分かる事は俺が関係していることだ。

なぜこいつがあそこまで苦しい言い訳までして悪役を演じる必要がある。

そうやって俺に心を消費する必要なんて無い。俺に優しくするな。

よって一色いろはの中から俺を取り除けば悩みの種は無くなる。

これが俺の結論だ。

その言葉を吐いた後、しばらく一色からの返答は無かった。

表情1つ変えずシャリシャリと梨の皮を向いていた。

しばらく緊迫した空気が流れ、体感としては数時間待った感覚だ。

「……そうですよね。わかりました」

そうだ。それでいい。

自分のやった事に対しての尾を引いているから、自分から言い出し辛かったのだろう。

自分からお願ひした実験という名の依頼や、さらに由比ヶ浜や雪ノ下先輩との交友関係維持の為、奉仕部に入入りする分、嫌でも俺と会わないといけなくなる場面が出てくる。

しかしそれだと俺と顔を合わせたときに気まずくなる。同じクラスなのだからまずそれは考えるだろう。

だから今回俺から依頼放棄したことにより、俺と一色の接点を終わらせる。

そうする事により、俺は接点の無い知人となり、まあ昔よく遊んだ男その1として一色の記憶の一部と化するだろう。

そしてこれを機に今はとくに関わる必要がないから、話をするタイミングが無いから。自分のコンディションが整ったら、その時が来たらと自分に言い聞かせて偶然という天の采配に身を任せ改善することを先延ばしにしてそのまま自然にフェードアウト



……つてところだな。

まっ、自然に關係が消滅できるの流れになつていゝのではないだろうか。

何悩んでるかしらんが、俺が居なくなることと解決できるならそれでいいわ。

俺にしてはうまくできてるのではないだろうか。

なんか虚無に近い心境になりながらもチラツと一色の方を横目で見た。

彼女は何も言わずに黙々と梨の皮をむいていた。

## # 27 — 1

「おお……すげえ」

目の前で火柱が立った。

林間学校の晩飯にカレーを作るらしく、先に火の付け方を平塚先生がレクチャーするって話だったのだが途中まではしっかりとしていたのにいきなりサラダ油を投入して現在の状態となったわけだ。その光景は非日常的で小学生達は大盛り上がり、キヤツキヤしてた。

ただマジで危険だから真似しないでね。

なんかどつかのロールプレイングゲームの技で火柱とかあったよね、覚える事の出来る職業がスーパースターだったかスーパードールだったかどつちかだったはず。おっと……あまり深くは考えないようにしよう。

「平塚先生……」

呆れたように嘆息をつく雪ノ下先輩。

「ざっとこんなもんだ。サラダ油は真似しなくていいからな。では班分けをする」

そう言っつて平塚先生は男子はこの場で火起こし。女子は食材の運び出しで連れて行

かれた。

結構遠くに準備されているのか女子達の姿が野外調理場からいつの間にか消えていた。

そんな遠くにおいてるの？何か裏があると勘ぐってしまおう。

とりあえずこの場に残された俺とキョロ充先輩と彩加と葉山先輩だ。

「俺たちも始めるか」

「そうだね」

葉山先輩と彩加が互い頷き、支給された軍手をはめ、各自自分の作業を見つけては取り掛かっていく。

その光景をぼーっと俺は眺めていて気づく。

……あつ、俺もやらなきや

なんでリア充はこう流れるように行動できるの？ それじゃー君はこれ、あなたはこれねつ、それじゃーみんなー！ 作業開始！ つて掛け声がないと俺動けないぞ。

やつべー、もし体育会系の先輩だったら『なんで先輩より先に行動できねえんだよ』つて後で怒られそうだ。そうなる俺は引きこもる自信がある。

どうやら作業は早い者勝ちみたいなき感じで先に手を出した奴がやる方式みたいで

結局残ってたのは炭にうちわでパタパタと風を送り続ける単純作業のみだった……

心を虚無にしてただパタパタと風を送るだけの簡単なお仕事。やっている最中にエクスプロージョンの詠唱を囁まずに言える練習すらできそうだ。エオルース・ヌフィール……長すぎて忘れたわ。

それにこの野外調理場と言うのか？ 風で火が燃え移らないように防風設備が施されているのか風があまり吹いてこない。

そして季節は夏、自然豊かな高原といえど風が吹いてないと体感的に暑いのだ、さらに炭の熱気が追い討ちのように俺の肌を焼く。遠赤外線が美味しくこんがり焼けそうだな。比企肉ってな。こわつ……一気に猟奇的になったな。

「それ、けつこう暑そうだね」

彩加は俺に気をかけてくれたのだろうか、そつと声をかけてくれる健気な天使に癒やされる。

「まあ、それなりに……」

「そっか、熱中症になったら怖いからみんなの分の飲み物とってくるね！」

なんて献身的！ 圧倒的彩加。トキメキすぎて不整脈になりそう。

「あざっす」

「おっ？ それだったら俺も手伝うぜ」

作業がひと段落して手持ち無沙汰になったのかキョロ口充パイセンが手伝いの名乗り

をあげる。

キヨロ充先輩優しい人なんだな。名前知らんから最低な呼び名だがな。

「うん、お願い」

あつさりと彩加はそれを受け入れた

くつそー天使と2人きりとか羨ましすぎる。でも俺は一度天使とデートしたから俺のほうが上！

……

2人が飲み物を取りに行った後、残されたのは俺と葉山先輩だ。

まあなにも話す話題もないし住む世界も違うしなんかここに存在してすいませんくらいに申し訳なさは感じている。

……

多分葉山先輩も手持ち無沙汰なんだろうな。すっごい見られてる。視線をピンピン感じる。

俺じゃなくて炭を見て欲しい。アウトドアでイケてる系高校生みたいに見えるよきつと。

休日にはミスターキャッシュレスになってるぞ。ネタがオヤジくせえ。

「なあ比企谷」

そんな俺に哀れみを覚えたのか葉山先輩から話を振ってくる。やはり葉山先輩は優しい。

「なんですかね？」

「俺の勘違いならそれでいいんだが……聞いてもいいか？」

「ええ、どうぞ」

そう言われたらこう返さないといけない。

ただこの意味のなさない一時間に嫌な予感が走る。

そんな神妙な面持ちで何を……葉山先輩、俺そんな趣味ないですから。

「いろはと何かあったか？」

……

……

炭に送る風が少しだけ強さを増した。

同時に煤が舞い上がる。

「昼飯の時なんだが雪ノ下さんがすごい早く梨を切ってきてその際に厳しい小言を言われてね。君といろはを一緒にしたのがマズかったのかなって」

あー、なんかすいません……この問題がなければ最適でした。

「いえ、前にちよつと考えのすれ違いがあつて時間を空けたのですがもう大丈夫です。和解したんで。すいません葉山先輩と雪ノ下先輩まで巻き込んで」

「あ、ああ。いや気にする必要はないよ。ちゃんと和解できてよかつた。ほつとしたよ」  
まあ、ありのままの真実を伝えているからなにもやましいことはないがこうなんとい  
うか……うひゃあ

「ウヒャ!!」

突然首筋に冷たい感触が走り裏返つた声が辺りにこだまする。

はっず……

「あつごめん八幡！ 驚かせちゃつた」

振り返ると純粹無垢、健気で献身的な天使がいる。

視聴率稼げそうなドラマのタイトルになりそうだな。俺絶対リアタイで見る。

驚愕が安堵に瞬間的に変換されるなんて初めての体験だ。

もう能力者じゃん。

「いや、大丈夫。ありがと」

彩加から麦茶を受け取り軽く啜る。冷たい。潤う。五臓六腑に染み渡る。

ただ、火の近くだから染み渡つたら0.5秒くらいですぐ熱さがぶり返してくるわけだ。

知ってるか？ ランニングって途中で歩いてまた走った方が辛いんだぜ。

それと同じで一度冷たいを知ってしまふと熱さ体感が倍増する訳で

俺は今非常にここから離れたい。しかし彩加の手前そんなことが言えるはずもない。

そんな事を悶々と考えていると

「ああ……比企谷、代わるよ」

と爽やかに笑みを浮かべた葉山先輩が交代の申し入れをしてくれた。まじで助かった。

うちわを葉山先輩に託し俺はベンチに腰掛けてもう一つある予備のうちわで今度は炭ではなく俺に風を仰いぐ。

涼しい、まじ天国。

先輩の背中を見ながら休憩ってなんか背徳感あるよなあ。

まあ、俺は仕事やった感あるから達成感もあるんだがな。

そんな時、どうやら野菜調達組の女子たちが帰ってきた。

あれ平塚先生と一色の姿が見えん。

別の作業でもしているのだろうか？

同時に三浦先輩が吠える。

「隼人！ めっちゃ似合ってる！」



「あー、ほんとすごい素敵だね。アウトドアで焚火眺めている系だよー」

あら、俺と似たようなこと考えていらつしやった方がいるみたいね。メガネ先輩、気が合いますね。

「俺はさつき交代したばつかだ。さつきまで比企谷がやつてくれてたんだ」

おお、葉山先輩すかさず俺がサボつてないよつてフオロー入れてくれるのまじで嬉しい。まじいい人。

「比企谷あ？ ……誰？」

そもそも認知すらされてなかったのは流石に効くわあ……キョロ充先輩笑つてっし。「そこで休憩している一年生だよ」

葉山先輩がそう言うのと三浦先輩と目が合う、目力強くね？ 超怖いんですけど。

えつなになんで俺睨みつけられてるの？ なんか悪いことした？

「へえー、先輩差し置いて休憩つていい度胸してるし」

そう言つてずんずんと俺に近づいてくる。

あー見た目通りガッツリ体育会系でした。こりや俺あとでシメられるわ。

財布の中身いくらあつたつけ？ 札だけは靴下にも隠しておくか。

三浦先輩がふうんつと値踏みするかのような視線が刺さる。

やめて、女子にそんなに視線送られると意識しちまうが、あんたにそれやられると畏

縮しかねえ……

「つてかあんた超顔真つ黒、超ウケるんだけどー」

「はい？」

超ダブル頂きましたー！ ラーメン屋かよ。

「ユイー、ウエットティッシュ的な奴持ってなかった？ ちよーだい」

「うんーあるよー」

そう言つて三浦先輩は由比ヶ浜からウエットティッシュをもらうとそれを俺に差し出す。

「ほら、顔真つ黒。これ使つて」

「は、はあ。ありがとうございます」

どうやらしばらく炭の近くにいたから煤が顔に貼り付いてしまったらしい。

そう言つて差し出されたウエットティッシュで顔をガシガシと拭く。

吹いた後にスーッと清涼感がある。これ洗顔シートかな？

「ほらまだ付いてる、貸して」

「えっちよっ!？」

半ば奪い取るかのように俺から洗顔シートを取り、もみあげの生え際部分や鼻筋と目の凹み部分を拭かれる。

すごい恥ずかしいってのオカンかよ！　ちよつとキツめな香水の香りと焦りと恥ずかしさで頭が混乱する。

「あと髪にもついてつから、それは自分でやりな。あーし手が黒くなる嫌」  
いえ、もう十分です。

「……あんだ、比企谷？」

「えっ？　ええ……はい」

「なら今日からあんだヒキオよ」

……っは？

会話のやり取りが聞こえていたのだろう、すぐ近くでメガネ先輩が吹き出した。俺も見ている側だったら吹き出していたと思う。

比企谷八幡という珍しいくも贅沢な名前をもらってしまい申し訳ございません。

「海老名なに笑ってるし！」

メガネ先輩の名前が判明。苗字だけだが大きなサーブスエリアがありそうな名前だな。  
な。

それ以外全く知らんけど。

メガネ先輩……もとい海老名先輩は「いやあーなんでもないよー」と笑いその笑いの原因を突き止めようと三浦先輩は海老名先輩の元に行ってしまった。

これでひと安心だ。

「よかったねヒッキー。なんていうか……皆と仲よくやってるね……」

いつの間にか後ろにいた由比ヶ浜が声をかけてくる。

お、俺の後ろを……いつの間に取りられていた……もしかして火影一族の炎術師か？

「そうか？」

まあ葉山先輩以外は実質初対面だからな。初回特典だろ。つき会うときには忘却曲線最底辺下のホライズンにいると思うぞ？

由比ヶ浜が嬉しそうに笑みを零しているとその隣を陣取るように雪ノ下先輩がやってきた。

「あなた、何か理由をつけてサボると思ったのに……意外とそういう所は律儀ね」

「そう思うんでしたら、今後俺の認識を改めてくれてもいいんですよ？」

「嫌よ」

ハッキリと、きつぱりと言われた。流石の俺も傷つくぞ……

ちよつと反論はしたくなる。

「なんでですか、仕事はしっかりこなしているじゃないですか」

返答が無い。そしてこの間……俺の知らぬ間に何か良からぬ事が起こったのか身構えた。

「まっってください？俺なんかしました？」  
「した」

即答したのは由比ヶ浜。雪ノ下先輩と同じ口調。なにそれこわい……  
えっ？ オレ何かやつちやいました？

## #27-2 またもや一色いろはは同じ手を使わざる得なくなる

「女性陣は道の先にある野菜が積まれてる籠をここに持つてきて欲しい」

女性陣先輩方々がはーいと返事をして一斉に移動を開始する。

私もそれに漏れず移動する。

平塚先生は1人でずんずんと進んでいってしまった。

2年生の皆さんはどうやら既に既知の仲同士らしく皆互いにグループを作りわいわいと楽しそうに話しながら移動していた。

ただ私はそんな気分には一切なれずそのグループと少し距離を置きつつ彼女達の背中について行き、考えに耽る。

はあ……なんでこんな所に居るのよ……

気分転換で千葉村に来たはずなのにトドメ刺されちゃった……

すっごい効いた……

せんばいから言われた依頼破棄の申し出は想像していた以上に心を抉った。

だめ……今泣いたら駄目。もうちよつと後。堪える。

その依頼破棄は実質私と接点を無くすと同意義だからだ。  
全てその依頼の派生で私とせんばいの関係が保っていた。

もうやだ……。

それが無くなるという事はつまりは今後私と関わりたくない事を意味している。

感情が混じる整理がつかない思考が頭の中を駆け巡る。

そこに度々せんばいからいわれた言葉がよぎる

その言葉がよぎったときの心がすごく痛くなる。

それもそうだ。これは報いなんだから。

ただ、その痛みは想像以上に大きかった。浅い考えで行動したことをかなり後悔し

た。

でもあの時はそうするしかなかった。

あのまま進めていたらきつと断られていた。

そうしなければ隣の隣にいるのは……

それは絶対嫌。

もつとうまいやり方なら後からいくらでも思いついた。

でもあの瞬間はあれが最善策だったのだから、いまさらこうすればよかつたなんて過去の事を引きずるよりも前を向こう。

堕ちた信用をどうやって取り戻すか考えよう。

それなのに……

それなのに……

自分がしでかした事なのに自分が可哀想と思っているもう一人の自分がいて、そいつが『誰のせいでこうなったと思ってるんだ！私は悪くない、悪いのは全部あの子、あの子が余計なことしたからっ！』と正当化しよう悲劇のヒロインになろうという傲慢で下



衆で甘え腐った事を言ってくる。

タチが悪いのはそれが今やけに耳心地が良い所だ。

いつもなら一蹴する考え方はずなのに。

ハツと甘え腐った自分に浸食されそうになっている事に気づき考えを打ち切る。

と同時に周りの状況を確認した。

少し距離はあるが先に色が分かれているカゴが幾つか置かれている場所がある。

そこに行つて持つて戻れと言う事か、単純なことだ。

ネガティブに考えてはダメ。ポジティブに考えなきや……

ポジティブに……ポジティブに……ポジティブに……

もう振られたも同然だし、手当たり次第適当な男子見繕つて適当に付き合つて良いんじゃない？花の女子高生、悩んだ時間は戻つてこないんだよ？悩むよりも今を楽しまな  
きや！

まっつて？信用を失つてでもそれでも関係を続けるつて言つたあの時の私の決意は何？依頼破棄を関係が終わりと受け取るのは違うでしょ？まだチャンスはある！負けるないろは！

誰がどう聞いても絶交でしょ絶交。そもそも信用がない人間と関わりたくないでしょ。これからどんどん疎遠になつてくるよ。そうなる前に諦めて次の男でも見つけよ？

信用が底を尽きたつていうならそもそもこんな回りくどく言わないでしようが！少なからずまだ信用は残つてる。せんばいに挽回するチャンスはまだ残つてる！

ネガティブとポジティブが頭の中でケンカする。

あー、ほんとどうしてこんな事になつたんだろう。

私気まぐれで祭りになんて行かなければ良かったのかな？それともそもそもせんばいを同級生としてみていた方が幸せだったのだろうか。……つていうか全部もう過ぎた事だし。

「……ろ……やん……」

あの時気持ち伝えておけば全て丸く収まつたのでは？私とせんばいは付き合えてハッピーエンド！以上みたいになるはずじゃなかったのかな？刹那的に感じた危機感で行動して状況を逆転させてしまった事が悪かつたんじゃないの？

あつはつは……過去掘り起こして結局何になるの……結果は変えられないし、私の現状も変わらない。

私は一体この思考の答えをどこに持っていきたいの……

「いろはちゃん!」

ハツとまた現実に戻される。

「あつ、す、すいません。ちよつとぼーつとしてました何運ぶんでしたっけ?ちくわ?大根?しらたき?」

急に話しかけられた事により頭より口が先に動いた。

「いろはちゃん落ち着いて。メニューがおでんになっちゃってるよ!」

えつ、えつ、なつ何を……どう……するん……だっけ??

わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない

おでん？運ぶ？せんぱい？関係？信用？はっはっはっ……

わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない  
わかんない

もうわっかんないよお……

息がしづらい、何度も鼻をすする。

目頭が熱く視界が度々ぼやけてさらに頬を伝う生暖かい液体の感触

ほんつと……さいあく……

腕や服に当たる水滴の感触それら全てが自分が泣き出したという状況を理解するのに十分な証拠。

とにかくこれ以上余計な痴態を晒さないで良いように顔を隠しその場でしゃがみ込んだ。

しかし指の隙間、手の甲から涙は逃げていき、無理に手で顔を隠したことにより嗚咽がよく通り、先輩達が次々に私が泣き出した事に気づきだした。

「えっ!?ちよつ、いろはちゃん!」

傍から見れば唐突に先輩方の前で泣き出した1年生。

情けない、恥ずかしいがさらに追い打ちをかけて嗚咽と落涙の頻度が増える。

「へ!?……ど、どうしたの一色ちゃん!」

気かけ海老名先輩、嗚咽で意味不明な返答しかできない。

「はあっ!?なんで?」

なんとしても迷惑かけまいと思っていた三浦先輩、本当に申し訳ない。

あとが怖い。

状況について行けないのだろうなぞ泣いているのか理解できず慌てる私の一番近く



にいた結衣先輩。

「急に泣き出しちゃって……」

「そう言えば……先ほどからずっと心ここにあらずのような感じだったわね。たまに肩間にしわが寄っていたりと本調子では無さそうだったわ」

そう雪ノ下先輩が呟く。

そういう風に見えていたんだと自分のしょうもない姿を見られていたことに対する羞恥心が顔を出す

ただ結衣先輩がコソツと耳打ちする。

「……大丈夫だよいろはちゃん」

その優しい声がつつと耳の中に入ってきた。

何が大丈夫なのかは分からない……けどいつもの結衣先輩より大人っぽく感じ安心感を感じた。

結衣先輩は近くに居た優美子先輩に伝える。

「いろはちゃん……ちよつと辛い日みたい」

羞恥の極み。

明らかに狙ったかのような言葉選び。いや確かに辛いけれど……！

そしてその前の雪ノ下先輩の私の状況説明から皆たどり着く答えを誘導されていた。

全然大丈夫じゃない。しかも違うとも言えないこの状況。

「まったく……あんた、自分の薬もってる？どこ……」

嗚咽混じりの声は何を言っても濁音が混じり自分でも何を言っているのか分からない。

上手く話す事が出来ない羞恥心がさらにそれを加速させる。

ああ、言葉すらまともに発することができない……もうどこまでもものつかるしか無いのか……

「ちよつと宿舍まで距離あるわね……」

「私のだけどポーチに入れてるからそれ持つてくるよー！」

「海老名ー急ぎ、なるはやでおねがい」

もはや視界が涙でぼやけてどうという状況分からない。

ざっざつと土を蹴る音が聞こえ、海老名先輩が薬を急いで取りに行っている事だけは分かった。

「いろはちゃん。そこ座ろ」

結衣先輩の言葉が共通認識とされたみたいだ。

優美子先輩は私の介抱で海老名先輩はその薬を取りに向かうって言うシナリオで決着がついた。

「1年生の女子1人で言いだしづらかったでしょ」

そう心配そうに言って慰め続ける優美子先輩。

多分自分が気づいてフォローできなかった事を悔いているのか……

そうとなると罪悪感が半端ない。

それからすぐに戻ってきた海老名先輩はそう言つて薬を差し出す……

「一色ちゃん。はい、薬。大丈夫？」

「あんだ、これ飲んでおとなしくしておきな。」

渡された薬をしつかりと握りしめる。

本当に申し訳ありません。本当に申し訳ありません。本当に申し訳ありません。これもう本当に最低最悪の展開……ごめんなさい。申し訳御座いません。迷惑かけてごめんなさい……

申し訳ない、恥ずかしい、情けないと言つた感情が絡み合いさらに涙を増長させる。

「一色！大丈夫か！」

そう言つて近づいてきたのはぼやけた視界だが平塚先生だと言うのが分かる。

ただヒックヒックと嗚咽が止まらず返答ができない。

これから色々と作業があつただろうに……こんな私に……  
色んな人に……迷惑かけて……ほんと私……ださいなあ……

「だ……だいきよ……です……」

無理矢理声を出してもこれはダメだ何言つてるか自分でもわからない。  
首を縦に振る意外は何もできなかった。

「馬鹿者、大丈夫と言う奴は大抵大丈夫では無い」

ちやんと言葉を汲み取り、優しく微笑み頭をポンポンと撫でられた。

なんだこれ……大人がいるというものはここまでも安心するもののかと……  
現れて……初めて安心する存在がここにいるのかと思つた。

それを考えた途端、ピークを過ぎたと思つた情動が高まり始め、  
またポロポロと涙が流れ嗚咽がその頻度をあげる。

「安心しろ。私が来たんだ」

涙で落ちたメイクもあるだろう、汚いだろうし汚れてしまう。

そんなのは関係無しに平塚先生は私を抱きしめた。

最後の堤防は決壊し、私は人生で最醜最悪な号泣姿を先輩方面々に晒すこととなつ

た。

\*\*\*

平塚先生は私を連れ先輩達は自分の分まで籠を持って行ってしまい、私と平塚先生がちょうど籠があつた場所のブルーシートで休んで戻ると言う事になった。

「どうだ、大分スツキリしただろ?」

私は体育座りで顔を足で隠す。

「人生で一番酷い醜態をさらしたので死にたいです」

あとメイクが酷いことになっていると思う。

「気にするな。人の噂も七十五日だぞ」

「それ……地味に長いじゃ無いですか」

「どうせ夏休みのだ真ん中の出来事なんて誰も覚えてないさ」

「そう言うものなんですか?」

「そう言うもんだ」

……

会話が途切れサツと吹く風が少し心地よく感じる。

さつきみたいになごちゃごちゃとした心境が軽くなつた気がした。

「まあ私は君があそこまで号泣するのに正直驚いたがな」

「遠慮するなつて言ったのは誰ですか……」

正直思い返すともものすごく恥ずかしい……

「泣くというのは一種のストレス発散法だ。泣きたい時は恥ずかしながら大いに泣け。大人になるとそれすらも難しくなってくるからな」

確かに泣いた事でさっきの淀んだ思考が一気に抜けていた。

「まあ……確かに大分スッキリしましたけど」

「ふつ、正直でよろしい」

「もう思い出したくないので掘り返さないでください」

「わかったわかった」

ただ泣いてスッキリしたところで何か妙案が思いつくかと思いきや、結局何も思いつかない。

何も有効な策は無いし……この場合どうすれば？……つ！

私の視線は次第に平塚先生に向いた。

「ん？どうした一色」

「折角なのでもう少し雑談に付き合ってもらえますか」

「ふむ……サボリと思われぬ程度には良いだろう」

「では……私の友達の親友の話なのですが……」

「ん？君はあれか？恋人の趣味に染められるタイプなのか？」

「で、ですから友達の話です！」

意外と大きい声が出てしまつてすぐさま自分で自分の口を塞ぐ。

「ああ。続けたまえ……」

ニヤツとして平塚先生は聞き返した。

ほんのり顔が熱くなり、私は目をそらした。

## # 2 8 最後に平塚静はこう呟く

ここは自然豊かだな。

度々吹く風は心地が良く大地に活力を与え、草と木々の葉が擦れる音、蝉時雨が伴奏をし、キジバトとウグイスが主旋律を奏でる。普段は余り意識を向けない所に意図的に意識を向けると心地よい音楽と捉えてしまう。

……あつ、蝉がやっぱりうるさすぎる。

「……と、言う訳で。あくまで友達の話なんです。元の関係に戻りたいなって悩んでいまして……」

大体話の内容は理解したがどうやら嫌でも一色は友達の話としたいようだ。雑談としやれ込んでまさか相談事を話すとはなかなかできない芸当だぞ。

「ふむ……」

一色は比企谷と誰かの告白場面を偶然目撃してしまった……と……にわかには信じがたいが一色が語るのだから事実なのだろう。

……で、比企谷はその女性を身の程をわきまえず振った……理由として俺に都合の良い女は警戒して当たり前。



一色はその内容を聞いてしまったが為……がつつり盗み聞きしていないか君？。

後日思いを告げる予定だった一色はその聞いた内容で自分にもそれが当てはまることに気づき言おうに言い出せず、苦し紛れの言い訳として『おふぎけでした☆てへえ（ハート）』と発言してしまい比企谷を怒らせてしまったと。

そして今日まさかの偶然再会してしまい、ふぎけた事を謝罪したが実質上絶縁を告げられたと。

……なるほど。

比企谷は表面上の言葉を鵜呑みにする奴では無い、あいつは何かと言葉の裏を探ることに長けているからな。

だからこそ悪ふぎけという部分がハリボテであるという事は理解していると思うが。それでも関係を絶とうとしているのはなぜだ？ 彼なりの考えがあるという事か？

———それにしても……

何を経験したらその歳で自分に都合の良いという言葉を出せるのだ。

普通の男子高校生なら女性から告白されたらテンション上がるだろうが。

こんなラブコメ漫画みたいな展開なぜ私には来ない!!

はあくくく……生徒達がすごい青春している。

調理場で男女イチャコラしないように分けたはずなのだが……結局巻き込まれているではないか。

なんだその贅沢な悩みは！ 甘ったるくて吐き気がしてきた。

私が高校生の頃にそんな青くさい悩みなど無かったぞ……無論そんな相手もいなかったからだがな！

ハツと自虐的な思考に陥りそうになっているのに気づきそれをバツサリと打ち切った。

生徒に心配させるような表情が表に出てなかったかどうか確認を含め一色に視線を向ける。

「……や、やつは、り……わ、私……せんぱいにきらわれたんですかね……」

またもや涙をポロポロと流しながら一色はそう言う。

……よもやよもやだ。予想の斜め上をいった。

なぜまた泣いている……いや、そもそも友達の話すら破綻させる語りっぷりなのだが……

これは流した方がいいのか？

さつきまであんなに平然としてただろ……もしや語ってる最中に感情がぶり返したのか？ どれだけ情緒不安定になってるんだ。一色、君はそんな感受性が高い生徒だったか？違和感が拭えん。

……いやまて。私基準で考えてはダメだ。多感な時期だからな。そういうこともある。

だが……うーん……これは男子には絶対見られたくない一面だな……酷い顔だ。

確かタオルがあつたな。……泣き止んだら顔洗ってくるように伝えておこう。

それはそうと一色いろはという人物がここまで感情をあらわにする事が珍しい。

私の教員歴において一色のような生徒は自身のプライドも持ち合わせており、自身自身を客観視し、人前でそうそう泣くことは無い。

あつたとして計画的に行えるはずなのだ……。こうも感情的に号泣するのは正直意外だ。

……だがしかし、一色は本当に無くすと悔しいと思える相手に出会えた安心感も芽生えた。

さて、思考ばかりに気を取られ泣いている生徒を放っておく教師がどこにいる。

ちやんと時間をかけて話を聞いてやろう……

「大丈夫だ一色、私と一緒に話そう。そうすれば何かに気づくだろう。……その前に泣き尽くせ、それくらい時間を待ってやれる器量はあるぞ」

そして一色を抱きしめ頭を撫でた。

……

それは一色に顔を洗わせ戻ってきた時だ。私の隣に座る一色をみてどうしても自分の顔が軽く歪む感覚を感じる。

いかんいかん、眉間にしわが寄っている。

おいなんだその『とうとう……先生の前で……泣いちゃった……』って恥じらいた顔。はにかむな！ 顔赤くするな！ 指をいじるな！ やめろ！ 私に効く！ 可愛いなおい！

まあ顔を洗って冷静を取り戻したのだろう。

深呼吸をし、冷静を保ちつつ一色にむけて言葉を放つ。

「大体事情は把握した」

「……これってどうしたら良いんですかね？」

一色もそれなりに発言できるようには回復した事を確認する。

だが……私もそんな経験が無いからなんて言いだし辛い歳になったのだよ。

「私にも分かんない！」

しかし、無い袖は振れん。

「ええ!?先生って先に生まれたから先生なんですよね! それだったらもう少し何かあるんじゃないですか？」

若干涙目の一色が声を荒げる。

決死の気持ちでこの相談を持ちかけたのだろう。

小説やエッセイに書いてあった展開を生徒にそれをあたかも自分が経験したかのよう語るなどともつてのほかだ。

そんな虚勢をはってまで教師を続けるのであれば私は喜んで退職届を提出しよう。

「先生は先生だ。だが、先に生まれたからってお前達と同じ人生を送ってきたかって言われるとそうではないんだぞ」

一色は顎に手を当て考える仕草をする。

わずかの間を置いた後、ハッと何かに気づいた表情をする。

どうやら結論にたどり着いたようだ。

そして申し訳なきように「すいません……」と私に向けて発音し、軽く一礼する。なるほど、この相談有償にしてやるからな、覚えておけ。

あの間に絶対に『相談する相手……間違つてました』みたいな事を考えていたに違いない。

それはそれで癪に障る。というか私は君への回答を先送りにしたつもりは無い。先人に経験を教えてもらおうと言うことは教育ではポピュラーな手法の1つだ。しかしそれを聞いたところで全てそれで当てはまるかと言えそうではない。

用意された答えばかりを相手に当てはめるといふのは裏を返せば相手の心や考えを軽視している事になる。

だからな一色、ちゃんと見て気づいて理解してあげてくれ。

「一色、その友人とやらは今後その人とどういう関係になりたいんだつたか？」

「そりゃ付き合つて、結婚して幸せな家庭を築いて……子供9人と孫に見舞われて2人一緒に生涯を閉じたいらしい」

一応友人語りのブラフ挟んでおいてよかった。継続するんだね。

……つてちよつとまで、ツツコミ所が多すぎる。いやそう言うことを言っているわけじゃない。

「結婚してから後が明らかに夢妄想過ぎる！ 違うだろうが」

自分の発言がおかしいことに気づいてハツとした表情をするがもう遅い。

「じよ、冗談ですよ。頭の中お花畑じやあるまいし」

あわわと両手を左右に振り、慌てた様子で一色は否定する。

9人……いやあ……本当に本当に頑張っても4人だ……それ以上は夫の収入に左右する。

まあ、共働きであればある程度は……つと何を考えているのだろう。

今度は私が泣き出しそうになるからこの考えは止めよう。

「まずは……元の関係に戻りたいなって感じですよ」

「ふむ……では周りの人間を使えば良いではないか。うまくやればなし崩しに関係が戻るだろう？」

「そんな事しても多分元に戻らないと思います……皆といるときは話せて2人の時は気まずさが残って結局また離れてってなりそう……それにあの子は、何度か彼に迷惑事を依頼してたので……愛想尽かされたのかなって」

「なるほど。その友人とやらは随分と彼とやらに大事にされているみたいだな」

「なんでですか？」

「考えても見ろ、迷惑事を1回持つてこられるだけでも仕事でもない場合は利害関係が無ければ普通拒否するはずだ。だが彼は何度もそれを受けた……と言う事は彼女は大

事にされていたという話だ」

「そう……ですかね……」

「さあな。私は今君が話した内容を元に仮説を立てただけだ」

「……」

彼女は私が答えを出したと思ったのだろう。半目で懐疑的な表情で私を見ているのがよく分かる。

まあそれでも、早々に答えなぞ教えてやる気も無い。

「無責任だ……と言いたそうだな。そのとおり、この件に関しては私は無関係な人間だ、君の友人ともその彼とも何の関係もない。だからこそこう言った無責任な回答がでる。……だが君は違うだろ？ 彼女と彼、共に交遊関係があるように思える。それを無関係な人間である私に話してたやすく解を得ようなんて……それこそ無責任ではないのか？」

私に相談を持ちかけたと言うのもすぐに答えがもらえそうと考えたからだろう。

無論そうしてやる大人はもちろんいる。しかし私はそれはしない。

「それは先生が大人だから……」

「私の言っていることが全て正しい訳ではない。彼を見て聞いて感じて考えた情報をもっとも持っている人物は誰だ？ 他でもない君の友人だ。そしてそれは一色、君にも



同じ事が言える。当人がそれを考え答えを出さないと意味が無い」  
「でも……それで決めた答えがもし間違っていたら……」

一色が何かに怯えているかの様に表情が歪む。

なるほど……ここか。今君が一番恐れている所は。

比企谷への悪ふざけの1件が尾を引き、次も失敗したらと自身すら縛り本当に八方塞がりになってしまった。

どうすることもできず泣き崩れ、他者に答えを求めようとした。……筋が通ったよ。

柄にもなく指を鳴らす。特に意味は無い。

「特別授業をしよう」

「へっ?」

ポカんと素つ頓狂な声をあげる。まあ突然授業が始まったらそうなる。

「うまくやるという言葉がある。一色も言葉は聞いたことがあるだろう? 意味は分かるか?」

「はあ……要領よくこなすって意味ですよね」

呆れたような表情で一色はちゃんと解答してくれる辺り優しさを感じる。

「そうだな、その意味もある。また上司から仕事を押しつけられ下手な仕事したらただじゃおかないぞという場面にも使われる」

ほんとなんで若手だからって面倒な仕事をあれやこれや押しつけるんだ。

「一体どうしたんですか……闇が深いですよ……」

「やった事が無いことに対してうまくやれなんて言われた日には焦りしか無かったがな、まあどうにかやれたんだが……」

「はあ……それで何が言いたいんでしようか？」

「つまりうまくやるといふ言葉を分解すると、『現状の知恵と経験を最大限に活かし、意志を持つてこう動くところ言う結果になる事を仮説立てて行動する』という事だ」

「最大限の知恵と経験……」

一色は顎に手を当て何か考えている。

「そうだ。その調子で考えるんだ。」

「知恵と経験はより洗練されるほど成功率は増す」

「成功率？ 失敗する事もあるんですか？」

「一瞬一色の表情が歪む。不安なのだろう。」

「しかしここを乗り越えなければ何もできない。」

「そうだ。結局は仮説を元に動いているからな。失敗だつてするさ。だからこそリスクを受け入れた上で行動できる意志が必要になる」

「それでも手が届かなかつたらどうするんですか……」

「さらに考えて行動するだけだ。その意志が続く限りな」

「何ですかそれ……がつついてるようでダサイじゃないですか」

「そうか？　せつかく落ちるところまで落ちたのだ。慎重にならずもがきあがきそこからうまくできたならそれこそシンデレラストーリーだ。私はあがいてみる価値はあると思うが？」

「……そつちの話も含めて話すのはズルいですよ……」

「はて、私はその話も含めての特別授業とிட்டんだ。うまくிட்டたの言葉の説明だけではそれはただの野外授業となつてしまうからな。先ほどの発言から君もうすうすは気づいていたと思うが？」

「ホントにズルい……」

まだ何か迷いがありそうだがここから先は一色が考え気づく事だ。

私が諦めるなもつと心を燃やせよと言つたところで響くことは無い。結局は自分から変わる意識をしなければ人は変わらない。

そこまで持つて行けなかつたのはまだまだ私が未熟である証拠だ。私もまた修行が必要だ。

「以上で特別授業は終わりだ。後は君とその友人が考えて答えを出してくれ。時間ならあるだろ？　熟考しなさい」

君も当時最善策だと考えたから言い訳にその悪ふざけを演じたのだろ？ なら同じ事だ、違うのは考える量だ。

考えて考えて考え続ける、一色いろは。

「……平塚先生はずいぶん回りくどい事をするんですね」

「何を言うか。教科書にある答えを教えるだけが教師の仕事では無い。用意されていない答えをどうやって気づかせて見つけ考えさせていくのかも教師の仕事だ」

しかもそれにひな形は存在しない。常に十人十色の対応が迫られる。

だからこそ教員というのは面白い。

「なんとというか……その……ありがとうございます」

まあ君や比企谷、雪ノ下みたいな手にかかる子は早々にはいないがな。

「あと、この個人相談は高いぞ〜」

「先生が生徒からお金を巻き上げる事案が発生したと報告しますよ?」

「それは手厳しい、ならそれはその権利を林間学校の小学生達に譲ってやろう。しっかりとサポートしてやれ」

「まあ、それならやりますけれど……」

「あの子達の目からは君たちも立派な大人にみえるものだ。うまくやれよ?」

「なるほど、上司に仕事を押しつけられる平塚先生の気持ちがよく分かりました」

「だろ？ ほらっそろそろ戻ると良い。皆が心配してるぞ。私は一服してから戻る」  
「はい、ありがとうございます」

一礼し野外調理場に戻っていく彼女の後ろ姿を見送りつつポケットに入っている煙草を一本取り出す。

葉を詰めて啜え、ライターで火をつける。

肺に煙を送り込みガツンとタールの香りが鼻を抜けニコチンが全身に染み渡り、頭が冴える。

ふうく……つと吐いた煙が風に運ばれ消えていく様子を見て無意識に小さく呟いた。

「結婚………したいなあ………」

## #29—1

俺たちが作るカレーは3グループに分けられるみたいだ。

それで結局俺と雪ノ下先輩と由比ヶ浜の3人が班分けされ、彩加と三浦先輩と海老名先輩、で後は葉山先輩とキョロ充パイセン

そんな量作るのか。余ったのは先生達が美味しくいただきますってか。何それズルい。タッパー持ってこればよかった。

……あれ？ 誰か足りなくねえか？ 一色は？ あいつどこ行っただ？ このままでは海老名先輩に葉山先輩とキョロ充パイセンの夢妄想が繰り広げられてしまう。

辺りを見回してみるがその姿はない。と言うか平塚先生もいねえ……仕事手伝わされてんの？

すると、千葉村に来てよく目にする小学生達がなにやら喋っている。

「なあしげちー、にんじんは持っていないかなくて良いんじゃない？」

「ユースケ、好き嫌いは駄目だぞ。俺なんて生で食べるし」

「馬かよ……」

「細かく刻めばいいんじゃない？それならカレーの味に消えて無くなるっしょ」

「きばみー。天才かよ……」

「そういう俺も小町が好き嫌いしたらとりあえずフードプロセッサーにツツコんで細かくして食わせてた気がする。」

「そうこう周りに目線を配りながら材料を一通り揃える。」

「うし。こんなもんか」

俺の目の前には今日の晩飯であるカレーの材料の野菜と肉、あと市販のルー、そして米。うちのカレー風に作り出そうとした所で手を止める。さて？ルーの箱裏に書いてあるとおりに作った方がいいんじゃないか？

良く考えて見ろ。俺の家風とかいってドヤ顔で作ったカレーを食べた奴らが微妙な顔して食べるのなんて見てらんねえ。マジで一生物のトラウマになりかねんぞ。

……しかし結局はカレーだ。おっと、『結局は』とは失礼だったな。失礼。全世界のカレー企業が科学と化学の叡知を駆使し、スパイスの配合に心血を注ぎ作りあげた誰でも美味しく満足できる味に仕上がるカレーだ。多分。結局の所誰が作ろうとカレーは同じ味がするカレーなのだ。

いやまで、どの業界にもイレギュラーは居るもんだ。ほら、居るだろ？僕が一番ガンドラムをうまく操れる奴とかデデデデデンのBGMと共に現れるあのナイトメアとか。あれと同じだ。由比ヶ浜はイレギュラーだ。

……さてよ？ 最近めざニューでみたがロボット工学とやらが話題にあげられているようだ。科学技術の進歩で調理工程を全て自動で行えるロボットが開発されたとでている。

それなら由比ヶ浜でも大丈夫なのでは無いか？ 材料を用意するだけだ。

……いやあいつ絶対桃缶入れるだろ……無理無理ロボット壊れる。現代人類の魔法である科学の叡知を上回る由比ヶ浜マジ主人公。

……つてかさつさと作るか。

俺は淡々と小町と築き上げた家事スキルを使い野菜を洗い、にんじんやジャガイモの皮を剥こうと作業に取りかかろうとした。

「何あなたひとりで勝手に物事をすすめてるの？ ……そうだったわね。あなた協調性に欠けてるんだった」

今日一番のお前がそれを言うか大賞はこれで決まりだな。

「いや、所詮カレーですからね。良いじゃないですか。やりながら物考えたい年頃なんですよ」

「あなたが物考えをしたいという理由はこの場では関係ないでしょ、公私混同しないでもらえないかしら」

「うぐっ……」



「それに……こんな簡単な事を由比ヶ浜さんに任せないで彼女に何をさせればいいのかしら？」

「……一理ありますね」

いやなんというか……ここまでそのとおりだ、ここまで反論の余地がなくストンと腑に落ちた論破は久しぶりってくらい納得した。流石雪ノ下先輩だ。俺に分からない事をやってのける。そこに痺れる憧れ……はしないな。

確かにひとりです勝手にすすめてカレーを作るつてのはあれだったな。だがしかし、ポッチにはどうやって複数人で物事を進めれば良いかわからねえんだよ。

とりま俺ひとりでなんとかすりゃいいか……みたいな感じで終わるんだよ。

先に、簡単な作業を始めた俺が悪かった。由比ヶ浜、頑張れ。

「な、なんかすごい馬鹿にされている気がするんだけど……気のせいだよな？」

「ああ安心しろ、ただ心配しているだけだ。ほれ」

そう、それは午後のおやつを食べた後にソファに俺の隣で寝ている小町をみてほっこりするような優しい笑みを意識して俺はピーラーを差し出した。

「な、なに？ ヒツキー？ ちょっと笑い方……キモい……」

……由比ヶ浜？ 何気ない一言が人を傷つけるんだぞ？ 覚えとけ？

「ジャガイモの芽はちゃんと包丁の角使って取れよ？ ピーラーでポテトチップスよろ

しくみたくに削るなよ?」

「角使つて?? ……包丁に角つて? 先つちよのこと? むずくない?」

あつ……皮むきすらダメかもしんねえ……

「由比ヶ浜さんいい、芽の取り方は……」

そう言つて雪ノ下先輩からジャガイモの芽の取り方講座が始まった。

それをふんふんとじつくりと観察する由比ヶ浜

微笑ましい光景だ。

眺めていると、ふと山本五十六の名言が頭をよぎる。『やつてみせ、言つて聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ』

続きはなんかあつたと思うがその第一段階みたいな感じ。

そういうや中学の頃にやたら著名人の名言を多用する奴がいたが、そういう奴に限つて言葉知っている俺かっけえつてなっているだけで結局は言葉の意味も真意も理解できず、言葉だけに酔いしれた虎の威を借る狐野郎が居たな。

……無論俺なんだがな。「お前の言葉つてペラッペラな紙みたいだな!」つて言われ  
て教室中大爆笑。片隅でひっそりと泣いた覚えがある。

セツナドラマだろ?

「さっきから下卑た視線を感じると思つたら比企谷君? 何をサボつてるの? 飯ごう

の準備、お願い」

「一番面倒くせえ作業を押しつけられた……」

普通のご飯なら米といで炊飯器でびっぴこさだろう。

しかし今回は飯ごうで炊くのだ。勝手が違いすぎる。つというわけで俺もユキペディアのお世話になろう。

「飯ごうは流石に経験ないんでゆきペディア先輩教えてください」

「あなたが懐に隠し持っている情報端末はただの文鎮かしら？ それで調べたら？」

扱いの格差が酷すぎませんか？ ノブレスオブリージユどこに消えたよ。

聞き方が悪かったか？ いやどこも悪いところなんて無い筈だぞ？ ユキペと略すべきだったか？

こりや一色との壁役に使った事をまだ根に持つてるな。

まあ、俺が悪いんだが……

「さつきはすいませんした。ちよつと一色と色々とおつて」  
「……」

えつ、そこ無視されると会話終わっちゃうんですが。

雪ノ下先輩は嘆息をついた後、ようやく呟いた。

「いいえ、大丈夫よ。表に態度が出てしまっていたわね」

なんか由比ヶ浜も気まずそうな雰囲気です。黙々とピーラーでジャガイモ皮をむいていました。

雪ノ下先輩が期待した結果とは？ ……あれか？ 一色と梨切っていた時の事か、そりやちやんとうまく関係が切れるように動いたぞ。

違うのか？ ……いいやうまくやれたはずだ。

「……比企谷君、とりあえず話は後にして先に調理だけ始めましょうか。皆もう煮込み始めてるから」

そう言われ辺りを見回すと確かに皆もう食材を鍋に入れ煮ている段階に入っていた。俺たちは完全に出遅れていたのだ。

「え……ええ………そうですね」

そう言つて雪ノ下先輩はまた皮むきに戻った。

あつ、飯ごうはやっぱり自分で調べろつて事なのね。

\*\*\*

スイスイスイタッタ、スラスラタッタタツと指を滑らしたり叩いたりしてスマホから情報を引き出す。水場で米をとき何度か水を飯ごうから吐き出す。

外にいるときはこういう米ときは面倒だ。もうサトウさんちのご飯でいいだろ。茹でるだけ！ ……地味にあれ高えんだよな。

そうこうとどうでもいいことを考えつつも米ときは終わり後は水を入れるだけだ。どうやら水を手首ほどの浸かるくらいに入れ火の元に置くらいしい。

あとはタイマーで計れば大丈夫だろう。まあずっと様子を見ずとも近くで見っておけば問題ないだろう。

その場にしゃがみ込み燃えている炭火をぼーっと眺める。

最近スマホで読書しながら待つのだろうが残念ながら俺は紙派だ。

いつ消えるか分からん物に金を使うなぞ怖すぎてやってられるか。

ソシャゲなんてもつてのほかだ。上には上が居るのだ。自分の生活費を賭してまで上に向かおうとする奴らに勝てるわけがない。

なら上に向かうだけ無駄だろ。無料配布の石だけでやり過ぎすに越したことはないのだ。最近をよく分からん理由でばらまいている奴……あるだろ？ オススメだぞ。

……

ただじつと飯ごうの様子を見ているがまあ流石に置いたばかりだ、全然反応が見られない。

手持ち無沙汰となった事だし。

またここで雪ノ下先輩から『あら、ご飯を炊いただけで休憩なんて良いご身分ね』なんて言われかねん。

なので何か仕事を探しにっど……

適当に鍋を手に取り油をしき既にみじん切りにされたタマネギを炒める。

「気が利くわね。ここに切った野菜置いておくわ。頃合いをみて入れて。私と由比ヶ浜さんは洗い物と生ゴミの処理をしてくるから」

「うす」

どうやら俺の行動は正解だったようだ。

あつぶねえあぶねえ

「あつヒツキー。これも」

そう言つて置かれた桃缶。……どこから出した??

「ああ、入れるタイミングがあつたらな。開けずにそこ置いといてくれ」

「はい」

そう言つて野菜の隣に桃缶を鎮座させておいた。

我ながら今回の由比ヶ浜襲来に対する華麗なハンドリングはファインプレイだと思う。

誰も傷つけず、誰も困らない。

幸せな世界の誕生だ。おめでとう。

それから作業は順調で、肉を投入し、焼き色がつく程度炒めたら雪ノ下先輩達が用意した野菜共を投入。

あとは水を浸るくらい入れて待つくらいだ。

灰汁くらいは取らないといけないので鍋の前から離れられない。飯ごうもまあ見える位置にあるからここでしばしだらつと休憩タイムとしゃれこもうか。

しゃれこもうかって今日日聞かねえな。

\*\*\*

「作業は終わった？」

「うす」

どうやら洗いや生ゴミの処理をしていた雪ノ下先輩と由比ヶ浜が戻ってきたようだ。

「お疲れさま。なら少し向こうで休んできたら？」

んん？ 雪ノ下先輩が俺を労うなんて珍しい。今日は槍でもふるか？

と思つた所、彼女との視線が合わない。彼女の目線の先を追うと遠くだが歩いてくる一色の姿があつた。

多分俺と鉢合わせさせないようにという気遣いだろう。

正直にそれに従った方がいいと判断し俺は「うつつ」と言い、足早にその場を去る。

・  
・  
・

どこか適当な場所がないか探していたところ声をかけられる。

「なあなあ、ヒキタニ君だっぺ？ ヒキタニ君ちのカレーにちくわって普通？」

えっ？ 何その距離の詰め方、斬新過ぎて言葉につまる。

「ま、まあカレーの具材って家庭によって違うじゃないっすか、ジャガイモ入れるところもあれば入れない所もあるし、タマネギの切り方もみじん切りからくし切りまで千差万別じゃないですかね？」

とりあえず模範回答を答えておこう。まじビビっし。

「ああそれねっ！ 分かるわ俺んち白滝とかピーマン入ってっし！ っていうかヒキタニ君超良い言葉知ってんじやん！ センサー判別ってカツコ良くね？」

タマネギのみじん切りもくし切りも何のセンサーに判別させんだよ。

……って言うかキョロ充パイセンこれが初会話なんだが……いい加減名前知りたい。

タイミング逃して聞きづらいのだから？

「ピーマンはなんとなくわかるんすけれど。白滝？ そんなん入れるんすか？」

「は？ 入れない？」

「いやだっっておでんじやあるまいし」



「はあく人生の8割損してつわく、ありえねー」

いや嘘だろ？ 白滝入れるか？ なに？ カレーうどんの亜種？

最近の糖質ダイエツトブームに乗って出てきたやがったのか？

いやいやいや……花のDKが糖質ダイエツトするこたあねえだろ。

もつとカロリーあるもん食えよ。焼肉とかラーメンとか寿司とかあるだろ。

「いや、かなり可能性を探ってみたんですが……ないっすね」

「まじっ？」

っつかあんたそろそろ名前なに？

そんなこんな話に付き合っていると

すこし距離があるが一色含む女子達の声が耳に入ってきた。

「あー！ 一色さんおかえりー大丈夫だった？」

「はい、ご迷惑をお掛けして申し訳ないです……」

「次からすぐに言うこと、わかった？」

「はい……三浦先輩にもご迷惑お掛けしました」

「いいんだよ皆ある事だから。ほら、今日は休んどいて」

「いえ、そういう訳には……」

「こう言う時は先輩に花持たせるんだよ」

「……はい、わかりました。すいません何から何まで」

「いーんだよ。ってか小学生の子達を見張つといてもらえる？あいつら目離すとすぐになんかしでかすからね」

「あつ、はい。わかりました」

一色？　なんかあつたのか……遠くだから状況がよく分からん。

「んあ？　女子なんかあつたべ？」

「どうなんすかね？」

「おつ？　いろはす帰ってきてんじゃんおせえつて。もう全部おわっちゃったぞー」

おいおいおい、せつかく離れたのに呼んでんじゃねえよ。気まずいだろうが。

多分声が聞こえてなかったのだろう。由比ヶ浜と雪ノ下先輩とそのまま話している。

「ってかちくわってシーフードに入るんか？」

シカトされても気にしないその精神すごいっすね。これがキョ口充。SUGOKU

TSUYOI

「……永遠のテーマっすね。なぜかエビやら貝が入ってたらしーフードって言われて魚肉ソーセージやらちくわ入ってたらしーただのカレーって言われる矛盾」

「だべ。意味わからんよな」

まあ正直どうでもいいんだがな。

「そっそっそー、ってか俺カレーにデスソース入れて食ってみただけどさー」

えっ？ まだ会話続くの？ どんだけ引き出し持ってんだよ。ってかデスソースっ

て……死ぬぞ？

#29-2 よって一色いろはは彼女に希望を与えることにした。

野外調理場に戻ってきた途端に二年生の先輩方々に心配され、そう言えば先ほど思いつき恥を晒したことを思いだし死にたくなつた。

一色いろは、恥の多い生涯を送っています。なんでしたつけこれ?? なんちゃら賢治だったつけ?? お笑い芸人みたい。

それはそうと小学生も二年生の先輩達も既にカレー作りに取りかかっている。

何もしていないのも悪いのですぐにでも調理過程に加勢したかったのだが……三浦先輩や海老名先輩から休んでいてと言われ調理場から追い出され、そして向かった結衣先輩や雪ノ下先輩の調理場でも……

「いいよ、いろはちゃん。今日は休んでて」

やはり心配して優しい言葉をかけてくれる。

優しく迎え入れてきてくれた結衣先輩。

先ほどの自身の愚行が尾を引いてその優しい対応がすぐ心に刺さる。

とにかくなんて返したら良いのか分からず笑ってごまかす。

「二色さん、調理は順調だからあなたはあちらで休んで。ちなみに由比ヶ浜さんは鍋をみる係だから、安心して頂戴」

なるほど、それは安心ですね。

そう言つて雪ノ下先輩が指した場所は調理場からはちよつとだけ離れた所にある芝生に幾つか椅子が置かれていた。

野外調理場は大体立ち仕事だからあそこで座つて休憩できると言うことだろう。

「いいんですか?」

「ええ、だってあなたもそんな腫れた目……他に見せたくないでしょ。小学生つて踏み込んで欲しくないところに揚々と踏み込んでくるし……」

あつ……。そうですね。目が腫れている理由なんて問われたら確かに困りますし、お言葉に甘えることにします。

「ではお言葉に甘えて……」

すぐく気使われてる……実はなんともなく健康そのものの身。しかしそんな事言いつつ下手に動こうならバレてしまう。

一色いろはは皆さんがカレーを作るのをみて食べるのを待つだけの小学生以下二トオブニートと成り下がってしまった。

せめて私にできる事はあの隅っこで皆さんに気づかれないようにひっそりと待つこ

とだけ。

これがボツチと言う奴ですか。……いや正直なかなか悪くない。口では絶対言えませんが。

そう思い椅子が置いてある場所に向かう。

その途中でせんぱいと戸部先輩がカレーの具材について話をしているのが聞こえた。

ぼっちぼっち言っているけれど先輩方々とちゃんと人間関係を築けていることに気づいて欲しいかな。

そんなことを考えるとまた負の思考の連鎖が始まる。

だから今は視野に入れることを避け、考えること自体を打ち切った。

椅子に腰掛け、料理を作っている二年生の皆さんや小学生達を一望できた。

なんか現場監督になったような気持ちだ。イメージだけでそう決めた。

ちようど手の届く所にウォータージャグが置いてあり、隣に重ねられていた紙コップを一つ手にして麦茶を入れる。

程よく冷えた麦茶が染み渡る。

……

日陰でそこそこ涼しい風が吹いて暑さを感じることは無かった。

そこに蝉の鳴き声やウグイスの声がとめどなく聞こえ普段は聞き逃していた自然の

環境音にしばらく身を委ねる。

……

「デュシ、デュシ」

……

なにやら自然界の環境音に似合わない効果音も混じってきた。

「ちよっ!? しげちーまってまだにんじんの皮むいてないから切るなって!」

「は? 皮普通に入れるんじゃないの?」

「入れるのはしげちーんちだけだって!」

「きばみーまじ!? 大丈夫! ジャガイモは皮むくから」

「いやにんじんの皮もむくだろ!!」

「男子うっさい!!」

「あーまたビー子でたー、別にいいだろー! 迷惑かけてねえし!」

「かけるし! となりがうっさくてこっちの声聞こえないから!」

「しらねえよ! お前らの声が小さいんだろ?」

「は? マジムカつくんだけど……」

「まーた始まった……」

……

あー、なんか小学生達の色々ともめている声が聞こえる。

三浦先輩との約束を思い出し仲裁に入ろうとしたら

どうやら近くにいた二年生の先輩方が混ざって万事解決したらしい。

楽しそうにカレー作りに戻った。

折角の出番が無くなってしまった。

残念に思いながらまた自然の環境音に身を委ねる。

……

やばい、飽きた。既に蝉の鳴き声が煩わしく感じてしまう。

圧倒的暇。スマホいじりたい。だけどスマホ鞆の中だし……いじってる場面を先輩方にみられて堂々とサボってるアピールはしたくないし。

折角空いた時間だし色々と考えたいことは考えたいが

多分今の心境のまま考えても良い考えは思いつかないと思う。

頭を1度リフレッシュさせてから考える事にしよう。

はっ!? そうだ! リフレッシュするには寝るのがいちばん! どうせ暇なのだ寝

てしまおう。



泣き疲れて眠ってしまったって理由があれば許してくれると思う！　あとは誰かが起こしてくれることを願おう。

そう考え瞳を閉じて背もたれに寄りかかった。

……

……

……

……だめっ蝉とホトトギスがうるさすぎて眠れない。

なんだここ。蝉とホトトギスがめっちゃ沢山いる。うるさ過ぎで眠れる気がしない。

「ホントばっかみたいね……」

ミンミンと泣く蝉の数も馬鹿みたいに多いという意味で溢れた言葉に、続けてささや

くような言葉が続く

「ホント馬鹿ばっか……」

……

私は発言したのは蝉に対してなんです、あなたは誰に対して？

というか何この子？　いつの間に居たの？

目の前に居るのは小学生にしては垢抜けた外見ちよつと雪ノ下先輩に似ている感じの可愛らしい女の子が少し私と距離を取った位置に座っていた。

って言うかあんたカレー作りは？ 参加しなくて良いの？

「カレー作りしなくて良いの？」

折角の出番だ。少しは小学生の子達に大人に見られるように声をかけておこうかな。

「……」

まさかの無反応。会話が終わったんだけど。

「……私にはさせてくれないから」

そう言っ指を指す。その先は小学生達がカレーを作っているが正直指している場所がどこなのか分からない。

大体の所は人数は5人1班としてやっているがそのうち1つの班が4人でカレーを作っている。多分そこなんだろう。

ただ誰ひとりとして彼女が抜けたことを心配している様子がない。……と言う事はつまりそう言うことだろう。

はあ……ひとりじゃ何も出来ない癖に群れてひとりを攻撃することで自分の優位性と権威を示す面倒くさい人たち。いまや小学生でもそんなのがいるなんて生きづらい世の中ね。

「大変ね」

「大したことない。名前……なに？」

まさかのタメ口。こっちもこっちで性格が歪んできてるのね。

「二色いろはよ、次から名前聞く前に自分から名前言おうね、それが礼儀だから」

「鶴見留美。うん……」

あら素直でよろしい。こう言うことがあつてから性格がだんだんと歪んで来たのかなあ。

「留美ちゃんだっけ？ あんたなんかしたの？」

「ううん、なにもやってない。たださ……なんか面白くないし……前までうまく立ち回ってたけれど、もう面倒くさいから……一人でいっかなって」

私の面倒くさいセンサーがピンピンに反応している。これ以上踏み込んだら多分後戻りできないし……とりあえず突き放そう。

「そ、ならいいんじゃない今が良ければ」

抗う気がない子に何をいっても意味が無いしね。

どうやら突き放したら突き放したでちよつとは構って欲しかったらしく留美ちゃんは話を続ける。

「今が良いって言われたらそうじゃないけど……でも我慢できるし……中学に入れば余所から来た子と仲良くすればいいし」

あ、いい感じにやさぐれてるわ。せんばい思い出しちゃうじゃない。お礼に少しだ

け世の中の厳しさを教えてあげるね。

「ふうん……あのさ、そんな希望とか見いださない方がいいんじゃないかな？」

「……え」

「ああいう子達はいつくだけでも増えるよ。人を見下して自分を大きく見せたい子達って多いから。だから中学できた余所の子もそれに染められて一緒にあんた攻撃する。私にはそんな未来が見えるけどね」

第一印象って本当に大切。声がデカいとその第一印象を勝手に拡散されるわけ。あの子と余り関わらない方がいいよってね。

そうやって唾つけた相手にあることないこと吹き込んで勝手に妄想して作りあげた理想の悪役像を相手に刷り込んで対象を孤立させる訳。

そして悪役が仕上がったらあとは群れてこいつに何してもいいっていう前提の元、攻撃を始める。

とくに最近はスマホでやり取りが見えづらくなつたから余計気づきにくくなつた。中学1年生入学当初から既に遅れているとか良くあること。

ホント群がって人を囲っては自分に都合の良い言葉だけを並べては攻撃してくる。私が何をしたというのか何かとこじつけて文句をつけてくる。男子に少し荷物持ちをお願いただけでそれだったからなあ。

「やっぱり……そうなんだ……」

何かに堪えるように口元を固く閉じる。

そして身体も少し震えているように見える。今はまだ耐えられているけれどさらに人が増えるつてなるとそりや怖いか。

「まっ、私が知ってる限りじゃそうなるわね。で？ 何されてんの？」

しばらくの間があり、その固く閉じた口を緩め、留美ちゃんは呟いた  
「クラスの皆にハブられてる……」

なんとなく想像はしてたから驚きはしない。

「誰かがハブられる事っていうのは何回かあるんだ……そのうち終わるしマイブームみたいなものだったの。誰かが今度はあの子、今度あの子って言いだしてそんな感じでもないなそういう雰囲気になるの」

軽い気持ちで聞いていた話の内容が随分エグかったけどね。

まあ先生に言えばこんなタチの悪い遊びは終わると思うけど？ 主犯は帰りの会とかでつるし上げられてごめんさいして終わりみたいな。

「それで、結構仲いい子がハブにされて……私も距離置いたんだけどいつの間にか今度は私がそうなった」

なんかやってんじゃん。それだよそれ。だから言い出せない訳か。

そこからいくつか質問を重ね、なんとなくその……ハブリゲームの内容が分かった。皆がハブってる環境でも関係なく話しかけてくる奴は皆でハブる！

そして一定期間経つと話しかけるようになる、その際に話しかけなかった裏切り者、私はお前を絶対に許さない今度はお前がハブられる番だ！ ギルティ！

どっちを選んでもハブられるし……地獄かよ。

対象者に何らかの干渉をしようものなら今度の対象は自分だと雰囲気でおわせ、ハブる対象が今まで信じていた友達を憎み、指名して同じ事を繰り返す。

っていうか、それだけだと何が楽しいのかよく分からない感じだなく……もつと何か女どもが楽しめるなにか……

「私その子にいろんなこと喋っちゃったからさ」

その話を聞いた時に私は自分事でも無い筈なのに怒りに似たなにか沸々とした感覚をおぼえた。

……なるほど理解した。ある程度経った後、恨み辛みを持った元ハブられ者に裏切った友達の秘密を暴露させて今度はそいつをハブってその裏で笑いものにするって言う遊びね。

誰々が好きだとか、気持ち悪い趣味持ってるとか、家族関係がうまくいってないとか、片親だとか皆と違うを晒して笑い者にするタチの悪いやつ。

よくこんな思いついたわね。そいつ絶対性格悪いよ。

たしか中学の頃それと似たような事があったかな。

信用してた友人にだけ話をした好きな人が次の日にはクラス中に知れ渡っていて、あれだけ仲良く喋っていたのに気まづくなってその子とその後全然喋らなくなった男子がいた。

そして人の人間関係破壊しておいて皆は悪気がなくなつて時間が経つたらそんな事があつたことすら忘れる。

あの人達も時間をかけて関係を深めていけば付き合えたかも知れない……そんな可能性すら摘み取つたあの群衆の無責任さに吐き気すら覚えた。

「中学校でもさ……こういうふうになつちやうのかなア……」

嗚咽混じりの震えた声音。

これからも絶望が続くことに絶望したのか潤む目。

正直今私もそんなに情緒安定してないからそんな声されるともらい泣きしちゃうのよ。

……

はあ……まさかこんなに早く請求がくるなんて……まったく……約束はしっかり守りますよ。平塚先生。

「そのままだったらそうなるよね」

「……」

「留美ちゃん、あなたはどうしたい？ この状況は嫌よね」

「うん……嫌……だけど、もうどうにもできないし……友達、見捨てちゃったし、見捨てられたし、もう仲良くできないし……また友達つくってもまた同じ事いつされるか分か



らないし……それだったらもう……ひとりでいつかなくて……」

そっか……

「ひとりは慣れた？」

「慣れた……って言うか惨めっていうか、クラスで一番下なんだなって感じがして皆から見下されてる感じで……学校も楽しくないし、なにも面白くない」

「まっ、それも経験の1つじゃない。ハブられてる子の気持ちも知ることができたでしょ」

「えっ……うん……そうだね。こんな気持ちになってるなんてしらなかった……」

「じゃ、今度自分みたいな子を見つけたら、仲間に入れてあげる事。できる？」

「……どうだろう、仲間に入れてもどうせまたいつか私がシカトされるし……」

「ああ、それ。大丈夫」

「……え」

ちようど考えたくないことを考えずに済むし私も暇を持て余していた所よ。

いいよ、手伝ってあげる。

「大丈夫だよ留美ちゃん。あなたが次学校に登校するときその遊びは無くなってるから」

ようやく彼女は私の方にゆっくり顔を向ける。

キョトンと呆けた表情をしている様子だが、……あら、可愛い顔してるじゃない。

「あとはあんたのちよつとした勇氣よ。どうなの?」

私はこういうやつ終わらした方を知っている。

「できるの? ……ほんと?」

中学校に入ったら全て救われるっていう淡い幻想にしがみつくぐらい疲弊して。

現状絶望しがなく心を殺すことでそれに耐える事を余儀なくされたんですよ。

「ほんと」

「ほんとに……ほんと?」

次第に嗚咽が混じり声も震え……でもう一度聞いてくる。

もう希望をみつけて手が届かなくて絶望するのは嫌なんでしょう。

そのぎゅつと噛みしめる唇がそれを表してる。

それじゃ、伸ばした手をちゃんと取ってあげよう。

「だから、ほんとつてば。それに泣くのは後で」

「……う、うん。できる」

今にも溢れそうな潤む目を必死に堪えそう答えた。

数多くの嫌がらせや陰口をささやかれ。親しいと思った人にすら裏切られたこともあった。

ただ私はそれらを退けてきた知恵と経験はここにある。そして意志も揃った。あとは考え組み立てるだけ。

「それじゃ、ちよつと特別授業しよつか」

私は初めて、他人の為にこれを使おうと思った。

## #30—1

それからしばらくキョロ充先輩との会話を続けた後、小学生たちと仲良くしていた葉山先輩からの呼び出しがあった。

「戸部えー！、ちよつとこつち来てくれないかー！」

「ウイー、はやとくんから直々にお呼び出しきたー。そんじやねヒキタニくんー！」

そういうと颯爽と葉山先輩の元に行ってしまった。なんだったんだあの人は……とりあえず名前が戸部であることがわかった。

多分2度と関わらないだろう。

ようやく1人になり辺りを見回すと……休憩できるスペースに一色ともうひとり誰だ？ ……ああ、あの時の女の子か。

珍しいな、ボッチはそもそもパーソナルスペースが広くて一色みたいなエンジョイ勢には近づかないはずなのだが？

なんであんな距離近いの？ 女の子同士だからか？ 俺の読み間違えか？ やつぱりア充すげえわ。

……それにしても思いっきりカレー作りサボってるんだがいいのかそれ？ ズルい。

\*\*\*

目の前に広がるテーブルをみて俺はリア充による席取り合戦の始まりを予見した。

勝つて嬉しいはないちもんめ 負けて悔しいはないちもんめ……ふん！ あの子の隣が欲しいか？ 欲しいならくれてやる！ この世の全てをそこに置いてきた！

世は戦国時代、男と女によるいい人と仲よくなりたいたい勢のための席取り合戦の開幕。そんなフレコミで持ち込みしたら怒られるかな？

滅茶苦茶批評されて泣かされて帰されそう。

まあ流石に高校生、席順なんて仲良しグループが先着順で塊で入っていけばいいだろう。

そんなことを考えていたらサクッと一色が一番端の席を取った。

おいおいおい……いいのかよ、カレー作りサボつちやつてたあげく先に席取つちやつて……先輩黙つちやいねえぞ。

そんな俺の話とはうってかわってそこからさらに女子が両サイド詰めて座った。

これは意外だ。ここは男女分かれる方式になったのね。

まあそんなこんなで残る男性陣で適当に座ったのを見計らい、俺は無事彩加の隣を

ゲツトする。

なぜか目の前に平塚先生が座った。

「カレー美味しそうだね！ 八幡」

なんかあれだ、ちよつとだけテンションがハイなのはきつとカレーだから何だろうな。

分かる。カレーってなんかテンション上がるわ。ただし、カレーの中にグリーンピースが入っていたらうれしさが半減するがな。奴は敵だ。

「そ、そうだな！」

俺も負けじと彩加のテンションに合わせる。一緒ならさらに美味しくなると思うんだ。

食事の最高の調味料はその心だ。どの環境下で誰と食べるかで味なんざ変わる。

そ、今みたく自然豊かで澄んだ空気の下彩加と一緒にとか、ベストプレイスのから揚げとかな。

……まあ、そんなもんだ。

「どうしたの八幡？ 急に元気になったりしょんぼりしたり？」

「ははあん、さてはその場のノリで無理矢理テンション上げてなんか空回りしてると思つて急に我に返つて恥ずかしくなつたんだな」

「真つ正面の平塚先生が急に割り込んだ割にやけにディテールが整った事を言い始めた。多分この人の実体験を元に行っているのだろう。……つう、涙があふれちゃう。」

「いやあ、まあ……そんな感じですよ」

でもちようど良い。ここは乗っかっておこう。

「まあそうですね。カレーをみて昔給食で出たカレーの入った食管を倒してしまつてそれから各クラスに頼みながらカレーを分けてもらいに行つた記憶が……」

「よし、もう話さなくて良いぞ。冷めないうちに食べるカレーはうまいぞ！ おかわりもあるぞ！」

それを言われるとなんか不審に思つてしまうのは俺が漫画を読みすぎただけなのだろうか？

「つでさー、一昨日くらいにマクバ行ってさー」

???

ふと聞こえた二年生先輩方々の会話。マクバってなに？ マツクの新しい呼び名？

スタバの親戚？ どつかのIT企業の社長の名前か？ もしや……ゲーセンでやけに殺気立っている区域にあるあのゲームの新作か!? 選択肢ありすぎだろ……

「戸部え、まずマクバってなに？」

三浦先輩の鋭いツツコミ。俺も思ったし。

「マクバってあんじゃん、ジャスコのちっこい版みたいなスーパー」

なんとなく皆あーって察しているが彼ら彼女らが今後マクバって言う言葉を耳にすることも使う事も無いだろう。

俺もそうだ。ただやけに汎用性がありそうだから今のうち商標登録しといた方がいいぞ。

「とべつちまだジャスコって言ってるんだ」

「結衣、お前今俺を馬鹿にしただろ？ 一応いっとつけど俺お前よりテストの点数上だかな？」

「あー！ それ今言う!! サイテー!」

「いや、あんたら2人点数的に変わらないでしょどっちも赤点だったし」

「戸部、一応中間明けにサッカー部の試合控えてるからな。中間で赤点取ったら試合に差し障るから真面目に勉強しろよ」

「ういゝ……つてかなんで俺だけ？」

「そうそう、そうやって隼人君が戸部君に勉強を教える流れになつてさ！ 放課後に次第に愛が芽生えて行くんだよ！ はやとべうっひゃー!」

「海老名、擬態しろしつ!」



すげえな、マクバの話からコロコロ話題変わんぞ。

これが陽の者の力なのか……

「つてかさーヒキオー？」

……さて俺も適当に彩加と話をするかー、どんな愛を語り合おう……いや待て愛を語り合うとかオタクじゃねえんだし馬鹿なんじゃねえの。

「あ、あ？ ヒキオ!!!」

その怒声に俺の頭の中が真つ白になった。

「……え？」

真つ白になった頭からなんとか絞り出せた声でああ……俺の安らかな日常は終わりを告げたと思つた。

「呼んでんの、ちよつと来な」

えつマジでえ!!!? 酒の悪がらみかよ……めっちゃ怖いんだけど。

まあ流石に先生居るしな、大丈夫だよな俺。

「んで。なんか用ですかね？」

「あーそうそう。ヒキオ、あんた1年つしよ？ あーし、三浦ね。んであいつが戸部、向かいにいるのが海老名。隼人と結衣はしつてるつしよ。わーた？」

……ははあん、この人ギャルルンギャルルンしてるが実はいい人だなあ？

どんな無理難題を突きつけられるか覚悟していたが箱を開いてみるとたいした事は無い。自己紹介だ。

そういや俺が一方的に名前知ってるだけでやってなかったな。

「1年の比企谷です」

そう言いつつ軽く会釈すると二年生方々から「よろしくー」やら「うつすー」やら「比企谷君は攻めかな？ 受けかな？」という返答が……最後のおかしくない？

うお……こう改めて自己紹介つてするところっ恥ずかしいのな。

「ヒツキー、すごい棒読みー」

あははくと笑い声をかけてくる由比ヶ浜。

「うつせえ。こちとらそんな頻繁に人前で自己紹介した事ねえんだよ」

大体クラス替えをしたあとのオリエンテーションで自己紹介して、それ以降、雰囲気とタイミング見計らって名前覚えろよ的な感じだよな。

「つてか結衣と付き合ってるの？ よく一緒にいるし」

「へっ？ ……はわわ!! そ、そんなこと無いし！ ただ同じ部活だけだよ」

由比ヶ浜はいきなり話題を振られあわわあわわと両手を振って否定する。

「へえ、後輩にタメ口で呼ばせてる辺りそれなりに気がありそうな気がするんだけど  
〜?」

「そ……そんな事……ないよ?」

ちよつ……何でそんなちよつとは考えてるみたいな表情でこっちみるんですかね?

実は同い年って言う事隠そうとしてるんだと思うが。

その助けを求める視線を外す。それにしても視界の端にいる一色は話に参加せず  
黙々とカレー食ってなにやら林間学校のしおりとにらめっこしていた。

君そんなに林間学校楽しみだったの?……ん?

「そうそう、多分これはブラフだよ」

なっ?!視線バレたかった

「結衣と見せかけつつ実は隼人君狙いだって私分かってる! ギャフー!」

……いや、腐ってたわ。

「海老名、擬態しろし」

スリッパで叩いたかのような爽快な音をだしながら三浦先輩は海老名先輩の頭を叩く。

それ痛くないの? めっちゃ笑ってる。狂気の沙汰だろ。

「それにしても……いろははどうかしたのか？」

葉山先輩が疑問を問いかける。

「まあ……ちよつと……ね……」

そう気まずそうに由比ヶ浜が表情を変えると葉山先輩は何か察したらしく

「ああ、すまん。……任せるよ」

とだけ言葉にし話題を切った。この事から察するにあれだろう。昨日からなにも食べてなかったんだろうな。食いしん坊め。

……わざと冗談で思考を覆い隠して逃げてても分かっちゃったら無意識的に思考は走るものだ。

一度思考が走りだしたら彼女へ向かう視線も頻度を増す。

いつもの彼女となにが違うのかすぐにわかる。

大分……傷つけてしまったようだ。

相変わらずカレーを食べながら……林間学校のしおりを読んでいる。

ただいつもとは違う。よく見ると目が腫れているのは分かった。

女性陣が一色を端に置いた理由がよく分かった。

それはあまりみられたくはないものだ。

……俺のしたことは間違っていたのか？

そんな疑問すら感じてしまう罪悪感がある。

一色いろには俺で心を消費し、傷つく位なら俺を切り捨てろと伝え、それでもなお傷ついてしまう。

これが一過性であるかは解らないがそうでなかった場合、俺は一色いろはとどう接すれば良いのだろうか？

そんな答えもでないまま俺が居なくなれば終わりだと決めつけてうまくやるといふ言葉の表面上を撫でるように作業的に事を進めた事を後悔した。

「どうした比企谷？ 全てが終わった顔をしてるぞ？」

平塚先生をみる。そういや2人だけ戻ってくるのがやけに遅かったな。

ふと平塚先生の着ているベストに汚れがついているのを見つける。泥とかでは無い

何か。

……なんとなく予想がついてしまう。

「いえ、自我崩壊に陥りそうになつてただけなんで……」

「副助詞の選択が間違つていないか？この短時間でどうやったらそこまで落ちるのだ。そんなに三浦が怖かつたのか？ほら、たらふく食つて忘れろ。おかわりもあるぞ！」

だからそれ死亡フラグ。

「八幡、大丈夫？」

そう言つて心配そうに俺を見つめる彩加。

「キャラが濃い先輩が勢揃いしてたからな。少し驚いただけだ」

「君も負けてはないと思うが？」

あなたには負けますよ？ 平塚先生。

「それは違います。キャラが濃い人間ほど周りに影響を与えますが、俺は居ても居なくても影響を与えない無害な人間です」

「何を言つてるんだ？ 十分影響を与えてるじゃないか？ 戸塚だつて君がいるから君の隣にいるのではないのか？」

「うん、八幡がどこ座るのかなつて……ちよつと待つてた」

何この超可愛い生物。キュン死するぞ。

「まあ、それは友達……ですからね」

「なら自分をあまり蔑むな。それをみた友人が傷つく事だつてあるんだ」

「いや、俺は俺が一番大事だと思つていますし」

「はたして本当にそうかな？」

平塚先生の視線は俺から外れ……ちくしよしいやらしい事しやがる。

「そう言えば八幡は何で最後まで席選ばなかつたの？」

まあ一色の動向を見たかつたというのはあつたが……

堂々と先に座つていったから少し拍子抜けだ。

「至極簡単で考えるのが面倒だったからな。余つた席ならどこでも良かつたりする」

「そつか……余り物に福があるつて言うしね！ いいと思うよ」

「!？」

なんかすごい勢いで目を見開き閃いた！ つて顔をした平塚先生を目の当たりにし

て涙ぐみそうになつたがこゝは現実を突き詰めてやらんとな

「実はな、余り物に値なしつて投資言葉があつてだな……相場の供給が過多の場合、価値

が下がるつて奴なんだが」

「へえ、そんな言葉よく知つてるね！ 八幡は物知りだね」

「ちよつと家の本読みあさつてたら覚えただけだ」

軽い悪戯心で彩加とそんな会話をしてチラツと平塚先生の様子を覗く。

まさか殺気を纏って睨まれるとは思わなかった。どんだけ必死なんだよ。誰かもらってやって！



## #30—2 こうして、一色いろはは策を講じる

ふうつと一息つき、林間学校のしおりを閉じ、背伸びをする。

時間割を頭にたたき込んでいくつかの策を思いつきそれを組み立てた。

あの遊びを無くすために必要な作戦はどうにかできた。あとはそれを実行するために必要な人員とそのタイミング。そして留美ちゃんのちよつとの勇氣。

とりあえず必要な事は今日できるだけ話を進めたいけど、これから後片付けもあるだろうし今は時間が足りないかも……となると夜に皆に作戦を伝えて明日の自由時間で動いてもらうしかない。

……それにしてもカレー美味しい。普通におかわりしちやつたし。全く働いて無かつたんですが、ほら食べないと……ね。

目の前の湯気がたったカレーにさじが動く。

とりあえずひと段落ついたところで辺りを見回すと私の周りに先輩方がかたまつて座っていて、気を使つてもらっていることがすぐに分かつた。考える事に集中しすぎて完全に周りが見えてなかつた。お礼の1つでも言つておかないと。

「三浦先輩、ありがとうございます。気を使つてもらつて」

「あ？ 言うの遅いつての。……まあ少しは落ち着いたんならよかった」

「ありがとうございます」

「気にしないでよー、これも協力だよー」

「そうそうーよかったよーいろはちゃん」

海老名先輩や結衣先輩もそう言って笑顔を返してくれた。ものすごく心が痛む。

「落ち着いたようね。……良かった」

「ほんとびつくりしたんだからね！ 今度からちゃんと言つてね！」

雪ノ下先輩、結衣先輩……まあ、何とか機転を利かせてくれてあれやこれや言われる事が無くすんだので助かったのですが……この言い訳二回目なんでちよつとせんばいにはバレないか心配なんですよね。

まあ、それよりも……

せんばいの事はいったん後回し。最優先は留美ちゃんの事だ。切り替えよう一色いろは。

とにかく先に終わらせないといけないものがあるから。まずはそれに集中しよう。そう思いまたスプーンでカレーをすくい口に含んだ。

\*\*\*

夜も深まり、夏ではあるけれど高原であるから肌寒さを覚え始めてきた。

鈴虫がリンリンと鳴き始め今日も1日が終わるって事を告げようとしている。

ちよūdトイレから戻る途中、窓越しに見た日の落ちた高原の景色は外灯が無かったら道すらも見えない。

窓越しでも聞こえる姿の見えない木々が風に揺れ擦れる音や虫の音、野鳥の声に自然だなあつて感傷に浸る。

この闇で色々雑に交わっている音はまるで私の心境を表しているかのようだ……  
背筋から鳥肌がブワツと一気に広がった。

何をポエミーになつてるのだろうか……口に出さなかつたから良かった。

戻つてきた私が目の当たりにしたのは留美ちゃんをどうやったら救えるかみたいな事を先輩方々と平塚先生で話合いをしていた。

私はいつこの事を切り出そうか考えていたけれどどうやら皆さん留美ちゃんのことを気にかけていたようだ。

ただその雰囲気はやけに重く途中途中で沈黙する頻度が多くなっていた。  
「どうかしました?」

「ああ、一色か。君も話合いに参加してみるか」

皆が座つて話合いをしている中、平塚先生だけが席から外れ自分は外野であると主張するかのよう静観していた。

「ええ、もしかして……留美ちゃんの事ですか？」

「ああ、どうやらそのようだな」

「先生は参加しないんですか？」

「言つただらう？ 生徒達自ら考えさせるのも教師の仕事だ。だから私はこのまま寝るとしよう」

そう言つて平塚先生は寢室に向かつてしまった。

……いやそれはただ眠いだけなのでは？

平塚先生が去つた後、観察しているに雪ノ下先輩と三浦先輩と葉山先輩の3人が話が雰囲気を悪くする要因でもあつたようだ。昔なにかあつたのかしら？

まあ詮索は色々と終わつてからしたいものですがね。

はあ……先にこの重つ苦しい雰囲気を壊すところからか……

「一色さん、そういえばあなた……あの子と話をしてなかつた？」

どうやら雪ノ下先輩が私の存在に気づいた様だ。

それに続けて話合いを続けていた先輩達がこちらへと顔を向ける。

せんぱいもなんかチラツとだけこちらを見てた。

「いろは、そうなのか？」

「そうですね。私も先輩方にちよつとご相談をしようとしていた所です。ですので

ちよつと痴話げんかはあとにしてもらつていいですか？」

「一色さん、誰と誰が痴話げんかですつて？」

「わーお、そう捉えちゃうかー」

「おつ？ はやとくーん。まじ？」

「はは、いろは、それは違うつて」

葉山先輩、目が笑つてませんよ。

えっ！ えっ!? つて葉山先輩と雪ノ下先輩を交互に困惑の表情で見ている三浦先輩が可愛らしい。

まあこれで大分雰囲気は和らげることができましたね。

では話をする事にしましょう。

「まずは、これは留美ちゃんからの依頼です。本人からの了解も取れています」

「なるほど……それでは私たちはあの子の悩みを解決すれば良いのね」

「ふーん、だったら普通に先生に言えば良いんじゃないの？ 助けてつて合図だしってだし」

三浦先輩の言うことは正論。教室という箱庭の絶対権力者は誰か、それは教師である。生徒が助けを求めているのだからそれを助けるとするのは教師の仕事ではありません。

でも……

「ええ、ですがここで先生を挟んで仲裁したとしたら……別の問題が出てくるんですよ」  
「別の問題？」

「たとえばですよ？ 今後入ってくる新しいコミュニケーション手段って何だと思えます？」

「うーん……スマホとか？」

「正解です。小学生で携帯を持つ子の割合って結構少ないんですよ。ただ……中学生になると入学祝いとかで買ってもらえる事が多いんですよ」

「最近って変な人も多くなって聞くよね。その意味で携帯って防犯の意味も含んでいるんだと思うんだ。なぜか僕もその頃持たされたんだけどね」

ほっぺをポリポリと掻きながら気まずそうに話す戸塚先輩をみて、携帯を渡す親の気持ちなんとなく分かる気がします。

女性陣は大体何か察してくれたようだ。戸塚先輩を除く男性陣はまだクエスチョンマークがついたままだった。

「つまり正攻法でやった後、表向きで解決していてもやった側には『あいつにチクられた』っていうやられた事が加害者側にわだかまりが残るわけです。よく聞きますよね、やった側は覚えて無くてもやられた側は覚えてるって。それにちよūdこの6年生

でこの時期っていうのはまた絶妙で……つまり中学まで引きずるんですよ。そーしてー……そんな記憶が新しい状態で携帯を買ってもらうと……まあお察しの通り、皆さんもよく使ってますよね、メッセアプリ。特定のグループを組んでそこでまた中学で新しく会った人たちにある事ない事を吹き込んで群れを作って周りから孤立させて行くんですよ、だつてバレないじゃないですか」

わざわざ言葉にしなくても相手に伝える手法が手元で手軽に、相手に悟られずいつでもある事ない事を共有できる物が善し悪しも何も知らない好奇心の塊に渡るんです。

何のルールもマナーもしらない。だからすぐ自分の都合が良いように使いたがる。その結果、メッセアプリでもすぐ既読返信しなきゃハブられることだつて珍しくない。

「なんとなく……言いたい事はわかる」

今の発言誰？ 海老名先輩？ うそ、いつも結構おちやらけた感じなのになんかすごいキリつてしている。やだギャップ。

「なので……あの子の今後を見据えて解決させないといけないです」

「なるほど……と言う事は皆が納得いく方法で解決しないといけないということか」

皆が……納得か……葉山先輩の考え方はすごく優しい。すぐにそんな考えが出てくるんだから。

……だけどそれは全世界の人が仲良しになりましたよと言うくらい無理な事なんで

す。

「葉山先輩。それが理想ではありませんけど、結局は理想です。納得いく方法を考えつく前に林間学校が終わっちゃいます」

「マツジ？ チョーこわっ！」

三浦先輩が怖がってるのは意外なんですけど……

「う〜ん……結構難題だね」

こめかみを押しながら悩んでいる戸塚先輩はなんでこんなに可愛いんですかね。

そんな中、せんぱいが手を挙げる。

「ちよつといいか」

「はい。なんででしょうか？ せんぱい」

極力せんぱいの顔を見ず感情を無にして答える。一部は私がせんぱいと呼んでいる事に少し首を傾げた。まあ気にせずに続けましょう。

「この状況の根本はその遊びを通じて関係性を維持するために生け贄を捧げているって事だよな」

「そうですね。ついでに維持し続けている見返りとして生け贄の秘密事をばら撒かれるっていうのもおまけ付きです」

「お、おう……マツジ？ ゴリヤバクね？」



誰でも秘密を暴露されるのはいやだろう。あのちゃらけた戸部先輩ですら流石に息をのんだみたいだ。

「そうか……それなら俺に考えがあるんだが」

私は正直それを待つていました。

私が考えているものは愚策でせんぱいが何か良い案を出してくれる。そんな事を期待していた。

前に問題が起こっていることすら気づかなかった私より先に問題に気づいて、知らぬ間に根回しをして問題を解決させたせんぱいがきつと解決に導いてくれる。

そんな押しつけがましい感情があったのは確かだ。

しかし、話を聞く度にその期待が打ち砕かれていくのを感じる。

勝手に期待しておいて勝手に失望するのは本当に自分勝手だと思っけれど、だけれど……この策はダメ。下策の下策。ふざけないで。

なにより年齢は同じでも学年上後輩のせんぱいが葉山先輩達を悪役として利用するって先輩達からしたら面白くない。何こいつってなる。

今までいい感じに築きあげた先輩達との関係を崩してしまふ。

虚無で接していた胸の内が燻り出す。だから私は少し勇気を出す。

「……もういいです。せんぱいはただ性格悪いんですか？ 馬鹿なんですか？ 冗

談は程々にして下さい」

「いや……そう言うわけでは無いんだが……」

「へえ、せんばい。2年生を顎で使おうって言うんですか？ 1年生の分際で自分は

高見の見物なんて良いご身分ですね」

「ちよつおまつ！ もう少し言い方考えろ」

「だつて話を聞くとそのまんまじゃないですか！」

「俺が考える最善の案だ。間違つていようとも外れていようとも問題は解消されるだろ。そもそも皆関係性を維持したいからそういう遊びが横行したんだろうが。それなら皆がポッチになれば幸せじゃねえか」

「ポッチになつて幸せに感じるのにはせんばいだけですよ！ そもそもせんばいも小町ちゃんいなければ生きる意味すらみいだせないじゃないですか！ 本当のポッチは一人っこなんですよ！」

「ぐつ……よくわかつてるじゃねえか……」

「なんでそこで認めちゃうんですかねえ……」

「つて言うかお前悪口の反応速度早すぎだろ……」

「なんですか人が折角フオローしているつてのにその不名誉な称号は。」

「あなたたち、痴話げんかなのかイチャついているのかは知らないけど……後でやって

もらつて良いかしら？」

「い、いえそんな！ 痴話げんかじゃないです……よう？」

次第に声小さくなつていく。仕方ない、これは買つて出た恥です。……これは買つて出た恥です。

異性と仲良く喋つているといきなりしやしやり出てきた人が『お前もしかしてこいつのこと好きなの？』とか言つてくる奴に似ている。

女子と話慣れている人は『んな訳あるか、ガハハ』つて言うけれど女子と話慣れてない人ほどここでしどろもどろになるか、最悪テンパつて言葉選ばず『そ、そんなんじやねーし。誰がこんなの』つて強がりを吐いたものの実はそこら辺少し期待していた節もあつて、自分から折角徐々に距離を近づけた女子を傷つけてしまつて気まづくなつていつも通り話せなくなつて疎遠になるパターンのいずれかに分類される。そんなた……た……だめだ、思い出せない。何君は今元氣だろうか。全く興味は無かつたので名前すら忘れてしまいました。

せんぱいは、はにかむように黙つてしまった。まあそうでしょうね。

そして雪ノ下先輩はやりきつたつて顔をしていた。たぶん先ほどの事を根に持つていたに違いない。

「比企谷君の案は……意見の1つとして受け取っておきましょう。一色さん、あなたが

その意見を否定すると言う事は何か別に案があるとと言う認識で良いかしら？」

「ええ、そうです。ちよつと皆さんの協力も必要になってくると思つてます」

そう難しい話ではないんです。

「まず、この遊び？ みたいなのが横行しているのが留美ちゃんのクラスのみなんですよね。まあ少しは他のクラスにも漏れているかも知れませんが、たいした問題ではないです。それではなぜここまでこの遊びが大きくなってしまったか、それはクラス全体がそれを容認してしまつたからなんです。だから潰す為にはそれより多くの人がその遊びを否定する立場に回ればいい訳なので……つまり、学年全クラスを巻き込んでしまえば良いんです。どうやって巻き込むかというところは葉山先輩や三浦先輩みたいな小学生在が憧れる高校生が噂を流せばそれに便乗すると思います。理由はオリエンテーリングのときもカレー作りの時も大人気だつたじゃ無いですか。憧れの人がそう言ってるんですよ。従いますよ普通」

「火の無い所に煙は立たぬって事か……」

「それって、普通じゃないの？」

不思議そうに結衣先輩が首を傾げる。

それを見た私も葉山先輩も苦笑しか出てこなかった。

「えーつと……名前を出す必要は無いんですよ。ただ『どこかのクラスでこんな事して

るって噂聞いたんだけどホント？　ちよつとヤバくない？』って感じで話せば大丈夫です。ようは真実だろうか？　だろぅがそういうことあるんだーって他クラスの子達の頭に入れておいて欲しいんですよね」

「各クラスの班に吹聴すれば良いって事？」

雪ノ下先輩は理解が早くて助かります。

「そうです。できれば留美ちゃんクラス以外のクラスで。自分達にとつて都合の悪い噂がジワリジワリと忍び寄る恐怖って下手な怪談より怖いですから」

「まじ？　いろはすこっわ……」

戸部先輩ほんと失礼ですね。私よりもこんな事考える小学生の方が怖いですよ。

「ただ、せんぱいと雪ノ下先輩は別でやる事がありまして……。雪ノ下先輩は明日の夜にやる肝試しの構成を私と一緒に考えてもらいたいです。せんぱいは……。ちよつと別で協力してもらいたいことがあります」

いやまあ……。何とかせんぱいはともかく雪ノ下先輩までなんというか小学生の子達に避けられているんですよねえ。この案を行う場合、ある程度の信用があつてから成り立つものなので別の所で役に立つてもらいたい所だったり……

「それは大丈夫だけれど」

「なんで俺もなんかやんだよ……」

せんぱいは頬杖をつきながらため息を吐く。

やりますよ？ 何言ってるんですか？ あなたがサボるとかあり得ないです。

「せんぱいがベストマッチする適所があるのでお願いしますねー」

「……マジかよ……」

「まあ安心して下さい、そんな大層な仕事じゃ無いですよ」

せんぱいははあ……とため息を吐く。

「わーたよ……協力すりやいいんだな」

「よろしくお願いしますね。せんぱい」

「……まで話が進んでてあれなんだけど、いろはちゃんの案にみんな賛成って事でいいんだよね？」

なあなあで決まりそうな案を結衣先輩が確認のために採決を取ってくれた。すごく助かります。

「他の案がアレだし、それ以外に案はないからいいんじゃない？」

そう言いながらジロつとせんぱいをみる三浦先輩。まあ流石に悪役に抜擢されるとちよつとうーんってなつちやいますよね……。

せんぱいは恐縮している。言わなきゃ良かったのに……

「ういー噂流しまくればいいっしょー？ 余裕じゃん？」

「うん。なんかそれならできそうな気がする」

「私は皆がそれでいいならそれで良いと思うよー」

よかった。どうやらこの案でいけそうだ。

「概ね賛成よ。ただ……いえ、一色さんこれは明日話しましょう」

どうやら雪ノ下先輩は気づいてしまった様だ。

## #30—3 密かに一色いろはは夜風にあたる

……ああ、すごいハイテンションで色々物事を進めていったが、こう寝る前のリラクスタイム、ふと今日一日の出来事が脳裏に蘇り、赤面必至の事ばかりですごくムズかゆくて先輩方々の前で悶えるわけにも行かず、外に出ることにした。

そよ風程度の風が度々吹いてお風呂上がりからの私にとつては心地よい。薄雲に隠れぼかされ柔らかく照らす月の輪郭を眺めながら深呼吸をする。

少しだけ身震いし、カーデイガンくらいは羽織って凝れば良かったかなと少し後悔した。

梢がさわさわと揺れるのを聞き我が身振り返る。

絶望したり、号泣したり、相談したり、照れたり、励ましたり、考えたり、伝えたり

……とんでもない1日だった。

いや本当に……大変だった。

ふっ……



もくやだく!!! 明日誰とも顔合わせたくない!!! なーにが『私はこういうやつ  
の終わらし方を知っている』だ! なーにが『それじゃ、ちよつと特別授業しよつか』だ!  
その場のテンションで何言ってるんですか私は!! ばつかじやないの!!! バーカ!  
バーカ!!

うずくまり頭を抱え過去の自分がしでかした事を誰かタイムスリップでもして止めて  
てくれないかと切に願った。

留美ちゃん聞き流してくれてたりしないかなあ……。

これはー……そうだ! せんばいから借りた本の影響が少なからず出ているから  
あつて……あくもうっ!!

それを言い訳にして自分を納得させようとしたら今度は平塚先生からの『ん? 君は  
あれか? 恋人の趣味に染められるタイプなのか?』という言葉を出し、また頭を  
抱えた。

さらに芋づる式で友達の話の前提を思いつきり自分から崩しているのとか、泣きはら  
した後になんかこう……甘えちゃったなあ……とかそんな新鮮な思い出達がフラッ  
シユバツクしさらに羞恥心を煽る。

自らの品性も欠片も無い真新しい記憶に全身に鳥肌が走り身震いすら現れた。

まっつて……ホント待つて……恥しかな。羞恥心に殺される。

あの時からもう本性も感情もなにも全然隠しきれてない……ここが学校じゃ無くて良かったと心から思う。なぜこんな事になったんだろう。中学でもいいなあ……つて人は度々いたしそれでも好きな人に対してここまで感情が前に出た事なんて無かった。こんなにガチ恋決めている自分自身に戸惑いを隠しきれない。

よし、明日からはいつも通りの私に戻る。私が決めた今決めた。

そう、千葉村から帰ったらいったん考えをまとめて身の振り方の作戦を練りましよう。

そんな決意をした矢先、後ろから砂を踏む足音が聞こえた。

誰か来たんでしょうか。

「あれ？ 一色さん」

その声に振り返る。

「戸塚先輩？」

これは意外な人物と遭遇してしまった。

戸塚先輩とはあまり関わりが無かったので何か話した方がいいのかな？

というか、今は男子の入浴時間のはず……戸塚先輩つて早風呂なのかな？

「一色さんも風に当たりに来たの？」

「そうですね。ちよつとお風呂に浸かりすぎたので……それよりも戸塚先輩、お風呂は？」

頬をポリポリと掻きながらちよつと困ったかのように呟いた。

「じつは他の人とお風呂に入るつて実はまだ慣れて無くて……こう、僕が服を脱ごうとするとなんか視線を感じちゃうんだよね」

「つあゝ……なるほど。わかります」

すつごい分かる。戸塚先輩なら女でもマジマジ見ちゃう。

「八幡や戸部くんにはちよつと悪い事した……かな？」

「いえ、男子つてそんな細かいことを気にしないと 생각합니다よ」

なんとというか……戸塚先輩の身の安全の為にそういうことにおきましよう。

「そう……だよね！」

どうやら納得してもらえたようで。よかった。

「それより一色さん。さつきはすごかったね」

「えっ？　なんでですか？」

「なんか鶴見ちゃんを助けるつて色々と考えててさ、だからご飯の時も端っこで一生懸命考えてたんだなあゝつて」

まああれはちよつと事情と言う物があつてですね……さすがに話せない歯がゆさ。

「話を聞いてしまった事もあつたので……それにあのまま放つておいて千葉に帰つても……なんだかなあゝつておもちゃつただけで」

「それで行動できるつてホントすごいよ。僕だつたらただ眺めるだけで終わつちやいそうだから……」

そう言つてシユンと下を向いてしまった。

「そんな事はないですよ。私だつてこんな展開になるなんて思つても無かつたので……あと、約束しちやいましたから」

「約束それつて……八幡と？」

「違いますよ、別の人です。何というか……思い返すと恥ずかしいので余り言えないのですが……この約束があつたから今回動けたつていう感じです」

私だつてこんな面倒な事は見て見ぬ振りしたいし関わりたいとすら思わなかつた。

でも、こんな恥晒しに色々知恵をくれた平塚先生には恩があるし、その約束を無下にはできない。

「へえ、なんか素敵だね」

「そんなに素敵な思い出もでもないのですが……でも、憧れてるからこそ守りたいってあるじゃないですか」

「なんかわかる！ テニスでも好きなプレーヤーの練習を真似するときはこの人は絶対にこんなプレイはしないって思ってた自分にも言い聞かせたりするしね」

「です。なので私がやっている事は戸塚先輩がやっている事とほぼ同じ様な事なのです」

「あはは、一色さんありがとうね」

「はて、私は褒められるような事はしてないですよ」

「うん、でもありがとう。明日頑張るね！」

「ありがとうございます。戸塚先輩」

「せめてお手伝いするよ。……って先輩らしくないかな？」

そう言って少しもじもじとした様な仕草がすごく可愛いく映る。

「いえ、十分に先輩らしいですよ」

「そうかな、ありがとう」

先ほどののかむような顔から満面に笑みに変わりなんだろうか、せんぱいの言っていた何かの片鱗を見たかのようにだった。

「いえいえ、所で話変わっちゃうんですけれど戸塚先輩がよくテレビで見ます？」

何かに目覚めそうな感情を抑え、私は別の話題をひねり出した。

「うん、みるみる」

「昨日のテレビに出てたホラトローキで出てた情熱テニス芸人って知っています」  
「知ってる！ すごいコアな選手とか知ってる人だよね！」

その後、この話題から外れ、世間話をしていたら別の声が聞こえてきた

「あつつつ。マジ風呂入り過ぎたわ」

そう独り言を呟きながら歩いてきたのは戸部先輩だった。

「戸塚あく風呂空いたぞ、……つていろはすもいるし。マジレアな組み合わせじゃね？」

「ちよつと外出てたら一色さんと一緒になっちゃったんだ」

「おお」

分かった分かったつて言う感じのニュアンスで戸部先輩が頷く。

「つてか戸塚よお、もう風呂入つてこいよ俺とヒキタくんサクツと入つてきたし」

「うん、ありがとね戸部くん」

「いいつて事よ……」

その後には戸部先輩は小さく呟いていたが『一緒に入られてもアレだかな……』つて言葉を私は聞き逃さなかった。私じやなきや聞き逃してたね。

「それじゃ一色さん、また明日！」

そう言つて戸塚先輩は颯爽とその場を立ち去つて行つてしまった。

「おく、めつちや涼しいじゃん」

そう言いながら近くにあるちようど座れる廃材に戸部先輩が腰掛ける。

「お風呂熱かったですしね、夏ですが夜の高原つて結構涼しいですね」

「分かる分かる、まじ水の中にいんのに水分持つてかれるんだよな」

「戸部先輩どんだけ汗つかきなんですか」

「なんつつーの新鮮感謝つつーの？ それがすげーつつーの？」

「それを言うなら新陳代謝ですよ。なんですかその言われて間もないありがどうを難し

く言った様な言葉。戸部先輩？ 結衣先輩の事全然言えませんかよ？」

「マジかよ……いやいやいやいや……そんな事ねえつて」

いやいやいやいや、そんな謙遜しないで下さいよ

「そ、それよか大丈夫かいろはす？ 今日なんか体調悪そうだったしなあ」

あつ、無理矢理話題変えやがった。まあ別に良いですけどね

「そうですね。昼間は結構苦しかったですけど今は大丈夫です」

「おおくならいいけどさ。優美子がすつげー口にしてつから流石に心配したわあ」

おお……三浦先輩に心配されるとは……本当に申し訳ありませんとしか言いようが

ないんですが……いや、本当に。

「つてかそうそう、話変わるんだけど最近俺のクラスちよつと変わつててさ」

多分これは戸部先輩の配慮だ。重い話はこれ以上しない方向に進めたいのでしよう。私もそれに同意し口を開く。

「変わってる？　どんな風に？」

「優美子が最近テニス部に入り浸ってっしょ？」

あゝ、なんかテニス部の練習に交じって三浦先輩がいるのを見かけた事が何回かある。

「あれ？　三浦先輩はテニス部じゃないんですか？」

「それが違うんだな〜」

チツチツチと人差し指を左右に振りどや顔を決める。

……なんかムカつきますね。

「前にテニス部の戸塚と試合した事があつたつぺ」

「はあ」

「んでそこで優美子が手加減忘れて……ああつと、優美子って中学ん頃テニスで県大会出場してんだよ」

「へえ〜意外！　すごいですね！　三浦先輩」

「こそ、そのすつげー腕前の優美子が手加減忘れて戸塚と対決してから結果戸塚が怪我しちまつてよ〜」



「ええ!? 大丈夫なんですか?」

「まあ戸塚の怪我は擦り傷程度だったらしいんだけど、優美子がやけに責任感じてんだよ。んでテニス部に入り浸って監督みたいな事してんの」

「なるほど、そういう理由があったんですね。初めて聞きました」

「んで、話が戻んだけど、基本俺と隼人君、優美子で二年生の俺のクラスって隼人君、優美子が言えはい決まり〜みたいなの? そんな感じだった訳よ。ただ最近優美子がいねえからってやけにつつかかかってくる奴らがいてすげー面倒くせえのよ〜」

「へえ、そういうのもあるんですね」

クラスカーストって言うんですね? そういうの感じた事は無いですけど。

「まあ最初につつかかかってきた相模さんって言うんだけど、そいつら速攻で優美子が……つと。これは秘密だったわ」

何をしたんでしよう三浦先輩。相模? 相模……どこかで聞いたような……まあいっつか。

「んで、それはそれでサクツと解決したわけよ」

パチンと指を鳴らしながらどや顔を決めてきた戸部先輩にはため息しかでなかった。

「それはよかったですね」

「ここから俺武勇伝とか聞かされるのかあ〜。あーチョー面倒くさい。」

「ただなあ、最近またタチが悪いのがおきてんのな」

しかし予想が外れ、声のトーンが若干下がった。

「また？ 前にも何かあったんですか？」

「それな、前にもなんつーの？ 俺らグループの空気悪くする感じのメールとかあったんよな」

あー、なんかクッキー作ってたときに同じ様な話を聞いたことあるような。

「つで、それとは別に最近やけに後輩に絡んで俺らの事なんかやかんややろうとしてる奴らがいるみたいなんよな」

「えっ……後輩？ と言う事は1年生にですか？」

私は特に何も聞いていないんだけどなあ。

「そそっ！ なんつーか俺がなんか裏でワルやってるとか優美子が色々やって金稼いでるとか噂流してる奴らがいるってサッカー部の後輩が言ってたんよな」

「へえ……」

流石に0から動かないかと思っていきましたけどそれを聞くとマイナスに振り切っちゃいますよ戸部先輩？

「いろはす？ 俺やってねえからな？」

「分かってますよ」

2年生も大変なんですね。なんか色々楽しそうに和気あいあいとした雰囲気なの。

「まっ、そんなわけでなんか聞いたらそっこーで俺とか隼人君にメツセおくつてくれ」  
「はい、承知です」

そういつた種はさつさと潰しておきたいのでしょね。そんな話を聞いたら連絡く  
らいは入れてあげる事にしましょう。

「さて、そろそろ私も湯冷めしちゃいそうなので部屋に戻りますね」  
「おう。俺もう少しここにいるから」

そう言って戸部先輩は手をヒラヒラとさせ別れの挨拶をする。  
それを確認した私はその場を後にした。

## # 3 1 — 1 何氣に一色いろははいたずらを好む。

鏡を見ながらブラシで髪をときながら、目元の腫れを確認する。昨日の腫れたブスは  
どうやらどこかに行ったようだ。

身だしなみを整えて朝食を取りに食堂に向かう。

食堂にはまだ人の気配は無く、閑散としていた。どうやら私が一番乗りのようだった。

朝食は既に用意された容器をひとつひとつ取っていく形式で、適当な茶碗をさつさと  
プラスチックのトレイの上にのせ、適当な席に着く。

ちようど席に座った辺りで食堂の入り口から人影が現れた。

「ふあ〜……いろはちゃんおはよ〜」

大きなあくびをしながら入って来たのは結衣先輩だった。

「あー、さつむ。今夏つしよ？　なんでこんな寒いのに……」

「高原だからねえ〜、朝は寒いんだよ〜きつと」

「……」

結衣先輩に続けてどしどしと先輩方が入ってきた。

雪ノ下先輩は少し不機嫌気味だ。低血圧なのかな？

「いろはちゃん、今日はもう大丈夫？」

結衣先輩が私の隣に座り、語りかけてくる。

「ええ、大丈夫そうです」

「つそ、それなら良かったわ」

そう言いながら雪ノ下先輩が結衣先輩の隣に座る。

この二人ほんと仲良いですよね。

向かいに三浦先輩や海老名先輩が座り、ちようどその時に男子も食堂に入ってきた。

「僕たちだけで来て良かったのかな？」

「マジヒキタニ君全然おきねえくし、チョーウケンだけど。まあ大丈夫つしよ」

「昨日は慣れない事ばかりだったから疲れているんだろな」

「どうやらせんぱいはまだ夢の中である情報と共に男子3名が固まって席に座り朝食を取っていた。」

あのひと本当に大丈夫なんでしょうか？ いざという時は雪ノ下先輩……いや、三浦

先輩つかつてたたき起こしてやりましょう。

雪ノ下先輩からの罵倒は日常茶飯事なので馴れているはずなのでたぶんこれが効くはず。

「ねえ、いろはちゃん。今日の事なんだけど」

「はい、せんぱいと雪ノ下先輩以外の皆さんには昨日お話しさせてもらった通り、自由時間の小学生に噂を流してもらえると嬉しいです」

「うん、わかった」

「お願いね、由比ヶ浜さん」

『まかせてよっ!』と自信満々に胸を叩いて咳き込んだ結衣先輩に『もう……』といいながら介抱する雪ノ下先輩。

仲睦まじいなあ〜とその光景を眺めていたら後ろから声が聞こえた。

「おや、昨日の話合いの事か?」

私の後ろの席に座っていた平塚先生が声をかけてきたのだ。いつの間にかいたんだこの人?

「そうですね。その件で皆さんに今日協力してもらおう予定です」

「なるほど、色々と考えたのだな。では私はその様子を観察させてもらおう事にしようか」

「承知ですー」

「ただ、問題行動を起こしそうな場合はこちらも口を挟ませてもらうぞ。これでも引率なんでな」

「大丈夫ですよー、問題は問題と察知されなければ問題になりませんので……」

「君もまた同じ事を……、まあいい。善処したまえ」

それから雑談を交えつつ朝食の時間が過ぎて行った。

せんぱいは全然起きてこなかったので誰かに起こしに行ってもらうような流れになった。男子諸君は全然起きなかつたと言うので別の誰か……最初は結衣先輩か雪ノ下先輩をお願いしたいところだったが、雪ノ下先輩はコレから私と計画の話をしないとイケないので離れられないし、結衣先輩では起きなさそうな予感がした。なので三浦先輩に無理を言つて起こしに行つてもらつた。

ものすごく嫌な顔をしていたが、海老名先輩も一緒に行くという条件で嫌々ながら承つてもらつた。海老名先輩は『隼人君か戸部君が添い寝したら嫌でも起きると思うよ？　ぐふふ♪』と言つていたが即座に三浦先輩がパシンと頭を叩き海老名先輩の暴走を止める。よし、これでかつてないお目覚めになると思います。

そして各自自由行動と言う事で昨日話した計画を実行に移すべく各自散つていった。

私は昨日皆と話合いをした場所で雪ノ下先輩と一緒にこれからの計画の詰めを行つていた。

「それで、今日の肝試しで皆集まっているなか、対象グループ出発後、後続グループの出発時刻を少し早めにして追いつく様にしておけば対象グループはそのときも留美ちゃんに何かしていると思われるので後続グループが察して噂の信憑性を上げていく形と

なります」

「ええ、それでいいと思うわ。ただ一色さん、結局は可能性の話よ、話題にも上がらない可能性があるわ」

「うーん……確実に話すようにするって事だと私たちが直接こう言ってねって命令しなきゃできないですし。何でそれをするのって話しになると原因の話をその子達にしなきゃいけないですしちようど良い塩梅ではないでしょうか？」

「ならせめてその可能性を限りなく高くする策は講じましょう。ほらここをみて」

そう言つて林間学校のしおりでちようど肝試し前に数十分程度取られている箇所を指さしていた。

「確か平塚先生から演出で小学生達に怪談を聞かせる流れになつてゐるわ。ここで今回の件をもじつたかのような怪談を話せば記憶をぶり返させる事ができるんじゃないかしらっ？」

「なるほど、確かに」

雪ノ下先輩よくそんなこと思いつきますよね。すご。

「でもそれを用意するって結構大変じゃ無いですか？」

「そう難しくもないわ。今回の件とよく似たことを昔の人は既にやつてるものよ。村八分つて知つてる？」



「はあ……なんか村ぐるみで無視したりするアレですよ……ってあれ？」  
たしかに今回の件とそれなりに合致しますね。

「それを題材に挙げた怪談をネットで見つけて少しアレンジすれば良いだけよ」  
「それくらいならすぐにできそうですね」

「ええ、仮ではあるのだけれど書いてみたから後で確認してもらえる」

「えっ？ 本当ですか。すごいですね」

「これ位当然よ」

そう言つてふさあつと髪をかき上げる。ほんと何事もそつなくこなせるなあこの人。

「一色さん。あなたにひとつ聞きたい事があるのだけれど」

一呼吸おいたあと、雪ノ下先輩は私の目を見てこう言った。

「最終的にこれはやられる側が逆転するのではないかしら？」

……やはり気づいていた。

その通り、この計画は鶴見ちゃんを助ける事と遊びを無くす事を叶えるに特化した計画だ。

林間学校後、犯人捜しが行われ、主犯が見つかり、最悪学年全体からイジメの対象になる可能性だつてある。

学年全体には悪いことした奴らを探し出して罰を与えるっていう大義名分があるのだからその可能性は無視できない。

「仰つてゐることは分かります。最悪はそうなると思います」

「主犯グループが今度が被害を被ることにについては無視するつもり？」

「それについては先ほど話した通り、後続グループから噂が流れていることを聞き、そこで遊びを止めたらバレルことは無くなります。これ以上やるとどうなるかの勧告はしたのにそれを無視した場合は……さすがに自業自得だと思えますよ」

「そう……」

「……もしかして雪ノ下先輩も葉山先輩と同じで皆納得できるようにって考えていたり……」

「そんなこと無いわ。絶対にありえない」

その言葉を言い切る前に雪ノ下先輩は私を睨みハッキリと何かを拒絶するかのような口調でそう言った。

あつつちやく……地雷踏んでしまった……

「と、とりあえず私の中ではこれでいいと思つています」

「そう……分かったわ。いったんこれで進めましょう」

そう言つて雪ノ下先輩は席を立ち、ヤカンをコンロにかける。そしてヤカンの近くに

座ってしばらく無言の空間が続く。

ちよつと拒絶されているのかと思つてしまい寂しい気持ちになつたが、まあ地雷踏み抜いて少しだけ話しにくい空気みたいなのが流れたからリセットしたいのだろうと考へ直し、背伸びをしつつ辺りに何か無いかを見わたす。

するとそこに既に疲れた様子で背中を丸め、ボサボサの髪を掻きながら食堂に入つてくるせんぱいの姿が映つた。

なにやらキョロキョロとあたりを見回している様子だ。

多分朝食を食べに来たのだろうが、既に朝食時間は終わり、食器などは全て片付けられてしまった。

「もう朝食は終わったわよ」

挙動不審に辺りをキョロキョロするせんぱいが目障りだったのか面倒くさそうに雪ノ下先輩がそう言う。

「……まじつすか」

はあくど大きくため息をつき、食堂を後にしようとする。

「はあ……紅茶くらいなら用意するけれど？」

「朝食が液体のみつて斬新ですね」

「自業自得じゃない？」

「はい、仰るとおりです……」

「珍しいわね。あなたがただ素直にそれだけ言うなんて」

「いや、なんとというか珍しい人たちに起こされて朝っぱらから気力を使い果たしたんですよ……」

「どうやら朝のドッキリが成功したようで。いやまあここまで気力使い切るのは予想外でしたが。」

「良かったわね。あなたの人生の中で女性に起こされる事なんて早々ない事よ。今日の事は生涯忘れずに噛みしめて生きていく事ね」

「いや、いつも妹に起こされてますし……ただアレは衝撃的でしたわ」

「一体どんな起こされ方をしたんだろうか。少し気になった。」

「そう言えば朝ご飯ってもう片づけられるんですね……いつの間に。」

「そういうえば……確かバックにだいぶ前にサッカー部の……誰だっけ……とにかくもらったカロリーとズツ友的なお菓子が眠っていたような……」

「そう思い近くにあるバックを引き寄せ中を探るとあった。」

「ゴールデンウィーク辺りにもらった物だけれど長期保存に向いているタイプだった。ラッキー。」

「あいつ、せんぱいこれ」

そう言つてそれをせんばいに差し出した矢先に思い出した。

なんだかんだ昨日は会話できていたが、私つてせんばいから関わりを持たないように言われてた事を思い出し、内心非常に焦り始める。

そう思うとこの差し出したコレ……。引つ込めたいなあ……。いらなとか言われたら流石に傷つくなあ……

「おおまじか……サンキュー」

そう言つて私の手からそれはせんばいの手に移つた。

ただそれだけの事なんだけれど、なんか……。なんか救われた気がした。

そんな中、ヤカンの笛がけたたましい音で鳴き、その音で我に返つた。

そんな音にも動じず雪ノ下先輩はささっとコンロの火を止め、パツクの紅茶が入つた紙コップにお湯を注ぎ、そのうちの1つをせんばいに渡した。

そしてもうひとつの紙コップを私の前に置いて、隣に座る。せんばいは少し離れた椅子に腰掛けた。

「そんで一色、今日は何すんだよ」

「えっ？ あつ……」

「えつなに？ もしかして昨日の話本気にしちゃつたとか？ マジウケるゝとか思つて

ねえよな？ 俺今日1日部屋に籠もるまであるんだが？」

「いえ、そうではなくてです……ね……」

ダメだ、なんかこう意識しちゃって全然話続かない。

その空気を察したのかせんぱいも私から気まずそうに目をそらした。

「比企谷君、あなたが寝ている間に私と一色さんで計画の話は済んだわ。あとはあなたの仕事よ」

「あ……これ食った後でもいいですか？」

「なんで私に答えるの？ 一色さんに聞いてもらって良いかしら？」

せんぱいはすこし動揺した後、流し目で私を見る。

「……なにすんだよ」

「まあ……ちよつと……一緒に来て下さい……それ食べ終わった後で」

## #31—2

「ねえ、あんた。いつまで寝てるつもり、あゝあゝ？ わざわざあーしらが起こし来たんだからとつとと起きろや？ わかる？」

俺はなぜか敷き布団の上で正座させられ目の前に立つ煉獄の女帝に延々と説教させられている。

「かなり熟睡していたんだね〜比企谷君」

そしてそれを三浦先輩の後ろで嬉しそうに覗いている海老名先輩  
つていうかなに？ コレどんな状況？

いきなり蹴飛ばされたと思つたら遭遇率が滅茶苦茶低い方々が直々に俺おこしに来てんだけど？ なぜこうなった

辺りを見回すと既に戸部先輩、葉山先輩の姿が無い。

と言う事は彼ら以上に俺はぐつすりすやすやすやつすやしていたんだろね。八幡よくねる子だから。

「ねえ〜海老名あ？ なんであーしこんな事しないといけない訳よ」

「いいと思うよ〜比企谷くんのすつごい面白い顔見れたし。でもでも〜！ 隼人くんか

とべつち連れてきて寝起き前に添い寝してもらったらもつと良かったかなあぐぐふふっ！」

「ちよつ、海老名鼻血!! シーツついたら染みなるんだから! さつさと拭きなつて」

「あゝ優美子ごめんごめん」

目の前のコントを見ながら危うく俺は海老名先輩の妄想の餌食になるところだったのかと忍び寄る恐怖にキュツと締めた。どこをととは言わんけど。

「つてかあーしら、やる事あつから。さつさと起きろ」

「はい、すいません」

そう言つて三浦先輩は俺が正座している布団のシーツの端に手をかける。

「いつまで座つてんの? シーツ取れないんだけど?」

そう言つて俺を鋭い視線で睨む。

えっ? 手伝つてくれんの? 口調と行動がまるで一致してねえ。

「いやなんというか……手伝つてくれるとは思つてもなかったんで」

「あゝあ? んなの皆でさつさとやった方が早いだろが」

ドスのきいた声でそれが当たり前だろという常識を押しつけてきた。これを家族でも無い奴に当たり前にできんだな……リア充まじすげえ。

「あつ、はい」



「比企谷くーん優美子はね、朝食そろそろ終わるから皆で早く終わらして間に合わせようってしてゐるんだよ」

えっ？ なにその厳しさの中にある優しさ。

今俺の中にいつも感じない罵声を浴びた切なさや皆で協力する心強さが同居してんだけど。愛しさは感じねえけどさ。あつ、小町なら別な。

「海老名、余計な事いわないで手動かす」

「はいはい」

そうやって海老名さんは布団をせっせと折りたたむ。それにつられ俺もさっさと敷き布団をたたみ押し入れに戻す。

皆でやったお陰でささつと片付けが終わる。

「さつ、あーしらやる事あつから。ヒキオ、あんた食堂行つてみたら？ 多分間に合うかもよ」

「急げばワンチャンあるかもね」

そう言われ、食堂に出てみたは良いが、結局朝食にはありつけることは無かった。

\*\*\*

寄宿舎をでて広場の端を沿うように通る。なぜならば小学生皆々が葉山先輩や戸部

先輩と仲良くドッジボールしたり、鬼ごっこしたりしてる仲睦まじい光景が見れたからだ。

広場の端にある小屋がちょうど日陰になっており、そこにファミレスのボックス席みたいな大きなテーブルと椅子が設置されており、そこで何人かの女子がそのテーブルを囲い、キャツキヤと笑い声を上げて雑談を楽しんでいた。

まあ女三人寄れば姦しいという言葉があるとおりに彼女達とはそれなりに距離があるはずなのに会話が聞こえてくるという。マジでよくそんな声量で話せるなど感心したくらいだ。

それから広場を抜け獣道へと入る。

先ほど迄の喧騒は遠くなり、落ち葉を踏む音、サーツと揺れる枝の葉擦れ、時折鳴くウグイスが耳に入ってくるようになった。朝特有の冷たい風に吹かれ、砂利道を進む。時折木々の隙間から日が射し、俺の眼球にダイレクトアタックしてくる。陰キヤにはこうかばつぐんだから手で遮る。

と言うのも総合栄養食を食べつつ紅茶を啜っていたら一足先に一色は外に出て行ってしまった。

先に指定の場所というのは聞いていたから問題はなかったが、その道のりというのは少し距離があり少しだけ面倒ではあった。

それでもめげずに頑張つて向かった俺を俺は褒めてやりたい。

そして苦労してたどり着いた川辺にはすでに一色と……例のあの娘が一緒にいた。

一色は朝の森の空気が新鮮なのか深呼吸した後、俺に気づいたのか視線を合わせた。

「せんぱい、無事これ何よりです」

……なんだろうな、こうも素直に労われるとなんか歯がゆい感じがするんだが。

それにしても……傷つけた相手に協力を依頼するつて結構ハードなことやってのけたな一色。

流星に協力しないつって突き放すのも良心が痛む。……今更だがな。

「……誰？」

そつと、一色の袖を掴む。あつちからすれば初対面だからな。うん。

お兄ちゃん怖くないよ？ ホントだよ？

「留美ちゃん。この人が今回の協力者だよ」

なんかすつげえ嫌な予感しかしねえんだが……

「なんか……嫌」

おい。まだ一言もかわしてないうちに嫌われたぞ。初対面で嫌われるつてなんだよ。

鬼いちちゃんは嫌われるってか？ 術式展開すつぞこら。

「……私、鶴見留美」

一色の袖を掴みながらボソツと彼女は自分の名を名乗った。

「お、比企谷八幡だ。ちゃんと自分から名前言えるって偉い、偉い」

そう言つて頭を撫でようとしたら避けられ。怪訝な顔で見られる。なんでよ。

「……そういうところですよ。せんぱい」

眉間にしわを寄せてじと目で一色は俺を見る。

どいう所だつてばよ。相手小学生だぞ。

「全然分かつて無さそうなのですがそれは置いて、留美ちゃん。演技は得意？」

「やった事ない……かな。ちよつと興味はあるけど」

「まあ、別に何か演技するって訳でも無いけれど。一応こんな感じでやってみて」

そう言つて一色は俺を見てなにやら不敵に笑い、何度か咳き込む。

・その刹那、瞬き1つで目は潤み、頬は次第に淡い紅色に染まる。

さらに俺のパーソナルスペースにスルリと入り込み、手の甲が一瞬だけ触れ、離れ、触れそうで触れない絶妙な位置に構えた。遅れてその運動エネルギーから発せられた緩やかな風は彼女の香りを鼻腔に届ける。

「ねえ……せんぱあい？」

その艶のある唇から発せられたストロベリージャムのようなとろけた甘い声が鼓膜を揺らし、続く言葉を都合の良い妄想が勝手に綴る。

そしてそんなねつ造された言葉に感情がこみ上げる。

「今、好きな人って……いますか？」

所詮は妄想、理性で抑えこもうとした所に、続く言葉が耳に入る。その内容は自分に都合の良い妄想と近く説得力を増す。

同時にいつもとはちよつと違う潤んだ瞳の上目遣いに目が離せなく、気恥ずかしさから思考がまとまらなくなる。

「ぐっ……い……いねえ……が」

よって、いかにも陰キヤな返ししかできなかった。

俺の言葉を聞いた瞬間にパツと俺のそばから離れ、ふふんと勝ち誇ったかのような表情をしていた。

なにその純情な感情を空回すのはお手の物っていう表情。純情ボーイの2／3くらい闇落ちさせられるぞそれ。

「つと、こんなどころ。ほらやってみて」

と、先ほどの迫真の演技に首から提げていたカメラを両手に収めているルミルミがハツと我に返る。

写真……撮ってないよな？　なんか我忘れていたみたいだから大丈夫と思うけどさ……いやそうではなくて。

「いやまて。一色、お前小学生になに教え込もうとしてやる」

「なにつて……単純に愛されガールのなりかたですけど？」

なんだよ愛されガールって。

「相手小学生だぞ。今からそんな教える必要……」

それを言い切る前に一色は反論する。

「今だからですよ。つていうかせんぱいの価値観がいつの話ですか。女子は結構そういう話するの早いんですよ？　6年生にもなれば普通ですよ」

「テレビとかで小学生同士で付き合ってますーとか温泉街に先生と来ましたーみたいなインタビュー聞いたことはあるが、少数派の話だと思つてたのに違うのか??」

「……付き合つてるとかそんな話はよく聞くけど……?っばい」

「まっ大体は漫画とかドラマとか煌びやかな恋愛に憧れている子が見栄で言つた嘘っばちですよ。あと彼氏が欲しいって夢見る女子界限でマウント取れるとか含めて思つちやつているのは小学生も中学生も変わりませんから」

何その界限。ブスな私でも彼氏ができたとかの宣伝で高額商材売り出せそうだな。

まさかのビジネスチャンスの発掘。

「結局は口先だけなので留美ちゃんが言っているとおり？でしよって勘ぐられて終わるわけです。ただ……これに信憑性を持たせる方法があります。それが男子にチャホヤされる愛されガールと言うわけです。まあ外見が可愛くないと成り立たないんですが、留美ちゃんくらい可愛ければ大丈夫かなって思います」

「か……可愛いとか……そんなんじゃないし……」

ほのかに顔を紅く染め、身を大きく左右に揺らしながら艶の入った長い髪を指でクルクルといじる。褒められ慣れていない証拠だ。……悪くない。

「それにこれは留美ちゃんの自分を守る武器になるんですから」

自分を守る武器……言い得て妙だな。チャホヤされると言う事は他よりも立ち位置が上である事が視覚でみて明確であり、外面はリア充に見える。明確な悪意か格上の陽キャじゃない限り『こいつは格下』だからと見られ、他者から舐められる事が極端に少なくなる。

つまり関係の無い第三者が味方している状況で加害側は今後ルミルミが実害を被る事に手を出しにくくなる訳か。

「まあ中1後半から中2辺りになり始めると女子受けかなり悪くなって困いから崩しにかかってくるからそれまでに自分が強くなる必要があるけどね」

「え〜……」

ルミルミがすごく嫌な顔をしている。

まあ、確かに女子ウケは悪いよなあ。

しかもこれ……完全に経験論だよな？ かなり茨の道じゃねえか。

「でも、自分に武器があるって自信はつくよな」

ン……………あなるほどな。

一色はルミルミに自信を持つて欲しいって思っている。現状ハブられているルミルミは自分を過小評価しているがお前がその気になればメドロアだつて撃てる大魔導師なのだつてな。

しかし、自信を持ってよと直接言つたところでそれが全て伝わる事は無い。他人は他人なのだ。

だからこそ自信が持てるような施策を自身の経験から探しだし、それを武器と称して彼女へ教えようとしている訳か。

「つという訳で、今から留美ちゃんには囲いを作る術をおしえまーす♪」

……………そうとなると話は変わってくる。

「……………別に教える必要はねえよ」

「せんぱいもしかして怖じ気づきました？ ……せんぱいの人生経験上小学生とはいえ



『好きな人いますか?』って言われる経験なんて早々得られる事は無いと思いますが……それで照れてしまっても想定内です。ロリコンとか思いませんし留美ちゃんなら仕方ないかなとは思いますが……が逃げるのだけは訓練になりませんしダメですごめんなさい」

お前が俺をどう思っているのかよく分かった。覚えとけ。

「ちげえよ。よく言うだろ。サンマの旬は秋つてな」

「……は? ちよつと何言ってるか分からないです」

「ねえ……何言ってるのこの人?」

マジその可哀想な人を見る視線止めてくんね? 俺泣いちゃうよ?

\*\*\*

「いえーい、段差ーみーつけ、しげちーこつからはいつてこれないからなく」

「マジで? それ土からコンクリート入っただけだろー」

「それでも実際段差あんじゃん」

「んじゃ多数決な。きばみーちよつとこつちー」

「んーどうしたのしげちー」

「ゆーすけの奴がこれ段差って言うんだけど違うよなー」

「……無理あるだろ」

「いや、実際段差あるだろ?」

「これ段差じゃなくて堺目って言うだろ? こんなまでカウントしたら高鬼成立しなくね?」

「ちょうど近くで高鬼で遊ぶ男子3名組をみつけた。って言うかこいつらよく見かけんな。」

早速実践といってみようか。

「えつと……なにをするの?」

「そりゃここまで来たらあいつらと友達になるって事位しか思いつかないだろ」

「せんばい? 自分が出来ない事を人に押しつけるのはどうかと思いますよ?」

んなこと一億パーセントくらいは理解してんだよ。

「えくつと……その……ちよつと恥ずかしい」

そう言っって頬を紅く染めたルミルミが右に左に身体を振る。

陽気に話しかけるってキャラなさそうだしな。そりゃそうなる……だがそれがいい。

「それだそれ。そもそも演技でごまかそうってのがおかしいんだよ、マジで恥ずかしいがつっている仕草は演技とくらべもんにならない位の衝撃はあるつてもんだ」

男はな、恥ずかしがっている女の子を見るのが大好物なんだ。

「せんぱいもそうなんですか？」

「自慢じゃ無いが半泣きの女子に遊びに誘われたことならあるぞ」

「……そうですか。いえ、なんというか……ごめんなさい」

「おい、まだオチ言つてねえだろ」

「だいたいせんぱい同じオチを出し過ぎなんですよ。一発屋の芸人ですか」

「おいやめろ。陰キヤは一芸あればそれだけで生きていけると思ってるんだ。否定されると俺のアイデンティティーが無くなる」

「自虐がアイデンティティーになりますかね……」

「……深く掘り下げるな」

「はい」

そんな俺と一色の話をぼーつと見ていたルミルミに気づき、咳をついていったん締める。

「そんじゃ……ほれ、行つてきな」

「う……うん……」

そう言つてもまだ足取りが重い様子。

そりゃいきなり何の練習なしにいきなり行つてこいって言われてもどうすれば良い

か分からんよな。八幡動きます。

「まあなんだ。そのあれだ。あいづらに同じ班の奴らにハブられたから仲間入れて欲しいってそんな調子で言ってみろ」

まあその態度とか見りや察してくれるだろうよ……多分。

「う、うん」

そう言つて足取り重く彼らの場所に向かうルミルミ

それを俺たちは遠くの藪に隠れ見守っていた。

## #32 とんでもなく彼女の笑みはすさまじい。

留美ちゃんは重々しい足取りで彼らの元に向かって行く。

まあ初めての事だし練習はしないで余り気乗りしないのだろう。

その後ろ姿を茂みの中から伺う。

「あ、あの……」

「ん？」

留美ちゃんは彼らの中でしげちーと呼ばれている男の子に話しかけた。

「えつと……その……私鶴見留美……」

おつ、ちゃんと自分の名前を名乗れた。偉いぞ留美ちゃん。

「俺、茂な。つで？ どうした、俺になんか用か？」

「えつと……その……」

どうやら頭が真つ白になってしまったようで続く言葉が思いつかないようだ。

えーつと、そのー……と言うようなどうしたら良いか分からずモジモジとしている様子が伺えて……私は可哀想に見えて来たんだけれど本当にこれで良かったのだろうか  
と隣に居る先輩を横目でチラツと見る。彼は何の心配も無さそうに表情一つ変える事

無く見守っていた。

「つてか、同じ班の奴らどうしたんだ？ 一人か？」

私と同じ気持ちになったのだろうか。彼の方から留美ちゃんに対して話を振ってきた。

「うん……朝ご飯食べて部屋に戻ってきたら皆いなくなってた」

「お、おおお……マジか」

第一声にいきなり重い話が出てきて発言に戸惑ってしまった。

さらにそこから先ほど迄遊んでいたであろう仲間の2名も留美ちゃん存在に気づき、彼と彼女の元が集まってきた。

留美ちゃん人が増えたことに気恥ずかしさが増したのか顔を紅くして指をイジイジとしはじめる。

「しげちーどうした？ その子誰よ？」

「あー、ゆーすけ。鶴見留美って名前らしいよ。なんか部屋戻ったら一人だったって」  
「マジで？ どこにもいなかったん？」

そう言つて後から来たうちの1人……随分と顔が整った男の子が留美ちゃんに話しかける。

「うん」

「いきなり？」

「うん、いつの間にかいなくなってた」

「うっわーマジで……置いてけぼりかよ」

質問にはオープンクエッションとクローズドクエッションが存在する。彼は知ってか知らずか彼女の焦り様をみて詳しい状況説明がしにくいと判断したのだろうか、はい、いいえで簡単に答えられるクローズドクエッションを淡々と繰り返して状況の切り分けを行っていた。

小学生なんだけどちよつと垢抜けてる感じがする子だった。

「今日って確かほとんど自由時間だろ？ 一人ですつといるのもアレだし、仲間入れてやろうぜ。良いだろきばみー」

多分留美ちゃんの話しかけた子がリーダーなのだろう。あの垢抜けた子に親しげに話しかける。

「全然良いよ。しげちーが言うならそうしよう」

「つとなるとー……どうするしげちー？ 女子いるけど高鬼続ける？」

「そーいや前にビー子が男子と女子で体力違うから別の遊びが良いとか言ってたな。いや別の遊びにするか」

なかなか気が回るわね。

「ならUNOやろー。俺ちようど疲れてきたから」

「良いね。しげちーボッコボコにしてやるよ」

「はあ？ 一つも負けてんのお前だろゆーすけ。またビリケツにして上り棒10往復の刑にしてやんぞ」

「お？ いったな？」

「どうやら留美ちゃんを含めてUNOで遊ぶと言う事に話は落ち着いたらしい。」

「……いいの？」

「ああ、どうせ俺たち班も2人病欠して3人しかいなかったしな。全然良いし……ん？」

ルミ子デジカメ持ってんじやん」

「う、うん記念用にお母さんから……ルミ子??」

隣で聞いているせんぱいが『あいつ男版の由比ヶ浜じゃねえかよ』と呟いているのが聞こえた。

確かに距離の詰め方がバグっているとしか言いようがないです。

「結構撮った？ 昨日のカレーとかめっちゃ面白かったじやん」

「ううん、全然撮れなかった」

そう言つて留美ちゃんは茂君にデジカメを渡す。多分メモリーを見せたんだと思う。

「ふーん……花とか景色とかの写真しか……!? ちよつこれ！」



そう言つて男の子3名がカメラの液晶画面に釘付けになる。

「へえー、俺たちと遊んでいる裏で逢い引きを激写つてね」

「へえ〜！へえ〜！」

「ゆーすけうつせえ」

一体何が写つていたのだろうか。留美ちゃんがなんか気まずそうにこちらに振り向こうとしたがすぐさま思いとどまったのか戻した。

……ちよつとまつて？

もしかしてアレ。撮つてた？ちよつと止めてよ。恥ずかしいじゃない。

せんばいも留美ちゃんの行動に多分心当たりがあつたのだろう「ぐっ……マジか……」と頭をくしゃくしゃとしながら恥ずかしそうにこちらをチラツと見てはすぐに視線を避けた。バレバレである。

茂みの中でそんなことをしていると状況は突然動き出した。

彼は留美ちゃんの隣に自分の立ち位置を移し、デジカメのレンズを自分と留美ちゃんが映る位置に向けシャッターボタンを押す。

「うお、まぶしっ」

「……いきなりなにをするの」

流石に留美ちゃんもいきなり写真撮られたことに少しだけ機嫌を損ねたようだ。

「何も写真撮れてなかったしとりあえずコレで一枚、折角の林間学校だぜ？ もっと写真撮ろーぜー」

「えっ……」

「いいねえ。きばみーのスマホメモリいっぱい過ぎて写真保存できなかつたし、しげちーだけずりいだろ、俺もまぜろよ〜」

「今度SD買つとく。つてか人のデジカメでしょそれ。返してあげなよ」

「ううん、いいよ。どうせほとんど撮らなかつたし、折角だから使お」

「よっしゃ、お前ら並べ！ 記念撮影だ！」

……

その様子を見て胸をなで下ろした。

どうやらうまく仲間に入れたようだ。

あと少しで計画が全て整う。

今回の狙いは彼女に味方をつけること。味方がいるだけで心の持ち様が違ってくる。

そして肝試しに彼女の班と彼らをぶつけ、彼らが留美ちゃんの味方につき、そして時間稼ぎをする。後ほどやって来る後続の班に吹聴した噂と似たような状況を目の当たりにしてもらい、その信憑性を高めてもらう。後続は次第に増えていき噂の伝達も早くなる。それに彼女達が気づきその遊びとやらを止めざるを得ない状況を作る。

その為の事前準備を葉山先輩達にお願いした。

それでも止めない場合。立場は逆転する、ここまで来て駄目だったらここからはもう自業自得、最大限の配慮はしたしそれでも治まらないならもう自身で体験してもらおうか無い。

そう、これでいい。これで留美ちゃんは助かるしこのくだらない遊びも終わる。

例え私たちがいなくなったとしても彼らがいるし。それが例えハリボテだったとしても1人よりまし。

私はそれでやってこれた。

16年生きてきた経験なんてたかが知れている。

知らない事なんて人に教えられるわけがない。

それしか分らないんだから。

「よし……あと少し」

もう少しで計画は完成する。

ただ……

「……」

そんな私の安堵とは逆にせんぱいは神妙な面持ちで何かを考え……前代未聞の衝撃発言を口にする。

「俺も混ぜてみるか……」

せんぱいがらしくない発言に開いた口が塞がらない。

いけない、眉間にしわ寄っちゃった。

「なにその前代未聞の衝撃映像見ちゃった見た見たいな顔」

「そりゃそうですよ。だってあのせんぱいから混ぜりたいとかいう発言するなんて……せんぱいの中でなにか心境の変化があったのかとか色々と考えちゃうじゃないですか」

「いやそう言うわけでは無いんだが……お前らは色々仕事もらって動いている中、俺一人サボってるみたいだろ？ うまくあいつらと混ぜて仕事やってます感出せば俺はサボってるようには見られない」

うーん。相変わらず流石のクスつぶりな発言ですが、どうしても腑に落ちないですね。

「まあ……気まぐれだ。気にすんな」

絶対になにかありそう……

「折角だし私も付き合いますよ」

「いや、別に……」

「せんばいだけだと不審者って思われて悲鳴あげられちゃいますよ?」

「……あり得そうで困るな」

「ですよ。では行きましようか」

「あれ? もう決まりなの? 俺の意見は?」

私は話を聞かずささっと茂みから身を出し小学生達の元へ向かう。

後ろから後を追うようにせんばいが身を出す。

「ふう、ようやく山道ぬけましたねえ、せんばい」

「お、おう……」

あくまで偶然遭遇した演出をする。

「あつ……あれえ? もしかして? 皆で遊んでる最中なの?」

ちようど近くにいた垢抜けた子に声をかける。

「あつ! あい……お手伝いのお姉さんと……彼氏さん?」

……いま逢い引きつて言おうとしたよね? ちよつと色々勘違いしているみたいだけれど悪くない。

「……そんなじゃねえよ」

気恥ずかしいのか少しだけせんばいの顔が紅くなつた感じがする、気恥ずかしさから

か頭をガシガシと搔いていた。ちよつと面白かった。

ちようど私たちの存在に気づいたのかりーダー格の子が『おねえちゃん達どうしたの？』と笑みを絶やさず近づいてきた。既にせんぱいを超えたコミュニケーション能力素晴らしい。

その後を追うように留美ちゃんがじと目でこちらを見ていた。

まあそりやそうか。最初から私たちについて来たら恥ずかしい思いする必要もなかつたんだから。

まあ……いい経験だよ！ 頑張れ留美ちゃん！

「君たちは何か遊んでるの？」

「うん、ちようどUNOやろーってなつてた」

「へえ、そうなんだ！ 今日おねえちゃん達自由時間なんだー。折角だし……混ざつて良いかな？」

「んー……女子ルミ子ー人だけだし良いよー。……あれ、後ろのも来るの？」

「後ろの……なんで俺お前の付き人扱いされてんの？」

後ろでボソツとせんぱいは呟く

「まあ良いじゃ無いですか。子どもの言うことですし」

「それじゃ影のとこいこー！ 太陽あちーし。ゆーすけーUNO取つてきてー」

「おっけ〜」

\*\*\*

ちようど影になつてゐる丸テーブルの席を見つけ私の隣にせんばい、留美ちゃんが座る。そのとなりに続いて仲良し3人組だ。

とりあえず最初に自己紹介から始める。

しげちーと呼ばれてゐた子は立川茂、外見は何とつかまあ将来柔道かラグビーで青春を謳歌しそうな濃いめのソース顔と筋肉質な体格だ。そしてきばみーと呼ばれてゐた垢抜けたイケメンの子が伊勢原貴史、頭脳役みたいな立ち位置かメガネの子が青葉祐助。この子もまた顔が整つてゐるに加えて品の良さを感じる。

多分茂君以外はモテてるんじゃないかと思う。

「へえー、なんか変わった3人組だね」

「まあしげちーとつるんでる方が絶対いいしね」

「そうそう」

「お前から絶対なんか裏考えてるだろ？」

「いやいやいや、そんなわけないよなきばみー」

「そうそう。あとでよいしよしただろってお菓子ねだったりなんて。ねえ？」

「そういうとこだかな」

そう言つて彼ら3人が笑い合う。

確かにグループの中はすごく良さそうだ。

それからしばらくUNOを周回して雑談をかわし交流を深める。

「そういうえげなんでも貴史くんはきばみーって呼ばれてるの?」

そのなかで貴史君の全く名前と関係ないあだ名に少し興味を持つ。

するとせんばいが「ぼっ! お前余計な事…」と小さく呟く。何か私は地雷でも踏んでしまったのだろうか。

「給食の時にカレー入った食缶ぶちまけちゃつて……そんでかつぼうぎめつちやカレーのシミが残つちやつて……そのときからあだ名がきばみーって呼ばれてます」

……せんばい系過去をお持ちの逸材だった。

隣でせんばいがお前も同類か……みたいな表情をしていた。多分自分と重ねているのだろう。ちよつと気持ち悪い。

「へ、へえー。でもそれって呼ばれる度に思い出さない?」

「その後の話、しげちーがクラスの皆フオーローしてくれて、一緒に他のクラスに分けてもらいに行つてくれたから正直このあだ名って俺としげちーの友情の証つて言うかもはや絆?」

男前過ぎるでしよしげちー。



さつきまで自分と重ねていたであろうせんばいは突如仲間裏切られ絶望にたたき落とされたかのような雰囲気醸し出していた。

もちろんそんなのは無視だ。

「へえー、茂君はすごいね。そういうこと誰にも出来ないよ？」

「え？　友達だったら普通じゃん？」

茂くんは平然な顔でそう言い放った。

小学生であるが故に何も知らない。それ故にこのような事が言えるのだろうか。と理解しているがその即答は胸に刺さった。

だが、それに救われこうやって仲間が集まっていることは事実。

彼こそリア充と言わずなんと言おうか。

「すげえな、お前」

ほんそれに尽きる。

せんばいが私の思いまで代弁してくれた。

「ただ、相手女子だとめんどくさいんだよね。ルミ子みたいにハブられてる奴って最近すげーよく見るけど、少しでもこつちから絡むと突然なんか女子が集まって『あんたあいつのこと好きなんだー！』とか言ってくるし」

小学生あるあるー。なんか異性助けようとするやとすぐにそういう話に持っていつて

羞恥心を煽って話を有耶無耶にする伝家の宝刀

まだそういう話に耐性のない男子だったら確かにやりにくいよねえ。相手ともちよつと話しづらい雰囲気になるし正直厄介なやつ。

ただ……やはり噂は外にも漏れていた。

これなら作戦は結構順調に進むはず。

「あーわかるー！ めっちゃつつかかってくるよねー！」

「あれほんとだるい」

「アレ……他のクラスに邪魔されない為にやつてるみたい」

ボソツと留美ちゃんが呟く。

そして男子三人がそれに驚く。

「マジ？」

「どんだけだよ」

「つてことは、ルミ子がここにいるの見つかったらまた俺ら囲まれる系じゃね？」

「まじい〜しんどいな〜」

「……」

ルミちゃんの視線が足元に落ちる。カードを支えている手が微かに震えていた。

「見つかったら見つかったでたまたま遊んでるってことでもいいんじゃない？」

そう言つて貴史くんが話を締める。

留美ちゃんとは今回限り、たまたま一人で見かけたから一緒に遊んでいる。

ここで別れたらまた他人同士の関係に戻るといふ結論の話の流れになつて来ている。

うーん……これはまずい状況だ。彼らには今後とも留美ちゃんを守つてほしいのだから。

さて、どうやって切り返していくか……

……

そこから会話が途切れカードが擦れる音、被さる音のみが周りに響く。

ちようどゲームが終わったあと、とつさにせんぱいが口を開く。

「ずっと我慢してたけどトイレ行きてえ」

すると即座に茂君も名乗りをあげた

「わかる。すごい結構我慢してた」

同時に周りの2人が吹き出し、さっきの雰囲気などなかったかのように笑い声が辺りに響く。

「ずっとキョロキョロしてたからなんかと思つたらトイレかよ。つてかお兄さんに対してタメ口かよ」

「なんかすごい忙しなかったよな！ マジウケる〜」

「マジでやばいんだって。ちょっと行ってくるわ!」

そう言って茂くんが席を立つと同時にずっと神妙な面持ちのせんぱいが口を開いた  
「……そうだな。ちょうど近くにトイレあったの確認しててな。そっち行くか」

この人、我に策ありみたいな雰囲気醸し出しておきながら期待させておいてそれですか……

「あつ本当!……余裕なかったから助かる!」

そう言つて、茂君とせんぱいはトイレへと駆けていった。

男の子たちは指差して笑っていた。

ひと笑いし、先ほど迄の楽しい雰囲気静まり返る。

それを察したのか、貴史君が真面目な表情で留美ちゃんに語りかけた。

「そういうばさ、ルミ子」

貴史くんが先に口を開く。珍しく留美ちゃんにだ。

「なに?」

「俺さ、お前のクラスで何やつてるか知ってるんだよね。仲良い奴いるし。つてかお前もハブってなかった?」

「……!?!」

「ぶっちゃけそういうのって因果応報っていうんだろ?」

「うん……そうだけど。そんなんだけど……」

「それが嫌で助けて欲しくてしげちーに近づいて来たっていうならなおさら嫌。そういう奴ら自分らの困りごとが無くなったらしげちーの事、悪く言い始めるしマジ最悪」

……この仲良しグループにも断るそれなりの理由というものが存在した。

当時は確かにすぎる思いで助けを求めた。しかし人は自身の安全が確認できたら欲が出てくるもの。その子も脅威が去ってから欲が出てしまったって所ね。

「別にそんなつもりはなくて……」

「そもそも俺らが助ける必要ないよね？ どうせまたしげちーの事悪く言い始めるんだから」

今まで黙って話を聞いていた裕介くんが口を開く。

「……」

彼らへ提示できるメリットなどすぐにはでずに黙ってしまう。

「どうせお姉さんもこいつの話聞いて可哀想と思つて協力している感じでしょ。なんかそんな雰囲気出てるよ。ごめんだけど無理。俺らはしげちーに傷ついて欲しくない。」

「しげちーは無条件で誰でも助けるけど、助けた人から嫌われるって結構傷つくじゃん。そういう思いはさせたくないんだ。俺ら」

どうやら全てお見通しのようなのだ。推測は少しズレてはいるものの『留美ちゃんを助け

る』という部分については完全に見抜かれていた。流石メガネキャラ……侮れない。

どうしよう……これでは完全に囲いの形成に失敗してしまっている。

これから別のグループを探すのにも時間がかかるし……

別の案を今から探すしか……

また沈黙の時間が訪れた。

全て見抜かれていいるうえ、これからの巻き返しをどのように話を進めたらよいか悩む。

そうこう考えていると、近づいてくる砂を蹴る音が聞こえてくる。

「よおー！ もどつたぞー！」

満面の笑みを見せながら戻ってきた茂君。

ああ、これでゲームセットか……

自分の肩の力が抜けていくのを感じる。

まさか小学生に舌戦で負けるなんて思っても見なかった。

「なあルミ子！ お前の話さつき兄ちゃんから聞いたぞ！ お前のクラス結構闇深いって噂されてたけどそんな事してたんだな！」

せんぱいも同じ話を茂君にしたのだろう、ここからさらに2人からの話を聞いて彼は決断するだろう。

「そうそう、しげちーあれだよ。ルミ子も実はハブってた側にいたんだって  
すぐさま貴史君が情報を伝える。」

「マジで!? ルミ子!」

そう言つて大きな声で留美ちゃんを見る。

「うん……だつて……怖かったから……」

「あー、なるほどな。そう言う事か……」

「はあ……はあ……」

息を切らし耐え耐えながら戻つてきたせんぱい。

大分汗だくなご様子でしたが、タオルもティッシュすら持つておらずどうすることも  
できなかったのどりとあえず放置することにした。

「なるほどな! おまえ、すごいな!」

意外な言葉が返ってきた。

「しげちー!」

余りにも意外な言葉をだす茂君に驚きを隠せない2人。

「ちよつとまつてよ。元々ハブつてた側にいた奴助けるの!? そんなのいつまた裏切ら  
れるか分からないじゃん!」

先ほどまで冷静に受け答えしていた祐介くんが焦りながら茂君に話をする。

「んなこと分かってるわ。でもルミ子お前……そんな事を無くそうって動いてたんだな！」

「……!?!」

ここで本来の目的が顔を出した。そうだ。彼女は確かに加害者側にいた。しかし自分が被害者となり、この遊び自体が嫌で私に打ち明け無くそうと動いている事実がそこにあつた。

策の完成ばかりに目がくらみ、本来の目的を見失っていた自分が恥ずかしく思った。

「でもそれって他のクラスの問題じゃん。俺ら全く関係ないじゃん！」  
焦りでズレたメガネをクイツとあげ、焦り口調でその声をあげる。

「ゆーすけ、関係ないから関わらない？ お前がそれを言うか？」

「……ごめん。でもクラス1つが敵になるんだよ？ 流石に俺らでも結構怖いじゃん？」

俺は怖い……」

ちようど突破口が見えた。

すかさず私は口を開く

「これはね。林間学校が終わるまでの極秘事項なんだけれど……」

男の子が好きそうな言葉を選びながら言葉を紡ぐ。

すると3人とも聞き耳を立てるのかのように私に振り向いた。



「サポートの皆で留美ちゃんの件、結構噂を広げてるんだ。だからクラス1対クラス3くらいの戦力差になると思うんだけど……」

「それなら……まあできないこともない……」

そう言いながら裕介くんはチラッと貴史くんを見る。

「それはそれなんだけど結局それやったところであつて思えますよね？ しげちー、俺も

ゆーすけも言ってるけどこっちに何の得もないじゃん」

「得？ 何言ってるんだ？ もううけてるだろ」

疑問を疑問で返した茂君は何の疑問も抱かずそう言い放つ。

「……あれだ、デジカメ」

息切れのせんぱいがようやく言葉を話した。

それを聞くと同時に、状況に気づいたのか2人は何も言い返せなかった。

それもそうだ。先ほど迄、留美ちゃんは様々な場面でシャッターを切っていたのだから。

「……それだけ？」

「うちのオヤジが時間は戻せないからせめて写真は撮るべき時に撮つとけつて言つた。じいちゃんが写真嫌いで元気な時の写真があまりなかったみたいだから……それに」

少しの間を置いた後、気恥ずかしそうに茂くんは口を開く。

「俺はお前らと小学生最後の林間学校の思い出をそれだけって片づけるのは嫌だ」

頬をポリポリと掻きながら少し声のトーンを小さく言葉が伝わる…

「……しげちー」

この瞬間から一番この林間学校を一番楽しんでいるのはきつとこの子達なのだろうと悟った。

年上であるが故のアドバンテージなんて些細なもので目の前に広がる友情物語は少し羨ましくもあつた。

「これが、リア充か……」

「そうですねはい。しっかりと目に焼き付けてください」

「眩しすぎて溶けるからやめとくわ。それにしても……俺にもしげちーみたいなやつがいたら今頃リア充になってたんだろうな」

「相変わらず他人任せですね……」

「絶対それはあり得ないです、せんぱいは根つからの陰キャなんですから」と脊髄反射で口に出すところをギリギリ喉で堪える。

そんな私とせんぱいの会話の隣で友情を確かめ合ってるリア充はようやくこちらに顔を向けた。

「そう言うわけでルミ子。協力してやる。条件として林間学校中は俺らのカメラ係な！」

「う、うん!!」

この日初めて彼女がこんな笑みをするんだなって見て思った。

これはなかなかの破壊力だ。

## #333 こうして彼女は歩き出した。

日は隠れ、闇夜に吹く風に揺られた木々の擦れ音が聞こえ始めたと同時に鈴虫たちが互いの鳴き声を合わせ合唱を奏で、鳥の鳴き声でメロディラインを飾る。

少し緊張気味な私に先輩たちの視線が集まる。手汗が止まらない。そんな頻繁に大勢の前に出たことはないができないことはない。

「皆さん、ご協力ありがとうございます。これで準備は整いました。あとは……」  
眉間にしわが寄ってしまふのがよく分かる。

小学生のレクリエーションとして用意されているのが、教員のレクリエーションで使ったであろうなんちゃってコスプレ衣装ばかりだ。

魔女っ子衣装に白い布一枚に、シミのついた包帯に……まあ今の子はコレでは怖がらない。

「へー、結構露出度高いねえ〜これ」

そう言って結衣先輩が手に取ったのは魔女っ子衣装だ。

テッカテカなエナメル素材のワンピース衣装。無駄に胸元が透明素材で見えるようになってるし、明らかにスカート丈が短い。

まあ、浦安に居る女子高生のほうが短そうですが……

「結衣先輩？一応言っておきますね？却下です」

「え!?なんで!?まだ私何も言っていないよ!?」

女子には絶望を、男子には異性の目覚めを……どちらも早すぎます。

そんなの中学入ってからで良いじゃ無いですか。

「私そんな有害なの!?!」

はあ……と雪ノ下先輩がため息を吐く。多分結衣先輩の行動に呆れてるのだろう。

「そうです!」

皆が頷く。私の意見は間違っちゃいない。

「横暴だあ〜!」

何だろう? そのあとに『ドッキリでしたー』的なネタばらしとかは一切無くそのま

ま場がシーンと静まり返ってしまった。

なるほど、これが俗に言うスベったって奴ですね。先人から学ばせてもらいました。

流石に気まずく沈黙している結衣先輩を放っておくのは忍びないのでここはフオ

ローをしておくことにしよう。

「……と言うわけでこの衣装は……まあ雪ノ下先輩が妥当でしょうか?」

青少年の育成に問題が無いように

「嫌よ。結構露出高いし、山だと虫に刺されるじゃない」

「そうだな。まあ他にも候補はいるだろうしな」

颯爽とフオローを入れる葉山先輩に違和感を覚えながらまあいいかと結論づけた。

「そう言うことは葉山先輩が率先して着てくれるってことですか？」

女子が着るといふ概念を覆してみよう。最近ではジエンダーフリーがささやかれている世の中ですし。

「さ、流石に俺は着たくないかな……戸部最近刺激欲しいとか言ってたか？」

「らしいですよー戸部先輩、逃げ道を失いましたね」

「はああああああ!!? いろはすううう? なんでここで俺に振っちゃうわけえええ?」

戸部先輩は葉山先輩と私に顔を交互させながら驚愕の声を上げる。

「いやまあ……この流れなら戸部先輩かなあーって。もしかして流れ打ち切っちゃうんですか?」

そんなまさか、ノリだけで生きてきたと言っても過言では無い戸部先輩がこんな事で腰を引いちやうなんてそんな事あっていいはずが無い。

「まてまてまてまて! 打ち合わせも何もねえよ! マジで!?! 俺魔女っ子しようちゃうになっちゃうの?」

おつ、ノって来た。このまま魔女っ子しようちゃんになって頂いて結構です。

「いや……まじきもちわりいから。ひくわ」

「うーん……好みは個人の自由だよ？ 戸部君なんか嫌々見たいな事言いながら実は楽しんでいたり……妄想が捗るっ!？」

三浦先輩の言葉で膝を地に着き、海老名先輩の言葉で『ああ……死にてえ……』と言葉に出した戸部先輩を眺め私は心底彼を同情した。

「いろはす……まじできちい……」

自分を捨てた渾身のギャグが思ったよりウケがよろしくないのか泣きそうな声をあげて私を見る。

正直これは面倒くさい流れになってきた。結局衣装は人数分ある。誰かがこれを着ないと……

「仕方ないですね、戸部先輩。コレは貸しですよ?」

「おう!」

なんて良い先輩なんでしょう。普通なら年上である事を盾に無条件でそうしろと思うっていたのですが。

「なら魔女っ子衣装は私が着ますのであと適当な衣装を皆さんで着て下さい」

そうして、おのおのが適当な衣装を取ったあとに魔女っ子衣装を試着。

……サイズはちょっと大きめだけど……まあ動くには問題はない。  
でも……これ結衣先輩着られなかったんじゃない？

「よしっ！ 準備は整った」

自分に言い聞かせるようにそう呟く。

「いや、まだだぞ？」

「ひあ!!？」

突如後ろから聞こえた声に驚き素の声が出てしまった。

すぐさま後ろを振り向くとどうやらせんぱいがばつが悪そうにそこに立っていた。

いや、本当に気づかなかった。

「……すまん」

「いえ、別に……気にして……ないです……」

なんでしよう……驚いた気まずさも相まってか……なんかやりづらい。いつもの言葉が全然出てこない。

「比企谷、何か他にあるのか？」

私の代わりに葉山先輩が質問を挙げた。非常に助かった。

「いえ、平塚先生が、肝試し前に怪談を聞かせるって事言ってたんで」

そういうえば怪談の話は雪ノ下先輩が作ってくれた奴がありましたね。



でも……ちよつと他の人が用意した話も聞いてみたいかも。

「一応用意はしていますよ」

「そうか、ならいいわ」

「あつ、お蔵入りになった別で怖い話ありますけれどどうです？」

「まじか」

「興味……あるんですね？」

「とりあえず。まあ内容による」

「わかりました。良いですか、私の友達の話なんですけれど離島から進学して、部屋を借りて進学してみたみたいなんですよ」

「なんかオチが見えたわ。どうせ根拠無い理由で皿が勝手に動いてたとか地震が無いのに食器が割れてたとか……」

今時そんなポルターガイスト的なものを話したところですでに聞き飽きたというのは十分理解していますよ。

「いえ、借りていたアパートの管理人が勝手に部屋に侵入して洗面台にカメラ仕掛けられて盗撮されていた話をしようかと」

「さて、それを怪談とは言わん。本当に怖い話だ。ホンコワだ。小学生に現実を見せるのは早すぎる。近所のおじいさんすら疑いかねない事態になるぞ」

「あれ？ いけなかったですか？」

「小学生の内に世の中の闇に触れさせるのはよろしくないだろうが。もつとマイルドにしろよ。俺みたいになるだろうが」

あつ……基準そこなんですね。

「マイルドってなんですか？ じゃあ……小さい頃お使いの帰り家のインターホンを鳴らしたらお母さんがすごい勢いで私を家に引きずり入れた話はどうです？」

「なにそれ？ 幽霊くつついてたの？」

「いえ、お母さん曰く、知らない人が私の後ろに居たらしいんですよ。本当に手が届くような距離にいたみたいで、お母さんが急いで出てきたら脱兎の勢いで逃げていったらしいです」

最初何が起こったのかわらなかつたけれど、あとでお母さんから聞いたときは本当に震えが止まらなかつた。

「ええく!!? いろはちゃん大丈夫だったの!」

私とせんばいの話に聞き耳を立てていたであろう他のメンバーが話に入ってきた。

「由比ヶ浜さん、落ち着いて。大丈夫だったから今いるのよ」

「そうだけどさ〜」

「でも、確かにそんな話聞いたら過去の話でも心配するよね」

あははと戸塚先輩がそう言って結衣先輩がウーッと唸っていた。

「つてか捕まったのそれ」

「いえー、一応警察に通報はしたみたいですが捕まったと言う話は聞いてないですね」

「つつーことは今もまだどこかでいろはす狙ってるって……」

戸部先輩？それ私が怖くなるので止めましょうね。

「むしろとべつちを狙ってたり……ぐふふ。夜道に気をつけなよろ？」

……なにやらちよつとおかしな事を考えていますね、海老名先輩。

すぐさま三浦先輩に頭をはたかれていた。

「間一髪すぎるだろ。……しかしな、それ怪談じゃなくて体験談だかな」

「もー！ 面倒くさいですねえ！ それならせんばいはどうなんですか！」

「そうだな……例えば結婚できずにこの世を去った女の怨霊の話……」

なーんか親近感を持つ怨霊が想像できるのですが気のせいでしょうか？

「まあざつくりと考えたんだが……生前は変わり者過ぎて周りの男から見向きもされな

くてそのストレスを煙草で解消するのが日常だったんだ。当の本人の結婚願望はものすごくあった、死してその願望が怨霊となり新婚夫婦に祟りを与えるとか……」

せんばいの後ろになにやら……あーあ。わーっつたし、しーらないっ！

みな何かを察し、せんばいから距離を取った。せんばいはそれに気づかず淡々と喋っていた。

「ほお、それは面白そうな話じゃ無いか。是非続きを聞かせてもらえるか？」

豆腐が瞬間冷凍されたかのようにせんばいは固まった。

「おや？ 比企谷？ ご自慢の怪談があるのさ？ ほら、聞かせてみる？」

そういいながら笑みを絶やさず私たちの会話に平塚先生が入ってきた。

先輩が潤滑油が足りてない機械の様に首をそこに向ける。

「えーっと、なんて言うんですかね？ その怨霊は実は良い奴で……」

「それでは怪談にならないでは無いか、ほらご自慢の国語力を活かしてみろ」  
相変わらず笑みの表情から変わらない平塚先生。

せんばいに対する圧が半端ない。

「……独身怨霊は実は良い奴で、取り憑いていた美男女夫婦が実は取り憑かれ体質で性根が腐った悪霊共から夫婦を守るためにバトルを繰り広げていくんですよ。ある程度進んだところで仲間妖怪を爆発させられて怒った怨霊はスーパーゴーストへと変貌を

……」

「心踊る展開だが、怪談からバトルになってるな、丸々パクっているのが丸わかりだ、最近の読者はそういうのに敏感だからな、オリジナリティを大事にしろ。……ちなみにその怨霊というののモデルは誰だ？」

「あゝえーつと……いえモデルなんて居ませんよ？ 独身の女性つてこの世にごまんといるじゃないですか？」

目が右に左に泳ぎ、必死に言い訳を考えている様子がうかがえた。

「ほう？ 煙草を吹かす独身女性というくくりで君の交友関係で検索をかけても引かかる女性は限られると思うのだが？」

「なんとというか……すいませんでした……」

逃げ道が無いと確信したのかせんぱいはうな垂れてそう言った。

「なぜ謝る？ ほらもつとちゃんとしつかりとした怪談を聞かせる設定からストーリーまでしつかり聞いてやる。納得するまで逃がさんからな」

せんぱいが平塚先生に激詰めされている光景を見ながらそういえば私もさつきまでせんぱいと普通に話せていたことに気づく。

ただそれは私がせんぱいと話ができるのは留美ちゃんの件で協力を得られている暗黙の了解的なものがあるからこそ成り立っている。

……その件も今日でおしまいで、今後どうやってせんぱいと接すれば良いか考えなきゃいけない。

それはこの件が終わったあとにゆっくり考えよう。

夏休みもまだまだあるんだから。

そんなこんな延々とこの2人で怨霊の話の駆け引きを長引かせた。

そして雪ノ下先輩が作った怪談はやはり好評だった。

\*\*\*

小学生達が怪談で夢中になっている所、私たちは肝試しの準備を行っていた。

せんぱいや雪ノ下先輩が主に指揮をしながら準備を進めて下さっている一方、葉山先輩と一緒に計画の最終的な詰めを話していた。

「いろは、順番はどうする?」

「そうですね、指名制にすれば結構こちらで順番とかタイミングとかの主導が握れるのでそういう風にしたいのですが」

「なるほど。わかった。いつ当てられるかっていうスリルも肝試しに持ち込めるって言い逃れができるはずだしそういう風にしよう」

即座に提案して下さいるのは非常に助かり、スムーズに進む。

「留美ちゃん達の班がでたあとに茂くんたちの班を行かせるようにして」

「なるほど、追いつきやすいように待機間隔を短くした方が良さそうだけど……女子と男子とでは結構歩幅も違うし……確か皆インカム持つてるよな。それで連絡を取り合つて地点Aを通り過ぎたら後続を出発させる感じでどうだ？」

「そうですね。その後はランダムで大丈夫です。あつ、あと後続には噂は秘密だよって伝えてあげて下さい」

秘密の共有つて相手から信頼されるんですよ。

昔ちよつと気になる相手とかにバレても良いような秘密作つて話すると食いつきが良かったりします。

つまりは、葉山先輩がそれをやる事で小学生達がその秘密に対しての内容を忘れにくくさせる効果があります。まあ雀の涙程度ですけど、可能性を少しでも上げておきたい事を考えるとやらない手ではない。

「分かった、俺たちは他にやる事はないか？」

「いえ、大丈夫です。あとは小学生達を思う存分驚かせてあげて下さい」

「はは……あの衣装ではちよつとそれも難しそうだよ」

「ですよねー」

「いろいろはどうする？」

「イレギュラーが起こらないように留美ちゃんグループを監視するって感じですかね」

「そうか、わかった。あと虫よけはしつかりな」

「そうですね、ありがとうございます。あと……私の計画にまでご協力してもらってほんとありがとうございます」

「後輩の頼み事だ。これ位は協力するさ」

優しい口調でニコツと笑みで返す葉山先輩。

多分私、せんぱいと出会ってなかったら本当にこの人のことを狙っていたかも知れません。

葉山先輩と私は別れ個々の持ち場へと向かう。

自分の持ち場には既に結衣先輩が到着していて私に気づいた結衣先輩は「準備万全だよ」と親指をぐつとだして準備万全を知らせてくれた。

これから小学生達の肝試しと私の作戦が始まる訳で……直前になってから緊張がピークに達してそこから下がらない。

心臓バツクバツクだし、手汗も酷い。

さつきまで聞こえていた夜の鈴虫がリンリンと鳴く声や木々の葉擦れの音も聞いて



いる余裕が無いのか何も聞こえない。

しかし……それらをかき消すかのような雑踏だけが耳に届く。

そこで頭が真つ白になった。

そんな私の様子が分かったのか手汗びっしよりの手を結衣先輩は強めに握った。

「いろはちゃん、大丈夫だよ。きつと上手くいくから」

そういつて結衣先輩が私の頭を撫でる、結衣先輩はニーツと笑みを浮かべた。

その暖かな笑みを見て自身の緊張が取れた気がした。

「はい。頑張ってみます！」

「そつ！ その意気だよ。頑張つて！」

そういつて結衣先輩はそのまま自分の持ち場へと行つてしまった。

あれ？ 結衣先輩の持ち場はここを通らないはずだけれど……まっいつか。

結衣先輩の応援に緊張も和らぎ自分のやるべき事をしっかりと頭にたたき込む。

「はい、それじゃあやりましょうか」

こうして私のはじめての作戦が静かに幕を開けた。

## # 3 4 . そして彼女は晴天の群青と心の対比に息を吐いた

肝試しは順調に進んでいた。

ただ、まあ衣装がアレなので大体小学生に笑われてしまつて終わるくらいだ。

……たまに一部男子がやはり胸元に視線を感じるのはまあ仕方が無いでしょう。私  
が着たんですからね！

これの肝試しは私たちの肝試しなのではないかと疑つてならない。

幾度となく羞恥心を犠牲にしながら脅かしてはみたものの最近の小学生はテレビ番組で慣れているのか全然驚いてくれない。

わかるよ？ 昔の作り物感満載の恐怖映像より凝ったCG使っちゃつてるしさ。

そりゃこんなの下手なお遊戯会なんだよねえ……

『これはそう……彼らが楽しめるよう私たちが恥を惜しんでいるのよ』とそう考えながら拳を握りしめこの状況を受け入れる。

そうやって肝試しが続いていくと、さて。ようやくやって来た。

あの問題のグループだ。

つかずはなれずの絶妙な距離感で彼女達について行く留美ちゃんが見えた。その表情はお昼までの表情の面影はなく感情を押し殺したように無表情だ。

しばらく様子をうかがいながら彼女らを見ているが一切留美ちゃんに構う素振りがない。

彼女らの1人がもう1人に耳打ちし、なにやら頷き、彼女らが少し足早になり、留美ちゃんとの距離が開く。

留美ちゃんは追おうと思つたが振り返る彼女らのほくそ笑む表情に何か思つたのかその場で立ち止まった。

なんというか……実に……

実に状況としては最強の環境が整ってしまった。

あとはここでタイミング良く茂君達が来てくれれば……

「ん？ あれルミ子じゃね？」

ヒーローの声が聞こえた。

おーいと遠くからでも大きく聞こえるすごい音量で彼は留美ちゃんに合図し

道なき道を切り開くフロンティアが如く示された獣道を一切無視で茂みを掻き分け

最短距離で彼女の元へ向かう。

「どうしたルミ子？ 一人で肝試しとかマジで勇氣あんな」

「……これのどこが肝試しなの？ 金ちゃんの仮装大賞野外バトルロワイアル低レベル

編って位レベル低いよ？」

「??? 金ちゃんってだれ？」

「お、おう。それがなんなのか分からんが」

「金ちゃんの仮装大賞しらないとか人生の8割損してる。今度録画したビデオテープ

……ううんDVD用意してあげるから全部見て」

「そんなにか!？」

その瞬間、留美ちゃんはシャッターを切る

「うおっ、まぶしっ!？」

「ふふっ、いい顔撮れた」

何この2人。いきなりイチャついてんの？ 見せつけてるの？

「しげちーいきなり飛ばしすぎだろ。開幕ダッシュやめろよ」

そう言つて祐介君が追いつき続けて息をあげながらようやく追いついた貴史君。

意外にも祐介君の方が体力があつたようだ。

「はあ……はあ……しげちー……お前マジで全力疾走しすぎだろ……」

「そうかきばみー？ 軽くジョギングみたいなかんじだったんだけどな。朝のマラソンサボってるからだぞ」

「うっ、まさかバレてた？」

「そりやそうだろ。祐介とはたまに会うけどお前とは全く会わないからな」

「はあ……たまーに出とけばよかった」

「たまにじゃなくて毎日出ろよ……」

そう言えばそんなのありましたね。朝に校内放送でクラシックを流してマラソンをするそんな朝の苦行。

今日の活力と体力の消耗と同時にすり減らされる現象でしたね。

せめてBGMはもうすこし目が覚める音楽流して欲しかった。

「私も毎日出てるよ。なんか放送で流れるクラシック聞きながらマラソンって眠くならない？」

「わかる、俺たまに寝ながら走ってたし」

「あれ、眠るのに心地良いよね。なんで朝流すんだろ。もつと派手なハードロックだったらテンション上がるのにな」

「それじゃマラソンで全体力使い尽くすだろうが、腕振らなくて頭振りそう」

「だねえ」

そう言いながら笑いが辺りに響き渡り良い雰囲気にも包まれていた。

そんなのんびりな会話をしていたらどうやらしばらく留美ちゃんの姿が見えない事に気がついたのか先行していた彼女らが戻ってきた。

「ちよつと鶴見さん、全然来ないから心配したじゃない……てか別の班いるし」  
「あつ……」

そう呟きながら罰が悪そうな感じで目線をそらした女子が居た。

「ん？ おービー子じゃん。お前も同じ班だったのか？」

「う、うんまあ……」

ビー子ちゃんも微妙な表情を浮かべながら茂君と目を合わせようとしなない。

そして、鋭く彼女を一瞬睨みすぐに視線を外す貴史君と祐介君。そんな状況と今日のお昼に聞いた話を合わせると彼らと彼女に何があったのか推測することができる。

「ううん。そんな事は無くて……」

「さつさと進んでこんなつまらない肝試し終わらせたいんだけど、あーでもあのイケメ

ンのお兄さんの所だけわざと驚きたいよねえ」

「うん……そうだね……」

「ほら、さっさと行く、後つまるし」

なかなか自分達の都合の良いように言葉を並べてくれる。

しかし、茂君はそれに反応した。

「何言ってるんだお前？俺たちルミ子に会った時は既に一人だったし、しかもここ地図に載ってるルートのだと真ん中じゃん。お前ら班がメンバーを一人をハブらない限りは普通に気づける所だぞ？俺ら結構話してたのに気づかなくて引き返さないには時間掛かりすぎねえ？」

「気づくのが遅くなっただけじゃない。別に良いでしょ気づいたんだから。ほら鶴見さん。いくよ！」

そういつて留美ちゃんの手を強引に掴む。

「いやっ！」

その掴んだ手を留美ちゃんが振りほどく。

その意外な行動に辺りはシンツと静まり刹那の静けさが辺りを支配した。

「……なに？鶴見さん。痛いんだけど？」

「だって、急に掴むし……私居なくても別にいいじゃん」

「はっ？ ウチらと同じ班だから仕方なく構ってるだけだし、また連帯責任とか言ってる怒られるのウチらだよ？ 皆それなりにやりたい事我慢してるんだから勝手な行動しないでよ」

そう言つて留美ちゃんに近づこうとする子と留美ちゃんの間で茂君が割つて入った。

「なに？ 邪魔なんだけど？」

自分の予定通りに行かない展開に苛立ちを伺える声色だ。

相手の感情なんてつゆ知らず、茂君はハキハキと答える。

「いんや、なんかお前らと一緒に居るよりも俺ら班にいる方がルミ子の表情がよかつたなつて思つてな。強引だけどそうさせてもらうわ」

「はあ？」

「なんでいきなりあんたが出てくんの？ 別のクラスじゃん」

「別のクラスだろうがいくら何でも見て見ぬ振りできないだろ？ お前らルミ子ハブつてるの黙つて見過ごせるわけ無いだろ」

「共通の話題があつたからそうなつただけでたまたまでしょうが」

「ふーん。今日の昼もそのたまたまがあつた訳か？」

お昼の事を指摘され何で知つてるのと言う感情が一瞬彼女の顔に表れる。

「あれは、鶴見さんが遅かつたから……別に一人にさせたくてしたんじゃないで」



「ふーん。つてか話変わるんだけどよ。広場の所にトイレあるよな」

「……なにいきなり」

「あそこの近くにテールとか休憩所みたいな所あるよな。そこで今日の昼、俺トイレに居たんだわ」

そう茂君が話すと、全て察したららしい彼女の言葉が無くなる。

トイレ……ああ！ あの時か!?

続けて祐介君が会話を続ける

「さっきまでの話を聞いて俺、聞いた話なんだけれど、お前らのクラスってなんか良くない遊びしてるって話流れてくるんだけど？ もしかしてこれのこと？」

その追撃に彼女達は顔を青ざめた。

すぐさま何か話題を切り替えようにもこんな強烈な話題から切り替えられるものなどなくしどろもどろとなる。

これは早々に終わるだろうと思った矢先、奥でじつとしていた子がそれを言い放った。

「別のクラスの事なんだから別に放っておいてよ。別クラスのしげちーが絡んだ所でしげちー達がなにか得するの？」

「んなもん知らねえよ、ただ見て気持ちが悪いだけだ」

「?。結局その子が可愛いから守ってるだけでしょ。鶴見さん顔はいいもんね。好きなんでしょ。そうなんですよ」

あー、ここでそれが来たかー……

流石にここは答えられるとは思えないし、出てってフォローした方が……

「そうだぞ? 俺はルミ子の事好きだぞ、何かそれで文句あるか?」

……っは?

余りの即答に一瞬頭が真っ白になった。時が止まったと思ってしまうほどに。思考が回り始めたとしてもそれでもちよつと何言っているのか分からない。

予想外の展開に頭がついていかない。

それはその場に居る全員が即答でその言葉を返すという予想をはしておらず、かける言葉を考えておらず、シンツと津波がくる前触れかのような静まりが一瞬辺り一帯を支配した。

すぐさまその反動の如く女子の甲高い声と男子の雄叫びめいた声が合わさったけたたましい程の音量が辺りを一帯に響き渡る。

森で隠れていたであろう動物たちもこれを聞いてすぐさま逃げ出すに違いない。森の平和を乱して申し訳ないとは思っています。

えっ？ えっ？ ええええ!!?! なに？ そんな事いきなり言ってるのこの子？

勢いに任せて言っちゃったの？ ちよつと対応は適切では無いんだけど……  
普通、「何でお前かばうのー？ もしかしてお前こいつのこと好きなんだ〜」って言われたときの対処方として、基本は源流に戻すが最適。

相手は論点をすり替えようとしている。ついでに聞いている大勢は状況なんて他人事でへーそうなんだーって大盛り上がりすることが大体の流れで、

大勢の場で善意で行動したはずがその行動には絶対下心があるとゴシップ記事よろしく的な展開を突きつけられ、

思春期の男子は大体そこで躊躇して話を持っていかれてしまったり、黙ってしまったりする。

でもこれはなんですか？ 相手の思惑に思いつきり乗っかってしまつて場をさらに荒れさせてしまつているじゃないですか。

これをどう收拾つけければ良いのか頭を悩ませているとその諸悪の根源である彼がさらに口を開く。

「俺はルミ子と今日一日遊んだだけで分かった事があるぞ。例えば……UNOしててUNOって言うときはどや顔のくせに言われたときはこの世の終わりみたいなの顔するんだぜ？ ちょーおもしろくねえか？」

……っは？

「あと、写真撮つてるときのルミ子めっちゃ楽しそうなんだよな。写真撮りまくるくせに自分が写るつてなるとなんか急に隠れんだよ。以外と恥ずかしがり屋とかな」

あつ……この子は……

「つてか写真で思い出したけど。お前らの写真、ルミ子のデジカメに全く入つてねえ

じゃん。それだったらルミ子俺らと一緒に肝試しした方が絶対楽しいだろ絶対！」

そうだ、好きというのは色々とある。小学生の好きは大体恋愛にばかり注目されるけれど流石にこの言い方になってくると理解してくる子もちらほら出始めた。

それに話の流れだつて源流に戻されている。これは……しげちー小学生にしてものすごい子なんだけど……

「いやだつて……うちら別の班じゃん。それに別クラスだし」

流石に分が悪くなった事を察したのか留美ちゃん班の子達が口を挟み始めた。

「べつつに別クラスだつてほれ、ゆーすけだつて去年別クラスだったけど普通に遊んだしなあ？」

「あーそうそう。別クラスだったけれどしげちーと遊んでたし、なんか問題でもあるの？」

「嫌だつて先生とか絶対駄目つて言うし……」

「さつきまで一人だけ離れて森歩いてたんだよ？ 誰も見向きもしないでさ。いつの間にかはぐれるよりも俺らと一緒に居た方が安全でしょ？ それに……なんで留美ちゃんだけ一人だったの？ もし夜の森ではぐれたとき、先生にどう説明するつもりだった？」

「……」

彼女達の顔が青ざめる。そう言うことすら想像してなかったのだろう。事実起きうる可能性はあるのだから。

貴史君と祐介君が一気に彼女たちをたたみかける。

ますます小学生とは思えない発言の連発だ。

「それになー！ ルミ子は……」

まだ茂君は留美ちゃんの生説明を続けていた。流石にそこまで詳しく見られているとは知らなかった留美ちゃんも俯いていて耳まで真っ赤だ。

力説している茂君の袖をつまみだす。

「わ……わかったから……わかったからもうやめて……」

あらあら……ここぞと言うときにまさかの上目遣い。

この子……化けるわね。

そんなこんな小学生だけで話が進んでいき私が出て行くタイミングを全く失っている。

肩を叩かれた。

「よお」

いきなり声をかけられたので流石の私も「ヒッ」と声を上げ、後ずさりしてしまった。いきなり存在感をあらわにするなんて芸当ができるのは……せんぱいしかいない。

「ああ……すまん。驚かせたか」

「いえ……こちらこそすいません」

「まつ、なんとかなつて良かったな」

「ええ……何とかというか予定していた展開とかなり違うんですが、まあ結果オーライつて所ですね」

「ああ。そうだな」

「……って私がそう言うと思いました？」

「は？」

「せんばい？ 茂君に何か吹き込みましたね？」

「……まあすこしな。ほんの少しだ」

「……本当ですか？」

「まああれだ、しげちーはな、惚れやすいつて話を聞いたからな」

ああ……その言葉だけでなんかまあ色々察しました。

「しげちーの特性は大体理解した」

そりゃ口で説明してましたからね。

「それは……まあなんか察してますが……優しくただけで『こいつ俺に気があるんじゃないか』的な勘違い系男子の匂いはしました」

「やめろ、俺に効く」

私、せんぱいにだいぶ優しく接しているつもりなんですが？

「でも……茂君の場合、あんな短時間で留美ちゃんを大分観察してて、さらに状況を察して引き離そうと行動してきたっていう付加価値がきますよね」

「んで、効いてくるあの即答だ。返答の早さってのはその内容に自信があつて発言する事を意味する訳だ。つまり……」

「『そんな事当たり前だろ』的な意味合いに周りから捉えられる……って言うことですね」

「そう言うことだ。あと、これは俺の憶測だが、しげちーは意外とモテている説がある」  
「……1人の為にこれだけ行動できるのであれば。彼氏はアクセサリーケメンに私モテるんだよ声でかマウント女子とその取り巻き以外だったらまあ仲良くなれそうですね」

「最近の女子もラノベタイトル化してんの？ マジ怖いんだけど……ほれ見てみ」

せんぱいが指さす方を見ていると留美ちゃんのグループに居る女子が1人だけ



ちよつと様子がおかしい。

ああ、なるほど。

「……もういいよ。勝手にすれば。先に行く」

矢継ぎ早に離れた後に彼女はさつきと森林の奥に進んで行ってしまった。

「えつちよつと！ 由香！」

「由香？ えつえつ！ どうしたの」

そう言つて離れる彼女をこの場から逃げ出せる理由にしたいのか他の女子が皆がその子を心配しているかのように装つて

彼女に寄り添いあたかも既に彼らとの対峙が無かつたかのようにそのまま先へ先へと行つてしまった。

そして留美ちゃん達は彼女らが去つて行き姿が見えなくなるまで見届け呆然と立ち尽くしていた。

そんな中、口を開いたのが茂君だった。

「ビー子の奴どうしたんだ？ なんかいきなり一人で歩いてつたぞ？」

「……ふーん。やらかしちやつた訳ね」

祐介君の表情はなにやらニヤニヤしていた。

「そんな事より、ルミ子、大丈夫か？」

「なんか……予定と違う気がするんだけど……」

顔を隠しながらも赤くほてった耳を隠し切れていない留美ちゃんがそう呟く。

「まつ、いいんじゃないか。ほれ、ルミ子。写真」

そう言つて茂君は何か良くわからないポーズを取る。

その態度に熱が冷めたのだろうか。平常に戻つた留美ちゃん『はあ……だるい』と言いつつデジカメを手に持ち彼にシャッターを切る。

「おつ、後ろの奴らもう来てるし、そんじゃそろそろ行くか」

「そうだねー、詰まっちゃうとアレだし。先に進もうか」

そう言つて、彼らもまた移動を再開するのであった。

……予想もしなかつた展開だった。

私自身が考えたことは茂君達はあくまで時間稼ぎという感じた。

あそこで話を長引かせ、さらに後続が現れ何が起きているのかの情報交換が行われる。そこに紐付くのは信用して居るお兄さん達が言つていた噂。

その悪い遊びをしているのはあの班であるという認識が通る前に彼女達が気づきこんな遊びを止める、止めなければ大人数の正義が相手になる。

そんな物だった。

まさかここまで茂君達が奮闘するとは思ひもしなかった。

しかし、ここで気になるのがここでなぜ茂君は即答であんなセンチティブな事を伝えることができたのかだ。

私の中で1つ確信に近い仮説が導き出された。それは事前に“そうするように”指示されていたから。

……せんばい、やってくれましたね。

「一色、言っておく。俺はお前の計画を横取りしたわけじゃねえぞ」

私の考えなんてまるっとお見通しだつて位にせんばいは言葉を連ねる。

「俺はお前の計画をちゃんと成功できるように動いただけであつて、0から1を作ったのもお前だ、1から9進めたのもお前だ。最後の10でフィニッシュしたのもお前だ」

「えっ……だつて」

「俺はその9から10の間に少しだけ俺が勝手に動いただけだ。だから……なんつーか……余り悪い方向に考えたりすんな」

「……はい」

どれだけ人を観察しているのだろう。……この人には全て見透かされているかのような気がする。

「それだけだ。……んじやな」

そう言つてせんばいは暗闇の森林に消えていった。

ようやく一山を越え放心していたのかいつの間にか現場はシンツと静まり返つていた。

ふう……とため息交じりの息を吐く。

……これで、作戦は終わり。これから私とせんばいが気軽に話ができる事は無くなつてしまった。

そう考えるとすぐ心が痛い。……痛いだけけれど。

それと同時にちよつと悔しい気持ちも混ざっている。なぜそんな感情が出てくるのか不思議とも思わなかった。

\*\*\*

翌日の小学生達を見送る千葉村での最後の仕事。

茂君達と仲良く自分のデジカメを覗き込んでいる留美ちゃんを見つけた。

あの子ああいう風に笑えるんだなって気づく。

私の姿を見つけたのか留美ちゃんが遠くから会釈する。

私も手を上げてそれに答えた。

ただそれだけ。

これから残りの小学生を楽しんだらいいと思う。

そう思い、バスに乗り込む小学生達を見送った。

それから後片付けを行い、私たちの林間学校のスケジュールも程なくして全て完了した。

「さて、仕事も終わった事だ。さっさと帰るか。車を持ってこよう」

平塚先生がそう言うのと皆ようやくやくひと息をつく。

「俺たちはおじさんが迎えに来てくれるからここで別れることになるな」

私たちは元々葉山先輩の親戚の方に送ってもらったので帰りもそうなるみたいだ。

「それにしても……昨日のしげちーさんすごかったな」

戸部先輩がそう呟く。あつ、見てたんですね。

「まさかのさん付け!?!」

結衣先輩がすぐにツツコむ。

「あつたりめえだろ、俺に出来ない事をおいそれとやってのけるしげちーさんまじすげえ」

「あんたが言うとなんか馬鹿にしてる感あんだけど」

「ええ……なんかそれひどくねえ？」

「でも、確かに男らしかったよね！ ちよつと感動しちゃったよ」

「確かに俺はそんな真似できなかつたと思う」

「えー、隼人そんなこと無いでしょ？」

葉山先輩の視線がほんの一瞬雪ノ下先輩に向いた。

「……なに？」

雪ノ下先輩はそれを見過ごごさなかつた。

人の視線に敏感すぎでしよ。

「いや、なんでもないよ。目端に何か映つたからそれを確認しただけだよ」

「そつ」

それから平塚先生の車が来て、奉仕部メンバーと戸塚先輩が乗り込む。

そして、せんぱいは後部に乗ろうとしたが即座に助手席に乗れと平塚先生に言われ

渋々助手席に乗り込んだ。

あれから私はせんぱいとは話していない。

「それでは我々は先に千葉に戻るとする。君たちも気をつけて帰りたまえ」  
みなはーいと返事をすると最後に

「来年は受験で忙しい夏休みになると思う。残りの夏休み、各自悔いの無いよう過ごすように」

そう言い残し、SUVは発進しすぐに見えなくなってしまった。

悔いの無い夏休みか……なんかできるかな……

そう思い何気に空を見上げる。

昨日と変わらない群青な空がやけに羨ましく思えた。